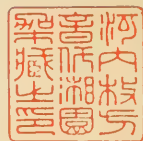


PL Shin gunsho ruiju
755
.35
S5
v.6

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



新
群
書
類
從
第
六



PL
755
-35
S5
1.6



例言

一本巻の前半には古き俗謡を集め、後半には淨瑠璃其の他歌曲に關する雜書を収めたり。

一『糸竹初心集』は中村宗三の著にして寛文四年の版行にかゝれり。琴三昧線尺八の手引にして、此の種の書としては版行の最も古き一に數ふべし。

一『松の葉』は元祿十六年版にして秀松軒の編する所、三昧線の本邦に傳來してより、世上に行はれし小唄を集めたるものなり。但し其のうちには自作もありといふ。此の書は頗る名の聞えたるものにして、當時既に廣く世に行はれしかば、やがてこれに類するの書は續出しぬ。即ち翌十七年(寶永元年)には大木扇徳といふ人の『松の落葉』を編して、『松の葉』に漏れたるを拾ひ、寶永三年には靜雲

閑主人『若緑』を出して、二書以來の新曲を集め、同七年更に『松の落葉』の増補成り、正徳三年には『續松の葉』といふ書版行せられ、常盤なる松の緑は色まさりけり。されど仔細にこれらの書を對照すれば、松の枝葉は彌が上に榮ゆるに似たれど、其の實根幹はたゞ三株に過ぎざることを發見すべし。即ち『落葉』と其の増補とは大同小異あるのみ、『續松の葉』に至りては、『若緑』の改題なり。たゞ續編の五の卷の終りに、僅か三四の小唄『若緑』に見えざれど、其の他は聊か順序を變更したる所あるも、全く同書なることを知るべし。故に本卷には、『松の葉』『松の落葉』『若緑』此の三種を収めて慶長以降の小唄を網羅せんと欲し、訪求頗る勉めたれど、元祿版の『落葉』のみは遂に全本を得ず、其の稀本たることを知るべし。依て已を得ず、『松の落葉』は増補を以てこれに代らしめぬ。而も増補亦頗る珍本たり。

一『淋敷座の慰』、これも寛永以降延寶までの流行唄を集めたるものなれば、多少『松の葉』の小唄と重複するものなき能はず。されど極めて小敷なれば、今これを削除せず。原本は蜀山人か文政四年山口觸山に寫さしめたるものにして、後ち三馬種彦等の手に渡り、今は帝國圖書館の藏に歸し、これより寫したるものにして、所々解し難き点あれど、圖書館本の外、此の書を得ざりしかば、遂に訂正するに由なかりし所もあり。

一『諸國盆踊唱歌』、これも寫本にて傳はりしを、我自刊我本に収められ、はじめて世に知らるゝに至りぬ。後水尾天皇によりて、諸國より徵せられたる歌なりといふ説には、據る所なく、古人もやゝ惑へるに似たり。

一『今昔操年代記』は享保十二年版にして、正本屋九左衛門なる西澤一風の著なり。著者は若き頃井上播摩掾に就て淨瑠璃を習ひ、其

の風を能く語り、元祖竹本義太夫、豊竹若太夫等と時を同うし、一方に作者として一方に正本屋として、前後六七十年間淨瑠璃、操に關係したる人なれば、其の記述には最も信を措くべきに足る。

一『竹豊故事』、これ又斯界の通人一樂といふ人の著すところ、『操年代記』と共に徳川文藝史の好資料なり。

一『難波みやげ』は穂積以貫の著にして、淨瑠璃評註の嚆矢なり。其の後賽笠翁が『瑠璃天狗』出で、『難波みやげ』と二書を合せ、淨瑠璃評註の唯一の書と稱せらる。

一『歌系圖』は流石庵羽積の撰にして、古來小唄の作者と作曲家との名寄なり。

明治四十年八月

水谷不倒識

新群書類從第六目次

歌 曲

糸竹初心集(上下).....	一
松の葉(五卷).....	一二三
若みどり(五卷).....	一一〇
増補松の落葉(六卷).....	一五九
淋敷座の慰.....	二六三
諸國盆踊唱歌.....	二九九
淨瑠璃文句評註難波土産(五卷).....	三二〇
瑠璃天狗(五卷).....	四一四
今昔操年代記(上下).....	五〇五

竹豐故事(上中下).....五二七

歌系圖.....五五〇

新群書類從第六

歌曲

糸竹初心集

世はかぎりなし、事は盡せずとは、たれかいひけんこれ誠也、まことの道は天の道也、これをまことにするは人の道なりとは、むかし聖の詞也、此誠物と我となきにはあらず、されどもしられずしらず、年をつみ、日をかさねて、頭の雪びんの霜のみ、色をあらそふ事、人みなおなじ、こゝに中村宗三なかむらそうざんといふもの有、幼より目しゐて色をみず、瓶をわるよはひより、理にさとく、耳を以て目とする事、人にすぐれたり、つく杖の土木水石に當る音を手にえて心に得る、しかしより音を聞て理をしるべき事のあらんを思ひて、琵琶、さみせんに心をつくせり、或時は大森宗君おほもりむねきみが

節切よきりの調子音律にくはしき事を聞て、強て是をまなび、寢食を忘れてやうやく師に近し、されば友遠方より來りて、又學ぶもの有、かれに對して書付るものをみれば、予が眼をうらむる心有て、徒に書のはしに記すものなり

抑此書たる事は、一節切の尺八并に、琴三味線ならは
ずして吹おほへ、引おほゆる道の書なり、然りとはい
へども少しも心得たる人の、用るわざにはあらず、曾
てしらざる人のために、若^もやと記すものなり、しか
し又さらになるまじき道にもあらず、書^{しよ}題^{おんぎ}をよくか
んがへ、聲歌をそらにおほへなば、少しはなどかなら
ざるべき、若^も是^{これ}にちやうれんせば、此心をたよりと
し、いかなる事をも吹出し、引いだすべきものなり、
よくくこゝろをとむべし

糸竹初心集目錄

- 一 當流・節切之事付虚無尺八之事
- 一 一節切尺八切様之事并笙簞篳篥の切様之事
- 一 一節切指造同證歌之事并吹様之事
- 一 當流琴之事并糸調子合様之事
- 一 ことぢ立ならべ様之事、同引様之事
- 一 當流三味線之事付小弓之事并琵琶之事
- 一 三味線引習様之事
- 一 同糸合習ひ様之事
- 一 三味線證歌之事
- 一 十二調子聞ならひやうの事

糸竹初心集上卷

先一節切尺八は、其濫觴まぢくにて、さだかならず、そのかみ異人有て、宗佐老人に傳へたるよし、代いひ傳たり、然しより宗佐は高瀬備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也、此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤也、織田信長公に仕へて、人に名をしらる、信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念をことゝし、尺八の妙音味へ、此道中興の開山となれり、流のするをくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだにもみず、わずかに其かた計りうつして、今書にしるし宗君門弟の外、餘力有て、音をしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也一虚無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切ゆへ、尺八といふとぞ、濫觴はたしかに不知、そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしいへども、了簡せず、昔よりほう

ほうの家に用る物と聞えたり、梵士漢士色おしし梵土などいひしもの、此尺八の執行者と聞えたり、近き比不人といふこむ僧有て、ごろといふ事を吹出し、その外れんぼながし、京れんぼ、さむ也井川、よし田などいふさまぐの手有之、いづれも律呂の調子にあはせたる物とは聞えず、されども我道にあらざれば、其深き事をしらず

一一節切の尺八切やうの事、節を一つこめ長さ一尺八分に切故、此名を付といふ、節より下は七寸、上は三寸八分に切也、但竹のふとばそによりて、調子違物なれば、極て寸は定らず、筒音を黄鐘の調子にあはせたる物也、音色は笙のごとく、ゆびつかひは簞箏に似たり、歌口のしめ様は、笛同前也、ゆび遣ひ卅二有、笛は惣の穴七にしてゆひのあけさけ百廿八有、調子は十二より外にあらず、上乙有によりて、しらざる人は調子多様に聞る也、筒音は盤渉也、ひちりきは穴の數九つ、ゆびのあけさけ五百十二有、これも調子は十二調子より外に非ず、五調子を専らとす、筒音は平調也、簞は、竹數十七本有、一つに一調子づゝ切たるもの也、但十二調子より外に非ず、のこりは同音也、竹十

七は五行十二支をあはせたるもの也、吹やうの息づかひ内外あり

一一節切吹様之事、まづ左の手をうへになし右の手を下になすべし、左の大ゆびにてうらの穴をふさぎ、べにさしゆびにて二の穴をふさぎ、右の人さしゆびにては、三の穴をふさぎ、べにさしゆびにては、四の穴をふさぐ、一の穴と云は、おもてのふしのそばなるを云、次を二、次は三、下を四といふ、まへにあげたるをうらといふ、第一おぼえずして不叶事は、指づかひの名也

一節切惣の穴の音知事

ふゝ惣の穴をふさきてふくをいふ

いゝ惣の穴をあけてふくをいふ

やゝ一二三四をあけうらはかりふさきたるを云

ちゝ一をあけ二三四とうらをふさきたるを云

ほゝ四をあけ一二三とうらをふさきたるを云

うゝ三四をあけ一二とうらをふさきたるを云

ゑゝ二三四をあけ一とうらをふさきたるを云

りゝ二三四とうらをあけ一はかりふさきたるを云

ひゝ一とうらをあけ二三四ふさきたるを云

しやうゝ三四とうらをあけ一二ふさきたるを云
神ゝ四とうらをあけ一二三ふさきたるを云

たゝ一二四をあけ三とうらをふさきたるを云

るゝ二四をあけ一三とうらをふさきたるを云

以上十三字也

フホウエヤリヒ上神イタルチ 以上十三

これをよくそらにておぼえざれば吹習ふ事成がたし
但此内ヤタルこれ三つは二やうに有

一④一三四明うらと二ふさきたるをやと云

一⑤一と三ふさき二と四とうらあけたるをもたと云

一⑥一二四裏をふさぎ三ばかり明たるをもると云

これは双調の調子、盤渉の調子に、このゆびを用る也、黄鐘平調一越には右のヤタルを吹べし、よくく

心をとめゆびつかひちがへず、空にておほゆべし、惣

して尺八は、五調子用ひ候へども、まづ歌は一越の調

子を專とする也

一一節切證歌

△やまとおどりのうたふきやう

ホウフホフホウウウエウエウフホウ、エヤリ、ヤ
よしのゝをやまをゝ、ゆきかといひれば、ゆきてはあ

ヒヒリヤエ、ヤリエウ、エウホウエヤリエウホフナ
あらてん、やこれの、はなあこのふ、きよのん、や
ウエウフ
あこれの

△いせおどりのうた

ヤリ、ヒリ、ヤリエヤリエヤエウ、フホエウ、
あのきみさまあはあ、いせのはまあそたあち、めもと
フホウヤエヤ、リヤエウヤリ
にしほかやれ、こほれかゝる

△あふみおどりのうた

ヤリエヤリヒリ、ヤリエヤリヤエウフホウ、エヤリ
ふうらいふうらい、ふるつまいとしなわれふるつまは
ヒリヤエウエヤエウ、フホウエウ
なをいとしやれ、なをいとをしい

△すげ笠ぶし

ヤリ、ヒ上、ヒリヒ上リヤヒ、リヤエヤリヤエウ
やぶれすげかさやんやあ、しめをるきいていの
、ホウフホウ、ヤエヤリヒリヤエウエヤリヤ
をゝるゝい、さらにきもせすゝるゝいさんゝ、さあややあ
エヤエウエウフホエウ
さんゝさ、すてもをせず

△海道くだり

エ、ヤリヤエウ、ホウエウ、ホウホフヒ上、リヒ
おもおしいろの、かいどくたりやあゝ、なにとかた
リルエヤ、リ、ヤリエ、エヤリヤエ、ウ、ホウエ
あるとつうきいせし、かもかあはあしらかは、うゝち

ウ、ホウ、ホフ、ホウエウウホウホフホウエウウホウ
はあたり、いゝ、おもふひとにはあゝあはたくちとよ
ホフヒじやうリヒリヤハヤエヤエヤリ、ヤリエ、
をゝ、しゝみやあかはあらやあ、しうせゑんじせきや
ヤリヤエ、ウ、ホウエウ、ホウホ、ヒじやうリヒリ
あまあさんりを、うゝちすうきてゑゝ、ひとまつう
ヤリヤエヤエヤ、リ、ヤリ
もををとい、つうくうとの

これより末尺八吹やう同前也

△平調の調子よしの山

ウエホウホウエ、タエタエホウエ、タエヒヒイ
よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれは、ゆきてはあ
ヒエヒイタ、イヒタエタエウエタ、イヒタエウホウ
ああらてん、やこれのはあなのふ、きよのん、や
エタエホ
あこれの

△平調伊勢おどり

イヒ、じやうヒ、イヒタ、イヒイタイタエホウタエ
あのきみさまあはあ、いせのはまあそたち、めもと
、ホウエイタ、イヒイタエイヒ
にしほかやれ、こほれかゝるゑ

此外近江おどり、すげかさ、海道くだり、いづれのう
たにても、右之格を以て吹ならふべし

△双調のよしの山

エヤウエウエヤ、タヤタヤウエヤ、フホウ、ホ
よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれは、ゆきてはあ

エヤウホフ ヒじやうタヤタヤエヤタヒじやうタヤエウ
あらてん、やこれのはなあのふ、きよのん、
エヤタヤウ
やあこれの

右にしるすことく双調と盤渉とには後のやたるを吹
べし

△双調いせおどり

ホウ、エウ、ホウフ ホウホフホフヤヤウエヤ、エ
あのきみさまはあ、いせのはまそたち、めもとに
ウホヤエウホウホフ、ホウ
しほかやれこほれかゝるゑ

△黄鐘よしの山

ヤリゑヤエヤリ、ヒリヒリゑヤリリホウエ、ウ
よしのをやまを、ゆきかすみいは、ゆきてはあ
エヤリエウホウエホウヒリヤリヒイヒリヤエ
ああらてん、やこれの、はなあのふ、きよのん、
ヤリヒリエ
やあこれの

△盤渉よしの山

リヒヤリヤリヒヒ神ヒ神ヒヤリヒ、ウエヤ、エ
よしのをやまを、ゆきかすみいは、ゆきにはあ
ヤリヒヤエウエヤウホウホフホウエヤウホフ、
ああらてん、やこれの、はなあのふ、きよのん、
リヒ神ヒヤ
やあこれの

△黄鐘いせおどり

ウエ、ヤエ、ウホウエウホ、リヤエヤヒリヤエ
あのきみさまはあ、いせのはまそたち、めもとにし
ヤリヤエウエウホフウエ
ほかやれこほれかゝるゑ

△盤渉いせおどり

エヤヤリヤエウエヤエウ、ヒイリヤリ神ヒリヤ
あのきみさまはあ、いせのはまそたち、めもとにし
リヒリヤゑヤエウ、エヤ
ほかやれこほれかゝるゑ

此外五調子の手どもあまた候へども、数おほくこま
かなる事に候へば、のせがたし、但黄鐘のうち、世間
によく吹覺えたる手、少ししるすものなり

△初手

ウエフエタエフエ、ユ、フエウエ、ヒエフエウ
エホウルホ

△返し

ウ、タエフエ、タウルホ

此手黄鐘卷頭の手なるによりて初手といふ呂也や
はらかにかく吹へし

△安田

タチタチ、ウチタエフエ、ユ、フエタウタ

エ、チタチ、イエウエ、ホウルホ

これより末初手の返しを吹、此手江州の住、安田と云仁、吹出す手也

△手巾しゅきん

ウエフエタエフエ、、、フエウエ、チタエフエ、フウルホ

△返初手におなし

此手江州大津の住、とぎやの佐右衛門二郎吹出す也、刀をとぎける時、此手をおもひ出し、手を拭はで、吹てみるに吹けるうちに手かはきたり、さるによりて手巾といふ、此手の中にチタエフエ、フウルホと吹ところ有、吹やうおほし、チタエイ、フウルホとも吹也、これをぬき手巾と云、日光院吹出さるゝ也、又チタエフエウエホウルホ

△返

ウ、フエフエタウルホと吹也、これは筒手巾と云宗佐老人の手也

△后こ玉たま

ウエフエタエフエ、、、フエタイタチタエフエチタチ、タエフエ、、、フエウエヒエフエウエ

ホウルホ

△返シ初手におなし

此手は文祿の比、後陽成院の皇后に、絲竹の音に長じ給へる有、此手を吹いださせ給ふさるによりて后手といふ也

△ころび

イエフエタチタエフエウタエフエ、、、フエ、ウ、タエイエ、フウルホ

△返シ

ウ、エルタエフエ、タウルホ

此手頓阿彌吹出す、返しの一の息にころぶゆひ有、他りうには頓しんころびとも云也

△小兒こご

イエイフエ、タイ、エウエルホ、フエ、、、フエタウタエ、チタチ、エフエウタチ、イエウエ、ホウルホ

△返初手におなし

此手は門阿彌吹出す也、ある山寺の小兒に戀慕して吹し手也、さらば明日まいらんと云事有、黄鐘の大事これなり、此外黄鐘の手ども、いくつも有之候へ共、

しるすに不及、但ほど拍子タエフエはひろふウトチトはのぶる也

△盤渉の調子つしま

フ、ホ、ホ、フホ、ホウ、ホエウ、ホ、ホエエウ、ホエウ、ホ、
高音リ、ヒ、、、、リヤヤ、ヒリ、ヤ、、ヤ、タヤタエ、ヤタヤタエウ、エヤエウホ
おろしホウ、ホエウ、、ホ、ホエ、ウ、ホ、エウ、エヤエ、ヤタヤタエウ、エタエウホ

△二段の序

タ、ヒ、、、、タヒ、、ヒ神、ヒ上神、ヒ、ヒ上上神、ヒ、上神、ヒ

高ねおろしは、初段同前、三段めは二段めのごとくに吹て、まを同じ如くにして、手を吹入たるもの也、其手定らす

△さがりは

ヒイ、、、、ヒイ、、、、ヒイヒイ、ヒ、イヤエ、、ウエ、、エエヤタ、ヒイイホ

是を何べんも吹也、則ほど拍子は笛の如く也、此内おなじ字の重りたる所の吹やう、何にてもふさぎたるゆびを、少うこかしたる物也、たとへばフの字の重り

たる時は、四のゆびを動すべし、ホのゆびの重時は、三のゆびを動べし、ウのゆび重時は二のゆびを動べし、エの重時は一のゆびを動べし、やの重時は、うらのゆびを動すべし、リの重時は、一のゆびを動べし、ヒの重時は、三のゆびを動べし、神の字の重時は、二のゆびを動べし、いの字の重時は、三のゆびにて打へし、上の重りたる時は、二のゆびを動べし、たの重時は、三のゆびを動すべし、ちの字の重時は、二のゆびを動べし、又音呂はたとへば一越の調子を吹んとおもへば

ウフフホフ、ウ、リウリウフウ

これを呂の音取と云、同律の音取

ウリヤリヤエ、ウリウリウフウ

如此に吹て其後、一越の手にても又歌にても吹べし、何も如此に音取有也

△平調呂の音取

エホホウホホ、エイエイエホエ

△同律の音取

イエフエエウ、タイタエフエ

△双調呂の音取

ヤウホウルフ、フウホフヤ

△同律の音取

イヤフヤヤ、タヒタヤフヤ

△黄鐘呂の音取

ウエウ、チタウルホ

△同律音取

ヤヤチリヤエエ、ヤエルホ、フエチリチ

△盤渉呂の音取

エヤエ、ヒタエヤウ、ホフエウホ、

△同律音取

リリヒイリヤヤ、リヤエウ、ホフエウホ

右いづれも、調子吹時、まづ此音取吹ざれば、調子かはりてうつらぬ物也、此外音取あまた候へども、数さだまらず

宗君流の書物に傳る手の數は

黄鐘廿三 盤渉十六 一越十五 平調十三

双調十一

此外さらはの音取、またゝきかへしみだれ、戀の音取かんのゆりなどは、宗君一子相傳の所なり

糸竹初心集中卷

琴の次第の事

抑日本に下々まで、琴をもてあそぶ事は、中比九州に、玄淨法水とて、二人の僧有、或時長崎に至て、琴の引やうを唐人より傳り、其後都へのほり、公家殿上の交りをなし、寛永二年の比、琴の御ゆるしを下し給りて、法水は關東にくだり、琴をひろむる、玄淨は筑紫にかへりて、これも琴を専らに執行す、さるによりて、今在家にひける樂を、つくし樂といふ也、かゝりていやしき賤のわらや、不淨なる工商下人の家などにて、しらぶべき事にあらず、神をすゝしめ菩薩の現し給ふ妙音なれば、四町のうちを初の奉り、月卿雲客やんごとなき人のもてあそび給ふ物なれば、其おそれ有べき事也、凡いとの調やうは、まづ一越に調んと思ふ時は、一は一越、二は下無、三は黃鐘、四は盤涉、五は一越、六平調、七は二のうは調子、八は三のうは調子、九は四の上調子、十は五のうは調子、とは六のうは調子、いは七のうは調子、きんは八のうは調子

也、殘る調子もこれに准せよ、又雲井の調べといふ事を此比八橋檢校ひき出したり、此八橋本三味線の手なりしが、中年より琴を學ひ、不思議に、琴の妙をえて、今日本の名人となる、音聲色ざしほど拍子、中心におよびがたき上手なり

一琴を引ならひやう、曾てしらざる人は、爪のさしやう、糸のおさへやうをみ習ふべし、まづ大指にさしたる爪は前爪と云、中指にさしたる爪を、向爪と云、人さしゆびにさしたるを、脇爪といふ、糸の名は手前なるをきんといふ、次はいといふ、又次はとと云、それより次第／＼に、十九八七六五四三二一也、此中におさゆる糸は、四七九八也、但引ならひにはおさへずしてもくるしからず爪かす計りよく覺たるよし、初には糸あはせがたきもの也、糸あはざれば何事引てもうつらぬものなり、されば糸をよくあはすべし、但右にしるす糸のあはせやうは、調子を聞ずしてはあはせがたし、初心なる人のあはせ習ふは、初め一二度は心得たる人にあはさせて、調子よく合たる時、糸十三ながら、いづれもちのきはに墨を付をくべし、糸しめゆるめにて調子あはするにあらず、ちのたてど

五

右すがかきのことくてんといふは、みな打爪也、その外は、いづれも前爪にて引へし、又むかふ爪といふ引やう有まつ

一五と引時は、一は向爪、五は前爪にて引くべし

二七と引時は、二はむかふ爪、七は前爪にて引べし

三八と引時には、三はむかふ爪、八は前爪にて引べし

四五と引時は四はむかふ爪九は前爪にて引べし

いづれも糸四つはざみ也、歌のうちには幾所も有べし能々心を付ておほゆへき也

△あふみおどりのうた琴引やう

七三八七六六七八九十八 七三八七六六七八九七六
これゑゑからあみれゑは、あふあふみかあみゆうる
五五八八九十といいきんきんといと十五十九
な、かさあこて、たもをれあふみかさやれあふ
八九十と十
みかあさあ

此うちむかふ爪にて引事有へしよく、心をとむべし

△小倉おどりの引やう

九十九十といきんいと、十九十九十と十九八、いきん
おくうゝらあのを、のおんのおんのへゑの、ひと

いといと十九十九十と十九八、十九十といきんい
をもとをすうむすうむすうき、いつうゝさあてゑ
と十九十九十と十九い、いきんいといと十九十九
ゝ、ほをんほんほにてゝ、みたれああんあゝあん
と十九八七八九十と十九十八九十とと十九八
あをいの、おたまこかれゑんて、秋こかれつらんや

△あひの手

「八」きん「いといいきんきんいきん」とゝ五十九八

△伊勢おどりの引やう

七八八九十八八七七八七六五九八七八七六五五四三
あのきいみさまあはあゝいせのはまあゝそたあち、
九十と十五十九いしほかやれ、こほれゑかかろそへ

△芳野の山

九十八八九十と十と十八九十十六七八八七八
よしのゝをやまを、ゆきかとみいれはゆきてはああ
九十九八七六、七八七六五と十九十といきんいと十
ああらてむゝ、やこをれのはなあのふゝきいよの
九八九十と十九八
むゝ、やあこれの

△すげ笠ふし

七八八九十九十八九五十九八七 九九八七六七八七
やふれすげかさあやあんむやあ、しめをかきいれて
六五五五三 九十十といきんいきんいきんといと十と
いのをゑい、さらはきもせず ゑい さんさあ、あ
いきんいきんいといと十と十九八七八九十
ゝ、やあゝさむゝさすてゑもをせず

△ころくぶし

七八八九十十九十八十九八七七八七七八七七八八九十
ころくついたるたけのおをつえころく、もとほしや
十八八九十九八七七八七七八八九十九八七七八
くはちなかはあゝふえころく、すうゑ、はほゝほん
七八八七七八八八九十八七七八八八九十八七七八
はゝほんほほんはゝ、のんやをゝしよんしよ、しよん
九 八七六五九九 九八七六六 七八七六
しよんしよろしゆののんかゝいやかか、かゝんかな、
九 八七六六七八七六六七八七六六七八七六六七八
そんそれまことに、のほんほほをさあて、ふでのちく
十八七六七八七六六五
うたあゝあけ、ゑころく

△しばかきぶし

七八九十九八七八九十九八七八九十九といきんいとい
しばあがあき、しばあかあきしばかきこをしいてな
十九八九十九八七八九十九といきんいきんい
あゝゝあゝんゆきいのむなふりそをてゑゝちらと
といきんいとい十九八九十九八七八九十九といきんい
見いたゑとなあゝゝあゝんふりそをてゑゝちらと
五四三四五六七八九五四五四五四五四三三三七八
のなんなんさあゝんほさいよゆきのいのむななゝふり
九十といきんいといきんいとい十九八九十九
いそてゑちらと見いゝゝあゝとなあゝゝん

△鹿おどりのうた

七八八八七八七、七九十九八八八七六五四三、四五五
うらうゝゝらの、せきのをゝしみいつはあゝ、よこと

四五七六六七八九八七六六五五四六五四五五
をにおつれゑと、なもをたゝあぬゝゝゝゝゝゝゝ
五テン五、七六六七八九八七六六五五四五五
とをに、おつれゑとなもをたゝあぬゝゝゝゝゝゝゝ

△あひの手

七七八七テン八七八九十八九十五 十七七八七テン
おちよてのやきてはたれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いけついでいかにそりやををのへのかせにかあしの
テン六五五テン八八六テン五五三五四五五 十テン
いいいにはななきせきてらよしかわよそりやよ
きんゝとテンきんゝとテンきんゝとテンきんゝとテンきんゝと
大らよ大らよ大らよ大らよ大らよ大らよとよひや
五五三三テン五七六五
いたしてまふきせた

△おか崎

テン八八九十九 十テン八八九十九 十テン八八九
おかさきじよろしゆおかさきじよろしゆおかさき
八 七 六 五 七 六 五 四 五 五 五 五 五 五 五 五
しよろしゆはゑいしらうしゆうおかさきしらうし
六五七六五四五
ゆはゑいしらうしゆ

△かぞへうた

七八八九九十といきんいと十九十九八八九十五十九八
ひとつとやあひいとををゑしらあぬこひをしいて
九十九八八七八七六七八七六五
なみたはたもとをにたえやあらぬ

△かいだうくだり

六六七三八七五四五九十と十十九十九九十九
おもをし、いろをのかいとくたありやあゝなにと
十九八八八七七八七七八七七八七二二八七六五五
をかたあるうとつうきいせしかも川し、ら川
九十と十十九十九八九十と十十九十九八九十と十
うゝちわあたりに、おもふひとにはあゝあはたくち
九十九八八八八八八七三三六六七八八七八
とよをゝしのみやあかはあらやしうせゑんし
これより末もかくのごとくくり返して引なり
此外はやりうたどもあまた候へどもふしさだまらざ
るはしるしがたし

八橋りうくみの名

ゑてんらく、これは古樂の名 天下泰平

梅がえ 宮古鳥

桐壺 すま

雲のうへ うす衣

うす雪 からかみ

雪のあした 新曲

此分いづれも、一くちにうたのしやうが六つゝ有、た
だしゑてんらくは七つ有、其外の大事のくみどもお
ほく有也、中に雲井のしらへと申は、大きにひじする
事也

糸竹初心集下巻

三味線の次第の事

抑日本に三味せむをひき初し事は、文祿のころはひ、石村檢校と云びわ法師あり、心たくみにして器用無双者也、あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓といひて、糸三筋にてならず物有、小さき弓に馬の尾を絃にかけて引なれば、小弓とは云とぞ、石村これを探りみるに、琵琶をやつしたる物也、いとものしらべやうも、一二はびわのごとく、三の糸はひわの三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり、所のものいひけるは、此嶋には眞蛇まへびの多き所なるが、らへいかといふものありて此まむしを食物とする、さればらへいかのなく聲、小弓の音に少もちがはざる故、眞蛇を退んが爲に、專引也、琵琶法師も、爰に逗留の間は、引給へといふ、其後石村京都にかへりて、おなじく琵琶をやつし、此三味線をつくり出せり、琉球の嶋よりえて來るといふ心にて、りうきうくみといふ事を作りをけり、弟子虎澤けんぎやうに不殘傳へ

しかは、虎澤またくみはてと云事を作り出す、虎澤より山野井檢校傳受して、世にひろまる、糸のあはせやうはこれも一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の四の糸調子也、たやすきものに似て、はなはだ引えがたきもの也

一琵琶の調子先黄鐘きうわうしきの調子に合せんとおもふ時は、一は黄鐘に合せ、二は一越こへ三は平調ひやうてう、四は一のうは調子也、又盤涉はんしやくに合せんとおもふ時は、一は盤涉二は平調、三は双調四は一のうは調子也、のこる調子も准之、琵琶の樂にあまた有といへども、大唐より傳へ來るは

一上原石上じやうげん、せきじやう

一流泉啄木りうせん、たくはく

一玉樹三女ぎよき、ゆきさん、よ

此玉樹といふ曲は、不吉曲といひ傳たり、然るを或人うつりをかんがへ、此中一手引かへたる所有、されども此曲猶よきにしもあらず、其後も度々不吉のためしありけると也、又七つばちかきくだし、三のたゝき、篠むすひなといふは調しらべの曲の名也、いづれもたやすくは引えがたき事なり

一三味線の習ひやうは、人の引に心を付ばちの持やう、糸のおさへやうをみるべし、或は歌をひかは、まづ其歌のふしはかせよく覺るが、かんよう也、たとへばゑをかゝんとおもふに、たび／＼みたる物を書ばにせてかゝるべし、終にみざるものを何としてか書出すべきや、三味せんもこれにひとしく、我さへ歌を覺ずして、三味せんとうたはする事、なか／＼成かたき事也、先はじめにはいとをあはせならふがせんやう

一糸をあはせ習ふやうの事、初はよく引人にあはせてもらふべし、但調子高きは糸たび／＼きれてわろし、少ひくめにしらべさせて、糸のよくあひたる時、上こまより一寸ほど下に、糸三すぢながらに墨を付をくべし、あがりさがりのなきやうに同處に付をきてあはせ習ふべし、糸ゆるまればすみさがり、しまり過ればあがるものなり、髮筋のはいほどあがりさがり有ても、一調子ちがふもの也、これをしやうこにしていとをあはせならふべし、又こまのたて所かはりても、調子ちがふものなれば、こまのきはに皮に成とも糸に成とも、墨にてしるしを付、同所にこま立るや

うにすへし、或人のいはく

引習ひ糸をあはせむとおもふなよ

すみだにあへばいとあふなり

さみせんしやうがの事

△一の糸のしやうが

しゝちふくらのきわにておさへ上より引を云

きゝすくふを云

さゝはなして上より引を云

かゝすくふを云

△二の糸のしやうが

つゝちふくらのきわにておさへ上より引を云

るゝすくふを云

とゝはなして上より引を云

ろゝすくふを云

すゝ五寸ほど下にておさへ上より引を云

てゝすくふを云

△三の糸のしやうが

ちゝちふくらのきわにておさへ上より引を云

りゝすくふを云

てゝはなして上より引を云

れゝすくふを云

たゝ五寸ほど下にておさへ上より引を云

らゝすくふを云

右あはせてしやうがの數十十六字有これをよくそらに

て覺るほどなに事にてもはやく引ならふ也

十六字とは

シキサカツルトロ ステチリテレダラ
しきさかつるとろ すてちりてれたら

いとをおさゆるゆびは、人さしゆびなり、べにさし中
ゆびにてもおさゆる事有ども、それは功者に成ての
事也、はじめは人さしゆびばかりにてもくるしから
す

△あふみおどりのうた三味せん引やう

ステツステチテ ステツステテツトサシト、ツス
ふうらいふらい、ふるつまゝいとな、われふるつま
デチテツトロツ、テツトツトサシトツト
は、なをいとをし、いやれなをいとをし
これをよく引おぼゆれば、いづれのうたにてもふし
だに一つなれば、かくのごとく引てあふなり

△おなじくあふみおどり

スクテレルスクテレチタテレクテレルスクテレテンツトトサ
ふうらいふらいふるつまゝいとしな

カシキトデトロツルスグテレチリチレツルトデトロサツ、ルデツト
われふるつまゝはなをいとをし、やれ
ロツトサカシキトデトロツルトデト
なをいとをし

たいし、これは引やうむつかしけれども、世上にてお
ほえたるはかくのごとし

△いせおどり

ステデチテ、テツステレツテツトツトサシトツト
あのきみさまはあ、いせのはまあそたあち、めゑもと
ロサシトテツステレツツルトステ、
にしほかやれこほれかあかるゑゝ

△おくらおどり

シトトツテツトシトシトシツトサシテツテツト、
をくうらのををんのをんのへの、ひともとをすう
シトシツトサスト、ツテツトシトシト、シツトシ
んすうんすゝき、いつうさてゑほほんほゝんほにて
サステレツテツトシトシトシツトシサササ、シト
ゝ、みたれやあんやあんやあんをいのおたまこか
ツトシトサシトツ、シトシサ
れゑんてなきこかれつらんや

△あひの手

テスツテスツ。ステレステ。ツルトシサ。

△すげ笠ふし

ステ、チタ、タチテ、チタテ、スチチテ ツステ
やふれすげかさあやあ、あんやあゝしめをかきいれ

ていのををゑい、さらにいきもせず、ゑいさあん、
トトツツステ、ツテツツト、ト レササシト
さあああやあさんゝさ、すうてゑもせゑすう

△よしのゝ山

シトサシサシト、ツトツトサシト、ツステ、ステ
よしのゝをやまを、ゆきかとみいれはゆきてはあゝ、
チタテスツヤクテツト、ツトシトツステツトシサ
あらてんゝやあこれのを、はなあふゝきよのんゝ
シヤツトサ
やあこれの

△かいだうくたり

ツステツト、シトツト、シトサ チタタテチテスツ
おもしろのかいとくたりやあ、なにとかたあると
ス、テ、ステツルステツルトロシトツトシトサシ
つうきいせしかもかわしらかわうゝちわあたりいお
トツト、シトサシトツト、シトサ チタラテテテス
もふひとにはあわたくちとよを、しのをみやあか
テレツルテツステ、ステステツルステツルトロシト
はあらあやあ、じうせゑんじせきやまさんりをうゝ
ツトロシトサ チタラテレチラスステレツルテツス
ちわあたりい、ひとをまあつうをもゝとをにいつ
くうとの

これよりさきはさみせんおなじごとくに引也

みわたせばせたのからはし、のちしの原やかすむら

ん、雨はふらねどもり山をうちすぎて、をのゝしやく
とよ、すりはりとうげのはそみちこよひはこゝに、草
まぐらかりねの夢は、やがてさめが井、ばんばとふけ
ば袖さむき、いぶきおろしに、ふわのせきもり、とざ
さぬ御代ぞめでたき

△ころくふし

ステ、チタタ、テチタステステクテチチタステ
ころく、むまれはにしのをくにころく、そをたちやほ
クテスクテスクス クテ テチタテチステ
ゝほんほゝほん、ほゝほゝほん、のをよををくはん、
チテツチ、リテ、ツルステスツチ チリテレ
んとこのんかゝいやかゝかゝんかゝ、そんなまこ
ツルスステスツツトロサ サトテツテチテツルテツ
とにのほんほゝをさあて、むさあしのにすうむなこ
ろく

△柴がき

サ、シトロササ、シトロサ サカシトツステ、ツト
しはあかあき、しはあかあき、しはかきこをしいてな
トシササシトサ、シトロササ、シトロツス テチテ
ああああゝん、ゆきいのおなふりいそをてゑ、ちらと
ツルテツトロサシト、ツスルテレテタ、テ、スツル
みいたとなああゝんふりいそをてゑゝゆううさい
トロシサシトツステツトシトツトササササシト
のをなんなもさあんよさいよゆきのななゝふりいそ

ロツス、テチテツルテツトロサシト、
をてゑ、ちらとみいたとなあああん、

△鹿おどりのうた

ステ、ステステチタチステテレツルトロサシト
うらううらのせきのををしみいつうわあ、よこ
とレツトステステチテレツルトツト、シトロシ
とをにをつれゑとをなもをたあたあぬうゑいそり
やサ

返しおなじ事也

△おかざき

ステ、チタチ タ ステ、チ タ チ タ ステ、チテ
をかざきじよろしゆをかさきしよろしゆをかさき
レツルトツトシト、ステ、チテレツルト
よろしゆはゑいじよろしゆをかさきじよろしゆは
テツトシト、
ゑいじよろしゆう

近代山井の弟子柳川檢校、此道に心をよせ、寤寐にわ
すれず、天生その骨をえて當代の名人也、色あひばち
のしなやかなる事、中々凡人のわざとはおぼえず、さ
るに依て、世に柳川流といふくみのかずは、おもて
七、うら七と、その外大事どもおほきなかに、さかい
與中島ぐみといふは、大なる秘事とす、はでのかず、
卅餘有中にもらんこやといふ事は、引えがたき事也、

學んとおもふ人はよく、習をうくべし

一調子を聞習ふ事、初は圖竹一竹にて聞べし、功者に
成ては、四穴十二律にて聞べし、十二律は昔黃帝の臣
下、伶倫と云し人懈谷と云ふ所の竹を切て、作り出す
と也、去に依て調子を業とする人は俗人と也、此調子
と云事は、人間のなす事にあらず、天地の間に陰陽造
化の氣、みち／＼て、自然の聲音物をかつて、顯る、
道理也、これ天地の妙一氣の流行不息の印也

一十千の調子と云は、天一の水より生ずるを、盤渉と
云、地二の火より生るを斷金と云、天三の木より生ず
るを、神仙と云、地四の金より生ずるを平調と云、天
五の土より生ずるを、覺鐘と云、地六の水となるを勝
絶と云、天七火と成を、黃鐘と云、地八の木と成を、双
調と云、天九の金と成を、覺鏡と云、地十の土と成を
一越と云、これ十千の調子也、日月の調子とて上無下
無をくはへて十二調子也、此十二調子の次第は、まづ
一越は子に當て位は一つ、數は九、斷金は丑に當て位
は二、數は八つ、平調は寅に當て位は三つ、數は七つ、
勝絶は卯に當て、位は四つ、數は六つ、双調は辰に當
て、位五つ、數五つ、下無は巳に當て位は六つ、數は四

つ、月の調子は也、鳧鐘は午に當て、又位一つ、數九つ、黃鐘は未に當て、位二つ、數八つ、鸞鏡は申に當て、位三、數七、盤涉は酉に當て、位四つ、數六、神仙は



戌に當て、位五つ、數五つ、上無亥に當て、位六數四、日の調子これなり

又順のうつり逆のうつりと云事有、順八逆六と覺る也順のうつりとは、一黃平盤双上鳧斷鸞勝神下是を

八のうつりとも云、運氣論納音の五行に、八をへだてて、子を生ずると書しも、此調子の理也、逆のうつりとは、一下神勝鸞斷鳧上双盤平黃、これを六つのうつりとも云也

又十二月の調子は、まづ正月は陰數の木、神仙、二月は陽數の木、双調、三月は陰數の土、鳧鐘、四月は陽數の火、斷金、五月は陰數の火、黃鐘、六月は陽數の土、下無、七月は陽數の金、鸞鏡、八月は陰數の金、平調、九月は陰數の土、上無、十月は陽數の水、勝絶、十一月は陰數の水、盤涉、十二月は陽數の土、一越、月の調子これなり

又人の呼吸聲音の調子は、神仙、双調は肝の臟、膽の府に通ず、黃鐘、斷金は、心の臟、小腸の府に通ず、鸞鏡、平調は肺の臟、大腸の府、盤涉、勝絶は、腎の臟、膀胱府、鳧鐘、一越、上無、下無は、脾の臟、胃府より通ずるこれなり

其外生といけるものは、云に不_レ及、非情無心の草木、風聲水音まで、自然の調子にあらずと云事なし、然問人の目はみんながため、耳は聞んがため、鼻はかがんがため、舌は味へんがため也、されども調子に

至ては、聞人まれにもあらず、學ぶべきものともせず、誠にいたまじきかな、古人は牛の叫馬嘶を聞、杜鵑一聲に、世の亂をしる、これみな音律をえたるもの也、おろかなる人とせんや、今時の人は、耳ありても、淫聲を聞口有ても虚をいひて、終に其身のあたとす、今此尺八も口に任て吹ちらし、野人の耳をうこさむか爲には非ず、いたらぬまでも、天地鬼神の心になひ、妙音不思議の聲を調べ、生長化収のみちをしらんがため也、もし此道に縁あらば、はからずして、妙音の樂師に逢て、一息の指南に預らん事をねがふの外他念なきもの也

中村 宗三

寛文四年甲辰卯月吉日

寺町通

秋田屋五郎兵衛板

糸竹初心集終

松の葉序

それ吾朝の音律は天の鈿女の命より起りてあられふ
 るらし外山のかつらいろにみゆるをいかにせんと庭
 燎の唱歌にはじまりけるかつ人王百七代正親町院の
 御宇永祿の比琉球より蛇皮二絃の樂器渡り和泉の國
 堺にすめる琵琶法師なかにし中路が手につたへ長谷の觀音
 の靈夢によりて一絃のまし三絃とせしを世に三味線
 と呼てしらぶる音にあらゆる呂律備らずと云事なし
 是一より二を生じ二より三を生じ三より萬物の音聲
 を生ずる理いたれりかの中小路より石村虎澤澤住相
 うけ次て寛永に攝州に加賀郡城秀塙いちじやうひで能ならびなく九
 重に遊び東武に跪き官職に昇進して加賀都は柳川城
 秀は八橋みな僧官に准じて檢校に經のぼりければ此
 三絃の鼻祖兩家の棟梁とはなれりける傳ふる所本手
 端手新曲綿蠻として淺利檢校佐山檢校出田檢校市川
 檢校朝妻檢校藤島勾當今や都には小野川檢校三橋檢
 校猶等覺一轉のひかりをあらそふ藤永勾當熊川勾當
 松澤勾當木崎勾當早崎勾當豐田勾當清田勾當倉橋座
 頭武藏には岩崎檢校豐橋勾當連川勾當安數川座頭等

雪上に霜くはゝり錦江に桃花翻り塵動雲逗るの功妙
 手として十の指さす達人なりやつかれとしこる閑暇
 の茶菓に是をもてあそびて知音のこゝろざしありけ
 ればより／＼かの本手端手長歌端歌吾妻淨瑠璃新曲
 の唱歌を艸書しかつ古今百首のなげふしをくはえ花
 晨月夕のこゝろやりにかいつくをある人ねもころの
 求めに應じて櫻木に命ながうせんとするにまかする
 ものや此花のもとにあそぶ好士あらば徳孤ならず吾
 いづくんぞかくさんや／＼
 于時元祿十あまり癸の末龍集の涼み月秀松軒の木
 もとにかきあつめぬれば松の葉と名つけぬるもむへ
 なるへし

松の葉第一卷

此七曲柳川檢校作也此内早舟相傳の時師へ一禮の法式あり

○三味線本手目録

- | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|----|
| 一 | 琉球組 | 二 | 鳥組 | 三 | 腰組 |
| 四 | 不祥組 | 五 | 飛彈組 | 六 | 忍組 |
| 七 | 浮世組 | | | | |

此七曲を本曲といふなり石村虎澤琉球國より相傳のうへ手をなをし加えて一作となし今の世に至りて三味線第一本手組の濫觴となれり

○端手目録

- | | | | |
|---|--------|---|-----|
| 一 | 待にござれ | 二 | 葛の葉 |
| 三 | 比良や小松 | 四 | 長崎 |
| 五 | 下總ほそり | 六 | 京鹿子 |
| 七 | 端手かたばち | | |

此七曲を新曲といふ柳川檢校作也

○裏組目録

- | | | | | | |
|---|-----|---|----|---|----|
| 一 | 賤 | 二 | 錦木 | 三 | 青柳 |
| 四 | 早舟 | 五 | 八幡 | 六 | 翠簾 |
| 七 | なよし | | | | |

本手

(一)りうきうくみ

○ひよくれんりよのてんにてる月は十五やがさかり
あのきみさまはいつもさかりよの

○おもひをしがのまつのかせゆへにしなでこかるゝ
く

○みやまおろしのをさゝのあられのさらりさらゝ
としたるこゝろこそよければしきやまのつゝら
をりのかなたへまはりこなたへまはりくるりくる
くとしたるこゝろおもしろや

○とろりくとしむるめのかさのうちよりしむりや
こしがほそくなりそろよ

○とてもたつながやまばこそちへおよりやれのう
しばがぎごしにもいふ

○おはらぎかはひくくろぎめさいのてうりやうふ
りやうひゆやりやにひやるゝあらよひふりやうる
りひようふりやう

(二)とりくみ

○とりもかよはぬやまなれどすめばみやこよわがさ
とよ

○わがこひはせんぼんこまつのかるゝほどたいがみ
づひてほこりたつほど

○みるめばかりのこひをしてちかのしほかまみをこ
がす

○いえはよにふるいはねはこゝろかもたゝと

○おめとめとめをみあわせてはなれがたなのそのお
もかげをゆめにもみもせずつゝになりともあは
せてたもれあはねばこゝろがもだゝとおもひの
たねやあこがるゝみをなとせうその

○きやうでは一でうやなぎやがむすめよつわりおび
をたすきにかけていかにもこしがしなやかなゝ

○いざまいろ六ちさうへほとけにへだてはなけれど
もさりとてはではのしほやがたてた六ちさうえい
それしほやがたてた六ちさう

○しのびのとのさまにふらんときげさしよえんの
あるゆへよねんがないよの

(三)こし組

○こしにさげたるきんちやくはこれもうき人のぬひ
じやほどこに

○みちて見たりともわすれまいしだれやなぎのふり

じやほどに

○あめはふるともゆきふるなさしのおほそみちのさゝのたはむに

○なるとならずと文をばつくせ心づよやつれなやとにかくにわれはかずならぬみじやほどにきみこふかゝゝゆこかこずはもどろに

○ひとよふたよとなれそめてあすはふねづるなとせうぞのうらめしや

○いやといふたものかきくどひてのうなんぞやそなたのひとはなごゝろおもへやきみさまかなえやわがこひあらうつゝなのうかれこゝろやもまいのゝゝさゝらもまいのわれらもわかいときはとのにもんもまれた

(四)ふしやうくみ

○わかひがふしやうでをひまいらせうかのせどしはがきのやぶれたを

○おもふまいとのかねをちんからころりとうてばばちやらなをおもわるゝ

○はしにわがみをなげかけてわたらせうよのとりゝゝゝとやれわたらせう

○月のよにうつきぬたのをとのえいはらゝほろゝはらほろとまたしてもおどろくよもゝあるにひとりねよとはなにごとぞおもはざなきそますはなぐるひしやうづものわざくれ

○わざとこんとはおしやれどもしんじつおもへばはぢもひとめもおもわくもおもひだされぬものじやものしかしながらきみはたいますはなのあるゆへ十七八はゝんゝゝろりなげしのほこりみなとのたちめにいりたゝゝめにいりたらばやくしへこもれやくしのまへでめぐすしてしよゝゝ

(五)ひんだくみ

○ゆみや八まんねはせねどねたとおしやらばなとせうぞの

○ひとつこしめせたぶゝゝとことにおしやくはしのひづまゝゝれんぼれゝれつのれいしよじやうにそはいれつのれ

○これのちよじよかかみわげわしちくこだけによつのふしかゝやゑちせんみのをはりゑちごきやうねごろこかはさかもとでしよまうめされた

○あすわじよづものふねがじよづものおもたげもな

とおよるとのごやあ、およるとのごやひんだのを
どりをひとをどり／＼

○ふねのなかにわなにとおよるぞとまをしきねにか
ちをまくらにひんだのをどりをひとをどり／＼

(上)しのびくみ

○いよしのび／＼てこゝろうれしやむめにさへづる

うぐひすのよるはこすえにやどるとも

○おもふまひのやれそれほどにかほにもみちのた
つたやま

○いとまごひにはきたれどもごばんのおもていめが
しげゝればまづおまちあれしばのあみどもおせば
なるおはれあらがはらほろとふれがなそのまゝ
にあゝせうしやたつなやせうしとたつなやしのび
をどりはおもしろや／＼

○こひをせば／＼二十三やのつきをまで月のいつは
りなきものをてててからこしやんぎしやかんこ
はらりついやひよついや／＼つやにちやうらゝに
やうつほゝしのびをとりわおもしろや／＼

○わがこひわもじのふくろにいろこそでなにとつゝ
めどいろにいでさふろやつれいでさふろあいみて

のちわなにとせうぞのもどろやれしやなら／＼と

(七)うきよくみ

○たれもうきよはかりのやどさのみ人めをつつむま
じよやきみしやらり

○ふみもやるまいびんぎもせまい返事さへせぬうさ

つらさきみをばひとにおもはせてかほどにつらき

ものぞとおんもひおもひしらせでとはおもへども

みのうへになればさらにおもひきられぬ

○とてもたつなにねてごされねずともあすわねたと

さんだんしよはなのをどりをのうはなのをどりを

ひとをどり

○われわ小つゝみとのわしらべよかはをへだてゝの

うかはをへだてゝねにござるはなのをどりをのう

はなのをとりをひとをどり

○いとしわかしゆと小つゝみわしめつゆるめつしら

べつゝねいらぬさきになるかならぬか／＼

○みやまやるまひみやまたきのみづはうちやうてい

つくちやうどうてばうちやうていつくつく／＼し

んたんたらつくちやうどうつわかしゆをどりをの

うわかしゆをどりをひとをどり

葉手^{はで}

(一)まつにござれ

まつにござりたいとしのきみやのうこんやござらざこがれしのう

○とてもえんなきかならばなどやはじめのつらからんいといはげしきふきあげはまにとりをかざりにかのさままでばさむきあらしもみにしまぬ

われがとのごはとう五郎どのしゆじやがあはたぐちよりいしまなひきやるえいややころさにやつといふてひきやるおこゑきくさへよふしがなゆるましてそふたらしのすよの

○きみとわれとはのやわくのいとのされてはなれてまたむすぶ

○しのんだりやなしのばれたりやなうらのほそみちこやぶから

○おもふまゝなるのやこよひかな月わおぼろにつまはきてもみぢばを見よこひわちる

(二)くすのは

○さてもやさしのいよくすのはやなにをたよりにはいかゝるいよえいはいかゝる

○きみをまつしまをしまのあまのたもとひがたきわがなみたいよえいわがなみた

○みやましみづわをこからすむがきみのこゝろもそこからか

○やまでこしばをしむるがごとくこよひそさまとしめあかす

○あさきちざりにあひなれそめてふかきおほひわあゝさてなみたがはきみにあふせをまつばかりあゝさてまつばかり

○こんどござらばもてきてたもれぎふのおやまのひのきのえだのうきよがゝりのおもひばを

(三)ひらやこまつ

○ひらや小まつのおさがよひつまがぬれ候いそうつなみに

○しほづかいづにあるときはのぼりたいよのさかもとへ

○かどにたちたわ八もじさまかよかせみのどくうちござれ

○いつのなんときそなたをみそめわれがみわたいいそべのちどりなかぬまもなやきみゆへに

○こゝは三でうかやれかまのざかいちやとまりてし
がりまいらしよわれがとのごはなごやにごさるさ
てもおるすはものうゐものじやえいゝゝさらゝゝ
のういしをひくえいゝゝやつといふてひくにわゆ
めたんべいのえいといふてひけばおなびきやるか
のういよやつといふてえいとへえいさらえい

(四)ながさき

- みやいちがよれたゝゝしよぢよがなさけ
○ながさきのとりわときしらぬとりでまよなかにう
たふてゝゝきみをもどす
○くれなゐのさんじやくてぬぐひかたみに見よとて
おいてゆく
○くれなゐわうすくなるともそもじとわれとわいち
ごちぎるべいぞよもさしらににこえだのさくとち
ぎるべいぞよもさ
○むかしよりいまにわたりくるくろふねえんがつく
ればふかのゑとなるさんたまりや
○おもはぬきみにおなさけわむやくうきみやついで
なげくわれらにおちさせられぬ
○めいしよさまゝおをけれどゝゝふきあげのはま

はわかのうらさあてんじんたまつしまぬのびきの
まつやまいくちよゝゝとわかやまのまつおまいり
あれのきみゐでら

(五)しもさほそり

○このほどはこひつこひられつこよひわしのびのは
つでござり申すよのさあいよへいよへうちとけて
ゆらゝゝとおよれのうさまたよわよなかなよしげれ
とんときみさまさあいよへゝゝ

○まことやらかしまのみなとにみろくのおふねがつ
いてござり申すよのさあいよへゝゝほばしらわこ
がねのほばしらほにわほけきやうのごのやまんま
きものさあいよへゝゝ

○かひのくになるしんげんさまのないちともござら
ぬ二ともござらぬおちよぼしのぶにむつのくが候
まづ一ばんにあめにあられによつゆにしばかきの
うさていぬのあだばえそれ月わなを月はのうさて
月わゑせもの

○しのぶほそみちにまつとくるみわうえまいまつよ
にそのみがくるみでもなしなよさてまことにくる
みでもなし

○こぞのたけとよことしのたけとよしどろでもどろでうさてふしがそろはぬなよさてまことにふしがそろはぬ

○たれでござり申すかべこしのまたねすなきこよひわとのごのあとにねてきくねてもきけとよおきてもきけとよこよひのよがさてあすのよになるともあはずばもどるまいよのなよさてまことにもどるまいよ

○さてもつれなokinokinさまやkinぎござらぎぬめりてくらそそれをたれぞとたづねてきけば六でうしものてうのわかやまさまのうちのやまのかみがきいたらばたけ／＼たけりやろものを

(六)きやうかのこ

○これはきやうがのこいろもよやめゆひ手ぎわもよやきよやあらみやここひしやのうみやこのしてたちこひしやのう

○これわきやうこそでいろもよやもんがら手きわもよやあらみやこ／＼ひしやのうみやこのそめどのこひしやのう

○しんのやみにもまよはぬわれをあゝさてそさまの

まよはする

○ふけよまつかせあがれやすだれいまのこうたのぬしみたや

○はなとならばなよたんだおんみはもみちのいろよのうさてひかずにそひていろまさる

○むめのにほひをさくらばなにやどらせてあをばのまゝにながめばや

○しやく八のひとよぎりこそねもよれきみとひとよわねもたらぬあら心なのきみさまや

○そちとこちとはまつにふぢのさがりえだのごとくたそかれどきにかゝるかゝるななさけがみにまとはるゝ

(七)はでかたばち

○ふえによるしかはつまゆへにしするわれらもさまにやつれいのちすてうすよの

○ありがたのりしやうやおありがたのりしやうやほとけまいりのりしやうでつまにゆきあふたのう

○あさまとおきててうすがめをみればいがおかぬはなのあるもふしぎやな

○ふはのせきのいたまに月のもるこそやさしけれ

裏組

(一)しづ

○しづのみなればいろにはださぬあたゝ心のうちに
こがるゝ

○たちよりむすぶやまの井のあかれずあかぬなかは
なまつのふたばよちとせふるまで

○筆でかくともゑにうつすともさらにつきせじまつ
しまのなみにうつろふ月のかげしまのかすしんし
らぬ

○たんだ人にわなれまいものよなれてののちはるゝ
んるゝみがだいじなるものはなるゝがういほどに
○かづいたみづがゆりゝたぶつきこぼるゝげなも
のをうつゝなやとのはみやこに

(二)にしき木

○かみのおまへのみしめなわそよふくかせにもなび
けばなびくつらき心をうちすてゝものぐねになめ
されそそふりわるやうちとけよくすみてもせん
なや

○やまがらがかごのうちでのうらみごとかごがこが
ごでもんどりうたれぬ

○七りおばまのなすなのかすほどおもへどもえんが
うすいやらそひもせぬ

○おつとわにしき木とりもちてさいたるかどをたゝ
けどもうちにこたふるむしのねのおもひき路やれ
こひのみちきりはたりちやうゝ

○しのべどもおもふきみにはあはずしてむらさんめ
ははらゝほろとふるほどにおもひきろやれこひ
のみちきりはたりちやうゝ

○とてもおすちやるものゆへにさがたいとてだか
りようかうきよのなかのさんだんにさかひつるこ
とよのといはりよよりもなまなかいちやはまいる
まいよいやゝいやならはじめにいやとはおしや
らでいまさらなにとならふぞのうおもはざなきそ
ますはなくなるひせうずものわざくれ

(三)のをやき

○さてもそなたのたちすがたはるのをやきいとざ
くらゝゝろかたよゝと

○ふみもやりたしびんぎもしたやおもかげにたつそ
のおもかげをわすれもせでみにそひそゝろにう
かれきてうきやうこつやしやうだいなしやうきや

こひのとまらぬたいとにかくにうらめしや

○まくらにかゝるみだれがみいとこゝろのみだれ
くゝてやるせなやよしやそのみがなにとなろうぞ
の

○えんなきおもひにみわはれてあさがほのはなのつ
ゆよりもろきみをもちてさのみこゝろなつくさせ
そ

○十七八わすなやまのつゝしねいろとすればゆかり
おこさるゝ

○くもりかゝみかわれが身わおもひまわせばとぎほ
しやゝゝ

○あすわとのごのきぬたうちおかたひめごもでゝう
たいきぬたをどりはおもしろやきぬたをどりわひ
とをどり

(四)はや舟

○いはひめでたののうれしめでたののうようわか
えだもさかゆるのうはもしげる

○ながのながさきのながのるすんのるすゝればおも
ひいだすことはよひとよなかとのおあかつきとな
ごややまちよのうひごじややつとしろくまもとじ

やとりもえかよはぬやまなれどすめばみやこよわ
がさとゝ

○しかくばしらのうしかくばしらのまたのんえいそ
れかどかどのないこそそひよけれ

○はなわさいてもうむめわひらいてもはなさいで
むやくのあだはなよ

○これがいとまなふみてにわとらいでなまなかに

○やまじやたにあひのみにたにおろしのこのはうづも
れのうしばのいはりもまたのんえいそれなつみや
こなれどもうたびわうや

○おきのひくしほにたけにあぶらをぬるやうにとろ
りゝゝとうたふてなのりてこぐやふながたはえい
うへさまのござぶねかまたのんえいそれろでわや
らいでうたでやる

○おちよぼちよぼさまのなりわむくどりじやこゑわ
うぐひすじやしゆくしやかむくしやかさんはかし
んはかしんからきうたかすんばいほみめがよござ
ればこゑことばものうしなやかな

○みやへわさんりへのうえいさんりもちかさんりは
つかゝいちのげんざがぬりものわうるしではぬら

いでくちなしばかりでさつとひとはきえいそれは
つたらずんでんどうそのやうなぬりものわたゝわ
くるゝともおらはいやゝゝいやでそろやがてはぐ
るに

○さるさはのいけのみづでわないこいがすみそろみ
のいけに

○しのだけのこしのだけのまどのあらしにめがきみ
もおよらずわれもねず

○さくらぎにうそかとまりてことのひゞきにはなが
ちる

○さきのつきの廿五日にさだめたるにはにぬてるも
くもるもふゆのひも

○やまわゆきじやふもとわあられさとわあめうらへ
まわるもそさまゆへ

○おきをこいでとをるわあかしのうらのげんざも
とぶねかさてろでわやらいでうたでやる

○いちのえだひけば二のえだなびくなびけやこまつ
いちのえだつりりんりゝゝ

(五)八はた

○つきわやわたのまだそらにもいのいのとはおもへ

どもあとにこゝろがとゞまりてうしろがみひかる
ゝなんぼこひにわみがほそろふたへのおびがみへ
まはる

○たつるおちやにわあはたゝでわれがうきなはむら
ゝゝにたつむらゝゝにたゝばたてのうまことのこ
ゝろとけすわしよぐわんじや

○あのやまかげをすぐにくるだにおそひになよしん
じつうらみごとさしおいてまづだいておよれのう
なよしんじつ

○おもふかどにわたけをうえてゆきのふりたるあけ
ぼのをつれなきひとにみせばやなびくさゝのは

○ひとのよめごと竹にさくはなよやとおもへばやへ
きよくもないさまじやせんないしやもしやもち
くなにしよそうてなにしよそれしよしやなにしよ
わかしゆをどりをのうわかしゆをどりをひとおど
り

(六)みすぐみ

○みすのおもかげものごしに見そめきゝそめうか
ゝゝとこひをしてやるはひとのしらすしてなつ
やせをするとやれすいめさるゝ

○つゆにみだるゝいとすゝきをよゝとふきくるか
 せにもなびきそろうつゝなやしやうだいなしやと
 わおもへどもそもじとわれとはよろづよまでもち
 よまでも

○かせにまかするうきくもふくかたへゆくめでし
 めばひくとおもはれつれなきみのこゝろねや
 ○かづいたみづかゆりこぼるゝもうきよのならひさ
 てもつれなやしやうだいなしやうきやうやならぬ
 わわれたしやく八かのう

○たけがな十七八本ほしやなうきなやもらさじのな
 かごにくも

○われたしやく八てなかけそとてもなるまいものゆ
 へにわれたしやく八てがござるじいじとしむれば
 なるものをとりにてふきてみたればふしがちやうと
 したれつろれつろつりよれつのれがつれつろ

(七) なよし

○なよしゝゝわなよしなしのあだばなよしなりは
 しもせでなるとなのたつなよし

○さゝらこだけにあらねどもさらにさらゝゝさらに
 しらぬものともすればなんぞよそなたのものぐね

りなにとなりとおこのみやかねをうとかのう

○しんきはりよやれはまへでゝおきのしまゝゝをみ
 てなりとあれにみゆるはしがのうらこがらさきひ
 とつまついなかくだりのみちすがらゝゝ

○いなかくだりのたびのとのめいしよの月がながめ
 しやんとのおしやんとながめたりよさそゝろいと
 してやるせなや

本手端手裏組終

秘曲相傳之次第

初傳つりかへ格上

二傳ふんごや亂後夜

此二曲を新曲の秘曲といふや誓盟をもつて相傳の時
 師へ一禮の法式あり亂後夜以前に後夜敦賀ごやとい
 ふ二曲あり此曲に手を加えて三曲一にして亂後夜と
 なし傳受する後に晴嵐といふ一曲淺利檢校手をくわ
 えて彈也 口傳

三傳 七つ子

此曲は浮世組をさきへ彈その跡に
 て彈也

四傳 松むし 五傳 淺黃 六傳 茶碗

此三曲を新曲組といふ七つ子相すむうへ次に傳受す
 る也

七傳 堺

八傳 中島

此二曲を本秘曲の曲といふ極最上の傳受誓詞神文ありて一巻の書を附屬するなり師へ一禮の法式あり

口傳

右相傳法式之次第者柳川檢校より淺利檢校相承し淺利より今都の早崎勾當にうけつぎぬこゝろざしあらん人は早崎より口受あるべき也

松の葉第一卷終

長歌目錄

十六 はるこま

同人作

卅六 小むらさき

同人作

卅七 香つくし

卅八 時雨

卅九 月見

四十 あた枕

四十一 花見

四十二 玉くしげ

四十三 色香

四十四 梅つくし

四十五 小笹

四十六 晒

四十七 かそへ歌

四十八 秋草

四十九 戀草

五十 しのゝめ

同 小野川 校作 人作

同 人作

同 人作

同 人作

同 人作

同 人作

爲 澤 校作

生 田 校作

北 澤 校作

野 川 校作

松 岡 校作

藤 嶋 校作

松 岡 校作

武 州 校作

(一) わかみどり

はるははつねのまつかえひきてきみが千とせをやち
よとおもふそのときはぎのわかみどりアイノテむめの
はながきかほるよりうぐひすきてふとさえづりかは
しよし野にはなもさくらぎふぢえいゝなつかしきた
そかれに山ほとゝぎすをとづれてあけやすきよのな
らひにはゆめのうきはしなかたえてふみもかよはぬ
こひのみちくもでにものをおもふこそかのやつはし
のかきつばたわかむらさきやこむらさきゆかりある
身にたのみをかけてえにしをむすぶいづみがはいつ
あひなれてあいそめがはのあだなみかゝるぬれぎぬ
のたもとすゝしくあきたちてをぎふくかせにみだる
ゝ露のそのたまかづらかけしよりわするまもなきわ
がおもひそらにうかるゝあのうすぐもにゆふぎりか
ゝるそのつきのころ人まつよひのものさびしさをた
れにかたらんみよしのゝたのもたよりもつきはてゝ
うらみなみだにそでしぼるいろわやしほにそめなし
おひてもみぢちりしくたかをのやまのあらしにつる
ゝむらしぐれいくたびぬるゝわがそでアイノテひろは
いきえんたまざゝのあられはつゆきふらばふれわれ

ふるつまは／＼じつからいとし

(二)まさみち

とるやこそでのつまゆへにあゆみならはぬみちしは
のつゆにおきふししほれつゝいくさみだれのことな
ればあらしぞつらきはなのまへちり／＼になる身の
ゆくゑまさみちの御手をとりとたどろ／＼とのんさて
まことにきみゆへなればはるかにあとを見かへれば
ありし所にたつけふりいたはしやなわがつまのなに
とかならせ給ふそとそなたのそらよとながむればな
みだのあめのたましにやはやいりあひのかねがさき
いたはしやおひのみのさぞやものうくおぼすらんわ
れがおもひにみたれがみゆひかひもなきみなれども
なむやさいふの御ゝがみににしへのうきをまもらせ
たまへやとふかくきせいをかけおびのむすぶちぎり
のくちせすはつまにはやがてあひにあひあふまつこ
そうれしかりけれとかたりなぐさみゆくほどにあし
やのせきにぞつき給ふ

(三)ふじまふで

やどのしゆびよくつくろひおきてうかれこがるゝ二
てうだちにうちのりておもふきみをばはやみつまた

のうへのちや屋よりわけよしがまねくきのどくに
よのほんほわがえだもさんよへこのいよこのへ／＼
はんもひちやさとりやうぐくばしまでのりつけては
なび／＼をめせさせかはんせのよい／＼そのやいそ
べにうつなみのよせくるゆさんぶねがさはぎあつま
りてしやぎりのをとのアイノテおひやりこひやりひや
りこ／＼ひやりひやりらんららりつるんろるゝり
やちやららるろかねがまたかしこをみてあればふじ
まふでのぎやう人たちがざんげ／＼六こんざいしや
うざんぶりどんぶりずぶどぶひよひよんにひよひや
うたんを腰につけてみづあそびもござんすみぎはむ
えんじいつもよりけさうつかねのねのよさかねをた
いてほとけにならばさどてのだうてつはきのとを
つたほとけじやすいたほとけじやあれを見よさんち
やがよひのやぼすけがこまをはやめてのつたりやと
をりんばうあふたりやおそまきさつてどてのきはに
なれんばはらりとびおりてよいはおりかづひてか
ほうちかくしまがき／＼をそろりとみればあれどれ
ふりそでがそでがのうそでがのほんのほんへ

(四)げんごしう

はなわさくらよかほるはむめよはつねゆかしきやま
ほとゝぎすつきはたかをのみちをてらすゆきのは
だへになれくゝなるゝわはんじよがねやのとくゝ
アイノテゆきてみうらのまがきのうちにはなのいろい
ろそのこむらさききくにはつねのうぐひすそでをひ
く手いくたびわすれもやらでちよのおもひをくゝた
れにかたらんげんごしうアイノテいとしげんしうにあ
ふよさはさんさとりもなくいそよもあけそさんさて
らくゝほろりんくゝのうようらくゝくゝこでら
のしてゝんてんちんからころりよのおゝぼつとりぼ
とりのぼとぼんぼとくゝくゝしとろだいこもつん
つりがねものふこのいよそれのうさてつくならす
なげんごしう

(五)さんやをどり

こんどはじめてお江戸にすめばてんがかくやくひか
りをくれてきれよさがれよふりそでだてをくゝする
がのふじはくさんぞたてなわかひものさんやへかよ
へしのぶあせみちであぶめがわれにあておつたかつ
にくけれどきみがためなりやつらさもういこんだう
きよしのぶのふかあみがさのすがたかたちでわかき

はみゆるしのゝすゝきですゑとげぬよしなのおもひ
じやなアイノテたれもすいたかおゑどのふうやいくた
こやのゝあつもりさまがくまがへがさにはちくづえ
二つものちんちりめんのべんべをきせてせんせか
しようきみのねみだれがみをいつにわすりよぞさて
もさいたるなががたなおきのとをつたおわかしゆ様
のいつくにくゝちめだまがはなされ申さないアイノテ
だてもうはきもいのちのうちよさやがてしぬくゝひ
つひけうんのめさはげあすをもしらぬ身に

(六)くも井らうさい

やまのはアイノテいかな夜もよも人アイノテこそしらね
アイノテねやわなみだのふちとなるアイノテよしやなげ
かじかなはぬとてもアイノテさだめなきこそうきよな
れアイノテ
チラシわれふりすてゝ一こゑばかりいづくへゆくぞ
やまほとゝぎす

(七)木やり

やれうきたつははるの日のかすみのうちのむめの花
ひとへばかりかさくらばなにほひふくみてさけるこ
ずゑををりたやなかのえだから見ごとにようさいた
やれかほるそでをへえいやくゝちらばかいあらじや

れものうきはあきの夜のきみをまつむしくつはむしろきをひかけなかのつなからみごとよそろうたやれさきのつんなをえいや／＼ひかばなびきやれのみなさまも御ぞんじどやがしがのしらたま花のにかつらからさきうすくもたなびくあれからこれまでえいやつはしさんまさら／＼さつとたいこをたのんでくどきすまいたりやうきちの太夫さんまなさけわさんしうさかたにまんよに小太夫まさきにさくらぎはつはなのやどやゆきにはひねつてしなつてわらつてあゆんでくせはなにもなにはじやないこそはだうりなれ京のぶらとおさかのぶらとおゑどのぶらとさんせん人／＼のぶらどもがよりあひだんかうでつくりつけたるおこたちいかなとんてきどももうてうてんのやほすけなりともふん／＼ふかくはあはふかあひますまいかいやた／＼ふかくはなりそろまいとゆつたらくせつになりましよあいのやのぢはがてんかよもとつ／＼なよへやんれうてやうてつ／＼みたいこかつこ手びやうしにごすごろくにをんびやくしよいよむしろばたにでんばたよさかよねをかちぎぬきぬたかるたに

じやうせんがこつくいしよろりがむちはしかのつちよ／＼うつはけいひきかぢやてつこのしゆからりころりちん／＼からりのつちのをとうつたるたぬきのはらつ／＼み正月はせつぶんまめぶり／＼にかきだまなるくさなづなよなじよ／＼かきよせてほとほとた／＼いたいとしけりやこそしと／＼うてにくかうたりよかやつこりや／＼手がそれたをひかけしめかけこそをかけもとづ／＼なよへさればそうじやうへんじやうのなにめで／＼をれるばかりぞをみなへしわれをちにきと人にかたるなをひかけなかのつなから見ごとによそろうたやれさきのつなへえいやいややしきでたときやうかれてでたがいまはカヘシまがきあたりをこうたぶしおうはちま／＼はちぎまをみたかいまはおもひのたねとなるアイノテ

(八)こひころも

あだなりとなにこそたてれさくら木のはつ花ぞめのこひごろもわかむらさきやこむらさきゆかりもがなとゆふぎりのたちまよひにしうすぐもやうはのそらなるきみたちをなにとておもひそめがはや身はうきはしのうきねにもせめてゆめにはうちとけよアイノテ

ねやのつきさへまくらにかよふひとりこがるゝ夜は
ながとのそのしのゝめのとりのこゑ見だるゝつゆの
たまかづらいつあふさかとこゝろはせきしうとめて
いくよもかほるははつねたきのしらたまみだのふ
ちにしづむおもひはいづみがはいづみきとてか二ッ
こよしかるものうたひしわロウサイよしやなげかじか
なはぬとてもアイノテさだめなきこそうき世のならひ
きのどくにいよのとはおもへどもすてがたき人を人
をはつせのやまのゐのむすぶちぎりのりしやうのあ
らばせいしせんじゆのそのいちざ三サカリいまやきて
うとまつがえときは本テッシちとせやちよのものおも
ひなさをかけてやつはしのくもゐのにしをなかも
ればはつやまとやまのみねののみぢばいろふかきよ
りゝよにもうきなはゝたかをやまゝおもひに
ぬるゝわがたもとあれみつしまのはなのころこゝの
へにこそにほふらめならさかたこだゆふかしはぎふ
たりとはともかくにもたのまじものをわれよきを
しらぬわるくものかなとからゝさきのわらひが
ほめもとにやしほがへめもとのしほになれごろもか
のさごろもの袖ぬれてなみだの玉の井うらむる小う

たのそのふじえよしだのおもはくやどうもならぬに
の

(九) さよごろも

きぬゝにかはすかたみのさよごろもつまこひかね
ししかのこゑにみだれみだるゝいとほぎのむすばれ
やすきたまのをのよるてひくてにものおもふ身をせ
めてあはれとしばしなりともアイノテしのぶやましの
びかねたる人めのせきをみらしるべせよしのぶくさ
のいつそつゆともきえなばきえよたいじかさあるに
かひなきすてをぶねアイノテそこそしれねそてのう
みかはくまもなきまくらのなぎさたつあだなみはし
げしとまゝよそれをたよりにあはねばならぬあすま
でよもや三下りつゆのみはあらじこのゆふぐれをと
はゝとへかし

(十) もしほぐさ

ちよはふるともかはらぬいろよときはのやまのいは
つゝじいはねば人のこひしきものとおもひしよりも
すゝりにむかひよしなしごとをこゝろにまかせかき
てぞをくるもしほくさむねにたくひのけふりはそら
になびくならひにいよのアイノテすゑわあふせのなみ

まくらひとりこがるゝみはうきふねのよるせさだめぬこのうさつらさしらせたやゝゆめに見んとてかたしくそでになくねさびしきアイノテきりゝすつれなきひとをまつむしのアイノテくさのまがきのゆふべになればものこそしんぞおもへのさりとほうき世やつさいつさて御けんはとにかくに

(十一) さくらづくし

あかでのみはなにこゝろをつくすみのおもひあまりにてををりてかぞふるはなのしなぐにわきてやうきひいせこまちたがこざくらやちこざくらもゝのこびあるむばさくらねれやこふらしおもかげのはなのすがたをさきだてゝゆくゑわけこしみよし野のアイノテニアカリくも井にさけるやまざくらかすみのまよりほのかにもみそめしいろのはつざくらアイノテたえぬななめはこゝのへのみやこがへりのはなはあれども馴しあづまの江戸ざくらなにおうしうのはなにはたれもうきみをこかすしほがまさくらはなのふりそでやへひとへアイノテしたにはむくのひざくらやかばにあさぎをこきませてわけよきぬひのいとざくらひくてあまたのみなりともせめてひとよのたはふれにゑひを

すゝむるアイノテくまがへのアイノテたけきこゝろはとらのをのせんりもかよふこひのみちアイノテしのぶにつらきありあけざくらきみのなさけのうすざくらアイノテよしやおもひをきりがやつアイノテうきよをすてしすみぞめざくらむかしをしのぶいゑざくらはなのとぼそのさびしきに月のかけさへをそざくらアイノテ三下りやみはあやなしこうばいざくらいろこそみえねをるそでもにはひざくらやきくざくらアイノテはなのしらつゆはることにうちらはふにもちよはへぬべし

(十二) ふゆくさ

いとはじなたまゆらやどる人のさかりアイノテ身をしろあめのはつしぐれさだめなきかなうきくものつきのにほひもかげさむきおしのうきねのまくらさへつららのたもととけやらでアイノテ三下りとこのうらはのしきなみのはまかせさえてなくちどりおもへばゆめの世をしらてやがてかれ野のあさつゆと本テウシきえなんものをたれかのこりしきくのかのやへむらさきにうつろひてそでのむかしもいつしかにあひみしことをかぞふればアイノテむらゝみゆるふゆ草のうへにふ

りしくしらゆきのみちふみわけてたれとはんまつの
おもはんはづかしのもりののがらしたへくにな
みだくたばしるたまあられあさひまつまのうき身
のいのちながれのすゑのわれらさへもしもやさそふ
みづしあらばこひのしがらみせきとめよ

(十三)四 季

たれかはじめしこひのみちいかなるひとふみまよ
ふながのなはてのゆきかよひしきをりくのたえせ
ぬははるはよし野のはなさくらぎやそのひとふしも
まちはかなるはつねゆかしきうぐひすのむめがかを
とめあをやぎのうきねのねみだれがみはいつにわす
りよぞアイノテなつはすしきさころもをきてもみよ
しのおんかほよばなあひそめがはのながれこそきよ
きながれとおもふにぞいととおもひはますかみく
もらぬそらにあきはきにけりアイノテいつのまにこと
にいろあるもみぢばのそのなはよもにたかをやまの
わきもいまはもみぢしてとてもぬりよならなまなか
しぐれはいやよのふゆのながめはするがのふじよ
アイノテゆきになりたや此身はきえていまのおもひを
えいさんさしらせたやよしなやとおもひついでか

くばかりこひせず人はなさけのあらましものをあ
はれみたまへしづがうき身を

(十四)やへむめ

二上り 梅がさけがしいよ八重梅がえだをえたを手を
る振してかならずこざせとささをまねくアイノテか
ならずこざせとささをまねく夢になりともあひたや
見たやゆめになりともアイノテうき世じやなまれにあ
ふよはうつくかゆめかまれにあふよはかたるまもな
きさんさみじかやよしなのおもひアイノテうき世じ
やな

(十五)かすが

三下り かすがのわかむらさきのすりころもしのぶ
のみだれかぎりしられぬわがおもひアイノテをくつゆ
のしづころなきあきかせにうつろふ人のこむらさ
きはなむらさきのはぎがえにみだれみだるころ
のつらさアイノテ本テウシそのくりことのまたのよにきみなら
でよんくよそにはさあへ色にはうつさじさあへむ
らさきのいろにころはあらねどもふかくぞ人を
おもひそめかひもなぎさにわがそでしほる人めく
忍ぶのそのかよひぢのふねにうちのりおてきたちは

こぬかのうちのせよせついくたび思ふやどのしゆ
びとはおもへどもたゞひとすぢに此わけしらぬ人な
らばたとひよろづにいみじきとてもたまのさかづき
手にふれよアイノテしやんとさせそこはいよ／＼しら
れぬかきみにあふ夜はまつちやま^{二上リ}アイノテ 手にふれて
アイノテいつしかもみぬむらさきのねにかよひゆくう
たゝねのアイノテきみの／＼ぬれこそアイノテじつと
は見えねしんぞこのみは神ンぞこのみはならだもろ
うててういぞつらいぞまくらもうくばかりへアイノテ
わけの／＼よひにはアイノテいよほださるゝへしんぞ
此身は／＼はなみだもろうてういぞつらいぞまくら
もうくばかりへ

(十六)はるごま

世をうらやかにそのふのはなのはるごまはゆめにみ
てさへ／＼もよきにましてまふたらせんしうらく
よのいつもかはらぬわかみづのながれのすゑのわれ
らさへうかれすゝめのひつとうかれいでてあのいろ
さとにきてもおうしうなはたかはしのかへるさを見
たればまづはなさむにむめがかしほのふりもよし野
のはなのおもかげうつすみの江ふでそめがはのふ

かきなかをばたがゆふぎりやぬれたわけあるつれう
たをかのおもはくのさみせんにむめがえかほるにう
ぐひすのはつねわいとゞしほらしやどうもならぬに
いよのとかくきみゆへ身はやつはしのはなこむらさ
きかきつばたさはぎたてられてアイノテぞく／＼あひ
とてなりませぬはとまがきながらもにしをきつとみ
かさのつきのかつらのおとこだてかやにほんもろこ
しきりゝとまはしてはなまつかえのふぢえかなをも
ふぢなみのえいりゑによせつものおもへどもうきは
しのなかよかるものいづみかはいくよちさとのつき
はさらしなをひかけなかのてうで見ごとにしたれゆ
へころんだころびやせぬもの手をついたアイノテおて
とろきみのなみじやないものつらくやにくかうた
りよかせんよもちよのせいしせんじゆはしつかいみ
だかばさつかたゞしよしたのかみならばつなぐりし
やうもあれかしはぎのゑこくわかやまこちのてうの
よねたちはゑきもはりもつよひはいのきんひらだん
べいさかたさくらぎさつてもめいよの太夫しゆこの
きみたちのてにのせられてはいかなしやうのいはや
のおひじりさまもさみにのせてのひとふしはすゑも

こながとはるごまはせんしうらくなるみよとぞめで
たき

(十七) たまくら

てもせすくもりもやらぬつきわおぼろのはるのよ
のゆめばかりなるたまくらにきみがうきなやかひな
くたゝんとかく人めのしげくなればしのぶやまみ
ちしのびてかよふいでなたまがはきしねのかはづい
まやなくらんうきよのなかにわれとひとしくものお
もふ身のあらばかたらんうさつらさこひのやまぢを
たどりゆくアイノテ
三下リこひくゝてこひしき人をまつちや
まほのかにみえしこのまよりなもなつかしきほとゝ
ぎすいまひとこゑのをとづれにアイノテむかしの人の
しのばれてそでになみだはよるのあめくさのゆふさ
きわけてこしすみだがはらのあれたるやどにくゑな
ならではとほそをたゝく人はあらじなまつよひにま
くらななげそなげそまくらにとがもなやむさし野
になべてのくさはなつかしやわかむらさきのいろ
くアイノテ
本テウシありしごげんにかはせしことのむげにか
はらぬこゝろぞならばしんぞうれしさにゝかまさ
るものをかすゝおもふ身をたれかあはれとおもひ

はやらでゆかしきみこそまつのみどりよいつもこゝ
ろをなぞえたや千とせをもまたかけてへちとせをか
けてやつさかはらぬなかとよのうさてな

(十八) かまくらはつつけい

まだ夜をこめてありあけのつきもやどかるむさし野
のそらもひとつにちぎりこしいもせのなかをふりす
てゝかくたちいづるわかつまのこゝろのアイノテうち
こそうらめしやうらみなながらもたちいでゝふりあげ
見ればほのくときりにへだゝるあはかづさいでい
るふねのかすくはえんぼのきはんこれならんみぎ
はのとともつがひくはをやすめよせあつまりてふ
はとたつやがんかもめへいさのらくがんおもしろや
あれにみえしはありがたやいくちよちよのかみかぐ
らすいのもりアイノテあらしこがらしさつとふけアイ
ノテかさにやかさにこのはがはらくとはりいよ
くはらくとこうてんのぼせつまのあたりはるか
にたかきおんやまはいつもかのこのふじのやまどれ
くそれみてくからく見てからこひがまします
かすくのおことばにはつとだまされたそれでねも
せでまよひゆくおもふねがひはかながはのおきにた

だよふあまをぶねとまゐるしづくもろともになみだにあかすふねのうちこれやまことにせうしやうのよ

るのあめともいひつべしあめもはるればあみをひくひくになびかぬアイノテつれなさよ 三下りきみをおもへはアイノテかくしのべともかひぞなきつれなきまつにふるしぐれなさけにへだてはなきものをわすれまじつきせまじおもひはつん／＼つりのいとアイノテひいてしやくるところわ本テッソつたところはおもしろやぎよそのせきせうはうつすらんげにものどけきうみのおも一しゆはかうぞゑいじけるあづまぢやアイノテのじまがいそのはまかせにわがひもゆひしいもがかはのみにゑいじすてゝぞゆくほどにさんしのせいらんおもしろやアイノテせんりやうとるともまだ／＼むまかたいやよ／＼こしにやまびしやくアイノテ手にやまたきせるつきのみやこをふらねばないよさどうしたしんていしほがなひアイノテ日もはやにしにいりあひのごくらくじのばんしやうとき／＼にまさる八はいやゆるがみきはによするなみみねのアイノテ あらしにもみぢあはせよするおなみがどう／＼とどうとうつてはさつとひきにつほんぶさうの

などころやこれぞわらはがすみかとしてゆきの下にぞつき給ふ

(十九)わかくさ

よのなかの人のこゝろはいろ／＼にうつろふものはなのいろむめがかをとむうぐひすのたによりいでゝまたさとなれぬ野べのわかくさねよげに見ゆるおもかけの人めつゝめばいろにはださぬそでにはもれてむつまじくおもひそめたよわかむらさきのふでにまかせてかきつばたアイノテなつはすゝしきいけみづにすむかはたけのすてをふねこがれ／＼てむかしをしのぶくさのまがきになみだをそえてなくやさつきのアイノテたそかれどきにたれをまつちの／＼ややややまほとゝきすアイノテきみはさみだれおもはせぶりよわれははたるびおもひにもゆるこのゆふぐれのものあはれさになくねさびしきむしのねアイノテあきはきにけりわれとふものはをきがうはばにみだれ／＼てかせそよぐよそにもをくやそでのつゆ月のうつろふかげ見えてのこるまつさへあらしとともに人めもくさもかれ／＼にいつもながらのふゆはうやをちばもしもにうづもれてこの下つゆにぬるゝ夜はいとい

さびしきとこのうちまくらならではしらゆきのつも
るおもひよふししづむ

(二十)はるかぜ

さいたさくらにふくはるかぜはのほんへ花のあたり
をよぎてふけくこぼれてかゝるはなのつゆアイノテ
みやまかくれの身はほとゝぎすのほんへ人はしらね
となきあかすくよいくぬるゝわがたもとアイノテ
なげくなみだはつまこふしかよゝをぎやすきに
くくをくつゆのくくるればいろのそでしぼるこす
るくははなかと見えてくゆきのあしたはのほん
アイノテのんほのういよかせいとふくアイノテしもよ
にぬるゝわかたもとほるのゆふくれにやまゝをみ
てあれはをりしもはるかぜにさくらのはながちりか
ゝるちりくはつとはなのちりたるはそらにしられ
ぬゆきかとみえておもしろやなつはほとゝぎすうの
はなにあやめぐさ三下りばたんしやくやくあつちり
なうつちりなアイノテすじりもじりてえりくりえんじ
よのをくやまのかげおしかのなくねむしのこゑく
あきはななにあふつきにうつろふもみちのいろとり
やあつめてあはれさまさるアイノテふゆはしぐれにゆ

きかしもかときえてたまられぬ

(廿一)さごろも

ひとりおもひをまくらにかたりせめてたのみのゆめ
さますあさのさごろもうちさめていとねられぬあ
きの夜にさりととはつきふけていつさてこうろぎねも
せでまつむしふくればすゝむしすんどふるければせ
きやるはういよくつはむしいとはぬこゝろにてんと
ゆふたかみをのぞみならねからふつつときりくす
なかぬまはござせんよすこしあはれ身アイノテさつと
つま戸のしぐれはうやのぞくのなみだはつゆのみだ
れがみいふにいはれぬわがおもひ

(廿二)らつひ

われはみやこのらつひらくぐわいとらやくししかも
われらはもうし子でなうかれものでござるおもふか
たにはすぎしころよりわかれてひとりいとゝさびし
きねぎめのとこになみだなぞへそほとゝぎすなみだ
とともにむじやうをくわんじとかくうき世はかしか
ましとおもひしころよりやまぢにいらてこしばしば
がきひきむすび世にありがほに月をながめてふけて
きぬたのをとかとわれはきけばつきぞしらするわが

なみだおもひつゝけてあしびきのをしかのなくこゑにゆめさめてわれをばたれかとひこんといとねられぬあきのよにアイノテもおもひのねふりをさますそのいにしへはよねしうとあればまふつうたふつあだくらべうきよのなかをおもひいづれはこゝろもみだれ／＼たりよさスカ、キあまりゆかしさにことのでうしをしらふればをりしもまつかせがあなたのみねのかたよりもこなたのことにかよひきてひき手あはせたはなによりもつておもしろいあふぎくも井にすまにきりつぼうすころもにくものうへしきのみだれかあつちりなすぢりもぢりてえれくりだしたるりんせつすがいきおもしろやはなたちばなのそでのかになくはなにとりほとゝぎすにうぐゑひすくゑなのとりのたゝきおとしをとづるゝしばのとほそのけしきをひきてきみたちにやつこのみせてきかせたやよい／＼ずんとぬれませうに

(廿三)こひづくし

おもひねのこゝろからなるゆめぞろかまたはうつゝかうつゝなやちらとばかりのおもかけをみすのをひかせさら／＼にわすれもやらぬ身ぞつらきアイノテこ

ひはさま／＼おほけれどあふこひまつ戀しのぶこひうらみのこひにわかれの戀こそものうけれわれはほんごくさふかきあづまあたりのものなるがこんどはじめてみやこへのぼりゆきのふりをでちらとまた見をめしづこゝろなくこひにしてふみたまづきをかきどきやればおなさけのかえしにかならずこよひあふせとありしをいとうれしくてやへむぐらしげれるのきにやどりきなれんりのちぎりあさからずふかくかたれとかねてわかれのおもはれてさりとてはなれぬむかしがましゝやものアイノテかはすまくらはかずかなれどわれもわすれじきみもまたおもひいせよこよひのちぎりはなれ／＼のむらくもみればあすのわかれもあのごとくあたゝしんきやもんきやさりとてはこひにははてなやいかせん

(廿四)かさてら

いかにせんとすればうらみかくすれどありがひしらぬ世のなかに江戸をばいとひいづれどもこれぞまことにおほいそやたびでうゑものはいりあひのかねよさやまぢをゆけばしかのこゑふじのおやまをうしろにおきつまへにはさうかいまん／＼とはてもなくあ

らしにつるゝゆふなみのうちのけよせつたつなみに
すゑをいづくをとをたふみはまなのはしをうちわた
りゆんでやめてのながめしてなゝせややせややそせ
がはふかきおもひはみのをはりきてこそ見たれかさ
でらやげにいにしへもわがごときものうきたびのく
ちずさみ一しゆはかうぞゑいじけるげにけふばかり
くもれあふみのかゝみやまたびのやつれのかほのみ
ゆるになみだのあめのもりやまつゆにしつほりゝ
ぬれてこそゆけくさつのしゆくよつれもなぎさのす
てをぶねしんまかげよりろのをとがからりころりし
がのかんからさきのまつづるきづるからころりとこ
ぎだしてつりするよしのやつさつたところがおも
しろやなにがゝへそなたはせたのながはしまゆみ
つきゆみ日をかさねやばせのうらにぞつき給ふ

(廿五)やまつくし

こひのやまちにいりそめしより人めしのぶのやまと
はつらやまれにあふよはくだかけさへもときしらぬ
やまゝはなのみしてあくるわびしきかづらきやま
よよるの御げんにことばのこりてわかれさらばゝ
にのうかへるやまきみがこころのしらればせねども

だれてけさはくろかみやまにつたふなみだのそでふ
れやまよそでをふるゝふりやるはよいがわけのあ
る身のそでにふるなふるつまいとし

(廿六)ゆふされ

うれしたまゝたもとにかゝるさゝはこふちのはな
のつゆつゆにこゝろのいつしかみだれあきにはあら
ぬはるながらいとゝおもひはいやまさりみだるゝも
のはあをやぎのいとはものかはなゝゝにはなにお
きふししほるゝ此身このゆふされのひとさかりをら
ばいまをれちらぬまに

(廿七)かはたけ

そさまゆへにぞみだれがみときししたひもかすかさ
なりてむりにじつからいとしゆてならぬへやゝとも
すればねやのうちより手をたゝいてはみづくれよ夜
はなんどきぞかへらにやならぬせかせことばのむい
きのときは神ぞつらいはつとめのこのみこゝろを
くばりてきをとりにかぎりもあらぬたまづさをよあ
けぬうちにしたゝめてこゝやかしことやりくるつ
らさうらみられてはうらみもしたりあらおそろしの
ちかひのことばこのゆくすゑをなにとせんかはゆが

らんせなかれの身

(廿八)はなのえん

よしやよし野のはなよりわれはそのゆふくれのをり
からにかいまみえにしおもかげをわすれもやらでう
か／＼とうつるこゝろやむらさきのいろにいでたよ
はづかしながらはなによそへてやるふみを見よかし
／＼ちらぬまにアイノテいといこゝろのいよくしぶ
ねやるかたわかぬものおもひふみのかへしもいつと
なくまちしかひあるけふの日もはやいりあひのはな
のえんあふてぞこよひにゐまくらこゝろとけたよは
やいつのまに一よばかりかきりがやつ八へもせんよ
も神々ぞかはるなかはらじわれもはなにはあらしよ
しやふくとも／＼ちぎりたえすな

(廿九)いくはる

いくはるのながめはいつしかはらねどわきてのどか
にてる日かげちぎりはたけのよ／＼こめてきみとふた
ばのまつもろともにえだもさかゆるわかみどりあふ
ぐにあかぬときをえてアイノテさればあやしのしづの
おめさま／＼のつくりばないろをつくしてさ／＼げけ
りまづさきそむるむめのはないとよはくにほひもふ

(三十)なみまくら

かきはなごろもやへひとへさきみたれげにこゝのへ
にたぐひなきいろもことなるさくらばなよそほひゆ
ゆしく見えにけりさてそのつぎのしまだいにまつと
たけとをうえませてちよをさへづるひなづるがみぎ
はのかたにすをくひてたにのながれにかめあそぶな
アイノテしづのをだまきくりかへしよるこひ／＼よる
こひさまよこひさまよ人のなさけはよるにこそあれ
さつきまつはなたちばなのかほよはな見るにこゝろ
のふかみくさふかきおもひのうさつらさいろにださ
しとしのぶくさしのぶかひなきいよみちおくのつぼ
のいしふみかくぞともいはねのやまのいはつゝじい
はねど人のこひしきものと二上り怨みながらもつき
日をくるさてもこのみはあるものかアイノテ神々ぞ
つれなき／＼いのちかなさあ／＼なにかへとはおも
へどもなさけにへだつるそであらばしづがふせやに
つきはやどらじとゆふべにそよとまがきのつゆふく
かせのをとづれにアイノテつたへしかひやありそうみ
ちん／＼ちり／＼いそうつなみにとてもぬりよなら
もろともとふかきあふせのなみまくらかはすばかり

のをぎのうはかせはぎのしたつゆ

(卅一) たなはた

なつはつるあふぎとあきのしらつゆはいづれかさきにをきぬらんアイノテとしごとにあふよまちえしたなばたのあはでぬるよはそでのみぬれてふるはなみだか身をしるあめかかけしなさはかさゝぎのわたせるはしにをくしものげにおもしろやこよひしも月はさへゆくあきの夜の二より千世を一夜になせりともなごりはつきじいまさらにことばのこりてかねがなるとりもなき候あたゝしんきやきのどくやとかくうき世はまゝならぬ

(卅二) ひきくるま

さらばひかんとゆふつゆのぬれたとりなりさらりとやりてひかばおなびきやれえいさらにさよいえひはなとならばちりかゝれおん身はもみちのいろよのう月かげにそひていろまさるえいとなアイノテさてよのなかはなよのなかはさだめなき身のうきくさのひかばなびきやれちらぬまにやんれひくくひくはたいはまであみひくやまでひくはたいせきこきうさみせんなるこのなはもひくとのさまがきわすみやれそ

でをひくみやこのうしはくるまをひきやるくはよいがおもふたふりしてそでひくなかたりつゝけてゆくほどによその見るめもはづかしや

(卅三) ひがしやまはつつけい

見たせばひがしやまのはるのけしきやぎをんはやしにふくあらしはさんしのせいらんとうたがはれかはらおもてのまさごのいろはこうてんのぼせつもかくやらんおもしろのはなのみやこやちしやのさくらにしくはなしかもがはのながれのすゑにゆくふねはえんほのきはんかさへわたるせいすいじのかねのこゑアイノテえんじのばんしやうのひきそれしらかはのすさきにつばさのさんらんすはへいさのらくがんともいひつべしさてれうせんの月かげはとうていのあきのこれにはよもまさらじさてまたぎよそののせきせうはつりたれてあげまきにあそぶものを

(卅四) なつくさ

なつはゆふべの身のおもひなるいろにこゝろわふかみぐさつゆはたものいとまもなしにうらやましくもうきこひのよはしられつしらぬかほよばなアイノテたちもはなれぬきみがおもかげあふささるさのなみ

だのかはにあやめもわかでなきしづむそのたまものいはでしげるもよそめくしのぶのをぐるまにかよひかよはせきもりも一夜はゆるせたまくらのちりをはらはぬとこなつのからくれなるのそでのかもはなたちばなにとがはあふせのとかく人こそつられとうらみのくすのたまのをのたえなばたえよアイノテさてもいのちはあるものかアイノテたそかれときのきのつまにあまりてかゝるゆふかはなをしるべにたづねんともいひよれば手になれぬはすのうきばよななさけにそまぬつゆのなさけに

(卅五)うきね

うきねのとこにこととふはまくらにかゝるなみだなりせめてはゆめになりともまどろめばみじか夜にやまほとゝぎすをとづれてはや夜があけた神そつらいよのこがるうき身のきえもせでアイノテさてもいのちわながらえてひるはひめもすなきくらしよるはアイノテよどこにふししづむまきのとばそをうつむらさめやこずゑにそよぐまつかせかちぎりおかねどはかなやなきみがとふかとおどろかされていとゝなみだにめがくれてかべにそふけるとほしびのかげかす

かなるあかつきのかねのこゑアイノテつくぐときくときはとかくかなはぬ世のなかにふつつとおもふまといとおもへくどもまたすてがたきすぎしわかれはあふせといひしことのはをわすれまいこの世はさておきのちの世ものうさてなあひみてののちのころにくらぶればかほどものをばおもはじものをむかしこひしやないまの身や

(卅六)こむらさき

きみこすばねやへもいらじ小むらさきわがもとゆひにしもおくとまたのたのみをゆふぎりやいなばのやまのみねよりもうつしやうえしからさきのまつのみどりもこながとやアイノテ身はうきふねのなみのもんともゑのきみやこがるらんにしをはるかになかむれば目かげかたふくもりみえてきんりうざんとはあれとかやほまれなたかきるこくまでやうきひぐしきみりふじんもこれにはいかでまさらんとおもひよるべのなみまくらきみにあふせのなみまくらかたしくそでのかはくまもなきおきのいし二上りなはいりえの身はすてをぶねしづむおもひはわれひとりそれはへあかぬわかれはそでひきとめよよいのなさけにゑ

ひうかれかはちかよひにいこまやまそのなたかをの
うわかかいで見んとばかりにちぎりつゝたきのこ
したるうすくもやきやらのけふりのかはるは神ニ

ぞおもはくかはるは神ニ ぞおもはくアイノテすがたを
みればきよはらやふかやぼなりしおてきたちうきよ
をしのぶめせきがさあめはふらひでこひがふるこひ
かふる身はやつはしのさはやかに三下リきなすもす
そをかいとりてわれふるつまはいよなをいとしやれ
なをいとしアイノテ本テウシこがれこがるゝ身はつしまぶるこ
ひのねとりのおのづからきみとわれとのなかとをし
とかく人めのしげゝれゝばまがきながらの御げんとい
へどとがめられてはなりませぬういことゝそり
やさうさ江戸やつさういてきた

(卅七)香 盡

六十一種の名香は法隆寺東大寺逍遙三吉野紅塵枯木
中川法華經花橘八橋園城寺似たり不二の煙は菖蒲槩
若鷓鴣班青梅揚貴妃飛梅アイノテ種ヶ島漂落月龍田紅
葉の賀斜月白梅千鳥や法華老梅八重垣花の宴花の雪
名月賀蘭子卓橘花散里丹霞花筐上は薰り須磨明石十
五夜隣家夕時雨手まくら有明雲井くれな井初瀬寒梅

二葉早梅霜夜七夕寢覺篠目薄紅薄雲上り馬とかく伽
羅の烟と命のきみはとめてもいくよくよとめても
とめあかぬ

(卅八)しぐれ

ならまつのはのをちそめてゆふかげしろきまつちや
ましぐれゝゝになくかものこゑもこほるやひかたみ
ちアイノテえもんざかこえてかねのこゑいでそのころ
はかみなつきくるはゝすまゐはなみだてくらすの
わきつれなやふきやちらしたるあつたらこはぎをす
ゝきはなにゑひまたもみぢにはさめてたとりしどて
おろしはるにかはりてそでさむやてうちんくらくゆ
きかよひみしりごしなるかすりうたしよ人のなづむ
はいろ千とせやまくもはうすゝにしをのそらにい
り日なをてるにじのきよはしういちよろうしもゝあ
られもひつちこないてあらしにつよきかしはぎきか
ほるくらべんあづまと京といづくはあれどみちをく
のちかのせんせいそれにはかはりこにしやまとがも
しほたれをりたつ田ごのうらめしやけかようおじ
やろぞアイノテあしをとあらくこゑうはがれおをもん
いまださゝずしてちや屋のはしとみたれのかうし

アイノテたれかはをりかついてよねくどくちよろうく
どくうけざりどうざりひとつがいせうしなるかなら
ぬかこひの中の町

(卅九)月 見

あるひはしらゝふきあげわかのうらすみよしなには
たかさごのをのへの月のあけぼのをながめてかへる
人もありわれはそれにはひきかへてむかしがたりと
なにたちしいろのむらたのちうじやうのかちでやれ
しりよはせをりかよひしみちのべざりとるいけのみ
づかゝみかたえかれたるさいかちもやれゝゝこひに
やせたかそちやゐなすがたいなりのをかにむまはあ
れどもきみをおもへはのう手あみがさどてのまつば
らたれゆへのほんほかよふひんこひころびびつこひ
きゝゝゆくほどにこのもかのものなかのてうあふせ
ゝゝにかはらじなしろもしらぬもあきのよの月まつ
ほどのこよひしもかゝすいしやうしておばしまのよ
るべゝゝのちざりかなあげやのとぼしかずてりても
やにかさねしをりひげこすゝきにいだすぎんげつも
ものずきふりてまたおかしひるのおましにいぎたな

くゑいふすおとこ月しらすぎやうすいがへりまちう
けてしらなみおとこたつたやましのぶこゝろのあや
にくやくもれと月をかこつらんのとやにはこぶもの
しげくまどをにあめるてうちんもこよひはなくてす
ぎよかしくつはのくれのまりすぎてやりてのやどの
ねぶつこつ二丁目あたりにすがゝきたへてアイノテは
つねみゐでらうたふらんアイノテ月はてるやらくもる
やら身あがりくらき女郎のあだめにかゝるよばひば
しやくそくなしのうかれ人ものうかれにうかれき
てどれでもゝゝふりによばれしんぎうのかみそこ
ゝゝにゆひなしてやこゑにちかきあげやいりまくら
とるまにあけぬべしあくびがちなるねやもありアイ
ノテとなりざしきのふとゝゝきちぎにもものうがご
ざるどれからござつたいのさんちやまちからまいり
たがおうけきりをとりましよそれはいつのことかと
いのしはすの事じやいのつがもないことゆつてくる
ゝなかつたてゝきたれどせんぎばかりでのほゝん
ゝゝのんほのういよゝちちがない夜があけたぶし
ゆびじまひのかへるさつらやたいこがとんであとさ
へうたのねをうちだいてまたまいる

(四十)あだまくら

あやにくのやもめがらすにあさいめてたれをまつち
のやよふもとがはみづろふたつろふなもよひなみ
はしたなくすぎがてにまたむつごとのうすなまりま
くらのとこのねざめうたみゝにといまりものがなし
あだにはせまじうつりがあゝかたみなるあだなれ
ごろもたびごろもひかすかさねてするがなるしづの
はたやまのおりにふれついでおかしきあべかはやこ
ぬよちぎらんみろくまちまたかみかせやかみかせの
いせのふるいちやそせがアイノテこゝもこひぐさし
ばやまちとまるやもすのしもくまちかねをたゝいて
ほとけにならばなじよくきつぢなるかはしらすと
なるとあわざしんまちゑちごまち一よふたよのさか
いのつもりあくるわびしきふくろまちおつとさしこ
めおふねひやうごのふろめたちわかれむろのとまり
にうき身をよせてものうらよねそこゝにわれか
らぬらすそでのうみあきのみやじまみやびしてなに
はくづしのみつといとしんきゝしのだけなかけて
おもひをさしよよりもだいをじまのさいれうをう
きをまじりのさくらうをさごしいとよりこちゝと

よべばしほのめをなぞうるアイノテナみのまくらやし
ものせきなをゆくさきはしらぬひのこゝろづくしに
こひわたるもろこしぶねのよるとなくひるともわか
ぬたはれめのアイノテたまのたすきの花をどりやなぎ
のまゆのまんまるござれまんまるござれ十五夜の月
のわのごとくアイノテあゝうつゝなやあだまくらとを
くもきぬるものかなとすぎこしかたをみやこにはつ
かさくらいもそれゝにみせばおをそでゆきみじか
ひつこきがみやふたつをりまたふたつぐししどもな
くゆきのすあしのはなふんでおなじくをしむきぬ
くゝや 三下り またあさごみといりみだれ アイノテだ
つちのきやくしゆとこつちのきやくしゆがくるとや
しち一丁の二丁の三丁のはやかごあふむとりもちや
んれさいづれあふむうさつらさせいしせいもんじつ
をみしよにしつとんゝしつとんゝとんゝとんゝゝゝ
ゝゝとうからないしやうふきこんだ本テリシこひのあ
らしにばつとふきあげ大じんじやさつてはそれから
それしだいいうかりひよんなるねざめかな

(四十一)はな見

はなのかにころもはふかくなりけりこのしたかげ

のかせのまに／＼やへのかすみにいやたかきめぐみ
になにかうへのやまはなとこひとにくまれてほん
に／＼ほに／＼なにあふすがかねつきぼんさまみ
よやちよくせのやぼすらにしめさんためにみほとけ
のぬれありがたき御すがたなかばははなにかくれ
ます風にたいよふまくのうちてりこそてりぬかてり
ましこなくねかはゆきやまがらのをがひきよくの
はもかるくよい／＼／＼やさひよくりひよおや
ちがこしにひやうたんひつつけてひよ／＼ひよつと
うかれたはなゆへにひよくりひよアイノテみねのあら
しとなつれだちかよふひこそ女ばうはだてこき／＼
でこつまかいどりしやら／＼行てこれこちの人おう
見ゆるかのようなぬけまうすをぎ／＼しのはらねぎ／＼や
かくい松のとぐいでなあしつきたてゝ卯月づき／＼
うづきにうづき卯月八日のはなよりだおなをばえ申
まいよのしやん／＼／＼とさいたるなががたなはな
かてうかとうちむれてさくらちりつむすげがさやさ
しほんにゆかしおそばに引そふとぎびくにこんにう
こんにあさぎにかのこちべにや地むらさきけんたい
ぐんないとびはち丈アイノテこれのこよねにとんとつ

とんとほだされたやすい事そちておうちやれちよ
ん／＼おけさおきのとなかにとんとと／＼んとどつこ
いいよすて／＼をふねのすて／＼られてはたち申さ
ぬアイノテさてそれ／＼のまくのうちちやのゆまつ風
そめもよふなにはにかるやよしあしのとさをかたら
ぬまくもなしみやこのつての一ふしはやなぎさくら
をこきませてあさぎかたびらくろこそでおなしをか
べのまつにはあらでそのさと人のふうそくもなはな
つかしきやりしゆやりむめすがたかたちはよこぶと
りみどりたよりがかみゆひかへてやぼに身をなすか
／＼えおびかぶろそれ／＼かもじかをちた／＼をとす
もうきなあらねぎ／＼ねびきのすゑたのむういこ
の／＼身の行衛江戸やつさ三下りみつければこぎそ
つちのきやくゆとこつちのきやくしゆがくるとや
し／＼ろかいをはやめて一丁の二丁の三丁のはやきお
ふねいろのみなとへやんれをせやれとゑもん江戸や
つさあらしまつまのはなよりもしつとん／＼しつと
ん／＼しとんしと／＼んとん／＼／＼／＼時
めくさとのいゑざくらアイノテ
本テウシけふもくれぬとつげわ
たる／＼うらみかさなるあどふのかね人はちりゆく

むらがらすわれはぬるともいよはなのあめそのこざ
くらのもちづきのいつそきえたやはなのした露

(四十二) たまくしけ

玉くしげふたつのいろのまことうそわけうるさとの
よすがとてあだしことばのもしほ草けふりかすかに
とびみだるほたるのみやにあくがれしそのたまかづ
らかりにいまいかなるすぢのいによるものならな
くにわかれあふれんぼのしらべほのかにも アイノテ
三下リ
くりこゑしてよぶこどりおぼつかなしやかくしぎみ
そのかすなりしもろ人もなのみのこりて今はまたむ
かしをしのぶ夕まぐれかほにあふきのいやらしくめ
にいるいろのふうぞくとときのなかだちさそひくる
ながれのまことくみてしる茶やのしなづまじつとも
しらではなのひかりもいさぎよくみるめにぬれしし
ほころもあまのしはぎもないものかなんぞのやうに
さりとは アイノテ
テウシ やどもさだめすはしたなくよひの
むつごとよそになりきはみじかしのながまくらしか
けことばのくせつどもよそにしたひもとけぬ心のあ
れかしこの身をすてゝあはふにたいこぶしゆびのか
りねしてつきをこしてもにくからぬとがをばさけに

あふせのすゑそらおぼれせしきぬゝに八こゑのか
ねととりさはぐ五てうのてんのあかつきにかへるさ
しげきたはれおの二上リをのがさへづりさまゝに
小うたじやうるりだてらしくげにかすゝのたはふ
れもこゑちりゝにわかれゆくわれかよひきてふく
あらしよそにはつけそあさがらす

(四十三) いろ香

さだめなきいろかにうかれくにあまたかたひまくら
もあかづくきぬもなりやつれたる身のゆく衛さんげ
にかたり申さんそもゝえぐちかんざきは名のみの
こりてふうぞくなしのがみのさとはくさまくらあさ
づまふねはかちまくらたれこがれけんあとしらすア
イノテ つかひあげたるしまばらのみやこのにしに入
日かげうつるこゝろにたきつけのしばやまちには火
もたてすけはいかはりしづしぎみをはるゝこゝに
みこじちやしほつかいづにどれゝそれあれゝは
りがうらつりするあまのうけなれやこゝろひとつを
さだめかねつるがこまんのすいつけたばこきつゝな
づめば日もあはぬゝ目がまはる女郎とちぎらぬた

ひ人にはよぎもかさいでてらどまりおくたびれなら
ねまるべいとてゆさしのさけをしゐざい四の五の
つじをいづもぎおなじながれのさかたのひしやく
アイノテそこしんじつから 三下りとけてちん／＼ちぎ
りのいくよもむすはんひたちおびかけまくもへみと
のふじからゑた川つゝじあすのわかれにやちり／＼
におさらばへこれちかのうち本テウシとしけりやこ
そしとゝうてにくかうたりよかなんでもこれはあい
た／＼いたこてじまのこんこでまねきまねくたもと
にふみやたまづさアイノテげにふうきやうのよるのい
ちとまり／＼しゆく／＼のまどにうたふくん女はか
くをとめておつととすわかれあればまづくれあり
しなこそかはれたはれめのそでふきかへすあすかか
せきのふとすぎでけふとくれむさしのくになるしん
よしはらがとまりじや

(四十四)梅づくし

きみならでたれにかみせん此はなのいろはさま／＼
さくらむめやしほこうばひあさきむめぢはうすいろ
にかのこむめきなすがたはまだいはけなきこむめ
ふりよきしなのむめしなとひやうしをと／＼にか

ぞへかぞふる手まりむめをちてこほれてはら／＼と
そらにしられぬあられむめふりさけみればをちこち
の野むめやまむめさきそめしよりはつねゆかしきう
ぐひすのはかせになびくしだれむめゆきかあらぬか
しらむめのはつはなごろもやへむめやたが袖ふれし
にほひむめはるやむかしのおもはくふかきたにがは
梅よさりとては心づくしのぶんごむめアイノテこがれ
／＼てゆく舟のとまりさだめぬしまむめやあまのか
るもにすむむしのわれからむめのいろなつかしくお
もひつゝけてかくたまづさのたよりもとめてやりむ
めやあいをへたつるかきほむめアイノテながめえなら
ぬ庭むめのはなのおもかげかすみのまよりほのかに
みゆるあさ日むめいろをもかはもしる人はならばよ
しやとがめんえだはをるとも

(四十五)小笹

しなへやしなへをざゝもかせにそなたしのべは人
がしるあゝよそにはとがもないものを見しよりもあ
こがるゝをよばぬこひにいとゝおもひはいやまし
てアイノテこぼるゝなみだのあけくれはかはくまもな
き／＼わがたもとアイノテふみたまづさのかずをつく

せとつれなききみにみせたきものはかせになびける
しほやのけふりをぎはぎすゝきまだもごさるよえい
をみなへしひくになびかぬくききもないにみせたや
にはのやなぎのいとやなぎのいとのえい風になび
くをのかなはぬうき世くもにかけはしをよばぬこひ
におもひみだれてえいなにしよぞのとかくうき世は
きまゝがよいぞいのもちろんさうなそりやさうさ

(四十六)さらし

まきのしまにはさらすあさぬのしづがしはぎはうち
川の名かゆきかとしろたへにいざたちいでゝぬの
さらそアイノテかさゝぎのわたせるはしのしもよりも
さらせる布にしろみありそろアイノテナうゝやまか
見え候あさ日やまにかすみたなひくけしきはたとへ
するがふじはものかはふじはものかはアイノテこじ
まがさきによるなみにゝ月のひかりをうつさばや
ゝアイノテ見えわたるゝふしみたけだによどとば
もいづれおとらぬめい所かなゝアイノテたつなみが
ゝせゝのあじろぎさへられてなかるゝ水をせきと
むるゝアイノテところからとてゝぬのを手ごとに
まきの里人うちつれてもどらうやれしづがやれ

(四十七)かぞへ歌

ひとつ人のまよふこひといふ字はむくつけたにも大
くや人はいとまなきこひぢさくらかざしてこの下か
けのつゆにぬれにぞぬれしわがさよころもふたつふ
たばのまつちやままつのあらしにそのよのゆめをさ
まさせわかれちのうきやつらさを三つみよしのへご
ざれいつもながらのやまざくらのんやほアイノテ四つ
世の中の人のこゝろはしなゝゝにわかてど五つゝ
はいろといふじにひかれてはきゆる命はもちろんさ
六つむかしのそでかほるはなたちばなのゆふぐれに
やまほとゝぎすなきつれふるはなふるはずぎにしさ
いこのは人なつかしやゆかしやアイノテ七つなまなか
なれてくやしやなれまいものをあへばわかれのとり
がなく夜はしのゝめか八つやまぶしすがたにさまを
かへときんすゝかけしやくちやうをこしにさいてき
やうらくちうのはなぎかりアイノテひとへふたへや三
へ八へ九つこひにきましよかをばらしづはらやせの
さとしばめさぬかつゆふみわけてとをでとうからち
らめくほしのかすゝあかつきのめうじやうがにし
へちろりひがしへちろりゝゝとするときはあふ

ぎおつとりかたなさいてたちのつかにてをうちかけ
ていのよなせもどろりよといふてはたもとにとりつ
いたいとしけりやこそしとゝうてにくかうたりよか
手がそれて

(四十八)あきくさ

あきはつねさへものさびしきにおもひにつれてみだ
るゝ心つゆもなみだもあらそひかねてこひのみちの
べふみわけがたきくさのいろにもそむ身はつらさァ
イノテ ちらとみそめしゑいさんゝをみなへしゆへ
つたなきこゝろかのんさてまことにはやおもひぐさ
身はあさがほのあさまじながらせめてなびかんこと
もやありともみぢかさねのそのうすやうにかいてや
をくらん文見草人めしのぶのわがなみだにはかはく
まもなきをばななかそでもひかばなびきやれさりとて
はくすのうらみのかすつもりきてはいつかはきみを
またみやぎ野のはぎのしたばのつゆにしつほとぬれ
てなにともなうをぎのふくかせのたよりをもきくや
とまちしこひ心みだれみだるゝなにはのあしのちぎ
りはつらいなみのよるゝさんさ身をつくしおもふ
わくださうな

(四十九)こひぐさ

おもひそめたよこきむらさきのいろにいでじとつゝ
むにあまるそでになみだはのんさてまことにこぼれ
ぞかゝるれんぼれんれつれァイノテしらぬむかしはよ
そなるものをいまはみにしるあひべつりくのうさを
おもへばのんさてまことになさけもつらやれんば
れんれつれァイノテめせゝくさばななゝゝぞつま
まつ夕がほしらきくのはなさきそめてびしん草にこ
ひぐさすんどあきかせのたゝぬまになびかさんせを
みなへしおさしあひわごさんせぬかいのちよつとか
るかや

(五十)しのゝめ

しのゝめゝいつよがあけたあさゐひさしきあだま
くらをろしこめたるひと見どのなかのおましにはし
ゐして文のこしばかりかげくらくそともにしげきいち
人とともにうりくるけしのはな江戸てうはやき身ご
しらゑ地しろにあみのつれもよふめにかゝれとのふ
うぞくやふてうことばのあげや入ふち屋三うらのふ
たむれにのりものしのぶうちゆかしとへどこたへぬ
くちなしのこはたれやらんはなごろもしんてうをそ

きそのなかにこまもすさめずかる人もたへてとしふ
るゆかまさへをひさきゆかしにゐ太夫そのほかみや
びよしある女郎のしぐれあだしのなよせぐさ人のむ
すびしすてことばかきもらさなんもしほぐさいつの
比よりみぎてはうすくひだつがちなるいろ人のたの
しみきはめあづまやにひやうごつのくにはなまつや
ゆふべといろくまへわたりきをとりのぼすアイノテ
二上リす
がかきやすみなすとのひとかまへしかのなげ入ち
がひだななしちのすいり玉くしげふたりねよとのや
よや文まくらみなくれなゐのみつぶとんくもをたゝ
んでうづたかくいちろにたざるまつアイノテ
本テウシこと
にいろある三味せんや人たちかへるとこのうちをり
しくごごのかたゝにかりのこせしみじか夜のと
てもねられぬうきまくらかやのひとへのうす月もる
ゝゝもれてさびしやすからにともになるゝほ
とゝきす

松の葉第二卷終

松の葉第三卷

端歌目録

一	飛鳥川	二	たかせ船
三	有あけ	四	蘆わけ舟
五	みやまぢ	六	玉の緒
七	加賀ふし	八	わきてふし
九	いかほふし	十	ながさきふし
十一	のんやほふし	十二	くゐな
十三	はな笠	十四	船はし
十五	朝妻ふね	十六	うかれめ
十七	しがらみ	十八	ふしから
十九	しほや	二十	梅がえ
廿一	戀かせ	廿二	まがき
廿三	たつ田	廿四	くしだ
廿五	もろこし	廿六	有馬
廿七	白ざく	廿八	よさく
廿九	捨小ぶね	三十	なみだ川
卅一	しがまつち	卅二	手まり

卅三	いつの夕	卅四	さかづき
卅五	くどき		
一	二あかり		
二	和歌の浦	二	さつまふし
三	ひよどり	四	ちんくふし
五	さいこのふし	六	さんさぶし
七	かごしま	八	みどり
九	白ゆき	十	むらさき
十一	みだれがみ	十二	吾妻おどり
十三	野中	十四	こまち
十五	うたゝね	十六	いしきり
一	三さがり		
二	こんくはい	二	かづま
三	門はしら	四	いけだ
一	さはぎ		
二	一夜かゝみ	二	三谷かへり
三	ふなうた	四	はつね
五	がき舞	六	あみすき
七	ぬりがさ	八	さいもん
九	しつねん	十	あく所八景

十一 つしまゝつり
十三 唐人歌
十五 やりをどり
十七 ころく

十二 せうし
十四 永代はし
十六 馬かた
十八 高尾

(二) 飛鳥川

戀といふじはむくつくだにもあふみや人はいとまな
きこひちさくらかざして此したかげのつゆにぬれに
ぞぬれしわがさよごろも夕べくはあすか川のふち
せそこはあさいぞこひむらさきよよしやこがるゝさ
はべのはなにけふりくらべんこよいくほたるかほ
りをしたふしらんのもとにきつにはめなでそのくだ
かげのみだるゝころははやきぬくのわかれになれ
ばはなもゆきもみぢのあはれふゆ野のちぎりまで
かはらぬいろをへ

おなしく

かせもなつかし夕べのそらに袖のかほりもまださめ
やらぬふかきえにしのかた様なれどあだし此身もま
まにはならぬ月日ほどへてむかしのわけをとふはう
れしやさりととは命いつそ露ともきへなばきえよこゝ
ろまでくるなみだの川にながれはかなきうきよのつ
とめそむもそまぬもまくらのゆめよさめてあしたの
つらさをしらばたとひたんばのしないたおにもさふ
したことのよるせはなくとせめてたよりをまつのは
のかはらぬいろをへ

(二) たかせふね

ゆかりもとめてわかむらさきのくさのまがきをいましてみればはなかもみちかそのおもかげの見へつかくれつこのまの月のうはきならねど身はたかせふねこがれ／＼てやくやもしほの夕けふり此身をこがすへ

おなしく

きみが心をひかるゝほどはひき見んとはおもへどもさだめの世やあすか川のふちせふかきおもひをいろの一はにのせてうきぬしづみぬおもはくむまはあれどもきみをおもへばかち地さはいひながらこよひおもにをなにゝのせてやろうぞこゝをこはたのさとなしてほしやのこゝろ身にもあまつた

(三) 有あけ

世の中／＼のうれしきうちにまさりてつらきあふよのとこよわれもいもせはありあけつづるとりのなくねにきぬ／＼の袖のしらたまなにそとはばつゆとこたへてきえぬいのちをさおもひにしづむ

(四) 蘆わけ舟

なにはのうらによしやおもはじあしわけふねのこが

れ／＼てあふ夜もつらやせめてわかれのかねばかりかやいまだなごりもつきせぬよはにとりもつらいはつげわたるういこの／＼うきわかれのちのあしたのふみまくらしばしなつたへんをぎのはのそよとばかりのたよりもなひかうらみなげゝどつれなやよそにうつるいろかとみぢんもしらでたゝかはらじといのるこゝろはいつまでぐさのいつもくるしき身をうきとこに夜日とねもせでまよふたへ

(五) みやまち

なるゝみやまちなもし野川ふかくたえせぬおもひのうさをいはでかさぬるやへやまおきのなつは卵のはなさきそめしよりのきのたちばなかはるもゆかしはつねたかまのやまほとゝぎすうきなたかはしこひわたる身はそのあづまぢのひたちおびむすぶぢぎりのえにしはながとあきはきてしもみやぎ野のかせをつるにもろきはなぎりのこひのみちしばなをわけがたきつゆの夕ざりたちまよひつゝふゆ野につよかしは木もひとりこがるゝ色をへ

(六) たまの緒

なんばおしやつてもあはぬつらさを見てたもれほん

にそふ身ならばかうしたつとめはせまひにもはやた
まの緒たゆるばかりのうきまくらいやまちひさし一
夜さへよそにいられぬわがおもひ

おなしく

なんぼおしやつてもわけのわるひがきのどくほんに
そふ身ならばかうしたことをしてくれそもはやつと
めもまゝなうへからおなしだひいやましてしばしわが
こゝろおもひまち／＼まちあかす

(七) かゝふし

つとめものうきひとすぢならばとくもきえなん露の
身のひかげしのぶのよる／＼人にあふをつとめのい
のちかな

おなしく

いつしいづれの日にたちそめていなさはそえの身を
づくしくちもはてなばうきなもともにおなじはまな
のはしばしら

おなしく

よしやわざくれ身はあさがほのひかげまつまのはな
のいろうらみられしもうらみし人もともにきえゆく
野べのつゆ

おなしく

あだしこの身をけふりとなさばとてもあさぢのさと
ちかくさよのころもにかはとゞまりてせめて見ぬよ
のかたみとも

おなしく

わきてつれなき人ゆへわれはくらすひかげのあさが
ほかつゆはたもとにをきあまれどもかいたなみだの
身ぞつらき

おなしく

ひとりといめてうらみしかひももとの水なきすみだ
川さてもながれに身はくれ／＼ていまははもくすの
すてをぶね

(八) わきてふし

はなとゆきとはどれがよしのゝながめやらとふやら
こふやらわきていろわかちなくとれがよし野のなが
めやらはなやらゆきやらわきて

おなしく

をぎとはぎとはとれが露やらあらしやらどふやらこ
ふやらわきてまつ夜のそではどれがつゆやらなみだ
やらどふやらかふやらわきて

おなしく

すまとあかしはどれが月やらめいしよやらどふやらかふやらわきていろわちなくどれが月やらめいしよやらどふやらかふやらわきて

おなしく

あだしなさけはいづれはかなきおもひ川どふやらかふやらわきてあふせもあしでいづれはかなきおもひ川どふやらかふやらわきて

おなしく

うらみぬる夜はゆめもつきなくまたうらみどふやらかふやらあけて見しおもかげのいづれゆめやらうつやらどふやらかふやらあけて

(九)いかほふし

はなになりたやほんほとんどこつこいしよよし／＼／＼よしのはなにいよしもほとんどこへさいてみだれてほんほとんどこつこいしよつゆ／＼さくらの下つゆおちていよしもほとんどこへ

おなしく

なつはかきねのほんほの／＼あやなしや卵のはなし／＼あけてもいかにとひこぬほと／＼ぎすかたひゆ

ふだつあとしきこむらさめこすゑにひくらしせみのねいづれ夕べはたいならぬ

おなしく

しのぶなみだのもれてはあやにくやいつ／＼／＼いつしかうきなたつたの夕しぐれぬれてをしかのつまあはれやつまこひてよる／＼さりとほよすからひとりいよしもなきあかす

おなしく

月になれ／＼はかなしいくたびかたもとのつゆ／＼かはかでものやおもふとしばしさへすまのうきねをとへこと／＼へともちどりうら／＼／＼さだめぬなくねあれや夜もすがら

(十)ながさきふし

しんきなしめそもめんぐるまかけてめぐりあふよる／＼はそりやあふ夜る／＼はかけてめぐりあふよるばかりそりやあふ

おなしく

こがれ／＼てもろこしぶねのそでにみなとのよるよるはそりやあふよる／＼はそでにみなとのよるばかりそりやあふ

おなしく

きりのひとはのなをそれよりもろきなみだのつゆ
／＼よそりやあふつゆ／＼よもろきなみだのつゆば
かりそりやあふ

(十二)のんやほふし

ばんにござらばひごなたさいてござれ／＼ばんにや
むめの木のえだおろそのんやほのんやほ／＼ひごた
なたさいてござればんにやむめの木のゑだおろその
んやほ

おなしく

こひはうきもののんやほまつよひきぬ／＼つらやつ
らひあふ夜ながらもわがなみだのんやほのんやほや
ほまつよいきぬ／＼つらひ／＼あふ夜ながらもわが
なみだのんやほ

おなしく

はるはござらばのんやほみよしのよしのへござれ
／＼いつもなからのやまさくらのんやほのんやほや
ほみよし野よし野へござれ／＼いつもなからのやま
ざくらのんやほ

おなしく

おもひかけてはのんやほくも井のとりの一こゑ／＼
ねやのきやらのかむつごと／＼のんやほのんやほのん
やほ／＼くも井のとり／＼のひとこゑねやのきやらのか
むつごと／＼のんやほ

おなしく

いつのありあけのんやほそでふりわかれしつらさに
／＼もはやあさぢもせにすぎたのんやほのんやほや
ほ／＼そでふりわかれしつらさに／＼もはやあさぢ
もせにすぎたのんやほ

おなしく

こひはあやにくさつき雨ふりくるなみだ／＼／＼せ
めてとへかしほとゝぎすうき身をさみだれ／＼ふり
くるなみだ／＼せめてとへかしほとゝぎすうき身を
おなしく

夕べ／＼はつねさへものわびしきにわびし／＼ちや
のあはれはつまこふしかのねたそかれ／＼ものわび
しきにわびし／＼ちやのあはれはつまこふしかのね
(十二)くゐな

くゐなのとりのよすがらたゝきあけておひてさはや
さみだれあめにいらますあやめのことはいの／＼や

まほとゝぎすまたのしのゝめもないものかなんどのやうにまつよいく

おなしく

おほろの月をたのみによもすがらながめたはやはるかせかほりもてくるのきばのむめはいのくあだなやたゝんかはすたまくらもないものかなんどのやうにうたゝねく

おなしく

あまのかるもにすむむしのわれからとなげいたはやはつしぐれおばなほにいであまりのいろわいのくちりのこせかしつゆのなごりもないものかなんどのやうにあきかせく

おなしく

ねざめならひしまきのやにとほそをおくにさはやこがらしをちばふりしくかれのゝいろはいのくとへかし人のゆきのあしたもないものかなんどのやうにふゆがれく

おなしく

しのびかねたる人めのせきもりをなげいたはやうきなみだそでやくちなんひとりねのゆめはいのまるね

のゆめわいのたえなばたえよとてもあふよのあるものかなんどのやうにたまのをく

ちらし

ひとへかさねのちぎりはうすしちよながかれいとざくらそりやさふさむすふえにしのとざくらそりやさふさ江戸やつさういてきた

(十三)はなかさ

むめのかほりのはながさうれしほんにゆかし月かげのこりてさりととはあけぼのとをやまけしきのゆきもすこしはしろたへにかすみのまよりこゝはうぐひす一こゑを

おなしく

あづまからよりはないちうれし神ぞうれしつれしやみあいうたさりととは庄五郎も一つたのむぞはんだとさふしじやうるりをまんくだんもきかまほしきてもそろふたつれうた

おなしく

けさのわかれのとりかねつらやほんにつらやみだるるくさりとほみだるゝねんくみだるゝみだれみだるゝくろかみのゆひかひなしやまたのあふせをい

つの夜

おなしく

あきのくもまの月かげゆかし神ぞゆかしまがきのむ
しのねまくらにあらそふあかつきしのゝめはてはあ
けゆくねやのひまあかでもわかるゝさすがかたみの
おもはゆ

(十四) ふなはし

さのゝいよこの舟ばしさのゝふなばしかけてなをお
もひいよこのわたるをしらせたや

おなしく

はるのいらかのなごりもふぢのたそかれものわびし
なつは卯のはなさみだれせめてとへかしほとゝぎす
おなしく

志賀のからさきつれなくよそにのみきくさよしぐれ
おもひかけてはときはのまつもゆるさぬつたもみぢ
おなしく

あきのいろよきにしきをあきのにしきをたがおりて
そめもいろよくそめたよそめもそめたよさよしぐれ
おなしく

しぐれくゝにぬれくゝてぬれてつまこふしかのこゑ

いろのみちとてやさしやしかもうきななたつたやま

おなしく

よしやうきよのなかにも人のうへにもかけてだにな
にかいよしも心のまゝのまゝのつぎはしまゝならぬ

おなしく

人のいよこのうへにもかけてみよ人のうへにもか
てみよまゝのいよこのつぎはしまゝのつぎはしまゝ
ならぬ

(十五) あさづまふね

あだしあだなみよせてはかへるなみあさづまふねの
あさましやあゝまたのひはたれにちぎりをかはして
いろをかはしていろをまくらはづかしいつはりがち
なるわがとこのやまよしそれとてもよの中

おなしく

うきねつらさのまつちのやまのかせゆふこえくれて
さゝをふねあゝさだめなやとこのうらなみともなき
千どりくゝたえぬおもひに月目ををくるもあだ人心
よしあふまてのうつりが

おなしく

あだしあだなる身はうきまくらならはぬほどのとこ

のつゆあゝいくたびかそでにあまれるなみだのいろ
をあゝたもとのいろをみねのもみちはひとりこがれ
てまぐらのなみだあはれと人のとへかし

おなしく

うきをかたらんともさへなくてなぐさめかねつわが
心あゝうつゝなやすぎしつたへのその水ぐきのくろ
みしあとを見るにつらさのいやますなみだはたれゆ
へぬるゝあはれとそでもとへかし

(十六)うかれめ

はなはよし野よもみちはたかをまつはからさきかす
みはとやまいつもときはのふりはさんさしほらしや
とにかくかもはるゝ

おなしく

やちよふるともかはらぬいろよまつにふちえのその
おもかげを見るにひとしほにしをさんしうしほらし
やとにかくおもはるゝ

(十七)しからみ

たえてあはずとふみをばかよへふみはいもせのゝ
なかなとなるはしとなるよいゝぬるゝわがたもと

おなしく

あひはちかふてあはせはせいでちかのしほかまゝ
身をこがすゝよいゝぬるゝわがたもと

おなしく

かりのねまきにたきものすればよしやわざくれゝ
いろとなるこひとなるきぬゝぬるゝわがたもと

おなしく

たえぬおもひと人にはつげよ今はなにはのゝ身を
つくし身をつくすよいゝぬるゝわがたもと

おなしく

くちてかいなしなにのみたちてうき身なからのはし
ばしらゝよいゝぬるゝわがたもと

(十八)ふしから

あれてやさしきふしみのさとのゆきにゆきふるくれ
たけのおれさふなゆきにゝ雪ふるくれただけのおれ
さふな

おなしく

からばとくかれよどのゝまこもかれば月かけかした
にすむそこにすむかればゝ月かけかしたにすむそ
こにすむ

(十九)しほや

なかがはにほんにもらさぬこゝろのそこをくめのいははしたえても人にこひやわたらんおもひをかけていつをかぎりに身をなげん

おなしく

よしやたのまじあだ人心ひとへばかりかやへやまぶきのたんとなじみのちかひもあるにうつりやすきのはないろごろもとへどこたへぬくちなしわらやわれはこはたのかちはだし

おなしく

草のなかにもものおもひぐさたれにうらみはまくづかはらやとんとこの身をすてくさにしてくちもはてなばそれかれそれよえんはあさがほあさくとまゝよせめてあふせのふかみぐさ

(廿五)もろこし

はなにたはむれまたほとゝぎす月にめでぬるときしもあるにとしのなぐりとふるしらゆきといつれあはれさりととはへうつるもうきよへながきためしの松さへもくつとのさてはちとせもひとよのゆめかへはかなの此身へ

おなしく

ういぞつらひぞこのさとなれてそむもそまぬもあはねばならぬいつかおもひのやへぎりはれてせめてゆめになりともへわけあるかたへまゝにならぬはたがみにもありとのそれをたよりにうき身をとくるへこのとし月をへ

(廿六)ありま

つゆになりたやたもとのつゆにきえぬうき身のかこちぐさなにをたねとかわがおもひ

おなしく

ほしになりたやなゝよのほしにはしはもみちのいろふかくかけてねがひのいとのかん

(廿七)しらきく

なにはづのみじかひあしのふしのまをぬらさるゝ身のくちはてすさてもうつゝにうつろひくれてゆめもみようや見まいやらなかばさいたるしらぎくのころになれゝをばなもみだれけふはふりゆくしぐれのくもよ神々そ八まんわすられぬそではわかれのつゆなみだ

(廿八)よさく

ひとりこがるゝこゝろのいろゝがよひいではしの

ぶのやまやまぶきがよひつゆのたまがき卵のはなが
さねはれぬおもひをさみだれにさつとかほれあやあ
やめさりとばかりねのこのゆめみじかよのなつの
夜にしのもめことゝふやまほとゝぎすうきなになち
しめてしらせんこのつらさをしもかはかぬわか
そでにさつとふれむら村雨

(廿九)すておふね

まがきながらのごげんはつらや人めしのべはおもは
くばかり袖はなみだのふちせとなりてうきはながれ
の身はすてをぶねせめてしばしはとまれかし

おなしく

あふはわかれとかねてはしれとけさのきぬくいつ
よりつらやそではちしほのなみだとなりてうらみこ
がるゝ身はこひごろもせめてひと夜はきてもみよ

(三十)なみだ川

なみだならではうきをばとはぬかはくまもなきわが
そでのいろ

おなしく

はなはおきたしこずるはたかしこゝろつくしの身は
いかにせん

おなしく

たつた川にはもみちをながすわれはきみゆへうきな
をながすきみゆへながす

おなしく

うきなたつたのやまみちゆけばかほにもみちかいよ
ちりかゝるもみちがちりかゝる

(卅一)しがまつち

うらみつわびつおもひをしがのこのさびしさよつ
れなき人にみせたやにはのやなきのいとかせにな
びきしを

ちらし

さてもやさしのほたるのむしやしのおなはてのやみ
ぢをてらす人のこゝろもなさけあれ

(卅二)てまり

つるゝといづる月をまつのだでかくしたいざさ
らばきりてもすちよやれまつのだのしたえだ

ちらし

とんとつきあげきりゝとまはりゝ見てし人こそゆ
かしけれ

(卅三)いつの夕べ

いつの夕べからやらつかの人の人になづんでひたすらにふかきえにしもかはるまぐらのをきふしこのさとのならひかやいたづら草のあきかせさそふいろとてうつろふ人の心やといふたらうさをわすりようかえいはいな／＼といふてもしやうはなをろうかあとをいふほときのどく

(卅四)さかつき

たまのさかつきそこなきとてもとてもちきらは二世とむすばん／＼ひたちおびさてよい中

おなしく

たとへごげんはまかせぬとてもありしなじみの／＼すゑはたかひのあふせ川さてよい中

おなしく

のちのあしたにかよはすふみのよべのたまくらけさはなか／＼けさはなか／＼みだれがみゆふかひも

(卅五)くどき

二丁はげしきなつの夕べにつくふねも人めづ／＼みの神々ぞほたるもわがおもひこひとうきみをおきのかもめにかちてきのどくうそもすてられず

おなしく

夕べさびしきあきもなかばのかよひちこひにくちなん袖のみなどのすてをぶね月はもとよりすみだ川にながしていざこと／＼はんみやこどり

おなしく

見しやたまだれうちぞゆかしきおもひづまひくなからねこつなにかかせておひかせくゆるこゝろをたれにかこちてゆふぐれあだにはきかぬうきなを

おなしく

人のつらさにこりぬ心のいつまでうきはたまのをたえぬばかりにくれたけいくよふしみのゆめもながれてなみだ川しがらみかけてせかふよ

おなしく

こひのはつ風身にしむほどぞなつかし月は文月たがかよはしのふみ月なゝのゆふべをほしもいくせのおもひ川かさゝぎはしをかけふよ

おなしく

袖にふりくるしぐれたつたのおもひ川ぬれてもみちのいろもながれのはてしなやなにをうらみにたえてちぎりのうすごほり中々こひはわたらし

おなしく

かはす手まゝらたへぬあふ夜の中がはさはりうきは
しかゝるつらさにたれゆへよしやながれにくちはは
つとも一すぢをあだにはせまじわがこゝろ

おなしく

ねやにとゞまりすぎしその夜のむつごとおもひみだ
れてひとりぬるみのうさつらさつらきこよひはゆめ
もなくくなきあかすそいねのまくらなつかし

おなしく

なんぼをしみしきのふのはなもいたつらにけふはい
つしかかはるならひのこひごろもはやかきねもゆ
きかとみゆる卵のはなをなつかしきほとゝぎす

二上り

(一) わかのうら

わかのうらにはめいしよがござる一にごんげん二に
たまつしま三にしほが四にいもせやまかたをなみ
こそめいしよなれしやうがへいよわけよふいふたな
のほんくのほんへかふしたわけよかたをなみこそ
めいしよなれ

おなしく

人はつねとやうつろいやすきつゆのかごとをまこと

と思ひたづねいらばや心のおくのみえぬいろこそゆ
かしけれきのどくいよわけよふいふたな見えぬいろ
こそゆかしけれ

おなしく

よし野川にはさくらをながすたつた川にはもみぢを
ながすはしのうへより文とりおとし水にふたりのな
をながすしやうがへいよわけよふいふたなのほんほ
んよほひほかふしたことのみづにふたりのなをなが
すしやうがへ

(二) さつまふし

おやはたこくに子はしまばらにさくらばなかやちり
くに

おなしく

そらになくねはみなうそどりよねやのうちこそほと
とぎす

おなしく

お江どで、からとつかはとまりこまをはやめてふじ
さはへ

おなしく

みのにつまもちをはりにすめば雨はふらねどみのこ

さどゝなさどゝゑちごはさいこのさいやすじむかい
それはへはしをなはしをかきやれさいこのさゝ
いよふなはしをそれはへ

おなしく

はるはよし野にさいたとさゝはつはなざくらそれ
はへ

おなしく

なつはくも井にいたとさゝやまほとゝぎすそれ
はへ

おなしく

あきはたかをにそめたとさそむるとなをくつゆしく
れそれはへ

おなしく

ふゆはしも夜のさへたとささゆるとさなくともちど
りそれはへ

(六)さんさぶし

よひは月にもまぎれてすむがふくるかねにはさんさ
そでしほるよしなのおもひ

(七)かこしま

こゝにはやらぬかこしまにはやるになさ三十ふりそ

で四十しまだなはいさゝ

おなしく

しがのさゝなみたつともまゝよかすみかくれのふね
ゆかし

おなしく

文はあまたにかくともまゝよおもひそめしはたいひ
とり

(八)みどり

ながれいみじきよし野のやまやはなのやへぐもたな
びきつれてみねのしらゆきふもとのふゆきのべのみ
どりというこきませてもにちりしくうすはなむし
ろなれしその夜のたもとにはふはるのうつりがよ
そにのみもらすなえいこのさんさ袖のうつりがよそ
にのみもらすな

(九)しらゆき

うそのかたまりまことのなさけこのまんなかにかき
くれてふるしらゆきのひと心ゝつもるおもひとつ
めたひとわきていはれぬよの中

(十)むらさめ

むらさめゝはれまをしのぐ人のつゝみのくさばの

ほたるむねにたく火のたいえてもゆるわれはきえな
ん／＼われは／＼きえなんいつかへ

おなしく

ひとりね／＼夜さむのころもまことうらなき心の月
もくもれ／＼とふりくるなみだわれはくちなん／＼
そではたもとくちなんうき名も

(十一) みだれがみ

きみとわれとは七つ八つ十でとのごをみそめてそめ
て人こそしらねアイノテふりわけがみをそなたならで
はたれにか見せんこのくろかみをアイノテ今はあだな
るみだれがみみだれごゝろやあ／＼アイノテあいた
みたさにきたぞかしアイノテつらや／＼とアイノテおも
ひはすれどまたすてられぬにくさあまりていとしさ
まさるさてもいのちはつれなひものよきみつらやい
きておもひはあいべつりくのしんでまだきてその
／＼／＼アイノテそのさきの世もおもひしらせんおも
ひしれアイノテ袖のみなとのこひのふちわたりくらべ
んなみだ川アイノテいろにしづみてしのともひきはか
へさしはやおおね名はながさじ

(十二) りづまをどり

あさの六つからずんどでかけたすんすとふみたす八
もんじびんつけとろりと人がらでいせてうふなてう
のだてすがたさかやのむすめみせのひまよりちらと
みたみそめたばんにあはふぞやかたろぞやさしあし
そろ／＼く／＼をちつくら／＼く／＼ちつくらばつた
りくら／＼がりちつくらばつたりくら／＼がりくら
／＼がりのくらくともあけておまちやれをそくと
／＼月のでるまで

おなしく

よい／＼よな／＼かよふつまもつおなはかみのゆい
どきかねつけごろは月は三か月いづるころなふやれ
／＼さてもなたれをまつやらたそがれどきにかどに
／＼／＼たつとなふにしき木かいのよるたちやる

(十三) 野中

あのや野なかにをしふせられてうしろいばらでさ
れはすれどまへはけつかうな／＼お正月じや／＼ま
へはけつかうなおけつかうなお正月じや

(十四) こまち

おもひふかくさいろにはたれもまよふ道しばつゆふ
みわけても、夜かよへといつはるふみをまこと／＼お

もひかのせうしやうは月の夜もゆくやみの夜もかよふおもひあまりてなみたにぬるゝあめのよも風の夜もはらへどゝそでにちりくるはゆきかみぞれかこのはかつゆかのきのたまみづとくゝとゆきてはかへりかへりてはまたせんかたなみのよるのみちこゝをかよひてきにけらしくるまのしゝにかよはんとこにたゝすみかしこにたてばさてもかなはぬうきよかな

(十五)うたゝね

こゝろのとへばかくれなひこひぢしる人なみのよるさへゆめさへうつゝさへよしなのねこの身をそぼぬれてなれよにようとはまたうそばかりそれはじやうならうき世にかゝるつゆのあだものしばしもへ

(十六)いしきり

おもひそめてはいとまなきつらさなみだしほれてつまこふちどりどこのうらかけてなきあかす

おなしく

きみとふたりはならびのをかのそめてこまつのよいかなれどうらみかねてはふるしぐれ

三下り

(一)こんくわい

いたはしやなはゝうへははなのすがたを引かへてしほるゝつゆのとのこのうちちゑのかゝみもかきくもるアイノテほうしにま見えたまひつゝはゝをまねけはあとみかへりてさらばといはぬアイノテばかりにてなくよりほかのことはなしアイノテのこえやまこえさとみねこえてくるはたれゆへそさまゆへアイノテきみはかへるかうらめしやアイノテいのうやれアイノテわがすむもりにかへらんいさみにいさみてかへらんわがおもふゝ心のうちはしらきくいはがくれゝしのゝほそみちかきわけゆけばむしのこゑゝおもしろやアイノテふりそむるやれふりそむるゝけさだにもゝアイノテところはあともなかりけりアイノテにしはたのあせあぶないさアイノテたにみねしどろにこえゆくあのやまこえて此やまこえてこがれこがるゝうき身かな

(二)かづま

うらみは人をも世をもゝおもひおもはじたい身ひとつのむくひのつみやかすゝのうきなにたちしさんげのありさまいはもる水のおもひとなりなをあたし野のつゆなみだつゝめどあまる世のならひアイノテ

きのふのはなけふのゆめアイノテおとろかぬこそはかなけれアイノテ身のうきにアイノテ人のつらさのなをそひてアイノテわすれもやらぬわがをもひアイノテせめてしばしはアイノテとまれかしあづさのゆみにたつそらのこれまであらはれたるぞやあゝなつかしやいとてもしのびぐるまのわがすがたアイノテ我すがたアイノテものにくるひしありさまをあはれとも又はかなけれアイノテ世の中はひろいようでせばいよのアイノテにあひのつまゝいといたいこのねどんゝもよしどんゝゝゝアイノテどんゝゝゝアイノテつくゝゝてんつくゝゝどんがらがたいこのねもよしやつとしよアイノテにあひのつまつまいといたいこのねどんゝもよしどんゝゝゝアイノテどんゝゝゝアイノテつくつくつくてんつくゝゝどんがらがたいこのねもよしやつとしよものにくるひしわがすがた

(三) 門はしら

ひるはたんこゝなわけのわをさしみやるさのほんへよさりやせんまじよのこししみやるしやうがへ

おなしく

たんだふれゝゝ六しやくそでをあのほんへてうせん

じもんちばしらをふりかくすしやうがへ

(四) いけだ

いけだいたみの六しやくたちはひるはなはおびなはたすき夜はりんすの八へまはり

さはぎ

(一) 一夜かゝみ

ふけゆくそらの犬のこゑあげやゝもうちすみてうらみらうさいわかれざけいびきみだれのねやもありしどけなりふりのひとへおびもすそこだかくはざしろうをくりといくるなかの丁おのがさまゝまつち山のまつのあらしはその夜のゆめをさませねぬばかゝりあゝばかりへあけぬさきにとかづらきのあゝふつたるゆきかなゆきをまらめてひとつかみなげつけたまへばみさほのまへたれじやいのこんなわるひことはせぬものよかねをあつめてひとつかみなげつけたまへばみそかのまへたれじやいのこんなげつかうなことするものよなつとうあつめてひとつかみなげつけたまへばつぼねのまへたれじやいのおかさんせこんなふどうけなことはせぬものよげにささまのたはむれにつれてゝゝくるはののんやはゝはん

やしたふてんとささあしたふてんとさかつてかぶと
 のをはじめのきんちやくきんくのはアイノテたとい此
 身はほんでんこくになるともとたとひこのみはほんで
 んこくになるとももの日くはむにせまいくさら
 ばへおつとせたのむによならぬにさうそつきめけい
 せいめひんぼめ。へへへへかへるすがたはやぼ人
 のかさもあしだもふみちらかいてゆきのその夜はは
 かくしやうくたどりゆくほどにたうてつのかね
 のこゑせんじゆだらにをよむときははやあけがたに
 なりなんとちやに心をくだけでもゆきてかへりてぬ
 める身か

(二)さんやかへり

世にこくにあはれらしきはさんちやかへりのふと吉
 三よいのしゆえんにおもはれてあなたのかたへさら
 ばへこなたのかたへのとさばはんやむまにもふねに
 もえのらひであみがさをさしかざしどてのくぼみで
 けつまづいてひざかしらをすりむいたなんとしたあ
 たゝのたアイノテちんば引くきんりうざんのよねま
 んちうはおりにないかせによくないくのないとか
 くこひには身かふとる

世にこくにわびたちやのゆはしゆしやかかよひのう
 かれ人よひのさわぎにこゑかれてあなたのかたでな
 けぶしこなたのかたでそもべんけい二まいかたにも
 えのらいてやきいんあみがさうちかざしたんばくち
 にてけつまづいてすそつぎまでふんざいたなんとし
 たきこんかないぼろをさけくまつばらどをりのか
 ばやきはめすまいかけらい世にとくないくのない
 とかくはねば身がほそる

(三)ふなうた

あさのおまへのまんほがせらをこ女郎こひしとなう
 たふてなのりておこぎやるこしやくしこんむすめこ
 さいかこせんかこかいこぐるまつのこよねかく
 つがはがくくのんえいよほろではやらいでうた
 でやるきみをおもはでかよはりよかくどこで見た
 そつといたしたとよえいくきみははるさくむめの
 はなあゝじやとよえいかほるゆかしきとりなりはあ
 りやりやこりやりやえいくさつさえいさつさまん
 ざいじやくせんしうらくくじやちよぎやくち
 よぎりやちりくやちりくくともなきさにとも

かねのをかけたぐはんなりやすかねばならぬアイノテ
このてうは子どもでかしましかみの丁ですきましよ
かみの丁しもの丁みせのはなにもひつかけておいて
からこどもしゆゝもちつとそちらへよらんせのお
ゝもちつとそちらへよらんせのわくるはゝゝわくる
ゝゝゝゝゝゝすきわくるあみを五しきにすきわくる
まんゝ又兵衛があみすきまんゝ又兵衛はあみす
き又兵衛がすいたかねのをとかく又兵衛どのはしや
ぐはんこせねがひ

(七)ぬりかさ

おかたぬりがさ七ねんはやいすけがさにかへておめ
しやれさあふみのかさはいよこのさいたさなりはよ
ふてびやくらいきよふてさ

(八)さいもん

もとよりまことのぎやうしやにもあらざればぶした
るさいもんしらばこそとでほうだいにぞをもゝは
らいきよめたてまつるアイノテみもすそ川のかげきよ
くげくうは四十まつしやないくうが八十まつしやあ
はせてやしやくのなぎたおふひざるまにかいかふ
でそこさんこゝさんアイノテかみがたのやしろにはい

なりぎおんかもかすがまつのをのだいみやうじんき
たのはてんまん天神なりあのおしやんすことわいの
あのおしやんすことはいのかしまうらにはたからぶ
ねがつくとのせんぼんふなをかしゆしやかいろざと
やあそののアイノテとはゝとへかしいよいよにまつや
まさぬきにこんびらおなじくしどじのくはんせおん
つの國にいたつてはてんわうじはしやうとくたいし
の御ぐわんしよしほやまつともふたしばいアイノテえ
いゝゝゝことしやとのこのくさかりどしよかまも
よくかれちくさもなひけ心よいぞのかげのこまど
こゝゝゝどつこいゝあね様やゝゝあんすでゝゝ
よござんすやまをとをればやまもゝほしや身をもな
げかけゆすらばおちよあまりつれなのやまもゝや山
につれなの山ぶしやなをやまふかくわけいればかゝ
にしらやましなのなるあさまさらしなはいかいのく
にアイノテつるがこほりやをがさはらさかみのくにゝ
つるがをかかまくらやまをよそにみておきのこじま
にとゝゝなくうきをするがのたごのうらきぬたのを
とのいとたかくうつのやまべをみをがさきいそによ
せくるなみのをとなのつたるちどりのくつのはひゝ

きがちんくくかものあしアイノテかはるまじく
此世はさてをきのちの世もこれくさつてくうい
てきた身はうきしまやとうたふみなたかきこじを三
かはなるかのやつはしやいつのまにをはりのくに
はなるみがたいつまでくにいせのくにすいかみや
川つきよみやあこぎにひくはなみたへにやまだがは
らやうちはしやはしのいよこのしたにははしのした
にはそつこでおだんなほんのせにきせろのがんくび
はとのめおつとよどんたねこのすいでもそつともと
まれかしげにうはきだんなうつぎはよねやまやくし
なんなむきめう長左衛門あぶらうんけんそうへもん
ごきねんとぞうやまつばらどをりへ

(九)しつねん

こんどながさきでかはつたこうたをならふたあとさ
きはおぼへないがなかのしやうがをわすれたさこそ
あるべいとてかひてもらつたがそれさへでぐちをを
としたこれめんぼくなひしゆびもしよわけもこのと
をりこれめんぼくない

(十)あくしよはつけい

なんほせきやるともあはなけりやならぬやだといや

らばでなをしてやりかけよをよばぬこひをせたにか
けはしはつとたつなかうきなうきにさあみひく
くよねたらはやんれかはゆらしやのえいくえい
ざんのおやまはくされだてしやじやないかやれくも
のおびかのこまだらにゆきのふりをでけにくこう
てんのぼつとりものしがのからさきくだいまいり
ひつつれだつてついつれだつてまいるおんなはおと
こほしさにしゆくぐはんかかくかけたへりしやうを
まつぞひとつよつそのきのもでさすぞさかづきや
つこりやくくくのめさやださぞめきさはぎしあり
様を見たかへいさのらくあそびかぶろやりてにたい
こもちせやぎとうにあんまとりさてもあくしよの
せいらいやとばつといふてばんしゆくばんし
ゆあめもふらぬにたかあしだみのきてかさきてぼう
ついてあんどんさげてどんがらりどんどなるは夜
みせしまいのたいこもちどんがらりなものじやあ
れはえんじのばんたらうさつてはわかれのなみだこ
そさつさぬれてしつほとぬれたがしやうくのよる
の雨にもまさるべしあくる日は二日ゑひのつくりや
まいでおやきやうだいのみるときはまことらしげに

とうていのあゝきのつきともいひつんべしいかひた
はけのなれのはてうかりひよんとぞ見えにける

(十一) つしままつり

つしままつりにうかれでゝへひるはくしんがくに
ちやんぎりしつきりふなあそびまづ三ばんさうのす
いのねはおふさへくやおんはくしやんくくとゝ
んくふみわたるはやせやくしやしゆそのつ
ぎはとものしゆかぞへく見たればひとつ人のしの
ぶしんまちのしきぶはきやしやなもののじやとアイノテ
どつとほめたもことはりよふたつふたばのまつはた
のみにわかれはうきふねなあんく三つみかさ
に四つよしだのけんかうがながれとてそのきしまの
みちをたつる女らうはあくしやうらしやのびやくら
いかゆらしの五つアイノテ五ついづはいきぢはりあ
いつよいかよはひか六つむさしはべんけいせい
のつはものじや七つながはしはらんかんにつゝ
たちてくせつのおとこをいまやおそしとまつ
たりけりせきだのをとはざらくざざらひし
やりすはしれもんのんよとさかづき手にも
ちまちかけけるアイノテかへるさはとろ
さになつてもんまでをくれささらばやはつと

いふては八つやへぎりはかみきりすがたにさまをか
へとさんくみちうさかづきをかふろにもたせてさす
いさやばさてんとくてんとくてんとやをつつめ
ばいかけもんのびもの目をいちにらいいいなむきめ
うてうらいくせつもなかれ九つ小大夫はをしつけこ
くらをたてそめていゑもさかいやの女郎やあげやの
だいこくまひと夜みせのたいこではやした十でとふ
からかあすはとふからござんせ三ばんたいこですん
でんどふから文はやりてのかぶろやりくる

(十二) せうし

せうしくがみせうしこざる一にでぬしゆび二にふ
ねのあめどての夕ぐれはしはのけふりあけのからす
のこゑくもきのどく

おなしく

せうしくがみせうしこざる一にかすしゆび二にを
そひしゆびのきの夕ぐれかぎりのたいこならぬもら
いのやくそくもきのどく

(十三) 唐人歌

かんふらんはるたいてんよながさきさくらんじやば
ちりこていみんよでんれきえいきははんはうろう

ふすをれえんらんす

おなしく

みうらの四郎左衛門ながさき平左衛門ひしやの三郎
さへもんあづまやのしん七で江戸てう山がた七郎右
衛門

(十四) 永代はし

ねがひもいとかけまくもつゆをしからぬみちをく
のふかきなさをくみあげてなむやだいのくはん
せをんかれたる木にもはなさかせいまのわかいにう
はきもしやれ風がさそはなるまいにまだ夜はふか
ひにさりとてはきぬぐせつくふなむかひはしをり
くべしさけのかんねこのあらせしぜんまめ月はま
つちのこがくれにつけてたゞよふむらがらすひふみ
よをこめてかへるつらさにまたの御げんとかみかけ
てまだみゆるいまどばししゝむかふしまぎきなごり
ありをしきりなだもつゝがなくいそぐ心はなけれど
もえいたいはしにぞつき給ふ

(十五) やりをとり

ふりやれおふりやれ大とりげのふりそでぎやうれつ
ぼつたてあつまいりちとくちとかちをめされのし

つはとせやりはぢよんくちよろちよんぢよろさま
にもたせろまつかせもたせろまつかせまかせくま
かせておけるのさてくなまかせておけるのさて
くくちよんくくくちよろしゆくちよん
ぢよろさまのやりのてついのふりそでおさきでふれ
さくおさきでくさきくくあたくくあと
さきそろえただうちう國ははなのお江戸にとんく
とつついたはやしな川をうち過てあづまをさしてぞ
くだりける

(十六) むまかた

千兩とるともむまかたいやよくんのしはすもひ
の六月もわつはしめこしにやまびしやくやつとまか
せのよいくくとぶかごとくにはねるがごとくに
ちうをもかけやまをもたにをもこゆるしらつきげち
んどりあしわけえいさらありやとなをきあがつて
はせあがつてぴんとはねられてくくくいんひく
くくくなむまめはあめがすぎたかほてつはらめあ
ゆめやあゆめあゆまにやならぬあつちらなこつちら
なあちりこちりすべりまはつてはいくくはるは
ごさせのおつくらむまよくあけ七才のれんせんあ

しげにさいなみくつはをとつつけてをしかけざんま
いはりゝんしゝ日本一のやぢむまかたらばなをよか
ろかへしてくくつはとつてやぢむまかたらばなを
よかるこまをはやめて

(十七)ころく

ころくぼつくりくついたるたけのつえころくもと
はしやくはちなかはひうやりちやうやりふえころく
すゑじや一ひつけいじやうせしめ候せんどは御じや
うをぐされたれどもついしかへんじもつかまつらひ
でさてくぶさたはおもひまいらせ候へとともかい
てやれふでのじくだけころく

(十八)たかを

たかをうちにゐてはまぐりくやるよのものはやふぐど
きやんやことしのふぐはへそれくくかいて
おみしやれどぶろくくくやしるすいくのすい

松の葉第三卷終

松の葉第四卷

吾妻淨瑠璃目録

一	淺黄かたびら	半太夫ふし
二	狂女	おなしく
三	はうか僧	おなしく
四	しらたま	おなしく
五	通路	おなしく
六	蟬丸	おなしく
七	かみすき	おなしく
八	まつよひ	おなしく
九	船あそび	おなしく
十	まりこ	おなしく
十一	千鳥のまへ	おなしく
十二	元服曾我	おなしく
十三	五人曾我	おなしく
十四	きてう	おなしく
十五	かうきでん	ゑいかんふし
十六	たんせんせいげん	おなしく

十七 くはん活いつきう
十八 ちやのゆ
十九 はなうり
十九 くさ摺引
廿一 道成寺

おなしく
土佐ふし
おなしく
若山五郎兵衛ふし
しきぶふし

(二)あさぎかたびら

ほのく〜と夜あけがらすもいはきけきのどくのや
まこえかねしにじゆんれいがなさけにてをにひとく
ちをまぬかれてまさきよ一人御ともにてたどり〜
とみちしばのすそはつゆやらなみだやらときしもあ
きの夕まぐれちのくさばももみちしてにしきかと
みるたにかげに木こりはあじかにいゑづとのはなは
なに〜ふぢばかまきゝやうかるかやわれもこふか
どたのいなばかりそめて竹のまろやのしづのめが月
にむかひてうつきぬたこゑおかしくもひやうしとる
なにのみきゝしうぐひすのせきこゑすぎてながむれ
ばすねてしげりしアイノテまつやまのかのわけほうし
がそこはかとかきあつめにしつれ〜にりんずはな
をのあしだににつくりしふえにはしかもよるかたな
んすぎにしくろかみのよれるつなには大ぎうもつな
がるゝならひかやたまよのひめをこひそめていつし
ていゐをふりすてゝくさかりわらはの名にたちしい
ろのみかどのみさゝきとやうちこゑゆけばこんだの
さとかいのくろごまたかくともしこなしでのるもの
ゝふやはなのうてなやむらさきのくもとゑいせしふ

ちいでらじゆんれいがなさけをもひとへに大じのち
かひぞとおもへばいとゝそでしほるなをゆくさきは
つのくにやなにはのあしのふしのまもまだはだなれ
ぬつまゆへにしよじせわながらまよひゆくいかにま
さきよあれ〜みちくるしほもこひすかやめなみお
なみのあるものをさだひらかたをあとになしくすは
のりに色どりのねぐらもとむるやさしさよおとこ
やまにはをみなへしをぎのはかせのたよ〜とふら
でなびくはやぼらしやよどやふしみのふなよばひい
としとのなら〜われもねんあないぶかしやまつか
せのふかでしらぶることのねかアイノテかすかに三味
せんきこゆるはこゝはいづくぞときならぬほとゝぎ
すのアイノテこゑをきかまほしやとおゝせけるまさ
きよが申やうさればすぎにしむめさくころみやこづ
かいのをりからに下べのものにきゝけらしふしみの
しゆくのいろさとなりなにしくまちとかやつゐて
おかしきことながらうきがなかにもものとはんアイ
ノテゆびきりアイノテかみきりいれぼくろよねのなら
ひかいやほんにまつにかはらで心せばたれかちぎり
をよそにせんとはとくちずさみいまははやきよみづ

でらにぞつき給ふ

(二)きやう女

いつしかきやう女となるかみのとゞろくとなるそ
らにたちいるくものあともなくうきてたゝふふばか
りにてそこともいさやしらつゆのおきまよふみはあ
さちがはらまだきいろづくわがそでにたれゆへ月は
やどるぞとよそになしてもとへかしなふかき心はあ
さくさのはずゑにむすぶしらたまかひかりさやかに
すみだ川たへすなかるゝみづのあはうたかた人はつ
ゝがなくありやなしやとこゑたてゝとへどこたへぬ
まつちやまゆふこゑくれればゆふさきのいほりかたふ
くいたびさしあれてのゝちはかせあてゝふはくゝふ
はのせきならばとりのそらねやかはるらんゆるさぬ
ものをあふさかのめめのせきのしのぶがをかよしゝ
のばすがいけのおもげにいさぎよきしみづむらゆみ
はり月のいるさのもりやなかのこだちしげりつゝは
なのさかりはみよし野のよし野よりなをうへのやま
のぼればくだるくるまぎかなたこなたとアイノテ見
はたせばくんじゆのきせんとりくゝにだてをしたや
のまちとかやおもしろこそでひきちがへうはぎくゝ

のアイノテいろくゝにもやうもよしやよしなかぞめく
ゆるおもひのかすくゝにいはいでたゝにややまざくら
かすみのまよりほのかにもみてしひとにはあひたら
であさぎちりめんちやどりめんうこんべにかばうす
ねすみいろあるひとに見せばやなをしまのあまのぬ
れごろももしはかくそでひとつまへしゆすやからあ
やしろどんすぬいすりはくのはゝひろをゆかりのい
ろやむらさきのちりめんてぼそむすびさけたれしら
すげのかゝがさをまゆふかくゝときなしつゝなまめ
きあへるおりからにはなのこかげはかりのやどこゝ
ろとむなとふくあらしらんじやのかほりさそひきて
さりしゆふべのころまではいとゝおもひやいづるな
るわれもわすれじもらさじとうつりがふかくかさね
きてつまのゆくゑをしらいとのみだれごゝろやくる
ふらん

(三)はうかぞう

まづせいやうのあしたにはたにのといづるうぐひす
のこぼれるなみだとけそめてゆきげのみづのうたか
たにおひやどりするかはづのこゑきけばこゝろのあ
るものをめに見ぬあきをかせにきくをぎのはそよぐ

ふるさとのたのみにをつるかりなきていなばのくも
のゆふしぐれつまこひかぬるさおしかのたいすむつ
きをやまにみてゆびをわするゝおもひやりうらのみ
などのつりぶねはうをえてうへをすつこれをみか
れをきくときはみねのあらしやたにのこゑゆふべの
けふりあさがすみみなこれさんがいゆいしんのこと
はりなりとおぼしめしこゝろをさとりましませやつ
きのためにはうきくものたねとこゝろやなりぬらん
おなしく

をもしろのはなのみやこやふでにかくともおよばじ
ひがしにはぎをんきよみづをちくるたきのをとのは
あらしにぢしゆのさくらばちり／＼にしははうり
んさがの御てらまはらばまはれみづぐるまのわのり
せんせきのかはなみかはやなぎはみづにもまるゝし
だりやなぎはかせにもまるゝふくらすゝめはたけに
もまるゝみやこのうしはくるまにもまるゝちやうす
はひきぎにもまるゝげにまことわすれたりとよきき
りこはうかにもまるゝこきりこのふたつのたけの
よゝをかさねてうつをさまりたるみよかな

(四)しらたま

さてしらたまとまうせしはいふにやさしきだてすが
たたれに見よとてさくむめのいろのはながさふる
／＼ときつれてつれてゆくときはしる人ぞしるしら
たきのをとほもこゝかなとりでらむれつゝあそぶき
やうわらべあふさきるさにしげりあふえだよりつた
ふはるかさはそらにしられぬゆきなれやともまちが
ほのやまざくらいまこのしやばにじけんしてあふぐ
もをろかきよみづのたえぬながめはおもしろや

(五)かよひち

しのび／＼のかよひちにまつはつれなやきのどくや
たよりもとめてやるふみにならずこんとのかへり
ことうれしさどふもたまられすよひよりねやにひき
こもりまでどくらせどその人のそよとばかりのをと
づれもはや九つのかねがなるさてもおもはぬさはり
ありこよひのあふせはかなはぬなよし／＼かこつも
やぼらしやいつそゆめこそましならめまくらひとつ
をたのしみにこひしゆかしきねやのうち

(六)せみ丸

くらき御めのかなしさはつきひのかけもみづとりの
かもの川ぎしなみこえてついのゆふべをまつぎかや

きえこそかへれあはたぐちいつをたよりにたはつきのわがくろかみのさねかづらあふさかやまにぞつき給ふ

おなしく

第一第二のけんはさくくとしてあきのかせまつをはらつてそゐんをつ第三第四のみやはわれせみ丸がしらべはよつのをりからなりけるしぐれかななるゝみづのあはれさよそのことはりもめに見えず月のいるさはいづくぞとみやこのそらもなつかしさまきのかづらあをかづらくる人ありともしりたまはずまきやかしはををしはけてつえにすがゝのそばづたひたどりかねてぞみへたまふ

(七)かみすき

なにのつとめにひまをなみつけのをくしもさゝでやととりちらしたるたましくけすきかへしぬるかすくにはまのまさごやそらのほしよむともつきぬたはふれにことのはぐさのつゆふかくいつのころよりみちをくのせきのしたひもうちつけにとけてみだれてもとゆいのすゑながかれとむすびてしふたりがなかはひさかたのといろくとなるかみのいかでかわ

けんわくるともあかになれたりつくもがみもつれそめにしそのよはゝもしうつりぎのよそにやとたちゐにつけてうたがひのおもひにむねをこがせしにかはらでかげのつもるにそなさけのいろもますかゝみまつのふたばのちよかけてたのむによ十郎どのあしのまろやにひとりふすともきみかほかかよふこゝろはなきものを見はなちたまふなわがつまとしばゝかみをぞすき給ふ

(八)まつよひ

あすの夜をこよひになして月もがないのちもしらずくもりもやせんめにはさだかにみえねどもかせのをとづれいづちともしらぬつまどをたゝくなるよしやまよひのこゝろからもしやそれかとあやぶみてはしりでゝ見ればむしのなくねもさよふくるほどかはゆらしなれもやものをおもふかといとゝゆかしさまさるらんとすればうらみかくすればまたいとをしさにほだされてかとのきぬをうちかづきゆめこそたのめとうちわびてなれしまくらにとがゆるす

(九)舟あそび

なつはすゝしきあさくさのいろをとゝめし舟あそび

みをすて人のおもひ川ばつとしたのゝわけすがたさ
りとは心うつゝなふなりゆくまゝにつくゝとうき
ことをのみあんすればこひかせしたふしやみのねに
かほりよゝゝいろとかほりのさりとてはきのどくの
やまつもりきてうきないとはじわがおもひいづれわ
けあるつてもがな

(十) まりこ

爰はいづくにとふたればこゝはするがのまりこのし
ゆくよさてはうれしやまりこまできたかうつのやま
べを歌でやるたづなゆりかけむまをひくればこゝは
したつゆくだりざかうつのやまべのゆめうつゝ

(十一) ちどりのまへ

ふじはいそちどりのまへと申せしはほうげんのひと
りひめなさげざかりは十六のとしのはじめのはつこ
よみむこどりよしとしるせしはたがためにぞとふで
そむるけしてかこちてうちうらみよめ入ごろなるひ
めごゝろすいたゝとのごのうわさのみうつらゝゝ
といひくらしせめてのこのなぐさみにあさひゆふ
ひがことばのすゑたのみにするそやさしけれ

(十二) げんぶくそが

見へそめしもはやみとせずぐるつきのかすより
もきみにあふせはいくたびかうちとのものにせかれ
てはたきつなみだもながれえんおもひのふちのそこ
いをばよどむと人はしらなみのきえぬかごとのつと
めとてほかのきやくしゆにあふときはさすがよそに
はみちをくのちかのしほがまちかけれどあらゆるか
みもしろしめせゆるさぬものはしたひものせきのと
かたきつれなさにしたしむ人はうとくなるうときは
いとゝとをざかりまだきにあきの風あれてちぐさの
むしのかれゝゝにたれにすがらんみちしばのつゆの
此身のをきどころかたさまならでよすがなしむまれ
むまるゝ世をかけてかはりたまふなかはらじとむす
ぶちかひのしたひがみあまつかざしのはなよりもわ
けてめかれずながめしにしづこゝろなく、ちらさんは
これぞこすひのかすならぬとはいひながらとのすが
たけふぞさだまることぶきをおもへばゝゝめでたや
としまだにさしゝくしをとるかみかきわけてさかや
きをかまくらふうのいまやうにびんうすからずあつ
からずゑぼしたよくはからはぬわらはにまかせた
まへやとくしげのまゆだれてあはせしいともしづか

にすきおろす

(十三)五人そが

たがひちがひのおてまくらすきまのかせももらさじ
 としめてねさまもをきさまもむかしの人ものちのよ
 もいまのわらはにかはらめやこれを見かれをきくと
 きはこひとばたひをひきわけてみちはふたすぢふみ
 もせぬとのにこゝろはかぎぐるませんりまんりもも
 のかはととらがいさめばせうしやうもよるのあめつ
 ゆなんのそのしとゝにぬれはおとらじとしのゝめま
 だきうばたまのやみにかゝぐるともしびやみのりの
 はなをいゑつとにをりこそくだれみねのてらすその
 ゝあさぢわけまよふさゆりひめゆりかのこゆりをざ
 ゝひめざゝぼけのはなぼけゝゝとしたこそよけ
 れうたてよめごのなわたすきすげのをがさをかたふ
 けてさなへとるてのしよさらしくうしろじさりには
 りあげてわがたにかゝれのきみがたの水みづのなが
 れはしらまゆみやはぎのはしのはたしなさおてを
 ひきよふてとろゝゝとろゝゝたらゝゝをりに
 やすんでははらおもてをみわたせばながれかれ木が
 すてゝあるさだめてゝゝきんきめこまかにござるほ

とにから木でござるべいよのさんやれそまや人も
 てゝみやれみるになづまぬ身はよしだよしだとをれ
 ばあれゝゝかぶろがまねくなせにかぶろはでゝまた
 ぬまたぬもどをりこゝにとまるとしらすかやしほみ
 ざかはしもとのほまなのはしにうちよするなみのあ
 らゐのとをひがたこすゑのかせはざゝんざとはまゝ
 つよりまへ坂三りすなのかすゝゝわれやおもへども
 いのちなりけりさよのなかやまこれかとよすてぬう
 きみのならひとてすがねがひもおをゐ川かはるふ
 ちせぞたのみあるやがてかたきをうつやときくに
 こゝろもきよみでらみをのいりうみたごのうらうち
 いでみればまじろなるゆきのふじのねうつくしくや
 まのこびたいまゆすみのきわをくそらやくろゝゝと
 かたはれ月のさしぐしのよそほひふかきたしなみは
 さてもみごとのおつゝらむまよこゝははこねの山さ
 かなればはつねがはらのごさまつにしばしとゝまれ
 ほとゝぎすたれもこいそのしゆくつゝきしぎたつさ
 わゝなのみしてゐゑたちつゝいゝかどゝゝにいでいる
 人も大いそのしゆくにぞつかせたまひける

(十四)きてう

見つけはこぎふねのうちねられぬまゝにつく／＼とやどのしゆびのみあんずればわがくろかみもしらがとなるきてうにはだまさるゝ二まい五兩のこわきさしどんす三ぼんもみ五ひきわたのだいまであいそえてしもつきなかなばにをくれどもつゐにそれとて見せもせずいまはふたりがなかにある

(十五) かうきでん

よはにまぎれていでたまふあらいたはしやしゆしやうは十せんでいゐをふりすてゝめしもならはぬさうあい御あしをいたましめよしかなぬこれなり御ともにてこひちにまよふうたかたのかへらぬ水のあはとのみきえにし人のおもかげをゆめにだにも見えはこそなれしむかしのたまくらにかたりつくせしむつごとのみゝにとゝまりなつかしやわすれもやらぬこひぐさのつゆもおもひのみだれつゝわがみはもとの身なれどもこひしき人のなきゆへに月やあらぬとかこちしもげにことほりとおほしめし御心ぼそきをりからにやもめがらすのうかれこゑわれをとふかとおもはれてよすがらともすはたるびのきえぬおもひのあればさてむしさへむねをやこがすらんげにありは

らのなりひらがきちうのながめにとぶほたるくものうへまでいぬべくはあきかせふくとなげきしもなみだくらべてあはれなりいとやさへ／＼身をしるあめのはるゝまもなき中ぞらにをだのかはづのなきそひてみちもさだかに見へはこそなみだぞみちのしるべにてやう／＼ゆけばよこぐもはるゝしのゝめのいまはちりゆくはなのやまみてらにつかせ給ひける

(十六) たんせんせいげん

かくてせいげんはこひのかたきのよしなかなきちのとなしてのちさくらのまへをうばひとりわれぞくたいになりかはり世をらく／＼とをくらんことたゝとるやまのさるのきもさて／＼くわほうはねてまてといまこそおもひしられたりいざやいのりてそのしるしあらはし見せんとそれよりもやがてよういをしゆそのだんと申はせつしやうのはうとてきたにむかつておこなわるれいしやくじやうをふりならしこびんから大あせながらかいてじゆすもきれややくだけよともみたて／＼いのらるゝされどもしるしのあらざればふどうにむかつておほこゑあげさりとては／＼きゝわけもありないこんだによほいよるとなく

ひるとなくむじきすはらでいのれどもすつきりばつたりげんもなしこりやまたあんたることだによほい／＼ほよほい／＼ほひとつのきどくをみせたまへとじゆすさら／＼とをしもんでぐもつのやうこそおそろしけれにうもくにはめづらしきぼけやからたちぬるではおがらまじりのたばこのほねさてはぐみのをりえだをりくべ／＼すさまじやおほうちはにてあふぎつけしやうこうにはこれやこのがんのほね／＼

こにこつきあかにはうしのよだれをもりとうみやうにはいもりのあぶらそのほかあつめしむしのかすいちにげじとのけむしどのにひげむかでのやぶのうちのくちなはどのとかげどのほり／＼／＼／＼ほりばたのいもりのかすなはでからげて引かたげくわゑんのなかへなげくべ／＼どらみやうはちをうちたゝいてだいをんあげせめつけ／＼いのらるゝまに／＼まゝにまゝにならぬはこのふどうこれにもせういんなきならばあしゆらかるらきんならわうまごらわうわれらがぢぬしのけんろうぢじんに申つけふうらいふどうとなすべしととつてはなげまたは引よせいだきあげくるり／＼くるり／＼／＼くるり／＼とひんま

わしひらにたのむにおふどうよいやでもをうでもをうでもいやでもたのむによよや／＼ほんにまことにきよくもなや／＼これでもしるしのあらざればせいげんいまはあきればてばうすみやうりもこれまでとおふどういだいてそれよりもうろ／＼なみだでたつたりけるかのせいげんがあり様あはれともなか／＼申はかりはなかりけり

(十七) くはんくはついつきう

もとより此身はほんらいのいちもつもなきかりの世にとさうあんぎやとおもひたちはじめてこゝにきのちなるかうやさんにぞ入給ふだうとうもんゑんこじこせきおがみめぐりてそのゝちははなにもいたしくびのほねあらおもしろやこひだるやげにほんらいのくうのじはくはぬさきよりけんしやうのさとのまなこちら／＼とめぼしのはなもちりかゝるとあるくち木にこしをかけつかれをほらさせたまひけるかゝりけるところにとたらくさんのおほやまぶしむしやうほうひげぶにんさうこくどのべにをぬりちらしでじまばんかうのけかづらたふのころものしりからげどうがねまきのおほなべづるかんがうてつきの八か

くばうだじやくむはうにつきちらしいつきうおしやうにたちふさがりづかうひしぎのゑせこうじやうこれこばうしゆぎやうはほうしのわざときくしゆぎやうじやうじゆいたいてのりとかはいかにとたづねけるいつきうはきこしめしそれさんがいのだいとうししやかによらいのいにしへはだんどくせんにこもりゐてあらゝせんにんをしと頼み三十ぢやうどうとげたまふぐそうなどもしゆぎやうをとげさてじやうぶつのみちとうるをのくのごとなるやまぶしたちはいつがみね入五月六月ぼんのころこしにほらいひつゝけてこんがうづえをつきつれてちからにまかせてをせさささけく六はいのんだらとうふにこんにやくにしめにはつたけこつこもとにえいさあえんやくゝゑんのぎやうじやのあとをつぎおをみねかづらきしやかいだけかすみをくゝりきりをわけくもにをきふすときんもはづれてころりくゝとこけのぎやうびつこ引々きんぶせんきのねにとりつきホゝたぐりつきよぢらすどつこいよぢらすこしをよぢらすひのきがさいちののぞきうらかべだにくらがりたうげさぐりさかさぐりさぐつててうじやうへへのぼりつ

めたるぎやうじやなりかたぐゝのごとなるしぼちこぞうのひるねぶつあくびがちなるはるの日のねぶりさましのなまやいとものゝかすにはあらねどもいでぎやうくらべいたすべし一きうはきこしめしいのりてぎやうのそのしるし見せたまへとありければいらたかじゆずををしもんでひとりのりこそいのつたれえいくゝかみのおまへにやれいどほればみづはわかいでかねがわくくぞつくりくぞくくとかんふらんはるたんにてんによながさきさくらんだばちりこていみんよこれにてしるしのなきならばなゝのゆふべのほしまつりかしま見しますはあつたかきおやまはなたござんだいごんげんくらまやまにはそうじやうばうさぬきにこんびらいづなの三郎やまゝのたいてんぐたいいふしぎを見せたまへとせめつけくゝいのらるゝあらふしきやはれたるをらよりおほゆきふつてやまゝたにくゝをしならべてみなしろたへとなりにつけりやまぶしいきはいかゝつていかにくゝと申けるいつきうは御らんじてこればかりのこゆきをしつてうともしつてうべいそんびくともそびくべいしりからてこさをさつちいれしやつ

くりびきにひいてくりよえんや／＼となあふぎをさつとひらきつゝはらり／＼とあふぎたまへばさしものおほゆきあさひにしもとぞきえにけるやまぶしおほきにいきなりをなしこゝがくさりのいつはいれついきのきどくを見せたまへとざんげ／＼ろこざいしやうをしめにはつだいこごどうしうなせこゝどうじたゝきだされるななをもきどくを見せたまへとあかでのこつほうすりむき／＼へめにへてぞへめたりけるかゝるところにふどうのそんたいはなびのしかけであらはれたまふそれ見たかヲ、えいとないつきうはつすふりあけてなんぢふどうけなんぢふどけかあつかかゝらかのかつとなへたまへばぶしゆびじまいでふだうはめぐろへおかへりさばへさてやまうりかな／＼けゝらけいわんでてんがういまどきそのてをくんべいかさあしやつともゆつてみるうやまぶしほつきとがををつてたいひらぐもと見えければいつきうすこし人からでこはげんきんなる御いんぎんかやうに申もせつそほんいにあらねどもこん日のしやかのみでしとおぼしめしめす／＼それがしをぶつばさつのけしんとてもの／＼のうその八百つきち

らし此のちかならずさたなしとをの／＼さうへぞわかれける

(十八)ちやの湯

とこのけしきを見たまへばをぐらのしきしをかけられたりたなかざりはなに／＼ぞいまやうていのかうだうぐ心をつけてかざらるゝだいすのかゝりしほらしくかまはなにはやあしやがまたぎるそのねはりん／＼ときならぬまつむしとのみうたがはれらんじやのにほひくんじつゝこゝろことばもをよばれずその時からさきたちいづるさればちやのゆのたのしみはせいけんごだうのもてあそびかゝるなさけの色のみちわきて心のひかるゝはきみがなによるしがのてにいくよぬれ／＼きぬ／＼のここのはぐさのつゆしほりさてまたちやいれはせとのふりそでめいえんさま／＼おほけれど七しゆのえんとぞつたへしはもりいはるうもじかはしたをくの山ふもとのあたひびはやひくひきてからなるうぢのちやのきみがあふせのむつごとをいつのころかやはつむかしけふの日もはやくれはてゝあすまたたれにゆづりはのうつりかはるやのちむかしふるさとしたふかりがねのいつ

かこしちにかへるらんのしろおをたかたかのつめ
としはふれどもわかまりのすがたはなをもそゝりの
ちやほかはべつぎもあらしやまもみぢのにしきいろ
くゝにえんがすぐるゝごくむじやうきみが手による
はつたかのみよりのはかせにさはれてみだれそめ
にしあだし身をたれにか見せんきみならでいろをも
かをもしる人とよみしこゝろはおもしろや

(十九)はなうり

おもしろのしづがしはざやさんろならねどふくふえ
もねよげに見ゆるわかくさのはなむらさきのふぢば
かましをんりんどうわれもかうおもひのいろはいは
つゝじいはでこかれてやまぶきやしのびくるゝか
ざぐるますがたたえなるひめゆりにいつかそいねの
とこなつやなもゆかしきはびじんさうかほよばなこ
そひとしほにいろもにほひもふかみぐさをくしらつ
ゆのたまつばき身をせばめつゝかげやどす月見くさ
こそやさしければにやまことにありあけのつれなく
みえしわかれよりふたりぬる夜にかなしきはをのが
つばさはかはせどもおもひしらすやこゝろせでまだ
きなくねのけいとうげつばなまじりのすみれくさき

みかすさみのてまりのはなひふみよとんとをちても
なはたゝじふかき心のそこいをば人にもらすなみづ
あふひいけにおもたかまこもぐさわれこそ野にさく
あだはなよをらばとくをれちらぬまにあやしのしづ
のみなからもまれのみゆきにいざさらばみきをすゝ
めてとりゝゝにゑいりよをすゝしめたてまつる

(二十)くさすり引

わだの一もん九十三ぎを引ぐして長じやのもとにう
ちよりてこくどのうをのいちりぐいあとはらやます
のおほゆさんよひ三日のさかもりはことにせうじて
おもしろやかゝるところにしやうじのあなたにかな
ものゝをとがからりとしたびやくらいでんのくもは
づれむけんならくのそこぬけてなべのいかけはお
ないかとあひのしやうじをさらりとあくればひんば
あふれのあら五郎おをはらまきをきながし五しやく
八すんのおをだちかたをかふうにさじこなしなんに
もくはねとたかやうじそらつふいたるありさまはさ
てもてあつかふたるきやくらいなりあさいなが申や
うあにすけなりもましませばちつとざしきへおとを
りあれつるでにちからをひきみんとつかゝとたち

よりくさすり三まいひつゝかんでこりやどうでんす
のかけものよときむねにんがりともせずいやだびや
くえでさう御めんあれあさいなきいてゆつてもきや
つはじやくはいなりしたてにかゝつてそゝりをくれ
こうたぶしでやつてくりよなんぼかくしてもそがの
五郎はしれるこゝろこんみじかふてわきざしかたな
はながふていろはまつからかいでこはだかにどつこ
いどこいどこのいなかのおわかしゆぞひらにいちざ
をたのむによ此うへはせひにざしきへいださんとえ
いやつと引たちつともさらにはたらかずにつほんぶ
さうのあさいながにわうにまさるちからこぶさうの
うでくびふしたつてむねにおほるいかりげはごばん
のおもてにあかゝねのはりすりならべたるごとくな
りときむねにつことうちわらひうさみくすみかはづ
にてたいちからとよばれたるかはづおやちがふとこ
ろ子はこねべとうのぼとりちごあげたるてほんが百
六つこつたひあはして十六ばんされども御ばうの御
をんにきすすつへりかへしてなんにもなしあとにの
こるものとはみづ一こくにせんにんりきこつぶに
くだいてさいふにいれふるしたおびのものがげにが

んちがらみにからげつけそつとたしなみ候ぞや三ま
いのくさすりのはやをがきれてみづのむかちやのみ
つまいれみづまいれありまどのよりもらつたるらう
そくばこをふんぬいでさんりせつこつすりむくかふ
たつにひとつはじやうのものとびつくとせすいた
りけりあさいなその時身ぶりをかへぎよとうがとう
のふてぐるひちからがみをがんぢとかめばどうのす
ぢがひたひにあがりにんみやくすちがこぶしにさが
りあれたるほねはいほのごとしきうてうのふちか
づらまつをからんでこがらしにもまれてたてると
くなりあさいなさうのいかりをなせば五郎はとらの
きをはつてたがいにいやとひくちからに三まいの
くさすりきれてさうへばつとぞのいたりけるいやえ
いちよきくさるによつていまの世にれいぶつれい
しやのゑんまにかけあふぎうちはのばさらゑにもう
でをしくびびきくさすりひきうでのほねくびのほね
どれこれこれくかいてを見しやれひりこくたいし
ばかたわうおにをちやのこのきんひらだんべいほ
をつかないゆうりきやといまにのこりしちからこぶ

つくりしつみもきえぬべしかねのくやうにまいらん
みづからと申はそもとまりさだめぬしのびづまきの
ぢのをくにすみなれし人のこゝろをなぐさむるしら
びやうしのつゝみぐさなるたき川のながれの身たう
じやうじのみてらにはかねのくやうのあるよしをみ
な人ごとにゆふまぐれ月はほどなくいりしほのさし
てはわが身のつみとがもむくはんことのあらしふく
みむろのやまのもみちばのいろにそめにしあだぎぬ
のうすからざりしさんしうのつみをそろしくことに
またざいごうふかき川たけのひとよばかりのたまく
らに人のつみをも身にうけてながきやみちやくろか
みのみだれ心やむすばれてけふりみちくる小まつば
らいそぐ心かまだくれぬひたかのてらにぞつき給ふ

松の葉第四卷終

松の葉第五卷

附作者付

古今百首なげぶし

○さるおんかた

七首

まつのはごしのいそべのつきは

ちとせふるともかはるまい

さしもしらじなかくとはきみに

つゝむおもひもゆれども

おもひみだれてあしやのさとに

あまのたくひかとぶほたる

たつるにしきぎかひなくちて

そはでとしふるみぞつらき

われはあやめのねにこそなかも

ひくなたもとのつゆけきに

あまのたくなるもしほのけふり

ひとのたちあひのしほとなる

あられふるらしとやまのかつら

いろにみゆるをいかにせん

○そう

十首

よそになしてもとへかしひとの

つきはたれゆへそでにすむ

つきをみばやとちぎりしひと

こよひそでをやしぼるらん

とはいとへかしこのゆふくれを

あすのいのちもしらぬまに

ふけてきぬたのをとよりきけば

月におちくるわかなみだ

せめてやどれよこすもるつきも

ひごろもとめしうきなみだ

わたりくらへてよのなかみれば

あはのなるとになみもなし

こゝろくのよのなかなれや

はなのうてなのつゆのいろ

もみぢこがるゝいろとはきけど

すへのをちばをたれかしる

まつのしぐれにゆめうちさめて

よそのあはれがおもはるゝ

なみだくらべんやまほとゝぎす

われもうきよのつらければ

○けいせい

十四首

くるははなれてつみなき月を

いつかみやこのそらに見ん

うしやこのみはおやはらからの

ためにしづみしこひのふち

なみだならではあはれをとほし

ふかきおもひのそてのいろ

よひのくせつのしらけたあとを

ないてとをるやほとゝぎす

きみはつらくとらみはせまじ

こゝろからなるみのうさを

きえぬこゝろのなかばはくもに

かよふあらしをよすがにて

もはやいのちもたえなばたへよ

すめばうらめしおなじよに

ひとめしのべばそのなもいはで

おもふあたりのことぞきく

ほどはくも井にへたつるとても

こゝろかはるないつまでも

のこるかたみのかゝみにうつる

つきのさそひしおもかげわ
うらみながらもまたうちむかふ

月わゆかりかうき人の

いつのゆふべにそでふりわかれ

もはやあさちもせにあまる

かよふこゝろはくも井のよその

なかにすぎゆくつきひかな

ひとつまくらにしづみしなかも

うきはわかれのそでのつゆ

○おとこ

貳十六首

はなのあけぼのゆふべのあきも

くらべるしきわがこゝろ

いかにへだてしおぼつかなさぞ

しめてねるよもあかぬみの

かはづなくさへうらみのあるに

ましてねさめのほとゝぎす

そでのみなとのよるせをしらは

これしかべきなみたがは

あはでぬるよはそでひちまざる

ゆめはまぐらのいとまなや

ゆくもかへるもしのぶのみだれ

かざりしられぬわがおもひ

かよひなれにししゆじやくののべの

つゆはものかはわがなみだ

うちやうたれしまくらのふちも

いまはいくせのあすかがは

まれにあふよはひとめをしのび

かたりつくさんわがおもひ

あめのふるよはひとしほゆかし

いつにをろかはなけれども

いくよふるとももらさぬみつの

したにかよふやいはねぶみ

わかれぬるよのつらさをとはい

のちのあしたのふみばかり

ゆふへ／＼のそのうつりがは

きみがたもとのゆかりとも

なまぜなまかなれずはかほど

ものはおもはじさりとては

かへるのみちのあさちによどる

つゆにそへたるわがなみだ

きみにあふよははにふのこやも

たまのうてなにまさるもの

おもひかさねてくるしやいまは

あはでいのちもたえなまし

つきのあけぼのこのむらさめに

いまはわすれぬほとゝぎす

つゆのたまのをかきりはありと

うつるおもかげかはるなよ

のべにかはづのなくこゑきけば

ありしそのよがおもはるゝ

かくとしらさできえゆくならば

つらきむくひのありやせん

いそのまつがねなみうちかけて

たつなわりなきこひのふち

いまはみだれてうきやまどりの

ながきつらさのおもはるゝ

さてもねられぬあかつきうしや

すぎしこよひのしかもいま

いろにしづみてきえゆくみなら

ひきはかへさじすてをぶね

いくえかさなるやまかはなりと

こゝろへだつなたびこゝろも

○おんな

十九首

あはぬつらさをこがれしよりは

あふてわかるゝうきなみだ

系じのたくひはよるこそゆれ

むねにたくひのたへやらぬ

こゝろぼそくももしびふけて

まつはいのちのきえもせず

いまはたよりのふみさへたえつ

なににいのちはかけてまし

いといさびしきねざめのとこに

なみだなそへそほとゝぎす

いくよねざめのなみだのふちせ

なみのうねゝうきまくら

のこるうつりがまくらにそひて

いといわすれぬねやのうち

われがおもひはあのうきくもよ

いづこゆくゑぞさだめなき

ひとめしのぶのくさはにむすぶ

つゆのたまむしねにぞなく
ものやおもふととふひとあらば

せめてかたりてなぐさまん

みをばなにせんちかひし人の

いのちのみこそおしまるれ

たえてしなくばなかくゝひと

みをもうらみじわがこゝろ

しのぶこゝろをいろにはださじ

ものやおもふととふばかり

おもひあまりてまみえしゆめよ

さめてなみたのほかぞなき

まだきわがなのたちたるとても

おもひそめしをひとすぢに

こゑにあらはれなくむしよりも

いはでほたるのみをこがす

いくよしほれてきぶねのかはも

そでのなみたにたまぞちる

ひとのみちひのこゝろもしらで

そこゐなげなるわがなみだ

あだなちぎりをむすびていまは

わがみひとつのうきおもひ

○ほうし

貳十四首

ゆきのとやまのあけぼのつらや

かやがのきばのとりのごゑ

いまはみにしるあいべつりくの

うさをおもへはなかくに

せめてねやもるつきかげなりと

しばしまくらにとまれかし

あはでかへればこゝろのやみよ

つきはさゆれどみちみえず

はなにをくつゆをざゝのあられ

こぼれやすきはわがなみだ

おもひつけてなみだのしぐれ

さだめなきこそうきよなれ

つきはひとめのせきぢもなしや

にしにながるゝよはのそら

くものはたてのそなたをこひて

すめばすむみぞあぢきなき

なには入江の身はすてをぶね

きしにはなれてたよりなや

こぬよあまたのやまほとゝぎす

ふるはむらさきわがなみた

うきみうきくさしづみもはてぬ

そこのこゝろをつきやしな

おもひあまりておりたくしばの

けふりさびしきゆふまぐれ

これもさすかにあはれをそふる

をだのかはづのくれのこゑ

はるにかきねのゆきにはあらで

きえぬかぎりのしたおもひ

なひてねがほのなかばはくもに

みえてこぼるゝそでの月

しのぶたもとのいろ見えそめて

こゝろにもにぬわがなみた

すぐる月日はわれのみしりて

かひもなき身をうちなけく

かぎりある身にさりととは人の

とほきゆくゑをおもへとや

あまのすてふねよるべもしらで

ひとりなみだにふししつむ

さらばおもかげはなれもやらで

ひとのつらさにますかゝみ

あふささるさにみだれてけさも

おばなかくれにたちとまそ

うちのはしもりあはれと人は

いはでとしふるそでのいろ

あふぎならでも身はふるさるゝ

あきのなかめよつゆばかり

あふもわかれもみないによる

なみだつらぬけかた身にも

歌音聲并三味線彈方心得

一 歌の事音聲ゆたかにして始終たるまぬやうにうたふことだいななり當風といひて世上に彈うたふをきけば三味線を君として歌を臣とおぼへしやうにきこえあしきとかやうたをもつはらしならしものはまことのあいしらい本手組のうたひ方と長歌端歌などの彈うたひかくべつなりまづ三味線の調子をたいせつにあはせてのうへうたひはしむる事肝要にして序破急のくらゐうきしづみをつかぬけやけからぬやうに心をつくべしまた連彈のとき歌ひとつのうち二上り三下りなどの調子かはる事あるは一しは相手の調子取やうあひかたにならひある事也 口傳

一 なげぶしの事元來江戸らうさいのふしをなをしてうたひきたるとかや音聲しめやかに調子はひくきかたよしその分際に應ぜざる調子にては意味うたひかたしいにしへ大坂屋河内風といひてうたひしはかみしもの句さらりと三味線あいしらひもみしかくうたのとまりやんとうたひしなり今やうはふしのたけゆるやかにならしもの相の手撥かずもす

古今百首なげぶし終

くなく歌のとまりはふしにていひすてゆう／＼と
きこえ侍る歌はつれてうたふもよし三味線は一ち
やうにかざるべきか近比歌の下の句三字めのふし
をさげてうたふ事だてにてよろし此歌の曲節急な
らず序破にとまりてしづかなるかたなりよりて
かみの句つぎの七もじのはじめ二字またはかへし
のはじめ二字をよせてうたふべし唱歌にはえあり
ておもしろき事也中比より二上りのてうしをもち
ひて此ふしをうたへる事も有これには本調子ふと
つればきよしふしにはなはだかうをつありこのゆ
へに口傳おほくいひのへがたしある人なげぶしは
おんなのもてあそびものなりといひたるもゆうび
なるさまをよくわきまへたればさる事ぞかし

跋

をふし藝にあそべる人をの／＼このむ所ありをくれ
たるすぢをかくし學びえたるかたかどをのみさかし
がりいふめるなかにこれが音の歌に和しあはれもや
るかたなきにぞなにごとくこと盡ぬべきを幼よりな
らはざりし恨も今更なりかのらんごやなどの遠きに
こそいたらざらめなげぶしのもとすゑかいなで、心
ゆくばかりにはなんどいへるを此書をあめる人打笑
ひてそれこそ難きわざなれ朝鍛暮鍊のうへならで一
曲わ奏しがたしなげぶしは手のかぎりすくなきやう
なれど古今の興廢なくことにたやすからずとさらば
わかごと學ぶべきにあらずそも／＼りうきうひんだ
の露のはじめよりなげぶしのみさはなるは松樹にな
すらへそのほか松葉の風聲ちり盡さゝることみつべ
し花落雲閑なるゆふべ雨よきほと窓のうちあけば
のけさやかなる雪をあつめて少年常に習はざらめや

元祿十六癸未年六月吉日

京寺町通二條上ル町

井筒屋 庄兵衛 板行

萬木 治兵衛

松の葉第五卷終

若みどり序

去ぬる比秀松軒の主、此糸筋の術を得られし餘り、道のすきものを招き本手端手長歌等の證歌を集めて五緘とし、松の葉と題して世に慰み草のたねをまかれしより、此林に遊ぶ人々ことの葉の露の玉を拾ふ翫ひ草となれり、されともかの嫺が所縁残りし歌舞妓臺にかなてぬる、種々のうたひものを始拍子取おかしきたぐひは、わざともらしぬるを、扇徳といふ男、調子合せてかき集め、落葉集と名づけて、櫻にいのちなからず、しかれば此兩部にこそ、品は盡ぬらんとおもふ人もあるべかめれ、さはあれど濱の眞砂の數くもれたる名曲端手新曲、かつ又、きのふのむかし、けふの今やう、時めきわたる長歌などいや生しげり、根にひかれ、糸による、名歌、花の曙月の夕々に積りぬ、靜雲閣のあるじその闕たるを補ひ廢れたるを興さしめんとて、野川檢校の作に、みづからのをまじえて又いつ巻となし、若緑と名つく、枉のかつらながく、引つたゑて餘音嫺々と絶ざらまじとなり、功なれりといつべし、余不思議にかの松の葉、落

葉より、此若緑の三大部の席につらなりあひぬれば、筆を添る事になれりけり

寶永三の戌の卯の花月の中の日

愚北條持入道大狂園醉序

若みどり卷一

長歌目錄

一	ことふき	二	新もしほくさ
三	さいれいし	四	ころもつくし
五	はつはる	六	一じのたい
七	清水まふで	八	ありしよ
九	あさぎ	十	うきくさ
十一	山かづら	十二	かきね
十三	うす煙	十四	おもひ川
十五	はなの香	十六	ひなつる
十七	月つくし	十八	もりつくし
十九	はなもり	二十	松浦きぬた
廿一	花くどき	廿二	かうつくし
廿三	初あらし	廿四	川づくし
廿五	せきつくし	廿六	はるくさ
廿七	ねやの月	廿八	きぶね
廿九	みちしば	三十	つくもかみ
卅一	三瀬かわ	卅二	袖のつゆ

卅三	わかれぢ	卅四	梅あしだ
卅五	まつかえ	卅六	よ町
卅七	そでのか	卅八	戀のきやうか
卅九	そめ川	四十	わかのうら
四十一	かせんがひ	四十二	島つくし
四十三	ちらし	四十四	つゝじつくし
四十五	みだれ草	四十六	ながき夜
四十七	ねざめ		

長歌

(一)ことふき

はつ春のそらものどかにいつる日のしたつみにの
かとくによそほひしるくたちならぶまつとたけと
のいろいつまでもわかのうらはのかたをなみあしべ
をわたるひなつるのちとせのゑにしをむすふなるに
ひさかつきのきよくすひきみがめくみのうるをひふ
かくさわけいりしほうらいのみねのかすみをくみそ
めてつきせぬみよのかみかせやいせゑびほだはらた
ちはなのかほりゆたかに民もなをほながに榮へすみ
よしのなみもしづかになるゑだのかやゝかちくりか
すくゝのいつのよゝりかことふきそめてはるごとに
たえずめてたきとそさけむめのはながきやゑかさ
ねきつれてござれいつもながらのきよみづまふてぎ
をんやさかのはなのいろこれやよしのゝはなよりも
もみぢよりもこひしきひとはみたいものとがをばわ
れにをふせてはなのころはござれのいせさんぐく
そくさいゑんめいちやうきうとさかへさかふるちよ
のはる

(二)新もしほくさ

はる草のやかてももゆるかすがのにあさるきいすも
わかくさのいろかにうつりこひころもその袖のかの
みちくつきみがそのなのにぎわしきさくらづくし
やむめづくしつゝしつくしにかうつくしふくはる風
もこゝろしてめてたきはなのゑんにいまをふてうま
つのわかみどりいくはることにいわるきてことふき
うとふはるこまのよわひひさしきさいれいしこけむ
すのべのすゑまでもげにあをやかになつくさのしげ
みにもるゝこひ草やうきなながるゝかわたけのさゝ
のおぎゝひとよなりともうれしききみかたまくらを
まつよひふくるかねのこゑみだれみだるゝくだかけ
やはやまのゝめのわかれしにまだそでぬらすあまの
かわあき草におくつゆのたまつらぬきとめぬたは
たのわかれのなみだいくとしかつもりくゝてこひつ
くしあだしまくらのたはむれもけふはかわりてそれ
となくかりののこるふゆくさのさびしきまゝにて
をおりてあひみしことをかぞへうたかきあつめたる
もしほくさよてふうきねにさよころももしもたより
のゆめもやとまくらたのしむねやのうち

(三) さゝれいし

さゝれいしはほとなりてふた葉のまつもおいそいでちよのはじめはちよのはじめはおもしろやきみがよのひさしきくにやよつのうみきしうつなみもえづかにてちとせをよばふをひなつるかすくなるゑたにすをくひてめくみもふかきたま川のながれのすへのわれらさへこゝろうきゝのかめあまたよろすよまでもいくちよをげにをさまれるゑるしとてきみにひかるゝまつかえにたちよるかげはいつもたいおひてもくちぬときわきのたれかいひけんみつくきのひさしきみよゝりいわるそめたかきやにのほりて見ればけぶりたつたみのかまどもにきはひてならべるかどのめでたさよ

(四) ころもつくし

きみが代はあまのはころもまれにきてなすともつきぬはなころもその色ころもこひころもかひまみしかのかすがのゝ若むらさきのすりころもゆかりのすゑをこひつゝおもひいるさのやまもみちかほる風もかろしやなつころもあさのさころもうちへてそてもすゝしくゆく水のかの八はしのかきつばたそのくの

かみにをきむすふむかしおとこのからころもきつゝなれにし七夕のいははたころもかさねてもあきのかわかせなをさむしころもかせやまこよひはこゝにたびねのころもうすくとも一よあかしてみよしのゝ山もさむみてころもうつまつとのあめもゑんゝとなをゑもふゆの夜さむきころもやうすきかたそぎのゆきあいのにおくゑもをうちはらいてもはらひてもおもきかうへのさよころもかさねてたらぬ契りかな

(五) はつはる

はるたつといふばかりにやみよしのゝやまもかすみもさとゝのけしきもいづれたゝならんけさのあさ日にこゑにはふはつうぐひすのやどるてふむめのはなかさたれにかもきせてかへさんあめもなくましてあふよのつまとうちおどろかすべきかせもなくはなのさかりは千夜萬よまんゝよもよろつ代までもたへずかわらすきみがよのはなのいろこそめでたけれ

(六) 一字のだい

をもゝさだいへのいちじのだいにはるはまつか

すみうぐひすむめやなきわらびさくらにも、やなしきゝすひばりにかわづなくすみれやまぶきつゝじふぢなつにもなれはあふひぐさほとゝぎすさみだれくひなのとりたちばなほたるやせみにあふぎはちすいつみやあきはまたおぎはぎつゆのすゝきらんゑかかりむしにきりの月うつゝやかしきにさくやつたもみちにふゆはまたゑくれのゑものうすこほりあられみぞれにゆきかもたかふすまゑいとぞかゝれたる

(七) きよ水まふで

やゝすみなれしゑづか屋をなみたとともにたちいづるこゝろのうちこそあはれなれまづゑよしやでらをふしおがみゆくにひめぢをはやすぎてこひしきひとにあふたのもりよゑあふたのもりになきあかすからすさぎとはあれとかやなみのなるをのまつかせにきんのねをやゑらむらんひやうごにはやくつきじまやふねのとまりのみなと川あきのちくさのはなぐまやいくだこや野になくむしのこゑもさびしくうつきぬたまきかへしてはくりかへしこのぬのひきのたきみればけしきまことにおもしろや山よりおつるゑらな

みはいとをみだせるごとくにてきしにたゞよふゑんすひはあいをそむかとうたがわれなにはのむめもはるならでにはひもさらににはひもあらずしてみなみにはすみよしてんわうじこひしき人にあふさかやはしもとにやどをもとめづかこひゆへいのちをうしなひし二人のひとのはかどころおとこやますむ月のいわし水にややどるらんすへは山さきたからでらあきのやまのもみちのいろいなはをわたるかせのをとものすさまじきふせいなりとばにこひづかはやすぎてうきよはうしのおぐるまのめぐりくゝて今こゝにきよみつでらにぞつき給ふ

(八) ありしよ

はるすぎてなつきにけらしゑらたへのころもにまかふうのはなやはつほとゝぎすこゑにはやかにおとづれてのこるやそてにありし夜のゆかりをゑめてつゝみをくよるのほたるのひかりをよそにたゝもらさじと人のをふかくゑのぶこひものおもふかたとふひとさへもなみだのかわのきしにおふるうきこひぐさのはなになるともあふこひならばいわねふみかさなるやまにまこふともなにかいとほんきみがためのにい

でゝかるあやめぐさあやめらわかでまつこひの山ち
にかゝるうきくもやふるむらさめのおとにのみこい
すてうなはたつた川みづせきとめてこひのふちかわ
らじとこそむすびしにせきもるよはのゆめとをくへ
だつるひとの心よりかわるならひの夜こそつられ

(九)あさぎ

かてうにもれてのこる月うわのそらたきすがりたる
そでとくはかさゝぎにかよはすなかのみたれがみ
とるてあやなにゑめかへしゑめかけくいわこそな
みだあこがれいづるたまかときへてうきなたつとも
いのちにかへてなんのをしかろぞつゆにぬれたる一
ゑたはなよもみちよいろにいでゝもうらみしとわぬ
つらさぞやるかたもなきゑのびぐるまのかよひしな
れて人めよくらんこひちのせきはおさまれるをもつ
らしとよみしゑづがあさきぬあさからざりし思ひの
かすのつもりしふちに身をすてゝこそよるせもあれ
とうつりがそひてたちわかれゆくいまのくるしさわ
れかのけしきまたの日までをいのりてまたんまつと
しきかはかへりくるかに

(十)うきくさ

此ゆふべふりくるあめははしあひのそらめせしまに
うらみてのみやうしのくるま河瀬をめぐるすへはい
ろひとむれつゝあそぶかせのかよひもにしひかしき
しのうきくさたれまつなくにつきぬことばのうき世
うたてのまひあしもなるかみのとやろくとも非
にらかきみぬのまつさへたもとにうつる月のみや川
こひ風そよとゑぐれつゝきのきばのともしいろの
なよせをとふまでもなくゑるもゑらぬもながめにあ
かすちとりすかれてあけわたるそらにたれこめかこ
をかがげてそみるゆきも五條のさかなかくにふり
みふらずみゑろたへのたきも三すじのながれはたへ
ずゑなざやむまひ三ねんざかをゆくもかへるもあふ
夜とわかれうちもねならんせきの戸もりのやさし八
坂のなりよしむすめふりよし小ぢよろはなにはそめ
てまくすのながめやなぎかえでにおほろとくだるた
けのゑたうらふすかとすればあくる一聲山ほとゝぎ
すあめのなごりのうのはなにいろ月ほもちろんなわ
てのはたる思ひみだれてかよはしよしやからのやま
とのはしをくもぢにかけておもひを

(十一)やまかづら

まゝにならぬはたが身にもありとのそれをたよりに
うき身をおくるべこのとし月をつゆかなみだかくる
わのあめのそではかわかす身はおきのいしひとをま
つをのうらみぞまさるありしことの葉みないつわり
のいつかまことのいろしあらばせんぞうれしきなに
しかまさるあたしこの身と人こそ思へ人に心はかわ
らぬものをよしやよしなきことの葉のすへをそれと
たのむ心につらさそまさるいまはなか／＼おもはじ
ものと思ひかへせどまたこひしさにみだれみだるゝ
まくらのなみだ月にそむけてゆくほとゝぎすいと
こがるゝひととはともなれはせめてゆめにとかとり
きぬのよするまもなくこゑ／＼つくるかねにきえゆ
くそらともなりて野べのちくさのあをきがうへにお
もひおきたるなみだのつゆとあこがれいつるたまか
と見ゆる水のきらべのみたれのいとおなしこゝろ
かむすばれやすきとかうたまのをたへなばたへよみ
ねもあらはのやまかづら

(十二) かきね

人しろはなふきあへぬ入目のやまかへすひかげのい
とさくらそらにゑられぬなのはなのくもなみのうね

／＼ゆくかふてふのそてをそれかとまねくもくるし
思ひ亂れてかきねのやなぎきりよくなふしてたゆた
ふすがたふちのうら葉にやまほとゝぎすまつ日はい
なのたつきもしらずゆくへもとめん花たちはなのの
ちのこゝろにむかしをしのおいなさゝはらわすら
りよものかつゆになみだにつもり／＼て思ひのいづ
みわきてなかれのうきなとりがわしづみはてなであ
らはれわたるせいのいわなみくだけ／＼てもの思ふ
こゝろたそやく井なのむねとゝろかしあともといめ
ぬいなづまのかげかよふたもとにはら／＼／＼とほ
しのこぼれに身をしるあめの月につれなくくらぶの
やまのまつひのひききにきぬたのこだままどにをちく
るかりかねのおもかげさそへこひしきひとのよそに
かよひのみちのべのゆきあとなつかしやすみすてい
ほのにはのおち葉にちくさをとりてともに人めもか
れゆくやあらしこからし枕さだめん

(十三) うすけふり

おもひなれにしゆふくれにあゝうつゝなやこひごろ
もわれかのけしきにたちうかれなみだもよふすはし
めおもへふしきにひとにあひなれそめてたいいつま

でとちぎりしにうつればかはるひとごゝろうはのそ
らなるかせさへもまつにをとするならひありもはや
とだへの中とはなりてつらさにあまるそのゆかしさ
をせめてみるとてかたしくそでのうちぬるゆめもは
やさめてうらみかず／＼まどうつあめにまたたきの
こるうすけふりふけゆくかねも身にしみ／＼と月も
さゆるや秋のそらアイノテいまは身にしるあいべつり
くのうさをおもへはなか／＼にはのむらはぎうら
かれてつゆもちりゆくはつあらしさりとほさびしお
りからやはかなきむしのなくこゑにみだれこゝろの
いとせめて

(十四) おもひ川

よの中はうつろふいろに身をせめてうらみもたえぬ
おもひ川ながるゝ水もゆとなるやなをこり須磨のう
らなみにたつやこゝろの水けふりくるしみふかきゆ
くすゑとおもふこゝろをすてくさのいはりのまがき
のゆふべのそらにまたしいまはの身なれともすぎし
むかしはそのひとゝ二世とむすびしひたちおひかけ
しこと葉もいつはりのあだになりゆくうすなさけわ
れよにしらぬ身と成ていまださめぬるゆめうつゝま

よひのくもゝうちはれてことゝふかせもたえ／＼に
ふきてすゝしきよはのそらひとりふせやの月かげに
みわたすのべのくさばなはけにいろ／＼にさきみだ
れたえぬ詠はおもしろや

(十五) はなの香

はつ春のはなのみやこのけしきかなせみの小川のか
げきよきたへすなかるゝ水のあはうたかたびとにこ
ととはんわけあるさとのふうぞくはきゝつゝゆけば
しな／＼やきやうのかほりのかほるはしんぞむかし
も今もおなじ世に名もなつかしきうぐひすのはつね
やさしきおりからによしの三芳みよしのはなさくにうかる
ゝこゝろどこ／＼ぞまづむさしのゝゆうまぐれ月を
ながめておすふねのなみのよる／＼たれまつちやま
よゝのみさはのこがるらんまたかへりきてしゆしや
かみち若むらさきやこむらさき花むらさきのあけぼ
のにうつろひやすき人こゝろみかさしをふ一しぐ
れはれゆくそらやみちしばに入目のなぐりくれな井
の野かせもふきてあふ夜のところにみだれさかづきか
ず／＼にまたむつことのうすなまりちとせやちよの
ゑにしをこめてまつはすみのゑかすみはとやまたつ

たたかをのもみぢによすが色といふじにひかれては
きゆるいのちはもちろんじやしのお夜ごとのそのか
よひぢにうらみろうさいわかれざけまぶのおとこは
一しほゆかしながとてまくらすいつけたばこそでは
たまがは身はうきふねのかゝるおもひをいく世の中
にまよふこゝろは花そめ川のいろにいてじとつゝむ
にあまるものや思ふとひとのとふまで

若みどり卷二

長歌 (ついで)

(十六) ひなつる

ひなつるかそのゑだく／＼にすをくひてきみもゆたかにわれもゆたかにすめるみよとてひさかたのひかりのどけきはるの日にしづこゝろなく花のちるらんげにちればこそくいとさくららはめでたけれちらすはまたのはるがすみたれかしのばんうぐひすのたによりいづるこゑさして野のすへやまのおくまでもおなしめぐみにあひたけのよはひちとせまつもなんきみにひかれてよろすやへん

(十七) 月つくし

月やあらぬはるやむかしのはるならぬわが身ひとつにものおもふそでのなみだにてりもせずもりもやらぬおぼろ夜のつきにはいろのそれとも見えぬむめのひともとたをりてきみにまいらせそろとかくふみの月のうれしかへしをまつよひの月の夜すがらさかづ

きをひとりたはむれ手にもち月の野べにかほるはらん／＼かるかやりんだうけをぎはざけいとうおみなめしおとこやまべにすむ月のひかりめでたやつきのみやこになんよさアかくれないよさアすまあかしきらしなふはのせき屋の月かけにひと夜かりねのゆめうちさますそのあかつきのかねのねは千里もひやくえ

(十八) もりつくし

ゆく水にしきつれだつやま川のかせにはら／＼たまこぼすあさなゆふなのつゆのもりあまり／＼てわがそでにたへぬしづくのもりふかくしのぶもりのかひもなくものやおもふとひとのとふまであだにたものいろものてひとやとがめぬはづかしのもりのしたへにをくつゆもみなくれなるのたまとのみみえてこすゑにいとしくともしつれたるもみぢ葉のあたからよひをばふきさますこがらしのもりあきさびていとさびしきそのはらやふせやおふるはゝそのもりゆくかりがねのはかせよりこぼすはつゆのもりはれて思ひもゆふくれもいとおもしろくすむそらにいり日やいづる月かけのひかりめでたきあきの夜や

(十九) はなもり

いろにめでつゝかほりをしのびさかりおしみて遊ぶ
はながきのひまをもとめてゑだおるひとをとがめと
がむる身ははなもりのつゆのたもとをうちほらふに
もいとまあらしのまたさそひきてむげにちらせる花
のえだかほりなりともせめてはにはにのこせはるか
せまたはるにあふはひさしきよのためしおもひわび
てもうらみてもとふてあらしのこゝろはあらしいら
ぬなげきと思へどもいかなるはなのゑんじややらわ
するゝひまも中々にあるにかひなきすて船のこが
れくはるふかくしのぶこゝろをそれぞともとは
できくともいろもかもともにちりしくはなのには

(二十) まつらきぬた

八ゑのしほぢにまつらぶねかせのたよりもあきふけ
くてうちもねられぬきぬたの音にちたびくたくる
エイ千たびくたくるそでのつゆありしやまみねのも
みち葉はらくほろなみのよるくまつらふねかせ
のたよりもあきふけくてうちもねられぬきぬたの
おとにちたびくたくるエイちたびくたくるそでのつ
ゆあらしやまみねのもみち葉はらくほろばせうの

葉のつゆふりすつるおもひきろやのゑひおもひきろ
やのこひのみち

(廿一) はなくどき

としのうちよりさくむめのはなのかほりもふりもい
としほらしき野べのかせさゑそよそよと心して
ふくさくらのもとにうしとかきをくそのことのはの
あゝなつかしきわかむらさきのはななきつばたあや
めにかゝるゆうかほのつゆのたもとにおちてをはな
かすゑにかげやどすつききやうかるかやはぎをみ
なめしいろをあらそふやまゝのもみちみなちりは
てゝかれくのこるふゆのくさ木のものわひしげに
にわのすいせんゆきやしもにうもれいとあわれの
ますゆふぐれにかねもおとなくゑたくのとりぬ
をなくなえ

(廿二) かうつくし

ひかけのどかにけんじくわげつのかうくらべはるは
なにあふはなのゑんむめうぐひすのくらべむまひと
りこかるゝしばふねみすりにくやへだつるあさがす
みかほりはすれぬありしまたねのこのうちはつね
ゆかしきほとゝぎすしのゝめうすくもありあけにち

よとつきいではおぼすてやさらしなあけぼのふじた
つたそりやかほりくるそりやうそかほりらんたちは
なにらんじやたいあきはしらつゆもみちしろくちり
くくくやいちりくくちらりとふりてはさつてもふ
りつむゆきのあしたのおもしろやふゆのしもよをし
なくかゆるきやらのけふりもいのちのきみにいく
よとめてもとめあかぬ

(廿三)はつあらし

さらばくくとこゑもたへゆくのだのはらおくりかへ
せばいと身にしむはつあらしなたねのはなもうら
かれういもつらいもこの身になしてなごりつきせぬ
これもしのせめてこちよれうつりのきぬにともしと
めきのかほりはまたのあふせまでにとそでうちか
けてちや屋のあさざけしきもにくやみせにそむけ
てかくたまつさのふでのかすくまきかへしはしら
かくれはいつくれもせでなれしゑやみせんつれうた
ひあふはうれしやわかればつらしあはぬひかすをか
ぞへくいつはせめて夢にとすつとんくすゑのま
つやまなみはこさじとちざりてもしゆびはまかせぬ
こゝろばかりかすつとんくとんともたれてひとし

はにゑのぶなみだをもらさじものと思へどぬるゝゑ
ろこそでありしなさをそのまゝにまたのゑにしを
まつばかりに

(廿四)川つくし

こひとおもひをさゝふねにのせてれんばにまよふそ
のおひかせやしのびくるまのおとなしかわよもしゑ
らかはやせきもりつらくこよひならずはあすか川に
おがわいくたかわにもきておゝ井がわきみもろとも
によにすみだがはうきなとり川いといはせねど
あだなたつたの河なみたゝば中やたへなんいやよ
し吉野のかはこの身はとももゆるおもひのそのふ
ぢ川やけぶりたゝせぬごけんはとかくいつもきく河
うらなきわけをひとへに思ふころもかわさて見よか
しのへ

(廿五)せきつくし

かことばかりにあひなれてそめていまはなかくう
ぐひすのせきつゝむつらさのいわでのせきよこひに
くちなんなこそそのせきよく夜ねざめぬすまのせき
なこそその見るめもせきのなかへていつあふさかのせ
きともならばとげてこゝろのひたひばのせきあくる

あしたのわかれのときよせめてかたみのころもての
せきかわすたもとなごりもつきぬいかてなみだを
おさへのせきよつもおもひのやるかたなさよかき
すさみたるもじのせきいよしものせき

(廿六)はるくさ

ゆきゝえてゑなゝゝいづるはるくさのあをゝとし
てつゆもゑづくもひとしほになをうきたつやそでの
いろわきてゆかしきうぐひすのこゑもゆたかにさへ
すりてあをやぎのわか葉にそよぐかせのをといとゑ
ろやかにおさまりなびく人こゝろたゝわれとなくう
ちとけてたゝたはむれあそふうちこそはげにまこと
かなたれもみなゑるもゑらぬもろともそのなをゑ
たふさくらはな八重やひとへにさきみだれかすみに
つゝむやまゝのけしきはいとゑゑほらしやあらぬ
なかめはちよまでもかわらぬものはまつがへにみど
りはいつもおもかげののこりてひさしきひとふしを
かぎりないこそおもしろや

(廿七)ね屋の月

まつ夜ながらの月をながめてうらみわびおもえぬ
るゝそでのつゆかわくまもなき夜をひとりこがるゝ

とこのうちそれさへあるにむしの音のかれゝなれ
ばあはれさまさるゑも夜ふけゆくかねのこゑつまど
をたゝく野あらしはもしやそれかとたちいでゝみれ
どこひしきそのひとにあらで身にゑむかせのをとに
はのあきゝくにほひきていとゝゆかしきまさりくる
ひとをゑのふるものうさをあはれとだにもとわぬは
つらやもはやこぬ夜とまつよのゑぐれぬれにそぬれ
しわがたもとつけてわたるやむらからすはやゑのゝ
めもあけゆけばまたのおゝせをたのしみてなみだな
がらのね屋のうち

(廿八)きぶねまふて

くもの井にあれたるこまはつなぐともふたみちかく
るあだひとをいかにたのまんあだし野のあだしこの
身はまゝにはならでつき日はどへてむかしのわけを
思ふもぬるゝ我そでのなみだにたへぬあだなみのよ
るゝごとになちいでゝふりあげみれば大はらやお
むろにちかきをしはやまたゝすのちりのこのまわけ
かよひくるまのたそかれみればくるまのゝたそが
れみればつゝむつらさとたもとにあまるわけをゆふ
せんひだりのかいなもくにすけ殿いのちとほりしそ

のむつこともいつしかかゝるふちせをなげいたあまのすてふねわれひとりこがれ／＼てゆくみづのかけさへきよきかちがわにやつればてゝよわがかほかたちかくはみすてそよしなやな三じやくそてをとしがよつたらなにふろにせうがゑなふれやふれふるつまいとしわれふるつまをえあとにみぞろがいけなみにひよ／＼となくはひよどりこいけにすむはおしどりはんまちどりかちりりん／＼ちりりん／＼ちつとしてさてゑりくりゑんちよのいわま／＼をつたふにしはたのあせあぶないがてんじやあぶない／＼あぶのてならぬゑはそみちあせみちをく／＼く／＼つてまつのあらしにさつ／＼とだざりておつるくらまがわこひのふちせとたどれどもなをも思ひはうしのときつきだすかねともろともにきぶねのやしろにつき給ふ

(廿九)みちしげ

いくよひさしくかわらぬまつのゑた葉さかへていろもことなるわかみとりとぎゝぬみよはつきもせぬげにはるなれやあきなぎにかすみこめたるやまもとのむめのかのゑならぬもよそにやこゝにふきこせばい

とゝこゝろもあこがれてゆかしきとはあれ／＼とゆくへとたてはなかがわのわたりもたえてさくらかざしてこの下かげのつゆにぬれつゝぬれてけふもまたかへるのみちのたそがれ見ればさてもやさしやほたるのむしはゑのぶなはてにひをとほすゑやうがへうさやつらさにこの身をなしてこゝろつくしのかよひちなれどあきのこのまをもれくる月にながめやさしきしらさぐのふけてきぬたの音きけばよそにも人をこひぬらんわれはそれにはひきかえてひと目のせきのゑげゝればかくゑのべともかひぞなきなれどさだめぬうき世こそたのむかけぞひとすじによしやいのちをかざりにてかよひかよへばいまははやまことのいろにうちとげてきみもろともに千代はへぬべき

(三十)つくもかみ

まだ夜はふかしとこのうちふかきおもひのかす／＼をかかねてきつゝかたらんとこゝろうかるゝおりふしにはやもんあきとつげくれゝいまはのこゝろつくもがみあまてらのかねのねに／＼へてぞゆくよくものねむさをつゝむちよらうのまたそとばかりゆひのこすおもかげさらにわすれてわがたましひものこ

るらんつきもでくちへゆくそらにちやうちんゑらけ
どもひとのよいのゑゆゑんにあをさめてあくびまし
りでかへるらん

(卅一) みつせがわ

まゝにならぬはうき世の中と思ひすてゝもなをすて
られぬかねがうきみのかたきとなりてこれぞいのち
のはてならんきゑもはてなばのこりてひとのあとで
うらみんこともやありとおもひのたけをかければき
みもおなじこゝろのうさつらさにくやなびけとよこ
ふくあらしそれさへあるにさいこくふねのさそふな
がれにまかせんとおほせもおもきたらちねのをんを
おもへばいもせかはふかきそ様とみづからがあいの
中川みづましてとをきわたりとならしはのつゆとき
へなん心そならばもろともさんずのかわのせをてに
手をとりにてこさんといゑはおとこよろこびことのほ
のいつわりなくはのちほどゝまづそのときのいとま
ごひたちわかれゆく夜はなんときぞ八ツ七ツもはや
すぎて六ツのちまたもちかくなるよあけからすやふ
じこやのゑかうのかねともろともにゑでのたびたち
かいどりすかたおなじところにいであいてこれぞこ

のよの見をさめとたがいにかほゝ見あわせていざや
さいごのさかつきとおとこにさせばいたゞいていま
よりのちはたれとかはとりかわすへきこのさかづき
とふたつにわりてふたりが中にのこるうづきのいつ
かのあさのつゆのたまのをたへてもあとにのこるう
きなほみなひとのそてのなみたのたえならん

(卅二) そでのつゆ

さだめなきゆふべくゝのそなたのそらにけぶりもた
つやあたしのゝあはれはかなき世のことほりと思ひ
しられていくたびかこゝろまでくるわがなみだひと
にいのちはあすをもゑらぬけふもかよはんあのさと
へさだめなきとはおもひはゑれどそでにゑぐれのひ
とゝをりぬれてこかげにたちよりてゑんきはらしの
たばことともにやすむそなたはひかたみちゑもんは
しこゑて行ばでぐちのちや屋の見せをとゝゑどろに
ひくさみせんにくむやゑだいにあのさけのゑひねむ
りこけたるさやくもありいびきまじりにたがねごと
あくびかちなるながうたもなかなばはよそにうたはす
るほかのうわさとりくゝにむりのくせつのそらなき
はかぶろのときよりならふらん身あがとおほきぢや

うらうのひとかたならぬものおもひかさなるねんの
きりましてなみだにまづむかうしもあり見せのよね
まゆははしたなくふみのかす／＼かきちらしひとを
とがむるかへこと葉げにそれ／＼にながめつゝすぎ
ゆきこせばあげやまちとあるやど屋にたちいればか
す／＼にもてはやしのめやうたへのさかもりにはや
まのゝめになりぬべし

(卅三)わかれぢ

見をくるゝ中／＼つらきわかれしに月まちてとはな
にゆへにとゞめていまのものの思ひやるかたもなきお
ぐるまのまゝのはしがききつめてもゝ世もちよと
ありてのみうきまろぬするこゝちしてひとよはのそ
のほどをあかしかねたるわがね屋のひまさへことに
つれなくてなにをたよりにありあけのつきげのこま
にかたたづな引とゞめてもとゞめてもつきせぬきみ
がたまぐらのかわるならいのよならずはやがてあを
ぞやかたろぞやたいとにかくに月と日とゑんといの
ちをたのみにてまたくるゝよのあるものゝこゝろた
のしむあさばらけ

(卅四)むめあした

むめのあしたのにはひをさくらのにほひをくれてゆ
くはるともろともをくりこしなつはたちばなあやめ
くさあきはきゝやうかるかやおみなめしふゆはまぐ
れにまなくもみちちりしくあらしやまあらしおも
しろのふゆそらやくものあなたのはるかせにおちく
るはなのをのづからこすへにまらぬいろなしてちる
はふいきかわかそでにまばしやどるゝつねならぬこ
れもゑにしとおもひがわこゝろのこほりうちとけて
まくらにさわるかせもなくゆめもゆたかに夜はも白
かに

(卅五)まつがえ

くにもゆたかななびくよのなかをおさまれるためし
にはまつにこまつのおひそひてゑだにえだ葉にはの
さかへゆたかなるきみがめぐみのときつかせえだを
ならさぬみよなれやげにあをぎてもなをあまりある
わがくにのはるこそいとゞめでたけれ

(卅六)よ町

よゝのながめははるあきにいづれおろかはなければど
もひかるげんじのおもひ人よまちにうつすこゝろこ
そわきていわれぬけしきなれはるはまづさくむめが

へにはつねゆかしきうぐひすのをのかねぐらにやど
りきはつきせぬはなのゑんとかやこぞのかたみのゆ
きまよりわかかなさわらびもえいつるなをなつかし
みひとよぐさこてふやゆめをむすぶらんはなちるさ
とのなごりとてふじのうら葉にさきそむるわかむら
さきのすりころもゑのぶにあまるそでのいろ世をう
つせみのなきくらしほたるよりなを身をこがすあふ
ひぐさのなみにてあわぬ日おしくゑんぞこひわた
るゆめのうきはしとだへしてなあけやすき夜もすか
らひとぬるまぞひさしきといさびしきとこのう
ちうらむるこうたになみだのそでゑぼるつらひは
／＼のふつらひはわがこゝろこひしき人をまぼろし
におもひあかして身をつくしかけしいのちはかげら
うかあさがほのつゆよりもなをはかなしや野あきせ
しあかつきによもぎうになくむしのこゑまつむしす
ゝむしきり／＼すいとゝねられぬあきの夜にうつや
ひようしのからころもそでのなみだはゑぐれどもそ
らさだめなきうすくもりたかねのみゆきふり積りみ
やこのふじのながめにはあづまやかいぞなかるらん

(卅七)そでの香

むめかえになくうぐひすのこゑもろともにみなひと
のこゝろのはなもいろ／＼にうきたつはるのいとさ
くらかすみのうちにかをとめてたがそでふれしむか
しぞとゑのぶにあかぬけしきかなあやめにそよくな
つのかせいとゝすゝしきたそがれに山ほとゝぎすお
とづれてなをしむかしのなつかしくいまさらにぬる
ゝたもともうらめしやふけてねやもる月かけにかね
のおとさへかすかにてひとりぬる夜のまくらもうく
やとこのうちいつのまにかわうつろひてなみだつゆ
ちるあきの／＼くさの葉ごとゝゑら／＼とのこるをぎ
はぎしもおれてやまもあらはにまつばかり身はかす
ならぬみの／＼おやまのゆふしぐれ思ひとしふるかい
もなやけさのあけがたひとしほつらやいつもわかる
ゝきみなれどさりとてはさりとては

(卅八)こひのきやうか

よしやわぐれたゝ世の中はひとよならではなかり
けりきのふわすきしむかしなりあすはゑられぬよそ
にしてさだめないものましかのなるほど／＼ぬのは
なるほどゑろくなるほどむすめはくろむかさかふて
たもれやあゝこれのあふみすげかさをやあゝこれの

たつ田の川のきよきながれにさかづきせうかめと
もにのめや／＼さけはさかやにちやはちや屋にちよ
ろわきつじのなる川にとかくうき世はこひとたから
とさつてははんぢよと／＼みづのうらなにはあたの
ゆふぐれおもしろおもしろや人のおもひのつもりて
はこひのまづくとながれいづるよこほり川の水いろ
におぼれ／＼てなをながし身はうつせみのうつ／＼な
くもぬけのかちとやつれてもさらにえはてぬこひの
みち思ひくらしでうか／＼とうたゝねむりのうつ／＼
なくうさことの葉にうくばかりわれまなばなにはに
すてよよこほりの川の水ともなりやせんもゝとつゝ
けてさめたるゆめのわれにはづかし

(卅九)そめ川

ゐでのたまがわ水せきとめてきしのかわづのころよ
どむなるよどの川せの水くるまめぐりくるまのかわ
なみまくらありしゆかりにあいそめかわのふかきゑ
にしもかわればかわるあすか川のふちせよしやよし
のゝかわうつなみに身をつくしてもなにゝかわせん
うたひたはむれあそぶがよいわいのたれかのこらん
よのな川にかけてわたせるはしのうへより文とり

おとし水にふたりのなとり川よしやきみゆへたつな
のなにかおしかろのすそひたしかよひゆくそのかわ
なみにつきさしくだすふねのさほかわさむけきよは
をいとわであかすわがころも川なさへゆかしき加茂
川のなかくれくみてこゝろにいつまでもたえすなたえ
なる

(四十)わかものうら

ときはなるわかまつのいろうるわしくつゞくさかへ
はゆたかにていくよへぬらんすみよしのかみのめく
みぞありがたきみつのうらなみまづかにもあまてら
す目ののどかにてみやこのふしのなたかさよもろこ
しぶねのとふながめげにおもしろのふうけいやすま
やあかし屋わかのうらちきとも見ゆる月かげにとも
とちよりてくみかわすいのちものぶるきくざけにつ
きせぬ代こそめでたき

(四十二)かせんがひ

あとなつかしき世の中にいろをこのめるけんじかひ
あるひは百かひかせんがひわかくきゆふのすたれか
ひこひわすれがひすみよしのはまのはまぐりまゝみ
とるまほひのはるのはながひはたがそでのにほひぞ

とはいやむめのはながひもやみはあやなしいろか
ひをこのむこゝろのみやこがひいゑづとかひをてこ
とにやおりてかざらんさくらがひそらにゑられずふ
るゆきもつみなかくしそいたやがひのきばにすだつ
すゝめかひおそれななしそからすがひもいのおし
やるこゑきけはいとおもひのますをかひいろにい
てたよむらさきのゆかりときけばなでしこのゑた
みてゆふことはのあとはむなしきうつせがひ身を
かへてゆくこのもとなみまかしはのふたおもてう
らうつかひもあらばこそあらいそがひによるふなか
ひよぶこゑたかきあまがひもしばしまてとわまてが
ひのこぬわあわびのかた思ひななるすてんみなし
がひとはおもへどもわれがひのわれてもすゑはみぞ
かひにおちあはんとのかくそくをかたしがひとはよ
もなさじちくさのかひのにしきがひいろとるあきの
うらばとてこがいこさゝひいがひとる月もふけゆく
ほらがいのみねに入こそなごりなれ

(四十二) 煮まつくし

ほのくゝとまづあけそむるはつそらにかゝるかすみ
ののどやかにみえ七へ八系九重までもおなじころも

の煮まもよふきてうしほくむたごのしまはる日につ
れてひとしほになをいろふかきまつしまやおじまの
うらにうちよするなみにもまれて しまのいわね
につもるあわじゝまかよふちどりのこゑまでもはる
めく水にこぐふねの中にゑきねのとまがしまたびの
やどりのよもすがらあるじとたのむはなのつゆそで
にこぼれておきの煮まばらゝゝとりのこゑそへてき
りにむまなくあさばらけうちのかわしままきの煮ま
こじまがさきにふきかほる風煮なやかにうちなひき
つるにはめぐりあいおのしまあふしまことのわかれじ
にいくそでぬらす水しまにうつるもくもるはるのよ
のおぼろ月よにしくものぞなき

(四十三) ちらし

げにのどかなる春の目にかすみのうちにしのばしき
にはひふくみてむめのはな八えもせんよいまがさ
かりよおりたやのゑだなをみことによふさいたやれ
そてのなによせてひけさおれさちらぬまにちらぬま
に

(四十四) つゝじつくし

さなきだにはるかせゆかしみよしのゝさとながる

るさくら川はなとは見えしたに／＼のゆきこそにはまへくれな井しほりやへむらさきやこむらさきゆかりの水のよしのがわおほろの月のひま／＼にせめてひともとかりいりつゝち花のなさけのそのをくをたづねたづねてならさかやこのてかしわのふたおもてとかくものを思へとやいわてのやまのいわつゝちあらしのやまのみねのたがまつしくれにさへもそまでいくとしすごすらんげに春ことにさきそろふをふきりしまやこきりしまばたんつゝちのいろとをきさつま千よのはながた見なつ山かけてかほりくる其はなくるまあいらしきいとくれなぬにとびいりまんよまかきつゝちのはなのつゆてにやむすびてわがそてにくれゆくはるをしはしといめん

(四十五) みだれくさ

春ごとにまづもえいづる若草のいろもことなるふかみぐさすじくれくさのふきなびき月もろともにくもみぐさ葉もちりくるやかはたくさたれにみよとてかたみくさのこせしひとにたむけくさかふるおもひもふかゑの身はうきくさのねをたえてさそふながれにきしねのくさのみだれみたるもことわりくさゆふべ

／＼のそのひかりくさかせあり草のしなよわくはまなのはしのとをながめはやくも野べのはつみくさみやびやかなるおもかげをわすれもやらでこひわたるこゝろもふかきかけがわのあふせもがなといのりしにいくちよみくさかきもなくあだにくちぬるあだなくさいまは中／＼おもひくさしきなみくさのおとづれたへてとわぬいはりのにわきくさのつゆのすがたをさま／＼とおのが葉いろにこそめくさ身はすて草とよしくつるともわがこひくさにさくはなのゑんにあわでもはつべきかわとみだれくさなる心のいとをむすびなをすやこひごろも

(四十六) ながき夜

ながき夜すがらねられぬまゝにすきしことのみつ／＼ひとりまくらばかりにもものこそおもえこゝろつくしよよしなやいつみおもひみだれてものくるしきもつらやこの身のまゝならぬ世にひくてあまたのつとめのうきにありしあふせの其むつこともうそのかずかずそらおそろしくくゆるゝはいまさなられどせめてのがるゝ身にしもあらばこゝろすみぞめすぐよのさとにいとまなく／＼たいひとりのみきのふはけ

ふのむかしとたにも思ひくらしてあらやのすまひ心
なきともあわれをといてひとのたもともわかそても
しばしなみだにいろみへぬ

(四十七)ねざめ

わかれぬる夜のうきねのとこにふけゆく月のつれな
く見えてひとりねざめにつらさぞまさるしんきはら
しのたばこもよそにせめてゆめにとまたひきよする
ながきまくらのそのかひもなきちぎることの葉わす
れもせずはいんこゝろのいろをもふかきそでのけ
しきは身をしるあめのゆかしなつかしとは思へども
いかでかわせんこのさとのみのつゆときへなんうき
たまのをよさだめなき身はあゝものかなしときしも
秋のそらふく風よあわれかわゆきなくさをしかのい
つちゆくらんつまこひかねし亥のぶなわてのかよひ
ち見れとをちこちひとのおとさへたえてのこるあり
あけうすぐもとやまみゆるあきのゝころにもあれば
いとゝさひしさまさりてなをもものを思へとわがく
ろかみのみたれ心はそのひとに

若みどり巻二終

若みどり卷三

端歌目録

一	わか水	二	はるの花
三	松は豊のかはり	四	ふか草
五	たまくら	六	ほとんどぶし
七	かよひ車	七	ゑがらみ
九	もろこし	十	ゑほや
十一	どふでのかはり	十二	うらわかみ
十三	あふ夜	十四	あさかほ
十五	さかい	十六	にしきい
十七	いせのくしだかはり	十八	あさづま舟
十九	江戸ふし	二十	あさ草
廿一	玉のさかづき	廿二	春のやま／＼
廿三	ちくさ	廿四	あさかへり
廿五	せうし	廿六	ちやのみ時かはり
廿七	もちろん	廿八	松原かわり
廿九	こし葉	卅	はんちよ
卅一	ありまぶし	卅二	さんさぶし

卅三 むこがわ
卅五 くとき

卅四 かゝぶし

端歌

(一) わか水

春はいつしもよひわか水のなかくみそめたへすめでたいとそのさけたれもゑつけきあのかほつきだいは正月きさらぎやよいは小のはしめてうづきは太よさつきみな月せうでもとをすほたるひやさし七八月はだいこそよけれ月のながめにさくきくづきやそのきくのはなせうでもいろのめつらしやさてかみなし月くしもつきゑわすなみたいのかすもめてたいとしのくれ

(二) はるのはな

はるは花さきなもたかはしのかけしなさはかよひくるわのみちすがたれもめにつくあのはなきり月は三五やながめにあかぬはだてなうちうながとのきみやいろもふじべのみだれてなびくすがたをよそに見てのみこふるたかまのやまのみねのしらくもかつらぎやまとそのからはぎのゑもんのしなはゑはらしやさてうわぎのそでやたもとのかせにちらすなはなのきりしまをきみがにわきといつまでも

(三) 松はゆたかのかわり

あきの夕くれをともしやかにつくかねのいと身にゑむ野あらしにこゑをそろへてなくむしはかうろぎはたをりきりくすたれまつむしやくつわむし草ばくさ葉そだちの夜つゆなれてなをすいむしのなくこゑはちりりんくちるやなぎあふちかつらはまちにちりくちつてあとなくみだれゆく秋とたもとにゑばしといめん

(四) ふかくさ

まつよひのおもわくとつらきさらばはものかはゆゑをいかにとたづぬるにそのきぬくをしきたへにかねのかすくうらみた八こゑにせかれてわかれしのよしやそれともみをくつたよにあふさかのせきのそらねをはからばゆるせたいじかさゑゆひといふじかたいせつじや

おなしく

ふか草のたわれおのがひとりこひぢをはじめてわけをいかにとつたれはをのゝあだしにうつほれてふみのかすくくとひたうきにかまけてをもやせていろにそむ身とみなされた身はあさくさのどてのゑ

もともきへなはきへよだいじかさゑゆびといふじが
たいせつじや

おなしく

世にこゝにわすれかたきはまれにあふよのかへるさ
あわぬむかしはものかはとまたねのこのつらさに
ひたすらそでなくちねどもうきとつらきをみつせが
わこひといふじにひかれてはきゆるいのちかもちろ
んじやあいをへだつる中かきよりもゑのぶよごとの
さわりありともつきせぬゑにしかたいせつじや

おなしく

うきひとのをもわくをあすか川にたへたそれはい
かにとふたれはそのかねことのいつしかにかはる
ふちせをなげいたあまのすてふねよるとなくひとり
こがるゝつらさに身はあさましやそでのみなどにゑ
つまばゑつめだいじかさながれよるせをたよりに

(五) たまくら

かわすまくらにほどなく八こゑもつげわたるゝあ
かつきのそのわかれちはうさやつらやはやきぬゝ
のわかとこさだめてゝさだめてなんなくなみたの
かわともならばあふせのたよりとものふさりととは

(六) ほとんどふし

なかれはかなきほとんどうきつとめよるゝ夜ごと
にいつしかかわすまくらもいたつらにこひのいとま
もあれゑばしはつかのまもかすゝいやはや思ひに
袖はなみたのかわたけや

おなしく

あめのふる夜もほとんどゑのひきてゑらゝゑら
ゝ明かた鳥のなくねとわかれきて思ひ思はるなる
いのちもをしからすいなふねこがれてひとよもきみ
にあわねばならゑばの

(七) かよひくるま

おもひそめがはそでうちぬれてそめかわゝそでう
ちぬれてうきなばかりはよにながるともたへぬあふ
せをまつばかり

をなしく

かよひくるまのたそかれ見ればくるまのゝたそか
れ見ればつゝむつらさはたもとのほたる思ひきへて
はまたよるゝにもゆるひるはきへつゝなをよる
よるにもゆるえ

(八) ゑから見

かけしなさけのいつしかかわる今はうらみのくま
さりくさくよいぬるゝわがたもと

をなしく

おもひいづればうきことばかりよしやおもはじく
かりの世にくよいぬるゝわがたもと

(九)もろこし

むめのはつさきたをりしよりもいろをやしほに身を
そめなしてかよふみちしばつゆふみわけてへせめて
ゆめになりともへあふせをまつしまとやまはななく
わけよひねやのうちむすぶ下ひばよそにはとかへ
その人ゆゑにへ

おなしく

月をみるとうすくもみればそらにまられぬみゆき
のふるはさくらちりしく花むらさきのゑいろもふか
きこむらさきへなびくはあをやぎうき身ながらもこ
ひわたるたまかつらその名もたか尾はもろこしまで
もへもろこしまでもゑ

をなしく

あふと見し夜のあかつきかたにかねのひきにと
ろかされてなごりをしのそのよのゆめかえせめてま

くらこちよれかたみのまくらへさめてうつゝかおも
かけにたつとのいとゝおもひにみだるゝころはゑみ
だるゝわれがへ

(十)ゑほや

よひにあふてもうきことばかりあすのなんくなじ
みはおもへばつらきよにあさわかれへ

(十一)とふでのかわり

ひるはきへつゝものおもひ川すゑはあふせのありも
やせんとすではかなきこゝろをつくしあたにくら
してけうあすか川かわるならひのありまやまいなと
いはれぬいなふねののぼりつめたるわがこひのやま
みへざるかりがねにかよわす文もたまづさもとふで
たよりはしやさんすまいつゐにとだえの中とはなり
ていつかならべんながまくら

をなしく

こひのふちせにこの身をまづめすへはよるせのあり
もやせんと思ふ心につき目をかさねいやな人にもあ
いそめかわのなかれはかなきうき身をばせめてあわ
れととふ人もあらばうれしきいかにばかりきやくの見
へさるそのうちにみないつわりの玉つさもとふでき

しやうもかゝねはならぬそらおそろしきせいもんく
されおもひまはせばやるせなや

(十二)うらわかみ

じたいわれらは玄なのゝくにのゆきの下くさうらわ
か身をばふりよにあくしよに身をかいとられいとな
みをほきながれの身とてあさましうごさるいやな人
にもあわにやそりやならぬ玄よわけよいにはかうし
たことできのどくつらいはゝうきつとめもちろん
かなやさりとてはすこしはあわれみくれよがしはか
なのこの身を

(十三)あふ夜

こひはあやにくさわりがちにをもわくはならぬせく
はこゝろよあふ夜の玄ゆびはきのどくぬるゝゝな
んぼ玄のびてもたもとのいろはもるゝもれてみた
れてよそにさたんゝものういわが身

(十四)あさがほ

こひをつかねしくわだんのまくらもちろんゝあけ
てあさがほらんのかほよきはなのつゆすてぬはばん
かい大もんおゝもんおかしおのこのはまりのいろも
ゑもんがかへるはしごにたるきめもところしやはな

のあみ

(十五)さかひ

こゝはみやこの玄まばらくちよさあく玄よたをしの
ヲ、たれゝもあれはせうしめきゝなるまいない
たりやさきたりやさうかすウチ、さけのとがあればさ
んしよめきゝ

おなし

おもひあまりてかよはす文をさあまりつれなやア、
てにふれぬあれはせうしめきゝなるまいない
たとさゝゝこひのヲ、玄かけがあればちかいめき
ゝ

(十六)にしきゝのかわり

ゑたゝゝにつれなくさそふあらしにつれてそらに玄
られぬゆきふるころはいとゝみだるゝ花ころも心も
そらにうかれそめてはたゝ花ゆへとむねにゝゝむね
にたく火はふしあまかやたへやらね

おなし

たびゝのたもとにおつる心のなみだかねのなると
き日のいるころはいとゝみだるゝこひごろものうや
れゝさてもふうらみかねてはたゝわれからとあ
まのゝゝあまのかるもにすむむしいのつねになく

(十七) いせのくしだかわり

あたにみだるゝたもとのつゆをふかき思ひの草葉に
よせてほんにこがるゝなみだのつゆといろをくらべ
んそのみやぎ野のはぎの下つゆあめにもましてゑの
びかたなきこひのやま

(十八) あさつまふね

またねものうやふきくるはるかせたもとにのこるむ
めがかもあゝよそになしせめてうつらばまゝならず
ともゝゆめのかよひちかぎりゑられぬわがうきな
みだまくらもきけきぬゝ

(十九) 江戸ぶし

ゑよてにござつてもしよわけさへよくはござせあが
らさんせおさしでもをもしやれなんぼぶづくるとも
あわせはせまいそちでゝゝそんなことはゑやほめに
ゝ

おなしく

ひよんな人さまになれましていまはほかのつとめも
身にそまぬとおもゑやるそれはならひのきゑやうの
下かきそちでゝゝそんなことはゑやほめにゝ

おなしく

かゑるあしたのまつくれもなくてよねとさことにこ
の身をなしてなんぼきはくともかぎりあらじそち
でそちでとりもかねもへなるともなくとも

(二十) あさ草

あさくさ川のはやきおぶねをうゝゝなみにうちま
かせまつちやまのまつのあらしにそのよのゆめをさ
まされわかれぢのさらゝゝしさゑゆひといふじのう
つつなさせひもんゝらちもみだれてわすれくさの
ひとはなこゝろへ

おなしく

にくいことをきいたさすがも御身のたのしみならば
よしそれとてもえ

(廿一) たまのさかつき

さよのねさめにこととふあらしつねにきくよりわき
でさびしきつれてやまぢのほとゝぎすなきわたる
をなしく

すぎしその夜に松もろともにかわすたまくらゆめも
むすばずとのなくさへにくまるゝさてよひなか
をなしく

ひとのこゝろはあすか川なみかけしいもせもいまは

かわるせいまはかわるようすちぎりたのまれす

をなしく

たとひあわずとふみをばかよへふみはいもせのひと
のうらなきひとのうらなきいろみするひとふでもへ

(廿二)はるのやま

はるのやまにさいたる花はなにさくらなし
もかいどうかいどうつじややまぶきつばき
よしのやまはゑらくもわかつてはたかをたよ
なひくあをやきたおりておりて一ふだいろつとは見
ごとへ

おなしく

こひのだてぎにそめたるいろはなにさくらさひわ
もみかうばいさへにかばくち葉にもいろゆ
ふべのいろはくれないむらさきはあけぼの四五りん
さくらのちらしもんそらいろ月のおぼろそめごゑよ
そめは見ごとへ

おなしく

さがのあたりにあらそふあきのかすあさぢふに
なくきみかうろぎかうろきすむしまつむしは
たおりくれないくさほしかくもわけてかりかね

ことらにおつるはぎの葉あほに出てまねくはなす
すきすてられぬゆふべは

おなしく

かよふちどりのすまのうら葉のかすよもすがら
なくそでかけぢやかけぢやおとにきくさへうるさや
あたなみまくらもゑらぬひとねくみわけてとへが
ししほひのいしのいつしかあそれともみへぬこの
身はすてをふねこがる

(廿三)ちくさ

あきはちくさのいろともなしに思ひそめたよかのひ
ともとのゆかしなつかしうらみのなみだあらそふむ
らしぐれこのゆふべゑひとりとまくらひきよせおふさ
きるさにみたれておはなあらそふくろかみのいとを
めてゑ

(廿四)あさかへり

けさのわかれのとりかねつらやほんにつらやつらや
みたるウツみだるさりとみたるねんね
みだれみだれみだるくろかみのゆふかいなしやこ
ころせいもんいくちたび

(廿五)せうし

おもひ／＼がさま／＼こざるいちに身あがりかきなるつらさゑんきはらしのたはこのけぶりゑゆひのつまらぬくれ／＼もきのどく

(廿六)ちやのみ時のかわり

ねんのあいだはうきゑつむ身のいまゑばしぞやかならずへかならずたのむはこのゆくすゑつねならぬ日もわけていわれぬふた思ひ

(廿七)もちろん

かわすまくらにもちろんへだてはなか川の水もらさじこれむすびしもこぬ夜あまたにうらみをかさねてさよごろもゆめさへうときあかつきになこりをおしみてやかたねのつらさはゑつかりきのどくやせめては玉のをのうきにはたへなばたへよたのしみはうき草のねをたへてあふせをまつまでよ

おなしく

月のひかりはもちろんゑなしたものなれどあはれをもよほすみな人のうきやつらさのむかしをおもひの十寸かゝみくもらぬそらもかきくもりたものなみだはかわかぬわけじやにゑつからきのどくやせめてはやまのはにゑばしはのこりて見えよがしまだ夜は

わかひにさりとてはどうもならぬにゑ

(廿八)松はらのかわり

見もし見へんとまつ夜はふけてかねのひゞきもひとつまつかいこさんせとちぎつたまつよの／＼こゝろつかひはうみ川あさしやまさかこへて／＼身ゑるあめにゑよんぼとぬれてぬれかゝつたかいんぐわてあろとありしきぬ／＼うらみし事もきにあたるとはさらさら思はずさら／＼さら／＼さつ／＼とうつてはきぬたまつかせのみだれへ

(廿九)こしば

けさはゆふべのむかしとなりてはかなやひとりこしばのかきにうかれよるせのよい／＼／＼水ゑもあらばかぎりあらしのよい／＼／＼まつゑのそてにのこる見よしのうわかほり

おなしく

おもひこがれてあま夜の月にうちもやられすまらのそいねそんなならではよい／＼／＼はかにはないといふたことばのよい／＼／＼そのうれしさにあふてくやしやはづかしや

(三十)はんぢよ

きみがかたみのこのてなれくさいまはたれにかのふ
ゆふがほのはなをかきたるあふぎの糸をなかむれば
げにおもひはいとやなをますかゝみくらぬ月を見
るたびにこゝろつくしのあきのかせ身にまみ／＼と
にゐまくらせしすぎにし夜はそのむつごともむか
しになりていますてられし身は中をきの石かわくま
もなくあけくれは思ひにまづむゑ

(卅一)ありまふし

われはたひのものぢやいなめかけてたもれいわにさ
がりふじたよりなや

おなしく

まんきしのだけなやれすのすだれかけておもひはわ
れひとり

おなしく

ひくてあまたになこの身のつとめつらやおもわぬわ
かまよざい

おなしく

よひにむすんでなあしたにたゝむどてのはんする身
やすし

(卅二)さんさふし

こゝろつくしにかきたる文をたれをたよりにさんさ
まつよしなのおもひ

おなしく

うらみなからもまたうちながむ月はゆかりのさんさ
うき人によしなの思ひ

おなしく

ひとりふせやに月さへさしてたれをたよりにさんさ
まつよしなのおもひ

(卅三)むこかわ

むこ川のあたりにきくのいろ／＼きよくばたんたゝ
これむぎわら一りん一もと

おなしく

ほり川をわたれば見ゆる一里さんこあづまちみちし
はすみのわことうら

(卅四)かゝふし

人めまのべばあふ夜もたえていまはたよりのふみば
かりとはおもへどもこれもまた心だにさへかはらず
は

おなしく

ひとめつゝめばいろにはださてこゝろまでくるわが

なみだそでにはをちすいくたびかこゝろまでくるわ
がなみだ

おなしく

ねやのそらたきうきねのここにきてはまくらにそよ
そよと

おなしく

あわのなるとに身はまづむともきみのおふせはそむ
くまじとはおもへともよのなかのひとのこゝろはあ
すか川

おなしく

あすか川とはゆめ／＼ゑらてかたりすてたよはづか
しや

(卅五)くどき

なかもゑならぬゆきのあしたのとを山はつれゑろた
へかせも身にしむ野だのはられんばゑらべのこゑは
いよしもうわがれてわかれもちかしうさつらさ

おなしく

かよひなれにしどてのなごりの一里すへをたのみて
ふかなさけもありとのいまはつれなしよそになか
なか身をつくすきくさへゑんききのどく

おなしく

そてのもみち葉ほかに見へねどくれなるむねのゑく
れにぬれぬ木かけのあれがしかりのおとこのふへも
たよりのはしならばゑかもろともにこの身を

おなしく

ゆめもむすはぬねやの戸はそのつきかけまつ夜なが
らにいとしゆかしきあきかせきやらのかほりのよそ
にもれゆくうすけふり心づくしのうきそて

おなしく

ひとのつらさにこりぬこゝろのいつまでうきはたま
のをたえぬはかりにくれたけいく夜ふしみのゆめも
ながれてなみたがわゑからみかけてせかふよ

おなしく

かわすたまくらたえぬあふよのなかかわさはりうき
はしかゝるつらさはたれゆへよしやなかれにくちは
はつともひとすしをあたにはせましこひぐさ

おなしく

そてにとしふるしぐれたつたの思ひ川ぬれてもみち
のいろもながれのはてしなやなにをうらみにたへて
ちぎりのうすこほりな／＼こひはわたらし

おなしく

けさのはつかせ身にしむほとはなつかし比はふみ月
たがかよはせのふみつき七々のゆふべのほしのいく
よのおもひ川かさゝぎはしをかぞふよ

おなしく

こひのみちのくかぎりしられぬ身のうさそれといわ
でのせきもりゆるせかよひちよそにもらさぬ中をと
だへのはしばしらしらずやかゝるおもひ

おなしく

あらしはけきしき秋のはやしにたゝもみちいろにい
てずはちりもみだれもあるまいにもはやうき名をた
つ田川にながしてきのどくしぐれまたぬるし

おなしく

いかにこの身はうすきつとめの身じやとてもあまり
つれなやよそに心がにくやのもちやよしなしおもひ
すちよとは思へどひたすらこひがせめくる

おなしく

なこりつきせぬねやのあさゝけうつゝなやさらば
さらばとこゑもたえゆく野田のはらおくりかへせば
ひえのやまかせ身にしみてなたねのはなもうらがな

し

おなしく

ねやもさびしきいとものしらべのあかつきしゆびをお
もへばあはでこゝろのほそぬのけふのたよりをやき
かずやほとゝぎすなくさえこゝろにまかせぬ

おなしく

こひをしでうのいくせなわてにまどわどわるゝぎを
んやさかのかりのまくらもよの中ちよのかごとをあ
だにながすな下かわらうつろひやすきひとこゝろ

おなしく

いかにこの身はあたにはくちじこひごろもせめてと
へがしおもひこがるゝうきなみだつらや命のあるも
よしなしいまさらにきゆるばかりをひとすじ

若みどり巻四

一	二上り	二	てる月
三	しゝをと	四	かよひぢ
五	まつはら	六	玄よがへふし
七	はんぢよ	八	なる川
九	むらた	十	せきのこまん
十一	ながかたな	十二	ゑぼしおり
十三	まくらつくし	十四	こゝろすぐし
十五	おつゝら馬	十六	五月雨
十七	はなおり	十八	かごしま
十九	夜ふか舟	廿	かいふし
廿一	おつゝら馬のかはり	廿二	みやがわ
廿三	八重むめ	廿四	たて小袖
一	三下り	二	ほうかそう
三	さかいのおはな	四	むもれき
五	さをしか	六	さつま
	こそでかへし		

七	せんだい	二	すがゝき
	さわぎ	四	玄またゆい
一	てんがちや屋	六	ながやま
三	まかき	八	むかいがわ
五	なにかわす	十	五つのうわさ
七	たか尾	十二	あきのむし
九	すがゝきかはり		
十一	無常のあらし		
十三	ながと		

二上り

(一) 玄、おどり

さても見ことの由井かんばらやんれそれかべふじ
のおやまをうしろに玄てやんれそれかへみほのまつ
はら／＼てんとまへにみる

(二) てる月

月はむさしのよびだしのちよろをみかづきたてなど
う中そての月たれをまつよいあのかほつきとしは十
五やこしつきあしつきさへたこわつきなにゆふ月よ
かつらおとこよいとしかござれかわいかござれいざ
よひ月にたはむれあそべゑひ／＼あそべゑひ／＼ゑ
ひゑひゑひ／＼てる／＼月てる／＼をみたらばなん
とよござるまいかのてる／＼月てる／＼月のおもか
げ月を見あかしのみあかす

(三) まつはら

見をのまつばらそれからさきは玄がのうらはのひと
つまつすんとよいきなひめこ松まつよは／＼君をま
つ夜はとをやままつのやまさかこえて／＼みとてき
たのゝ七ほんまつよほんにかならずあを葉のまつ

こるきぬ／＼きぬかけまつよあらしまつかせさらさ
らどつこいさら／＼さら／＼さつさつとうつてはは
ま松のをとはさゝんざ

(四) かよひち

人玄れぬわかかよひちのせきもりはよひ／＼ごとに
うちもねてこひのながれの玄がらみとなりてひとめ
のせき玄げき玄のぶのやまのつゆなみだかゝれとて
しもうばたまのよる／＼ごとにあだまくらひとりか
たしくころものせきゆふべ／＼にあま人のぬれてか
りほすわたつみのみるをあふにてやみてたゞそれと
ばかりになごそのせきかすみがせきのかごとにもあ
き風ぞふく玄ら川の人めのせきははかるともよにあ
ふさかのせきの戸をわけてなか／＼ゆるさねばあま
るおもひはわれながらなをせきかねてむねはふしそ
ではきよ見がせきなれやけぶりもなみもたゝぬ目ぞ
なきこひに玄なく／＼さはりがござる玄のぶその夜の
月かげひとつわかれおそしとなくとりのこゑあは
でたつなやあふてのうきないづれおもひのたねな
らん

(五) はんぢよ

おくりわかれてまたたちかへるねやはありしにかわ
らぬものをいとゞさびしさまさりてひとりのかみの
くさまくらまたふかき夜それはさりしたとゑよく
とこたへしわか中いまはかたみのてなれ草うきおも
ひゑ

おなしゝ

いつかあきなんこの身のうさをさとのならいに身は
まゝならぬまことまじりにつくりしつみのかすゝ
おそろしや神かけてえそれはたれがなすわざこひに
こがれてよしなやありしなさけもいつはりのいまさ
らにゑ

おなしゝ

かわすまくらにとふほとゝぎすつねにきくよりあわ
れもふかくこゝろあらばとゑたへとかゑもなつのゝ
くさかくれはやゑらゝそれはゑゆびのなこりとを
きて、わかれのたもともひきははなさしいまさらにい
ろなつかし

(六)しよかへふし

あまりあつさにもんまで出たりやおてらわかしゆに
ひきとめられてのきやれはなしやれおびきらしやん

なおびのきれたはむすびもなるがゑんのきれたはむ
すばれん

おなしゝ

むかひとをりやるおわかしゆさまにあまりこと葉が
いよかけたさにのもしこれもしこれもしのもしのも
しおくるははながみがしよんがへのんやはながみが
のもしおつるははながみかしよんがへ

おなしゝ

東坡さんごく淵明李白しんの七けんはくらくてんも
すんとてうじてあいせしといのそれはもろこしわが
てうにては心よしだのけんもじ様もさけをのめとて
ゆかされたしよんがへ

おなしゝ

あわでぬる夜はゆめこそたのめうつなつま戸をよる
のあめせうがへ

おなしゝ

だいくどのよりかちやがにくひねやのかきがねかち
がうつせうがへ

(七)むら田

さけはのんのみたしのんのむことはなんならずおさ

かおはんかはやしを見ておとんどをるおはりはお
ところにお中の町こすはこく町のはんはぢしらすやれ
このぼしたてよい此とのごてござるすんど恥をしら
ぬはおほうばうむら田はんひやうへをみたかいかな
なんほし夜もひもなんほゝなんほゝゝやれしりよ
はせをてなんほゝかちでかよふたゝいきおほのかけ
られおはやまかくしいなばをみたかやまふしふきり
やうねんななんほくあいだになんほゝゝなんほく
やどのもめやいなんほゝ見られぬにくひつゝむかひ
まんちう屋にもさ半兵衛やれこりやせひをつくと
うをつくとつゝつゝつゝてんこじあること
ないことふんだいたありもせうないにちよらうくど
くさそれで人がわるくいふにさあのかひたんめちや
屋のそうひやうへせいもんあきかせか

(八)なる川

さけはさかやにちやはちや屋にちよろはきつじのな
る川にきつぢのぢよろはぢよらうはきつぢのなる川
に

おなしく

なゆそなゝないそさつきにやもとるをそて六月なか
ごろに

(九)ながかたな

ながひかたなをさいたとおもてしりのまくりやるや
せじりをやせじりをなしりをからぎやるやせじりを

(十)せきのこまん

さとのよねしゆはいろよひものまづたゆふはかしば
かき夕きりさんごにはなさきッゝかほるみちしばた
かはしながと大はしもろこしをそろへてそれゝこ
とらわめきだせ山の井よんよしを かやゑざりや
ゝゝしつかみくにすがはらありわらはなのみふねに
ちよはしやうきはしそりやかくやまよゝこにしま
つえにたかまやゝゝうすぐもわこくいづみにおふさ
かいつゝたか尾ちよとさてゝゝともゑにきく川や

(十一)まくらつくし

きみもゆたかにつくよひさしきなるまくら春はまづ
さくはなまくらさてゝゝみことにさきそむる花にま
けしのこよねを見たかふりよになさけをにいまくら
思ひわすれぬありしそひねのそでまくらなつはすゝ
しきかごまくらうたゝねまくらひとまくらちよつと
ひざをばごめんなれさてゝゝゝごめんなれそりや
かりまくらアゝそりやかりまくらさいわいまくらこ

まくらあきほもみぢ葉みねのあらしくくるくく／＼
やつくるくく／＼とるかへしてもひとつかへしてま
くらかへしのしなもよふゆはしも夜としのきてか
よふまたのあふせもまつかねまくらきみのたまくら
ちよもかわらし

(十二) ゑばしおり

あけてこよみのにたるもんじはきのへさるまづはつ
かうしんのあそひにはそろへてすきにあかゑぼしこ
ゆびゑほしは若とのゝすがたはまたとなしうちゑ
ぼしのひぼをこむらさきしやんとむすんでたてゑぼ
しいせのねぎしゆはひだりへみぎへみぎへひだりへ
ひだりへおりゑぼしまんざいらく十文きんのゑぼし
はきみが代のなみもしづかにかざおりゑぼしとめさ
れた

(十三) おつゝら馬

さても見事のおつゝらむまようへにやせんしきから
しまのふとんふとんはりしてこせうしゆをのせてそ
ななくだりかおりやいまのぼるふみをやろにもこと
づけしよにもこゝははこねのやま中なればふでにや
ことかくすゝりすみはもたずもしもみなくちおとま

りならばふだのつぢから四五けんめのちや屋てむま
もそくさいその身もぶじでやがてのほろといふてた
もれゑいこのさんさ

(十四) こゝろすゝし

やまとはしからよぶことの葉のうたのなかばにさす
さかづきはつゝくやましゆはおさんとのだてをした
やのきりものきかへなんくてもしじらおりくす
そははらく／＼ほろをはさぎやるひとさんとはいや
といわれぬどうもいわれぬそでをひかれて中にかい
これもだんなのごりしやうかのがればさんくも
どればさんく／＼なんひんさんさつさ三六十八ばんほ
かのおきやくはいやらしうこざるあすはかならずく
れぬさきからござれのきやくのすきまにかならずあ
いましよ

(十五) はなおり

やさしむすめのおりかけてたきめせく／＼みやこの
とのごこひにきんきんきましよはおはらしつはらや
せのさとしばめさぬかつゆふみわけてこひにきんき
んきましよはおはらしつはらやせのさとしばめさぬ
か

(十六)五月雨

なさけつたなきくるわのすま井いかなよもくほと
ときす五月雨へさてもわけとそいねのすへをおもへ
ばそでぬるゝいまさら

おなしく

人はいまさらなにはのうらみよしもあしきもよのな
らひさりとあへさてもいろにひかるゝよしもあしき
もよのならいざりとは

(十七)夜ふか船

ふねをだしやらば夜ふかにだしやれほかけ見ゆれは
なつかしや

おなしく

こきやうこひしやわがつまゆかししばのいほりもな
つかしや

おなしく

あふよなければわが身にいまはすゑのわかれもなつ
かしや

(十八)かこしき

ふねはせんそういろとまんぞういろふとまんまよな
さからつきたゑもんとふねはえないさ

おなしく

うたのよみてはみやこよなさしよこししよたいみや
うもまねたがるは

(十九)おつゝら馬のかわり

とふつとはれつへだてぬなかにつらやきかんせわし
が身のうさをあねははらじんわしやちや屋つとめつ
ぎのおとゝにかげまをさせてとゝ屋かごかきかたう
すひきていちのいもとにたちきみさせて五でうあた
りの月見せてよひこのさんはなれゝのうきつと
め

(二十)かゝふし

よいゝゝゝあのうらしまかあけてくやしきたまで
ばこたまでばこさりととはたまでばこあけてくやしき
たまでばこ

おなしく

よひゝゝゝあいそめ川に水に一ふでかきつばたか
きつばたさりととはかきつばた水に一ふでかきつばた

おなしく

よひゝゝゝなにはにもゆるあしのゑはやのゑたに
こそゑたにこそさりととはゑたにこそあしのゑはやの

ゑたにこそ

おなしく

よい／＼とりはら／＼とひぎをまくらになきね
いりなきねいりさりととはなきねいりひぎをまくらに
なきねいり

おなしく

よひ／＼なむあみだぶつゑねばおてら様のゑよ
じせわになるせわになるさりととはせわになるしねば
おてらさまのゑよじせわになる

(廿一)ゑらつゆ

おくはゑらつゆやどるは月かげすめるこゝろのあふ
せのとこわかれのそこにはぬるゝがそでたもとにの
こるののこるかたみのなみだ川わたりて見ればげに
やうき世はうきねのゆめうきねのゆめにはおもひの
ふち身はゑづむともよしやよしのゝいもせやま

(廿二)みやがわ

みや川すぎてすゝかのまちにゑぐれ／＼をいとわぬ
ひとはさためてこひのうたよむことは

(廿三)八重むめ

花にあらしもよいけのうき世ちらささくらもあき

こゝろあきこゝろちらささくらもあきこゝろむめが
さげがしいよ八重むめかゑだをたおるふりしてかな
らずこさせとさまをまねくへかならずこさせとさま
をまねくへゆめになりともあいたやみたやゆめにな
りともゆめにうきなはさんさよまたゝししなやさ
そう世しやのまれにあふよはうつゝかゆめかまれに
あふ夜はかたるまもなきさんさ鳥のこゑよしなやさ
うきよじやの

(廿四)だて小袖

やまとおふちのにきをふそではみやこぢよらうゑゆ
のだてこそでこすまそへゆきのうちよりはやさきそ
むるはなのふりそでをかやとめそでよ身せばかくそ
でいよたてそではいつもくるわのちよん／＼ぢ
よんぢよらうゑゆぢよん／＼ぢよんぢよらうゑ
ゆそれさ／＼そでふれさをそれさ／＼そでふれさみよ
のさかりは千ねんまんねん／＼／＼／＼まるそでき
みのめしたはいつみのつほそで

三下り

(一)さかいのおはま

おとこやまちに花をみなめしかさいてあるあるひと
のながめしはいろかなさけかほだしのほにてないさ
だめて／＼ひんひとはなと世の名にたつほどにこひ
くさたねのかりかや

(二) ほうかそう

おもしろのきみがみくにやちよをふるともつきせし
まつがえはつるのやどりとなるてふたみのかまどの
けぶりにのべのかすみもうす／＼とうめはありやと
きなくうぐひすやとらばやとれわがのきばのむめあ
したはくれのはるかせはるのはなわあめにまほりて
なつのあやめはかせにかほれるあきのおばなはつゆ
にみだるゝふゆのゝゑだはまぐれにいろづく野やま
はこの葉にうもるゝげにまことわすれたりとよ月か
げはながれにうかみてつきと日のふたつのひかりよ
よをてらしていまにたへせぬめぐみかな

(三) さをし

さをしかがつまこひかねなよますがらいよへみねを
やわけつゝやのさてさとへをりもみちふみわけか
へろとさかへろとさかへろとさかゑろとさなくねさ
びしきゆふまぐれさのみやなけいけやのさてなれば

かりともに見たるゝはきのつゆまつほりと／＼まつ
ほりとならぬこひちに身をやつす

(四) むもれ木

うきことをたれにかたらんゆくゑなきまみづながる
るいもせ川せきとゝむべき身ならねばよそにちぎり
をあた人のありしなさけのことの葉をちやにおもへ
ばうさつらさ身はむもれ木のうかりけるはずゑにせ
みのきんのこゑをりしもひとをおもひ出ていとゝさ
ひしきとこのうちときしもあきのゆうまぐれくもの
はたてのたへまよりもれてさやけき月かげにゆりの
ひともとたおりし人のはなのかほりをそのきぬ／＼
にいくよとめてもとめあかぬあかぬあゝうつゝなき
たちすがたこづまふりよきまな／＼にわれなれそめ
てかよひちはぬる夜もわかでたまくらなたまとかた
しきゆめはなし

(五) こそでかへし

こひしその夜はこそでをかへしねてはゆめちあかす
ゆめさへわれにせかせてみゆるさめてひとりはおち
きなや

(六) さつま

やれ人のよめ子とはほかけのふねにそんれはくみ
てはらくなそうでさまくかござるよのあさせうが
へ

おなしく

とばのなかまを夜ふけてとをれやそんれはくこ
とやまのねてさまうかといのあさせうがへ

おなしく

さつまわさもとに御ばんまもなくばつれておちよも
のわかつまをえ

おなしく

いせまつんぢよさてよふさにほんのきやうよくよ
さとめてもとめあかぬ

(七) せんだいいうた

せんだいのおはなはたけのけしのはなびんごへ

おなしく

やゑにひとへはこゝのえのびんごへ

おなしく

これのおかたはゆてのかぶりやうかうおびのまよう
までまよへらくとびんごへ

さわぎ

(一) てんがちや屋

さかいてんかちや屋くうくとござれさこふやおま
んでおちやもめきくおふといやうさがござにかま
まよさいやながござやこちやまらぬさんせうめきめ
き

(二) すがきうた

見よしのかほるははなさきやみちしばをふまうあつ
ましかひそけともろこしみちとせいくのゝみちの
くみゆきはまゝならすめいまよはすみのへすまあ
かし夕きりふもとちのせちさとふきくる風にみたる
るはつはなこむらさき若まつ小むらさめことうらや
くもをさんごのきてうはこゝのへのたちはなあふよ
のかよひちみうらをうかくなかわれとゑにしのき
く川はちよのうてなに

(三) まがき

まかきのもとにたちまのひこぬ人をくまつ身のう
らみいわためやくやもすそをかいとりてつくく
どてをながむればどてのはんだはぼうをつくおてら
のほうしはかねをつくこちのなじみはうそをつくさ
てまたわれらがかすくのつくりしつみもおそろし

やのちの世たのむなむあみだぶつゝいふてかへる
さにつきあたりまわりてむねをつく

(四) 亥まだゆひ

としのよわひは六十ばかりの亥んふつて亥らがの
かみをだてにゆひなわてのちやにこしをかけづきんと
つゑをそばにをきなにともものをいわずしてやまで
らのはるは山しなのけちとはもやでしともがけふは
せちあすはせちといふてをれば亥らぬはかつてらち
はないヤアこれにつけてげんとくかたへ文をさやり
たしのぶせつゝじやすますものではないわさてり
はからぬゑ

おなじく

としのよわひは二八はかりのちよらうのたけなるか
みをしまだにゆひあげやのゑんにこしをかけすやり
とかみと手にもちてなにとも物をいはずしてたゞさ
めざめとなきいたりおもふかたへのふみはやりたし
なふきみさんまあつたものしやないわさててはかく
すへ

(五) なくかわす

てぐちた中になくかわづなにがなるぞとふたれば

そがとのばらがなるとのなせに女らうもかわいてつ
いとをるこれびんほうめ

(六) なかやま

しろいなかやまつむぎをとびいろにそめこんでよる
ははちでうと見せかけたいまどきそのをくうべい
かじやりばのなぬしでうつけつけないおふよいわいな

(七) たか尾

にあいゝのこまつしやつれてあくしよゝかやん
やをやにもまさるそれゝそれゝどうらくたいじ
んうつけにたわけにめうがの子かんどうとんのと

(八) むかひ山

のちのあしたののこりのきぬはきくかおいけになも
ゑびす川せわもなさけもひとつとりをいてふとんきま
くらそこゝにとりておそふまあそふよアイノテむか
ひ山ふしのつとうよみやるはしのをんばはきをと
あぎやるすのこほとけはらいかうめさるうらのおは
いはちやんなまいたゝよがあげたそれでねもせて
まよふたへ

(九) すがゝきかはり

いまどきふられぬとこのうち御くらいしよわけもら

ちがないねぬけの女らう身あかりもん日はとむねか
またしておちやをひきしちまでをきはてふだばかり
ふるかねかいもがをおつたやりてのせんさくうるさ
しくるわはもの思ひこのさとのうれたやりやうりに
かまわぬちやづけにやきみそ心かけこゝらはよひか
んひとつとなんどうろくさかせどもあさぎけの
もふにもひんなるあげやてこざせなひ

(十)五つのうわさ

こゝに五つのうわさがござるいちにいとちやわんに
おゝきな事ができましたたふたつふらちはへんじもき
かひてうりきつた三にさがみさぶはあみがさすがた
にさまをかへかけゑくわいちうさじきからのけんぶ
つありやこりや四五はいふくとんひ四つよしたはて
まへのひやきとりまぎれしらてしらはけ四五十はい
のこがしなむさんねうちのとちがへ五ついせもど
りのをみやげはあめに／＼一にどんぶり二にあかへ
さう三にかうらいせとのそめつけうつちんのやわた
どのたくみにたくんだこさくに傳右そのうちまいり
て申わけはかめしよじもしよわけもへをしにかいた

おなしく

かけいて給ふはどこ／＼ぞかみは一でういまで川二
でうほりかわ三でうむろまち四でう四めんのあなた
なるみゝづかすぎてぼくせんじふしみのさにとつき
給ふこゝに五つのはなしがござる一にいつくはほん
ごのみぞにつきこんだふたつふらちなせつちですと
んとはらきつた三つみついほうしはすみぞめすがた
にさまをかへちやわんあさぎけくわいちうときや
／＼ありやそりやかちぎねふくとんび四つ吉のはお
ぬすのけんとしてしろむくさくらのほかしなむさ
んねじりをとりをつた五ついまがわにみうらがござ
る一におはらいなく二に物さしよ三にかけはりせと
のそめいひうつのやのとうだんごつけぎでつくつた
あんろうきんちやくとゝさまかゝさまそくさいかそ
のうちまいりて申ませふ何をしよじもしよわけその
とをり

(十一)むじやうのあらし

はしばのけふりむじやうのあらしもせうべんくさき
にこまつたいつもやしよくのいでたちはしゆわんし
ゆをしきあつてきさてまたにものゝふたとればい
つもしいたけかまぼこのいろのくろきはべんけいか

かみしもぬいで禮にくるせんたくはしの八角をこん
がうづゑともなづけたいつのじだいのやきものやら
すもとるりきでもむしられぬもふない

(十二) あきしむし

あきもなかなばにすぎゆくときはなかなばもくすぎゆ
くときは野べのむしめかなおどろきさわぐつわむ
しこそつられかろうぎく身はみのむしやちと
でんでんむしなめくじりくつわむしこそつられか
うろきく身はみのむしやちと出てんむし

をなしく

すてにひまちときこへしときひまちくときこへし
ときははらのむしめかなぐらあいたいたなんとした
おとろきさわぐにしめかたをば見えてきたいのみた
いすぎずきやうじうどこんにやくなべやきにしめか
たをば見えてきたいのみたいすぎずきやうじうどこ
んにやくつとせ

(十三) ながと

ありやながとてたながとおぐらのしきしはねがさが
るをぐらのしきしはねがさがるすんと見たれたやま
のアイノテきくだしたくいこく見ちのくねさめく

い

をなしく

出たたかをうすぐもまつ山たま川さけのかんすんと
みだれたしらいとアイノテうけだしたくにしをちと
せもうしろおび

若みどり卷四終

若みどり巻五

一 三 五 七 九 十一

半太夫ふし
うつほぶね
戀はなし
はつせ川
なかつ月
白りんす
かるやま

二 四 六 八 十

すきや手拭
あたなさけ
今やう
おとづれ
とらが石

半太夫ふし

(一) うつほぶね

あしたのあらしゆふべのあめまつほのうらのうつほ
ふね身をうきものとおもひたへいのちもがなとしと
ふまことも大ぬさのかすくよくのいつわりになら
べるひとのこゝろにもついなれなむたまくらにち
ぢのやしろのゆふだすきかけてもつれしさゝめにも
とふで女ほにもちやさんすまいわしはつとめのまゝ
ならぬよい／＼ごとのみだれがみそらおそろしやき
にそまぬとのにそいねのまくらにはかねもいとわじ
とりもなけうれし煮のゝめあさけにうきをわする
ゝそのふせいこわいゆめみる心なりかふしたつらい
つきひにもゆびおりおりつゝかた様にあふがうれし
ゆてうかうかとどふしたことのゑんじややらわする
ゝひまはないわいなふかきなさけのこのうみなみ
はこすともすゑのまつかわらぬいろをたのむによき
みとむすひし下ひほをひとりとはとかじたまのをた
ゆるなげきはありともとおもひしづめるありさまに
ふたりのそでやしほるらん

(二) すきやてぬくひ

よこくものしのゝめからすいわばきけきのどくのや
まこへかねしにわけよき人のまなくにて鬼ひとく
ちをまぬがれてそれ程までにほかもなくたどりく
てみちしばのときしもあきのもなかとてやまだのい
なばかりまほにたけのまろやのまづのめがふゑをも
まろき月かけになくねかわいやすをしかのみだれ心
かくろかみのよれるつなとて大ぞうもつなかるゝな
らいかやたまよのひめをこひをめしいつしているも
いたづらにゆくさきくらきこひのやままためづらか
にときならんほとゝぎすの一こゑかかすかにまやみ
のきこゆるはこゝはいづくぞおぼつかなさればにや
こゝろから世をすみぞめのもりちかきすくせのさと
ゝこたへけりなにまもく町とかやつゐておかしきこ
となからうきが中にもものゝとわんゆびきりかみきり
いれほくろよねのくせとていきたなくいつもときわ
のこゝろしてたれかなさけをむげにせんとはとくち
すさみゆくほどにとあるざいまよにつき給ふ

(三) 戀はなし

はじめよりつとめばかりておふきやくとたへずかさ

なるいろごろもついのよるへとなるときははじめの
うそもみなまこととかくたゝ戀じにはいつはりもな
くまこともなくゑんのあるのかまことぞやそのほか
よろすこひはなしうさもつらさもとりをゐてさすい
たおとこのうわさしてともにたのしみちやわんさけ

(四) あたなさけ

あたなさけよごとにかはるあすか川なかれの身こそ
はかなけれみないつわりのこのさとをまことぞとお
もひてやすへておとこのうかれくるよるべさためぬ
うすちきりあすは又にひまくらかはるならひの世の
中ゆふべにはおのこたちもとよりもなをちやわんさ
けよいすきにけりいきたなくふけゆく月にわかれぢ
のちかきをいとふこゝろにやみたれみたるゝくろか
みのすへながゝれとむつことにほとなくつくるもん
あきのたちわかれゆくみちまばにくちてかひなしな
にのみたちてうき身なからのゝはしはしらゝげ
にげにぬるゝわかたもとうちもねられぬかごのうち
いづれおもひはかすゝのまなこそかわれこひのみ
ちさりとてはまたあふまてのまゆびをおもひのやる
せなくかせも身にいるあさぼらけ

(五)はつせ河

むみやうのさけのよひこゝろゑづむおもひのはつせ
がわふかきながれのせきとめてこゝろづくしのみた
れかみゆふかひもなくそのまゝにかのわけさにか
よひきていねもやらぬひぢまくらむかしにかへり
つく／＼とあるときゑまばらやふしみのゆめを思ひ
でにうかれそめにしをりもありいまはまたかゝる世
にときとともにとおとろへてかすならさりしうかれめ
ににせとむすはんひたちおひさてよい申さためなき
身のものかたりをんなはいとうちゑほれなからゑ
てうきことをきくもよしなしゑでのやまつれてこゑ
んとたちいでゝふりあげみれはおとわやまぎをんば
やしもそなたそとかなたこなたをたとれとも人めつ
ゝみのゑげければありしところになちかへり夜あけ
からすともろともにうき名をなかつ下河原

(六)今やう

よゝことのはなのさかりはいろ／＼にまつしほがま
はうすいろのゑろきにあかぬきりがやつ名もやうき
ひはあけぼのにあさきさくらのゑなよわくゆきかふ
人のかす／＼の一じゆのかげにやどりして一河のな

かれおもしろやちとせものぶるきく水にむかふを見
れはなまめかしさけかみはむかしとて今やうのなげ
しまだゆくゑもしらぬそらだきのわかたまのをもあ
こかれてたとるみちゑばし／＼にそてと／＼もた
しやうのゑんまくすがはらにみのこしてたよりもと
めてたまづさとおもひつゝけてうたゝねにゆふべを
つぐるかねのこゑあすをもゑらぬ身のゆくゑせめて
こゝろをはかれがし

(七)なが月

花のにしきの下ひばもとけてなか／＼よしなやな見
そめすばいまの思ひはあらしをとなをもゆかゑさま
さりくさもしやきみかをとつれもこよやこよひはな
がつきよさてもいのちはあるものをうらみながらも
まつひとをもしやそれかとみればきみにはあらね月
がけのにわにゑげりしはぎすゝきすゝしきかせのは
つとふきくるそのをとにむしのこゑ／＼ねをとめて
いとゝさひしきあきの夜をまつまひさしとたちいで
ゝまかきによりそひたまひけり

(八)おとつれ

なみだましのうすゝみにあとさきわかでかくばか

りあかてもおもふ思ひきやくゆるわらわがむねの火
はいつかきへなんきゆるともあだしこの身はきみに
さてまかせおきにしまき文にこゝろのたけをわりな
くもあかしやすまのうらなきはあらゆるかみにかけ
まくもいつわりならばしやほんにわけてみせたきむ
ねのくもかよふこゝろになにとかとおもふこゝろか
もればけに人やとがめんかなしやとおもふにあまる
なみだ河なかれうき身のならいかな

(九) 走ろりんす

走ろきりんすのひたひほも走やらとけぞするよしな
やないろにいまするかうばいのうらふきかへし走と
けなくまちわびしこよひやいとかなかくしいやま
てまばしかねのねのひやくかすくかぞうればはや
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
もこゝろのころころころころころころころころころ
てくれよかしさてもいのちはふ夜あけのからす
へ

(十) とらが石

それはそのくいとしさはねてもさめてもわすられ
ぬたいそのまゝのうつりがと走とそひねのいれこ

ちあわでいなせしその夜はゝほかへもよりておは
すかやまたことこひをおもふかとすこしはねたむこ
ころもありみちのほどうちの走ゆひなとやとおもふ
こゝろからさてもその夜のねくるしさとやあらんか
くやはたらせたもふかとつとむるきやくをほかにな
し走のきかねたるありさまはこれもめんぐわのうち
ならめそのほかよろづきくばりのせつなる事をおも
ふにそこひのないのかまゝならめとまだくひしむる
いのちげのすへはかしくとかきとむ

(十一) かるやま

ふれくくくきたんばのこゆき京やの仁左か走まん
せしにはのまつさへ走ろたへのをつから風かのま
するさけふけてまくらかるやまふとんにはたもつ
けあへすこゝろよきゆめ二ツ三ツ七八十四五すつと
んととんとうちくむいゝ里にそなたならではよい
くよいほかにはないといふたこと葉のよいくよい
いそのうれしさにこのとし月のうきつとめなぐさむ
やすかもありけらしされどさよころもかすくく走や
うのわるいはすいからおこるうそにもほれたとさす
かうしのちのよかけてたわふれのひと夜ふた夜のた

まくらになかきやみぢやくろかみのみたれこゝろの
むすほふれてとふりくらべんあさまだき身はきへか
へるあさわかれ今迄ばしとや又のあふせをおもはず
はたれか見すてゝかへるべきさはさりながらけさは
などわきてなこりのおしきぞやわがこゝろからつみ
ふかきりんゑはめぐりくるわのうちひとりももれぬ
なげきぞといさめいさむるそでのあめぬれてほすま
はなかりけり

ふし／＼おほき吳竹の世にしあれど月に嘯き花にむ
かひてかきならしふり行窓の雪紅葉色になるてふた
はれ島にはあらで歳比こゝろひかれぬさはあれど聞
なれ手なれしことの葉はひたすらくりことのやうに
覺へければ何がしの檢校の許にてより／＼手をかゑ
品かはりたるとなえ歌ひとつふたつより數まさりぬ
ればあつめて巻／＼となし函底にひめ置ぬるを詔嗣
氏のこふにまかせてかいやりぬることにはなれり

静雲閣主人書

姉小路通堀川東に入る町

丹波屋茂兵衛版

若みどり巻五終



(しへか見の巻首葉落の松)

増補松の落葉首卷

中興當流あづま淨留利

目錄

一	秋の色	作者京くらはし	半太夫	ふし
二	わかれの色	作者同人	同	ふし
三	ひとりね	同人	同	ふし
四	十六夜	同人	同	ふし
五	助六後日	同人	同	ふし
六	京はらんへ	同人	同	ふし
七	かつらきつばねをり	同人	同	ふし
八	放下僧	同人	同	ふし
九	露のまへ舟路	同人	同	ふし
十	たるいおせん	同人	同	ふし
十一	おせん物くるひ	同人	同	ふし
十二	上るり御前やりおどり	同人	同	ふし
十三	參會和會我	同人	同	ふし
十四	としま八けい	同人	同	ふし
十五	與作二代目 とこよおさん	同人	同	ふし
十六	曾我掛物揃	同人	同	ふし

十七	櫻姫ごばん人形	同人	ふし
十八	平安城草花つくし	同人	同
十九	みさほの前忍の段	同人	同
二十	櫻づくしごはん藝	同人	同
	小うたの部		
一	松風	作者京くらはし	
二	わかれのかね	同人	
三	うば玉	同人	
四	忍ふ戀	同人	
		作者	

増補 松の落葉首卷

(一) 秋の色

あづま半太夫ぶし

いつもきくふもとの里とおもへともきのふにかはる
風のおと身にしむことのあしきなくのすへの虫のす
たくなるちくさの花とあたくらへなみたの露はしく
れつゝ空行月のかけうとくいとゝおもひにうきしづ
むかりねの夢もむすはれすきぬたのおとにさよふく
るときしとて秋をつけくるかりかねのよすかなきこ
そかこたれてあやなくのこる袖のかにしばしわする
るうさつらさかやかのかきばもやゝさむくまかきのき
くもみたれ亂ておく露霜の猶ものさひし秋の色

(二) わかれの色

武江半太夫ぶし

けにわりなきは色の道まよふは人のならひかや君か
仰のつらからは只一筋につらからて情のまじるいつ
わりとおもへはなをもます色のきるにきられぬあひ
しうのれんほのやみのくらかりにくわたくを出てや
うゝにたれまつはらの橋過て河原おもてを見わた
せばけふは嵐もはけしくていとゝ身にしむ戀風や君

かおもかげみにしみてそなたの空も打過ぬ名も清水
にさし懸り歌の中山せいがんし爰はいつくそおのゝ
しゆくきは昔の名にふれしかのふかくさのしやう
くの身をしる雨もよそならずわか身のうへとうら
めしくけふの名残のきぬくはなかくつらきわか
れちに月まちはかのなつかしくたいあこがるゝ思ひ
ねにうたゝねもりの夢さめてとあるみてらにつき給
ふ

(三) ひとりね

あづま半太夫ぶし

さきそめしよりちもとの花のおもかけを見そめにし
より我心空行雲のきへくときゆるはかりのおもひ
ねにとこの山かせ夢たえて枕にかゝる月見ればちゝ
に物こそかなしきに身はかけろふとおとろえてある
かなきかに世の中の身をしる雨にくちはつるかはく
まもなきそての露いはぬはかりそなにはなるあしの
しのやの下にたゞけふりものかわむねの火のつゝむ
とすれと色に出てひとりこちたきねやの内

(四) 十六夜

同 半太夫ぶし

くもゝなき秋の今宵のいさよひに見しよの人のうは
させんまつもゝしきのほそどのにさやけき月のうつ

たかく歌のだいとや是ならし扱我戀をいのちやう
おもひかけすはみやしろの月にわか身をかへり見て
うきをとふやとひとさとのかやかのきはのたけかき
よすましきりたる心からくもれうき世も月も見はて
しすみの衣の袖わひしやくはしにもあまりぬる琴の
いつきよくたまだれのほのかに見へし月かげや十二
や三の袖つめてすいなしたしの目に立て舞子なりふ
りつかのまと月を便りにかよふ島原しのふれと松の
くらひや梅の庵もつたあけやの其けしきけこならぬ
こそよねはよき月にうとまれおむかひとかふるかや
しのあとになりにおろせゝの小ちやうちんおかへり
といふ聲たかくのへにすたくるむしのねとわか身も
ともになきあかすみあかりくらきまぶくるひあだめ
にかくる月かけやしはしはうさをそかたりける

(五) 助六後日

江戸半太夫おし

とかくほとけのおしへにはいかなるやばもきらひな
く一つはちすのやくそくもせめてちからにたまほこ
の涙かすそふ道しはの露と此身をあたくらべあだに
おもひしあたしの煙かくまになくからす今のうき
身のすて所あすはちまたにさらすなのほんにわたし

もこなさんも千代をやちよと契りしに今はひきかへ
さきの世をせめてふたりかあてでころさためなき世
やいにしゑは人の心の中ながらそれとすいしてかく
文にあるひはかみ切ちをしぼり涙にものをいわすれ
ばあまりかはらぬ人心またこなさんもそのとをりこ
とばとがめぬさきくりにあへばせひなくわひことの
身はふししつむ涙川あふかたすいなわれゝがいま
かく成はさりとてはすいが身をもつためしかや此年
月の間にはあらゆる夢の數あれとかく成事は夢にさ
へせめて此世に身をふたつおきところなきわれゝ
かましてめいとを見すしらすとふしたわけなさとし
ややらとふやらかうやらしらねどもせひにとつとひ
所じやとききは此身もたのもしやあゝさりとては今
まてはふたりが中に此しやはをわかまゝなりとおも
ふ事誠一夜もありもせずかふしたせつなきあいたか
らいのちかけ成戀草をねひきに成とはやかるゝ跡に
のこりしはゝ様のいとゝなけきはおいの身のふかう
のうへのふかうとはしりつゝしづむ戀のふちうかめ
てたべやみほとけと地にふしなけくもどふりなりげ
にわれとてもふたりなきこなひのおやのあはれみと

めうがに付て此ごとくたゝすむかたもあらばこそつ
みをゆるさせ給ふべしあれ／＼あれ／＼夜明のかね
の聲里を行かふ人のおとあのかね迄もわれ／＼か今
はわかれと手をとりにて道のほとりのちそうとう露の
うき身のおきところ

(六)京わらんべ

あづま半太夫ぶし

まつ正月はかとなつとよまつたけのかけにはねつ
くてまりとるぶり／＼ぎつちよをてにふれてたまを
うちでのほまゆみやな／＼きなづなよとんどやおほ
んかるたほうびききさらぎやはつむままいりのみや
げとてすゝやつぽ／＼かさくるまやよひになればに
わとりあわせとり／＼てひいなのとのゝいもせごと
二八あまりはをとなひていろにいづるやさくらいろ
むめやつばきのはなよりもうづきのけふのみまつり
になごりをしきはせんだんだんごゑたんこたんど
／＼ゑゑたんごのせつくゑよりきあやめにかぶとを
のきばにかさらせうちあひうちつれたけむまのひま
ゆくこまのあしはやみはやぎをんゑの夕すゝみほた
るこいとて水あそびたもとすゝしきなつ衣ひとよあ
くればはつあきのぼんのおとりはいせおどりきそん

十七とらのとしまいるやくしはとらやくしさつさと
ふりやれさつさふれ／＼ふりそでのそめしもやうの
月見くさこづまにぬいのきくがさねさてはつ冬やか
みな月つくやいのこのもち花もこはるのなにやには
ふらんしもつきはうぶ神のあふたけたけ／＼しわす
にはおとこのもちついたちやゆきころばかし雪まろ
め四きをり／＼のたはふれはおにのこぬまとうたひ
しも思へば／＼此かみのむかしなりけり今のよにせ
んだんごの大明神つきすかはらすわらんべのふくと
くいのももり神とておしなめあゆみをはこびけり

(七)かつらきつぽねをり あづま半太夫ぶし

さてもかつらきはもとよりつとめのあさましきうち
よりもみはしちかきつぽねにをりあるがなきかのう
きすまひなみだやそでをしぼるらんとはおもへとも
君ゆへとおもひさだめし心にはうきもつらきもわす
れぐさつほねの中もすみよしのきしの姫松いくよま
でかくうらめしき川竹のふしてはゆめにその人を見
まくほしさようつゝにもわすらればこそとひたすら
にかはく間もなきたもとなさるによつてうき世の
人かつらきこそは道しゆんがはからひゆへに思はず

もつぼねにおりしと夕くれのくるやら／＼大じんと
のは馬もいなくくつわもなるに門立しげきおぎ
はら戀風しとうにかつらきはつや／＼なびくけしき
なしとにもかくにもかつらきはなさけのふかき女ら
うとしたはぬものこそなかりけれ

(八)放下僧道行

武江半太夫ぶし

よしやつ／＼まし袖の露かゝる浮世になからへてなに
なか／＼にみつ瀬川をなしわたりにともなは／＼今の
恨もあらかねの土の車の我ながら思ひをいつかつけ
の櫛とりも見なくにくろかみのみたれ心もとけやら
ぬ姿は人めはづかしのもり田の里を夜にまぎれ忍び
出ればほのくらき月のくまたも影うつる川井の宿は
是かとよそのかみ川はいさぎよくすめとも下はにご
る瀬になにをたよりのねなし草ういつしづんずしつ
んずういつなみのうね／＼ゆられ／＼てきつれ川水
のうたかたあはれけにきへぬいのちぞうちへの里お
もきなげきにかろき身はしやはにあく津のふなてし
てねがいのまゝにかのきしへいつかいたらん白澤や
つのくむあしのほどもなくかれ葉にかせのそよ／＼
そよと秋をしらすおとつれのたが玉つきをかけて

くるはつかりこゑにおとろきてときわけころもあら
ひほすしつがつ／＼れのさほづくみよはにきぬたをう
つの宮きねしならはし神ごゝろやはらぐひかりあき
らかにまことをてらしたまへやとのつとをあくるさ
つさつのおともすいめのみやとかやちかひもかたき
石橋とかけてぞたのむまつり事すなをなりせばもろ
こしのみぬよのとりもはをとめんきりのはなさくこ
がね井やたまのつるべの水けふりむろの矢島もよそ
ならすくもとのぼるや西のそら夕日小山のはにいれ
ばけふもかきりのかねのねにあすはもとより白玉の
やとらん末はまゝ田の里あれてやさしき八重むくら
こすけよもきふかるかやもみだれあいたるのけの宮
此こがきせいすかのねの長くもかなと玉のを／＼かな
たこなたへよりかくる二つのわくをくり橋やくりか
へし返してもむかしは今にあらはこそさつてかへら
ぬ我つまのひかずばはやく杉戸の宿ののきをならぶ
る家々にたれかはやどをかすかべといや跡に見なし
てこしがへやたゞ何事もふりすてゝきみにさうかと
たのもしく中島根の井櫻田をたどり／＼行ほどにせ
んじゆの川にぞつき給ふ

(九)露の前船露 同 半太夫ふし

言の葉をいとむすひてした心こひといふ字によみ
ならひうらみねたみもつれなさもあだもなさけもい
つはりも此むすびめのとけてよりいとしくしと見
もわかぬゆめもうつゝももとひとつ二つとはなき道
すちも行をしのびちかへるをはわかれちと又よひか
へてあふさきるさにものおもふ思ひのけふりよこそ
れてそめいろよりもなをたつきわかたらちをの身に
かゝり行てかへらぬよもつくによすがもいざやいさ
らこのすみこしさとをうかれ出なみたのたきも高な
わのおちてくだけてちりゝにきえもうせなでうた
かたのあはれつたなやいやはかなないそなゝいそい
そべのちどりこよひはしめてたつなみのなみのたち
ゐも何ゆへぞかりなるやどに心とめすはうき世もあ
らじ人をもしたはじ松風にきりのたへまのあはかづ
さ船は千ぞういらふと萬ぞういらふとまゝよさあら
ゝゝあすの命もしらぬ身に三日さきみつふじの雪か
のこまたかのよそほひもたれにかみせんあまさがり
ひなにみゆきもあらばこそとはいゝながらみくるま
をかけてたのむやうし町のうさにはあらぬみやどこ

ろつまの行末あんおんにかたきをやすくうちおふせ
ふたゝび三田のみづがきと又のあゆみをきせいして
ふりあふのけは入船の目あてにたつるみあかしの上
のおてらのさいかいししやぎりゝづでんどゝうつ
やたいこのねのよさよかはすまぐらのさわりとてふ
たりぬるよはいとひしにつらさかへつて有かたやよ
しあし同じ草なれはなにはも爰そ雨によるたみのゝ
島をうつされてあづまながらも名はつく田かやかの
きばも住吉の藤のたればをつたふ水ながれのすへは
ふか川のしほのよとみはくるゝとともへにめぐる
みつまたやなふゝあれゝあれこそは月の入さを
まつち山神は大しやう歡ぎてんいたきあふたるそん
たいはいもせむすびの御はうべんげにたのもしやた
のもしやかほどにごれるうき世にもすめばすまるゝ
すみだ川はやせにあかぬみやこどりいざことゝはん
ことのはをむすびなをせばこゝろのいとこひのみな
とにつき給ふ

(十)たるゐのおせん あづま半太夫ふし

おせんおやこの人々はひとにそれとは見へしがため
ともをもつれすたゝ二人ひそかにたびのよほひある

心の内こそあはれなれけいらうの山にひやくかねは
やあかつきをもよふせはなみたたるいのしゆくを出
東にむかへはほのくとはあか坂のあさひかげあ
をのがはらにかゝやけば露はさながらりのたまひ
かりをますにことならずたれもみつやにきたかたや
おいをやしなふたきみつのあるとはきけどはかなく
もさらぬわかれはうらめしや名もたのもしきぐせい
川我々よりもなき人をわたしてたばせ給へやとふか
くきせひをすのまた川こすゑのはなにうぐひすのは
るさめいとふかかさぬいのさにつけやつゝじが
さきいろにそ出る袖のつゆきし人にはねさめにも
ゆめにもさらにあはでのもりひとつはちすのれんた
いへゑにしくちすばいなば山思ひのけふりはれてこ
そ心きよすの川風はさもひやゝかに身にしめとそ
名ばかりはあつたのみやあつさをしのぐかさ寺やな
にとなるみのすてをふねよるへいづくにあり松の花
もちりうのみたらしになみのつゝみやうたう坂ゆみ
はなけれどやはぎとはいもせぞたゝにおかざきやご
ゆあか坂のながれの君よしやよしだの人心おもてう
ら有ふた川とみなしらすかのたうげよりおきをはる

かにながむればべうくとしてきはもなしかいがん
そこもしらぬひのつくしの海にやつゝくらんだう
どうつてはさつとひくしほのみちひのはげしくてさ
しでのいわをあら井の里はま松かへのわかみどりい
つもときはの色ふかくいけだのしゆくを見るのはら
わきてながるゝいづみ川いつかかたきを見つけのが
う風もかさまるふくろいのながきはてをたどく
とたどりがねたる世中になにかたのみをかけ川や夢
もむすはぬかり枕さよの中山なかゝにかくこゆべ
しと思ひきやなにのみかねてきく川の色かにめで
立とまるゆきゝの人は大井川かくきへわびしつゆの
みははやくさばすおかべのしゆくとはおもへ共
ましてしばしうらみの一太刀うつ山よものかげは
あらねどもまりこのしゆくにさしかゝりてごしあへ
川打わたりはるくこゝにきよ見がたそらにもせき
の有ならば月をとめてみほがさきそでしがはまの
おきつなみさつた山より見たせばゆいかんはらに
打つゝき雲にそびゆるふじの山雪の内より立けふり
うへなき思にこかるゝはけにうき島がはらなれやそ
よくそよとふく風にかさねのきぬをきせ川のしゆ

くうちすぎてほどもなくあけてみ島やはこね山その
ふたご山是かとよはた小田原もあとに見ていつしき
佐川こへ行は梅さわしほみさかみのかうこいそ大い
そひらつかやひきぢふち澤とつかのしゆく日數かさ
ねて行ほどがやねがひもやがてかな川のしゆくにぞ
つかせたまひけるとにもかくにもかのおやこの人の
こゝろのうちあわれとも中々申ばかりはなかりけり

(十一) おせんものぐるひ 江戸半太夫ぶし

これはさておきおせんはいつしかきやう女となるか
みのといろく中そらにたちゐるくものあともな
くうきてたいよふはかりにてそこともいさやしらつ
ゆのおきまどふ身はあちがはらまたき色づくわか袖
にたれゆへ月はやどるぞとよそになしてもとはれな
はふかきなげきもあさくさのはすゑにむすぶ白玉の
ひかりさやかにすみだ川たへすなぐるゝ水のあわう
たかた人はつゝかなくありやなしやとこゑたてゝと
へといはねのまつち由いふこゑくればいほさきとい
ほりかたふく板ひさしあれにしのは風あてゝふわ
ふわふわのせきならばとりのそらねもはかるべしゆ
るさぬものはあふ坂の人めのせきをしのぶがをかよ

ししのはすの池のをもげにいさぎよきしみづむらゆ
みはり月やいるさの山やなかの木だちしげりあひ花
のさかりはみよしのゝよし野よりなを上野山のぼれ
はくだるくるま坂かなたこなたを見わたせばくんじ
ゆのきせんとりくにだてをしたやの里とかやおも
白むくを引ちがへうわきくは色々のもやうもよし
やよしなか染くゆる思ひの數々をいはでたいにや山
かすみのまよりほのかにも見てし人にはあひたらぬ
淺きちりめんちやちりめんうこんべにかばうすねす
み色ある人にみせばやなおしまのあまのぬれごろも
もしほかく袖一つまへしゆすやからあや白どんすぬ
ひすりはくのはいびろをゆかりの色やむらさきのち
りめんてぼそむすびさけたれ白すげのかいかさをま
へふかくときなしつゝなまめきみつる折からに花
のこかげもかりの宿心とめをとふくあらしらんじや
のかほりさそひきてさりし夕べの手枕をいどと思ひ
ぞ出さるゝ我ももらすなもらさしとうつりがふかく
かさねたるつまの行ゑもしらいとのみだれ心やくる
ふらん

(十二) 上るり御せんやりをどり

さみにいさんで
ひとをどり ぶりやれおふりやれおほとりげのふり
そで ^{きやうれつ}ちと／＼ちとかちをめされさしつ
かとせやりはちよん／＼ちよるちよんちよるさんま
にもたせろまつかせもたせろまつかせまつかせ／＼まか
せてをけるのさて／＼なまかせておけるのさて／＼
／＼ ^{ひやうし}ちよん／＼／＼ちよんちよる衆 ^{ひやうし}ち
よん／＼／＼ちよんちよるしゆちよんちよるさんま
のやりの手ついのぬりがさおさきでふれさ／＼おさ
きで／＼さき／＼／＼あと／＼／＼あとさきそろへ
たとうちうくにははなのお江戸にとんとつついたは
やしなかわをこへてあつまをさしてくたりしをみな
かんせぬものこそなかりけれ

(十三) 參會和曾我道行 江戸半太夫ぶし

戀はくせ物みな人のこひはくせもの皆人の迷ひのふ
ちやきのどくの山より落るながれの身うきねのこと
のしらべかや引手あまたにしげけれど思ひいだすは
かのひとりかたみのこまの口を取つまゆへしづむあ
りさはしちだたいしにつかへにししやのゝどうじ
がそのむかしだんどくせんのをはづたひこんでい
こまのもろたづなもろきなみだにくれけるもそれは

いきてのわかれぞやわか身のうさにくらふればた
ちもおよばぬふしのやますそのゝはらは草かくれつ
ゆの下にやきやうだいのいつなきからと聞なさんし
ぎたつ澤にとふ鳥もややあはれをしるならばつた
へてくれのかねのこゑじやくめつ ^めいらくとひげ共
りんゑの花はちりもせずともにくわたくの門をい
ざいづのみ嶋のしほきとるうらのけふりの一むすび
又ふたむすびよれてもつれてとけてみたれてなびき
大いそ君をこいそのみちすがらさりしゆふべの比ま
でもこゝをかよひてきにけらし此こまよ／＼むちを
うたれしうらみをも今はかたみと思はずやとくとき
給へはさすかけにきゝいれたりしふせひにてかうべ
をうなたれみゝをふせしうのわかれをなげきしは人
間物をしらぬなりたがたまつさのほこね山なみだに
そみて赤澤山かまくら山のやつ／＼もかけけをさる
ゝかあし高山かるもかくなるふすゐの床に石の枕や
こけむしろふたりかはさはつらからしまつ人もたぬ
かち路のたびすゝのしのはらまくづが原こすげよも
ぎふ玉かづらおしわけかきわけしどろもどろに行な
やむぬしなきこまのむまかたいやよほくに出てあふ

夜もあり／＼まりこ川なかれてはやきこしかたや御身とても我とても花ならばはつきくら月ならば十三やさかりにたらぬ身をもちておもふ人にはそひもせずかゝるうきめを見る事よこれもたれゆへむらさきの一もとゆいのゆかりそやなけき給ふなけかしといさめられてはいさめつゝ水もらさしとちかひてしそのうつりがものこるやそで手に手をとりに行ほどにそがの里にぞつき給ふ此人々の心のうちしるもしらぬもおしなべて皆かんせぬものこそなかりけれ

(十四)としま八けい あつま半太夫ぶし

たち出てみねのくも花やあらんはるかすみすみのそらもうら／＼かにほひもふかきむめわかのやなきのみとり一しほに見ますかゝみか池のおもこのはうつもる冬がれのこほりもとけてさゝなみやみなぎる水のせはたえていまはあさぢのせゝら木と名もきしかげの山吹はをぼつかなくもさきわたるうへのゝみねの花ざかりはるかながめやなか寺もりの木すへもしぎりあふ五月あやめにさなへとる田中の村の夕すみかやりふすぼる夜もすがらくいなたゝく柴の戸はたがすみた川すみにごるよをうし嶋といふしき

やうぢやくの橋も今こゝにうつせる御世はゑいたいしま／＼うら／＼のこりなくはるか東に見へにけるまたなにあふたいのもりうしの御せんの宮しろもほどふるのきに月もれてきひしきよはのねぎめにもゑきろのすゝのこまかたやかものしら川のぎよせいにまかすみのせきかのぞらあるいしのまくらぞうばかりけあきのけしきはかなしくもむじやうがはらのくさのつゆきるまもなくたちさらんはしはのけふりあはれにもなからんものは世の人のさだめなきこそいみしけれまつたかしこの一村はうかれめつたふさとなれはうきよの人のたちまよふ心のはなのいろいろにをのかすかたをしのふかさかさのしづくもこほれむめこりやどうしやけさのあらしや夕しぐれぬれてはすまもなざさこごあまのおぶねのつなかれぬ身はうきくさのねをたへてさそはれわたるあすか川なかれの身とてさま／＼にしなをつくるいろこそでをぼろあけぼのかゝそゝやすみゑのげんじしきしおりおり／＼かはるふうそくはまたおもしろきところなるさてまた大ひの御てらはだいどうくわんねんやよひのころかのかはよな／＼ひかりつゝなみもい

さごもこんじきにたいてんちくのむねつちもかくや
とばかりうたがはしさればところのぎよふとものは
しめのほとはおそれしがしたいくちにかつきて見
れはまさしく水中にぶつさうあらはれましませはい
さもりあげんといふしほのなみまをわけてちひろの
あみ引やちかいのてにもれずあがらせ給ふそんざう
のりせうあらたにましませばこすへの雪もさながら
にゑんりの花とうたがはれ二六時中のかねのねはほ
んのふれんぼのめをさましじひあいれんのとしひ
はどんよくしんゐのねをたちてほつしんほだいの身
にきするかゝるそんゐん水所をもしらせ給はぬぞう
どうしやはや／＼御出候へことばにみのる玉かつ
ら花やか成しへんせつのよに面白ぞかたりける

(十五) 興作二代目 とこよおまん 半太夫

頼をかけてすみなれし五ちの如來を立出て是やうき
よの中やしき五ちよくの水となにたてど月も宿かる
直江の里いつも行きは天下の橋駒もとゝろとふみな
らすおとは高田のしゆくとかやいさやくわたくを今
いづみゑにしおはいとねかはしくおもはん人はわれ
とわが心のあかをあら井の里わこくの本か二ほんぎ

のしゆくをもはやく板まふく風の便もとむるかとお
もへばつらきせき山やなをせきあまる泪川たざりて
おつるみなかみをなに尋けん物おもふわが身としれ
ば中々に恨はあらし返す其雲の夜はひとへにて頼る
あとなくはれゆけと心のきりのふかければ妙光山も
見えわかずおまんなんだにかきくれてあらい風にも
あてまい君をふゝきはけ敷道すがらひろはせ申すう
たてやと見あげ見おろしかこちけりとこよのまへは
御らんしてこはおろか也わひぬれはとらふすのへを
わけきても身をおしまじ只うきはいとならなくに
わかれちのそなたこなたへつれぞ布引山田中のしゆ
くのかり枕しくやこもろのおきわかれたゝぬぎすて
しくつかけや浅まの山の浅からぬ思ひのけふりおひ
わけの風にみだれてきえ／＼きえとむくひのつみも
かさ井澤日の夕暮のたひ衣うすむたうげのさがしき
にあしをつまだて身をちいめいわまつたひにきもを
けしあゆみかねたる坂坂本にいかでかわれを松井田
としはしもさらにやすらはすあんなかすくればいた
はなのさかぬこすへは高崎やおりひめならぬ身なれ
共からす川をばこへぬれどあふせはたえてなぎさこ

ぐあまのをぶねのいざり火もたきすさめつゝくらが
の、夢ぢはかなきちぎりぞとかげさへ見ゆる山の井
のあさくは人の思ふ共わがほんしやうはふかやの水
ながれの箸のさかつきをくみくまがへになれそめて
わすれもやらすこうのすやあはれよしなきたはふれ
はたゝおけ川とうちすてゝいそぐ心にひかれてはひ
ばにもむちをあげうの里またならびなき大宮とおも
てうらはのみづがきをはるかそなたにふしおがみむ
かふをみれば家ごとによりよ人をとむるつとめて思
ひそまぬももらさしと人手をにぎるわらひのしゆく
かくうらめしきよの中もわたる物から板橋とゑんり
江戸をもあとにみてやうゝ行はほどもなく五つの
さはり淺草のみてらにこそは着給ふ此人々の心のう
ちあはれ成共中々申計はなかりけり

(十六)曾我かけ物揃 江戸半太夫ぶし

先一番に見へたるはにわう第二代けねかうの第二の
御子やまただけ尊也たん正美妙の御相好御身の長壺
丈御力はむりやうにましゝて拾六歳の御時やそた
けるをさしころし又とうゐせいばつに駿河の國迄御
下向ゑびすぎやくゐをくわたてゝ、かれくさに火をは

なつほのは御身にせまりし時みこと御けんをぬき持
てはらひ給へばけんのいきほひ嵐となつてみやうく
わをたちまち跡へふきもどせばそくと残らずほろび
けり今の矢いづは爰とかや尾張あつたの明神とおが
まれさせ給ふなり扱其つぎは平城の御宇につかへし
田村丸勇力ちほうかねそなへねび観音の力にてあく
まをしつめといういをうち今は近江の大山に正一位明
神とあらはれ給ふは有難けれ其次は田原藤太ひてさ
とまさかどをほろぼし又りう王にたのまれてみかみ
のむかでをいとめたる古今ぶさうのゆうしなり第四
はんはよご將くんとがくし山の下もみちいろあるに
よせうにひかれつゝむみやうのさけにゑいふしてを
にくちもしらさりしを正八まんのおうごにてゆめ
さめきじんをしたがへたりさてそのつぎは御せんそ
源まんちうすみよしの御じけんにて多田の大じやを
たいぢありばんみんのくをのぞきいまごんげんとあ
がめられゆみやの神となり給ふ次に頼光よりのぶよ
り義よしひあくげん太その中に取てもちんせい八
郎ためともはゆんせいひならびなくをにがしまて
せめしたがへす百人とりのりたる大船をくつかへす

こまもろこしもおそれをなし其すがたを繪にうつし
門のまもりになすとかや其次は九郎御ざうしきかず
まなはてをのづからけんしゆつの妙をゑて七尺のひ
やうぶ高からず五丈のほりもひろからずはかりこと
はごし孫子てうし房にもこゑつらん同つゝゐてむさ
し坊佐藤次信忠信やさかた渡邊はうしやうやさだみ
つすへたけ仲光かれらは何れも忠ふかくちからはや
わさたぐいなきのいたい無双のもの共なり若君をは
じめ奉り若殿原の鏡として其身をてらさは末代に武
略のほまれをゑたまはんと四べん八音よどみなく語
り給へは老若一度にあつとぞかんじける

(十七) 櫻姫ごばん人形 江戸半太夫ぶし

先ひがしははるににてたいゆふれいのむめのはなむ
かしながらの山ざくらふし見さへたのはなまでも木
木のこすへにさきみだれひわこがらうぐひすののき
はのむめにはをやすめねを出しかねたる所にはけい
けいほろゝのきぢのこへけいならばけいとはなくし
てなんぞやのちのほろゝのこゑいつも春かと思へに
けり南はなつににてすはまにいけをほらせいけの其
中にはほうらいはうじやうゑいしうとてみつのしま

をぞつかれけるしまよりろくぢへはそりはしをかけ
させはしの下にはうらしま太郎がつりのふねど
うなんくわじよかうつばぶね五しきのいにてつな
がれたりじやうらくがじやうのかせふけばしゝのあ
そびはをもしろやかゐるめてたきおりなれはいさみゆゝしき
御馬の初五十三次にかくれのなひ男よくをこめたるたけ馬
をさてゝ見ごとにかざりたてたつなはいくりしつ
しつどふゝどゝんとつこいとつこいせあさの出が
けに小むろそんれはぶし出がけにやあさのゝ出がけ
にや小むろそんれはぶしこへふし三蔵やいふたりづん
ぶんつれだちさあゝゆくべいゝゝつわのすゝが
りんゝゝからゝりんがらゝりんゝゝがらゝりん
ながらゝゝはいどうゝはいゝゝはいゝゝはいどう
しあつはれ御馬か上手とゝがのつたるのつたぞさて
ゝ見ことゑしやみにひかるゝこまのいさみや

(十八) 平あんじやう草花つくし

江戸半太夫ぶし

あらいつくしの草のかすゝいろは山ぶきふしの花
きいくこうきくさくらさうしをんりんとや女郎花思
ひの色はいわつゝじかものお山にさく花はだんのつ

つちとしろつゝじたが手にふれてもちつゝじきゝや
うしやくやくわれもこう忍びくにくるく風車す
がたへ成そのふせひさゆりにゆりかけくさつと
ゆりかけひめゆりにいつかそひねのとなつやなも
ゆかしきはびじんさうかほよはなこそひとしほにい
ろもにほひもふかみぐさをくしらつゆのたまつばき
身をせばめつゝかげやどす月見ぐさこそやさしけれ
げにやまことに有明のつれなく見ゑしわかれよりふ
たりぬるよのかなしきはをのがつばさはかはせども
おもひしらすやくゝろせでまたきなくねのけいとう
げつばなまじりのすみれぐさきみがすすみのてまり
のはなよひいふうみいよこゝのへのとんとをちても
なはたゝじふかき心のそいをば人にもらすな水あ
ふひいけにをもだかまこもぐさ我はのにさくあだば
なよおらばとくをれちらぬまにまれのみゆきにいざ
さらばみきをそなへてとりくゝにゑいりよをすゝし
めたてまつる

(十九)みさほのまへ忍の段 江戸半太夫ぶし
給ひけりわひしき中にも世の中の戀路の色にてとゝ
めたりうつゝなくも天王はみさほのまへがすがたを

ば御らんせしよりあけくれに心をつくさせ給ひつゝ
御母後の御前をば忍び出させたまひつゝひめのねや
に忍び入こなたにたゝすみをはせしがせうじにうつ
るともしびのかげのうちより見給へばそらだきのし
めやかにけふりきへ行折ふしにみさほの前はしやう
しをあけて見給ふにゆきにきらめく春の月しくもの
もなきけしきやとにつことわらひしそのふせひふさ
んのしんによがくもとなりちきりのこせしおもかけ
やりふじんがいにしへはんごんかうにうつろいしも
物のかすにはあるまじとゑいりよひとしほなやまし
くちいにくだくる計りにておもひにばうしてまし
すがゆきをまろめてひとつかねなけつ給へばみさ
ほのまへあゝよしなやたれなるらんとたもとにかゝ
るゆきうちらはらひゝさはりさわらぬへんとうに天
皇いよゝゝあこかれさせ給ひつゝいやよそゝしき
みさほの前はづかしながらちんすでいもとすかた
をかいま見てたちまよひぬるくものあしうかれてこ
れまできたりたりせめてはそれかとしろたへのゆき
にはあらできへはてん我たまのおもな竹のひとよ
はかりはなもたゝじとけてかたらんわがをもひはら

させよかしとのたまへばみさほのまへはうけ給はり
しばらくいなせなかりしがやゝあつて申やうあらも
つたいなの御ことやげにやこひぢのならひにてたか
きいやしきかぎらねどさしてそれともあやめぐさあ
やめもしらぬわれゆへにきみの御なをたてんことさ
りとはおそろしゝゆるさせ給へと申つゝさしうつ
ふひておともせずきみはいよゝたへかねさせ給ひ
神のいがきをこへぬるもこひぢのならひとがめなし
うらわかきはつ草のねよけに見ゆる身をもちてたが
たまぐらのむつことぞ語り給へと有ければひめは此
よし聞給ひまことに君のせんしにはなびかぬくさ木
はなけれども此みちひとつはいなふねのとてもなひ
かぬ我心ひきみさせたまはんとやあらはづかしの御
ことやはやゝかへらせ給ふへしきみはあきれてた
ち給ふがよしゝ此身はていとよりをち人の身とな
れば女にも見をとされかゝるつれなき有さまぞや我
もり國が手となつてかゝるふぎをいひ出しおもてを
見られんはつかしさよさりとてはあやにくにおぼし
きられぬこひぢのほどかへらんとするにひかるゝは
うしろかみのゆきてはかへりかへりてはまたゆきに

ひへゆくぎよくたいのいたはしかりける次第也みさ
ほのまへはさしのぞき御いとおしくやおもひけんを
ぼへずしやうじをさつとあけなふいかにわがきみさ
まはるのよかせはおどくぞや御なふとなればものう
きにこなたへいらせ給へとて御手をとつてうちにい
る御手もさすがよはの月くもにかくるゝふせひにて
しとねのうちにいりたまひすへはにようごきさきに
もたてたまはんとの御ちかいわりなくかよはせたま
ふにぞごうたのにようごと申せしはみさほのまへの
御ことなりひよくれんりの御ちぎり心のうちもした
ひももしつほととけたる御なかゝきせん上下おし
なへてみなかんせぬものこそなかりけれ

(二十一) 櫻つくし

江戸半太夫ぶし

としのよはひは十三四五なるちござくらみめはやう
きひきりがやつめもとにこぼるゝしほかまやめした
こそではなにゝぞあさぎさくらにかばさくらもみ
かうはいのひさくらをめしかへゝなさるゝ時はし
つが心はさみせんのはそりて三のいとざくらまつ夜
は君かをそぞくら忍ふにはゆないぬさくらこそはす
こしもねがひはせねどすみぞめさくらふげんぞうか

のあつもりにうき世をすてしくまがへさくらならの
都の八咫ひとへ京九咫はひろしといへどまたと有ま
いあの君を花のしんに立をひて我下くさとぞ成にけ
る

(一) 小うた松風

かたみこそ今はあたなれ是なくはわするゝ隙もあり
なんとあらなつかしのゆきさまやなれしその夜のい
ひかはしふたりをめて立てわかれ今はあだしはしわ
かるゝとも松としらかはいまかへりまたはこんどの
ことの葉をいひかないしいや世をさりて松風もむら
さめも袖のみぬれてよしなやな身にもおよばぬ戀ゆ
へにかとりのきぬやたてゑはしそらたきのかはのこ
れとおもかけは見へもせず夢ともなしやうつゝと
もまつのこかけにたゝすみて袖はなみたにひたしけ
れ

(二) わかれのかね

わするなよとは雲井になりぬとも空行月ともろと
もにめぐりあふせの松嶋やおしまのあまのぬれ衣い
かにほすともあまをふねこがれこがるゝおもひねに
床はづかしけさの夢さめてはもとの涙あらそふく

もまよりそれとしもなきほとゝきす只一聲を聞より
もうきをとふかとうたがはれなつもはやなかば過行
いよはつ秋の虫の聲々おさひしあはれもやうすおた
もりのいおりさびしきねやのうちすむかひもなき世
の中にわかれのかねを清水のあくれは大非くわんせ
おんちかひをたのみ今一度たかひに見えつみへられ
つかはすことばもなかりせばとても此身はむれ木
のくちき櫻かさねざりとはいつくる春に我花のひ
らくることのありはらや昔を今になぞらへて思ひの
床にふししづむ

(三) うは玉

あふことのたへてしなくはなかゝにかふるこゝろ
のなになれやしらてだにこそとしをへてあひみしの
ちこそ戀はまさりけりなをあやにくのあきの夜やそ
れとはしらでうば玉のよはのけしきもあけそめてわ
かれし床のうきまくらわか身一つの思ひしになみた
さへこそとゞまらでふちはせとなるにあすかゝはふ
かきなさけの袖ふれし身をしるあめはふらねとも心
のそらに行かよふ人しれずなをあふことのはるかな
る身のものおもひうき身をたれかなぐさめんおもひ

しらずもとはぬ身の戀はつきせぬものおもひ心つく
しのせきにこそあれ

(四)しのぶ戀

しのぶ心はおもひにまけてうきなたちまちたつとも
よしやだいかさなかれたへせぬなみたの川のみ
だたちさはぐ我が心いなものいなものになるかぬの
おとあふにわかるゝいのちにてふしゆびにかへるあ
やにくや

増補 松の落葉卷第二

中興當流淨瑠璃

目録

一	うつほぶね	武江	半太夫ふし
二	竹林寺	同人	作
三	文ことは	同人	作
四	昆布道成寺	同人	作
五	灸するそが	同人	作
六	樽屋おせん	同人	作
七	清明神おろし	虎屋喜元	
八	染色づくし	土佐少掾	
九	現在熊坂	さつゝ外記	
十	藤壺弘徽殿	虎屋榮閑	
十一	石山寺道行	宇治加賀掾	
十二	四條河原涼八景	同人	作
十三	萬屋助六道行	都太夫一中	
十四	子の日の松	同人	作

増補松の落葉卷第二

(一) うつほふね

あつま 半太夫ふし

まつほのうらのうつほふね身をなきものにおもひさ
へいのちもかなとしとふまことに大ぬさのちゝのや
しろの夕だすきかけてもつれしさゝめにもどうで女
房にやもちやさんすまいわしかつとめのまゝならぬ
よいゝゝことのみだれがみそらおそろしやきにそま
ぬとのにそひねのまくらにもとりもなけかしかねも
なれうれししのゝめあさけにうきをわするゝそのふ
せいこわひゆめみしこゝろなりかうしたつらいつと
めにもゆびおりおりつゝかたさまにあふかうれしゆ
てうかゝとどうしたことえんじややらわするゝ
ひまもないわいなふかきおもひはとこのうみなみは
こすともすへのまつかはらぬいろをたのむ身君とむ
すびしたひもをひとりとはかじたまのをのたへぬ
ちきりはありともとしつみはてにしきたへにふた
りがそでおやしぼるらん

(二) 竹林寺

同人作

しろむくにひとへおひしたよるのゆきいつそのくき
かきゝたひのとすれはかくすそのうちに下寺町にな
くからす竹林寺のかねのこゑあふらはこれととうゑ
んなし何のはじややらあき風のあま戸ゝにおとす
なり心ほそさようらめしさそれほとゑひはあるまい
に申ゝとおこすれとたゝくちなしとものいわすに
くいことしやとおもへとも氣に入たひかゐんくわな
り

(三) 文ことば

同人作

まことにふみはねやのともいよし御げんとかいたる
はほたしのたねか花すゝきほんにせいもんいとしさ
にいくよのゆめをむすひふみかたさままいる梅より
とおもひらゝゝそろへくとわけのさかつきいろめい
てわきていつみのおもわくはたゝあひましてゝま
たのゑにしをまつかしく

(四) こぶどうじやうし

同人作

みつからと申はそなたれしやそなたのためにも姉か
小路のこぶじや何ゆへにこさんした何ゆへとはきよ
くもなやうらみたらゝ鰯汁のつまの心のあたしさ
にわらはゝだしにつかわれてきもうつりがのこせう

のこはつとなつみときくからにあさ夕むねをやきこ
ぶやいふかいわぬかかもしこぶこゝろにこめてむす
ひこぶしのふむちつけみちのくのつらき人をはまつ
まへこふとはおもへともまたわきかへる心の水すに
入しほにおほるゝもせんせさたまるしゆくえんなり
しんゐの海をおよぎこしいづくまでもつきまとひく
るりくるくまきこぶやくいさきひきさき刻こぶ思
ひをはらさておくへきかといふこゑはかりはひばち
のそこにひいき渡てはむらおもひはめうくはともへ
ごとくてつきうかなひばしおもへばこのかねうらめ
しやとまたあふりこにそいりにけり

(五) 灸すへそが

同人作

いつよりかさゝはかりにてあさ夕のかれいもうすぎ
おもやせに身のいたつらやあた人のおりしもころは
きさらぎや二日はきうによき日ぞと暦ひらはなる
日とやなるとならずとおもひたつうはらたつもと
らかせなかといひてゑみがをの千代もかわらぬかわ
らけにさもいつくしきさしもくさみよなら袖をかさ
しのうちかたとひねりくゝて玉つさをふたつのほし
とてんおろしゆくゑしらすにたつけふりあつふやお

ほしめすらんとわけていたはるよそおひはあわれに
もまたぬれきぬのつましならずはかくせしと一火す
へてはたつむれのよそめのあらはいかにせん今火を
とりて前三やうしろ七ツはとかじ下ひもとたかひに
わかいこなさんとわしか思ひのちりつもる山をみさ
んせこなたへとせうしかくれはふしの雪

(六) 檜屋おせん狂女跡

同人作

くるふらんあととしのよはひは二八はかりのわかき
人世にはたぐひも夏山のしけみがかけにこがくれし
君のゆくゑはいつくぞやしろしめされてさふらは
おしへてたべや人々とこゑをあけてそなき給ふ手を
おりてかなしきことをかぞいろにすきおくれつゝか
すならぬうき身のよるべなみた川そでのしがらみひ
まなきにおもひかさなる年月の千代にやちよの玉つ
はき替らぬ色をたのみつゝかけしなざけもありはら
のむかしおとこかひかる君かほる中將夕きりよりな
をまさとしの戀しやと聲を上てぞなけかるゝ雨をし
のくやみのゝ國かさのしつくもたるいのしゆく泪な
からに立出てはしめてたびをしな川にしばしなしみ
の君とわがつかれの袖をぬれてほす山路の菊の露の

まもわすられはこそ中々におもひ出さんやうもなし
あらうらめしの我身やとたおれふしてぞなき給ふ

(七)清明神おろし

虎屋喜元

其時せいめいする／＼と罷出おふそれおふぎことに
て候へともそれがしがじんべんにてかうきでんをふ
たゝびよみかへらせ奉らば御修行おぼしめしとゞま
らせ給われとはゝかりなふこそ申けるきんせうさい
はい／＼うやまつてまうし奉る上はほんでんたいし
やくしだい天わうゑんまほうわう五どうのめうくわ
んげかいのちにはいせはしんめいてんしやうくわう
大じんぐう雨のみや風のみや月よみ日よみあまのい
わとは大日如來あさまがたけにはふく一まんこくう
ぞうわうじやうのちんじゆにはいなりぎおんにかも
かすがきぶねは五しやのだいめうじんくらまさんに
は多門天たかきお山はあたごさんたいこんげんおと
こやましやうはちまん大菩薩まつのをひらの梅のみ
やふし見に一こんごかうのみややまとにかつらきき
んふせんたうのみねにはたいしよくはんたつたは此
はなさくやひめくまのはみつの御山なりじんぐうか
うぐうなちはせんしゆくわんおんなり津の國にいた

つては天わうじにせうとく太子すみよし四しやの大
みやうじん四こくの地にはさぬきにこんひら同しく
しとしのくわんせおんつくしにひこさんいづもの國
に大やしろきづきの明神はうきに大せん丹後になれ
あいきれどのもんじゆあふみの國に聞えたるひよし
さんわう廿一しやおたがしらひけ平野はつここすい
にあらはれ給ひしは竹生島のべんてんなりみのゝ國
にはなんぐう高山つるぎのごんげんゑつちうにくり
からふだうみやう王なりいづにみしまはこねは二し
やの大ごんげんほんちはもんじゆしり菩薩ふじはせ
んげん大菩薩とふ／＼みのくにはあきはこまがた
はまなの明神みかはにいづてはほうらいじみねのや
くしは十二神おはりのくにゝは一のみや二のみや第
三にあたつてはやつるぎあつたの大みやうじん惣じ
て日本六十餘州三千七百餘社なりてんにあつては日
月せいしん廿八しゆく大ちのそこにおはしますけん
ろうぢやんにいたるまでこと／＼くくわんでうおろ
し奉るたとひ定業かぎりのいのち成ともいま一どよ
みかへらせてたひ給へはてせめかけ／＼「いのりけ
り佛神感應したまひけん天下にはかにしんどうして

五びやう二つにさつとわれ女御たちまちよみかへら
せ君はいづくにましますぞ君は／＼との給へば御門
夢ともわきまへすのふこはまことかとおもはすしら
すいだきつき是は／＼とばかりにて三大臣清明にと
りつきおゝつかまつゝたり／＼と御よろこび限なし
せいめいめんぼくほどこして御前をこそ立にけりか
んか本朝にかゝるそうにんありがたしきせん上下お
しなめてかんせぬものはなかりけり

(八) 染色盡

武江 土佐少掾

まつ初春のそめいろにさくやはないろ花になくうぐ
ひすそめのこゑあげて人に春をやゆつり染風にしな
へてたよ／＼とめした姿の柳そめこひをすゝ竹ふち
ねづみたもとにのこるかうそめのうつりやさつとち
らしもん染しとの茶のきをはじめわがきがらちやは
かわらねど人の心のふたへ染やまとにあらぬからか
きやあけをうばふと名をたてゝもろこし人はそねめ
どもかのひともののはつゆかりけんぼくろちやにな
にはえのよし吉おかにべにひわだほさぬをでたにあ
るものを戀にくちばや身はされかきのあはぬゑにし
はうすがきやいつこんるりのたまごいろそらにこが

るゝもみぢはのべにひわがのこゆひたつる戀をする
身の袖の露しほりちぐさのつまこめもねうげに見ゆ
るとくさいろわかたましいもあくがれてゆかしきを
らにとび色やきゝやうたまむしまがひでめうこんき
うこんべにうこんみついろあさぎあさくともせめて
ひとよはいあさぎそめいれかのこしめよせていく
よかさねし手まくらに野邊のおすゝきはに出て打だ
しかのこやしほかのこしくものもなきおほろそめう
つぶし色の御所そめはみなおもわくのうたのもじち
らしこもんじうき世ぞめしやむろからぞめいろ／＼
のちいのおもひやもゝ色にふかき心をそめ入て君が
はだへの山吹やそめかうばいはあしかのあつまの
きぬにおとらじとすゑつむ花や山あひのふり出そむ
る雲のそでこひのそめ衣たつたひめ手そめのにしき
色ふかくこゑあやをなしそめたりしはおもしろかり
けるしだいなり

(九) 現在熊坂

武江 薩摩外記

さすがむかしはものゝふのふとらう／＼の身となり
てもうきのせんりを心がけきかうのいつこをまちけ
れど時にあはねばせひもなく此あしぬまにくちはつ

るおい木の柳いまははやりよくもよはると云ながらすがむかしはもろこしのかううがはやわがわがものにてしつせきのへいふをもいまだたかしとおもわずしうちものとはしてはしほうがしゆついつくわんのしよをつくしたりすいれんなまたふひかみちりりやうがなかの玉をもとりゆみはなをやうゆうがむかしをしるぶゆんせいのつるをならしてはるかなるじゆどうのせいゑんひやうふつといるひいぎやうの力わがねてもさめてもたしなみにたいいたつらにおひの身のすこしよはりて候へどいまだ心は春ごまのいさむにつけておりふしはよきたよりもまかりなるごらん候へ此あたりにはのうちの草のはらしやうちんけいぎよくしのだけのおざしげればひとなくきりにこがくれ雨のちさんぞくよたうのしれものら高にをとおとしさとかよひの下女やはしたにいたるまでうちはぎとらんれなきさけぶそのこゑみゝにひまもなしさやうのときには老人もれいの長刀おつとつて愛をば我にまかせよとよばはりかくればけにはまた一度はさもなきときも有いや／＼ししやうなき我が身のうへにやはぬ老やらうちよのみさこそ

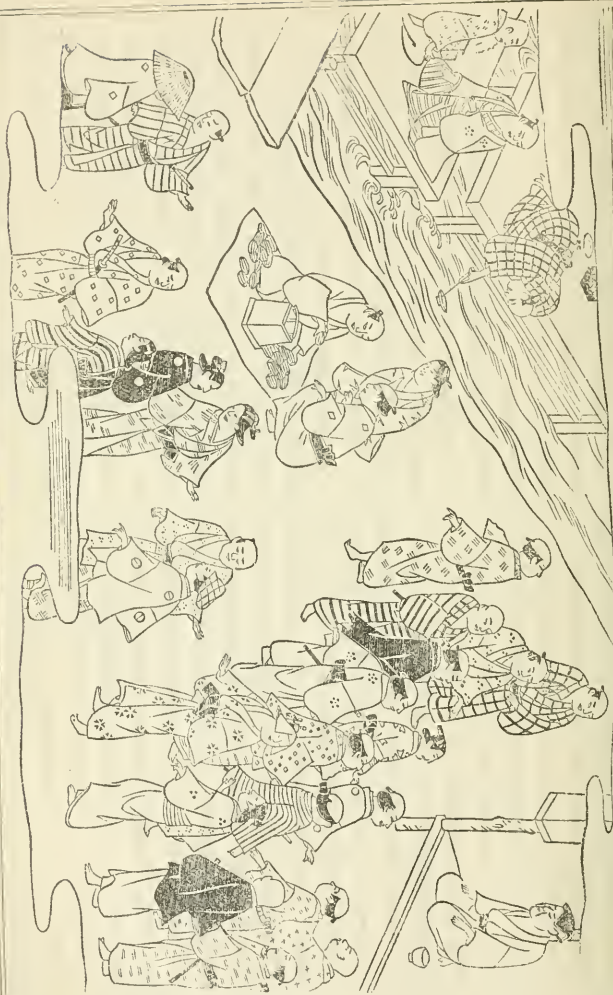
おかしとおぼされんさりながら佛さへ彌陀のりけんやあいせんなほうべんの弓に矢をはげたもんなほこをよこたへてあくまをかうぶくさいなんのはらい給ふと聞ものをさればあいじやくじひしんだつたが五ぎやくにすぐれつくほうべんのせつしやうはぼさつの六どにまさるとなりこれをみかれをきゝつたへたをせひしらぬ身のゆくへまよふもさとも心ぞやされば心のしとはなれ心をしとはせざれとのふるきことばぞまことなれかやうに申せば春の夜の長物語よしなやな心づくしにましまさんおやすみあれやまれ人とかざすあふぎの手もたゆくおもしろかりける次第也

(十) 藤壺弘徽殿うわなり打 武江 虎屋榮閑

かゝる所にふしぎやないとなまめいたるあを女房の其さまけしからぬふせいにてつま戸のわきにたゝすみ給ふはいか成人にてましますぞやそのとき答てこはおろか成といことかな人のうらみをうけながらなのらずとても今ははやそのをにうへしくれないのもれても色いてぬべしかうきでんむねうちさはぎはつとおほしめされしが心をしづめてなだやかにげに

げになのらせたまはずともおほかたはすいりやう申
てさふらふなりさりながら人のうらみを請ながらと
は扱みづからには何たるうらみのあるやらん身には
おぼえはない物をのふおほえなきとはおろかなり有
しむかしの雲のうへともにながめし月影のうつれば
かはるあすか川はなむらさきの藤つぼをおい出さる
るは誰ゆへぞあゝあさましやよもぎふにひとりこが
るゝうき身の程おもひしらせん其ために藤つぼのお
んりやう是迄あらはれきたりたりかうきでんきこし
めしあゝあさましやしつとのねたみは人にこそよれ
たがいにおしもおされもせぬ御身にて藤つぼの女御
にはさりとにはやい申さぬなりことさら御身もみづ
からも中宮きさきのみやにもあらばこそ女御の数は
おしけれどわきてたれとは夕まぐれおふそれながら
我君をつまやおつとゝ思ひ給ふはおろかなりあらあ
さましの御心ねやはやゝ歸らせ給ふべし藤つぼは
よゝはらを立いやいかにかうきでん御身のいのち
をたすけ置君にちぎりをむすばせてゑいくわの花を
さかせつゝわらはゝむぐらの宿にたゞひとりよはる
むしのねもろともになきあかさせんと思ふかやたの

しみつきて悲しみきたるはたゞいまぞやいかにゝ
とのたまへはかうきでんきこしめしあふせまでもさ
むらはず世はみな夢のうきなればあすをばたれもた
のまぬものをおろかの人のいらごとや藤つぼかさね
てによむげんほうとおもへども夢のうちにものくら
あるおことはほんぶの身をもちてくちと心は替りつ
ゝくやみたまふとかなふまじかうきでんおしかへし
しんなばんにてんするとも本来一物なきときは何を
か留てくやむべし藤つぼはいよゝはらを立それ人の
一念はあるものかなきものかおもひしらせんざりと
ては今はずたではかなはじとするゝと走りよりさ
んゝに打散し立のかせ給ひしが中にてたちまちす
がたをへんじおもへばゝはらだちや人のねたみの
ふかきとてうきねになかせたまふ其中々おもひはと
まるまじ我身はごくやにおしこめられはずへの露と
やきへもやせん御身は君といやましにおきふし小夜
のねさめにもわらはが身の上そしりつゝとや有かく
やなりはつるとむかしがたりに成ならばなをも思ひ
はますかゝみ其おもかげのつらくやとまたする
するとはしりより何といふともいのちをとらではか



きこゝのへの京の水きわたちつく四條かわらのに
きわひはやくもたつてう御うたのかみのみうちこい
ゑとみて大きにやはらぐあきつすのやまと大路やや
まとばし一むらたけのしのめもやゝあけわたすま
きのとのをとのはの山にこだましてひしくしばいのあ
さいいこあかねさす日のあかまへだれすしにてたち
ししつのめがかほにゑしやくしなふ申ふだめせよい
ばさじきでも取てあげましよをはをりもおかさもつ
えもあつかりて御ちやはあとからあれ申しりははや
くもはじまりおあし千くわん萬太夫手をかさねては
んじやうのかめやはくめのじやうるりはめでたいこ
くの加賀掾サアふだめせとたきつくるはかまのたぎ
利りんくくしやんとむすびしむなたかおびのり
ものゝでかごところせきむらさきほうし御所かすき
をもひくのだてすがた女中がちなる物見なりさて
またすゝみの夕けしきかみのみたらしむすぶてにな
つなきとしとおもひかわ水にかわつのこゑたてゝま
とやのかいりうちけふりかなたこなたともしびのや
ゝみへそめつゝほともなくひかし石かきにしはまた
ぽんとにつく石かきまちのきにあらそふつりあ

んどかみは三てうはしのしたしもまつはらのこなた
まてなかれにつく水ちやはくもらぬそらのほし月
よあまのかはらもかくやらんおさまる御代のたいへ
い記あるひは平家物かたりつれくさ辻たんぎ辻
のうおかしく拍子とり諺かもの山なみゝたらしかけ
くうつりうつろふみとりのそでをみつにひたして
すゝしむるく神はうけすやいろんざいもん祭文はら
いきよめ奉るの色のさかりはあつまなる八百やのむ
すめお七こそ戀路のやみのくらかりによしなきこと
を仕出してつみはしぎいにきわまりてすくにひきだ
すあわれさよこれも戀路の世のうはさうたにつくり
て讀賣のてひやうしそろふかさのうちよいくく
あさ日さすまもそりや梅のゆききえてのこりしそ
のなをとへは花のみやこにおなしみ男戀のなさけの
やまとやなりと人もゆいしが其名もともにつゐにむ
じやうのあらしときえてゆめかうつゝか身のうへの
ほまれはつかにからくりまとおやまがおにゝうらか
へりおにか佛になむあみたなむあみたぶつうたねふ
つ歌念佛さるほとに世の中の人間のめかのすがたを
見せんとて花ひらいてしめすまにしんのちしきた

りそのかみはわしの御山にのりのみち今はしげんの
なかにたゝよふアゝあさましやこの身はさて沖こく
ふねのかちをたへいつかいたらんねはんのきし心の
つなになつわれていろにひかれかにまよひなさけの
竹の糸だしげきかねのひきかりんちりゝんりんと
をとそふる揚弓はいしや辻すまふおしあひおしあ
ひゆきかよふこゝは人じやうのところてんなつすき
あきはきおんまち花をかさりしおとり子のしくみお
とりはすみだ川これもあたらしふね人

(十三) 萬屋助六道行

都太夫一中

せひなけれ佛ももとはほんぶにてかのやしゆたらに
よのいもせなかぬる世さまもりんきのしなもいまの
衆生にかわらめやかれみこれをきくときは戀もほた
いもひきわけてみちはふたすしなきものをいかなれ
ばわれゝはたまゝ人とむまれきてためしすくな
き川竹の流れにしづむ身のさいごつまはわれゆへふ
たおやの氣にそむきにしゆへにこそたれにかまけも
をとるべきちゑもきりやゝもしんたいも見なあわゆ
きときえうせてかわせしことのかわるをばかわらぬ
やうにとさきの世とさきてあふやらあわぬやらとふ

やらこふやらしらねともいとしかわいの余りにはか
なわぬときの神たゞきそもまあわしがうちかみはど
うしたくわちなかみさまぞ京のよし田の神帳に入た
かみかやいらぬのかわけもなさけもわきまへすやぼ
こんしんかうつじんか正五九月の月ゝにうぶすな
とのゝゑんにちとみきたてまつるとしことに神事と
いへばたいせつにぎいしやうにいやんすはゝさまも
いわひ清めてねんころにわしもくるはのうちながら
心はかりのたむけをばとふうけさんじたことしやや
らけしんのわるひかみさまやかくなるやうな御まも
りさりととはつらやどふよくやとても此世はこの通り
せめてみらいはちがひなくふうふ一所にごくらくへ
それもかなわぬものならばたとへならくのそこまで
もふたり手にてをとりとくみてはなれぬやうにとかけ
まくもかたじけなしやひのものとむまれいてにしし
るしにはいかなるごしやう三しゆも一ねんみだの御
せいぐわんなになけくらんたゝたのめなにはのこと
のよしあしもつまぐるじゆずのかずとりてとりゝ
さぞやうわさせんあれらんせよくさきにはやよこ
ぐものたちわたりあけがたちかきたまぼこのはやむ

るあしもよはくつゝみづたいの忍ふくさあけは
うき身のすてところさらしなわてにつきにけり

(十四) 子の目の松

同人作

まくらもとらすおひとかすゆめもむすばぬはるの夜
のなたてかましやふたりねのにくやからすのつけわ
たりよひのしまだをそのまゝにおき手のぐひたひす
かたつえよわらずすすけのかき打つれ立てゆくみち
のしみづながるゝいけだ川あたとじつとの水すしは
ふたつにわれてかたせかわなみより浪にうつるせの
てうすとるてにかげみればねぬにほつるゝくろかみ
のしどけないやらわけもなやけしやうせぬ身は我な
から見るもうるさく思へともさすが女のひながたや
そめてゑがいてくまどりとせせばや君がためにとて
さらすほそぬのさらくとさゝれめなみかよせてき
てきしのおくさにアゝゝぬれかゝりよるひるわかぬ
ちきりそやわれはまろねに夢もなくうしや出しまに
ゆくふねの名のら計りとこかれきてこゑおもしろく
ひやうしとりおきもしつかにからろのおとがいざや
出てみよさましやこさらぬいそうつなみよあたゝし
んきやしんきとのどくや月にはつかはおきにすむつ

まをもつたも名はかりと心ひとつにあきらめてゆけ
ばうらみもあかねさすまつの葉こしにかけこぼすは
つうぐひすのなくねあどなやしほらしと見るにつけ
聞につけいづれおもひのあく田がわふかきねがひを
かけまくも神のめくみはおとこ山まもらせ給へとふ
しおかみ月のおほろのたそかれにかつらの里につき
給ふいろとなさけの世なりけりうき世なりける戀ち
やとなつむこのみちはかりなり

淨留理終

増補松の落葉卷第三 中興當流丹前古今ぶし

目録

一	福神出端	嵐 三右衛門
二	藤内だん尻	同 人
三	吾妻路記	中村 七三郎
四	遠目金	同 人
五	八幡詣	同 人
六	椀 久	大和屋 甚兵衛
七	難波壺論	同 甚兵衛
八	梅揃石切	同 人
九	關東小六	嵐三郎 四郎
十	戀の風流	勝井長右衛門
十一	山崎通ひ	同 長右衛門
十二	成 相	竹島 幸十郎
十三	祭 文	同 幸十郎
十四	市野屋	生島 新五郎
十五	狐會風流	同 新五郎
十六	曾我五郎	山下才三郎

十七	京の名所
十八	若松風流
十九	濱川風流

古今ぶし歌目録

一	なぞのうた	二	小栗馬之段
三	あさいな	四	富士のあらし
五	みうれし	六	鼠の晝ね
七	老ほれ枕	八	うしの綱
九	ぐんない八丈	十	有馬の松
十一	いろは	十二	天の川
十三	山ほとゝきす	十四	いなり参り
十五	浮世ことば	十六	茶のみ時
十七	さいの川原		

多門庄左衛門
岩井左源太
山本歌門
近松勘之介

増補松の落葉卷第三

(一) 福神出端

嵐 三右衛門

二上り そんなもめたいいわぬ申よゑびす三ぶ殿と大黒天がどつかとふんだ俵に中かにやよねたちを思ふよふにいらての戀する人のやしないにににどつこいさにににどつこいさにつこり／＼にこ／＼ともさおわらいあつたにさ福の神じやよしつかいざいしよの庄屋殿だんべいゑひすよい／＼さぶどのはつりさはをかたげてゑぼしかりきぬしやんときてみきわよふてよろ／＼あしもとはよろ／＼よろ／＼と船こぎ出てつりをたるればあらおもしろやひくは／＼ひいてしやくる所をつゝとあげてみたればさてこそでつかいよいおめでたいじやよの大黒殿はいなよい／＼たからくらべのしろねずみちゝすいついだきつい袋のうちはごそ／＼打手の小つちにすゝのおとしやんこ／＼や／＼六つ無病をくさいに七つ何事ないよふに八つやしきをしんちにぐわらりとひろめた九つこぐらをたつる／＼地形をゑい

や／＼ゑい／＼／＼ともつきたつるなには入江の三つの浦風

(二) 藤内だんじり出端

嵐 三右衛門

二上り 藤内次郎殿わいのふゑふきのややくでしちくかん竹のやつこのほこりをささつ／＼ともはろふてのとうらいの／＼笛人の物はとらいの我が物はやらいのと合ふいたるはさつてもふいた笛ふきとどつとほめてとをしただんぢり打てはやしただんぢりうつたみさいな藤内三郎殿は小つ／＼みの名人であかふのどふにかゝがわくれくれないのしらべをゝんどりかけにかけさせちゝつちちふつほ／＼たつほ／＼つたつた／＼／＼／＼合うつたるはさつてもうつた小鼓とわつとほめてとおしただんぢりうつたみさいなたんじりうつたみさいな藤内四郎殿はいの大鼓のやくでしつたんにしつたん／＼／＼しつたんつくるおん百姓明年は八たんじや三明年は十六たん／＼丹波の國の御百姓と合打たるはびやくらい上の町下の町とつとはめてとをした藤内五郎どのはいな太鼓打のやくで大まいの太鼓をあそこらもとおかせてきんのばちを手にもちつく／＼／＼つてん／＼てれつくには

づんでんどんてれつく／＼つゝてん／＼とんからつ
とんとうつほれたなるかならぬか戀の中の町なかの
／＼中の町をとりとふはなけれどなまだこつかん
だあたまをみたかくまの小びくにんがちとくわん
くわん／＼くわんともなるは夜あけのかねはつんつ
んつらいかづんでんとふからやぐら太鼓のをとによ
りくる

(三)東妻道之記出端

中村七三郎

本調子　きのふは袖に包けりけふ九重に旅のそらふり
あげみればかのこまだらにちら／＼と雪間に見
ゆる富士の山やう／＼爰にきよみがたそらにもせき
の有ならば月をといめてみほがさき名にのみきし
きく川に夢もむすばぬかり枕小夜の中山なか／＼に
はま松かえのわかみどりさしての岩をあらいのしゆ
く「さいれめ波がよせてきてきしのおくさにあゝぬ
れかゝる思ひうら有二川やげに潔き道のべの
雲のはだてに戀しき人のこひしきゑになつかした
だひとりねのはんぢよがねやの戸／＼西をきつとみ
たれば月はな月はてもせで磯におなみがなんびへの
なひゑのおろしが磯に打となん浦々とまり／＼を打

過て大津のうらに着給ふ

(四)右出端の跡遠目金

同人

二上り　あづまも京もたえせぬは戀といへるくせもの
けに戀はくせものあの君のめしたるこん／＼小袖の
袖のうみしつみはつべき我が思ひよしや吉野のはん
はなよりも／＼あのや君さまのおもはせぶりにしの
びかよはいみだれあふせも有やらんげにはづかしき
初戀に夢うつ／＼にもいふにいはいれぬおすがたをたが
せきとめてかよひちにふたり枕をかわしまのはしを
かけたやあのさとへとひたつほとに思へともへたつ
る中のかなしやなとかく戀にはやるせなや

(五)八幡詣出端

中村七三郎

二上り　げにいさぎよや心よやだてなすがたの／＼男
山ひく手あまたのあづさ弓やたけ心に我が戀の岩音
成ていつまでも君が八千代はつきすまじ／＼とかく
すてぬはをみなへしむすぶ契りはちとせ山はなの情
は猶つきじいろはさま／＼しなの梅八しは紅梅あさ
ぎむめ地はうすいろにかのこ梅まだいわけなきこむ
めふりよやひやうしもしなもと／＼に君か手なれ
し手まり梅をちてこほれてはらく／＼と空にしられぬ

あられむめわれが思ひを筆にまかせてかきは梅文を
ば君にやり梅よどの川瀬のなんなどつこいやれさて
さて／＼／＼水車たれをまつやらくる／＼／＼とめ
ぐりあふせの待夜はほんになせにちよろは出てまた
ぬぞ誰を待やらくる／＼／＼とめくりあふせの待夜
はほんになせにちよろは出てまたぬぞさて／＼見
事やいたいけしたるものありはりこのかはやぬりち
がふ千種むすひに笹むすび山しなむすひに風車ひよ
うたんにやどる山がらくるみにふける友鳥とらまだ
らの犬の子とるやよもきのやはた山

(六) 椀久出端

大和屋甚兵衛

二上り たどり行今は心もうかれそ誰かいく野をひ
きぬきしよりいつの比よりあいなれそめてかよふ心
のいくせの思ひしのぶつま戸をほと／＼た／＼は椀
久かきりとほ／＼うけふかのしのほかのそつこでう
けだせおもはくをこれ／＼／＼うけたもののあのやわ
んきうはこれさ／＼鼓の皮かのふほんへしんぞ心は
これさ／＼うちぬいたほんほへしんぞのふほんへと
かく戀には身をやつす

(七) 難波津壺論

大和屋甚兵衛

二上り なにはづにさくや此はなふゆごもり今をはる
へとさきそめてさかゆる葉もしげるよの幾代かさね
てはもしゆるよの君がよはひは萬代の久しかるへき
ためしかや國もゆたかに民さかへ玉のさかづき手に
もちてのめやうたゑやさんさのこゑすみわたるめ
でたさよ我もかはらぬうれしさよこゝなどのこはな
いくつ十三七つあらまだわかやさて／＼わごりよ
はたれ人の子なればしほらしやおどれ／＼爰な子お
どり出せ見事てん手びやうしもそろ／＼た／＼そろ
た／＼そろ／＼／＼／＼月のゑがほのてつたりやも
みちがさそりやか／＼かさよ／＼しんきしの竹ねざし
にあらればら／＼／＼／＼／＼落てみだれて夜ごと
にかよへささまがふりだす形ふり見ればさてもそな
たはいとしゆてならぬさてもそなたはいつもど／＼ん
どとつこいど／＼んとどつこいど／＼んとど／＼んどいござ
れゑいさつさ／＼ゑいさ／＼さら／＼／＼／＼ゑい
さつさござれど／＼うてはひ／＼／＼へこや野のしゆ
くのゆふ女がそでをしづ／＼／＼／＼ともひかへていま
やうはらうゑいしぼりはぎをうとふとおさへて酒を
しいられた此さけにたべ酔^{ゑひ}べろり／＼べろつくだ

君さまとねたる夜は小六寺々のほろりん／＼大鳥小鳥の羽ふしをたゝいてぼ／＼／＼／＼ふら／＼さがりのばん太郎おやじがしてゝん太鼓のゝほんはゝさまの俤わすらりよかどこでみたぞつとしたとよへい／＼君ははるさく梅の花じやがとよへい／＼きみははるさく梅のはなじやかとよゑいかをり床しきなりふりはありや／＼こりやゝゑい／＼さつさゑいさつさつさふり袖床しなつかし

(十)戀の風流

勝井長右衛門

二上り おもしろの山さきかよひやゆくも山みちもとるも山みち心のとまるも山崎かのさとのぢよろと一夜ねたればすはらめいたといはれたんがらがといのふ伊勢のおまへでゑひしてせひたまづさをひろふたへゑひしてせひおんなかおぢぞのおんくじおんとりをんみぬば一にや貳がおり貳にや三がをりるゑひしてせひさてもたまづさはおめでたひぞやゑひしてあれしてこれしてせひをこでかさもてかん五兵衛づきんのもてこいあみがさもてこいない五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ／＼をかへるさはとらさになつておくれ／＼をありやんりや／＼しつ／＼うどや

んどへもひとつしてこい五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ／＼をかへるさはとらさになつておくれ／＼をありやんりや／＼しつ／＼うどやんとへ五丁まちのたからじやふつたやつこのゆかしなつかし

(十二)山崎かよひ

勝井長右衛門

二上り おもしろの山さきかよひやゆくも山みちもとるも山みち心のとまるも山崎かのさとのぢよろと一夜ねたればすはらめいたといはれたんがらがといのふ伊勢のおまへでゑひしてせひたまづさをひろふたへゑひしてせひおんなかおぢぞのおんくじおんとりをんみれば一にや二がおり二にや三がをりるゑひしてせひさてもたまづさはおめでたひぞやゑひしてあれしてこれしてせひをこでかさもてかん五兵衛づきんのもてこいあみがさもてこいない五丁まちのたからじや千丁萬丁おくれ／＼をかへるさはとらさになつておくれ／＼をありやんりや／＼しつ／＼うどやんとへ五丁まちのたからじやふつたやつこのゆかしなつかし

(十二)成 相

竹島幸十郎

二上ッ かまくらの御所のお庭で十七こ女郎かしやく
をとるゑひそりや十七小女郎がしやくをとるいたり
すがたでうい事いふたよふいふたゝ思ひねぬ夜は
そこ心實からまちやあかしたうき代とふりものだて
しやのすがたそなたどこへいきやる夜更てからにし
ばしおまちやれつれになろおまちやれしばししばし
おまちやれつれになろ君とわれとはれんぼれんれつ
れみそめし月日は多けれどしかも元月初春にちよつ
と見てとろゝとぼけてうかゝとすそやたんゝ
袂にとりつきひつゝきくゝいたれいのゝれんゝ
れんぼのふかまじやとした二世のかねことさつさ
ふり袖さき手の行列ぼつたてろ
爰てはやるさつさつさよいやさ三十振袖四十しまださ
さつささよいやさだてなふり袖ゆかしなつかし

(十三)祭 文

竹島幸十郎

二上ッ 萬代の神のみことの二ばしらあをくもおろか
なりげに世のはじめ其みなかみのあかの水きよめ奉
るまつ人間の初月はつぎをは不動明王のうけ取給ひて本來
空の一もつこれとかやはらい清めたてまつるのつぎ

をばいかにと尋るに本心の靈心わたくしなく初てめ
いとくと名つけたてまつるの二月フタめにはとつこのか
たちのあらはれてこれをたのしと名づけ奉るの我朝
にては神よりとあをぎなづくる所はへだつれどもん
じゆ菩薩のうけとりにてさんこのかたちこそなへ給
ひ晝夜まもらせ給ふとかやつぎをいかにどたつぬる
に五つ月めには六根手足をさいしきて五體残らずれ
んぞくし此時にいたりて地藏菩薩の御守りてうあひ
ことに淺からずちやうちゝあわゝかふりゝしほ
のめしやくでうに打乗ッていんじんしよゝゝゐんじ
んしよといさみ給ひてつぎをいかにと尋るに六ッ
月めになりしかばこのむ處ほつする所自然にてうじ
母の乳味ちちみをすいとる事申さばいはく凡三石六斗なり
つぎつぎゝはあしくみろくの御守り當る十月は大
日の御守り四方にくわつと廣め給へは梵天たいしや
く八百よろづよの御神かくらをそふし給へばかぐら
のすゝがりんゝゝゝりんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
からがどつと生れた若ゑひす顔みせ代々のわらいが
ほおもしろや

(十四)市野屋

生島新五郎

二上り 京のみやけになに／＼もろふた蒔繪のさしく
しきりのたうあゝもんつくつおれに一代そふ身じや
とてもあだしこの身はどふもせ心ときぐしいのちじ
や「戀風ふかばゑい／＼なわけあるかたへさそは
さそへゆく水に川島あいをこがれて舟はおぼろに
影見えてうきを身につむしば／＼もかいもなぎさの
はまちどりちりやちり／＼／＼ちりとんださあらし
にみだれさつとちりぬるおもしろや」たつた川邊に
舟とめておぼなちじとふれば日がくれそうよの鳥
がなきそうよの鳥がなこまゝよの余町の殿子とね
たる時のうれしさはさて鳥もかねいとはぬこりや
どつこいとつこい／＼みやこふうりうせかいのななん
／＼中に色といふものこりかたまつてひとつの戀とな
らしはのしばの戸ぼそもやれたまだれもこひにあつて
はたまらぬ／＼戀はさま／＼あるが中にさ小野の小町
はさわけをもゝよかよへとのんほへ其中にもゝ夜め
のなしのぶ夜はなわけをもゝ夜かよへとのんほへと
にかくに戀ちのな心うわ／＼／＼きで たまつた事では
ないんたたんたふれとはなか／＼ぬれた戀のやつこ

りや／＼／＼よい／＼とかくうき代はぬれのまんな
か

(十五)狐會出端

生島新五郎

二上り 石にせいあり水におとありつゝみはたき浪袖
はしろたへ雪をふるふりもよしふりかへる山さらに
かすかなりまたあるときはおり姫のいをはたつる
まどにいりて人をたすくるわざをのみましてや我名
もいふ聲ひく袖のなかめなりそなたのそらは白雲あ
れこそおはらやをしを山今はふるすへかへる山此神
の徳をつげしらしめんとあらはれ出てはづかしやわ
れが姿のまことをあらはし又は國土をすいしやくの
はうべんころは雪ふりなれや木々の梢もうつもれて
梅もいろそへ松とても名こそ老木の若ちとり空すみ
わたる神かくらはんや神かぐらよはいをしらす此
神のゆくすゑひさにと我が神たくのとくをあらはす
御代そめてたき

(十六)曾我五郎

山下才三

二上り 我は石川や濁らねども人がにこすよのかけふ
にはなにとしんまいらしよかつやまが髪ゆいふり
手替りにこのへ君ちとせ山それやむかしのさゝれ石

いわほと成ていつまでも替らぬものはときわ木のは
いろにまよふ人ごゝる地をはしるけだもの空をかく
るつばさも戀にはたれも身をやつすいやいやわらは
心とひやうし一がんさそくやつとん／＼二がんさそ
くやつとん／＼さきのちからにやよれつもつれつや
ととん／＼とん／＼とん／＼うけてながして袖返し
棒はみや口戸田小坂そちが思へばこちも思ふよほん
にさせいもんしやたらほん誠につい／＼のつい我等
も思ひそろ思ひと戀とはかつてんか君がさかづきつ
く／＼つつてんつけざし三ばいのめやうたへやとか
く世の中

(十七)京之名所

多門庄左衛門

二上り 須まといふもうらの名あかしといふもうらの
名すまやあかしも外ならぬ花よもみちよ月雪のあけ
ぼのは筆て書^かきともつきせぬみやこぞおもしろや
「北は黄にみなみは青く東白にしくれないにそめい
ろの山はみやこのふじなれやふもとについく市はら
やおぼろの清水に影はやせの里人小原しつはらくら
まやきぶねあのをく山の柴といふものおり／＼おり
／＼おり／＼折てたばねてきり／＼とむすんでしやん

といたゝきつれたおはら木をこい／＼小女郎なせに
こぢよろは出てまたぬぞ小女郎こそくれ山ごしにい
たいきつれたおはら木をさてもそなたは春の花あさ
の中なるいとゑもぎ思ひそめたははづかしや思ひそ
めたりやうき世もいらぬ／＼やれさて／＼／＼／＼
うきよもいらぬゑんでそる物ちとおどろとゝのかゝ
の／＼とゝのよい子をまふけてたもれのふ上下なれ
てよいとのを／＼むこがくるやれむこがくるむこと
のこばかま何にいろにそめよぞゑい／＼はないろ
／＼かちんばかまちやくしてきり／＼／＼じんせう
におくのざしきにおんも／＼とねてかたろおふその
おくのでいからよまのでいましてさん／＼さんさぐり
まはれとはんなよめにはさんさぐりあたらずでひけつ
らおとこにさんさぐりあたつたはつちやこわ物なん
としよぞりんとはねられたんときのとくしやらや
／＼しやら／＼／＼やさつさしやらの戀路の心根や

(十八)若松風流

岩井左源太

二上り めでたの若松さまはよんのさかゆるはもよは
らんは葉もしげるよんの枝もさかゆる葉もよはらん
は葉もしけるよんのふくはらの里のよねくろは小松

ばらかよひ十八のく君とな君とねの目のまつ夜は
よねくろどこてみたみゆるとささつき見ゆるとさ十
八のく君とねの目のまつよはよねくろどこて見た
みゆるとささつきみゆるとさわけの前髪ふともゆ
いのしかくまきはでなこせうしゆはどれくあれは
それはどいんどへさまのおすきとてちんちりめん
のほんほゝかたにはからむめやからまつにからしゝ
をぬはせてすそやたもとほうらふくもみがひらく
ひさつさふれくゆかしなつかし

(十九) 濱川風流

山本歌門
近松勲之助

二上り ことしわたりのきやらではないかとめてねま
きのそめ小袖ねまきのとめてとめてねまきのそめ小
袖はまがわの女郎はお手があればそなよゑとよりか
なま川繩のでんくてん出所なよゑ我戀はくま
るきおごけに角のふたあいますきまをあはせどもあ
はぬよのしやてんはちまつかせ「さまがくるやら帆
がみゆるそこ介こゝ介がつてんかとまをしきねに梶
どつこいかちどつこい枕よんのござれ沖津ののほほ
んにほんにさはほんにほんにさはほんにほんにさは
んにくさござれ沖津のどつこいわかれの野でしげ

ろたんたふれく戀のにくさよ

丹前出端終

古今こきんぶし

(一) なぞのうた

瀧川六三郎
古今新左衛門

そこなせんとになぞ／＼なにこちやなぞしらぬなん
とのかきかねはずが大じかけるか大じういもつら
いもよとながなわて身すきなりやこそふねもひけふ
ねをひくとてなせそてひいたいかにおんらがいんな
るものでしんらぬしらぬとおもやろけれどめもとで
もしるのりあひふねのせんとやすみやれあゝへつと
しよしわひ女郎しゆやいやならおきやれおかいでな
んとしよことはかゝぬぞこちのふねまき煮にかきし
ふねのうちみつこやかしまやこんびくにん御出家庄
やどのぬけまいりこほうらいかくどいたれんぼのや
みのくらかりにあかゝりあしをさしたさまじや
こさらぬやつこのうわひげさなでたこめん／＼十め
んつくりてひかられたひげがはげたらこめんなれ

(二) 小栗

古今新左衛門作

本調子 いかに鬼かげよくきけよ牛は大日如來なりむ
まはばとうくわんおんなりけいん化生のものなれど
あまた有ける其中になんぢことさら人まぐさをはむ

ゆへにちくしやうの中の鬼ぞかしこまもしやうある
ものならばみゝふりたてゝよくきけよ口にぶつみ
うとのうればいきながらほとけになるぞ鬼かげよに
よせちくしやうほつばだいしんときく時は汝もたし
かにちやうもんせよそのとき鬼かげは畜生とはいゝ
ながら戀の哀を聞わけてもろひざおりていたりしは
人間ものはしらぬなり

(三) 朝伊奈

同人 作

本調子 あさいないかにとしかりけるむねんなるかな
世の中のそれ天人にはごすい人間には八苦とて八つ
のくのあるその中にひんほどつらきものはなしひん
くとたにもなりぬればうとき人にはいやしまれたん
ほに衣かさねゝば夜さむさいとゝたえやらす朝夕か
とほしければことゝひかはす人もなく日鏝りじゆん
ぎにまじはらねばなぐさむかたもさらになしたま
たまれつぎにつらなりて心はかうでう 人にすぐれ
てみゆれどもかさねのきぬがうすければかたみしよ
ぼらでくちおしや世をも人をも葛の葉のうらむべき
やうあらざればたもとをかほにおしあてゝたゝさめ
さめとぞなきいたり

(四)隅田川

同 人 作

本調子 吾はみやこの者なるが人商びとにいざなはれ
あづまにくだる玉ぼこのさもあらけなきものゝふが
あゆめくくと打つえにあゝちゝはゝの戀しやとなく
より外の事ぞなき 自是江戸流位二上リ 「いたはしや

をさなごはいまをかざりの下よりも父はよし田の少
將よ名はむめわかと申也みやこの人の戀しやとにし
にむかひて手をあはせ南むあみたくくくくくく

(五)富士之嵐

同 人 作

二上リ ふじのあらしにろかいをとられくひとりこ
がるゝ田子のうらさんせうめがこせうを女房にせう
とおしやるたうがらしがなふどやれたでほがりん
きするとふでもわさびははなをはじくへ

(六)三嬉敷

同 人 作

二上リ うれしくが三うれしござる初手にござつて
もふられぬうれしやどのしゆびさへしゆびさへうれ
しうらがみなとにやほだすもうれしうれしへ軒の玉
水とくくござれしげくござればこさればしげく人
が人がしる

(七)鼠の晝寐

同 人 作

ねずみめがさんの野中にひるねしてなねこに子とら
りよと夢をみたなまもりよかけさへよけのまもりを
なひるねのね事いふたおかしさはいのうちのなへし
かまもふすぞりくわんすもとふりやかゝみなこかね
へ

(八)老ばれ枕

同 人 作

としは寄まいうらが部屋へは猫もこすものおひばれ
くこちよれちとく抱てによすものくだいてち
とくによすもの

(九)牛之繩

同 人 作

二上リ ひいたりな牛の繩をへそんれはひきやること
じやとの子のなくさかりとしよかまもよくかれちく
さもなんなびけなびけやれ

(十)郡内八丈

同 人 作

二上リ 山の上には白まめ青まめ枝まめしろひふくろ
はひさうのしい竹芋のはの露ぶりしやりとこれのお
さつにはたおらしよぐんない八丈こくら島くぐん
ない八丈こくらじま

(十一)ありまの松

同 人 作

二上リ まつになりたやなありまの松にふちにまかれ



てねとござるまかれてふじにふちにまかれてねとね
とこざるなさけ有馬の花のゑん

(十二)伊呂波

同人作

二上り 子どもくよ髪結てとらしよいろはにちりぬ
るをわかわがよたれそつねならむうろのおくやまな
けさこへてあさきゆめみしゑひもせす京宵にやわさ
んよなかにやほけきやうあかつきおきてはゆづの念
佛紙子くあべ川紙子へ

(十三)天野川

同人作

二上り あまの川には水こそまされさてもやんれあふ
よならぬへはしをやんれかきよやれかさゝぎの天竺
のあまの川にしるいゝをけがながるゝ奉公すると
したうふやにやいやよそれなせに七ツをきしてまめ
みがくく七ツおきしてまめみがく

(十四)山郭公

同人作

二上り 花のちるときやはつほとゝぎすやまほとゝぎ
す月は三ヶ月かたわれいびつまるいなが月くる時雨
月雪をながむる火をけのあふないまどのあかしくれ
竹いゝよの枕戀にねぬ夜はふたよみよ

(十五)稻荷参

同人作

二上り ひけやくひけやく牛のもうもふつなをへ
柴にさくらをおりそへてさせいほうせいこりやどふ
だいなまりまいりの参のいなりふりそでゆかしゆふせ
んもやうでそれいへおかたよそじにむすめは十五
ついのもやうでゆかしへさいかち山へのぼるとてあ
らい風がもつけな吹てきたはぎの白さてゑいとこな
んとこな白さではぎのくしろさで日をくらす

(十六)浮世言葉

同人作

二上り うき代ことばによそへてとふてとかくうき代
じや戀のみちうらがきまゝなるならほんにとはおも
へとも人の口有事ない事おつしやります事聞ば松は
こふじとねたといふこふちはまつとねぬといふあの
うそはいのねたりやこそあれなやれひつたりとその
よな事はなげもない事よきけばうれしや思ひくさた
たうつゝなや人にいはれぬわがなみたそれとはしら
でおもひねのかわくまもなきわがなみだられうのた
もとをもひかばなとかきれさらん

(十七)茶飲時

同人作

二上り おきていなんせなあすの夜もあるにいましば
しぞや又ねのとこくにはぬるゝ袖ひがしがしら

むどん 頼ておばいの茶のみときしゆんだらまんだら
ふくしくゑびすべするくべざいてんなむ樂師のお
ちそうかのみめのよいちよろさまのそばにそつとね
たるはゆきかしもかみぞれか村雨か雨かあられかよ
しのゝはつせのちりかゝるやうでおいとてうてねら
れないうらゝがやうなるみめのわるいしやつつらが
そばにぐわさりとねたるはいかぐりぎりつくり天神
ひげけさ打おろしのあらむしろがんぎやすりさめは
だつくやうでさすやうていつくにはつくにねがゑり
うつてはねられない

(十八)さいの川原 同人 作

本調子 爰にあはれをとめしはさいの川原と聞へし
は二ツや三ツや四ツ五ツ十さへこさぬみどり子がい
さごをつかねて山となし小石をひろふて塔につみ一
ちうつんではちゝのためちゝのおんと聞へしはしゆ
みせんよりもたかふしてこと葉になにともしゝかた
しなむあみた佛くゝなむあみた二ちうつんでははゝ
のためはゝのめぐみのふかき事さうかいよりもなを
ふかし三ちうつんではきやうり兄弟わが身のためと
ゑかうするなむあみた佛くゝゝまんずはゝのたい

内に十月がうちのくつうをうけやうく此土に生れ
いで四とせ五とせ七とせ待やまつやまたすにみまか
り出て又いつの世に此恩をおくりかへさんわらんべ
とさんくゝにかしやくくなしいつちともなくうせにけ
りしよじのあはれと聞えける南むあみた佛くゝくゝ

當流丹前古今ふし終

増補松の落葉卷第四

古來中興踊歌百番

目録

一	菊づくし	二	都橋つくし	卅五	八重垣	卅六	ぶんまけ孫太
三	小倉山	四	山ぶしうた	卅七	髪結小五郎	卅八	からかき
五	浦つくし	六	ごばんつくし	卅九	いせき	四十	しんしよのや
七	大つおいわけ繪	八	月つくし	四十一	楊弓	四十二	先陣宇治川
九	松つくし	十	さんがらが	四十三	なんほゝ	四十四	たけ馬
十一	阿部川番子	十二	ちゆつちゆら	四十五	しらかし	四十六	ふなさし
十三	づんからもんがら	十四	君ちり	四十七	七ツ道具	四十八	はんじよの市
十五	さらし賣	十六	難波長吉	四十九	山の手やつこ	五十	早さき梅
十七	一ばん鳥	十八	伽羅の板橋	五十一	すがさ	五十二	權のすけ
十九	むねあげ	二十	源五兵衛	五十三	金山間夫	五十四	岡山かよひ
廿一	なぎなた	廿二	小野村彦惣	五十五	馬場さき	五十六	すまやま
廿三	三彌大手みち	廿四	おさき鈍助	五十七	しとゝん	五十八	四季花かき
廿五	ふくの田	廿六	大小けん	五十九	ろひやうし	六十	つり船
廿七	外六藤六	廿八	丸ふく頭巾	六十一	さんばさふ	六十二	地ふく
廿九	福助買ぞめ	三十	有卦はじめ	六十三	君はしんぞ	六十四	してゝん奴
卅一	順禮	卅二	次郎官者	六十五	世つぎ	六十六	糸屋むすめ
卅三	さい鳥さし	卅四	鶉の羽かさね	六十七	珍内花笠	六十八	春駒
				六十九	荒木の弓	七十	ぞんざりこ
				七十一	牛まど	七十二	三國玉屋
				七十三	彌之助	七十四	てしやこ

七十五	どふらく	七十六	唐人
七十七	ゑじま	七十八	こよみ
七十九	但馬小女郎	八十	もんつくつ
八十一	都の町青物賣	八十二	拙僧
八十三	堺のはま	八十四	梅の木
八十五	手あいすまい	八十六	藤内太郎官者
八十七	蟹川	八十八	しゆんせう房
八十九	伊勢宮廻	九十	せうぶがり
九十一	いもの子	九十二	小川
九十三	ていこ屋	九十四	ほい／＼
九十五	のんやほ	九十六	二本
九十七	まんまる	九十八	こんどや
九十九	ふくとん	百番	さゝら

増補松の落葉卷第四

(二) 菊づくし踊

二上り かゝのおきくは酒屋の娘かはしらきくべに
きくつけてよひこのくよひこの小きくとりなりし
やんときく
なかいさいてみことなあふきくるまのくるくくく
るまきくかさねきくしやうくまひをまいのそて
くみそめてそめてこひにこかれこかる身はから
にしきかよふみちしはきくませかきさあしあしてと
んとひこゑつとんとびこゑぞんくそんそつとした
くひとへふたへみゑよへなへ八重きくよ御所の
御もんはきくの九重

(二) 都はしつくし踊

二上り みやこ大はしわたりてゆかはおもひそめたよ
こいたのはしにまたもあふみのせたのはしかげふな
さけのひ
はし人のこゝろはかりはしうきはしそりはしなれは
あたにその夜はもどりはしつれなや君にふられてさ
くふられてくゆきにふられてかさゝぎのはしち
よつと替せしことばのはしをなんのわすりよそく

それがうれしゆてきよみつのとんとろくといろ
くといろくといろとんどろとろ木のはしつも
りてこひの大和はしくちぬ四條のはしはしら

(三) 小倉山踊

二上り おくらやまからよむことの葉のうたの中山み
やこのふしよつくやまくこひの山だてをかざる
やきぬかさやまなんくくなんてもにしきをり
なんくでもにしきおりすそはちらほらもみち葉ち
らす高おとがのをいやといわれぬとうも云れぬ袖を
ひかへた男山これもあたこの御りしやうをかのほ
ればさつさゑいさつさくさつささぶろく十八町あ
らし山風いとわてきたやまはるはかならすひかし山
へこざれの花のさかりはまんくまるやま

(四) 山ふし歌踊

二上り おともとならのあさはれしちやほんこのや
まふしおとこをもちやれのもとゆひひねらずはかま
きすやれこりやはかまきすのんやはのあさはれしち
やほんこのやまふしおとこをもちやれのもとゆひひ
ねらずはかまきすやれこりやはかまきす

(五) 浦つくし踊

二上リ わかのうらなるいきかたおとここひにかまは
ばちかのうら^{ふみとりかわ}もみうら白うらあさきうら
だてをするがの^{すそでのうら}みをの浦なりよきふりよきふしをに
のふたたんくたんたごのうらくばんにやかなら
すくかたのうらとふでかつかいにくる夜のきみ
に大津のうらは七うらなんくとこいなんくなあ
なうらなんくく七うらこれからさきもなう
らなんくとこいなんくなあ七うらなんくく
七うらかはらでこにすまはあかしのかはらはたか
さこ

(六) ぐばんつくし踊

二上リ 京は十らくたのしみところまちはぐばんのな
りよやみよや^{しかくしめん}むかひあわすりや手にてを
しみやるよござるくよいてがみゆる戀のななかで
にとゝんととふあしたとゝんととふあしたわたり八
もくすんすんすとのびるはまはなん百ろくく三
百六拾もくいちこつれそふつれそふなかの白ちんち
りめんくろはふたへでぬめらんすしゆすのおびく
しめつゆるめつよいなんなかくくうつやうつたり
くおてゝゝゝゝをうつつたりなうつたりくおて

ゝん手をうつつたりなしやうすめくおもひのた
けのよゝをかかねてうちやおさめた

(七) 大津おいわけゑ踊

二上リ のほりくたりに目につくすかた露の命をきみ
にくれべいおいわけのたるまゑこゝろおに衣はそ
げたもおかしぎたうはしりゐにいぬかほへつくねこ
かしやみひく酒のむやつこあたごまいりにそでをひ
かれただてな若しゆがたか手にすへてふれやれく
大とりげくうきよのんせいふんらんらんしんらん
どんらん十三佛かけはりくけぱりたゝみぱりいゝい
けのかわすげかさよりほにそろばんつふせきの清水
はうき名所

(八) 月つくし踊

二上リ 月はむさしのよい月たしの女郎はみかづきだ
てなどうちう袖月たれをまつよひあのかほつきとし
は十五夜こし月あしつきさへたこわつきな夕つき
よかつらおとこよさつきとしかこされさつきかは
ゆかござれいさよひ月にたわむれあそへゑい
くゝゑいゝゑいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を見たらばなんとこざるまいかのてるく月々てる

く月のおもかけ月をみあかしのみあかし

(九) 松つくし踊

二上り にはの松山それからさきよしかのうら葉のひ
とつまつ すんといいき なびめこまつ まつよはくきみをまつよはと
ふやま松よやまさかこゑてくくみとてきたのく
七本松よほんにかならずあをばのまつよのこるきぬ
くきぬかけまつよ嵐松山さらくどつこいさら
くくとつこひさらくくくくくさつとうつ
てははままつのおとはさいんさ

(十) さんがらが踊

二上り あらい風にもよふややよあてまいさまをや
ろかしなのゆきぐにへさあささんがらが川じやざ
んざら柳のよいやさしろねがくよい手はくこま
のひざぶしんからがくしなのへやろかやろかしな
のゆきぐにへさあささんがらが

(十一) あべ川 昏子踊

二上り お江戸くみやげにあべかは昏子くありや
こりやよいきてはこそくくくさあんささあんへ
くわんこやくしやつきくくくしやちんがらこく
爰までは走り出てみればくありやこりや戀のなか

やとさあおろせこれさくきてはこそくくくさ
あんさくあんへこつがらてくせ天照大神おんいてな
されてめでたいな

(十二) ちゆつちゆら踊

二上り からすかあかくちりかあかあ鶯ちうく
ちゆつちゆらちうくちう春になろとてはけきやう
とないとさほけきやうでんぐりかへしてさつさ「鶯
へかへし

(十三) づんがらもんがら踊

二上り ゆのふとふげのまこじやくしささつとしめか
けさゑいこのくゑかながふてつんからもんからか
らづんがらもんがらやつてくりよひたちの國のつ
おかにしほり長者といふ人がこがねのついでをつ
くならばれんげはちすといふむすめかれら二人の兄
弟をてこのしゆとさだめて思ひのまにつくならば
なんなくついじはしゆつたいたらんよふつふなん
よへ

(十四) 君ちりおどり

本調子 こゝな小吉めは與五へが君たんだくすのこ
きみちりくかますのふぐた君たんだかますのぶく

たきみたんだあぼとこふんではおぼちよこけべいて
ほこちよんとぼし火じやふやらのくふんくふふ
やらのくそれはへふやらのそれはへ

(十五) 晒賣踊さしうり

二上り さらししまさらし高みやさらしさらせばむす
めはくろむ布はなるほとくなるほとくなるほと
くなるほどむすめはくろむしろくなるほとく
二上り なるほどくなるほどくなるほど力にまか
せたかつちぎねむすめはくろむゑじまをれを見てな
せにかほふりやるぞゑじまたかみやなんとしよぞゑ
じまは生れつき

(十六) 難波長吉踊

二上り ゑひくくなにはの梅やよしべ心は入江の
うみのにごりよどみてすめどもついにあしのかたほ
のほにあらはれてひかれいづるや心の鬼よせめて百
兩のかねばかりかやいまだおさなき長吉をころそと
たくみあるとは夢にもしらでしうのかなしさは是が
な此世のなこりかやゑいこりや此世のなこりかや長
吉久しのあねにあはしよぞさあこちおじやといふに
たまされつれたちゆきて長吉さきの物は有かなんの

事でござんす金がふところにあるかといふ事いや
くなんにもござんせんだきにやころすが一度で出
せとさんとかわらけほどなめをむきだせば是はだん
なのかはせの小判いのちたすけてたすけてたべと手
をあはすればかしましいころしはせぬぞあといへ
どもおおくのなんどへわきざしとりに行をみてから身
もふるわれてむざんやよしべは長吉をとらへさあど
ふするさいごじやあかなしやなこにあねさまご
ざらぬかいのあらうらめしやとうらみなげどつれ
なやむめはこゑをたてたらころすといへばなくもな
かれずかはいやなたいおし鳥の羽ごにかゝりし野す
へのいどのそこにありとは夢にもしらでおや子親類
かやせく長吉をかやせ長吉かやせとなよひとねも
せでまよたへ

(十七) 一番鶏踊はんにわら

二上り ぼんさまくちとたしなまんせうちにや女房
子どももないものかなんぞのやうに性わるぼんさま
一ばん鳥のなく時はことくくたとたきあけては
やでるとのく内にや水がつくかあまりのことい
くさつてもくあまりけふこつ

(十八)伽羅之板橋踊

本調子 さつまのかこしまの長吉どのはきやらのいた
ばしをわたるとてこえたほとんどへいで其比ははな
み月さくらせたらおふたるなます見つけた長吉との
長松どの長吉長松ちよろ／＼めきがあげておとし
て藤のはなをしつかとからげてさつさあねのみやげ
に

(十九)棟上踊

二上り 四本／＼はしらをいよへおつたて大工のちこ
助これのおたけにほれましたさきりやしやつきりき
りしやつきりき／＼ちこ助のこぎりこぶくらやつこ
りやこりや／＼ひきまはし一筆かいてはやりがんな
さてのふおやみたやあの子うんだるおやみたやちこ
助のこぎりこぶくらやつこりやこりや／＼ひきまは
し一筆かいてはやりがんなさてのふおやみたやあの
子うんだるおやみたやちこすけさあやるぞゑい松に
こ鶴がまいあそぶ

(二十)源五兵衛踊

二上り 高い山から谷そこみればさつま源五兵衛はめ
にたつおとこのほほんにほしやれたひんつきちやせ

んかみねてまたおきてもちやせんかみずんどくぼん
たぬりかさおまんはどこへはりまのあかしへはまく
りふみに／＼はまぐり／＼／＼ふみにてぐり／＼
／＼ふねにのこの舟にのせた源五兵衛きり／＼とまは
つてのぞんだはりまのあかしへはまぐりふみに／＼
はまぐり／＼／＼ふみにてぐり／＼／＼舟にのこの
舟にのせた源五兵衛壹萬八千たから藏ゑい／＼や
ゑい／＼代のさかへ

(廿一)長刀踊

二上り さてもそなたはくわんくわつ人かしんくさげ
をのなが刀おつとり揃たなぎなたすやり／＼／＼
／＼やり／＼すやりちかくとうさ八方からめてくも
でかまやり十もんしみよは／＼一か二か三か四か七
つ道具でおさめておつとり揃た長刀

(廿二)小野村彦惣踊

二上り 城州／＼おの村の彦そをみたかへあたまちや
つせんふともとではそもとでふともとほそもと／＼
／＼ひきしめてじてひとりのだて男へ彦そはどこ
へ山へさ山えのぼればいばらやとめるいばらやつと
ん／＼はなしやれやつしてさ日かくれる彦惣／＼ひ

こそのおばこのうとふてうすひきやるいのめ、かまへうすのめじやものかまりよかい彦惣くくく

(廿三)三彌土手路踊

二上り 系ひくどつこいながい刀をさいたはおさきかたひちいかつてやつしつしついはさんばこつぎとつこいやりふりじやたてたへさんやとてみちなよふたとさよふたとさあしやちどりあしにしは田のあせあぶないがてんじやあぶないがてんしやあぶないくあぶのふてならぬへもひとつかへしてあしやちとりあし西は田のあせあぶないがてんじやあぶないがてんじやあぶないくあぶのふてならぬへぬれにやめのないかな山どつこいおとこへ

(廿四)お先鈍助踊

二上り おさきさありやらんりやんりやから崎のしててんやつこのぼつたてろまかせておけろのよいやさこれはぶんごのありやこりややりむめのやりむめぶんごのおさきて石つきつかんですつくもちりてふれとんやこひちでふれとんやつとうやとうしやんぎりくくしやんぎりたいこのすんでんとんすすの

どんすけかありや上の町下の町中の町ははれじやほどにむなひげさすつてすつくふらいの

(廿五)福之田踊

二上り さまが舟かやかんべぎ沖に系じまの姫むろはふくの田くあの、かんすくよのうけてのながくのすはこんのごいのすけおしやりやそうでござるふくの田くあの、かんすくよのうけてのながくのすはこんのごいのすけおしやりやそうでござるふくの田よいるくふくの田

(廿六)大小見踊

二上り 鹿島浦からのふ浦からくたからふねがついたとさかほのわかやぐ年男よい事くよいことくよい事ぶきをいはふて事ふれかまいりた是やこなたへごめんなるまつ來年の系ほうは申酉のあいだをば年徳神とさだめて庚辰のとしはじめ卯の十六日がまめまきたわつとつかんでよいやさかしまおどりをばちうちつとちとくちつとおとりひやうしにかかつてこれやこなたへものとふまづ正月は大かのはて大ともく二月小三大四五小くたそれ六月は大よのさてくさてくどつこい七八月は小とさだめて

九月は大の菊月十月小はがつてんか霜月しわすは大
大きわめてくしつかときわめて大小げんとさだめ
た

(廿七)下六藤六踊

二上り ゑいどつこいゑいへいこのゑいとんなむ
こがくるやらげ六と藤六とおたるもつてまいつたお
つとりそろゑた御しうぎあられまじりのみぞれ酒春
はうでたいとそのさけひつかけて花たちはなやれ宇
治水ゑいとんなうんゑいとんな池田いたみのけ六と
藤六か晝はまへたれたまたすきよるはりんずの三重
まはりちんたのさけやしなのさけはむことのゝおす
きじや

(廿八)丸福頭巾踊

二上り いつもよりにぎおふかどのふたばしらでつく
りといくよかさねてまいねんのくゝゑほうからとて
ゑひすと大黒とふつくな身てござつたいはふてつり
ざほさあまいろおさきへござれくるかあとからく
あとから見れはまるふくづきんでくづきんでく
にこくくまるふく頭巾でにつこりとけさのゑが
ほはなをでつくりなをにつこいとしへ

(廿九)福助買初踊

二上り かどは一五三かざりわらさげてものもとれ
くくどつこいどれくつこいとれ當年のゑほ
うより福助が買初ははめでたいなくらひにきたなを
ろしかわのさいふをかたにひつかけてふるかねかを
唐かねかをふみのうわかきしやうのしたがきかい
ましよよいく伽羅のたきがらかをやれかをおふか
を心中のよいねたちを千年も萬年もまんくねん
も正月かいといはふた

(三十)有卦初踊

二上り はなは四きさくやれさて都はにしき野山つゝ
きて一はいにゑいずつしりとことんとこととくつ
んとくつゝんとんとこととくくくくくくす
つしりとうけ七代の年八卦正月はじめ事はじめやれ
十七八もうけはじめ火性はつらりつとことんとこと
くつんとくつゝんとんとこととくくくくく
くくくすつしりとはしめてひらいた扇子のかなめ
はしつかとくすへはんじよへ

(卅一)順禮踊

二上り よいくくかたにやおいするひつかけてあ

ゑいとこなあなんとこなつんつきそろへたほうの手
きりりんくきりくきりくわつとまはつたじゆ
んれいしゆ是ははりまのしよしや寺よさだんくそ
ろへてのぼつたゑいくくゑいくゑいくゑい
くくくしよばんなじやうしゆちんやうくつゝ
いてのぼつたよいやさめてたいな

(卅二)次郎官者踊

二上り 千石のよねぼね萬石のよねぼねおにはにすつ
しりつゝいてまいれ次郎くわんじやげに尤そうよの
めじかに持てさあまいろいそくいさんでさあきり
くいそくいさんでさあきりくきりくまいれ
さあまいろまいるくまいるくさあまいろ鳥はが
んかもすゝめひよどり鶴のはしさつてもいふたよふ
いふたまいるくまいるくさあまいるはなはこう
ばいしらたますいせんくわさつてもいふたよふいふ
たげにもつともそふよのそろへてくそろへのあふ
きはすゑはんじよへ

(卅三)さい鳥さし踊

二上り うづらくなくなるふかくさ野べのねさゝを
しわけかきわけくよくみれば人めせきれい打とけ

てありや山からのおのくおのくおのくおのが
ひきよくの羽もかろくくつまさきしつめてく
つごものくつごものくゑゝへゑさしさほへく
けさはつこゑはしほらしや

(卅四)卯の葉重踊

二上り 日本目出たい門に松竹かさり立て若水男とし
男卯のはかさねのきそはじめやれ御馬のりそめ弓は
じめこのやつつるつつるくつるやつつるつおづる
め鶴つるくつるくやつつるく松はかはらぬこ
のとの御はんちよさておめでたいよの

(卅五)八重垣踊

二上り 小倉くわんせんちよこくとをひのおもてか
らごされじつと引しめやとんくせどは八重垣大戸
のくろくのくんぐりどくんぐりくくんぐりく
んばくくりくんぐりくくりよひくんぐり戸くんぐり
くくんぐりくくくりくんぐりくくつてだんく
めでたいごしうぎ

(卅六)文まけ孫左踊

二上り 坂の下には一夜もいやあよのぶんまけ孫左が
お手まくらみつはでくく山ぶきやそつこてしよげ

ろいよんのあいしてさねざめにや鹿よしかのころよ
んのあのみねとをるはこつちんくさがつてのぼつ
てのぼつてさがつてごいよころくころくころ
くころくころくころびおちてあふせもあらば
あぶななかつたやどつちかひかたはやまだぬまた
かふけかあしがひかれぬ逢坂へさかの女郎衆と

(卅七) 髪結小五郎踊

二上り こひく小五郎髪ゆいさしてやつとたばねて
やくつはかいとり大津八町てむつきくどんく新酒
こざけはこざいかくもなとつこいなろかへせきの女
郎しゆはやれこりや馬の口とるもろ手綱若衆見かけ
てなとつこいなんなんくなんくやつこのや
つとたばねてや

(卅八) 傘踊

二上り むこ殿はなつくべいとて夏は何をみやげにす
んどくぼんだぬり笠めそならくいつそとがり笠は
そりかさ朝日のやつるくくやつつるつくそり
やさせおとこやれく男かくの市大男

(卅九) いせき踊

本調子 われは岩尾にさ打よする波はつとたつなはい

せきの竹のかこのやめしけきやなかああたごぞあ
はでやみなんういぞつらいぞ

(四十) 新庄のや踊

二上り 紺屋もがりのやだんくくだら助のほそ帶
さつてはたぐつて三重まはるこのよいかどのやしん
じよやのさ竹ごしによつくるよくよつくるくよ
つくるくくるくくくとくよりたけれどもまづ
とをるそれかへさつてはたぐつてへ返し

(四十二) 楊弓踊

二上り 御代はめでたやふくろに弓をおさめおさめて
おいていざや矢をとれ一百手君のは風になとつこい
いちどはおちよまとはたまやのなとつこいねんね
くねんくくねもさへわたるもんは花ざりをれ
とそなたはまつどつこいく松竹じや

(四十二) 先陣宇治川踊

本調子 先陣宇治川づらくすつとまくりこむいきお
ひにこまがいさむのほらほくのほらほくはん
にやしととささあしととさかつてかぶとのをし
めのきんちやく金銀のは娘のたのみにうけとつたお
大分の「駒かいさむへ返し

(四十三) なんほゝ踊

二上り きみは二階のはん箱はしごやつこのぼしたて
かんじりくくかんじりかよふてござれすんどの
ぼつりめてはおりぬきだ小娘をみたかとしはなんほ
ゝゆかないがなんほゝなんほゝゝやれ床とつては
なんほゝなすみかゝるおゝしのびのくかくし殿を
見たかやつこのぼしたて年はなんほゝゆかないが
なんほゝゝゝやれとことつてはなんほゝなづみ
かゝる

(四十四) 竹馬踊

二上り 五十三次にかくれない男よゝをこめたる竹馬
をさてく見事にかざりたて手綱かいくりしつしど
をくといんどどつこいせとどつこいせ朝のがけ
にやこむろぶしでがけにやあさのくでがけにやこ
むろぶし一こゑ二ふし三藏やいふたりつんくつれ
だちさあくくいくべいくつわとすいがりんく
がらくりんがらがくはいどうくはいくはいくはい
くはいどうしくあつはれ御馬は上手とじやうす
かのつたかのつたぞそれくそろたへ

(四十五) 白樺踊

二上り 忍いくみくまのゝなちのお山を今朝こそみ
たれ順禮衆ふだをちやうどうちやおさめていわのは
ざまのしらかしをく國のみやげにならたよぼうの
手そつこてひとふりやつとをくやつとをくとを
とをくくやつとをくまいろとうくとをく
まいろ岩のはざまのしらかしをくを國のみやげに
ならたよぼうの手

(四十六) 舟指踊

二上り 高砂やく此うら松に年をへて木影こかげのちりを
一さらへつまげてからげてくたかつまとりてまぼ
じよはしり出ててゝらをまちやれさあよいさはさよ
いく世の中のおめでたいよの「木影のちりへ返し

(四十七) 七つ道具踊

二上り おさささきくさあさきくはふりてのしゆ
とろりくくとふらねばなんよさつぎつきくはあれ
助よいく是助よいく浪助せき助だい笠はもち助
たてがさはてくすけ戀のとつこいだて助しやれため
もとでひとねりこんどのくくく今度のやぶ
いりにやうらからござれうらのやぶからつまどから
なりからふりから物すきでとのをめがけてふるは大



とり毛

(四十八)繁昌之市踊

二上り めでたいなあゝめでたいなわれかすみかはみやこのたつみいなり山こぼれかゝれる玉あられ是のとのごにあいとてみとてあの山こえて此山こへてゑいさんさあさゑいさんさゝ君をおもへは音羽のたきのたきのしらいいとしいとゝいとしよのいとしよのいとしよのゝゝいとしけりやこそはんじよないちで此さけによふたとさこんゝゝこんゝゝのさかづきはせんしうらくゝ萬歳らくと祝ひおさめた

(四十九)山之手奴踊

二上り さつまアゝのいちのやはどつこい三ヶ國のきやらよなどつこいななんゝ名もさてよいやなゝゝきやらゝゝきやら男へたてからみてもよこから見てもはつアよいおとこへおさき壹番てのやつこいわひげひんとしたしやんとしたつりりんゝつりりんゝつりりんひげのなが刀それ八もんじうからゝゝうかれてあとからうかゝゝうかうからゝゝうかれてあとからうかゝゝうかちふる手をふるだてをふる爰は山の手のよいゝやつこのでところ

(五十)早咲梅踊

二上り ひらき初めたるはやさきむめのはんなりと袖つまそろへてふつくりときいたかゝゝゑいゑいゝゝゑい太郎くわじや御まへにねんのはやゝゝとはやざき梅のうくひすかきりきつてうゝきいてうきりきりきつてうきつきよいわふた太郎くわじや梅のはな笠はどふでもさこふでもさどふでもこふでもゑいゝゝ太郎くわじや

(五十二)萱笠踊

二上り 東からくるはなよめうれしおれがめあてのすげ笠うれしほんにうれしおともにとつつくだて助がよぢらすゝゝやれこりやよぢらすとつこいよぢらすゝゝこしをぢらすもみぢ笠まん丸こふてきよふてさまがすげ笠百萬貫

(五十二)權之助踊

二上り 若衆さんさしのばゝさ若衆しのばゝ寺がよひなんでおじやそろゝゝねんゝゝじやがおじやそろゝゝねんさても久しの權の助あげのまりのさげのまりのあげのさげのやりはりよりをおりやふみならふたおれがふまいでそれをたれがふもぞいのお手打か

けてほろとないたをいつわすりよ

(五十三) 金山まぶ踊

二上り 佐渡の山まぶ山越てせんゑもんさんがとゝぼ
んかとゝおんゝおじやぎんするゝすらゝずつ
とたけながし竹に花咲せんゑもんさんがとゝぼんが
とゝおんゝおじや八百ちよのたゝらでせんぎをま
んぎをごつほりゝゝごつほりとふみやなるふたにご
つほりゝゝごつほりこ

(五十四) 岡山通踊

本調子 やんれしらなみのうつやつゝみの川柳水かはやなぎにも
まれてねこそいりけれきしかげのはなやさくらやふ
ちやうつゑいたいこのばちや川うつぎ雨のはやしも
さみだれもたのむみぎは汀の田うたのおんどひやうしをそ
ろへてはやせどもゑいさみてうつるおもしろやう
へいゝゝそうとめ笠かふてきしよにさ笠かふてたも
るならばなをも田をばうよにさおか山かよひの六ち
よこばやにろを八丁立てあさのおまへの三ぼがせと
をこちよろ戀しきとなうとふてなのりておこぎやる
はゑいこの小じやくし小むすめこせんぞかこさいか
かいいかこぐる松かこ女郎かつがわつかわゝのん

ゑいよほほではやらいでうたでやる君をおもはでか
よわりよかゝどこで見たぞつとしたとよへいゝ
君は春さくむめのはなじやとよへいかほりゆかしき
とりなりはありやゝこりやゝゑいゝゝさつきゑいさ
つきまんざいじやゝゝせんしうらくゝじや

(五十五) 馬場先踊

二上り まつはゆたかにおふてばゝさきつなぎむまが
いにつめたいけきのゆきとのゝおむまはさびつきげ
れんせんゑあしげかげかすげしとゝ打てはかけあを
りお江戸そだちのひけゝ男おんむまの口をしつか
とさつりりんゝひけ男つりりんゝひげおとこつ
りりんゝゝつりりんゝゝりんゝゝりんゝ
りんとはねたるひげおとこつなぎとめたよこひのせ
き札

(五十六) 柚山踊

二上り おじがそま山からもろたよかしをやりにすげ
たる十もんじたてゝならべてなあどつこいなあどつ
こいなげしをよけて一だんゝゝやつとふゝ二
だんゝゝやとゝふゝ一だんゝ二だんゝ二
だん三だんたんゝゝそふへた石づきよするゝゝ

手なみをそろへてよするみぎわのこまがへしはかた
こぶぞり人にやかまはぬおりやすいた

(五十七)しとゝん踊

二上り 尼が崎からこつちのむこ殿くくるとさしつ
しろかいはやめて壹丁の二丁の三丁の四丁の五丁の
六丁こばやはなのゑじまへおせやれ男ゑとやつさす
まやあかしの月を見しよしつとんくしつとんく
しつとんしとゝんくとんくとんくとうからか
らろのおとがしたはなのゑじまややんれおせやれ男
ゑどやつさ須磨やあかしの月を見しよしつとんく
くしつとんしとゝんくとんくとんくとうか
らからろのおとがしたよめがちそうに人の見るめと
いその見るめがさかなじや

(五十八)四季花笠踊

二上り 關のこまんは龜山かよひいろをふくむやふゆ
こもりまづ立はるのいはひにはぬふてう鳥のはなが
さなつは川せにあちろ笠あきはおどりにすけ笠をそ
ろへてそれくこまんおどりだせこまんでん手ひや
うしもそんなろたくそろたくそろくそろく
月のゑかほにてつたりやもみち笠そりやかゝ笠よ

くよふゆは雪見にかづくひちかさはなのみやこの
御所ぬり笠はなりがよふてさてくどつこいきよご
さる

(五十九)櫓拍子踊

二上り ゑいく和歌のうらこそそれしてのさての第
一名所うんをうだぞへさつとみつ鹽よせきてはやの
かたをなみにぞのりくる船のろは壹丁のいきおい
くきおいにきおふてこぎよせたしんとろとろく
くとろりんくとろくおつとるろかいにさ
船歌あれからはまでいさぎよござるくいもせしは
はま

(六十)釣船踊

二上り 沖にこがるゝ女舟をみたかおつとかちをまく
らにろかいをさたつるくたつるく波たつるく
めなみよすればおなみもよするとかくやおなみはや
よいここいこく今宵はどちまくらおつとかちを
まくらにろかいをさたつるくたつるく波たつる
くめなみよすればお波もよするとかくやお波はや
よいここいこくこよひはどちまくら

(六十一)三番双踊

二上リ よろこびの文をへてちやうどまいつたむこ殿
いさみてすへひろあふき御しうぎにしよぎつくあし
もと見あふきもひとつ見あふきくさしあふき
さぎあしするくはりひぢあふきでぬきあしそろへ
てくそろへてふくくふくじやくちやうじや
くふくくふくくおとこは大だいふくちやうじ
やのはなむこじやゑいくゝゑい子たからのこの
さいわい心にまかせてめでたいな

(六十二)地福踊

二上リ さてもめでたやなめでたやくゝゑい世の中の
よね俵心やすくもだかへた地ふくできすけがおさめ
た俵を御くらにすつしりとつめたかくよねか袖の
つしりとろりとにやいますいろますくいろますこ
よねがめにつくくそりやゑいくことくゑいこ
ときゝますますくうつちのたからますこがねのま
すでよねはかるんよのめてたき御代はたんだにこ
くやかによねのお山

(六十三)君はしんぞ踊

二上リ きみはしんぞのり心さよいゑいく君と
われとわれときみとひきよせてはよろくさおとこ

ば花のみやこいらずにのつたのつてきたくふねの
ややどのむすめは小手まねきゑい袖をかざしておも
てのくゝりのくろゝのあなからくからくから
くそしんからくかほかがみたさに戸あけてそこ
せいちやうど一はいきみはよいさけ

(六十四)しててん奴踊

二上リ 五丁さきからふりだすかたのゆきのながいは
おくにの小ごせういろはまつくろくろいがとこ
やらがよいしづかに見ゆるやつこのくくくくだや
りをひろどればなん尺くなんほくなん尺なん
くくぼのなん尺こゝころつけてさあまいろして
てんやつこが手のうちくしててんやつこがしてゝ
んての内くしててんくからくくくくしてゝ
んやつこがすりさけ男くにかくれない大介萬五郎
おふそれくくかくれない

(六十五)世繼踊

二上リ お江戸がよひに世繼ができたやつとうおなは
かいにきくざけおゑどのまん鉢ずんどのめばよこざ
んす吉六しやくとれががつてんだきんくのさかづき
におさへたまつかせくつぎめじやくよつつぎ

くくよつぎつぎめはめでたいなかほにいろまへす
これはんじやうくへ

(六十六)糸屋娘踊

二上り 本町貳丁めをとんくんとんくんとことんこと
とんくんとことんくんとふりとふはないが糸や
娘は廿一はたちやつしつしく姉にのそみはすこし
もないか妹見るめはしんとろくんととおやを見る
めはさるまなこへさるくさるくさるくさるま
なこへ「姉にのそみ 返し

(六十七)珍内花笠踊

二上り さても見事にそろたりくそつこでふりだせ
お手まはり大事のまへのいやいこしすんよしふりよ
しなりもよしみよしよしの、花よりもゑいくもみ
ぢよりもゑいくゑいこのくくこつちのくい
まがする事おちんないが見つけたでつかい事をいふ
たりないふそちんないくないくないくさ
けもろぞちんないさはげこなりなさけでないぞそ
こらをせひともくそこらをくくせひともをつ
ひしげやごへてまつかせやごへてふりやれやつとん
くく殿のおたちにおとも花やか

(六十八)春駒踊

いさむ春駒引つれ千ひきもつないてじまんでのしや
ならくしやならくれんなもみうらたれださまだ
ばかやつたづきんちやちりちりくンちんくちん
なとりなりでおつとまかせのよいくくふりよし
やくぬらりひよたれもかれもめつけんしよこゝも
とてゑい

(六十九)荒木弓踊

君はなげしのや荒木の弓よ挽手あまたおふせのあら
ばはつとこたへてよん所はりよやひよやくはりよ
やくはりくはりく弓はり月のさまは三ヶ月よ
いくどつこいよいくどつこいよいこざるせめて
今宵は有明のさ「はつとこたへてよん所え返し

(七十)ぞんぞりこ踊

本調子 麻の中にも三どはねたがあさか物いわにや名
もたぬぞんぞりこぞんぞりくぞんぞりこいも
よくぞんぞりこのいもよどの子がいとしおふたも
いとしいたもいとしかたくまの小女郎はなをとつ
こいなをいとしぞんぞりこぞんぞりくぞんぞりこ
いもよくぞんぞりこのいもおふたもいとしだい

(七十二)牛まど踊

牛窓のへくんわんおんだうのそばでへどつこ

い 是はきいたぞやけさのやときをうつどふうつの
ふ はてのふ時のたいこはのほほん／＼ おでんが
ら／＼ おでんがら／＼ おでんがらでん／＼ から
りのでんがらりのおでんがらおともきこへてさら
りつともへいよゑいよへどふうつのふはてのふ時の
太鼓はのほほん／＼ おでんがら／＼ おでんが
ら／＼ おでんがらでん／＼ からりのでんがらりの
おでんから天下うちおさめおめでたいよの

(七十二)三國玉屋踊

二上リ　みくにたまやの新兵へを見たか三國一のやさ
おとこまるてくしゆすのびんつきはけながにつり
ひんくなせにこ鶴は出てまたぬそさつこのせうき
けばたらふくつるてんくだらふくくたんたらふ
くつるてんふくつんゆふはかうし小まつのをしん
べどの「さつこのしよへ返し

(七十三)彌之介踊

ゑい／＼是からさきはおさき手をふる長刀／＼
おさき手をふるなが刀さんやれ／＼「ゑい／＼／＼
是からさきは宮城野にさくはぎのはな／＼宮城野に
さくはぎのはなさんやれ／＼ゑい／＼／＼彌の
助／＼さむそにござる火をけやりたやすみそへて
／＼火をけやりたやすみそへてさんやれさんやれ

(七十四)美濃國てしやこ踊

本調子　みのゝくにゝてつまちおいてさつこのいよ
このこゝのへのはなのみやこにすまひすればてしや
こあめはふらねとみのゝどつこいゝみのこひし
ゆかしてならぬはてしやこてしやこてしやゝゝゝ
てしやてしやことしるまだゝあめはなんなふら
ないにさみのこいしゆかしてならぬはてしやこてし
やこてしやゝゝゝてしやてしやてしやこふとし
よ

(七十五) どうらく踊

本調子　いとしとのこははまゆみはじめさあのとうら
くめむかひこよねがはねをつくにのてまりつくにの
よいつくくくにはつてんひつわがうらくとぶつ
つけたまねくたもとにふみやたまづさ袖のうちはふ

みやたまづさあのどうらくめむかいこよねはさやれ
こりやはねをつくにのてまりつくにのつくくく
にはつてんひつわがふらくとおつつけたまねくても
とにふみやたまづさをのうちはふみやたまづさ見
たか

(七十六)唐人踊

二上リ いきにてくすいちやゑんちやすいちやすい
ふいちやういさらこわいめさはんやさそうわくう
うちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそ
うつくうあうく

(七十七)ゑしま踊

二上リ ゑしまみさきにはをまきかけてどつこいわかれ
のこでまねききみにまわらはさつさおしよせこきよ
せならはよへそれくあねのおまきはもんやとちぎ
るいもとおなべはよきちとしよげろはてそなたをど
つこいをどつこいおんくおもはくさつこりやいか
りをぶつこめまつかせおしよせこぎよせくならば
よへはりはどつこいあみでせまつかせ

(七十八)暦 踊

二上リ やたてくめでたやこちのやのたからじやげ

んぶくよしの色おとこつやくひかすをかるくかたげ
てこよみ大きやうじ小よみはたちのとのごに十九の
おんおかた十九のおんくおかたやれさてしつくり
とくくりくくりくしつくりとくよめ入むこ
どりふく日大みやうやらくめでた

(七十九)但馬小女郎

二上リ たしま小ぢよろありやこりやといののぎよ
のふだわいのみれば其日のやつこりやきとふとなる
わいのありやこりやといののぎよのふたわいのみ
れば其日のやつこりやきとうとなるわいのなるぞ

(八十)もんつくつ踊

二上リ 今づかいづに朝がよひさく蒔繪の指櫛きり
のとふもんつくつくもんつくつく朝かよひさま
きゑのさしくしきりのとふもんつくつくもんつく
つく朝かよひさ

(八十二)都の町青物踊

二上リ みやこ町くうつたる物はなにくなんぞ
あをな小なもみだいこくくゆすやしやうがやめ
うがの子たうがらしやはうれんさうしろりからう
りあこだうりすいくわのさねはあかぎねくろぎねも

ござんす四五寸のびたるあさつきさつてもいふたよ
くいふたまつたけは見事じや

(八十二)拙僧踊

あたまるめてうき世をかるくせつそう本意にあら
ねともかど／＼てもらいまするはちの米の情にをや
をはぐくむだんな一重にせつそ本いにあらねども今
日のしやかのみでしとおほしめしみます／＼それがし
をぶつぽさつの化身とて／＼の亡者をとむらふ
だんなせつそほん意にあらねどもおもひわすれぬ娘
ざかりをすいてきたこれがまことに拙僧ほんいでご
ざるよのせひない人めはづかし色いろがよい間ノ手
「一錢二せんやほうしやをたのむと夕暮にすぐちが
たんぎはかによらいけべすじもとをやしろふてなく
すのけんかんへれそでつかんでへめころせおゝよと
ろしや

(八十三)堺の濱踊

二上り さかいのはまにありやこりやながれかれ木が
すてゝあるある人の申されしはもくやふしやゑんど
やきそやみやこにやないさだめて／＼きんきめこま
かにござるほどにから木でござるべんよのさんがれ

(八十四)梅の木踊

二上り むかしよりうりはじめそ梅の木村のわちう
さんきみのやまひは思ひか戀かよそのくすりはじよ
さいでござるこちの家にはじよさいとてはござらぬ
じんじやくむねむしこはりはらさけの二日えひには
よねや若衆のやとゝんとん／＼ねがほでのまんせの
のまんせの／＼よろつのむしに第一の樂じや

(八十五)手合相撲踊

二上り よい／＼／＼おまちやれやつとんと／＼と
ろ／＼と御前かゝりにふりいだす男してゝん立かみ
ちからしまんゆりかけ／＼幸嵐にきり／＼やつき
り／＼きりりとまわつてしつかとむすんだ力帶一夜
なれ／＼帶かふてとらしよそれふれさ／＼帶かふて
とらしよとけてみたれてやんれ／＼それ／＼男
いさんでさすゝんでさ／＼しゆすのひんつきやとと
んとろ／＼／＼やととん／＼／＼とろ／＼みと
れてやさ男國でかくれないさつても見事なでつか
い男へ

(八十六)藤内太郎官者踊

二上り 藤内太郎くわじや次郎くわじやてござる日本

たてまつるの／＼千年も萬ねんもまん／＼ねんもお家はつきせぬかざりへ

(九十一) 芋之子踊

二上リ 芋の其子のそたちをみたかへさつては子たからめでたいな子は四十八よの末ひろがりてやら／＼やら／＼それわへ／＼やら／＼やら／＼めでたしやん／＼いちざわざりとならべていちどによんだお名はへおとよけさよたつまつゆるまつだんだいなごにかいつくぼうひつつくぼうかいつくひつつく火うちふくろにしやん／＼おめでたいよの

(九十二) 小川踊

二上リ 水をくみやらばよふやよ小川でくみやれ小川小石川ころびよてころび／＼かゝるとよへ君はさい鳥さしわりやもすの鳥むねんしごくやおとされたとよへ

(九十三) ていこや踊

二上リ 戀をしやらばこたつでしやれこたつちわばこさんさかくれごさらぬのふほんゑゑのふほんゑていこや／＼ていこ／＼ていこやといふたやつはがつてんかおふさ／＼がつてんじやうちもせいちよん

もひとつせいちよん／＼ちよちよんとうつたやつにはる／＼とでよふたちよちよちよんのちよ

(九十四) はい／＼踊

二上リ こちのちんちくちをはい／＼ほむるではないがとつとおく山のむぎてものが有との親子なかに五六木といふてかりてこいとの人がかりてないとのそれ／＼みたかそれみたかこんせうながな子をもてば人につい／＼ついつい／＼ついつい／＼とられて事をかゝしたはい／＼のはい

(九十五) のんやほゝ踊

二上リ 戀とくれ／＼のんやほゝ／＼おしやおん／＼おしやおしやれ／＼のんやほゝ／＼とは思ふたさうゝできたのやおんは／＼ゑい／＼／＼うらのせどのやのんやほゝおしやおん／＼おしやおしやれ／＼のんやほゝ／＼とは思ふたさうゝできたのやおんは／＼ゑい／＼／＼

(九十六) 二本踊

には／＼戀しやな世にあるときはひけどなびかぬなきよくもなやとは思へども／＼善太どの／＼情にへだてはない物をせめてひと夜のなさけのあらば今の

うれしきごしんもじわすれまじつきをまじ此世はさておきのちの世もこれさて／＼／＼よいやさわすれまじ

(九十七)まん丸踊

二上り まんまるござれ／＼十五夜の月のわのごとくはり／＼わのごとくよいとん／＼十五夜のよさ／＼つな挽女郎にうつほれたはり／＼うつほれたまん／＼丸やの七左がてくだはかつてんかおしつけおさへてやらかわいのみ船やでかした／＼これさ

(九十八)今度屋踊

二上り こんどやござらはよふやよほいほぞんこしの町へゆけばひたりへもどればみぎへゑ／＼よほいほすぐにかよへば一里十八丁まわらは三里よほいほそれをばゆきすき花のかのさまに尋あおふこれさこんのれんによの字と書てしちくでこしでかくれなやゑいそれをばゆき過はなのかのさまに尋あおふこれさ／＼／＼

(九十九)ふくとん踊

二上り 情ゆふぎりぼつとりとりおことなあ／＼んはづむなあふ／＼とん／＼ござつまいきに太夫ふくとん

ふく／＼／＼ふくとん／＼／＼／＼／＼／＼

(百)さゝら踊

二上り やんらめでたややんらたのしや さつさせぢよやまんぢよの鳥おいかまいり ものもふくとくとのむこかきた やれこりやつまだてゝそろ／＼そろ／＼そろ／＼そろ／＼そろ／＼そろ／＼そろ／＼そろ／＼そろ／＼やつこりやつまだてゝ御代のさかりのまん中まん／＼まんなか中でひとりの御代繼

古踊歌百番終

増補松の落葉卷第五 古來中興當流はやり歌

目録

一	花見車	二	五條車
三	咲たさくら	四	吉田小女郎
五	四季よほんぶし	六	しうと女
七	鹽屋長次郎	八	茶つみ
九	替りさいもん	十	手杵
十一	さまがたより	十二	間の山念佛
十三	伊勢の櫛田	十四	おもやこそ
十五	替り榮閑神風	十六	うらのせとの屋
十七	旅の日暮	十八	鬼がでる
十九	おもひ草	二十	庄屋の庄左
廿一	つく物揃	廿二	三瀬川
廿三	心中しゆん	廿四	はてくせ揃
廿五	心中江戸三界	廿六	しもの關ふし
廿七	わすれがたき	廿八	つらひく
廿九	御馬屋關助	三十	かだの栗嶋
卅一	さまは天人	卅二	つんと坊

卅三	薦の葉	卅四	酒はさかや
卅五	おもてみやれ	卅六	いかなきやく衆
卅七	辛崎心中	卅八	むこ川
卅九	替りかんふうらん	四十	沖の石
四十一	さふだんべい	四十二	五尺手拭
四十三	大坂茶屋名寄	四十四	法性寺入道
四十五	お葛籠馬	四十六	ひめ小松

増補 松の落葉卷第五

(一) 花見車

本調子 花見車をひきやるはよいが、御所の女郎衆の袖引なやれ袖ひくなく、御所のちよろしゆのそでひくなく

(二) 五條車

本調子 五條あたりをくるまがとをるのほんへたうとゆふがほにさんさはなくなるまのほんへ花車くるまのほんのほんへ

(三) 咲た櫻

本調子 さいたさくらになせこまつなぐのほんへこまがいさめばのほん、ほんほのんいよ、花がちるく

(四) 吉田小女郎

本調子 よし田とをれば二かいからちいとまねくしかも鹿子のずんどふりそでがなんきみちよいとしよ

(五) 四季よほん節

本調子 さそふあらしにちりゆく花のよほんくく

へよほんくくへせめてしばしは香ばかり袖にはのこれよほんくくへよほんくく

「軒の橋枕にかゝるよほんくくへよほんくくに夜のねざめにことゝふ山ほとゝぎすよほんくくゑよほんくくゑ

「ところせきやの月さへつらやよほんくくゑよほんくくゑしかのなくねにいよしも哀をそふるよほんくくゑよほんくくゑ

「雪にならば思ひはつもるよほんくくゑよほんくくゑきゆる思ひになどかはとけぬは君のよほんくくゑよほんくくゑ

(六) しうとめ

二上り おれがしうとめはきふいぞゝあのまつ山の葉をよめあのまつ山の葉をよめはそなたは天なるほしをよめしうとめおどり一おどり

(七) 鹽屋長次郎

二上り しはや長次郎はいさばにのせてのふさおきにやとんくくどんどろめけばよのめもよねられずあさせうがいな

(八) 茶摘

二上リ くもの御來迎はさご右衛門がおがむへ其子無事郎ともあじことはするなへのちはさご右衛門がみせかはりゑ

「となり藪からによきくでたはこぞの竹の子のこのくま竹こちのとゆ竹に見ておいたしよがいなやれ見ておいたこちのとゆ竹にみておいたしよがいなおとろとまゝよはねきろとまゝよいとし殿子とこちやねたがよい袖をしきねのにいまくら

(九)替り祭文

本調子 はらいきよめ奉るのいろはこんほん大夫しよくさてはてんしよくすかたなりまんす江口のはしめより君といふ字をかきそめてよゝのすへにはよねときみかへせんしやう大臣閨の戸ぼそにひきこもりとこやみの夜みせとなりけるをやをよろづのまつしや立おろせがやどにてこれをなけきかぐらをもつてもんさく袖をひるがへせばまたとこやみのけもはれてともしびひかりかゝやきてこれよりいろさとはんゑいしすへの世までもぶたいてんしやつかうじやうどのうてなとかや

「思ひきれとやきりやまのあさぎりこめてやつきり

くくやゑきりやおはらたかくらたませしはしきぶあふしうおぐらやませ山みやこしから崎やくれはやしほの道とせにうらのあけまきつりはせでいそのかつ山わけのぼるふもとの野邊のはぎ原が敷とねし夜のねたましくおぎのうわ風ふきはらひあくるわびしきかづらきやたかま高さきのせを川あふゑ大きしあふよどや此おふ國のきみたちに替らてかよふ人々にきたるましきはあゝくるしのさいなんがたゝりをなすともいまよりはしよきやくはしやうじゆあげやはまんぞくせんせいとうやまつてぞ申ける

(十)手 杵

二上リ 市べかしらにおとゝはふたりもちのこめがなやれあづきかな山に手杵をみておいたしよがいなやれみておいた山に手ぎねをみておいたしよがいな

(十一)さまが便り

三下リ あらいたわしやゆりわかさまはくしらぬたこくにすてられてはしのらんかんにこし打かけてくそよりくくとふきくる風はさまが便りかなつかしやく

「はとがまめくふ八兵へどのはとかくお花でゝお

ゑさは打かたげよやりひやりにでゝおやれゝちや
つとでゝおやれよやりひやりにでゝおやれ

(十二) 間之山佛念

二上リ うき事をおもへばいとむねの火のきへやす
き身といゝながらりん糸のきづなにつながれてなむ
阿彌陀ゝゝゝゝ

「夢のうちなるゆめの世をさとらぬ事のはかなさよ
なむあみたゝゝ野邊よりあなたのともとてはた
いぞうかいのまんだらとけちみやくひとつにじゆす
一れんなむあみたゝゝゝゝ

(十三) 伊勢之櫛田

二上リ いせのくし田のまん中ほどでふかき思ひのや
れむらさきぼうしほんにくどくかそりやしんじつか
ごちの如來のめぐみもあると戀のおも荷をのりかけ
むまにはなれかたなき我が思ひ

(十四) おもやこそ

二上リ おもやこそくれおもはでこよか千夜萬夜はね
てこそよけれかけてよいのは小さをに小袖かけてわ
るいはうす情ゝ

「君をまつ夜はのほんほほんにゝにさにしもひが

しもみなみもいやよほんにさとかくまつ夜はきたが
よいのほんほほんにほんにさ

(十五) 替り榮閑神風

本調子 かざらるゝ百色の道具をならべければたいし
まいものゝごとくなり五通の手形の五本立ならべも
とよりせいすけ三國にかくれなきじんべんきいのち
ゑしやなればだんなのゑんにさしあがつてまづなき
事をぞ申ける金子三兩ゝかし給へかみへのぼるも
ろぎんなければてんとびやくらいごとうのつまりは
げかいにおつる伊勢にしんだいかためたれども雨に
ふられ風にふかれ月まち日まちにあまつさへ大にち
にあいあさましや火ふくちからもあらばこそあふや
のやちんもなさゝればいかり切てたてよゝよとあ
たまくだしにしかられて男ならば正八幡大ほさつま
つぞやしばしおなしあれ伏見のごほうはいつものご
とくとうにすまさはなにかせんたてたは此月申の日
よ車わすこしごめんなれしんじつおんになすならば
錢は壹文なけれども天王寺でしやうゆふつくらせす
みうりしてもだいじもない四國の米はさぬきて壹石
おなしく壹石三斗なりつくしの彦三はいつものごと

ぬをおしやり／＼さらすおんじやれめされさしまさぬか

(十七)旅の日暮

二上り いふてなげくはおろかでござるいはでおもふはのふ身をこがすといのたびは日暮がものういものよわすれた戀をまたおもひだす

(十八)鬼が出る

本調子 おくりかへせばひ糸の山風身にしみてなたねの花もいろ／＼

「おにがでる跡より子おにがいくらともなくによき／＼とある所につき給ふ

(十九)おもひ草

本調子 ながいかたなをぼしや／＼とさしてあはれぬ中をふみにてかよふいつそ此身はもみくしやにして死なば野中の身はあさ露ときへてはかなく成りゆくものをなにが残りてつみとは成るぞ／＼

(二十)庄屋の庄左

二上り おとんとん／＼とろさくやれなかせめてこんにもせいなかさへよくばなべかふてしよたいしよそれこそへいであることかしやうやの庄三どのはつち

(十六)うらのせどの屋

く大やしてきどくにめうとはほうべんなりたんごになれあいきれいにもんたて大せいくらすとうけたまはる日吉は山王廿一じやがおやはしらひげひだりちんばでこすいなおとこち／＼をふんぬくぞんめいなりみやうぎ町にはぐわんにん坊でははらきるゆどののゆかたはみぬまにうせたがだいつが取つた手もとがみたい見付たぞおいくる時は壹厘にげ貳りにげ第三にあたつてはやつこにあたまをきりわられ惣して身のきすは壹萬三千余きすなりたとへじやうごうかきりのしちもつなりとも今一度うけさせてたひ給へとせりかけ／＼いのりけりしちやものふじうしたりけん五兩貳つにさつとわれ貳兩貳分にぞ成にけり三人のとろぼともゆんでめてよりとり付ておんかたつたり／＼かほどのかたりはかんかほんでうにまたとふたりはあるまいとてかねかすものこそなかりけり

うらのせどのやでぎしり／＼とぎしめくほとになんじやとおもふてはしりでゝみればなんでもしやり／＼おんじやれめされさしまさぬかなつかたひらの

やはつかしや

(二十一) つく物揃

本調子 まがきかもとに立出てこぬ人をくまつ身の
うらみいはんためやくもすそをかいとりてどてを
つくくみわたせばどてのばんたはぼうをつくおて
らの法師はかねをつくこちのなじみはうそをつくさ
てまたわれらはかすくにつくりしつみのおそろし
や後の世たのむ南無あみだふつくゆいてかへるさ
にゆきやあたりまはりてむねをつく

(二十二) 三瀬川

本調子 西は堀川中小川けんしやう日夜ひんがしにな
がるゝ水の賀茂川やわらがための三瀬川げにくは
しも三本木比は卯月といふしてのほんでんすごく立
ならに小家のとぼしびきへのこるかけをたよりてふ
みまよふかしこ爰よとさだめぬいつそふたりが中
のしまかくれゆく身今さらにわすれぬ顔をと一度見
つゝ見られぬうす月夜しばし入間の水かゝ見川をへ
だてゝほのきこゆばちもしどろに引三味線のでうし
くといふこゑきけばのみしらけたるふせいして夜
もはやいたくふけぬらんわけとなきゆくほとゝぎす

誠めいどの鳥ならばちぐくのありさまかたれきこき
くともいかでかはらめやこよひかぎりのうきちきり
ひじきものにはうすばをりはおらてしくもみじかさ
よ 三下り「どしおり帯の長まくらおきてみさんせな
後の世もあをにいましばしぞやまたねのときくゝに
もぬるゝは袖東がしらむしらむかとりもつげわたる
はねをかはさんためしにやつまときを引むすび
ともにかりねの夢すがた

(二十三) 心中しゆん

本調子 まゝにならぬはうき世じやものと思ひまはせ
どまたすてられぬいつを露とはきはめたけれどあと
でそなたがうらみんものとおもひはかりてかたると
いへはしゆんはきくつゝよふいわんしたわしもきの
どくかたるにつけてにくい平ざがよこしまれんぼそ
れさへあるにちかゝに西國がたへやらんとはおや
のまゝなるかなしさはこれがうき世のならいとやと
てもこなさんしなんす身ならわしはかうじやとさゝ
やきければ吉左うなづきさあらぬていにいとまごひ
してたちわかれゆく夜はなん時ぞ八つのすぎかや七
つのかしら六つのちまたもさんすの川もしでのたび

たつかいどりすがた心ぼそくもあとみかへりてのふ
よしさまかまちかねさんよしゆびをつくろい此わ
きざしをぬすみまするにひもとりましたいざやさい
ごの水さかづきを壹つ貳つにはやふしごやのゑかう
のかねになむあみだなむあみだぶつときへてあした
は卯月の五日せみの小川に名をながす思ひと戀と
ゑ

(二十四)はてくせ揃

本調子 すいなさいしよのくせきはまづどて町はけ
しからぬ雨のゆうべはおもしろやまたきをかへてし
まばらとゆけばかぶろがはしたなくはやりことばの
口あひにあゝけたゝましきおん町へと立歸りもんじ
がかどでたれやらがきでせいゝと石かけにはやる
口あいまあそふよそれは壹升がなんぼするはてそふ
いやるがいやじやいの

(二十五)心中江戸三界

二上りト本調子 江戸へやりつゝしほふませたらすへが
よかろとみないゝあはせすでにだんかう極りければ
そちにあふのもけふあすばかりまめでつとみややわ
ずらやんなやいとまごひじやとなみだでかたるふさ

はきくよりこは何事ぞわしはつとめをあすやめうと
もまゝな身なれどこなさんにあふがうれしゆてうか
ゝとつとめまするにどふよくなゑとさんがいへゆ
かんしていつもどらんす事じややら山も見えざる假
初についなれなしみわしをさてどふせによぼにもち
やさんすまいいらぬものじやとおもへともどふした
事のゑんじややらわするゝひまもないわいなそれを
ふりすてゆかふとはやりやしませんぞ手にかけてこ
ろしておいてゆかかせなはなちはやらじとなきけれ
ば男しばらく泪をながしなみもないにうれしやな
なんのあが身にわかれておれが何をたのみにゆかふ
ぞいのそなたふりすてゆく身でもなしこよひ爰にて
いさ死なんとてつゐにふさをばさしころしつゝとも
に其身もな野邊の露

(二十六)下の關節

本調子 しあんばしとんゝゝこえてなおよどにご
ざんすゝかそこせひゝ三りへだてし波のうへい
ろとなさけを小ふねにのせてくるはたれゆへそさま
ゆへ

「北山ばらゝば時雨ながら笠持てこい降てきたそ

こせひ／＼雨はふるともぬるゝともたゞおそろしき
かざし風とかふいふ間にはれてゆく

「淺黄はざつとしたいやよなのぞみがござんす／＼
するそこせひ／＼こがら山がら四十から松たけ
のいくよも戀にうき茶の葉の色に

「一夜はちよつとの間これなびけなあんまり／＼ど
ふよくなそこせひ／＼さりととはつらき御心物のむく
いはものごと小野の小町の身は市原のしやれすが
たあなめ／＼と吹風にねつのさめたる末を見よ

(二十七) わすれかたき

二上り わすれがたきは彼人さまのすぎしたよりにこ
されし文をたとひみちとせあはずとまゝよおやと
／＼の結びし縁をなんのとかりよう其したひぼをう
らがとかいてとくものはおんじやるまいあとのいの
こにこされし文はいつ／＼よりもかはひらしやのふ
／＼ゑいこのさんさ富士の裾野にな一もとすゝきや
れかれしはいつかわが戀ほにいでゝみだれあおふと
いふ事かゑいこのさんさ岩のはざまになやれたまり
水ひとりすませといふ事か君としめよてぬる手枕は
長門印籠じやなければともくわいがよるるとほめられ

たほめたも道理いまの世にまたとあるまい御女郎

(二十八) つらい／＼

二上り つらい／＼とおもひはすれどかほが見たさに
あこがれきたをそれとしらぬへよしやよそにうつろ
ふぬれきぬなれどいろふかくも思ひそめたへ

(二十九) 御馬屋關介

二上り だてをこのみやる御馬やのせきすけくるやら
馬も馬もいなくくつわもなる小次郎よ太郎よどこ
に／＼にさて馬どやんとつゝんとつゝいなどお寺の
寺のかきの木にづんぼろぼ／＼と／＼とつゝ／＼とつ
ないだ

(三十) かだの粟島

二上り かだのあわしまをゑい／＼ゑい／＼ゑい／＼
なゑい／＼ゑい／＼ゑい／＼ななにといふてまたお
がむへ君とねじやかをゑい／＼ゑい／＼ゑい／＼な
いふてまたおがむよへだいたらしめたらさなをよか
ろへ

(三十一) さまは天人

二上り さまはてんにんそれ／＼とんとろりおとめの
すがた雲のかよひじちらとみたとんとろりおとめの

すがた雲のかよひじちらとみたところり

(三十二) つんと坊

本調子 つんとぼがさゝゑちやのおまへのそりはし
をあんまいぎやたらゝのほんほあゝつんとぼが
さいやおりやつんどすいたよさ

(三十三) 薦の葉

三下り おちよゝとおとしておいてかべにつたの葉
のき心つたのはゝかべにゝつたの葉のきこゝろ

(三十四) さけはさかや

二上り さけはさかやに茶はちややにぢよろはきつち
のなる川に「ないそなゝいそ五月にやもどるおそて
六月中こゝろに

(三十五) おもてみやれ

三下り おもてみやれのせけんまいよものかしのびな
がよづんまのよふたあゝ心よづまのよしのひゝな
がよづまのよふたこゝろ
さつきあめほどこひしのばれて今はあきたのおとし
みづゝ

(三十六) いかな客衆

本調子 いかなきやくしゆよりもひげの角さまおいと

しおかへりのあとを見ればびんつけひとかいはなけ
ぬきおぐりのそうしをおかれたこれがはなやかやたい
しこよひのつとめかものひゝのくちふさげ世にこ
くにせはしらしひは晦日ごとの夕暮しるひお手にて
出だされたなによおわしを貳百いだされた

(三十七) 辛崎心中

二上り 此世の名残り夜もなごり死に行身をたとふれ
はあだしが原のみちの霜一足づゝにきへてゆく夢の
ゆめこそあはれなれあれかぞふれはあかつきの七つ
の時が六つなりてのこるひとつはこんじやうのかね
のひゝきのきゝおさめじやくめついらくとひゝく
なりかねばかりかはくさも木もそらも名残と見あぐ
ればほくとはさへてかげうつるほしのいもせの天の
川わたせるはしをかさゝぎのはしとちぎりていつま
でも我とそなたはめうとぼしかならずそふとすがり
よりふたりが中に降るなみだ川のみかさもまさるべ
しみちゆく人のこゑたかく京や大坂のしん中のこと
の葉くさのとりゝをきくに心もくれはどりあやな
やきのふまでもよそにいひしがあすよりは我もうわ
さのかずに入り世にうたはれんうたはゝうたへうと

ふもまふものりのこゑ實に思へともなけゝとも身も世も思ふまゝならすいつをけふとてけふまでも心の

のびしよはもなく思ひのいろにつらかりしにどふした事のゑんじややらわするゝひまもないはひのはなちはやらじとなき居たり歌もおほきにあの歌をうとふはたそやきくは我過にし人もわれゝもひとつ思ひとすがりつき月のかけさへとゝまらで心もなつの夜のならひいのちをおわゆる鳥のこゑあけなばつらやからさきのはまてしなんと手を引て志賀のさゝ波さよがらすあすは我身をゑぢきぞやまことにことしはこなさんも廿五才のやくのとしわしも十九のやくなれば思ひあふたるやくたゝりゑんのふかさのしるしかや神や佛にかけおきしげんせのぐわんをいまこゝてみらいへゑかうし後の世もなをしひとつはちすぞとつまぐるじゆすの百八になみたの玉のかすそいてつきせぬあはれつきるみち心もそらもかけくらくなみうちよするからさきの松の木かけにつき給ふ

(三十八)むこ川

二上リ むこ川に住居する茶吉殿わいのとしが十五な

ら心は月のまん中よさゝとしがゝか十五なら心は月のまんなかよさ

(三十九)かんふうらん替り

二上リ たいしゆらんひやさけのんてみやながざけのみじらけもひとつのんでみやたんたらふく二日ゑひかうくわいくすりに金たらい
「やんしううすむいろまりやんけんたにこたまさんちゑまさんなはらりとさけのかんおなしこと梅の花とうらいきうこ五うりうすう

「かせやまうす雲江口白菊坂田花崎からさきじや若松小紫でんゝりきてうにしきゝことうら玉の井だてみよし

(四十)沖の石

本調子 おきのいしとはおろかのさたよかはくまもなきわかなみだまもなきなまもなきかわくかはくまもなきわがなみだ

(四十一)さうだんべい

二上リ そなたまつ夜のあふらひをほそくながかれとろゝとそふだんべいしごくと聞わけた
「だいらちよろしゆは水の月手にもとられず見たば

かりさふだんべいしごくときゝわけた

(四十二)五尺手拭

本調子 五尺いよこの手ぬぐい五尺手ぬぐいなかそめて

「おれにいよこのくりよりおれにくりよりはりやどにおけ

「やとがいよこのよければ宿がよければ名もたゝぬ
「佐渡といよこのゑちごはさどゝゑちこはすぢむかい

「はしをいよこのかきよやれはしをかきよやれ船橋
をはしのいよこのしたには橋の下にはうの鳥が

小鯛いよこのくはへてこふなくはへてふりしやりと

(四十三)大坂茶屋名よせ

二上り ゑひゝゑひゝゝゑひゝゝつながぬ船は波に
ゆられて身はすてを船よるべさだめぬみなとやのにか
いざしきでひくしやみせんのおとはてんつるゝ
てんまやたゝや水のながれに吉野やみればいつもか
うしに花橋屋ゆかりもとめてお名をばきくやそれを
たつねてきたじまや文のかすよむかみたや紙屋あま
がさきやで身はぬれ衣いろがくろけりや大こくやじ

やと人が名たつりやすこしはわくやさきにゑびすや
あしやた馬やてこがれあふぎやあのひめしやでたが
いちんゝちがいのお手うちちがいのお手まくらじ
つかはす枕にちきりをこめてかわすまいとてきせう
までかいてのぼりつめたる坂本やたれが思ひもあの
太子やの花のふり袖としや若松やつらいつとめは身
にしみゝとはやり小歌のその一ふしも聞てなり共
月日をまつやかくのこさんは綿やのつとめ戀がご
ざればつとめのさはり内のかゝたやな目をむきだし
てしかりますやといふてたもれゑいこのこいや思ひ
しづみし身は河内屋のうき名かきけす住吉や波のま
くらにかじまやたてゝ京やふしみやさぬきやまでも
くるゝゝとられてめぐる便りござらはあのみか
さやで壹つまいれとな手にすへたさ

(四十四)法性寺の入道

二上り 法性寺の入道さきのくわんばくだしよ大臣う
ななせうせおつたやれたゝきだされるな
「ぎおん町のまん中がうみなら川ならよござんしよ
魚をつるしの竹のやれさまをつりまつしよ
「猿丸太夫おく山にもみちふみわけなくしかのうな

なせなきおつたたゝきだされるな

せきの小刀こがたなやい銘はなけねどあやもたちますにしきもち
ちますきんらんどんすは申におよばすうりもわりま
すすいくわもわりますうなせわりおつたやれたゝ
きだされるな

(四十五)おつゝら馬

二上り さいも見事ななおつゝら馬よしにやせんし
きからじまのふとんふとんばりしてなこしよしゆを
のせてそなたのぼりかおりやいまくだる文をやろに
もことづてしよにも爰ははこねのな山中なれば筆に
やことかくすゝりすみはもたぬもしも水口なおとま
りならば札の辻から四五間めの茶屋で馬もそく才其
身もぶじにやがてのほろといふてたもれゑいこのさ
んさ

(四十六)姫小松

二上り やらゝめでたやゝ天下泰平國土あんのん
おさまる御代は天長地久千歳樂萬歳樂民もゆたかに
住吉さまの岸の姫松しつてんゝに大悲の風ふかば
地にはこがねの花かさこありやゝいよしのめてたい
な

はやり歌終

増補松の落葉卷第六

中興當流所作

目錄

一	契情夜明鳥	二	大坂上 ^リ 道行
三	傾城因幡松	四	淀川所作
五	契情多賀大祓	六	契情誓湖
七	富士禪定	八	多賀御傳來記
九	奈良名所盡	十	吉田小女郎
十一	公時酒之醉	十二	西國八景
十三	鎌足道行	十四	菊の花いくさ
十五	名護屋山三	十六	傾城淺間嶽
十七	關東小六青葉	十八	小六自然居士
十九	男道成寺	二十	行平道行
廿一	行平地獄物語	廿二	松茸狩風流
廿三	稻荷四 ^ッ 門	廿四	稻荷塚狐會
廿五	契情花筏	廿六	彌陀たのむ
廿七	傾城佛のはら	廿八	女仙人
廿九	女仙人怨靈	三十	廿四孝狐會
卅一	傾城善の綱	卅二	文覺上人
卅三	とがしの城	卅四	山居の僧

卅五	名馬揃	卅六	柴かり風流
卅七	あふみ八景	卅八	狂亂
卅九	三 ^ッ の車	四十	時雨の松
四十一	思ひの繪姿	四十二	文ことば
四十三	定家怨靈	四十四	地つき踊

増補 松の落葉卷第六

(一) 契情夜明鳥

袖崎 歌流
澤村 長十郎

二上り 今ほむかしとのむけふりくさなにを便りに身
はうきくさのういてなかれの情なやうそもかさりも
一座なかれのつらにくやよふもくかいたぞきしや
うもんだくきせるにとかもなやしやくりのみく
なかなみたのたもとをひかへせいもんくされしん
ぞこれにはあのいゝわけかはてまつきけははしし
すいきちくしやうふたりか中のきしやうをみよまつ
一つそのはうさまと二世三世しなばもろともこせま
てもふうふのけいやくいたすことまた一つ外のをと
こにかりまくらかわすことはのそのしなくをつ
ますあかし申べしこゝにまことのひとつありかさね
てうそにもつとめにもきしやうちはんのおし申し
き事とかひておいたはこりやどふじやひとにはうそ
をはつくとまゝせめてかみにははちよかし

(二) 大坂上りの道行

申 村 千 彌

本調子 たてなとりなりつひおもひたつたびすがたひ

とめをつゝむかさふかゝとおもはゆく五てうのは
しのしもはしらおもひたせはこきやうなにはもな
つかしやといとこゝろはよはくとゆけはほとな
くこれやこのみやかわすしをのほりつゝはやたちふ
ろのゆかたがけさすがおなごのきやうめいてちよこ
くいそくゆたかさよひかしにむかへは清水寺大ひ
のちかひありかたやかれ木にゆきのはなもさくたれ
まつはらのはしすぎてかものなかれの水せいゝい
せきにあそふともちどりはつとたつてはひらりゝ
ゝゝゝひらゝゝゝとひつれゝゝとひつくとひゆ
くありさまたとへていはんかたもなしつゝかはか
せかみあらいさすて引てにしなはこばなしこひはな
くひらの雪かせもはたさむぎるすそも小つまも
ちよとからけてしやんとからげさんゝさゝなみ男
波にもまれ女波にもまれあそふしらかみさんさゝ
ちらしこゑおかしくもいさぎよやにしはほりんあ
たこ山みこし高山かいたるはさんこくいちのひゑお
ろしわがねんくわんをはらさせたまへと一心にきせ
いかけあゆみゝていまははやふたうるちや屋にそ
つき給ふ

(三) 傾城因幡の松

瀧川 六三郎
藤村 半太夫
坂田 藤十郎

二上リ だまされておもふことおばねごとといふわがつ
らいおとこにくひつきはきりするその心のつみつく
るあふら火とろくかけほうしこにつつくりおも
かけみするうそのかすくつくおとこねてはひつく
りする夢をみせてなりともあゝあのしやうはるく
しやうのわるいはすひからをくるくちにまかせてめ
でころす女こゝろのはかなさよそらせいもんにのせ
られてうそにもほれたといふことはあまりうれしゆ
てにくからしかみをすきたて百しやうわけ戀をしこ
なす男つきそなたならではほかにはないとさいふ
た詞のよいくうれしさにあふてくやしやはつかし
や

(四) 淀川所作

山下 龜之丞
澤村 長十郎
岩井 左源太

はるの夜のゆめおとろかすくたかけのそのきぬく
の物思ひ又あふ事もいつかわと深き心にかこち草ね
引にせんといひかはす身は捨草のすてられてなかれ
し此身はよど川の何をたよりにうきくさの波にゆら

るうたかたのあわぬは君がなさけなやねたましや
それはわかくさ身をうらみくさなんのそなたにあい
たてはなしあきもあかれもせぬ中なれとうけ出すか
ねのつるにはなれてつたなき我身せめてあはれとお
もへかしおくりかへしさみしやねやの今はまくらに
かばかりのこるうきおもひなをうらめしきかねのこ
ゑした行水のおもひ川そこの心をしらいとのみたれ
てものをおもへとや鳥かうたへはもいのおしやる
さのゑ月夜からすはさいつもなくよしやうかへもい
のとおしやるさのへ月夜からすはさいつもなくよし
やうがへしはしとまりてくれよかし

(五) 契情多賀の大祓

岩井 玉之江
中村 四郎五郎
津川 半太夫

三下リ またとたにたのまぬ中のわかれみちをいまは
のそらの山かつらことばてからむくすの葉のうらみ
かこちてかいぞなき水に繪をかく男氣をたのむちか
らぞたよりなきくるひかけたすこゝろのこまよとめ
てくれかし情のあらは情たつなや縁のつなたくりよ
せはや引よせてたいてねた夜は花をやらねた夜は花
をだいてねた夜ははなをやるとけぬ思ひのあた男の

ふかしはきはかりはいとしくてうちには水かつくか
いのしねならしねとかなかきによめるやうにはいひ
もせてあたにとられし命そとたふさにすかりむしり
つきくひつきつめりなみたくみたゝみたゝいてなく
ばかり

(六)契情誓湖

大和山 甚左衛門
山下 龜之丞

三下り 花はちりてもはるは咲しゝてかへらぬしての
山まよふこひちのむごやつらやどふよくやよふはこ
ろしたそのくるしさをいまそかたらん泪川いとし男
のそのことのはをかわけゝといつはりことをまこ
とゝおもひおりや一すじにつらいつとめもそれはそ
のゝそりやくにならてくるははなれてつみなき花
をいつかゝゝときのせくこともみなあだはなとちり
ゆくこの身いまくるはなに目がくれてよふはたのし
むこゝろのにくさとかくしんたかさりとはいんぐわ
しんで花見のさかぬとは花みのしんでしんで花みの
さかぬとは我身のうへにしらゆきのこるつもるうら
は戀の山

(七)富士禪定

高島 尾上
金子 十郎左衛門

二上り ひとふでとかきそむるはなつかしさのまゝみ

ちよりとわせまいらせ候べくとわかれよりほとはあ
らす候へとおもひねにするひとりねはこゝろもすみ
て目もさへてたはこ戀草とぎとなる寢やのうしかわ
るいゝなき御くらしやがてあをそやかたろそや筆に
まかせぬものおもひたたあひましてゝのこること
の葉かへすかき

(八)多賀御傳來孫嫡子

松本 重
大和山 甚左衛門

二上り うつゝおとこのすかたにまかふさらは面かけ
はなれもやらでわが身ひとつのうきおもひおなし思
ひにしつみしなかもいとゝわすれぬねやのうちいざ
床とらんはるの夜にこちよれまくらながまくらかた
りあかさんおほろつきたばこ引よせのむむつことに
おれもそなたもしらぬむかしかよいわへとてもしる
ならねからそこかしれかしいつのもの日になれ
ゝそめてきそはしめわけあるこひのたねまきそめ
てなかよししみよしこころよしふたりまろねにころ
りとしたもましじやへあけかたのかねはつくかすの
ひゝきにあたらずめをわするへあけもんのしらせは
おかへりとおこされあたら床をわかるへおそいゝ
ゝのおかゑりとおこされあたらとこをわかるへお

しやねたましはるのかせ

(九) 奈良名所盡

竹中 吉三郎
山村 勘三郎

本調子 三笠山名にたかくもろこしにても中丸がふり
さけみればとよみし名所のそのむかし今も雲井にす
む月の久かたのあまくだりますみやの神すぎ木の間
すかしにながめ有とわせたまへやおしへ申さんうれ
しやさてはたづね申さんあれくはなにをうならざ
かや此手をあはせてふしおがむ東大寺には大佛のし
やかはやりみだはみちびく一すじに後世前生のみて
らとかやおふそれうこのたかねはつゝら山のりかけ
馬のかちじのみちをゆけばひだりへもどればみぎへ
よはいほすくにかよへば一里十八町まわらば三りよ
はいほそれをば行すぎ花のはつせの山つづきこうぶ
くしと申せしは藤氏の御願所にてたいしよくはん
御身をやつしめんかうふはいの玉を取んとおぼしめ
しいやしき海士の磯まくらいもせことばのすへかけ
て女も命すてをふねこげやゑいさらやそしまかもめ
のたつよのたたせ給ふはしどしのくわんおんなむや
さつたの力を合せてたびたまへとて大悲のりけんの
ひたいにあて龍宮の中へとび入れば空はひとつに雲

のなみけふりのなみをかきわけかづきあげまたどふ
くとおちくる尾なみのひまをつつとくぐるやから
くれなひの綱はこしなは命のきづなしつかとひかへ
よ御船のうちに心へゑいゝゑいとともづなの
ぶるを便りにはしり入かのほうじゆをぬすみ取てに
げんとすれば悪龍追かけ兼てたくみし事なれば持た
るつるぎをとりなをし乳の下をかき切たまをおしこ
めつるぎをすててぞ臥たりけりりうぐうのならひに
死人のいめばあたりにもかづくあくりうなしやくそ
くの繩をうごかせば人々よろこひ引あげ玉はめんか
うふはいの唐あ御はぞんのみけんこめしを拜ま
せ給へやたびのひめ二月堂にはくわんせをん午王は
みた佛はん木の御板井筒のいのりにれいしやくじや
うはからくくちんからくく唐ししのふむら
ん拍子やしたんくたんのむやたんくた
りき他力功力のたきもんじゆわかさみかさになわか
やとしやすいの印をぞむすぶなり結やちかひのひた
ちおびかしよの御神當社にうつるや高きお山は本社
のいらかふもとにとどろきさるさわしやかつた八代
りう玉りうとうささげいけの青波けたてくて雲に

のり大地をかつばとふむひやうしの御神惣じてなら
ば七堂がらん八百やねき九重十重みやこの石ずへや
しろのかすが一萬八千とをりものめがほめておいた
る名所舊跡たがいにとふつとはれつつ春日の宮居に
着給ふ

(十)吉田小女郎

嵐 三右衛門
市川 香藏
芳村 菖蒲

端歌 あらあさましやつれなやなわれからなせる思ひ
のたねみのまつせ一代教主のによらいも生死のおき
てはのがれ給はず

本調子 いけ水にその心はかよへどもいわにせかれ
ておちあはぬあきてはかなきうき世ぞと思ひすてゝ
もすてられぬ

三下り むかしの人の戀せしは命もたえよと戀をする
さて中ころのこひのみちくさ木もなびけと戀をする
二上り「我は思へどそなたはつらや磯の流れ子のかた
思ひさはりせうがのやれかたおもひいそのながれ子
のかた思ひさはりせうかの鼓譟」とはおもへどもいと
ど戀しき折々は人めもはちもつゝまれずせてねや
もる月だにもわかれをいそぐを寺の鐘や梢のあらし

は物すごやの二上り「戀の山ぬるもねられず目もあは
ぬ身の狂亂はたれゆへぞとふにつらさのますかゝみ
いつ迄かくはながらへてうきは數そふならいにて身
は捨草のいたづらにあら浦めしやゝ心もなげにた
ちのほるゝゝゆるけふりはほのゝゝとあとには戀
のふちせ川せどがわのさわのゝゝさむさあらしにひ
よつとうかれて川原おもてにうき名をさらすおもは
じゝゝとんとすちよそも戀はなにのむくいそゝ

(十一)公時酒の酔

竹島幸左衛門

二上り みねのまつ風かよひきてきんのしらべとうた
がはる一の人大臣はしよだいな人であらぬ我
におとれどおしやるおどりでふりをみせまいらしよ
ゝゝゝわんこやゝゝゝわんこゝゝゝわんこやてれつ
くにゝゝからりちんにちんからりしやつきしやゝゝ
しやつきゝゝしやつきしやこをあけさいあけす
ばもとろゝゝしのふ其夜のかよひじにかならずごさ
せとささまの御みやまのおくをとをりてみればいた
いけしたる花ありをぎはぎすゝきかるかやしをんり
んどうかすのはなおりせたらおふてせをふてわらで
髪をゆふてこしに鎌さいてついつくばふてかいつく

ぼふてつい／＼とりなりは柴かるおの子のなりふりは
 はみめのわるいしやつつらでそばにころりころり／＼
 り／＼／＼／＼ころ／＼りともねたるはいがくりほ
 うひげ天神ひけさうちおろしのあらむしろがんき
 やすりこめはだついつくよふでさすよふでいつくに
 ばつくにねられぬせいもんのつたて申べい弓矢八
 まんこしぼねこみじに打てかばねはかきにさらすと
 もきのうらにによあぶないこんだとさかはりはてた
 よしよだいなや

(十二)西國八景

竹島幸左衛門

本調子 わかれてなくね高砂やむろつにかよふ市人は
 さんしのせいらいまこゝにうつしぬるかとおもし
 ろやそれよりをきのあまをぶねやそしまかけてこぎ
 いづるこなたは尾上鐘の音にしもにさへつゞきこゆ
 るは遠寺のはんしやうあはれなる一村雨のふりくれ
 ばとまもる雫に身をそばめこがれたいよふ其ふせい
 これやまことにせう／＼の夜るの雨よとおもほゆれ
 原じまがさきはくもはれてなをとうていの秋の月心
 をなぐさむたよりとなり夜もほの／＼とあけゝれは
 いとゝふなをさちからをゑ梶とりなをしほあけて波
 にたいよいこがれゆくあはぢのしまのあさざりにむ

れいてあそぶ雁金のわれはこきやうのこひしきにと
 こよのさむさいかなれはふる里すてゝきたるやとと
 はばやへいさの落鴈にそふがいにしへおもはるれお
 きのつんつり船なるろびやうしの音はからころりつ
 るゑりつるろおづるめづるよるのつん／＼鶴めがつ
 ま思ふてなくねにいざやくくらべんくらべこしくれか
 りては浦々の沖のつり船我さきにと入江／＼にふ
 りしはゑんほのきはん是なるべしはるかに見えしは
 一の谷まことにいにしへ源平のいくさみだれしあと
 も有明の月にしらむはつるぎのひかり水にうつるは
 かぶとのほしうちあいさしちがふる軍勢の其ありさ
 まひくはうしほにみつるは又八重の鹽路のはる／＼
 とさいかい四海の波の上たつたみかけ／＼ぼつかけ
 ／＼たゝかいしははな／＼しくこそ聞へけるあらお
 もしろのなかもやといきみにいさんでゆくほどにあ
 かしのうらにぞつきにけり

(十三)鎌足道行

竹島幸左衛門

本調子 此手かしはのふたおもていつかならべんなが
 まくらにかれてゆくやたいひとりちよくでうおもき
 御意をへて四國のうらへといそがるゝ心のうちこそ

たのもしきはや山しろに井での里月のよ川のみねつ
いきゆんではひらのめてはあたごの山おろしみねの
けふりの一むすび袖打はらふいにしへを思ひいだせ
ばこきやうの空もなつかしやしたけき心もよはく
くくくとしどろもどろのしがのさと須まのわか木
のさくらはなあらしにつれてちるはくくちりくるの
ちりくるくくをしきさくらはちりはつる思ひあかし
のうら過て室のとまりに身をよせて海まんくく見
わたせばこなたは四國のあはちがた波にもまれてゆ
くかもめういつしづんづしづんつういつばつとたつ
てはひらりくくひらくくくとをるゝありさまはた
とへていはんかたもなし使りもとめてゆく程に七重
八しまのだんのうらまさごをはつとはらふ風のまは
笠かぶりかたむけて身をかこち人まつ澤にこしをか
けたひのきうそくなされける異國はしらすわが朝に
ためしまれ成所存やとほめぬものこそなかりけり

(十四)花車

竹島幸左衛門

三下りうどんげの花のひらくを待かねてちらすなは
なのあるじをばこがれくつてつれてみやこへやれの
ぼらんとおとにきりころくおとに聞へしおはらの

さとは菊の名所とたよりをもとめ杖にすがりてかぞ
へてみればしらきくの紅粉菊の小手鞠寒菊きくきり
くきりくまわる水車くるりすますにごらすよほ
ほんにさくんくくくくくくくくくくくくくくく
はりまはればせりやうの里じんやじやかうはもたね
どもにはふてくるはたきものおはらぎくかはい
くくろ木めされの柴めさいのちやうりよふりよひ
うやらにひやらろひやらろにるるりちやらるろう
心うかれてさつてもくくおもしろやくくりやうじん
たがい心をあはせきくのせいをみかたになせば菊
のつほみをさつとひらかせおんどりあがりたびあか
り手重のきくのいさみをなしあつはれてんくてが
らやとほめぬものこそなかりけり

(十五)名護屋山三

中村七三郎
花井東妻
子役

端歌なく泪雨とふらなん三瀬川水まさりなば歸りき
て此ありさまを見給へのふ夫婦は目もくれ心きへこ
はそも夢かと立よれば妄執の雲のへだりて今まで
見えしは姿もなし是は夢かやうつゝかと夫婦たがい
に手をととりてわつとないてはいだきつきあきればて

てぞいたりける

二上リ 光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨南無あみた／＼袖のみなどのなみ風もこゑそへてなむあみだ聲のうちよりまぼろしにまよひ出さもくるしげによろ／＼とあゆみよりあらなさけなや母上さまのんどがかはきてくるしきに水をたむけてたびたまへくるしやとたえ入やうにぞなきいたり夫婦は夢の心ちしてげにだうりなりいとおしとうつわ物に水を入れよらんとすればたちまちにみやうくわさかんにもへあがる母はあまりのかなしさにいだきとらんと立よればふしぎや俄に風ふき來りまなこくらんでふりくる雨の音はそもしのをたばねてさら／＼と雨かなみたかろくちにとどふどふしまろび木神にひやく聲ばかりあらかなしやたへかたやたすけてたべのふ父母とさけぶこゑのきこゆれば夫婦はいと／＼かなしくてやこゑの鳥の音をたて人間の水は南星は北にたんだくもあまのうみづつよき雲のたちそふこゑもかすかに聞へ夢かのふうつゝか夢かまほろしのよぞ哀なる

(十六) 傾城淺間嶽

中村 七三郎

二上リ うらみも戀ものこりねともしや心の替りやせんと思ふうたがいはらさんためのせいしをばなせにけふりとなし給ふうらめしやむねのほむらは夜に三度こちのおもひは日に三どけふりくらべん淺間山あれぐらんせよ淺ましやじやゐんのあつきは身をせめてのふつるぎの山の上に戀しき人はみえたりうれしやとてよちのぼれば思ひはむねをくだくこはそもいかにおそろしやはなのすがたもよは／＼とかしこに立ゆかんとすればこゝにきゑあるかなきかの春の夜のおぼろ月夜にはかなくもきえてかたちはなかりけり

(十七) 關東小六青葉

芳澤 菖蒲

三下リ こはなさけなきしわざかなさのみ人にはつらかりそかなしみのなんだまなこにさへぎりにしもひかしも白なみのよるべさだめ歌かたのいつそあわともきえもせでこがれこがるゝ身の行衛青葉／＼とよべどもはまの濱の松かせ音ばかり松風濱の／＼まつかせ音ばかりそよとばかりのたよりもがなとうらみなげくぞあはれなる

(十八) 同小六自然居士

中村 七三郎

二上りよせてはきしをどふとは打あまぐもまよふ鳴
神のといろ／＼となるときはをざ／＼の竹のさ／＼らを
すりあなたへざらりこなたへざらりざらり／＼さら
／＼ざつとふきくる風は戀かせかあだしの、草葉に
をける露の身なれど身なれど是もこれもかりなる世
のつとめとか／＼世の中につらいものはなに／＼し
のお妻戸につまどに忍ぶしのぶつまどにかねのこゑ
よんの

禪僧のこひするはまづ文をやりてみてやりかけ／＼
やりて見てきたろにやだいてもねしよねもしこすば
あはせのかたつまかた袖をうちしいて此うらみねも
ねしよね波のたちゐもなにゆへぞかりなる宿に心と
めすばうき代もあらじわかれぢもあらしふくはなよ
もみちよ月雪のふる事もあらよしなやかりのうき世
に

(十九)男道成寺蚊屋之段

中村 七三郎
山本 歌門

二上り 君かふる涙をうくるさかつきに思ひ切瀬とき
らぬせの中にながるゝいもせ川思ひこがるゝみじか
夜はとてもねられぬうき枕かやのひとへのうす月も
るゝ／＼もれてさびしき夜すがらともにながるゝほ

とゝきすつゝみかねてはくい／＼とくいなの鳥の物
おもふ今宵ばかりはうすなさけさのみつらくはのた
まひそいつの月日に見そめてさても思ひきられぬ身
ぞつらや心からなる我なみだとは思へどもうらめし
や血すじはしんくのあみをはり戀をむすぶの神心わ
が身の戀はいかでかはにくしと思ひ給ふらんあらう
らめしや其人の思ひみだるゝにゐまくら誰かとかくべ
きひたちおび思ふもつらしねたましと蚊帳のうちへ
いりぬればこはかなしやとはしり出わな／＼ふるう
ておはしますのふなさけをしらぬひめ君やたとひ何
國へ遊給ふとも此戀あだになすべきか思ひしらせん
はら立やと蚊帳のそとをくる／＼／＼くるり／＼く
るり／＼とくるしげにつくいきはめうくわと成て此
身をこがすあゝきよくもなき御すかたとかちやうに
つゝみしつかといだきこくうにむかつてつくいきは
鬼ともなれ蛇ともなれ我ながらわがすがた人めはづ
かし淺ましと思へどきられぬりんゑのきづなあはれ
にも又おそろしや

(二十)行平道行

中村 七三郎

本調子 げにいく秋をふべき御代なれ住吉のかねてう

へおくまつの千とせはつきすまじ時しも秋の夕まく
れさとのきぬたに月さえて千々の草葉になくむしの
聲もすいしきすい虫やきみをこうろぎくつわむしし
のぶ夜さむはまつむしも萩がうは葉にねもしなん猶
ゆくさきはひめこまつなにはの蘆に初鴈のをのが友
よぶ聲そへて詠めつきせぬ道すがら身にしむ風に空
はれていくちはつたけうらわかきすゝきにつなぐ賤
わらは磯のみるめもはづかしと思ひつゝけて行ほど
に松の木影に物とはん

(廿一)行平地獄物語

中村七三郎

三下りかたるにつみもきへぬべしかたるにつけてお
そろしやかしやくのせめも音たかくふりあぐる鐵杖
はてんちもひくばかりなりつみをあらはすじやう
はりのかゝみにあくをうつせば八萬ならくあきらか
に天をうつせばひそうひやそうてんまてくまなく見
えたり扱又大地をかゝみゝればまづはちこくだうつ
みをあらはす罪人のかしやく打やてつちやうの數々
ことく見えたりこはそもいかにと立さればぐれ
ん大ぐれんの氷にとぢられてあたりをみればめうく
わ大地にみちくたりむけんちごくのくるしみはね

つゝたるほの中へまつさかさまにをつる事み
つばのそや下よりめう火ふき上るとがはうへよりを
つる所をさつくと吹あけて隙なくぐげんをうくる
なりあび大ちこくのくるしみはてつせきをたつ事一
ゆじゆんつるぎをひつしとうへならべ罪人を追まは
しがんせきせなにゆいつけられてみねよりどうどつ
きおとさるればほねはみちにくだかれて風に木の
はのごとくなりたすけ給へや人々よざんげに罪もき
へうせてねがいのまゝにやすくとぐせいの舟の
川岸にいたりいたしせたひ給へとて涙くみてぞ語り
ける

(廿二)松茸狩

中村七三郎

本調子いな舟のおすにをされぬ梶まくらねもせてな
がき夜のつらさかたりなぐさむかた糸の折敷御座の
かたくにねられねばこそ夢もみずさそはれ出てみ
ちのへの千々の草葉になくむしも思ひみだれて糸す
ゝきせめてそれかと我とふものは萩の上葉にみたれ
て風そよく余所にもをくや袖の露とれく月の
うつらふ影見えてのこるまつさへあらしにつれてい
と心はのふさんさ物わびし道しるべせよしのぶ草

しげき思ひはあき霧のあだなつともいとはじな宵
よりねやに引こもりまでどくらせど其人のそよとは
かりの音信もはや九つのかねがなる扱もおもわぬさ
はりありこよひのあふせはやれさてかなはぬなよし
くかこつもやばらしやいつそ夢こそましならめ枕
ひとつをたのしみて戀し床しきねやのうち

(廿三) 稻荷塚四門

中村 七三郎

二上り すいちやうかうけいにまくらならぶる床の内
なれしねまきの夜すがらも四つもんの跡夢もなしさ
るにてもわがつまの秋よりさきにならずとあだし
ことばの人心そなたのそらよとながむれどそれぞと
といし人もなし夏もはやすぎまとの秋風ひやゝかに
吹をちてよしや思へはこれとてもあふはわかれなる
べし世をも人をもうらむましたゝ身のほどをおもひ
つけて我ひとりまろねの床こそさひしけれ

(廿四) 稻荷塚孤會

中村 七三郎

二上り らんきくやこぎくしらきくこてまりやかんき
く君をまつ夜はくるくくくと車ぎくよしやなげゝ
どしたへども秋の朝そらきりとちて露なき草にこが
くれの杖をたのみにやすらへは身にしむ風につまも

たもともふはくくくと吹あけて我とは見えぬ水か
いみうつす姿は月影のくもりみはれみゆく雲の空さ
ためなき山々の木々の梢になく鳥は山がらこがら
く四十からひわやひよ鳥めうないすゝめ鳴子ひく
ねにおどろかされて數の小鳥がむら立さわぐにくや
にくや小とりが我をおどすはつらくやゑいこのゑ
いこのゑいこのゑいこのくくゑいこのへみのとたの
むよいや又笠と笠とたのむはいけのはすの葉かく
は草かりたすく男はよいやさゑいこのくくくく
くくゑいこのゑ木の葉の雪はらくくく風にもまれ
て秋の小蝶のたはふれてみねの小松にしなだれかゝ
る蔦かづらよれつもつれつはなれがたなき我が思ひ

(廿五) 傾城花筏

葉山岡右衛門
萬山四郎兵衛

二上り 本調子 かたるにつけてかなしきは此おさあいが身の
うへなり父ははりまのなにかしとて人にしられしも
のゝふに母はむろつの上ろふのはてかりに難波に住
居して此子をまうけ給しに過つる秋の末つかた我に
此子をあづけおきいたはしやおさあいは父よ母よと
戀こがれ晝はひめもす夜はまた夜明の鳥ともろとも
にまどろみもせずなきあかす目もくれ心きへくくと

身も世もあらぬふびんさに母のきてうにわたさんと
さてこそむろつへまいる也

(廿六)彌陀たのむ

芳澤あやめ
今村兼之介

三下り みだたのむ人はあま夜の月なれや雲はれねと
も西へ行なまみだ／＼いとしわか子もせめてさてみ
だの御國へゆくなど、便りのあらばいか計りうれし
かるべき我が心そなたいとしけりやのふやれわが子
もいとしそれなせにいつそ子もなけりやなけりやこ
そ思ひもないよさよしやよしなやまよふたりなふさ
てなまみだ／＼／＼／＼／＼かねのひ／＼きに夜はな
ん時ぞ八つでもあろかいやなふあれ／＼夜があける
やははやじんじやうのゑかうの鐘のあら有がたやい
ざや我子のほだいのためになまみだ／＼よいにやわ
さん夜中にやほけ經南無地藏大菩薩／＼心かみたれ
てのしどろんもとろん／＼そなたへはゆかぬかこな
たへはゆかぬかとそばなる人にとへど／＼／＼こた
へぬふる塚の夢かうつ／＼かまぼろしか我子戀しや

(廿七)傾城佛の原

岩井左源太
上村吉三郎

二上り いつの間にかは秋風の吹やこしちの山こえて
彼の三國のわけあるさとへ悪性がよひのつらくや

ひさげのみづはゆとなれどまたさめやらぬ我思ひつ
らしねたましあらはら立やとすかりついてはなぐば
かりをれとそなたはなん／＼／＼七つ八つ十で殿手
を見そめてはれて人こそしらねふりわけ髪のをなた
ならでは誰にかみせん此くるかみをいまはあだなる
みだれがみみだれ心かあ／＼／＼／＼あいた見た
さにきたぞやれつらや／＼と思ひはすれどまだすて
られぬにくさあまりていとしさまるさてもいのち
はつれないものよ君つらやいきておもひはあいべつ
りくのしんでまたきてその／＼／＼そのさきの夜で
おもひしらしよぞ思ひしれ袖のみなどの戀のふちわ
たりくらべんなみだ川戀の一念さかつきのかげくら
きよにしんいのどくじやくる／＼／＼／＼くるり
／＼／＼くるはかよひもふつ／＼りと思ひきれ／＼ね
たましやあらはらたちやと立たるはあはれにもまた
おそろしや

(廿八)女仙人

多門庄左衛門
出來島小三郎
山本歌門

二上り そちが思へばこちもおもふよいづれ思ひは替
りはせねどいつもながらの御げんもたえて今は中々

あふことならぬなせないつはりかち成心としらでつ
らきながらもまがきにたてばつての文さへやれさて
かなはぬうき代じやへよし／＼かこつもやばらしや
いつそしんだがましならめさてはかなはぬうき代や
とおもひつめたる其けしき身につまされていとしさ
まさるたとひ萬里をへだつとまゝよかはる心が／＼
なけれどもあいとて見たふてかたりたふてきたおれ
になせにそなたは顔ふりやるさても／＼そなたはげ
に戀のかたきよとうらめしそうちにうちながめすがり
ついてはななくばかり一じゆのかげの人やどり又は一
河のながれの身枕ならべしむつ事もかりのうき代の
ならひぞやあはれはかなきみづからはたま／＼うけ
がたき人身のうけたれどためしすくなき川竹のなが
れの身となるかなしさよさきの世のむくいまで思ひ
やられてかなしやなすこしあはれとおぼしめしきげ
んなをしてのふこれ／＼ちとわらひ顔が見とござる
戀もくせつもひとさかり假のうき世の夢なれや經文
まじりになまふだな／＼なまふだ語るまもなきね
やのうちはやきぬ／＼に引わかれしゆびさへあらば
重てとさらば／＼／＼／＼ばやとすそやたもとにと

りつけば戀しき人のをもかけは見えつかくれつまば
ろしか消てあとなき夕間暮

(廿九)女仙人怨靈

山下 又四郎

三下リ それ三界は夢なれやみつゝの車にのりのみちく
わたくの門をや出ぬらん月はひかしの山よりいで、
西の山の端にかくれつゝ世上の無常はかくのごとし
何の上にもむくいありうかむ事なきみづからはじや
ゐんの惡鬼と身は成てゑい／＼さつても／＼未來ゑ
い／＼くる／＼／＼といやつきそひて我にうかりし
其人のいきて此世にましまさば水くらき澤邊の螢の
がげよりも我が思ひもむねの火はくはゑんとなつて
此身をやくむねんやはら立やとしもつとふりあげお
いめぐり髪をくる／＼／＼／＼と手にからまい
てうつやうつうつの山邊の夢の世にめぐりくる／＼
ゐんくわはいまぞ思ひしらすやおもひしれととびあ
がりてはまろびふし雲にうちのり波をけたて／＼飛
行するこそすさまじけれ 本調子おそろしやみちくら
に三十ばん神まし／＼てもふりやうきじんはけがら
はしいでよ／＼とせめたまふつらにくやねたましや
おもふ人をばいたつらにとらであまさへかみ／＼の

せめをかうむるあつきの通方ちからもたよ／＼よろ
／＼／＼とあしよは車のめぐり／＼てまたとるべし
とよばはる聲もかすかにきこえ／＼松風はかりや残
るらん

(三十) 廿四孝狐會見

山下 又四郎

三下リ 見そめまいものうか／＼／＼とうかれ心かう
ば玉のよるならでひるはこがるゝわが思ひねてもさ
めてもわすれもやらてねをぞなく／＼君をおもへば
なんな／＼しのすゝきやおばなの中をくいり／＼く
ゝつたなんぼく／＼りにく／＼／＼どやるま
いぞ／＼どつこいそつこいやるまいぞさまをみがけ
てはしりこきり／＼／＼こきり／＼／＼や月の夜
もゆくやみもゆく雨かあられか露か木の葉かはらり
／＼／＼しどもどろとあの山越て此山こえてけさ
のきぬ／＼あらはれそな／＼いのよもとろに我ふ
るつかへかえらんいさみ／＼歸らんおれが思ひはつ
ゝむにあまる／＼もちのふくさにかうばい小袖つゝ
めど／＼なにとつゝめというにてゝ人目はつかしや
るせなや

(卅一) 傾城善の綱

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

二上リ 筒井筒／＼の水はにぐらねどかはせし人はお
ほろ月いるかたもなきわが思ひたゞかはらじと一す
じにねてもさめてもいとしさのあまりてもれてにく
ふなる墨とすゝりはこいかなれど人が水さしやう
すくなるしんきへしんき／＼水さしや人が／＼が水
さしやうすくなるしんきへ其一念のつきそひて影に
たゝすみあゝ日なたにおほいく／＼／＼／＼
／＼とくるしきむねのはむらの火わきくる水にのふ
きへもせずかすかにへだつあさましやすこしはそれ
と思ひしれ足もとはよろ／＼／＼／＼とよはり
はてたるつるべのしづく落てかたちはなかりけり

(卅二) 文覺上人

竹島幸左衛門

本調子 そのときもんがくひざおし立はづかしながら
それがしは源氏ふだいの侍なりせんねんよしとも野
間のうらにてしやうがいあり其くびやがて六はらの
川原にこそはかけられしをぐそうひそかにぬすみと
りぼだひのみににしゆぎやうしやの首にかけたるす
だ袋あけぬくれぬとせしほとにはや三歳のこうゐん
は矢よりもはやきものゝふのまもりの神ともなし給
へとしやれたるこうべをとりいだし助殿にたてまつ

ればさてはうたがひあらかねのつちにかはねほくつ
れども名は末代にありあけの月のみやこにせめのぼ
りたえて久しきしらはたをみやまおろしに吹なびか
せをぐる平家をたいらげんと頼朝いまはいさまれし
がいやまてしばしなんざありゐんせんりやうしなく
してはしよぐんのさいそくあるべからずと助とのあ
ぐみはて給ひ我にたのむと有し時それこそやすき事
どもとそくじに津の國きやうのしまろうの御所にか
けつけてみつよしきやうを頼つゝゐんせんりやうし
をこひうけてまたたちかへる浦波のく磯をつたひ
山をこへひるが小しまになりしかばゐんせんのと
いだし兵衛殿にいたゞかせそれよりぎへいをあげ給
ひ源氏の御代となす事もひとへにぐそうがおんなら
ずやせめて廿日はまち給へかまくらにはせくだり此
一そうをせんまてはかならずく頼むにやなほうじ
やうとのといゝすてゝ衣のすそのたかからげやぶれ
笠こしにつけちよくくはしりて出られしが又
立かへりもんがくは北條殿に打むかひこれにもしや
うゐんなきならば我いきながらませうと成てかうや
にがわきんぶせんしら山立山ふじのだけ此やまゝく

のてんぐどもさつくとまねきよせしやちくの雨に
つるきをませひそをひゝそう天までたゞきあげう
みにうかまば六代七代八だいりうわう山神水神がう
がのうろくづ八方よりまたゝりをなさせれいの天狗
のそらつぶて一時が間に打ひしきみかたのせいうん
日りん月りんじやうふを吹やはらけくざんじに本
望とげん事なんの子細のあるべきとおんとりあがり
はねあがりいさみにいさんで申せしはたのもしとも
中々申はかりはなかりける

(卅三)とがし城

竹島幸左衛門
同 幸十郎

本調子さるあいだむさし坊熊井太郎たゞ一すじにおも
ひ切さしも大勢まかけしとがしが城へ入たるは人
に替りておほえたり山ぶしの法なればれいしせんぼ
うを讀べきにむさし何とかおもひけん高念佛をと
なへつゝ大門よりつと入とがしか城のていを見るに
おもてのやぐら十三ヶ所わきのやくら九所二重三重
やくらを上げ北のおもてを見てあればくらおき馬の
數しらすそれぞといはゞひき出さんと用心きびしく
みえにけり扱又うしろのやうがいはおもては山たか
ふして一邊の雲のごとし谷ふかうしてとぶ鳥だにも

かけりがたし山みね一丈さがつてからほりほつて
うむくつゝいらをりなる難所なる東の方のをさきには

すみともいるかのあれしもかくやらんとおそれぬも
のこそなかりけり

(卅四)山居之僧

荒木與次兵衛

鞍歌 あまりに山を遠くきて雲又我が里をうづむみな

だつに便なし此せき所をこゑん事かんしんがじゆつ
とまなひふるなのべんにてたばかりともさて中々思
ひもよるましきされどもむさしがちゑのほど百千萬
にくたきなばやわかとをらでをくべきかそれにもう
んめいつき弓のたくみしちりやくもあらはれてさし
もの大勢せんごさうよりとりまかばかげらふいなづ
ま水の月むでにはいかでとらるべきかしこにおつふ
せひつくんでうつ取べし或はうすまきせんぎが中か
けやぶりさしとをし十方むぢんのすて刀さつとひゃ
いてはたがいに言葉をかけかはし是ぞ軍のはなごか
りよし野たつたの花もみぢあらしにつるゝあを侍に
ぐるやつばらおつさますて切むかふてかゝるはから
竹わりらんびらんぐわいとらばしりまくのそうだ
てそうのこてとんぼうがへしに水車磯うつなみのま
くりぎりつらぬきねちくび人つぶて死人の山をつか
ん事たいとる山のほとゝぎすといさみにいさみし有
さまはめいぼくたいしはくた王我てうにては政かど

これ人間まうしうの雲霧のひきはかへさじあづさ弓
やすからぬ身のかりの世を思ひすつるに身こそやす
けれ我はなまじいに弓馬の家に生れきてかごうを捨
てうもんにいる月をひかしに里を見てけはしき山路
なければいわねにとりつきくくくく苦路をふん
でたきいをこり水音すごくそこふかく谷にさがり水
むすびそのせつせんのみかしをとへば唯一心のおき
どころそむかばまさにさんあくたうはのがるましお
ふきちごくの其中にむげんちごくのくるしみはねん
ねつたるほのをの中にまつさかさまにをつる事は三
つ葉のそやしたよりめうくわ吹あぐるたとへばすせ
んでうの谷よりもまくりたてく吹まはすあらしに
ひとしくとがはうへより落ればさあくさつくと
吹あげてひまなくくげんをうくるゆへむげんちごく
となづけたりあらおそろしやくあびたいちごくの
くるしみはてつせきをたつ事一ゆじゆんしほうにし

てつるぎをひつしとならべとがあるものを追のぼし
かしやくする罪人とがをなげくといへどもかなはぬ
はぢごくのならひにて岩石せなにゆひつけられつる
ぎのみねよりつきおとされほねはみちんにくだかれ
てなげきかなしむ淺ましやくらくのさかいはとくも
とかれすいふもいはれず風ふけばふけ我が庵の佛の
てらすたえぬとしび

(卅五)名馬揃

竹島幸十郎

本調子 あつはれ御馬ぞうらふやよき馬のきつそうや
をつさまむかうよこはたばりしゝあいほねぶしよめ
のふしおゝつくりつけたるごとくなり尾はせんだん
のぬのをはへて百丈のたきのをつるにことならす右
のまなこ左りのまなこふりわけ髪にちらりゝちら
ゝちらと「むちはなにゝゝし竹かんちくから竹わ
か竹もとから末から根から葉から竹のきりゝゝなき
りゝゝきんきりよのやれたまりみづすまずにござら
ずですいらす人の心もそれによそへてなにも柳にさら
りゝゝともやらせてかるいがよござんす思ひはづふ
りづふゝゝゝとしづんださなにがさ

(卅六)柴刈風流

上村今吉
袖島市彌

本調子 山がつのたきゝを折てかすゝのおもふまゝ
にはいはれぬやことさら風をいとふなるしに櫻を
折そへてしばかる女のいやしき身にもゝじんやじ
やかうはもたねども匂ふて来るはたき物ちやうりや
うふりやうひやらにひやらろひやらろにるろうなり
ちやるる戀といへるくせものゝゝかな身はやつれ
そろにくやゝゝつらやうらめしや月には雲に花には
あらしあらしつれなやよぎてふけしのぶ夜のあらし
さてもゝゝいやゝ山田にをりしそうとめのしかも
あふみのなりよい笠をじやんときないてひやうしを
揃 三下り「田うへるはおもしろいがぐるゝまはり
がうかないさあうかない十七八はねごいもの梅の木
のさがりの枝をまくらにおよりたかおよりもふせさ
あいよゝゝゝゝ此へゝゝしよんぼりゝゝとうへた
袖よそのたもとは田うへにぬるゝたれゆへぬるゝわ
が袂打ながめあゝしづのめのおも荷のしばもくにや
ならぬあゆむほどなき道すがらとある所に着にけり

(卅七)近江八景

水木辰之助

本調子 ふねをだしやらば夜ふかにだしやれゑいゝゝ
ほかげ見ゆれはなつかしや戀にはのんゑいそれわか

枝もいよゑいゑいや／＼というややばせのわたし舟
 なみはへいたをたゝきあげたゝくしらなみあら男波
 しづかにこげやそろ／＼おせよいそいでこげやさつ
 〳〵とおせようきぬしづみぬゆく船のみぎはをみれ
 ば瀬田のはしぎよそののせきせよまのあたりゆきゝ
 もたえぬ旅人ののぼれはくたるあい土山雨がふる
 うとふ小歌のから尻に乗り打させぬせき所也足もと
 まらず行舟の次第〳〵にそのさきはいか成所と尋ぬ
 れはあれはかた田のらくがんでやいざや名所をかた
 るべしおりてしはしはまあそびあがらせ給へ人々よ
 入江〳〵のあしの葉にそより〳〵と吹來る風は夏の
 しるべか涼しさよ 三下り「磯にをり居る鴈金のおの
 が友よひあそふにぞねらいより追ふてまはればはつ
 とたつやひら〳〵とむれいる雲にさほに成てと
 をるあとながさきへさきながあとならかうがいとら
 しょ〳〵これぞへいさの落鴈とかたりてふねにのり
 うつるのふいかにせんだう殿こなたにたかき御山は
 いかなる所なりけるぞあれこそひらの暮雪とてこれ
 よりは冬けしきみねにふりつむしらゆきのちらり
 〳〵とふり來るゆきに四方のなこすへものふよ白妙

に枝もたわむやしつはりとつもれる道をふみまよふ
 木こり山がつ柴かりが笠も薪もうつもれてさむそふ
 にこざる火をけやりたやすみうへて〳〵比もしわす
 のくれなればほながゆづりはかどまつをめせ〳〵め
 され候へとあきなふ風情げにまことにこれかうでん
 のぼせつなりむかふをみればかた田のうらのあまを
 ふねつりして歸るありさまを見るに我身もいとなみ
 のつりの糸さへしなへてもつれてさほもたずにひ
 くは〳〵ひいてしやくる所をつつた所のおもし
 ろやいり日の影ともろともに風にまかせて帆をあぐ
 る此めされたる舟こそは遠方の歸帆もまのあたりあ
 れからさきのひとつ松 本調子「らうにやくきせん布
 びきのひきわけられぬみやまいりいかなる上手の筆
 なり共是にはいかでかまさるべき日もはやにしに入
 相のてうちんとぼすさよ嵐ふきくる雲に雨おこり村
 雨しきりにふりくればぬれにぬれたるとりなりもし
 つほりしつたりわにのみさきに舟とめてとまもるし
 づくもろともになみだであかすふねのうちこれやま
 ことにせう〳〵のよるの雨ともいゝつべしやう〳〵
 はれる雲ぎれにとまおしのけて見あくればあれ石山

のあきの月湖水にうつりあきらけきすまもあかしも
よそならずこれやまことにとうていの秋の月こゝに
うつしてみつうみのふくるもしらすながめいるふけ
ゆくかねの音きけばあかぬわかれの鳥は物かわ鳥も
なきかねも聞ゆる三井寺の時をたがへすつく数はは
やあけ六つのあけわたる東あふみや西あふみ大津の
町もとくおきておのがさまぐ手わざする是そさん
しのせいらんと夢のやうなる其うちに四季折々のた
はむれをいまめのまへに見する事これりうじんのめ
ぐみなり

(卅八)狂亂

荻野澤之丞
西國兵五郎

本調子 きちがいに物とおふくうすげせうにやなぎ
かは髪はおどろにみだしたれども花むらさきのゆか
り有ふせい床しきものぐるいいかなる人にてまし
すぞとふてなにしよおとやつてなにしよわれは親よ
り子ゆへにまよふまだ父しらぬなでしこの花はねに
かつるくかりかねそれはこしち我はまたあつまか
ら出てこがれくこがるく子ゆへにくるうがおかし
いかなんのおかしかるおかしゆはないが我も御身に
あひとふてみとふてぞつくくくとたづねし國は

どこくせんようだうにさんやうだうおんとのせと
にはりまなだふなぢはるかにきいのぢや玉つしまふ
きあげかいつくぼうてひつつくぼうて尋々あるいた
我らもくるいめぐつたいとし我が子のめにつくはね
のみねどしらねどつくしのはてくはてまでおど
いではしり出くにくさとく伊勢のつをはりのつ
あふみに大津草津いまづかいづしはつとつくく
せつ津の國には大もつの尼が崎からあまになれとて
文よこいたあなたこなたとくるいめぐりて人めもし
らで尋ぬる我をなんだろつよのひこたろつよのそ
よなことときやくきんくきがわるいりんとはねられ
しやんとゆてたもれあか月のからすわんなかいでた
るきのはなをしつかりてうゑいやつとふまいたなご
りなさけ名の中や

(卅九)三ツの車

大和屋甚兵衛
淺尾重次郎
筒井吉十郎

二上り三つの車にのりのみち火宅のかどをやいてぬ
らん夢かうつゝかおぼろ夜の月けの駒にかた手綱ひ
きとゝむれば春の雪とけてみだれし我が思ひあまり
てにくい此人をたれにそはせんねたましや袖になが

るゝ血のなみだいろとなさけのふたおもひふかき心
は常々に語りあかせし戀草のもへ出そめしおもかけ
にすがりつけば八重櫻風にみだれし亂髪ゆいかひな
くもころされて身はあだし野の露しもときへにし事
のうらめしとなくより外の事ぞなくさいたさくらに
なせこまつなくよのゑいさ駒がいさめばはながちる
いさめば駒がよのゑいさ駒がいさめは花がちるあゝ
淺ましやたえがたやぼんのふじやゐんの身のくるし
みはてつせきたつ事一ゆじゆんあだと情の心のおに
のぼれとせむるつるぎの山くるりくくくくくくく
と追立らるれば岩根にとりつきくくくくくくくくく
下よりめうくわふき上ルこは情なやかなしやなたす
け給へと夕くれの月は霞にかきくもり聲ばかりして
失にけり

(四十)時雨の松

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

二上り おなしうき世にかけてたのまんひたちおびと
りかはしたる二世のおびみへにまはるも戀身はかけ
ろふのあるかなきかに捨てられて涙のしぐれまつかえ
にみえつかくれつ戀のせきまよひくあるくもたれ
ゆへぞあはんと思ふわが男人にあはれてはづかしや

戀にやせたるふたへの帯みへまはるふたへの帯がふ
たへの帯がみへまはるさりととはかはすせいしの血し
ほの文字めうくわと成て思ひのきづな切てもきれず
はなれもやらぬわが思ひしめつゆるめつゆるめつし
めつふたりねの夢ばかりなる手まくらにふしてかた
ちはなかりけり

(四十一)思ひの繪姿

賀茂川野鹽
山下才三郎
高島尾上

三下り 世の中の人の心はうつろいやすき物としれ君
と我とが長枕よごとにかはすむつことの人こそしら
ね神かけてあしき心はあゝしんきなひにてんとうら
めしやあゝまゝならぬ君 二上り「さまはなひさしや
いつあふたまゝぞをれもなわすれたあふたよさをわ
すれたおれもくゝなわすれたあふたよさを思ひいづ
ればなつかしやまだはだなれしうつりかのふたりね
がほのつやくくくとなでしこいまはこたへかね君
の御ゑりしかととりこれのふうらめしやわれにしね
との御事かしねならくゝいつそしねなら死にましょ
かあなたゑなひけばこなたのうらみおもひとこひと
くるまのくゝりやうのわになるくるくゝくゝねもせ

でまよふたやんれありつるすがたは繪にかける我は
うたゝねうつゝたしよの

(四十二) ふみこと葉

高島尾上

二上り 一ふてと書そむるはなつかしさのまゝとはせ
まいらせへく候わかれよりほどあらず候へと思ひね
にするひとりねは心もすみて目もさへてたばこ戀草
とぎと成ねやの内かはるいろなく御くらしやがてあ
をぞやかたろぞや筆にまかせぬものおもひたゝあい
ましてゝのこることの葉かへすかき

(四十三) 定家怨靈

高島尾上
中藤三

三下り 淺ましやなみだは生死のうみのなみ死にくる
しみをうけ重くらやみよりくらきにおもむくおんあ
いのうすき契りの袂には涙をつゝむ春雨につぼめる
はなの水ばなれはなれもやらぬあいねんのそいねの
床に夢もなくふたりが中の泪川つながぬ舟はとまれ
どもたれかといまる人もないそよ夢の世にかりねの
母が手まくらよ乳房をしぼりひとりかこちしありさ
まは見るにたもとぬれぬべしまたおきあがりては
しりめぐりてつまにとりつきのふかなしやもはやわ
かれのあれたえがたややいばのつみにしゆらの太鼓

さらばといへばしばしとゝむる袖ふりはなせば目に
こそ見えぬふむあしもとはめうくわのけむりこはか
なしやと又ゆくさきもほのふのけふりにむせんでお
そろしやわれはじやゐんのながれのうき身くみなが
す酒は三途の大河となり起請しんはつめうはつあた
つて此身をくたくとむらい給ゑお僧さま

(四十四) 地持踊

山下座

二上り やれおいかけはやさぬかさアゝさおいかけ
なかのつなしめてみよよいやさやれ我が戀はゝ細
谷川のさる木はしふみかえされてはぬるゐるゝ袖か
やをいかけなかのつなしめてよそらふたやれ中のつ
なわへゑやゝゑやへやこのさんさのへ

「鳥にうらみはあふ夜の時ようたへ今宵のひとりね
にさんよへゝ」

「あのや小山に戀風がふくとの身をもなげかけゆす
らばおちよかのさてもつれなのあの君やふるやこづ
まはかははいよへゑいやゝゑいやへこのやこのさん
さのへ

「なには入江のよね舟をみたかゑいとんなゑひゑひ
へゑいとんなあゝはりまの米が千石あはちの米が千

石萬石舟方がおさめた月の夜はしりにやしものく
しものせきのむつ事もわすれたあゝゑいとんなゑい
ゑいへいゑいとんなひらいてさおいてゝさおも梶と
りかちなには入江のはんじよへ

有馬のふち狐會右水木辰之介所作松のはに見えた
り此集にのするにおよばず

寶永庚寅七年九月吉祥日

ゐつゝや庄兵衛板
書林

萬木治兵衛行

増補
松の落葉大尾

自寛永
至延寶はやり小うた

自延寶四年至文化十二年及百四十年
古寫本可愛玩今茲乙亥三月上浣令春
高子補表裝所藏也

式亭主人

愚意

抑延寶丙辰八月上旬の事成に獨り寢の淋敷儘に色々
の草紙を見て心をなくさむ中に我曾て音樂不調法成
に依て此草紙八十冊に及びて見るに世にはやりし音
樂の類思ひ出して慰む所に世の人の心一品に心を留
す年に幾度か移り代りて古きは捨る故専らうたひ翫
し事とも見聞に隨て古き新敷を撰はす此双紙に集て
淋敷座之慰と名付て小わらべの翫ひとなす者なり若
音樂に志ある人は或不足又は誤り而已多からんあ
はれ糺さるゝにおゐては我望是にしかし又書かうき
てん一心二河白道或三味線小弓且尺八等の歌は夫々
の冊に委敷記しあるに依て今爰に略すものなり其外
予未見聞音樂又は覺へてもはやらさる事或歌に依て
名の不知は除之て名高き音樂の類はや(かカ)り撰み
出して悉く此一冊綴之畢

于時延寶四中秋上旬日

淋敷座之慰 全

目録

- 本朝王代記之謠
異國王代記之謠
名香名寄之謠
鐵輪之道行
小舞
歌枕道行
弓場意恨道行
ちぞうの道行
義氏の道行
笛之段
四季のちやう
當世都めくり
河内通ひ
吉原ゑびすおろし
はやり祭文
吉原大夫祭文

野郎祭文

江戸まんざい

大峯まんざい

吉原太夫まんざい

野郎まんざい

吉原太夫後世たゝき

吉原太夫紋盡しのたゝき

昔大黒舞

中古大黒舞

西國順禮歌品々 (三十三)

坂東順禮歌品々 (三十三)

忍ひくとき木やり

秋の夜くとき木やり

吉原太夫くとき木やり

野郎くとき木やり

春駒くとき木やり

きりくすくとき木やり

敷物揃くとき木やり

島くとき木やり

楠木くとき木やり

醫者くとき木やり
 道盛くとき木やり
 西行くとき木やり
 北野天神くとき木やり
 八島くとき船歌
 お江戸くとき船歌
 若衆くとき船歌
 鳥さしくとき船歌
 たもひ物くとき
 琴の歌品々 (七十二)
 鞠つき歌
 盆歌品々
 らうさいかたはち昔ふし品々 (十七)
 昔小六ふし
 昔ほそり
 櫻川のふし
 はやり長歌
 さよの中山長歌
 なけふし品々
 しな者の歌

やよやふし
 はやり物の歌
 さんや源五兵へふし品々 (九ツ)
 替り源五衆ふし品々 (六ツ)
 のほたんふし品々 (二十四)
 さわき歌 品々 (二ツ)
 京はやりふし
 浮世いそへ殿ふし
 替りせうかなふし
 のつちりふぐじるふし
 谷中うわきふし
 御門徒興五平ふし
 大坂から墨ふし
 吉原しよくりしよふし品々 (十)
 目錄畢
 前後口傳有之
 都合音楽二百七十
 紙數合百十五枚

淋敷座之慰

次第不同

本朝王代記之謠

一夫仁王の御次第神武、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化、崇神は十代の帝、垂仁、景行、成務、仲哀、應神、仁德、履中、反正、允恭二十代、安康、雄略、清寧、顯宗、仁賢、武烈、繼體、安閑、宣化、欽明三十代、敏達、用明、崇峻、推古、舒明、皇極、孝德、齋明天智、天武四十代、持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、廢帝、稱德、光仁、桓武五十代、平城、嵯峨、淳和、仁明、文德、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐六十代、朱雀、村上、冷泉、圓融、花山、一條、三條、後一條、朱雀院、後冷泉院七十代、後三條、白川、堀川、鳥羽、崇德、近衛、後白川、二條、六條、高倉八十代なり、安德、後鳥羽、土御門、順德、後堀川、四條、後嵯峨、後深草、龜山、後宇多九十代、伏見、後伏見、後二條、花園、後醍醐、光嚴、後々醍醐、光明、崇光、後光嚴百代、後圓融、後小松、稱光、花園、後土御門、後柏原、後奈良之院、正親町、後陽成、當今迄は百十代、四海

波靜にて萬民時をあふくなる、今上皇帝の御代そ
久しかりける

異國王代謠

一伏羲神農と皇帝是を三かうと云、天地につかさと
れり、少皇、瑞玉、かうしん、とうぎやう、ぐしゆん
迄は五帝也、夏には禹王をはじめにて夏のけつ迄
は十七代、君の道なき故障より終に誅せらるゝ、と
う王いんのはしめにて三十七代の時に、紂王の惡
により、武王のうたせ給ひけり、是太公が智略也、
周の世は三十七代ときこえし、年は八百六十年也、
文王を初めにて武王、成王、かうわう、しやうわう、
程王是迄聖代と聞えしが幽王のりさんに放火をあ
げし寵愛のほうじか故に亡びぬ、されども幽王の
御子けいわう、世をおこしちうかうとなりにけり
(下略)

(唐まで段々疎略となり 後には代數をあぐるの
み)

名香之謠

一夫六十一種の名香はほうりうじ、とうだいじ、せう
やう、三吉野、こうちん、こぼく、中川、ほけ經、花

橋、八ッはし、おんじやうじ、にたり、富士の煙り、あやめ、はんにや、鷓鴣、斑走梅、揚貴妃、飛梅、種か島、みをつくし、月龍田、紅葉の香、斜月、白梅、千鳥、ほつけ、らうばい、八重垣、花のえん、華の雪、名月、がらんす、蜀立花、花散里、たんか、花かたみ、うわだき、須摩、明石、十五夜、りんか、夕時雨、手枕、有明、雲井、くれなひ、初瀬、かんはい、ふたば、早梅、霜夜、七夕、寢覺、しのゝめ、薄紅、薄雲、のぼり馬

鐵輪道行謠

一げにや蜘蛛の家にあれたる駒の繫くとも二道かくるあだ人を頼ましとこそ思ひしに人の偽り未知らでちきり染にしくやしさも只我からの心也餘り思ふも苦しさに貴布禰の宮にまふでつゝ住甲斐もなき同じ世の内にむくひを見せ給へと頼みをかけて貴布ね川はやく歩みをはこばんかよひなれたる道の末々よるも糺のかはらぬは思ひにしづむみそろ池いけるかひなき浮身の消む程とや草深き市原野邊の露分て月おそき夜の鞍馬川橋を過ぐれば程もなくきふねの宮に着にけり

小舞

一松の枝にはひな鶴のすだつを見ればうごきなき岩尾の方に居る龜の千代萬代も限りなきよはひは君がためなれや心も清き池水に廣き恵みぞ有難き

歌枕の道行

一扱も其後思ひもよらぬ旅衣立出るより袖ぬれて千日をいつと白波の暇(沈カ)む浮身と成ぬとも東は残る妻や子はしらでぞあらんかくとだにいはで思ひを淀丹のこかれながるゝ泪かなわれおかさねは誤りを人は何とも岩清水澄濁るをは神ぞしるらん男山斷り給へとふし拜み思ひはいつか山崎や關戸の境を打過てうどのゝあしの程へても歸らん事をかたのの原ましるの鷹を手にするなりひらの中将のかりくらしとなかめけん昔しの春もなつかしや袖に波よるなききの院江口かん崎打過て思ひはつきじ有明のかたふく空や西の海波の煙りの松原やかすむそなたはすみ吉か岸におふ成わすれ草今のおもひに種とりて植て思ひをわすれてしうしほのひける大物の浦より船にのせられて鹽路はるかにこかれ行浮目を三つの濱なれや難波のさにと飛

はたる思ひにもゆるも身の上と思ひ合せてあはれ也あしやの漁の船よばひ身にしみ渡る折からにむこ山おろしふくはらやわだの御さきを打ながめさらし糸の色かとぞ見るさみだれに濁りて落る布引やたきつ心をせきかねて袖くちわたるさかて川ゆきゝの人のしげゝればてまのはやしに隙もなく心つくしの須摩の關もしはたれんとわひけんも今身の上にしられたりしつみははてじうたかたの淡路島山詠むれば波にくちせぬゑじまおばたが筆染て寫しけん身は浮船のよるべにもつみならで見える空なれや心ばかりはすむ月のながめ明石の浦を行とわすがたりの古へを思ひ出るもゆかしくて千代のかげ見ん小松原うしや思ひを高砂の尾上の鐘にねをなきてむろの泊りに身をよせあまのかりほすもかけの世とすなをならんや世の中の人の心はよもきか關身にとりつどふ梓弓やよりの濱をこき渡りあべの浦よりうちうみ行日數やうゝ重なりて備前の兒島に着給ふともかくにも正景の心の内無念とも中々申ばかりはなかりけり

弓場意恨の道行

一其後かつ秋のみだい所や若君は佳馴給ひし屋形をば泪と共に立出てけふ出て行衛もしらぬ旅の空きてこそ猶も物うけれ古へ人のおもかげを戀しき都いつか又あくる山ありとばかりを頼みつゝ矢田のいつる梓弓つるかの津にも身をよせて音に聞あらし山こえても露ちる秋風のなげきこりつゝはてしなき七里半にぞつかれける此人今のあはれさ何にたとへんかたもなし

ぢぞうの道行

一其後若君は鹽津の浦より船に乗跡ふり歸り見給へばわこく無双の竹生島こんりんざいより夜のうちにしゆつげんしたなれば地にて胎臍界の辨才天假にこの世にちんぎ成弓手の山はすげの寺妻手はふなきの湊なる佛の縁に近江ぞと沖にかもめのつけ渡る浪も磯部に打よせてよはひ久しき白ひけの宮居もあれに立給ふりうとうの光りまし御殿を照させたまひける若君これを御覽して感涙袖をうるほして順風心に任せつゝわにのみさきや平小松かたゝの浦の船よはひ是も何をふ名所哉西に小高き御山はあれこそ日本天臺山しめいのほらをうつさる

る麓に日吉權現のいらかを雙べ立給ふ東はやつさ
き山田村やはせの浦の渡し舟とづ坂本のこなた成
志賀唐崎の一つ松今も山王權現の御神木にて候と
名所を語る其中に舟は天津の浦につくほうしゆ丸
の心の内あはれとも中々何にたとへんかたもなし

義氏吾妻下りの道行

一 扱も其後義氏は郎等四五人御供にて吾妻をさして
くたらせ給ふいつかわが子に粟田口ひの岡峠打こ
えて天津濱過ひばりさるづるのぢの里露はうかね
ど草津の宿雨はふらねど守山やしの原堤なにかみか
た見てこそとをき鏡山ゑち川過れば千鳥嶋おのゝ
細道すりはり峠は是とかや立歸りなかわれば都の
山はとをざる旅寢の夢はさめがいいそき給へは
美濃と近江の堺なる寢物語を打過山中宿につかれ
けるふわの關屋のいたひさし月もれとてやまばら
成たるいの宿よはほのくくと赤坂や夏を待へて熱
田の宮何と鳴海の鹽干方末は遠江の濱名の橋の夕
鹽にさすもさゝぬもかのほる海士小船こかれて物
や思ふらん心つめは夕まぐれあすまであらん命は
しら雪の今は池田の宿に着袋井繩手を行は程なく

につ坂過れば音に聞さよの中山是かとよ此所にて
一首の歌をよまれたり」としたけて又こゆへきと思
ひきや命なりけり脱字アルカ
原本ノマ、と口すさみ給ひ筏なが
るゝ大井川嶋田藤枝鞆子川てごしの里しづはた山
を打ながめみをの入海田子の浦雪かつもり年に高
さやまさるらん伊豆の三島や浦島やあけてくやひ
箱根山猶よろこひを菊川や大磯小磯を過鎌倉山を
妻手に見て武藏下總のさかひ成角田川梅若丸の墓
印し柳櫻を植交て念佛の聲の殊勝さよ宇都宮に着
しかは大明神を伏拜み今一度某を花の宮みやにな
るべしへ
歸し給はれときせいをめされしのゝめ早く白川や
二所の關に着しかは我をはとめよ關守と戀しき妻
や子に會津の宿目出度事を聞からにやないいつ
にもまいらんとてやないつさして參らるゝきよた
き川にさがりこりをかき御前にまいりいかに申さ
んこくうどう様三國一のこくうどうと聞時は我等
までも有難くぞむじ是迄參りしりしやうには花の
都へ某をかへして給はれや此願成就するならばと
しこもり申さんとてふかくきせいをめされつゝ三
日こもり御下向ありいそがせ給へとて日數つもり

て七十五日と申には奥州などゝの里に着給ふ彼義氏の心の内あはれとも中々申ばかりはなかりけり

笛之段

一御ぞうしはまがきがとさまに立忍ひかくおぞちやうもん被成けるあゝ面白のおんがくや都にてあまたのくわけんを聞しかどもかほどゆゝしきくわけんはなしかゝる程イカゆゝしきくわけんにも笛のなきこそ不審なれ口傳笛はあれども吹手がなくしてふかぬかや吹手はあれども笛かなふしてふかぬかや異本笛も吹手もありけれど惣て東のくわけんには笛をはふかぬがならひかや夫はともあれかくもあれ義經是にてかくに笛をあわせんとする若もとがむる人あらばさんろがよるの草刈笛と答ふべし重てとかむる者あらば源氏重代友切丸のつゝかん程は打あふへしと思召右の袷の袂より彼せみおれを取出し八つのうた口とてあかの花の露に打しめしがくは様々おほけれど口傳男子が女子を忍ぶがく女子か男子をこふるがく中にも北野の天満天神のおしませ給ふさうふれん節ト云おやの子を又尋かねたるしゝとうでんと云がくをおし返へして

は吹もどし吹もどしては押返し矢はぎは闇ともなばなれと半時ばかりぞふかれける

四季のちやう

一御ぞうしは淨瑠璃御前の一間所へしのばせ給ひて見給へは四方の障子に四せつの四季をぞかゝれるまんつ東の障子にかいたる繪は春のていかと打みへて二月末キヲキ彌生初めの事成に峯の白雪むら消て谷のさわらびもへ出れば松の枝には孔雀鳳凰かさへつりてこりうそてりぬるてりましこひわやこからや四十から數の小鳥がすを喰てあなたこなたへとまり舞あそびし其風情をかゝれたるは誠に春かと見えにけり南の障子にかいたる繪は夏の躰と打見えて卯月末さみだれ初めの事成に軒端をふかすはあやめ草夜ふをかたるはほとゝぎすなつかしさにそなたの空をながむればしづの女かたこのもすそを引みたしすげのおがさをかたぶけてさなへとるこそやさしけれ日だにくるれば我屋にかへり宿の埋み火かき立て軒端へに立煙り谷へとかたふく其下にはこうろぎはたをりきりゝす松虫すゝ虫轡虫常になかぬはたからむし蟬のなく聲梢々に

ひきわたりし其風情をかゝれたるは寔に夏かと
見えにけり西の障子にかいたる繪は秋の躰かと打
見えて荻か上葉にそよ風萩の下葉に結ふ露九月
下旬にもみじばの所々に散行風情をかゝれたるは
誠に秋かと見えにけり北の障子にかいたる繪は冬
のていかと打見えて遠山近き里までもあらしこが
らしはげしうて軒にたがひそこほりけるつかはぬ
をしの一 番羽をばこほりにとぢられてたぎる其身
の風情をは日本名譽の繪書の上手かこんじやうろ
くしやうの筆を以て繪朱をもおしますかいたりし
を物によくゝたとふれば都に取てはどれゝぞ
一條殿や二條殿近衛關白花山の院六原殿のかしの
御所と申とも是にはまさるべしとも見へざりけり

當世都めぐり

旅人は都あたりの名所舊關さとゝゝをめぐりゝ
て見し程に東には祇園清水ちしゆの櫻の先咲て音
羽の瀧の落くてあらしの花の數ちりて霞の内に
鶯のさへづる方を詠れば朝日かゝやく豊國をふし
おかみて行程に並木の花も盛りにてあたりに近き
大佛や三十三間ふし拜み三の橋を打渡りいなりの

山の青楓もみちせは見んとばかりを契りつゝうづ
らなく成深草山松にからまる藤の森本書誤乎打こへ
行ばしづ原やおはらのさとにひえいざんいづれも
雪の降ければ猶しもかんふうはけしくて伏見こわ
だに打つゝき彼宇治川のせゝの嶋になかむれば風
に亂るゝはたる火や水にみまきのいそすゝみ猶音
に聞八幡山正八幡をふしをかみ淀の川瀬の水車め
くる命を限りにて鳥羽に戀塚あきの山むつだのよ
わの虫のねもはやかれゝに成ぬれば聞につけて
も哀なりとうじ四つ塚かつらの里月の影さす大井
川高尾の峯のもみち葉はいとゞしぐれやそめつら
んをしかなくなるさがのゝ原は物さひしく音に聞
うづまさの入あひの鐘もそゑて程近きときわのさ
とに北山や積る白雪踏分て心ほそくも舟岡山の夕
煙り立のほりしを見しよりも一しゆはかうぞ聞え
ける煙立船岡山を詠ればよその哀れに袖ぞぬれけ
ると讀しも聞に付ても斷也きふねの明神鞍馬寺打
こえ行はしづはらやをはりのさとにひえいさん何
れも雪のふりければ猶しもかんふうはけしくて山
より出る細道も木の葉亂れてうつみけり谷の小川

もこほりつゝおしやかもめの忍ひ寝もたへゝに
こそきこえけるひのをか峠に粟田口かなたを遙に
詠れは加茂白川も見えにけり吉田の宮立ふし拜み
我もゝと打つれて都入こそめでたけれ

高安通ひ

一 うつろひ安き人心花になれしはそもじ様扱つたな
きはわらはが身にてとゞめたり故を如何にと尋る
に君と我中二葉の松の末かけてかわらじとこそ契
りしにいつの間にかは秋風の吹や龍田の山はすさ
ましく惡所の有と聞物をおぼつか波のよるの道と
やあらんかくやわたらせ給ふぞと思ひつゝけてか
くばかり風ふかは興津白波龍田山よわにや君かひ
とり行らんと行末を思ふ心とけよその契りをとめ
んとやあかぬは君の情とて打つれみすの内に入給
ふ

吉原太夫ゑびすおろし

一 そんなめでたひよいはひ申よ御代も吉原五丁には
我もゝと袖をつらねてあげや丁に來りありける
君立を忍ひて見れは諸國ゝの國名かたとり丹州
但馬對馬に因幡次郎かはやしてこそをひゝかすく

ろうす様とよ初音様のつふしなんそにしねとかい
たもことわりや扱又めいよ不審によるかかなつて
くつわあけやもよろこひ申よあさつまのかわり清
十郎はしをらしやてんかくよりもわたらせ給ふか
雲井の君とよ藤波のながれにうかむつねよはつね
の初島鶯聲にて歌をうたへはまれにあふよはたま
のへこのゑ「高尾様の御なりふりはかまくらの
御所の前て十三の姫かしやくをとかく吉野かふし
へかへわげつてないかとほめられければしやみの
らんきよく玉よの君とよあななかつらにふるなの
初瀬いつも常盤に松がへさころもいとしをらしき
はかしをにかるも吉田外山あれみなさいや是みよ
しのゝすみのゑ大坂此君達の一つ處に集り給へて
御酒宴なんともはしまりければおもひゝのもん
盃にて加賀に菊酒いづみの御酒にてるいも御ぎな
い右京右近にかさなりてよべは幾代まん代も春明
石様御酒をまいれとゆふぎりさんしゆそこで與太
郎にお看とあれは内の首尾能繕ひをいて馬に打乗
て此さとへ來り門をたゝけば亭主はませすあんた
るこよひだな

櫻川ノフジ

世ノ中ホンサマフジ

カマクラフジ

替り大手なし

當世はやり祭文

一 抑はらひきよめ奉る愛宕山には大權現吉原三原に
ほうじゆんぼう富澤丁にはときわけほん古かねた
なにはほこりをふいてならんべ置たる蓑茗盆小傳
馬丁には車長持なるかみぼん藥師堂前にはかんこ
りとのほうらくぼんばくろう丁の裏屋くゝにぐ
わんにんぼう見付の端にお立なさるゝ代僧代參り
盗人はん横山丁には地打に打たるくまでんぼう乗
物町には乗物ほう堺町には風呂屋くゝをのぞきん
ぼう鹽物のかしのひだこ入道ひつはりほう船町の
かしにはゆるかの大じんぬかをけほんこあみ町に
は小船をこきよせぎやうとく迄と人をのせるほん
新橋にてはわらんすはいて上下をせんとて待かけ
ほんたちうりては奈良物脇指賣付ほん萬町にはよ
りんほうめつた丁にはびくにほう日本橋にはあめ
うりとうまん是程たかしきほん達をくわんしやう
おろし奉る

吉原太夫祭文

一 抑くわんじやうおろし奉る先々びやうじやのなに
しあふ愛宕山より高尾様あふみね大せん千手様其

外さんやの名とりたち種々の手くだはゑたれとも
今のでうずのをもごしを千とせ見しよりよねんも
なみの初瀬明石と名はよべどはぎのしろきに心を
うつし伽羅を失ふひやうきんぼうなどはあやなし
金太夫いつも見あかぬ江戸まちの巴ときけはなつ
かしやふじへせんしう其姿誰も見んとてすみ町の
まさきのかつら長きよの幾世重ねてあさつまの初
音ともゆかしかるも様いとおしらしきゆふきりの
峯の嵐かやれ松風かさてもやさしき物こしのきよ
く聞ゆるりしゆう様心は吉野の山にこそ咲ははつ
花八十郎かくせんせひの君達とせめて此世の思ひ
てに一ざ二座もさんしゆ様此君達のまもらんにつ
きしいきりやうよもあらし病者の命は五百萬世と
祈る也いきみたまのこさんしゆほう其身は息災延
命諸願は成就皆領満足敬白

野郎祭文

一 抑くわんしやうおろし奉る先々野郎の名にしあふ
愛宕山川内記殿勘三瀧井山三郎其外餘多の見物衆
今の名家のおもさしを一めみるよりよねんも浪の
内藏介顔の白きに通を失ふ久米介春ならねとも此

君の臚に花井岡之丞櫻井門彌と夕月の臚にあらて
光りある能出來嶋のこさらしを出るにあやなし金
きくといつもあらぬは初太夫節をこめたる竹之丞
誰を見むとて上村の掃部の脇にたゝすみて猶もひ
そかにとうにこそよにも又なき皆之助いとうつく
しき小さんの君扱も利發な物こしの清く聞ゆる才
三郎心よし川權十郎咲や花咲右近殿かくせんせい
な君達とせめて此世の思ひでに一座も二座も山三
郎此人達の守らんに何の恨は有明のつきしいきり
やうよもあらし光をみがく玉村ほう其身の息災延
命諸願は成就皆領満足敬白

江戸まんさい

一とくわかには御まんさいとちよにやゝ御まんさい
と四海の波もしつかにて國も治る御代なればかゝ
るめでたい寶の君の御城つくりの結構には門々な
六十六櫓々の其數は玉をつらねたごとく也かゝる
めでたい寶の君の御在所なれば町の數をかそうる
に名のある町か八百八町其外數しらす寺の數をか
そふるに一萬三千三百三十三寺ありやあかやうに
めでたき寶の君の御在所なれば六十六國の守護神

達のまつはらせ給ひて屋形を立ひろゝと立て君
を守護し奉ればながれの末の我等までゆたかに榮
る嬉しさよ其後寶の君はたかき屋にゝ上りて見
ればいゝ煙り民のかまどはにきあひけるとほめよ
ろこび候けるは試に目出たうさふらひける其後寶
の君の御在所なれば南おもてを見わたせば南はく
んだり夜叉是も淨土の三部經海の面を見渡せば西
國四國あきたさかたさいなゝ國つがる八方そとが
濱は扱おゐて唐天竺の寶船に餘多の寶を詰込てお
江戸の港へおしかふたるは誠にめでたふさふらひ
ける東は觀音菩薩西は六社の大明神寶の君の南面
を御番の佛はどれゝそ同じく法華經のしやりや
うばんにおはしますしかとくぶつらいせうきやう
しやうしやうこつしゆむりやう百千萬億さいあそ
うきしやうせつほうきやうけむしゆおく衆生りや
うたうぶつどう如來むりやうかういとしゆじやう
こほうへんけんねはんたちのまつばらせ給ひて御
番を勤め給ひけり北の方はどうぞ同じくほけ
きやうの八の巻におはしますありなりとなりあな
るなびくなびいてびいでみんいてびあでびいでび

てびくろけいくたけいくどけいくあしゆ
らかるらきんなまごらかびくくうばそくう
ばいにんにんとうたちのまつばらせ給ひて御番
をつとめ給ひけり東の方はどれくをなじくほけ
經の五の巻におはしますいつしやふくとくさぼん
はわう二しや帝釋三じやまわう四しや天わんじや
うわう五しや佛心達のまつばらせ給ひて御番を勤
め給ひけり西の方はたれくいちめうらんば二め
うらんば三めうこくし四めうけし五めうこくし六
めうたほつ七めうむゑんぞく八めうしようらく九
めうくわうたいによ十めう達のまつばらせ給ひて
御番を勤め給ひけりいよくお江戸の七まんざい
とやいさいわかおたんなへ金かまいつたつれふし
にまいろうゑい當年なく若水かわりて大はんは
小判にたんざくはやぶきすなかねなんそをみやこ
のくるま牛にしつかとつんであれから是まできり
んくまいるはすへるなくころぶななかゝるめ
でたいまんざいをいつ迄さまおうやくたのし

大峯入萬歲

一かゝるめでたい折からなれば都聖護院と三寶院と

の一世一代の大峰入を見申に昔えんの行者のなか
れを泣て山伏の水上也諸國の山伏達を引くして大
峰入は誠に殊勝に候ひける扱又扱の中をあらく
見申に先一番の扱の中には大せうきやうを入られ
ける扱又二番の扱の中には金剛經を入られける三
番の扱中には三部經を入られける四番の扱の中に
は般若若を入られける扱五番の中には眞言秘密を
入られける六番の扱中にはどつこしやくじやうい
ゝたかじゆずを入られける扱七番の扱の中には胎
識界のまんだらをこそは入られける八番本書になし誤か八番の扱の
中にはほし甲にらんでん鑠の鎧をこそは入られける
九番の扱の中には淨土の規式をこそは入られける
扱又十番の扱の中には十方諸佛位神を入られける
十一番の扱の中には那智の山より飛來る天狗のは
かいを入られける十二番の扱の中には藥師經を入
られける扱又其日の装束は思ひく脱字ありの装束ときん
すかけ螺の具金剛杖をるべしにつき大峰入とぞ
聞えけるは誠にありかたかりし次第也

吉原太夫まんざい

一あらたのしやとくわかに御まんざいと君もさかえ

まん／＼すかゝる名譽な太夫揃への御女臈ふりの
いつくしさよめいたいなあんたらかこうしの前に
來りて御せんせいていよほめられしはやぼと見う
けたあしらいて一とりんかせんしやうらしくしん
ぞいやなふうのはんしやうにてもはふらはす昔彼
は三筋町の御時初瀬か吉野とならんと二人なこう
人なしに來りてせいてのぼりて百萬兩たてつ
くはしめてしちんほうひろかける其後甚太こう
し三四がこうし天神にわたりて大はんしやうの六
條をは島原へこされけり其後にとくわかに御まん
さいそやまんさい／＼初春に正月かいきさき彌
生花かい五月はあやめの節句かい七月に成ぬれば
たなばたのほしあひ八朔はまぶかい九月は節句の
菊重ねやれさいわか七様と八様とくせつがいでき
たつた是はふしきな事だ是程よひ中があんたる事
だされは七様もつまらぬ御人のみゝにかゝる様な
事ばかり人中ておしやるをれはいこう腹がたつわ
いの初音様へはつ／＼しう何をくせつおしやるえ
ひされはかゝ様さかしやれ此中もみゝにかゝるや
うなことををしやるきつう腹か立まする私は歸り

まするさらばやは今おれかちかふたににつこりと
わらふてたもやこなたの其様におしやれはおれも
腹か立られぬめでたいは此めでたいかめてたいは
扱もめてたい／＼やれさいわか中の町に大よせか
あるきいたか夫がいな事じやおてきはたれ／＼だ
まづしゆん様山様と様なんびんちば様おもたいな
りていやなうてはないかいの扱も／＼おひたゝし
いなんひんの集り哉扱太夫達はたれ／＼そ先吉野
様かほる様初音様小藤様かつらき様小妻かいとり
ほそ緒のせきだあけやのかたへちよろりん／＼
／＼なこのまんさい／＼千年の御祝ひととつはい
ひやろのひ

野郎まんさい

一とくわかに御まん太夫とよ君もさかい町にしま
すかもんめでたや田村の君の御子ふりのけつかう
さよ名代イイライの味しやこきんの前に至りて狂言をぞめ
されける狂言に取ては一にりきみしなせふりぬれ
者品者ばつとり者にてさふらひける皆之助顔はせ
見に來る人は布引の瀧井山三の御姿こうすか／＼
ぶつころすかなりもふりもよしおかのたもむの松

井織部清き玉井の水はわかやくきのめははる淺之
糸の御姿又も世には出來島にざらし様の御ふりは
内記見事とはめられて我等か様成ちはすけなんと
も鼻毛にとんほつなきさふらいけるは誠に名譽て
さふらひける昔かのかふきをとり御ときかん
みに彦作さうにんは二人は次第にひろまりてかゝ
るはんじやうくくは十六又かゝるはんじやう
たておゐて初めて狂言廣まりける夫よりも千世よ
鶴の丸甚三めでたや竹之丞すの舞ふりなかれも絶
せぬ玉川の主膳の舞の見事さよはんとうの末なが
く光りをみがく玉村の吉彌様の舞の手末廣今とさ
かい町民のかまどもにぎわひてふつきや長久とよ
ろこびけるは誠にめてたやさいわかはやせやまん
さいく夫にやつゝいてく中村の作彌様さき川
の八十郎六彌吉彌瀧之丞様みきの介もし太夫殿是
がさかい町て御座る是が竹之丞太鼓の曲がはしま
つたく太鼓の曲あるまんさいくく是太夫殿
子共衆のおとりがはしまつた花は吉野紅葉は高尾
月はさらしな須磨明石太夫とのでつかからかいてま
んさいくなふ太夫殿是か勘三郎鞠の曲じやまり

蹴て見れはなあさんき鞠かあたりて天と面白やこ
りやなんたるこんだな扱もくでつかからかいたま
んさいくなふ太夫殿是か玉川主膳さる若山三郎
かささんぼそうがはしまつたせんざいらくやまんさ
いらく千年の御いはひやゝたのし

吉原太夫浮世たゝき

一面白の浮世遊びやタアくぬめり町を上から下
へ見渡せば扱も見事やうつくしや餘多の上臈衆が
御ざんす主はしらねどかうしからちよいとまねく
しかもかのこのずんどう(き)よしがなこのちよい
としよ先も名高き吉野様とやまに咲しお姿を一目
見しよりしづか心もうかくと成はてゝやりてが
袖をぢつとひくとしはいぐつとをたればじゆん
じゆん七そん八がそんくそなたにうつぼれてた
んくたき野様はみめよしふりよし心よし世界の
玉葛とぼつとり者のあぢものゝせめて一夜はもま
れたやかと吉田殿へも取沙汰柄も見事やさしのけ
ふはどこの町へおそうがさはこそお町のおんのぢ
と床入をはじめたくここにもなれば花月様しや
みに心をひかされてはつたと上てうたふたわれも

他國よきしよ様も他國よたぐひちがへてのさておめを下され又ある方を見てあれは爰にかいてのゝんとき者ながひ刀に長脇指をばつこゝんて日本堤をずんよいゝずんすとぬめりあるいてはたとあてたやつこなたさいきかなさうぬめか腕立身かしつた八わうし山の炭焼だか色はくろいが偽りやござなひさんすいやつこわゆすきたゆけは程なく大門口にもあみかさよだて羽織金鰐大小指ちらしあけや町へぬめつた爰をとをるはほんにさ高尾に吉野君よゝ是ぞお町のほんにさくわけつのおてき兎角浮世はしやつひけうんのめさわけめてたい浮世たさゝ

吉原紋盡しのたゝき

一 シテ松もとかえる今此春のながき日の本なんせん部州お江戸淺艸のあなたのかたへあしはやに歩み行て思ふ人に大門口のこゝらに立て今の名とりちよんゝ上臈衆のいしやうの紋を見たれば治る御代のためしとて ヲキ弓は袋に矢車丹州様の出さんさしたシテあさぎ小袖にもみうら ヲキちがみにもつかうさんしゆ様 シテこくも薄くも染川まんしゆ

を縫にぬはれた ヲキきつかう木瓜付たるはシテいつも姿の若山 ヲキ見てもゝ見あかぬは吉野の櫻のせこふし高尾の紅葉様の立姿 シテ今よきにうかれきてとの字に ヲキとの字をかさねつゝシテ幾夜思ひを駿河成 ヲキふしえに立しシテ夕霧も ヲキ残る外山の薄紅葉 シテナびけやゝゝのおさゝのヲキ露しつほりゝぬれて成ともなシテ一よ二よかさんや様 ヲキつらやゝゝシテあゝさてつらや思ひきりの菊五つ紋 ヲキすそに立波高嶋のシテおさきにゆられゝなかるゝ ヲキ身は捨小舟きしにはなれてシテ便りなや便りなひとて身をこりす定家の君の御紋にはききやうかるかやヲキをみなへしシテ萩や薄の亂れあひほに出て人に白糸の ヲキ瀧野様はだてものでシテ春も初音の空色に ヲキ霞を分てシテ鶯のヲキ梅の小枝にたはふれてシテほうほけ經の一こゑに ヲキうてなも爰にシテ玉の井玉のすだれにほのみし君も ヲキなびけかしわ木手かひの口の引つなもゑいさらさ二人ひかばなびきやれわかいが二度ない物とそなた思へはひやうたんの川流れ浮にういてきたものよしとしやるはおゝ夫もこ

ちになてんちや兎角浮世はずてんどうちんからこ
ろりの鐘のこゑたんたよかよ八與二郎衆伽羅もて
御ざれさらばや

昔大黒舞

一 御ざつた／＼福の神を先に立て大黒殿の御ざつた
大黒殿の能には

一は俵ふまへて

二につこりわらつて

三に酒をつくつて

四つ世の中よふして

五ついつものごとくに

六つ無病息災に

七つ何事なふして

八つ屋敷をひろめて

九つ小藏をぶつ立て

十でとうどおさまつた

大黒舞をみなさいな／＼

中古大黒舞

一 御さつた／＼加賀守を先に立て大名衆の御ざつた
大名衆の能には

一に俵をおさへて

二ににやわぬあきないし

三に酒を作らせす

四つ世の中ちがふて

五つ伊豆がさし出て

六つ無理成仕置に

七つ何事ありそふで

八つ屋敷を焼はらひ

九つ米がたかふて

十でとうどこまつた

大名舞を見なさいな／＼

西國順禮歌品々

一番に紀伊國那智

一ふたらくや岸うつ波はみくま野の

なちのおやまにひ／＼瀧つせ

二番に紀伊國きみの寺

一ふるさとをはる／＼爰にきみい寺

花の都にちかくなるらん

三番に紀伊粉川寺

一父母のめくも深きこ川寺

佛のちかひ頼母しきかな

四番に和泉のまきを寺

一 みやまちやひはら松原分行ば

まきのを寺に駒そいさめん

五番に河内藤井寺

一 参るより頼みをかへる藤井寺

はなのうてなに紫のくも

六番に大和の壺坂

一 岩をたて水をたゝへてつば坂の

庭のいさごも浄土なるらん

七番に和州をか寺

一 けさみれは露をか寺の庭の影

さなから瑠璃の光なるらん

(以下三十三番迄大同小異略之)

坂東順禮品々

一番に杉原十一面

一 頼みあるしるべ成けり杉本の

ちかいは末の世にもかはらし

二番に三浦の岩戸十一面

一 立寄てあまの岩戸を押ひらき

ほとけをたのむ我身たのもし

三番にたじろ下手

一 まよひしか今はさきたつひきのやつ

とりにかはるはたしろ寺かな

四番にはせ十一面

一 はせ寺へ参りて沖を詠むれば

由井の汀に立はしら波

五番にいひずみ十一面

一 かなはねばたすけ給へと祈る身に

ふねに寶をつむはいゝずみ

六番にいやま十一面

一 いやまてら立そめしよりつきせぬは

入あひひゝく松風のをと

(以下三十三番まで大同小異略之)

西國順禮順番

一番紀井の國那智、二番同きみる寺、三番同粉川寺、

四番和泉國槇尾寺、五番河内藤井寺、六番大和の壺

坂、七番和州をか寺、八番同はせ寺、九番奈良のなん

ゑんどう、十番山城宇治むろ、十一番同だいご寺、十

二番近江岩滿寺、十三番同石山寺、十四番大津三井寺、

十五番京今熊、十六番同清水寺、十七番同六はら、十八番同六角堂、十九番同かうどう、二十番ちやうしうよし峰、廿一番近江あなう、廿二番攝津そうせんじ、廿三番同かちを寺、廿四番同中山寺、廿五番播州清水、廿六番同ほうくわさん、廿七番しよしやてら、廿八番丹後なりあひ、廿九番若狹松の尾寺、卅番近江竹生嶋、卅二番同觀音寺、卅三番美濃たにぐみ

坂東順禮順番

一番杉本十一面、二番三浦の岩戸十一面、三番たじろ千手、四番はせ十一面、五番いひすみ十二面、六番いやま十一面、七番かなひ正觀音、八番はしのや正觀音、九番しくわうじ千手、十番ひきの岩戸千手、十一番よしみ正觀音、十二番しをんじ千手、十三番淺草觀音、十四番くみやうじ十一面、十五番白岩十一面、十六番みつさわ十一面、十七番出寺千手、十八番十禪寺千手、十九番おほや千手、廿番さいみやうじ十一面、廿一番やみそ十一面、廿二番さたけ十一面、廿三番さしろ千手、廿四番あまひきゑんめい、廿五番あふみとう千手、廿六番清瀧正觀音、廿七番飯沼十一面、廿八番なめつ十一面、廿九番ちば十一面、卅番高倉正觀音、卅一番

かさもり十一面、卅二番清水千手、卅三番なこし千手

忍ひくとき木やり

一やれかんかれく是見てひいた風もふかぬに妻戸のなるはかぶろで、見よ殿ではないかとのじや御ざりませぬけたをはしる鼠じやちんくからりのちんからりとうつは鍛冶の槌のをとうつたるたぬきの腹鼓たまさにきてねて打をいてなふとのこ夜明の鐘かつくつてんくちやんくすほ、ひやりつろくつろろくくろとつひやひやりつろるりちやうろかねが

秋の夜くどき木やり

一扱物うきは秋の夜の君を松虫くつわむし一よはかりはきりくす二夜もさんやに君はかうろきをいかけ中の綱こゑをかけよやあれさきのつなゑい

吉原太夫くどき木やり

一ゑひわつさりとしめかけやれおてきの歴々ほんらい國本はいなかそたちの者ちやがことし初めてよし原へ参りまして三浦四郎左がみゆへやんやくになゝ、れまして高尾の紅葉に逢ましたが吉野様と申は皆様も御そんじで御ざりまんしよ志賀のしら

玉花野にかづら唐崎薄雲棚引渡るあれから是迄ゑいや八橋様やさら／＼さつと太鼓をたのんでくどきすまいた松枝の太夫様なさは三しうさかたにまんよに小太夫まさきにかつらきせいしゆ様のやとやゆきにはすぢてもじてしなてわらてくせはなにもあたなくせのないが道理じや京のふうが千人といなかのふうが千人とお江戸のふうが千人と三千人のふうたちが寄合談合評定でつくりそだつたほこたちて癖のなひか道理じやいかなうちやうてんのとをり者のやほさんなんとも此君にあひましたくはふんふかくはなり候まいといつたらくせつになりましよかあいのやりては合點かよのものとつないよゑい

野郎くとき木やり

一えいやわつさりとしめかけやれやちうの歴々ほんらい國本はいなかそたちの者なるがことしや初めてさかい町へ参りまして中村勘三が芝屋へやんや／＼にさられまして山三の君に逢ましたるおくめ様と申は皆様も御ぞんじて御ざりましよ藤井あつまに市村中村玉川流れわたつてあれから是迄

ゑいや小ざらし様やさら／＼さつと太鼓をたゝいてはやしてすまいた山川のゆき様情の左近に左せん様おき／＼におつるに掃部様のやとやかへりはすじてもじてしなつてわかつてくせはなにもくせはあだなくせのないが道理じや京の役者か千人と大坂の役者か千人とお江戸の役者か千人と三千人の役者達が寄合談合評定でつくりそだつたほこたちて癖のなひが道理じやいかなうちやうてんのとりもものゝ錢なしなんとも此君にあひましたらばふんふかくはなり候まいかいやたゞしんきなり候まいといつたらくせつになりましよかあひのはやしは合點かよのものとつないよゑい

春駒くとき木やり

一やれおいかけはやさぬかおいかけ中の綱しめて見よさいこくたゝらのひやうしにてとろ／＼ととろり／＼とひやうしをそろへて頼むぞゑいさいめや／＼わかい衆よいさむ心は春駒の立とゝまらぬ風情して扱春の日に春駒は庭の櫻につなぎとめ駒がいさめば花かちるいさめは駒が駒がいさめは花か散る花はちりても年を経て又くる春はめを出す思

へば人間一盛りけでんの内をくらぶるに夢まぼろしのごとくなり狩場の鹿と申するはあすをもしらぬ身を持てたはふれ遊へ夢の浮世にをいかけ中の綱いかう見事ようそらふた四つのつなゑ地えいやゝゑいやゑやこのしもさか小六じやゑ上えいとこせの四つ綱ゑや地ゑいやらさのえい

きりくすくどき木やり

一やれきりくすなくべき野では鳴もせで君と我とが其中は梅に鶯花に小蝶と申へしひよくれんりの中成にあひきれくすと鳴時はなくやきりくすの心こづらのこんにくさをいかけ中のつなから見ん事よふそろたやれなかのつなよへ

敷物揃くとき木やり

一やれをいかけはやさぬかやれ十七かくことしはじめて家づくりはふは白かね軒こがね束きり窓せにすだれせにのめ事は光りかいやくばかりなり七まと八まと九の間にしいたる疊はどれくぞうんけんべりに錦べり高麗べりをばまつさきに村雲立てぞしかれたりあまりてたらさる所にはしいたる皮は何々ぞ毛氈虎の皮豹の皮をはまつさきに毛筋

を揃へてしかれたり三間通りし床の間にかけしはぞんはどれくぞびしゆがだるまにとうはりたけとよ其比都にてはやるもつけ和尚のあそばした墨繪の観音三幅一對さらりとかけ秋も半の事成に北風そよとの吹ければ金の軸との白木の軸とくのともうちはさなからきやうしやのきんのしらふるもとのつなよへ

島くとき木やり

一やれをいかけはやさぬかをひかけ中のしめて見よ南をはるかに詠れば南はいつも夏に似てすわまに池をほらせつゝ池の中には蓬萊ほうじやうゑいしうとて三つの島をぞつかせつゝ島より陸地を詠むれば唐木を以てふな橋をかけ橋より池を詠むればとうなんくわちよかうつば船浦島太郎が釣の船五色の糸にてつなかせてじやうらくかせうの風ふかばみぎわへよれてつないだはいつも夏にはおてんとうたかい御さゝぬおいかけ中のつなから見ん事よふそろたやれ中のつなよへ

楠きくとき木やり

一やあれをいかけはやさぬか此わけくといて聞すへ

つらなる有様はゑいもろこしのしんの始皇帝咸陽宮にもおとるまじゑい天人のやうがうも日夜朝暮にありぬやといきやうくんじて花もふりゑい咲散花か櫻田やいらかをならぶる家作りゑい天下のこらぬ諸大名君を守護し奉るげにゆゝしくぞ見えにける同じくお城の山づゝき松に小松を植添て千代を重ねるためしかや秋にはあらねど紅葉山ゑいあたりの川を詠れは留りさだめぬあしおぶね出入船の數々に波の船歌うたいつれ歌のふしこそ面白や天下かゝやくお旗本おわかい衆のちよる達の肩にかのこのんだら筋腰に浮世のぬめりすぢのふ腹筋や腹いたやゑいゝさるの浦濱にふたご山とて又なふあるになせにそなたにや子かないぞからの音は隙もなしゑいさごにねぶる水とりも人おもさらにはゝからずつばさをならべてむれゐたりかんこもこけふかふして鳥おどろかすとも云つへしやらんゝめでたののんゑいそりや若枝

若衆くとき船歌

一ゑいさきの月の十八日にくわんをん参りしたれば坂中のゝまつ坂の坂中であゝよひ若衆にひたと

あふたの我もわかい時は松に下り藤五年も十年も松に下り藤かいつきひつ付はなすまいと思ふたれば人の妻なればのいて脇へしやごんたしやてんはちわざくれ浮世に壹分五厘一寸さきは闇の夜命てうすのこにはかりかへしやのなにも藤六平六へのしなりにあかせゝませはれてしぬるゝ今もどる一期じやそもじかく思へばのむゑいこの菊も

鳥さしくとき船歌

一やんらめでたいの春の梢にひよとりとまりてさえつるやうは天氣よかれがな扱もよかれがなこにちよかれがなしゆくしやかもくしやかさんはやさうたるちゃんはうゝともさへする所をさいとりさしのさいとりほうかさゝばやと思て竿は短かし梢は高し前成小石で鳥をはらゝはつと追立て飛所をちうでさいておつとつたこしのなわへつくんたるちんなみちぎりきだんだらひやうしねぢきつたにきりかうやくひやうしのふくたりひやうしの孫の彦のやしやら子のひまごか小鳥をさいた所を是をおごろじやたかのか程めてたののんゑいそれ若枝もさかゆるのんゑんゝはもし

おもひ物くとき船歌

一 ゑい重いものにとりてはしうの御恩に父母のおん
しめり茶うすにおろの人の乗物ちやうせん人の長
刀下手の謠に上手のくすしゑい雪の笠まだも御ざ
るよぶせう者の立居兎角浮世はかるいがましよお
もひはころせんしづむゑいおもひはしづむやんさ
かるいがましじやいのんゑい

琴の歌品々

初組ゑてんらく

云カ

一 ふきと書も草の名茗荷と書草の名ふきじざい徳あ

云カ

りて冥加あらせ給へや

一 春の花のきんきよくはくわふうらくにりうくわえ
んりうくわゑんの鶯は同じ曲をさいつる

一 月の前のしらべは夜さむを告る秋風雲ゐのかりが
ねはことちに落るこゑく

一 長生殿の裏には春秋をとめり不老門の花には月の
かげをそし

一 かうき殿のほそとのにたゝずむはたれく 朧月夜
にないしのかみ光る源氏の大將

一 たそや此の夜中にさいたる門をたゝくはたゝくと

もよもあけし霄の約束なければ

一 七夕のへいふうもおとゝはなとかこいざらんらり
やうの袂もひかはなとかきれさらん

二組千鳥の曲

一 梅か枝にこそ鶯は巢をくるゑ風ふかはいかにせん花
にやどれうくひす

一 花ちる里のつれくたへくの琴のね花立花の袖
のかに山郭公おとづるゝ

一 思ひ寝の夢の間枕に契る明方さめては本のつらさ
にて泪の外あらじな

一 さよふけて鳴衛何を思ひあかしね浮世を須磨の恨
みにて我とひとしき泪かは

一 しらま弓のまゆみのそるべきはそらいで八十のお
きな恋に腰をそらいた

一 美保の松風ふきたへて沖津浪もあらじな水にうつ
らふ月ともに詠めについくふじさむ

三組小車の曲

一 心づくしの秋風に須磨のうらはの浪枕ころも片敷
獨ねて夢もむすはぬよなく

一 古里を遙々と隔てゝ爰に角田川都鳥にこととはん

君はありやなしやと

一夏の夜の曙に夢をさます時鳥白妙に見ゆるは月に
さらす卯の花

一きりにたゝすむ小車やつしてたてておぐるまの人
目忍ぶの契りこそふけて寝やのかよひぢ

一あすか川の水上を硯の水にせき入て書ことの葉は
つきましやけふもくらさん命かや

一契りし宵のたそがれしるべふかきそらだきとめゐ
る方の萩の戸をひらくや袖の移り香

四組住吉の曲

一天下泰平長久に治る御代の松風雛鶴は千とせふる
谷の流れに龜遊ぶ

一人しれぬ契りは浅からぬ物思ひつゝむとすれど紫
の色に出るぞはかなき

一はかなくも隈なき月をいかで恨みしとにかくにわ
が袖はたえぬ涙の夕暮

一花のえんの夕暮朧月夜に引袖さだかならん契りこ
そ心浅く見えけれ

一住吉の宮所かきならす琴のね神の恵に逢そめて過
し昔を語らん

一秋の山の錦は龍田媛やをりけん時雨ふる度ごとに
色の増ぞあやしけれ

五組朝顔の曲

一うらめしや我縁薄雪の契りか消にし人の形見とて
泪ばかりや残るらん

一ひよくれんりのかたらひも替れば替る世のならひ
さりとは恨むまじ昔は情ありしを

一若紫を手につみて深き心の色ます長き契りを結ひ
しも草のゆかりと知べし

一しのゝめのまがきに露をふくむ朝顔玉のかづらた
をやかにかゝるや花のおもかけ

一世々の人の詠めし月は寔のかたみぞと思へばく
涙玉をつらぬく

一吉野川の花筏さはさす隙もあらじないわなみ高き
山風の四方にちれる花の香

六組葵の曲

一雪のあしたの嵐は梢の花の散る風情名残惜しきは
とにかくに待えし君の歸るさ

一浅間しや我身は雲ゐのかりの夕霧に音しめらるゝ
思ひをばいつか世にかわすれん

—まどろめばおもかげをしけくともじか夜に時鳥
おとづれて初音に夢ぞさめける

—詠むればいとくだに戀しき人の戀しきにくもらば
くもれ秋の夜の月に恨みはあらじな

—峰の嵐のかよふか谷の水の流れを寢覺にきけば松
風は琴の音にたがわじ

—あふひの上のときめき加茂の物見の折から車争ひ
つれなきは深き恨なるへし

七組武藏野の曲

—雲の上の詠めは有し昔にかはらねとみし玉だれの
内ぞたゞ懷敷やゆかしや

—面白やさみだれ花橘の匂へり時鳥をとづれて短か
夜なれどねられぬ

—中々に初めより馴すは物をおもはじわすれは草の
名にあれば忍ぶは人の面かけ

—思ひ餘りせきかねてうらみぬる夜の涙は床すさま
じや獨りたい枕に戀ぞしらるゝ

—武藏野に行き暮て月を詠めて草枕戀しき人をゆめ
に見てうたゝねに袖しぼる

—軒をめぐるてんてき琴のねにたとへて七ねんのよ

るの雨曾てしらぬ夢の世

八組てかへの曲

—數ならぬ身にも唯思ひもなくてあれかし人なみな
みの薄衣袖の泪ぞ悲しき

—あこがれて思ひ寢の枕にかわす面かけそれかとて
かたらんと思へば夢ぞさめにける

—しら雪のみゆきのつもりとは降ともあくまじや
もろともに寢亂れがみのかほばせ

—引く人はそれくあまた有ともつま琴にもとの心
かはらずば琴ちに落よ秋風

—拍木の衛門は鞠をとんと蹴たれば鞠は枝にといま
りければ梅ははらりほろりと

—さりとてはつれなや君が袂のあやにくになびかぬ
はてがいの虎の引綱

九組くいなの曲

—桐壺のかうゐのひよくれんりの契りもさためなき
世のならひとて夢のあひだぞ悲しき

—短か夜に夢さめておもかげを夏蟲の身より餘る思
ひをばいかで人にかたらむ

—秋の夜のふけゆき月はにしきにかたふく松風や浪

の音鹿の聲を淋しき

一 道しるべせし小ぎみの中立にひかれてゆくゑまよ

ふ空蟬のきぬのかほりぞ床しき

一 たそや今宵さよふけて芝の戸ぼそをたゝくは尾上

おろしの音づれかくいなにつぐるこゑく

一 青柳を片糸によりてなけや鶯うぐひすのぬふてふ

かさも梅がえの花がさ

十組須磨の曲

一 須磨といふも浦の名明石といふも浦の名さらしな

の月ともに詠めていさやかへらん

一 春によせし心のいつしか秋に移ろふ黒き赤きのま

せの内によしある花のいろく

一 きりくすよすがら何を恨すだくぞ我も思ひに絶

兼ていと心亂るゝに

一 中く人にをは恨むまじうらみじとにかくに數な

らぬ浮身の程ぞ悲しき

一 三五夜中の新月くまなきぞ面白やちさとのほかの

人までもさぞや詠めあかさん

一 深更に月ふけて車の音のきこゆるは五條わたりの

あはらやの夕顔をしるべに

鞠つき歌

一向ひ通るは甚太じやないかてつほかつて小脇指

をさいてどこへ御座ると問たれば雉子のお山へ雉

子打に雉子はけんくほろく打よつて御茶參れお

たはこ參れお茶もたはこものそみじやないが是の

娘にちよとほれた晩に參ろがどち枕東枕に窓あけ

て窓はきりまど戸はあり戸七つ下りくをろり

くと手をやれば爰はどこく爰は膝さら爰は内

股爰は情のかけ所情かけての其後に親に三貫子に

五貫ましておばくにや四拾五貫四十五貫の錢金て

たかいまめかふて何にしよやすい米こて舟につみ

船は白銀鱸はこがね綾や錦をほにかけてあすはの

ほろぞつんつゝつのつの國へく

盆をどり歌品々

一 盆々々にをどらぬ者は牛の生れか焼蛤か乞食小女

臍かおそろしや

一 千松様へをどりをかけるで、請とりやれおまん様

く

一 眞丸御座れく十五夜の月の輪のことくく

一 もふはやかへろいざさらかへろ小雨のふるにいざ

かへろく

一 盆々くも今日明日ばかりあさつてはよめのしを
れ草く

らうさいかたはち昔ふし品々

一 山の端にすめは浮世に思ひのますに月というやれ
山の端に

一 したれ小柳亂れて見せうつれて心のうらやまるゝ
に

一 こがれくゝて露ともきえば跡はとにかく君頼む

一 あまの釣船身はこかるれど甲斐もなき世の浦にす
む

一 戀をはじめた人うらめしや今の我身のつらさゆゑ

一 頼みかけ置結ぶの神のちかひかわるないにしゑに

一 神や佛を恨むはりんゑくわこの約束せひもなや

一 逆もゑんない中にてあらはなどやはじめのつらか
らぬく

一 思ふまい物心をつくしよそに心のある様を

一 月のとひ来る其よなくは思ひやられて袖しぼる

一 出る月日の短じかの命絶ぬ思ひのうらめしや

一 思ひ出す夜は枕とかころ枕ものゆへこがるゝに

一 はなれくゝのあの雲見ればあすのわかれもあのこ
どく

一 君はくれなひ我綴衣モテコロモ八重につゝめと色に出る

昔小六ふし

一 小六ついたる竹の枝本は尺八中か笛うらはしはた
んほんなあよをほん筆の軸竹小六

昔ほそり

一 忍ふ細道に松とくるみを植まい待る其身はくるみ
でもなし

櫻川のふし

一 ぢしゆの櫻は散かちらぬか見たかの散やらちらぬ
やら嵐こそしれ

はやり長歌

一 今の世のおためをいひてはりまわる伊丹や曾根か
伊豆ならばかみ下ともにうるはひて末繁昌わざわ
ひも忍ふ遊びあるましや阿部か伊井なしよかるら
んわれて退たる能登釜を本のかまどにいなをして
多くの米をもちりあけて大和の國を加増して讃岐圓
座をさしかへん備後表に修理をし螺貝よりも音高
き石谷等をめしおろし町のしをきをさせんより惡

臣ともに相添て天下の仕置させよかし併も人民の貧て利を持公事沙汰は石谷なくていかせん世間の儒者の見せしめにしつてしらざる道春をうつは船に遠流して一文銭か集りてあせん等をゑり出し大和言葉をいひかけて天下の仕置するならば君長久に成べきにいやしき下の心にも劣りはてたる臣下ども今の惡臣其儘にあらためなくてはなるば正罰いかい人罰の其怨念や報ひきて如何成天魔出來り天下を奪ふ其時は富士の山程あつめ置かね白かね何ならす利錢商ひ分別かおためたてして人民を飢饉かし等なす物を改めかへん仕置せよ其惡臣は主君のためにはならで怨ぞかし忠臣等と云事は天下安穩政民の苦みなきやうにすること君のをためなれ天下安穩ある時はあめか下の錢金は皆將軍のものぞかし上もよかれ下よかれ下がよければ上もよし上のゆがみを下として直さん事は愚なれさはありながら民よりも上を養ふ道なれや十に一つも誠あれ

さよの中山長歌

我等が以前わかい時さよの中山とをるとではらみ

し女臍に行逢て一夜なびけと手を引ば一夜なびくはやすけれど我等もにせに妻持てからかほかをのにくしみに刀試しに仕り刀の刃から子が生れそこへおしやう様立寄てさよの清水でとり上げて衣のすそへかひくるみ門前人に預け置門前人のやさしきはあそこや爰のもらひ乳で十三迄もそだて置明る十四の春の比生れぬ前の父じややら枕神にもお立あるおやの敵か取度は京で一番とぎや様一年ときして貳年目にどこのいつくの人じややら刀とげとてもて御座る刀はよいが中かけた何をためして中かけた皆も御存し御座らうが我等が以前わかいをりさよの中山通るとではらみし女臍に行逢て一夜なびけと手を取ば一夜なびくは安ければ我もにせに妻持てからかほかをのにくしみに刀試しに仕り其時刀の中かけたといて下されときや様といておましよは安けれど五日三日に出來ましょか五日三日によもできじ三十日過て取御され三十日過てとりにきて我等が以前ゆた事を耳に能々聞付て親の敵とある程に三寸やるまいのがすまい思ふぞんぶに敵とりおやの御墓へ參りては香をもりては

花を立是でうかみやれおや様さよいよゑい

なげふし品々

一 こんど御座らばもてきてたもれ伊豆のお山のなぎの葉をお山のないうの伊豆のお山のなぎのはを

一 染てくやしきわせ紫や本の白地がましじやものしら地がなもとの本の白地がましじやもの

一 こゑはすれども姿は見えぬ君は深野のきりくす

深野のな君は君は深野のきりくす

一 あはれ成哉梅若丸はしらぬ東に隅田川東になしらぬしらぬ東に角田川

しな物の歌

一 夕べのくしな者は今宵はどこのおとまりじや播磨の國のしよしやむしや寺のおつきやかおとまり

しや

やよやぶし

一 昔しは松の葉にさへ四五百人も寝たが今は御看略でくやよやうゝ只ひとり

はやり物の歌

一 はやり物は何々ぞかうきでん十二段あふく新田鎧かんなべらほうく

さんや源五兵衛ふし品々

一 源五兵衛どこへ行くさかい町のまちへ高いさじき

から樂屋を見れば役者かわいや骨折じやる源五兵

衛

一 源五兵衛どこへいくさんやの町へ高い土手からた

んばを見ればおほひかいてが打連立て布引てる源

五兵衛

一 源五兵衛弟はさんちやの町へ高い二階からかしわ

た見ればけんとんかわいや身をさらする源五兵へ

一 源五兵衛おてきにくせつかてきてやりてあけやは

おろかな事よいつもかはらぬつなきとてんとあの

や源五兵衛はおふりやるる源五兵衛

一 源五兵衛おてきが道中見ればきむく白むくひざや

の小袖細小袖をかふるにもたせあけや座敷て小歌

をやりやるる源五兵衛

一 源五兵衛さんやへだてしていきやる金鍔大小びろ

どの袴細縮綿帕なんぞ土手やたんぼはなげぶしや

りてぬめるる源五兵衛

一 源五兵衛あげやで上瑠璃語る又もあるまい上瑠璃

御前十二段る源五兵衛

一源五兵衛おてきのだて帯見れば幅が二尺に長さか

三尋中はしんくの八つ打てゑ源五兵衛

一源五兵衛つけたる定紋見れば花は吉野よ紅葉は高

尾松は唐崎霞は外山替りあるまい我小袖ゑ源五兵衛

替り源五郎ふし品々

一新すどこへ行東の方へ高尾山から吉野山見れば外

山勝山かく山唐崎志賀の夕霧

一まれにくるよのさしある宵はつらき思ひは度かさ

なれど誰も人目のしげなればふくるつらさを

神ぞ底からわする

山野

一春は吉野よにはひは花野さわへすしき八橋かは

る高尾外山に薄雲見れば雪のはだへにとむるは初

音對馬の伽羅の香袖の香

サンシュ

一ふけてもとりにかへてのお手ひくは名残の別れの

辻にさらばまたやと頼みはおけど袖の泪がはらは

らおくられくさのきぬ

一袖の泪のかこつけ松よ雪のはたゑにそひ寝のつら

し歸るあしたの名残のかりかねしみてあふよの風

をもちとふ引合の屏風

丹波

一幾世かはらぬかこつけ松も春は一入色香もまさる

夏はすしきそひ寝のつし秋はあふよの名残の

かりかね冬はあふ夜の風をもちとふ引合せの屏風

のほんふし品々

一君は川向ひ我は川前よ立てならべてみた

はかり

一君はみやまのあの遅櫻我はさきたつしば

櫻

一君の姿は眞立花よなれてそいたや下草に

く

一君はみやまのふりつむ雪よ我は谷間の薄

氷

一花にたん尺たが又つけた枝をたをれば花

が散

一小紫とは誰名を付た色にそみてはうへが

ない

一あのやおてきをたとへて見れば櫻花をは柳に

さかせ梅の匂ひのある君しや

一 櫻のこすへに鳴鶯をくさすなさわるなくやさしきにく

一 何とつゝめどいろには出てく顔に紅葉かく散かるく

一 戀の道には浮名がたつにくひらにおきやれのくせいげん坊く

一 君は他國へ身は武藏野にくとまる心をくおもひやれく

一 君と我とは川瀬の螢く人につゝめどくもへ出るく

一 戀てしんきや身はかげろうのくいつかめぐりてく君にあをく

一 色にださねど我身の戀はく袖の泪でく人かしるく

一 さいた櫻をなせ詠めぬぞく春のしるへにく咲花をく

一 様と我とは二葉の松よく千代をふるともくかはらねばく

一 向ひとをりやるお若衆様にく餘り言葉のかけやうかなさにく紙かおちますく鼻紙がく

一 行ば極樂歸れば地獄くからたやつしのく吉原よく

一 ながい刀もさし様か御座るく後高にてく前下りく

一 てきと見るならばやくらい切るきくてきじやない物く君じや物く

一 てきにわかれて土手さをくれはくなみだがこはれてくうれいつく

一 でつちもてこいすり鉢笠をくこさかぶさるく獄門へく

一 やいさ同類いさをすまいかく藤や太郎吉がくやかはねく

一 やいさおゑんまたすけてたもれ是さおゑんまたすけてたもれ迷やりらばく吉原へく

さわき歌

一 おもふ湊にしつちやがさおもかちとりかちほんとたかくもおせさくおほさく夫もこつちで合點じやこのきうもひとつしてくれきういわうてさんときうくのきうこの船漕寄て忍びどんふり笠でまかき迄はきたれと見つけられてはどうもな

りませぬ了簡至極もないこんだ

「すい／＼いまごは見付よりから尻馬引寄しやんふらりしとうま／＼かいと打乗て大門口へぬつと入ちや／＼の二階へくわら／＼くわくわら／＼くわつとかけあがりて石州流の扇を抜なかのま三間はらりつとひかいてあけや歸りのよねたちをひ／＼かりくる／＼りつとまねかれけるんな五つ時分にまかき迄きたれは見付られてはどうもなりませぬしててん／＼まご太郎さらばやおつとせい了簡至極もないこんだ

京はやりふし

「花見車をひきやるはよいかよふたふりして手をとるな

浮世はやりいそべ殿ふし

「きつねくわい／＼こん／＼殺して人をまわすたはこぐさふうを能してぬめてころんでせうはがたはこをめしませうかいや／＼橘屋かよかろか見よか見まいか勘三か芝居見とふてはいりとうてそつく／＼／＼するならはいりやの一ふくしてから入ませううつてん／＼／＼拍子のりたる太夫かふり

まさつめてたいさわりじや

かわりせうかなふし

「破れやくわんにはん茶を入れてかけた茶碗にほのな
い茶筌薙屏風にむきはら枕ふすまふとんにへりなし
ごぎてくるか／＼と待夜はこいてびん不男や喉
すばりしまかみの／＼よい是々々しまかみのそつ
こでうけたせ三百文

のつちりふぐじるふし

「親はのつちりふぐじる子はのつちりふぐじる／＼
親はのつちりふぐじる子はのつちりふぐじる／＼
のんほふくじるののほふぐじる／＼とふがよいか
すがよいちん／＼はかすて／＼んすつたりむけたり
はげたり／＼そりやさてなよいしるめされたそり
やさてよい是新町のほうしゆんかりこ者かおもわ
くしやいさみでの長市坊長市おき／＼やれおかたも
き／＼やれ是の娘がきがそれた長市坊なるもならぬ
も目もとてしる今のめもとはなる目もとてうし
こい

谷中うわきふし

「谷中の削り廻し教へに任せて引南無妙法蓮華經う

わくくくく佛になるともくわんくわつ佛この
すき申たさ夜ねふつ申のみたくなめかむけん
のかまさ落る地獄のかまぼこ玉子の肴でのめへせ
おさへたさわつたおつときた御免せ五左衛門たか
へ長左衛門おいかけ中の盃よふたら大事かやあれ
君のつけさしのめさおまちや肴をしよ

御門徒與五平ふし

一 お與五平かおきみたんだくおすのこおきみちり
くおかますのおふくらたおちみたゝりくおあ
ぼとこおふんでおぼとこたけべいでおほこちよん
おとしびしやおふやらのくおおうはおふや
らのおそんれはえいおふやらのおそんれはえい

大坂からすみふし

一 大坂天満でんつるほうかてんねりとうせんせんか
しすみ合近江與茂四郎引か子孫與三郎かひよつと
にきりたいた下おりこりく同じくならはかわし
やませく

吉原しよくりしよふし品々

一 とてもかなわぬ浮世としらばとてもゑならぬ戀路
としらば軽くおこし戀の道しよくりしよ所々くり

しよあいよの

一 せうか畑に茗荷を植てことしや子をとるおのこと
るしよくりしよ所々くりしよあいよの

一 あふはわかれと兼てはしれどあふはわかれの初め
としれど忍ふ泪は袖しほるしよくりしよ所々くり
しよあいよの

一 神や佛に祈るはおきやれく過去のめん果は是非
もなやしよくりしよ所々くりしよあいよの

一 つらき吾妻のはてしに我はく角田川原の流れす
るしよくりしよ所々くりしよあいよの

一 君に思ひは信濃路淺間く胸にたく火はたえやら
ぬしよくりしよ所々くりしよあいよの

一 忍ふ其夜の時雨は嬉しくぬれてくるまの音もせ
ずしよくりしよ所々くりしよあいよの

一 そちとこちとて二世迄をふといゝてものして起
請迄かいて今はきしやうの音もせずしよくりしよ
くりしよ所々くりしよあいよの

一 そなた思へば雨降よはもそなた思へは風吹夜半も
たどりくるぞよなかの道しよくりしよ所々くりし
よあいよの

右此双紙者、好ニ今様一人翫之畢、且雖ニ我不好
レ此、至ニ老後、而昔懷敷節爲可レ披ニ見之、斯集冊
訖、

延寶四丙辰八月二日

文政四年辛巳三月廿日寫竟 山口觸山

文政辛巳季春倩山口氏筆

七十三翁 蜀山人

蜀山人

筆者觸山又號柳塢と俗稱寛之助

下谷新屋敷住 柳亭 記

淋敷座之慰終

諸國盆踊唱歌

此さうしは寛文の頃後水尾院諸國に勅して盆踊の唱歌を集め給ひしものなりとて今より二十年ばかりさきに友人の許よりかりえたりしが其刻は何のこともなくて寫しとどめず其のち見まくほりすれども彼友人も亡たれば更にせんすべなかりしが今又不意此寫本を得たり御撰なりといふがたいひ傳ふるのみにてその虚實は不知

いたこ出嶋云々の歌はむかし見しさうしには無し
後人の書加へしものなるべしそのほかもなほ近く
おもはるゝ歌ありよく味ひて新古を分つべし

文政己酉六の朔

柳亭種彦

諸國盆踊唱歌

○山城二十五

めでた／＼のわかまつさまよえだもさかえてはもし
げる

ことし御しやうらくうへさまはんじやうはなのみや

こはなほはんじより寛永中小町踊の唱歌な
還魂紙料にくはし

おやこつまとも田を植終ひ神に千歳のたねをまつ

こひとたがいふたさゝはらこえてつまにこまつはみ
いカ はカ にカ

なぬれた

ござるその夜はいとひはせねどくるがつもればうき

なたつ

わしは小池のこいふななれどなまづを鯉 鮒とこはいやで

そろなまづ男とはぬめり
男のことなるべし

しのぶみちにはあわきびうゑなあはずもどればきび

わるい

こなたおもへば千里が一里あはずもどれば一里がせ

なり關東にても今うたへり
あふたその夜は千里か

いとま下され後日はまたぬあすはくろ日でひがわる
い

こひにこがれてなくせみよりもなかぬほたるが身を
こがす

のみやれ大黒うたやれえびす夷ことにおしやくは福の
神

いくよながかれこのとのゝみそたちてわかなつむ
さまはさんやでよひ／＼御ざるせめていちやはあり
あけにさんやは三
日月なり

たかひ山にはかすみがかゝるわしはそなたがめがにカ
かる

しゆすのはかまのひだとるよりもさまのきげんのと
りにくささぎ娘のをどり歌に
此うたなもちひたり

ふねは出て行ほかけてはしる茶屋のをなごは出てま
ねく

まねけど口へよらばこそおもひきれとの風がふく
さまのねすがたけさこそ見たれさつきのにさくゆり
五月野

のはな

かきはなけれどかきはなげかけゆすらばおちよ心つ
鈎

桃

れなや山もゝよ

こなたおもへばのもせも山もやぶもはやしもしらで

さく

いとしとのごのめもとのしほを入れてもちたやはな

鼻紙

みに

こひといふじがありやこそきたれとばのこひづかあ

鳥羽

戀塚

きの山

さてもよひこやくろ木賣のむすめこひのおもにかか

つぎつれ

山にさくはなあらしがどく毒よわしはきみさま見るが

どく

おはら木やめせく黒木さゝをめせ

こくもうすくもきこしめせく

○大和二十六

としたちかへる春なれや木のめめだつ花もさく

千代の松がえみかさのもりにあさるかすがのみかけ

まつ

さまといとまのすひつけたばここひがますやら火が

煙草

わかぬ

梅と櫻とよしのへいたら梅はすいとともどされた
ひがし山のゆきではないがあれがゆきかやさくらば
な

一に當麻の糸掛さくら奈良の都は八重櫻糸か

小重

櫻

枯

ござれそめたらさまきそめたら道のこぐさもかるゝ

ほど

よしの川には住かよあゆがわしか胸には戀がすむ

鮎

明

陸子

わしはやまがら餌におとされてあかりしやうじのう

ちにすむ

ひとに物いみあぶらのしづくおちてひろがるどこま

でも

わかいせなごのぐわんかけるのは神やほとけもをか

しかろ

さまにうらみはみしまのこよみいたてなにしよにそ

うか

はぬから曆こゆりとうたふなるべし細字の文を三

はな島曆にたとふることいとふるく見えたり

はなのさかりをこなたでしまふたどこをさかりとく

らそやら

ゆうべよんだるはなよめごけさはむけんのかねをつ

く解しかた
き歌なり

はなは一枝をりてはふたりわしはどちらへなびこや
ら

ひとり山みちものすござるはやくこゑだせほとい
す

なさないぞやけさたつきりはかへるすがたを見せ
もせん

きじのめんとりすゝきのもとでつまをたづねてほろ
うつつ

月よかげにもほしたき袖をぬらしたよ又しぼるほど
さまよあれ見よあの雲ゆきをさまとわかれもあのこ
とく

おもひなほしはないかよさまよとりはふるすへかへ
らぬか

人めおもはずひとさへいはにやおつてきしよぞやた
つじまを

そうてそひなへとのごもあるにそはでおもひのます
もあり

おつきさまさへこひぞよめさるこゝでまでとのくも
かげに

てふよこてふよなのはにとまれとまりやながたつう

きなたつ

はやるかんざしかみかたちよりすぐな心がうつくし
い

○河内二十五

きみは八千代にいふね神のあらぬかきりはくちも
せん

ことし世の中いねかりそめて神ときみににかさねも
ち

山家なれどもわがふるさとはしばのいほりもなつか
しや

山家くゝとあしげにいやる色のよいはな山にさく
おやがかたおや御ざらぬゆゑに人もあなつりや身も
やせる

人はけなりやさくはなれどわれはこかげのしほれ
ぐさ

さまとわしとは山吹そだちはなはさけどもみはのら
ぬ

不二のすそのゝひととすゝきいつかほにでゝみだ
れあふ

ひとがいひますこなたのことをうめやさくらのとり

く

わしは谷水出るはでたが岩にせかれておちあはぬ
なにをなげくぞ川ばた柳水の出はなをなげくかや
さつき雨ほと戀しのばれていまはあきまのおとしみ
づ

うめはにほひよさくらははなよひとは心にふりいら
ぬ

あめのふりでにながたちそめてあめはやめども名は
やまぬ

おもしろいぞやいまさくはなはのちのちりばはしら
ねども

ひとの事かとたちよりきけばきけばさしなはわしが
こと

あわのなるとに身はしづむともきみのことならそむ
くまい

こいの山吹なさけのあやめあきのかくれさしほれぐ
さ

さまとわしとはうちごみやなぎうけどしづめどもろ
ともに

おもうてこひしてかなはぬ時はいねのはむすびして

見やれ

こなたおもふたらこれほどやせたふたへまはりがみ
へまはる

いちやおつるはよもやすけれど身より大事の名がお
しい

いとまちやといふてさしぐくれた心とけとるとき
くじを

あきもあかれもせぬ中なれどいとまやりますおやゆ
ゑに

かねがなるかよしゆもくがなるかねとしゆもくのあ
ひがなる

○和泉二十一

千とせにあまるしるしとてきみがよをへるはるの松
がえ

こなた百までわしや九十九までかみにしらがのはゆ
るまで

ひよ／＼となくはひよどりなかぬはいけの友におし
鳥つれてゆく

な／＼つさがりて田のくさとればのばのつるかやなみ
だかや

こゑはすれどもすがたは見えぬきみはみやまのきりくす

さまはけなりやはそいとつむぐわしは山家のふしつむぐ

ひとはわるないわが身がわるいやぶれるまでわがわるい

あさはあさばし夜はまたよばしひるはのばたのみづをくむ

かせがもの云やことづてしよものかせは諸國を吹きまはる

をつとたがへすむすめはかせくつ^妻まはせどへ出て米かしぐ

よめをかあいがれよめこそかゝれむすめ他國のひとのよめ

もみじふむしかにくいといへどこいのふみかくふでとなる

たづねてござれこひしくばわしはしのだのもりにすむ

つきようたてややみならよかるまたぬまにきてかどにたつ

さまにもらふたねつけのかゝみわれはこいますおもひます

ごせをねがやれぢさまとばさまとしよりこいとのとりがなく

おちよくとおとそとしやるさるの木のぼりおちやせまい

おまへついしよかひとこといふかおちやあらしにまたきたか

まつがとのごで子をうめばこそ山にこまつがたへませぬ

よめをくとめをそしりやんなそしるわが子も人のよめ

むかしおもへばうらめしござるなせにむかしはいまないぞ

○攝津二十二

ことし世がよふてほにほがさいてとのも百姓もうれしかろ

おやはこの世のあぶらのひかりおやがござらにやひかりない

ひとははなりやおやさまふたりわしは入日のおやひ

とり

おやといふ字を繪にかいてなりとはだのまもりとお
がみたや

うたのかへしは二度こそかへせ三度かへすはいなも
のよ

山をとればいばらがとめるいばらはなしやれ日が
くれる

いとしかはひ子にたびさせおやようゐもつらいもた
びでしる

心たんきでわしや國をでゝ今はならはぬしよくをす
る

はんきおなごは心をおきやれどこのいづくでかたろ
やら

はらのたつときうしにかはほしやみづに心をすゝぎ
たや

鳥もかよはぬみやまのおくにすめばみやこじやのよ
とのよ

野でも山でもお主さまよかれおしゆのおかげで世に
出る

物をいやるないやくすになるいはでつゝめばくすも

ない

ひとをつかはし川のせを見やれあさいせにこそもが
とまる

おれをいふとてとなりをおしやるはまのまつかせう
らをきけ

ゆめになりともあはせてたもれゆめにうきなはたち
やせまい

さまがわるいかわがあしかろかねたむ心はすがのね
か

おもふて御ざるかおもはでくるかおれが心をひいて
みるか

おだい所のれんじのまどに月と書たはまことかや
むねでくるしさ火はたくけれどけふりたゝねば人し
らぬ

あめのふりでに名がたちそめてあめはやめども名は

やまぬ

うきなたゝせてなせきみそはぬ人がさますかわがい
やか

○伊賀九

千代もながかれこのきみの老木の松はさかへゆく

たこくへだてゝ海山こへて見すこゝろはかわるまい
まつになりたやありまの松にふじにまかれてねとご
ざる

さいたさくらになせこまつなぐこまがいさめば花が
ちる

おさなじみにはなれたおりはおきのろかいがおれ
たよな

ねたらよござるあを田のなかでねたらはなさくみも
のりて

つばめものきの住家にかへるきみはなにゆへかへら
ぬぞ

見れども見へぬおきの船こちふくそらをねやにま
つ

ふはく小川に子がすてゝあるひろうてそだてゝ花
がさく

○伊勢五

かけてよいのはいかうにこそでかけてたもるなうす
なさけヤアレ、ヤアレく

つとめすりやとてわこれのようなやばなしやくすり
やあしもする

鳥羽でさくはなヤアレ女郎は大坂しんまちよヤアレ
ヤレくさけは酒やに茶は茶やにヤアレヤレく
しん中しましよかかみきりましよかヤアレかみはは
えもの身はだいじヤアレヤレく
駒のやせたに高にをつけて是でおりさかよ鈴鹿の山
をしかも月よかやみの夜に

○志摩五

今朝のうの字は嬉しのうのじきめるまもなきうのか
がみ

おもひきらしやれもうなかしやんなさまの戀ぢはう
すござる

くもらばくもれはこねやまはれたとてお江戸がみゆ
るでもなし

かはをけがすはおしろいかうまれながらのやまざく
ら

つとめしようとも子もりはいややお主にしかられ子
にやせがまれてあひになき名をたてられる

○尾張六

かやもうりたしむざかりとりてはおりましたてゝおや
も子も

をなごすきなら八丈へゆきやれ八丈むかしはをなご
じま

ひさごくづやにかやりをたきてあやゝにしきとゆふ
すいみ

さんしよこしよよりからい物はしよたいならぬ世た
いはなほからい

心きよきはみづかゝみみやれにぐる心はなきものよ
江戸にさく花するがでつぼむことにお江戸ははなざ
かり

○三河三

さまの心はなせうすうなるこゝはやつはしかきつば
た

あかぬふるさとふりすてゝたれがためかやきみゆゑ
に

やなぎのいとにとめられてかへるもならび子^{らすカ}がつな
ぐ

○遠江三

あくればいでゝくるゝまで身はこになるかはだかむ
ぎ

ゑんしうはまゝつひろいようでせまいよこにくるが

二てうたゝぬ
きみはこがらすわれはまたおはをからすのはねばた
き

○駿河三

ことし世がよふておもふよふにかなふおもよろこ
ぶ身もたちて

しつておれども人にまたとふて母のさしづでむかい
とれ

さまのやうなくゝひやうたん男川へながしてなまづ
とかたりや

○甲斐三

とのはあまよの月かげなるか心もしらぬ行すへを
たかい山からたにぞこ見ればおまんかわいやぬのさ
らす

おれがさらすはぬのではないぞあだな男の心をさら
す

○伊豆三

こんどござらばもてきてたもれいづのお山のなぎの
葉を

ゆふべそがゝふつたるあめはとらがなみだかかせ

つよし

じつにそふならなまづめはなそおれは五つのゆびを
きろ

○相模

大工どのより木びきはにくやおなじ中をばひきわけ
る

くるか〜と川しもみずはいぶきよもぎのかげばか
り

つまはかやかしかまくら山へわれは子どもにねせり
つむ 岸

○武藏六

みやこまさりのあさくさ上野はなのはる風をとさへ
る

こゝはどこぞと船頭衆に問へばこゝは梅若角田川
色のよいのは出口の柳とのにこなへてゆら〜と
いとしとのごを遠くにをけばからすなくさへ氣にか
かる

わかいをなごのとのごのないは笠にしめ緒のない如
く
さがみよこ山てるての姫は夫のためとて車ひく

○安房三

くだけでも身はかまはぬぞのくならばなせに我をば
おとしたぞ

やまな白雲朝日にとけるとけて流れて三島へ落て三
島女郎衆のけせう水

そなた命をすてんといふていまはふたみち山ごしに

○上總五

うすにまはれまはれようすよばんの夜びきにまは
りあふ

岩にせかれてはらたつなみもこゝろすぐならなみこ
さん

北國

つまはきたぐにまだかへらぬがふみをやりたしかへ
る 文 歸

る 鴈

おもふ心のまゝならばねたむ心はなせやまぬ

むかしみしゆめふりすてゝいまはむかしのゆめこひ
し

○下總三

くもらばくもれはこねやまはれたとてお江戸が見ゆ
るでもなし 天保二年の頃此うた江戸にておこなはれ

どばし板ならよかるものどんとふんではめをさます
ね〇見ゆるちやあるまいしとうたへり

さよのなか山これではないかさまについてやろつきがねを

○常陸三

水戸で名打はせんばの川よはしのためめにかもがすむサツサヲセく

いたこ出しまのすなまこものにからせてわれさくぐサツサヲセく

いたこ出てから牛ぼりまではあめもふらぬに袖しぼるサツサヲセく

岩井町とはたが名付しぞかねがなければつらいまちサツサヲセく

○下野三

十七かむろのこぐちにひとりねてはながかゝるとゆめにみた

人はともあれかくもあれわしはめじかとかたならびよ

しらすぎやふねのへさきにすをかけてなみにゆられてしやんとたつ

○陸奥三

きはうしのことなり
はしのぎんぼしを五兵衛かとおもうてすにことば

をかきやうとしたがさんしやうくてこせうくて見ればいとこどしやらにてからいさんせうのせひ

秋風がふけば秋風がふけばサまめのはもかれるいのまめのはもかれるサかれたが大事ななんとしよのせ

ひ

あのむらちどりつらにくやサわれをつれてはなせゆかぬつれて行たら殿子にあふてサわしが心のそこうちたき見すてられたら島國へさんしよのせひ

○出羽三

はしのらんかんにこしをかけ沖をはるかにながむれば沖のかもめがみつゝれてみつゝれてむつましくよられながらもきみ戀しさんしよのせひ

あくればいでくるゝまでしんくするのとはたがためなるやすゑをとげんとなもひつめ身はこになるとか

まはぬにつれないことはいかゞせんさんしよのせひ

浪もしづかにみよをさまりて白ひきうたはよもつきじ

○若狭四

松より巢だつつるの子の千とせはきみとおやのか

げ
はしるふねをもまねけはいそへよるは心のまことな
り

よそにおもひしきのふのあやめけふはわが家のつま
となる

むかし竹馬老てはすへのつへとなりたるおやじさま
西行の歌
に似たり

○越前五

山かげやいがらし川のながれにはみやまのおくのき
よみづ

月の夜にさへおくりをもうて見すてられたよやみ
の夜に

おもふて來たのにみづかけられてわしがおもひをみ
づにしやる

相生みよりかいじやうみやれこびんなでふよりひ
つなでふ
ひつ也

しんきくが三つ四つござるかゝるしんきにかゝら
ぬしんきひとつ枕に寝ないしんき

○加賀五

をさまる代のうれしさはいなほさかへる秋のみづ

里
さとのあたゝまりてむしやれてくらしやわれはみ山
の蟬のこゑ

けふかあすかと朝日をまつにつひにくもりて日待をく
らす

さまはな流がれの瓢草男おとこぬらりくらはようもよ
も

みやま六月ぬ布の子をきるはかねがないからひゆる冷や
ら

○能登四

親草千草
おや子ぐさとはとしことに古葉ゆづりのわかばかや
き蚊いす蚊

ねさゝ野にすむひばりは山にうづらのあはばにつま
おもひ

のみやれうたやれさきのよはやみよ今は半のはなざ
かり

沖の戸中の三本竹はうます竹やら子かさかぬ

○越中四

よろづ世をへる音なしのたきのながれはよもつき
じ

あゆはせにつくとりは木にとまる人はなさけのした

にすむ

しんでまたくるしやかの身がほしやみしよやつらあ
てに

かふてくりやれよねびんつけのことばるのを一兩ごまのあぶらでけ
がふさん

○越後五

老せぬ千代の松さかやたに問のいはにかめあそぶ
わしがおもふと戸板にまめぢやなまじいはぬがまし
ぢやもの

千里はしるやうなとらの子虎がほしややるぞ此文江戸
までも

いとしとのごのしんがい田がわれたゆふだちにはか
こいと云こと也
にこめいこと

月よがらすはまよふてもなくがわしがしんじつ思ふ
でもなし

○佐渡五

さどゝゑちごはすちむかひはしをかけたや船ばしを
さまはつりざほわしやいけのふなつられながらもお
もしろい

いとしとのごにあいたいことは川のまなごでかぎり
ない

きじのめん鳥おく山さしてまつのしんばのつよはみ
つよはみは露
に食みなりと

いけの子ぶなに心をくれてたちやかねたりしらすぎ
に

○丹波五

いねの葉むすびおもふことかなふするはつるかめ五
葉のまつ

わしがことかや志賀からさきの一つまつとはたより
なや

たにの小やぶにすゝめはとまるとめてとまらぬいろ
のみち

あめはふれ／＼ゆきふる間しのぶほそみち竹たはむ
うめやさくらは七重や八重もなせにのぎくは一重さ
く

○丹後六

わしとおまへは小やぶの小うめなるもおつるも人し
らぬ

いはのしみづはそこからわくがさまの心もそこから

か
月はひがしにすはるはにしにいとしとのごはまんな
かに

人は口なりや兩手にはなをわしもかた手に花ほしや
きのふやけふまでみづしの女今は二ヶ處のくらのぬ
し

たんば田處よい米どころむすめやりたやむこほしや

○但馬七

おやは子といふてたづねもするがおやをたづぬる子
はまれな

ひさごくすやにかやりをたきてあやゝにしきとゆふ
すいみ 尾張の部
此歌あり

しやんしこゝろふんべつ處おやのいけんもきゝどこ
ろ

丹波與作
三うた 延寶八年ハッ
タシ人漂着記
たなさし

よさくおもへばてる目もくもるせきのこまんがなみ
だのあめか

あのはふるとも身はぬりやせまいさまのなさけをか
さにきて

みやこゝとわしつれてきてこゝがみやこかやまな
かを

○因幡六

つきせぬしるし岩にはなみねの小まつのしげりあ
ふ

あさまよりの 小鳥 こんからすかつゆにしよほろぬれたよ

うなゆらくとなへをとるつゆにぬれたよな

けさきておなれとがかたびらはなよなすすもなわす
にきるかたびらはなよな

ひるま米つく八十二からうすでなよめもしうとめ
もつきやれよ十二からうすうすてなよな

お主にやいとまとりあの山こえてみやこさりのおや
ざとへ

ごせとちぎりていまゝたあきる釘をうちたやのちの
つま

○伯耆五

心かよはすしやくしのさきでいはすかたらずめでし
らす

かねがゐくわうの太平がかほもきのふかぎりのさん
づ川 ガホヘイ
顔も

ばくちうたしやる大酒のみやるわしがぬのはたむだにして

ひるまではかいたが何のをけのみでなよないそばたのわかめよしそれがおしるのみでなよな

そふとめのまたぐらをはとがにらんだとなにらんだもどりかやまた豆をはさんでとなよな

○出雲四

これのいしうすはふかねどもまはるかせのくるまな
ひかねなり
らかをよかる

ひるまもちのござるやうあいかたぶらてぶらりし
かたびら也べら也
やらりとあいかたぶらでひるまもち考べし

さんまれこれのよめごさまどこなそだちのさんまれ
さまぞいねのうらぼののきそだち

千家きたしまにやアやきもちがはやるなかにみそい
れてボッほや／＼と

○石見三

京の大佛ではばしらもたせくぢらつりたい五島うら
鯨
で

關の地藏にふり袖びんつけのこときせてならの大佛むこにとろ

これの親方はんじやうをなさる奥は琴の音中の間は
鼓かどはものもが絶ませぬ

○隠岐三

脊なをたゝかれしんこほどはれたこれもりんきのか
たまりか

いなしよ／＼とおもふたうちに太郎が生れていなさ
れぬ

われは奥山のさゝ小ざゝふぢにまかれてねとござる
いけだいたみの上もろはくもせにがなければ見とと
ほる

○播磨六

いつかかうのいけのこめふみしまいはりまなだをば
うたでやる

今の若衆はむぎわらたすき一夜かけてはかけすてに
かみをしまだにいはうよりおかた心しまだにもちな
され

ござる／＼とうき名をたてゝさまはまつかせおとば
かり

おもふとのごとうすひきすればうすは手ぐるま中で
まはる

○美作五

十七八はたいとのわらでうたねどこしがしなやかに
大唐米の鬘
か又大道歟

まへ田のいねのはもちのよさはこがねのつゆをまき
 あげる

またとゆくまい湯原のゆへは三坂三里がういほど
 に

近江のかさはなりがようてきよてしめをながうて

きよござるソリヤイノウ○糸竹集にあるあ
ふみ歌と大同小異

とんとゝなるは大竹さゝらならぬは七八こまさゝら

ソリヤイノウ

○備前五

千代に八千代に御代をさまりて浪も靜に四ツの海

しあく大工はちよゝまりちよそれが木ずゑにとま

りて女郎まねく

ごいや赤坂よし田がなけりやなんのよしみに江戸が

よい天和三年岡久が江戸く
だりに五井とある歟

きみにあふとて朝水くめばにぐる心かまたあはぬ

備前岡山新太郎さまの江戸へござれば雨がふるあめ

ぢやござらぬ十七八のこひの涙が雨となる

○備中五

つきせぬしるし岩にはなみねの小まつのしげりあふ
 こなたおもへばてる日がくもるさえた月よがやみと
 なる

こちのだんななどはからかさそだちせけんひろかり
 うちすばり

こなたおせどにひづるとたでとなんのひづるめがた
 でゝと

こちのだんななどのくさぎのそだちうはべうつくしそ
 こにがい

○備後五

さかへ久しき松がえの岩のきしねになみよする

江戸へゝと木くさもなびく江戸にははなさくみも

なりて

にくいゝはうらのうらじつのにくいはおもひのあ

まり

たとへ火の中水のそこおよばぬ中に住もきみ

心たんきな男を持たむねにはやがねつくごとく

○安藝二

みやと廣島に海がなかやかいとしのごをかやは

せはすまいわしがちよこちよこかよひましよ
うすかまいます廣島の沖にうすぢやごしせんゑくば
でござすおまへとわしがなかつちやもの

○周防三

こちふきすさむあしたにはさまのなみだかあめのあ
し

ひとよなくこの子が出てしん茶々壺でこちやし
らぬシヨンカへ

よし田通れば二階からまねくしかもかの子のふりそ
でかシヨンカへ

さけはのまねど酒屋のかどであしがしどろであゆま
れぬシヨンカへ

○長門三

にしふく風の夕くれにおもひいでたよさとごゝろ

こいとゆたとてゆかれるみちかみちは四十より夜は
いちや

こいじやせきやるなうき世はくるま命ながけりやめ
ぐりあふ

○紀伊七

いく千代久し松がえのきみはさかへるわかみどり

つきになりたやさまがすむねやのふしどを照した
や

たづねてござれ戀しくば三輪のふたもとともつき
す歟

おもふとのごが野べござるなり涼しかせふけあめふ
るな

山がやけるがたゝぬかきじよこれがたゝりよか子を
おいて

人にいはりよと云さがりよとわしが身にさへくもり
がなか

人のくちには戸がたてられぬながれ川たきせきなら
ぬ

○淡路四

舟がつくく二百二十七そうさまが御ざるかあの中
に

たんば雪國つもらぬさきにつれておでやれうすゆき
に

しんくしまだにけさゆふたかみをさまがみだしやる
せひもない

花は折たしこすゑは高しながめくらすや木のもとに

○阿波五

戀しく歎

あたけ口しくさまつた山かよひつたのたていしほし
つきよ

せまいひろいとわしがねたへやをいまはよそめで見
てとほる

雨がふろとておきからくもるむすめさろとてむこが
こぬ

とりもはら／＼よもほの／＼とかねもなりますてら
／＼に

かねをたゝいてほとけにならば江戸のはやがねみる
ほどに

○讃岐六

さまよ／＼とこがれて來たにさまはおしかよ物い
はぬ

志渡はよいまち西北をうけて八島おろしはそよ／＼
と

はなのゑじまはからみがあらばたぐりよしよものみ
のほらへ

人の娘と新造の船は人が見たがるのりたがる

八島山には大谷小たになせにこなたに子かないぞ

寛永作竹齋物語○さかの浦濱にや二千山
とてあるになぜにそなたにや子がないうぞ
みすじふろが谷あさ／＼むござるこたつやりましよ炭
そへて

○伊豫五

つきはかさなるはらな子はふとるなまきいかだで氣
がうかぬ

十九はたちでつまないならばひとりまるねがさびし
かろ

わしははま／＼つねいろとすればいそのこなみがゆり
おこす

おやも兄弟もなき身のはてはともになさけのかけど
ころ

やみのまる木ばしさまとならわたろおちてながれて
開さきのよともに

○土佐七

田野々やまいち茅は帆はひかぬおさや手おりのやつ
もめん

おやこかくしておはぐろつけてよそにふる雪はを齒葉か
くす

ゆつら云はら女房にせうとつれてたこくをしよとゆ
つら

さまとわしとはやけのゝかづらつるはきれてもねは
きれぬ

こいといふのに遠いといやるなんの四十余り四百里
もこゝろちかくぞナアレカシ

こいしゆかしとさまゆへばかりあはぬむかしにナア
レカシ

ほしやおしやおもふはなんぞとかくきみゆゑナア
レカシ

○筑前五

ここの名物はかたときこえおびにしてさへまはりよ

い
生れ來りしいにしへとへばきみにちぎれとゆめに見

た

ごけをたてゝの身たしなみ日かげにさける花ずき
る

茶ものがたりに人こというておのがはちをばのみか
くす

こまの手づなをしりながらさまにひかれて身をよご

す

○筑後五

高みにのこる月かげをやどせしそではかはるまい
いかでわすれん逢なれてごせのちぎりもあきの山
うすはまはさでしなばかつくるしなでまはろか此う
すが

まつがつらいかわかがういかまつはたのしみわか
れつらい

みめがよいとて心が人が大坂で子木偶のぼうでつらばか
り

○豊前三

わしとおまへは諸はく手樽中のよいのは人しらぬ
つれていかんせいづくへなりとたとへしほやの火を
たくとてもおまへゆへならくるしない

さても見事なみたらいつゝじばんにつぼみてよなか
にひらくよあけがたにはちりゝと

○豊後五

ごせをねがふはわか身ぢやないぞさまをうかめとと
もしたい

金の山ぶきかせそよぐけカ□んな色はんな色はんふく茶

にすんふく茶ちよんきりちよんかいな

さまはちほふみねづみにひかれおれがおもひはある
穴な
鼠
なる歟

くんくるべいとまつよはなくてまたぬよはきてちよ
んきりちよんかいな

つくばくわんおんにくちひげかはえてサはへたらだ
いじかなんとせうちよんきりちよんかいな

○肥前五

げんが弟はヤアレすなちのごんぼねそこほらすてあ
らはするよゲンコベ

やぶのなかのきちくぼうすはなじよとなくぞおや
がないか子がないかおやも子もござるけれどもおば
ごのかたへかたびら一枚かりにいた

おまんまたぐらにつりがねだうできてけふもくれめ
が六つのかねサヨイヤナア

させばおさへるおさへばのめずのめば其身のあだと
なるサヨイヤナ

平戸小せどから船が三ぞう見ゆる丸にやの字のほが
見ゆる

○肥後三

つまよないけのどんがめならばくんくるべいッボン
ボへ

とものむかいのせんする山は地からはえたかうきし
まがエ、エ

よいに見そめたしらはのむすめようもなりそなうり
のつるエ、エ

○日向三

月はいみじきやみこそよけれしのぶすがたのかほ見
えず

水にかはすのなく聲きけばすぎしむかしがおもはる
ゝ

おもひこがれて飛ほたるゆべく身にこそがす

○大隅二

おもひだせとはわするゝからよおもひ出さすにわす
れまい

いくよあかしのうらこ船もうかれこがれていそへ
よる

○薩摩七

やみよなれどもしのばいしのべきやらのかをりをし
るべにて

ちよのまへがみおろさばおろせわしもとめましよ振袖を

洲山おかめ女はす山の狐おふりしりふり人をふるちり行花はねにかへるふたゝびはながさくじやない

志賀からさきの名はよけれ一つまつとはきくさへつらい

しまがしまならよがよであらばなんの地かたに身はもとそヨイコノイカニなんの地かたに身はもとそ

夫の留守に人よせゝぬは扱も見あげた花よめ子

○壹岐三

みねの小まつにひなづるつがひたにのながれにかめあそぶ

ござるゝとうき名をたてゝさまは松風をとばかりしまふたゝ團七どんのさらに小麥六口ばかりしま

ふたうらのおかめ女とざれあうて

○對馬三

いらぬきせるのらうがながうてさまとねたよのみじかさよ

野にも山にも子なきはおきやれまんのくらより子は

万藏

寶

いざやわかいしうござるまいかよひるきつねなんのばかさりよとんとろばけよ

苦衆

右の唱歌は近江美濃飛驒信濃上野の五國なし何の故を知らず且傍書細注とも故柳亭種彦翁の手寫にかゝる一字も増損せず

校者識

(此校者は我自刊本の校訂者なりし)

諸國盆踊唱歌終

見性却清醇
 享齡擬壯椿
 春温渾滿腔
 空眼轉洪鈞
 勻翰謔歌刻
 少戔綺語神
 甲休門榜燦
 樂隱特相親

右題近松
 予安翁像



(しへか見の一産土波難)

淨瑠璃難波土産
文句評註

序

おしてゐるや難波のみつの賑ひ余國にこえ港に出入百
千の船ヤンラ目出度やの聲絶す就中南江の歌舞伎淨
瑠璃芝居の軒をならべて繁昌の時を得たり僕もとし
比淨留りの作文に種々の事共取あつめたるが面白さ
に數本一覽をなすに唐倭からまゝの引事聞えらぬ俗の諺など
時々抄せしを懷にしひそかに博識の隱士たよりに便てこれ
を問に其解こと流水の如くなりしをことごとく筆記
し見ればおのづから善をすゝめ惡をこらすの一助共
成けるまゝ頓て清書し篋に藏んとするに書林某來て
是を梓に壽ふせば四方好事の本望ならんといふにぞ
客べきにもあらねば吾子が心に任せんと直に難波み
やげを題として茅舎の窓下に筆をおきぬ

元文三年戊午のほし

百の百草書

淨瑠璃評注卷之一

發端

抑淨瑠璃といへる來由を尋るにむかし豊臣秀吉公の御臺政所の侍女に小野於通といふ人あり才智人にこゑ手跡も普通に勝れたりければ時の人殊におもくもてはやしける一日御臺所於通を召て仰けるはいにしへの清少納言紫式部などいへるは源氏枕双紙等の文を作りて其名を千歳に残しぬ汝が才をして小女にひとしく朽なん事いと口をしきわざなり何にてもあれ作物がたりして後世にといひむへきよし命ありければ小通かしこまりて退き私に思ひけるはいにしへの才女の仕わざにならはん事思ひもふけさる事なりまかりといへ共主命もだしがたしとて閑窓に閉こもりて長生殿十二段といへる物語を書て參らせける其趣ひとへに矢矧の淨瑠璃姫の事を主とし樂師の十二神に表して十二段として書たるにより時の人此草紙を淨瑠璃本とぞ申けるこゝに岩橋檢校といへる有てこの双紙に節を付け夫よりして以來好事の人間出て淨る

りの作文をし音聲すぐれし人に曲調して豊なる世のもてあそびとす又人形にあはする事は往じ慶長の比六字南無右衛門といふ女太夫四條河原に芝居を立興行せしに初る共いひ又同じ比西の宮の傀儡師みやこに出てかなでしが濫觴也共いひ傳へり近世にいたりては或は座敷淨るりあるは芝居淨るりなど専らもてはやす事には成ぬ然ども其文勢筆力なく何となく拙く感情もなかりければ只下々のもてはやすのみにして中人以上は曾て其本とて取あげみる事もなかりしに元祿年間に近松氏出て始て新作の淨るりを作り出し竹本氏が妙音にうつさせたりければ聞人感情を催しひそかにその本をもとめて其作文をみるに文跡拙からず儒佛神によく渡り譬を取り故事を引にも人の耳にするどころからず貴賤のさかひ都鄙のわかちそれの品位につきてさこそあるらめとぞもはせ道行等のつづけがらもいせ源氏の條をうつしてまかも俗間の流言をおかしくつらねければ自然と貴人高位も御手にふれさせ賞し翫し給ひしより打續て數多の淨るりを作り出すに佳言妙句舉てかぞへかたし終にその名を天下にあらはし彼淨るり本を見るに恥なく成

て専ら世上に流行する事數十年に及べり是偏に近松氏が力なり然して近松死したれ共猶餘光うせず其門に遊ぶの人相續て作文をなす夫より數多の作者出來りて今に於て燦然たり皆是近松がながれをまたふが故に其おもかげ殘て甘味ある事すくなからず然はあれど元來近松が器なければ古語の取あやまり古實のたがひまゝ有て氣の毒ながら機轉發明がおとらぬ所も有て近年の淨るりにも世人の耳目を悅しめ或は希有の一趣向を出して大に當りを取事はまた達人といはんに強て難有^{なんちる}べからず

往年某近松が許にとむらひける比近松云けるは惣して淨るりは人形にかゝるを第一とすれば外の草紙と違ひて文句みな働を肝要する活物なり殊に歌舞伎の生身の人の藝と芝居の軒をならべてなすわざなるに正根な木偶にさまゝの情をもたせて見物の感をとらんとする事なれば大形にては妙作といふに至りがたし某わかし時大内の草紙を見侍る中に節會の折ふし雪いたうふりつもりけるに衛士にあふせて橘の雪はらはせられければ傍なる松の枝もたはゝなるがうらめしげにはね返りてとかけり是心なき草木を

開眼したる筆勢也その故は橘の雪をはらはせらるゝを松がうらやみておのれと枝をはねかへしてたはゝなる雪を刎おとして恨たるけしきさながら活て働く心地ならずや是を手本として我淨るりの精神をいふる事を悟れりされば地文句せりふ事はいふに及ばず道行なんどの風景をのぶる文句も情をこむるを肝要とせざればかならず感心のうきすもの也詩人の興象といへるも同事にてたとへば松島宮島の絶景を詩に賦しても打詠て賞するの情をもたずしてはいたづらに畫ける美女を見る如くならんこの故に文句は情をもとゝすと心得べし○文句にてには多ければ何となく賤しきもの也然るに無功なる作者は文句をかならず和歌或は俳諧などのごとく心得て五字七字等の字くばりを合さんとする故おのつと無用のてには多くなる也たとへば年もゆかぬ娘をといふへきを年ほもゆかぬ娘をばといふごとくになる事字わりにかゝはるよりおこりて自然と詞づらいやしく聞ゆされば大やうは文句の長短を揃て書べき事なれ共淨るりはもと音曲なれば語る處の長短は節にあり然るを作者より字くばりをきつしりと詰過ればかへつて口にかゝ

らぬ事有物也この故に我作には此かゝはりなき故手
にはおのづからすくなし○昔の淨るりは今の祭文同
然にて花も實もなきもの成しを集出て加賀掾より筑
後掾へうつりて作文せしより文句に心を用る事昔に
かはりて一等高くたとへば公家武家より以下みなそ
れ／＼の格式をわかし威儀の別よりして詞遣ひ迄其
うつりを專一とす此ゆへに同じ武家也といへ共或は
大名或は家老その外祿の高下に付てその程々の格を
もつて差別をなす是もよむ人のそれ／＼の情によく
うつらん事を肝要とする故也○淨るりの文句みな實
事を有のまゝにうつす内に又藝になりて實事になき
事あり近くは女形の口上おほく實の女の口上には得
いはぬ事多し是等は又藝といふものにて實の女の口
より得いはぬ事を打出していふゆへ其實情があらは
るゝ也此類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は
女の底意などがあらはれずして却て慰にならぬ故
也さるによつて藝といふ所へ氣を付ずして見る時は
女に不相應なるけうとき詞など多しとをしるべし然
れ共この類は藝也とみるべし此外敵役の余りにおく
病なる躰やどうけ様のおかしみを取る所實事の外藝

に見なすべき所おほしこのゆへに是を見る人其ま
ゑやく有べき事也○淨るりは憂が肝要也とて多くあ
はれ也などといふ文句を書又は語るにもぶんやぶし
様のごとくに泣が如くかたる事我作のいきかたには
なき事也某が憂はみな義理を専らとす藝のりくぎが
義理につまりてあはれなれば節も文句もきつとした
る程いよ／＼あはれなるもの也この故にあはれをあ
はれ也といふ時は含蓄の意なふしてけつく其情うす
くあはれ也といはずしてひとりあはれなるが肝要也
たとへば松島などの風景にてもアゝよき景かなと
譽たる時は一口にて其景象が皆いひ盡されて何の詮
なし其景をほめんとおもはゞ其景のもやう共をよそ
ながら數々云立ればよき景といはずしてその景のお
もしろさがおのづからあらゝ事也此類萬事にわたる
事なるべし○ある人の云今時の人はよく／＼理詰の
實らしき事にあらざれば合點せぬ世の中むかし語り
にある事に當世請とらぬ事多しさればこそ歌舞伎の
役者なども兎角その所作が實事に似るを上手とす立
役の家老職は本の家老に似せ大名は大名に似るをも
つて第一とす昔のやうなる子供だましのあぢやらけ

たる事は取らず、近松答云此論尤のもやうなれ共藝といふ物の眞實のいきかたをまらぬ説也藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるもの也成程今の世實事によくうつすをこのむ故家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ共さらばとて眞の大名の家老などが立役のごとく顔に紅脂白粉をぬる事ありや又眞の家老は顔をかざらぬとて立役がむゑやゝと髭は生なりあたまは剃なりに舞臺へ出て藝をせば慰になるべきや皮膜の間といふが此也虚にして虚にあらず實にして實にあらずこの間に慰が有たもの也是に付て去る御所方の女中一人の戀男ありてたがひに情をあつくかよはしけるが女中は金殿の奥ふかく居給ひて男は奥方へ參る事もかなはねばたゞ朝廷などにて御簾のひまより見給ふもたまさかなれば余りにあこがれたまひて其男のかたちを木像にきざませ面體なんども常の人形にかはりて其男に毫ほどもちがはさず色艶のさいしきはいふに及ばず毛のあな迄をうつさせ耳鼻の穴も口の内齒の數迄寸分もたがへず作り立させたり誠に其男を傍に置て是を作りたる故その男と此人形とは神のあるとなきとの違のみ成し

かかの女中は是を近付て見給へばさりとて生身を直にうつしては興のさめてほろぎたなくこはげの立もの也さしもの女中の戀もさめて傍に置給ふもうるさくやがて捨られたりとかや是を思へば生身の通りをすぐにうつさばたとひ楊貴妃なり共あいそのつきる所あるべしそれ故に畫そらごとゝて其像をゑがくにも又木にきざむにも正眞の形を似する内に又大まかなる所あるが結句人の愛する種とはなる也趣向も此ごとく本の事に似る内に又大まかなる所あるが結句藝になりて人の心のなぐさみとなる文句のせりふなども此こゝろ入れにて見るべき事おほし

淨瑠璃評注卷之一

目錄

卷之一

○御所櫻堀川夜討

卷之二

○安倍宗任松浦笠

○北條時賴記

並雪之段

卷之三

○大内裏大友眞鳥

卷之四

○國性爺合戰

○刈萱桑門筑紫櫟

卷之五

○蘆屋道滿大内鑑

○大塔宮蟻鎧

淨瑠璃評注目錄終

淨瑠璃評注卷之一

外題

○御所櫻堀川夜討

此淨るりは九郎判官どの京ほり川の御所に御座有し時鎌倉の頼朝卿より土佐坊を討手にのぼされ堀川の館にて夜うちの始終をあみ立たる故かく外題する也げだい當世の氣に應じ尤面白し

序
○恩は春のごとく威は虎のごとく訓は父のごとく愛は母のごとし李巖をうたひし吏民の詞

李巖は三國の時の郡守也民をよく治し故民の吏郡守の下司なるべしや民共が其徳をほめてうたひし詞也民をめぐむは春の陽氣の草木をうるほすがごとく下を畏すに威のある事は虎のはげしきがごとく民を教るに道の明かなる事は父が子を教るがごとく民をあらはれみて愛する事は母が子をいつくしむがごとしと也こゝは平家ほろび源氏の世となりて頼朝義經の民を治め給ふになぞらへいふ也

義形せり

儀刑と書べし儀のりとし刑のつとるといふ事にて君の徳が天下

の手本となりて四海がのつとるといふ事なり

評右の序文近松の筆法とは大にたがひ御所櫻は文耕堂の作也

句作りの格何となくいやしく理もまたとくと本意には妥貼つかすまかしこれらは兩體の文づらの巧拙の論なれば何許どこを指てその好惡をあらはしがたし但し漢和の文共を多くみたる人の目にはおのづからみゆる事也是ぞ古人のいへる知人ぞ知の場なるべし

兄によりしく弟に宜よろしして國民をおしゆといふ

大學に詩經を引て國をおさむるの本は家の内にて兄弟中よくするが肝要なりとおしへたるを引なりよりともよしつね兄弟にかけていふ

吳越とへだゝり

春秋戰國の間吳の國と越の國と不和にしてたゝかひにおよびし故中のあしくへだゝるをいふ是に付て世俗あるひは間のはるかにへだゝる事を吳越になぞらへ思ふは誤り也吳と越は遙ならず唐詩に到江吳地盡隔岸越山多といへるも吳越の界たゞ江をへだてたるのみなる事知るべし但し間のへだたるは胡越なり唐人も間の遠くへだゝる事を胡越

のごとしと書簡に書る事あり

摩利支天

軍をまもる天部の本尊なり

その咎をまらためるに

まらためるの語淺ましゝ是は京大阪などの側陋うらやこころじ

の匹夫などが調るといふ事と改るといふ事とを聞

はつりて兩語を一つにしてまらためるなんどいふ

それを直に取たるならん殿中にてかぢはらが口上

には似合す

甲がしやり

大友真鳥の抄に出せり

梵天帝釋

佛法にいふ卅三天つかきの司にて天帝也

閻魔法王

是も佛法にいふゑんまわう也閻魔こゝには雙王と

いふ但し苦と樂とをならび受給ふゆへ也と名義集

にみへたり

五道の冥官

地藏十王經に出たりめいどの官人なり誓文に請す

る所の本尊この外に十二神あり

泰山府君

是も誓ひにもちゆる神也陰陽者流のたつとぶ神に

て史記にもみへたり

阿鼻地獄

阿鼻こゝには無間といふ呵責の間まばらくも間な

き故に名づくといへり

龍の腮の珠

此事列子に出たり河上翁といふものゝ子川に没しづみて

千金の珠を得たり河上翁がいはく石を取て是を鍛

かならず名珠ならん惣じて珠といふものは驪龍の

腮の下にあり汝是を取えしは龍の睡たる時に出あ

ひしならんさなくば汝が身を粉にせられんものと

嘆じけるとなり

衆星北に拱して

天の衆もろくの星は四方にめぐりて北斗は北にありて動

ぬゆへ衆星がめぐりては北の方の北斗に拱むかふを北に

たんだくすといふ也論語にも此たとへ見えたり

靜はたへかねコレのと立よるを駿河がへだてゝど

こへゝもう泣ごとはかなはぬ我君に見放されて身

のたてらいがならずば

身のたてらいとは何の詞ぞや身が立ずばとか身を
立てたつきがなくばとか身を立てるあだてがなくば
なんどいはゝか程には鄙からじ

流殺の法は黃帝の御代に始て

流罪の事書經の舜典に出たる四罪がたしかなる書
にみへし始とすべし書は尙書よりふるきはなき事
漢以來の諸儒の説也こゝに小さがしく黃帝に始る
といひしは後世の雜書の端にさだかならぬ事の記
せるをみていふなるべし今の作者は誰もすべき事
也と近年世上に評判するも其理ある事也みな此類
の誹諧學文なる故なるべし

施は財と法と無畏の三つ

在家より沙門へ金銀などをほどこすを財施といひ
出家より俗へ法をほどこすを法施といふ又眞實の
妙道を得て畏る事なき徳をほどこすを無畏をほど
こすといふ此事つぶさに起信論に出たり

剛臆をみて

剛はつよき也臆は臆病なる也まかし此語は日本の
軍書詞にて漢文には通せぬ詞なり

四 民

士農工商也士は官につかへる人をいひ農は百姓を
いひ工は諸職人をいひ商は諸商人をいふ此四つに
はづれたるを遊民といふなり

評、此間の追はきの段理句義文句共はなほだ面白
し針右衛門はおかしくばくち打は小きみよく親孝
行の貧者は思ひの外にあたゝまりてよそのみる目
をこゝろようすさりととは作意也殊に伊勢ノ三郎が
我身につまされての感心尤人情のいやといはれぬ
所にて又むかしも是に似たる例有て賢者の論にも
合へりむかし漢の代に吳祐といへる郡守の掾に孫
性といふ者ありて其父まづしく寒氣をふせぎかね
し故孫性がわたくしにて支配の在々へ公用金なり
とて民の金を出させ衣服をこしらへて父にさづけ
けるに其父いたりて籬直なる者にて汝いかなる術
をもつて此衣服を得たるぞと問ける故有のまゝに
答ければその父おゝきにいかり官につかへる身と
してかゝる私の非道天道のおそれあり急ぎ郡守へ
参りて此趣を白狀しその罪を乞候へといふ付け
るにぞ孝心ふかき余り父の下知にまがひ郡守に
其旨を白狀しければ郡主吳祐かへつて是を感じ汝

は父をいつくしむ故をもつて民のたからをかすめ汚たる名を取れり勿論民をかすめしは汝が過なりといへ共又父のためにする所もだしがたし是すなほち孔子の給ふ過を見て仁を知るといふもの也とて天子へ奏してその衣服をゆるしあたへけると也今伊勢三郎がみつから刼盜をなすもおやの故なれば誰か不義也とにくむべきや尤見物のひいきをうながすものなるべし

耆婆や華駝

ぎばは天竺の人にて釋尊時代の名醫なりくわだはもろこし三國時代の名醫にて蜀の關羽を療治せし人なり

評、此淨るりは二段目一段丸ぐち無疵の上々吉扱扱よくは作意を煉たるもの也しかも瑣細な所に氣のついて隅から隅迄みちんのぬけめもないとは此事是を思へば三段目はよつほどまだるい事がち也惣じていせの三郎に付たる趣向の筋一から十迄尤すくめ玄かも骨つぎの段には余程おかしみ有て氣の盡をさんじ其跡土佐と出合てのせりふ老母の立あひ何から何までよく／＼揃ふたりとみゆ但し

場が三の玄ゆかうとならぬが殘念也二段めには打てつけたる極上々の作意なるべし

ある人難じて云伊勢三郎は道を守るひんぬきに仕立たる浪人のならひとは云ながら刼盜をさせたる所が少しいさぎよからずしも學者などがみて評せばすこし云ぶん有べきか、答學文の理屈と世間の人情とは少しづゝ違のあるもの也こゝをよくのみこまねば右のごとき難ある事也殊に世上の人ごゝろには判官ひいきといふ僻ありておゝだゝいが實方にて手柄なんどある人の事なれば疵有てもよく云なし又よく思ひこむ所が藝にもちこむ骨髓なりされば歌舞伎淨るり共義理を本とする事なれ共その義理に右のかけ引ある事也それを一向に理くつせめにして評判すれば藝の本意を取失ふ事たとへば西と東との違ひができるもの也それに付ちか比京都のさる學者を門弟がふるまいて芝居をみせければ此學者都に住ながらよく／＼無風雅に偏屈なる人にや當代の役者の名も顔もみた事なくみごと其日は一日見物せられしが歸りて後門弟共問けるはかの芝居の立役の内いづれが上手也と思し

めすぞといふに答てかの若殿に成し惡人形が藝ふ
り甚だおもしろかりし是が上手ならんといはれし
故それは嵐三右衛門とて實形にて候かの繼母と一
つになりて若殿の遊女ぐるひを云立にして家を追
出さんとかくみし家老が惡人がたにて候といへけ
ればいやくそれは理にちがひし評判也あの若殿
がごとく淫酒におぼれて放埒至極のおこなひをな
さば家の滅亡ゆへそこをとがめて追出さんと謀る
まゝは、や家老は至極の尤也といはれしとかや芝
居を此やうにみられてはいかなまゝも仕廻成べ
し

風の勢ひは大海の波をうごかせ共井の内の水をうご
かす事あたはず

語の心はよく聞えたり但しこの語は正しき古人の
成語とはみへずそれゆへ經子史集の四部には大か
たみへぬ語ならんと思へは穿鑿に及ばず此國にて
出來たる管蠡集といふ書に日月は大地をてらせ共
海底をてらさずとある下に此語に似たる事あり然
れ共たしかなる語にはあらず

親々矛盾の折からに

こゝのむぢゆんといふ事世俗は中のたがう事共思
ひ又は相違する事共おもへりみな誤り也是は故事
にて自身の口上か自身にくだちがふ事にかざりて
いふ詞也むかし一人の士矛と楯とを賣ものあり矛
を賣らんとては此はこをもつて突時はいかなる楯
もつきとをさすといふ事なしといひ又楯を賣んと
ては此たてにてうくる時はいかなる矛をも請とめ
すといふ事なしといふある人難じて若又なんちが
矛にて突かけ汝がたてにて請とめはいかゝとが
めければ此者何共こたへんやうなく自身の詞の相
違せるを恥たり是より自言の相違せるを矛楯とは
いふ也作者その義をまらす是たゞ今やう作者の斗
筭の輩文盲の罪也

伊勢の二字を偏と傍に引わくれば人平に生るゝは丸
が力とよむとあれば

辻談儀する物もらひが神道を講釋する連何かな佛
法をそしらんとて西は西方極樂とて佛法には西を
たつとむされば西の心になればたちまち人の道に
そむく故惡とは西の心と書なんどおのが胸のくら
きにまかせて盲蛇におぢずのたは言世間はひろき

物なれば目あき千人めくら千人みんごと口過をし
てとをるもおかしされば伊勢の二字を此に書たる
ごとくいひならはす事愚俗の世話にある事はある
事なれ共僞銀もにせがねと知ては取ましき道理な
れは僻言を取もちゆるは作者の目がかすむ故とお
しはかられて淺はか也近松などはかやうの所に
自分の力量のあらはゝるゝを恥一向學者などの笑
ふ事は除て書すさればこそ近松有てより後は淨る
り本が下におかれず上々がた迄も御覽あるやうに
有しに近年は本のもつたいぐわつたりとおしさが
りて公家武家のうへを書も町屋下ぎまの挨拶體に
なり下り取あげてみられぬ事多し伊勢の伊の字の
傍は尹の字也平の字にはあらず勢の字も又生るゝ
の偏にあらず本字勢なり俗に勢とかくはやつしよ
りあやまりたる也但し此の本文には平産の縁をと
らなため俗説を用ひたらんか俗の耳には尤らしく
聞事も有べし然共盲千人の譽たるより目あき一人
の笑ひにかゝる身の汗をまぼる種なるべし賢者の
詞に身かならずみづから侮てまかふして後人これ
をあなどるといへるごとく作者も自身に我道の威

光を引きざる事又口をしからずやされば惡の字を
西の心と書と思ふも伊の字を人平とよむとおもふ
も擔ふておるゝ棒にあらずや

伯夷叔齊はその罪をにくみて其人をにくますといへ
り

論語にはくいまゆくせいは舊惡を思はずとの給ひ
し孔子の意を取て其語を作りなをして用ひたる也
俱不戴天

禮記に君父の仇には俱に天をいたゝかずといひて
君と父とを殺されたる敵とは同じ天をいたゝきて
同じ世に住べき義にあらずすみやかに其仇を討は
るばすへしと也

古の高良の臣は湯起請取て

高良のまゐとは武内宿禰也人王十六代應神天王三
十一年たけちのすくね勅使として筑紫におもむき
ける其跡にて弟むましうちのすくね帝へ讒して武
内三韓をかたらひ謀叛の志ありと奏す天皇おどろ
き給ひて使を下し武内を討しむ武内の臣まね子と
いふ者武内に代て死す武内是よりひそかに上洛し
咎なきよしを奏すみかど疑ひ給ひて武内兄弟を神

前において湯をさぐらしむ是湯ぎまやうの由來なり

評、蜀紅の錦も衣服の裁縫があしければ木！布子におとるべし此所の梶原が名字そなはりし慥なる連判狀を義經公やき給ひて鎌倉の大小名の中にも此連中あるべければみな／＼心を安堵のためわざと焼捨給ふとの意遠くは楚の君ともしびをけさせ冠の纓をさらさせ給ふの徳に似近くは魏の曹操我にそむける百官共の天子への奏狀を箱の内にて焼せたるふせいにてあつはれ大將の胸中廣大なる一器量のみゆへき所也たゞ殘念は筆さきまふりて其意を盡さず跡先の文言はつきりめかぬ故にや泣ねいりに肝心の甘美がぬけ見る人きく人の感する段迄といきかねるは殘念／＼ア、近松戀しや

勇士の戰場におもむく時三忘とてわするゝ事三つあり

この本文七書の中にみゆ本文の心はきこえたるをり也

もろこしの焚暗が母の小袖を母衣と名づけ戰場迄も持たりといふ

此事史記漢書等の實録にはみへず通俗などの中に
出たるならんか

評、辨慶は一代にたつた一度女犯せしと云諺子供
迄いひ傳ふる事にてまかも是迄狂言に取くまぬ事
なればまことに結構なる一口趣向なるべし是によ
つて作者の思ひつきとみへたれ共淨るりに仕立あ
げたる上にてみれば當世の氣にくいちかふやうに
おもはれ侍るそれ故にや世上にこの所の評判はづ
まぬよし今の時代女形があら事するを悦ぶ氣には
のらぬ筈也尤べんけいがせりふづけ辨慶らしくぎ
こつなくはきこゆれ共いかにしても女房といふ道
具おとし一體がなまけて見へ芥子かし酢ザのきぶい所へ
砂糖水をくはへたやうに底があまふて見物にもた
れのくるきみ多し是を思ふに大事のもの也かの鹿
を逐ふ獵師は山をみずとかやいひて鹿に計り目が
付て向ふみずに追かくれば山に行あたる難ある所
に目がつかずべんけいに此しゆかうははずむと計
り目がついてかんじんのべんけいにぬるみのくる
所に目がつかずついに當世のはづみを失へりされ
ば此淨るりあつたら一段目を三で引もどすやう

十ぶんのあたりとはみへす誠におしむべしそのうへ兩人が肌にわけしふり袖は清十郎おなつの土用ぼしかびくさく播州ひめぢの玄のび寝は七小町に名にしあふ大原のぞこねの夢まださめず殊にべんけいが娘を切てより後のせりふうれいの中にすこしおかしみの出る文句ありどこ共なふうれいも玄らけて諸見物のうるほひすくなし

又ある人の難に辨慶が肌着は童の時よりして晝夜身をはなさず今此場の役にたちし事あまりに見物をうつふけたる趣向ならすや辨慶がおさなだちよりは是迄の越方いか計りのへんれきとかせん矢島のうら波一の谷の玄は風數十年のあらばたらき戦場の大汗にひたしてはおそらく齊の晏子が名を得し三十年の狐裘なり共有べき事とは思はれず事のかけたる仕組かなと嘆息せしもさる事なるへし

○道行

注なし

この道行に評注なきはいかん、答この道行一つも注すべき事なし其上近年の道行の文句は生玉祭文あるひは手まり歌繪草紙やうの口氣におちて多く

は評するにたらず近松が筆勢の光燄はたへ果たりおしいかな近松が道行は何となく句がらげだかくやゝもすれば歌書の體源氏なんどのうつり有て優美なる事かくべつ也それに目なれて今時の道行は一向評議におよぶべからず

須彌の四州の四天王

佛説に世界を玄ゆみせんといふ山に作り東西南北の四州にわかち四方をつかさどる四天王也多門持國増長廣目の四天にて謠などにも多くある事ゆへつまびらかには玄るさず

夜討によせたる正俊が心をみする此ゑびらと重藤と共になげ出すを伊勢三郎おつ取てみれば弓には弦もなく鏃をぬいたるゑびらの矢幹やがら

この正俊が義を立し所よし聖賢の意にかなへり孟子離婁の篇に此義と同じき事あり鄭の國より衛の國をうちし時に鄭の大將を子濯孺子といふ衛の國よりは庾公之斯といふを大將として向はしむ玄かるに戦場にて玄たく玄ゆし俄にやまひおこりて弓を引事かなひがたく其士卒に云けるは我かならず今日の軍に討るべし我病て弓をひく事かなはずと

て其日の衛の大將を誰なるぞと問に士卒こたへて
庾公之斯なるよしをいければ、儒子聞て、玄からば
命をたすかるべしといふ故、士卒ふしぎに思ひひこ
う玄は衛の國にて聲にきこへし弓の上手なるよ
し然るにかれが向ふと聞て命をたすからんと給
ふはいかなる故ぞと問ふ、儒子こたへて、庾公之斯は
弓を尹公之他といふ人に學べり、尹公之他はわが弟
子なるが日比たしき人なれば、其人が友として弓
をおしへたる庾公之斯はかならずたしき人なる
べし、此故に我をたすくるを知るといふ果してゆこ
う玄し、せめ來て、儒子の弓をひかざるをうたがひ問
に、玄ゆし病おこりたるよしを答けるに、玄ゆこ
う玄がいはいく我は弓をいんこうしたにまなびいんこ
うしたは弓を君にまなへり、我君の術をもつて君を
害するに、玄のびず然れ共今日のたかひは我君の
命なれば捨られずといひて矢をぬきて乗たる車の
輪にたきつけやじりをぬき捨て、あたり中ても、儒子に害
なきやうにして矢をはなつて引ゑりぞけりと也、此
事義によくかなひたるゆへ、孟子是を取て教と玄給
へり

けいほうきそくの日

此事いまだかんがへす

吳子孫子張良陳平韓信に諸葛が術をそらんじ給ひ

吳子と孫子とは戰國の時の兵法の達人也すなはち

吳子も孫子も兵書をあらはして七書の中の一つな
りちやうりやうちんべいかん玄んは漢の高祖の臣

にていづれも名將なり玄よかつは孔明にて蜀の劉
備の謀臣なり

評、四段目の奥いそのせんじが舞に取ませ藤彌太
がはたらき尤氣を取ル仕くみ也さて土佐坊を善に
玄たて初段の口にかまくらにて誓紙を書せたる所
世上のいゝつたへを反へなして新しく今この場に
てよしつねにもせいしを奉り御父義朝公の重恩を
思ひよりともよしつね御兄弟へ共に奉公の筋を立
たる尤おもしろき玄ゆかう也べんけいが尻馬は番
場の似せ土佐正眞の土佐は忠信をたてぬき伊勢
三郎にうたれし所始終よくぬけたるもの也すべて
此段もあなのあく取みへすいかさま佳作といふべ
し

馬歷神

馬櫛と書べし腕の神なり

評、正俊と正尊とむかしより土佐が實名を二様に云ならはせるを據にして眞と偽とをわけ眞の土佐ぼうは正玄ゆんにして正そんが偽土佐なりとの事尤似つこらしき作意なりこれより奥のかんたんのまくらの一きよく諸見物ながことのたいくつを引たて罷顔いながはのよきやうとの取くみ尤さもあるべし

外題

○お初天神記

曾禰崎の天神のやしろの境内にて天満屋おはつ心中したるよりして此天神をお初天神とよびならはせり此淨るりおはつが心中の始終を作るゆへかく外題せるなり

げにや安樂世界より

此語田村のうたひの語をすぐに取りて書たる也あんらくせかいは極樂といふにおなじ示現はかりに形をあらはし給ふとの意なり

のぼりて民の賑ひを契り置てしなにはづや

是は仁徳天皇高津にのぼりなには津の體を見給ふに貢ものをゆるされて民が富さかへて賑ひけるを

御覽ましゝての御製に高きやにのぼりてみればけふりたつ民のかまどはにぎはひにけりと詠し給ひすへの世迄も此所の民のにぎはひをことふき契り置給ひしなにはづ也との事なりさて大坂をなにはといふ事はむかし神武天皇日向の國より御船にてのぼり給ふ時此所にて浪速く御船こえ難かりしかば此所を浪速の國と稱給ひし事日本紀にみへたり浪速もなにはとよむ又なみのあらき心にて難波共書みな此時の故事也さて大坂を三津の里共大江の岸共いふなり

三つづゝ十と三つの里

大坂三十三所の觀音のある所三十三所ゆへ三つづつ十と三つといふこゝの文句がら雅にして面白し近松が手段にあらずばかく優美にはいひがたかるべし是は伊勢物語の歌に鳥の子を十づゝ十はかさぬ共といへる詞がらをかりて書たり玄かも大坂を三津の里といふにいひかなへて三つづゝ十と三津の里と詞を引うつりたる所妙也大坂を三津の里といふは高津敷津難波津の三つある故也罪もなつの雲

つみもなしといひかけてなつのくもといふ
かほよ花

杜若の事也是も娥かほよみは妍みよき事故云かなへたるもの
也

てる日の神もおとこ神

神道にては日を天照太神とす天照だいじんは陰神
なりまかるをかくいひしはいぶかし但し日は陽な
るゆへ陰陽の方より取ておとこ神といへるならん
むかしの人も氣のとをるの大臣の君が鹽がまの浦を
都へ堀江こぐ

融のおといは嵯峨天皇第十五の御子也むかし加茂
川のはとりに家づくりして住給ひ六條河原院と申
す官位は従一位故大臣にてまします故大臣といふ
まは竈の浦はもと陸奥宮城郡にある名所也とをる
のおとい此鹽がまの景を都の宅にうつし給ひしが
今なにはの堀江をこく船の其まはがまのうらのけ
しきにて茶ぶね荷ぶねのかよひは鹽くみ船のこと
く也と也

弘誓の櫓べうし

くはんをんめぐり故廿五の菩薩の來迎のぐせいの

舟によそへていふ也ぐせいは一切衆生を広く濟度
せんとの誓願を立給ふ故まゆじやうのいのち終る
時極樂より觀音を第一として廿五の菩薩がぐせいの
舟にて來迎し給ふと也

法の玉ぼこ

玉ぼこは道といはん枕詞也故にのりのみちとのこ
ころ也

ふだらくや

普陀洛迦山とてくはんおんの淨土なり

久かたの

久かたは空といはん枕詞也空にまばゆきと云たる
ゆへ久かたの光とうけたり

光に移る我かげのあれ／＼はしればはしる是々又と
まればとまるふりのよしあしみるごとくこゝろもさ
ぞや神はとけてらす鏡の神明宮

この段文句はよく聞えたり空の日のひかりをうけ
てかゝみをいひ鏡は神の御正體ゆへまゐめいぐう
をいふ空にまばゆきと云出したるより以下の文句
みな神明宮をいはんためのまくら詞也まかもはし
ればはしるとまればとまる等の詞人形にふりを付

たるもの也女一人の道行ゆへながきもんくの中に
は此文句のごとき事あれば一入人形の所作がつき
てふりがあるゆへなるべし

御佛も衆生のための親なれば

一切衆生悉是吾子と法華經に説給ふにもと付てい
ふ也親の縁よりおはせと移たり

かもめなれも

鳥類畜類蟲などをよひてなれもといふ也歌ことば
なり

はづかしのもりて

はづがしの森といふ名所ある故それにかけていふ
也山城の國乙訓の郡にあり

七千余卷の經堂

一切經をおさめたる堂也一代の説經七千よくはん
なりと也

經よむ鳥のとき

ほとゝぎすを經よむ鳥といひ又はめいどの鳥共い
ふ此事くはしく十王經に出たり經よむ鳥といひて
すぐに日暮の酉の時といひうつしたる也

きぬくも

きぬくは別れの事なり

空にきえては是も又ゆくゑもゑらぬあいおもひぐさ
西行の歌に風になびくふじのけふりのそらにきへ
てゆくゑもゑらぬわか思ひかな此詞を取て書り相
思草にたばこの異名なり

夢をさまさんばくらう

獏といふけだものはよく夢を食ふといふ故事ある
ゆへばくらうといひかけたりされば枕屏風の繪な
どにおほく獏を書もあしき夢をくはせんとの心也
とかや

佛神水波のゑるしとていらかならべし

佛は神の本地にて神は佛の垂跡なれば神とほとけ
は水と波とのごとく也となりいらかは薨と書て瓦
なり棟をならべたるをいらかならべしといふ

さしも草

たいたのめゑめじがはらのさしも草われよのなか
にあらんかぎりはと觀音のちかひをよみたる歌に
よりていふなり

三十三に御身をかへ

觀音は人を濟度せんために三十三の身をあらはし

給ふ事くはんおん經にある故それによりていふ也
戀のやつこ

奴は下部の惣名なり然れども和語にやつこといふ
に二種あり一種は鍵持などの髭やつこ也是は常の
となへのごとくやつことよふべし又やさしき童僕
なんどは。や。つこトやの字を截てよぶべしこゝは
戀の。や。つこなるべし

とくる

あきなひ旦那をとくゐといふ事京大坂の常語なれ
共遠き田舎にはゑらぬ事也先年奥方の學者此淨る
りをよみて此詞をあんじ煩ひよし聞つたへし故
爰にあらはす

死手の山三途の川

めいどに死手の山とさんづの川ある事佛説に出た
り三途は火途刀途血途とて三つの途ありといへり
うつせ貝

身のなき貝殻なり

袖とくをまきのとや

和歌の戀の詞に待わぶる付合せに眞木の戸ざゝ
ぬといふ事ありこの本文も徳兵衛がまちたるにい

ひかけたるなり
道行
あだしが原の道の霜

あだし世あだし野あだちが原みな他の^{あだし}字を書てさ
だめなきあだなる心也さればあだしのあだしがは
らはおほく墓所を指ていふ今死にゆく身なればむ
ゑよへの道行の心也又あだちが原といふ詞もあり
大和詞にあだちが原とはおそろしきをいふといへ
り然ればあだちが原と見ても遠からずゑかれ共其
本意を取て道の霜といひ霜より取てきへて行とい
へる皆おもしろし

ひとあしづゝに消てゆく

道の霜といふより縁を取て一足づゝにきへてゆく
と受たる尤おもしろしゑかもひとあしづゝにきへ
てゆくの意は人の命の一日くゝにちゑまる事を佛
經に屠所の羊のあゆみにたとへたる語あり羊を殺
すものを屠者といふその屠者が羊を屠場へ引てゆ
くをみればひかれゆく羊は一あゆみくゝにておの
が命がちゑまるなれ共それをゑらす凡夫のいのち
のちゑまるをゑらぬもかくのごとしといへりこれ
らの心をふまへて書たるゆへ底に意味をふくみた

る文句也

夢のゆめこそあはれなれ

うき世は夢なるに又我身のいま死にゆくはかなさ
 さながらゆめの内にまた夢をみしこゝちなれと也
 此世を夢といふ事は佛説におほき中に唯識論に云
 いまだ眞覺を得ざれば常に夢中に處す故に佛説て
 生死の長夜とすといへり金剛經にも一切有爲の法
 は夢幻のごとし共いへり又詩にも人間一夢中など
 と作りて浮世のあだなるを夢にたとへたるこれら
 の語をふみて書たる文句なり

鐘のひびきの聞おさめ寂滅爲樂とひびくなり

涅槃經の偈に諸行無常是生滅法生滅——已寂滅爲
 樂と説給ふ此心はうき世のもろ／＼のものは一つ
 として常ある事なし生ずればかならず滅するの法
 也されば生じては滅しめつしては生じひたすら生
 滅を経て其終り寂滅と云づかに滅しおはりたる所
 を眞實のたのしみとすると云めし給ふ也されば今
 死ぬる身にじやくめつをたのしみとするのひびき
 也と聞とれば此世よりさとりしこゝろもちあり
 雲こゝろなき水の面北斗はさえて影うつる星のいも

せのあまの川梅田の橋を鵲のはしと契りていつ迄も
 我とそなたはめうと星かならずそふとすがりよりふ
 たりが中にふるなみだ川のみかさもまさるべし

陶淵明が歸去來の辞に雲無心以出岫といふ語あ
 りその外詩人の詞に雲の心なきを人情のうき思ひ
 の胸にふさがる目より見てうらやむ心多しこゝも
 其心にて書なせり我々はうき思ひにかきくれしに
 うらやましや雲は心もなく何の苦もなくみゆると
 也それより水の面とうつりて云々み川のけしきを
 いひしも彼の空はひとつに雲の波といへる心もち
 に書なし空の景氣と今目前の川邊のけしきとを打
 混じて上と下とでいひたる甚だめづらか也空のほ
 くとはこゝろよくさへて其かげ水にうつりてかゝ
 やくも我むねのくもりたるには事かはりてうらや
 まれわきてうらやましき事は七夕の星のいもせの
 ちぎりをこめ給ふ天の川もあり／＼とさぞな二星
 は千歳をうけてつきぬ契りをむすぶらんさらば我
 々もあやかりて今わたる梅田のはしをかさゝぎの
 橋とちぎりかならずそはんとすがりよる有さまそ
 の景その情その態いづれもさも有べしかさゝぎの

橋とは牽牛織女の二星落合給ふ夜かさゝぎがきたりて羽をのし天の川をわたすといひ傳へなり扱ふる雨よりいゝかけて川のみかさとうつりたるも筆のあゆみこゝろよくおもしろしみかさは水のかさ也水のかさ高くなるを水かさもまさるべしとはいへり

さくに心もくれはどりあやなや

應神天王の御時使を吳國へつかはして綾をる女をもとめ給ふに吳國四人の綾をり女をおくれり其中に吳織穴織と名付るありしゆへ是よりしてくれはどりといふ詞をうけてはあやとつゝる也爰も心のくるゝといふをいひかけてくれはどりと云たる故あやなやと受たる古歌の心になひておもしろし古歌にくれはどりあやにこひしく有りしかばふたむらやまもこえずなりにき

せめてまばしはながゝらで心もなつの夜のならひ心もなしといふ心をもたせて心もなつといひかけたり此類のいゝかけは結句きれいにして雅なり

だんまつまの死苦八苦

いのちの終んとする際のくるしみを斷末間のくる

しみといふ死苦はもとより死する時のくるしみ也八苦は人間の八苦なり死苦といひたる故八苦とうけたる是もいひかけの類なり

淨瑠璃評注卷之一終

淨瑠璃評注卷之二

外題

○安倍宗任松浦箋

此淨るりは伊豫守みなもとの頼義御子八幡太郎義家の兩將奥州あべの貞任宗任を退治して凱陣あり其後都にて山純親王のむほんをふたゝび平治しその上むねたふを度々ゆるし其終に奥州の舊地をあつたへ松浦黨と名のる事をつゝりたり外題當世の氣に應し諸人の評判よろし但し箋の字をきぬがさとあはめづらしき和訓なりと黒字を見知りたる人は咲するもいやとはいはれず

序

飛禽也恩將義を智る猛虎尙惠與仁ある治亂我にあり敵にあらず歸心叛意おのれが身たり同一甘味の民と君

この最初の二句は詩の語とみへたれ共其出所つまびらかならず其心はよくきこえたり空をとぶ禽だにも恩義を知りたけき虎さへ惠仁の心はあり是らにさへ恩義仁惠あるをみればまして人たる者誰か仁惠を捨んやまかれば此方よりさへよくあしらふ

時は敵となるもの有べからずたゞ世のみだれて敵多きは此方よりのもてなしのあしき也かくみる時は此方のまむけ次第なる程に治亂我にあり敵にあらず我にきぶくする心と我にそむく心とのさきさまに出來るは皆おのれよりの仕むけによる然れば歸心叛意おのれが身なるにあらずやさて右のごとくみる時は怨と情と二ツにあらず同一なりと也此序のこゝろ義家卿が宗任をしたがへさせ給ふをふまへていふ其文面よく意にかなひ面白し但し筆者のあやまりにや智の知の字を智の字に書たる見苦し又同一甘味の甘の字鹹の字にあざれば意義通せずその故いかんとなれば作者には御存なきかもまらねど此語はもと佛書におゝく出たる語也是は古歌にいふわけのぼるふもとの道はおほけれどおなし高根の月を見るかなと詠せしごとく佛のおしへさまに別るれ共つまる所の本は一理に落るをあかさんとて千川萬河の水その流のすじはわかるれ共おちこむ所は一つ的大海にして同一に鹹味となるのとたとへ也海水の鹹をいふなれば甘の字大にあやまれり作者よく／＼引るゝ所の本書をみ

られよかし

上意にまかせて天奏をもつて上聞に達せしに

天奏は傳奏のあやまり也堂上に議奏衆傳奏衆とて事を天子へ奏する役なりその内に傳奏は別して武家の事を奏するゆへ武家傳奏共いふいま天の字に書たる笑ふべし又上聞といふ詞も天子へそうするには耳なれぬ詞也但し今の淨るりには何方もかくのごとき胡椒丸のみなる事多し然ればかやうの僻言は當世淨るりのはやり物共いふべし

大みや人

禁中の人々を指ていふ詞也

うぐひす蛙も歌をよむ

かはつの歌はむかし紀の良貞といふ人住吉もうでの時浦の草をもとめに出けるに木の下にうつくしき女の立居ければ心をかけていゝよらんとするにかの女今は露ばかり思ふ事ありかさねて爰にきたり給へかならず相見んとちぎりてわかれし故其明る年けいやくのごとく良貞又かの浦に出て待けれ共其女は來らずしてたゞ砂の上にかはづ有て前わたりせしかば其蛙の跡をみれば卅一字の歌也すみ

よしのうらのみるめもわすれねばかりにも人に又とはれぬる良貞おどろき是を見て扱は過し此女とみしは此かはづよとそをりける又鶯の歌は孝謙天王の御宇に大和の國たかま寺の軒端の梅へうぐひす來りてさえづる老僧その聲を文字にうつせば初陽毎朝來不遭還本栖とあらはれて是を和調にてよめばはつはるのあしたごとにはきたれ共あはでぞかへるもとのすみかにといふ三十一字の和歌なり

しとかや

周處心をあらたむれば忠孝のほまれをとる

まうまよは三國の時呉の人なり里人に迄おそれられて周處が三害とて三ヶ條の害の内へ入し程の惡人なれ共後には大將となりて忠孝のほまれを取れり

なんぢ豫讓が義を思ひ

晋のよまやうといふ者主人の敵趙襄子を討んとねらひたりしを一たんでうぢやうしにとらへられたれ共主の敵をねらふ忠義のこゝろざしを感じてたすけし事也まかれ共其後橋の下にふして趙子をねらひし故後には殺されたり

評、初段すらりと大概きこへたとをり也さして替し^{かへり}玄ゆこうもみへず文句もありべかゝりの内に匡房おつばねなんどのせりふ余りいやし過てみゆる所多し

衆愚の謬々いつはりの變言

衆愚はおほくの愚なる者といふ事謬々はげうげう敷ていなり

圍碁

碁をいごとといふ但し碁を打を碁を圍といふゆへなり

もろこし玄宗皇帝すごろくをもつて后をさだめしためし

此事通鑑の唐書又は唐鑑などにはみへず小説の中にあるにや

いざ手談と

碁をうつを手談といふ相手向ひに手にて談といふ心なり

評、碁の所おもしろし殊にごばんがすぐに八幡太郎の堀を飛で切付らるゝの用にたち其後まさふさの北の方が早成へ碁石を打付らるゝ場にても入用

のものとなる道具はかくのごとく始終用に立やうに遣るゝ事尤働なるべしある人のいはく初段より二段目の段切迄打みた處がさなりとして譯はよく聞へ氣のつきぬ藝とはみへたれ共底に意味のある事見えす何とやら請取ぶしんをみるやうによみがこまぬと存する、答尤さる事有べし然れ共せかいの事は一概にいはず見物にさまゝのすきこのみあり是を料理にたとへていはゞ下戸の口と上戸の腹と物すぎがうらはらなるごとく其藝の見手によりさなりと云たるが氣にいる有りねちみやくしたるを好もあり兎角何をまいらふも云れぬは客の心也殊に云はるでのあたりは第一あやつりのはなやかなるが肝要にや此二段め八まん太郎の玄のびの段前太平記の移りにて趣向はありべかゝりなれどあやつりの踊どうもいはれず是を思へばあたりを取は陰の舞の理屈よりは目の前で仕てみせるか十分の理也玄ゆかうがわるふ入くめば一段で一場程つつ長物がたりの居せりふえらぬ京物がたりにけんぶつの精をつからす事又ある事なるへしされは近比ある人の説にあやつりを見やうならば今の

まばゐにまはなく本を讀てたのしむには中古近松が作にまはなくといはれしごとく連も文句のうへでは今時は人のなぐさみになる程の事なければ太夫衆の音曲とあやつりの色どりにて評判をたのむも一手だてといふべきかまはれば場所により趣向もさうりが勝なるべし

桃蘭

源氏の先祖六孫王經基まんの王の事也

本國河内へ引こみ

かはち石川郡香爐峰今いふ壺井通法寺也山のうへに頼信よりよし義家三將軍の墓ありつばゐごんげんとあがむるも右の三將軍を祭る也又壺井と名つくる事は頼義奥州の水を壺にいれ本國へもち歸り此所に井をほりて其水をうつし給ふゆへなり

六任の兄弟

貞任宗任家任重任正任則任なり

青龍朱雀白虎の旗

天の二十八宿を四方へわかし四方に名あり南をまゆじやく東をせいりう西をびやくことす即ち天子即位の時にかたどりたるはたを立るなり

波羅門白駝四天王

ばらもん王はくだ王四天王みなあらき姿なる故いきほひのはげしきにたとふ

韋駄天班足王軍多利夜叉提婆達多

いだてんは足疾鬼を追給ふ天部也はんぞくわうは天竺にて暴惡の王也ぐんだりやしやは五大尊の一つ也だいはたつたは釋迦に敵せし惡人にて法華經につまびらか也

倭人賢人に似たれば非もまた理にまがふことはり

この文句古語にはあらね其此道理なるがゆへに作者の筆さきにて古語のやうにつゞりなしたるならん

もろこし陳の大夫に秋胡といふ好色者わか婦とまらで戯れ後代のそしりを受る

まうこは魯國の人なり春秋の時陳の哀公につかへて太夫となり楚より責られて陳の國やぶれしかば城の東門よりぬけ出て古郷に歸らんとするに既に古郷に近く成て平山桑埠の間をとをりしにひとり婦人桑を取居しをみるに其かたち甚だうるはしかりければまうこ是を戀てたはふれ寄女の心を引

見んために云けるは百姓の耕作を精出すよりは豊年に出合たるがまされり織おんなの桑を取事をはげまんよりは一國の卿太夫にまみへて寵愛にあふがまされり今婦人終日桑を取給ふ共筐かたがにも満じもし我心にまがひ給ふ物ならば我に金あり婦人にあたへて辛苦をたすけんとして金を出してみせければ婦人こたへて云桑を取て絹をおり辛苦して姑婦をやしなひつかふるは婦たるものゝさだまりし道也我には夫ありて今他國につかへたり我金をもとめず又太夫にまみゆる事もねがはず君はやく其金をおさめてかへりたまへといふ折ふし秋胡が僕ども來りけるゆへ其まゝわかれて立去まうこは古郷に歸り着けり此まうこといふ者五年いせんに妻をむかへ五日過て陳へ行つかへたりしが此たび久々にて歸りし程に老母よろこびて對面しるすの内は嫁の白氏みづから桑を取てよくやしなひよくつかへし事を語りてかの嫁をよび出してあはせければ最前平山にて桑を取居たる婦人なり夫婦と成て間もなく久しくわかれ暮せし故双方共に見わすれてかくのごとし白氏おつとを見ておどろき泣てはち

しめて云君先年妻をよひて五日ににして遠とほくつかへ母に別るゝ事久し今日古郷へ歸らば萬事をなげうつて途を急ぎ母にまみへてやしなふべき事なるに途中にして女にたはふれ母の孝養にそなふべき金を捨てしや母をわするゝは不孝也色をこのみて行作をけかすは不義也親につかへて不孝なれば君につかへて忠あらじ家に居て不義なれば官みやつかして理にまがはじされば我は君をみるにまがひず君他の婦をめとり給へといふをはりて奥に入りうしろの園よりぬけ出て河に身を投て死したりまうこ大におどろきて我あやまりをくやみ泣かなしみて白氏か死骸をほうむりふたゝひ奉公の心なく一生母をやしなへり魯人白氏かために廟を立年ごとに祭をなし潔婦の社とあがむといへりあやまちを改るにはいからずと申せば論語に出たる孔子の語なり

冥途黃泉

大友眞鳥の抄に出せり評、三ノ口趣向おもしろし忍びの段の浪人が夫婦のやくそくを云立て景正を不義ものといふを義家

卿もつともとしてかけまさを罪に落し給ふ所すこ
しまだるきやうなれ共奥で打わつた所が元來義家
卿がつてんの謀なればさも有べし惣じて大塔宮の
三ノ口程にはみへ侍る第一玄ゆかうの筋が先へ少
しもみへぬ所が何よりの珍重此場より奥迄よく練
れたる玄ゆかうとみへて當目がたしかく

ある人難じて云むかしより女を男の體にやつした
る事は本朝にも其例を聞及ぶ事あり此段のごとく
男を女に玄たつる事其ためしをきかずちかくはか
ぶきの女形などうつくしき變童やまごを地女の臙粉いろうどより
もなをこまやかに飾たるもの故打みたる所は取な
り物こし女に正のやうなれ共よく氣を付たる時は
あるひは手の筋あらはに青みだち喉骨高くあらは
れ中々眞の女とは格別なる所ありいかん、答云難
のごとく男を女に似せたる事狂言には多き事にて
實事には見及ばずもろこしの歴史などにもみあた
らぬ事也但し魏普以來六朝の雜傳をあつめたる歴
代披砂といふ書にたま／＼此類の事あり晋の惠帝
くらゐに即て至ておるか也その妣賈皇后淫亂ほう
いつのあまり近侍の宦官共にひそかに命して市井

に人をつかはし美少年の者あればたまし誑て後宮
へ召よせ給ふに内外の目をおほはんためかの少年
を女儀に出立せあまたの女官の中にまじへて給事
させ給ふ故惠帝をはじめ朝廷の大臣もその事を玄
らざりしと也是をもつてみる時はたま／＼其例な
きにしもあらずといふべし

是人於佛道決定無有疑

法華經其外の經にもおほく出たる語なり此文の心
はこの人ほとけの道においては決定して疑ふ事あ
る事なしと也

評、三ノ奥一場注の入るべき文句なし但し諸見物
ひいきせぬ方の最後故かうれひは玄みりとせざ
れ共りくぎのやりかた十分こゝちよし但しこしも
と共が噂のあたりより奥方鶴はぎの口上などに少
し奥へ氣のつくべき文句ありそれ故か此所ではそ
ろ／＼筋みへるこゝちは是は作者が奥のこゝろを心
にもちて書れしゆへ思はずえらす其もやらかふで
さきへあらはるゝ成べし但はもろ／＼見物へのみ
こましもてゆく合點でわざとかふ書れしかそれな
ればわるい合點惣じて先を隠す事は随分かくすが

宜そうに思はるゝ事ぞかし勿論おゝとうの宮などは三ノ奥におどり場で身がはりを切る下づくろひに三ノ口に燈籠づくし齋藤が切子の使者又奥の口あけに右馬頭がおとりなど先のみへるやうなれど是は肝心の趣向にはちつ共かまはぬ事にて亥かも其狂言の時節盆の比ならねば宮の首きる場になりて俄におどりを始ては時ならぬゆへ見物の氣がけうとく萬一わるふ吞こみて踊に物のあるやうに成ては主意の邪魔になるゆへに是はわざと手まへよりそろ／＼おどりをもよほして踊の時節じやといふ事を見物の蟲にがつてんさせんためなれば此格とは別なるべし亥かし此やうにいへばとて此場に疵を付るにはあらず是は榮耀の上のせゝり箸とやら先は三段目口奥共十ぶんの大出来文句々ゆかう共諸人の難する所なくみな當りとの評判なり

○道行

注なし

評、此道行ざしき淨るりにしては差たる事もなければ共芝居ではあたりを取る文句共おほく尤花やかにおもしろし

鳳凰は徳を見て下り鳥は視肉しじくにまよふとかや
この語文選に見えたりほうわは諸鳥の長にて聖人の世ならではあらはれず雄を鳳といひ雌を凰といふ羽蟲三百六十の長也からすは注に及ばず視肉は鳥けだものなどの肉のある所を見てまよひくたるとなり

もろこし郭巨といふ者母にちぶさをあたへんとて我子を土中に埋しといへり

くわつきよは廿四孝の中の一にて此事廿四孝傳にみへたり此時くわつきよ土中をほりて金釜を得たりと有りそれに付釜は斤目の事にて金を釜ほど得たりとの義なるを此方にて取ちがへ金のかまを得たりと訓故繪又は作り物などに釜を掘出す體をなすは誤也

評、道行の奥の場より段切迄々ゆかう文句共に上吉飛脚の籠をやく所一際おかしく奥にいたりてのうれひあはれにひあひに別して女中などの好そくないきかた也吃の置みやげふし事の段だてにあはれに面白し終にはおさな子は命たすかり結局沼太郎が思ひかけなき切腹さいごの際に吃のなをり

たるいゝわけの所きつくりと見物のむねにこたへて尤らしく女房かたわのなをりしに付ていとくやみなげきの體人情の感するだゝ中始終この段も上出来なるべし

ある人難して沼太郎が心の職を切てより物いひが正しき事舌は心に屬する故との事はきこへたれ其心は眞君の靈府なればすでに心を傷て暫時も精神の有べきやうなし然るを辨舌が正しきなをどゝは醫經にうとき事也とさみせり尤狂言綺語とはいへとかく難すればいやとはいはれず然れば筆を下す時少しは學文の心もつけらるへき事ならずや

諸神もとより形なし正直をもつて心とす虚靈不昧の御神徳

是も古語にあらず作者のつゞりたる文句なり神體は鏡の中のむなしきがごとくさだまれる形なし神はたゞ正直を心として物をてらし給ふ事かゝみの體の虚靈にしてくらからざるがごとしと也虚靈とは形は虚して玄かもあり／＼と靈なるをいふ不昧はかゝみのくらからぬにてすなはちあきらかなる事也

野夫漁人

野夫は土民をいひ漁はすなごりにて魚をとる人といふ

御鬱然をほらせ給ふ一興

この然の字あしく惣じて然の字を卒然儼然鬱然などゝ用ゆるは形容字として其體をかたどるための付け字也それゆへ鬱然としてとよまるゝ所ならでは用ひてのらず是等は作者が文章をえらざるのあまりなり

冥感

惣じて佛神のたすけは目にみへぬ所より力をくはへ給ふ故冥の心にて冥感の冥加のなどゝいふ詞を用る也

酒宴たけなはの折から

酣の字を書て半酔半醒の時をいふと注する字なれ共古來おほく熟酔の方へつかふ也軍にても酣戦といへば戦をはなはだきびしくするになる也

五調

五臓がよく調和したるといふ心にて用ゆれ共漢文には見あたらす誹諧師などのおほくもちゆる事なり

猿田彦

神事の先へ惡魔をはらふ鼻高の事なり

外題

○北條時頼記

此淨るりは最明寺殿鎌倉執權の時節の事を取くみて末には近松の殘し置れし女はちの木ノ雪の段を切くはせて始終をよくむすびあはせたりそれゆへ北條時頼記と外題を置也

序
葵の花は日を見て轉じ芭蕉は雪を聞てひらき

此事圓機活法又は本草綱目などに当たり

桑の門薙髮

出家は樹下石上とてさだまる家なくあるは落石のうへにたゝすみ又は樹の下にやどるものゆへ桑の門といふ薙髮はかみを薙ことにてすなはちまゆつけする事なり

將軍職の除書

將軍職に任せらるゝの書也惣じて官位をさづけらるゝを除せらるゝといふ但しふるき官を除といふ意なりとかや

唐の盜跖が邪智

とうせきはいにしへのぬす人也伯夷といふ賢人は飴を見て此食物は老人の口をやしなふに便よき物也といふとうせきは飴を見て此ものは盜に入るとき鎖にぬりて鎖をあくるにかつてよきもの也といへりとかや

節刀といふ

天子より將軍よりよくをたまはるしとて斧鉞刀旗などを給はるを都て名づけて節刀といふ也

かのもろこしの鴻門の會沛公がまぬかれし頂伯が恩陳平が情

沛公は漢の高祖也楚の頂羽關中に入て鴻門に陳を取し時苑増がすゝめによつて高祖をまねき酒えんのうへにて劔をまはせ沛公をうたんと計しを頂伯と陳平とがなさけによつて其座をまぬかれ給ふ事史記および前漢書にみへたり

功有て賞せず罪あつて誅せずんば唐虞といへ共化する事あたはず

唐虞は堯舜の天下をおさめ給ふ代の名なり化とは治化教化とて天下をおさめ給ふをいふ此語は七書

の中に出たり

孟宗郭臣

もうそうもくはつきよも二十四孝の中の人にて兩

人共に親孝行の名をえし人也

魍魎鬼神

もうりやうは山の神の類也鬼神も山川などの鬼神

なり

壽をやしなふものは病にさきだつて藥をぶくし世を

おさむる君は亂にさきだつて賢にまかす

この語の心なる文句は儒書又は醫書にもあまた有る事也但し正しく此語の出所は見あたらず古語に

はあらず

謀計は眼前の利潤といへ共終に神明の罰をかうむる

天道の正直にまかせずして私の謀計にてりまゆん

を得る事有といへども終には神罰をうくると也此

語は三社の詫宣に出たり

もろこし周の世に魯國と戰ふ事あり一人の匹夫二歳

の子をすて十歳の子をつれ走る

この本文のわけはよく聞えたり此事は左氏傳に見

えたり

○道行

此道行大概上々の出來なり但し注におよぶ事なき

ゆへ略しぬ

道行ノ奥

こも僧まゆぎやうのぼろ／＼と

こもそうの事をぼろ／＼と名づくる事つれ／＼草

に出たりみなかみは京都明あんじ元祖は普化せん

じ也むかしはこも僧といはずしてぼろ／＼といひ

けるとなん又尺八を洞簫なりと思ふ人あれ共さに

あらず洞簫は今いふ一重切の事也尺八はむかしよ

り尺八と稱す羅山文集に尺八の賦出たりかにかへ

みるべし

世の中をいとふ迄こそかたからめかりのやどりを何

をくむらん

西行法師の歌なり

げに人間の一生は岸のひたいの根なし草

身を觀すれば岸のほとりに根をはなれたる草いの

ちを論ずれば江のほとりにつながざる舟といふ詩

の句を取て書たる也

發心門さりの門

はじめてばだいにこゝろざしたるがほつゑんもん

也後にぼだいをさとりへたるがさとりのもんなり
さとりのもんはすなはち悟道門なり

易行門難行門

他力念佛などが心やすき修行ゆへ易行門なり戒を
たもち座禪する等がむつかしきまゆぎやうゆへな
んぎやうもんなり

觀念門天臺二十四門

くはんねん門は天台止觀あるひは一心三觀などし
て空假中の三諦等の佛法の一大事をくはんするを
いふ天台の廿四門は右のほつしんごだういぎやう
なんぎやうもん等みなその内なり

空門非空亦空門

これも三諦より出たる事にて諸法を空とくはんす
るを空門といひ空にもあらずとくはんするを非空
門といひ空にあらざるにもあらずとくはんするを
亦空門といふみな佛學の奥義なればたやすくえと
くせらるゝ事にはあらず

評、五段目にいたりては近松の作の女鉢木雪の段
を切くはせて五段の都合首尾まつたしかく古き名
作物を取合せ給ふ所偏に作者の機轉也さるにより

此じやうるりは大評判にて今も人のよろこぶでき
物なりさて奥には最明寺の道行の謠の出端ばかり
にて淨るりに移る文句よりして道行の間はぬけた
るか此道行の文句には筆勢のおもしろき事共多し
まづ蝶のつばさのおしろいをくさにこぼして梢に
は鶴のまもげをぬぎかくる雪は花より花おほきと
書る所圓機活法の雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を
出して石曼卿が雪を詠せし詩を出せりその詩を和
語にうつしたるもの也其詩に云、蝶遺_ニ粉翼_一輕難_レ
拾、鶴墜_ニ霜毛_一散未_レ轉といふ二句あり是をなを
して右のごとくにつかりしは彼の樂天が青苔帶衣
掛_ニ巖肩_一白雲似_レ帶繞_ニ山腰_一の句を苦ごろもき
たるいわははさもなくてきぬきぬ山のおびをする
かなとなをしたるにもおとるまじ殊に雪を六出花
と名付るは常の花は葉が五ツづゝ出るもの故五出
といふ雪のみごとさは花にまさるの心にて唐人も
花のうへをゆくの心をもつて六出とよぶの意によ
りて雪は花より花おゝきといへる尤佳作にあらず
や其外雪中に最明寺一人道行し給ふを見立てさな
がら雪の一筆鳥といひからすの縁よりお羽打かれ

しといひ其むすび文句には叡山の僧正の雨ごひの
勅をかうふり給ひて詠せるおほけなくうき世の民
におほふかな我たつそまにすみぞめの袖といふに
よりて浮世の民におほふかなの句をもちゆ一句
一句意味ふかく筆さきかんばしゝさて道行奥にい
たりては宿をかりかけ給ふ時墨のおれか木のはし
かとあるはつれ／＼に法師ばかりうらやましから
ぬものはあらじ人には木の端のやうに思はるゝと
書しをかたどりたる詞さながら最明寺殿の詞共思
はれ又娘がこたへ鼻そげでもいぐちでもの詞大に
下へ落て見物のはづみをうけ又其跡をおさへて天
下をさばく御身にも此へんとうにゆきくれてたゝ
ずみ給ふぞ玄ゆしやうなるとは又及ばぬ手段にあ
らずや爰の問答一人は天下の執權職ひとり是在所
の若むすめ諺にいふ下駄とやきみその相手とも其
相應にせりふを付られし事自然とそなはる妙手な
るべしさて爰の娘が詞について思ふに惣じて今の
世下がゝりにあらざれば下へはづますさりとて下
がゝりを無調法に書くすせば千枚ばかりの女形を
みるやうになり一向下鄙てけうかさめるさればこ

このむすめがせりふの跡天下をさばく御身にも
語にあらずんはなか／＼花車にはおさまるへから
ず然る時はおかしい事げびた詞も跡のおぎなひや
うにていやしからず天下取の御前でも耳にたゝぬ
やうにもなるものなるべし其外評したき事山々な
れ共此淨るりにかざるにあらねばまづは筆をとゝ
めぬ

太上感應編といふ書をみるに趙州の奥に白虎山と
いへる深嶺ありその峽に鳳鳴觀といふ道士の庵あ
りある夜雪いたくふりすさびて暗夜のけしき常な
らぬに扉を玄きりにたゝく者あり道士立出何者な
るぞとたづぬれば平生おとづれを通じてむつまし
き麓の農民胡班といふものゝ娘也此むすめよはひ
二八計りにして近所に名を得し美女なりしか心に
願ふ事有て此峰の絶頂なる神の祠にまふで日の内
に歸るべきをいかゞしけんをそなはりし内雪にふ
ぶかれ道にまよひ這々夜に入てこの觀にたどり着
たる也道士うちへ入るゝ事をゆるさすして云せつ
てうよりは是迄さへあゆみ來られしうへはよりふも
とへは程近し今すこしの艱難を去のぎ我家へかへ

らるべし若き女性を此庵にとゝむる事かなふへからずといふ娘聞てうらめしく此庵迄たどり着をちからにして來りしを何とて扉をあけ給はぬ日比親たちのよしみは思ひ給はずや其うへ此山中に人倫はなれておこなひすまし給ふ身がわかき女をとめたりとの世のそしりをはかり給ふは扱は塵の世をはなれ給ふの道心はおはせぬかやととがむれば道士聞ていやとよ世のそしりはまばらく置我いまだ道義を修するとはいへ共猶いまだ肉眼なれば御身が色のうるはしきを人なき庵に引いれさし向ふて見るならばいかなる煩悩かおこるべき然れば某がまゆぎやうを害する惡魔外道心魔をふせぐためなればやどりはふつゝかなはずと彼かあはれをよそに見捨身のつゝしみをなしたるとなん是に付て思へば最明寺どのをやどさゝりし娘が遠慮もさる事なるべし殊に最明寺どのほ道德すぐれ給ふ故世には老人のやうに思ひなせ共三十歳にて入道し給ひ卅七歳にて逝去し給へば回國は三十一二歳の比にて男ざかりなる時は其身はたしかにおぼゝめす共わき目にうたがふもことほり也されば人ごとに

たしかならぬ心をたのみて我身を正しきものと思へど心ほど手綱のゆるされぬものはなしされば孔子は心を論じて出入時なく其向ふ所をまらずあやふき物也との給ひ別して佛法には心は縁にひかれてはさまゝに變ずる事を説給ふまかるに佛心はいかなる縁に出あひても其境につれて變ずる事なき故に是を不變眞如といふいまだ佛心にいたらぬ内はいかに道德の人たり共惡縁にひかれては惡業におちいる事をまぬかれず故に衆生の心を隨緣眞如とはいふなり是によつて佛説には心は孤生こせいらずかならず縁に詫て起るといへり此心を書寫山一雨ときこへし僧の歌に にははずばそれ共まらじゆふま暮心をつくる梅の下かせと詠せりうす暮の比むめの樹のあり共まらず心せはしく打通りしを風がもてくる匂にさそはれ心ときめき色よき花の咲みだれしを打ながめてはあかぬ思ひになすみ終に下陰の立さがたきも縁にひかるゝのゆへなるべし

淨瑠璃評注卷之三

外題 ○大内裏大友眞鳥

むかしの内裏は今の内裏よりは廣く大きにして南北卅六丁東西二十丁なりそれゆへ今の朱雀が古の内裏の朱雀門の跡也今の東寺が禁中の鴻臚館なりしを後に弘法大師へ給はりたる也かく廣大なりし故大内裏といふ眞鳥筑紫に於て是をうつして宮殿を作りしと也大友の眞鳥は人皇廿六代武烈天王の朝に仕へし人に眞鳥宿禰とも又は平群大臣ともいふありて勇猛なる公家あり此人の曾孫に大友金鳥といふ人勇氣大膽の武夫なりしが後に曾祖の名を取て大友眞鳥と名のり筑紫にをいて謀叛をおこせしを朝廷より宿禰金道に敕して誅罰させ給ふ此淨るりの全株眞鳥がむほんを金道が退治せるを主意にのするゆへ大友眞鳥を外題とす殊に大内裏を立たるが大事ゆへ別して大内裏とは題號せり其實記は近年板行なりし大友眞鳥軍記といへる軍書にくはしく記せり

○周の世に八士あり一母四乳の伯仲叔季雙生るゝ王佐の才

この事は論語に出たり八士とは八人の學者をいふ周の世に一母雙生を四たひに乳て兄弟八人を出生せり四乳とは四たひに乳といふ事也伯中叔季とは唐にての兄弟の次第也日本にてもむかしは宗領を太郎とよび次男を次郎三男を三郎などゝ次第して呼しごとくに宗領を伯とよび其次を仲とよびその次を叔とよび末子を季とよふ也故に太郎次郎三郎四郎といふがごとし扱ふたごを雙生といふは即ち雙生るゝといふ意也王佐の才とは天王の天下を治め給ふを佐る程の才能といふ事也周の世に此兄弟八人が士となり天下をおさむるほどの才能有しと也是迄雙生の才能すぐるゝ事をいひて金道になぞらへたる也金道はもと雙生なるゆへなり

人に雙生樹に連理康叔が二穗の稻王濬が二莖の瓜人に雙生ありて其才能すぐれたるをめてたき御代の吉瑞とするのみならず樹には連理の枝をめて度事とす連理とは根が二株にて枝が一つにつらなるをいふ康叔とは周の文王の子にして衛の國の君也

此人が衛をおさめたる時異畝同影として田地のなら
び畝に禾のかぶは二株にて畝を異ながら穂先が一
つになりたるを吉瑞也とて天子へ奉りければ朝廷
にもいわひ給ひて嘉禾といふ文を作り給へり王濬
は晋の武帝の時の人也此王濬といへる人の園の内
に瓜の莖二本が一つになりてその末に瓜が一つな
りたるを是も吉瑞として天子へ献じて祝へり是み
な人の双生のごとく天下の吉瑞とする事也されば
金道の双生にて有しもめでたき御代のためしとな
り

みな是代々の吉瑞のためしを爰に日の本や文武天王
の皇居ある藤原の宮所

吉瑞とはめで度瑞相也上にいふ所の吉瑞ともものた
とへをこの國へひくといひかけてたとへを爰に日
の本やといふ金道の時は文武天皇の御宇也此時な
らの京ゆへ藤原の宮所といふ宮所とは天子の御所
といふ事也是も古は下々の屋敷をも宮所といひし
を秦の始皇の時より始て天子の御殿にかぎりて宮

所といふなり
壤

土地がよく腴こへて膏のあるごとくに潤として柔なる
をはらゝぐといふ是は書經の禹貢の篇にみへたり
今上

何の代にてもその時の帝を今上皇帝といふ也
聖徳ふかく

聖とは徳の至極にいたりたるをいふ
神代の古風

天神七代地神五代を神代といふ此時は上代ゆへ上
下共に人の心すなほにして質朴なる風なりしを古
風といふ

四十二世

文武天皇は人皇四十二代なり

律令をはじめ給へば

律令とは朝廷の法度おきてなり

禮樂たゞしく

天子の天下をおさめ給ふ根本が禮樂なり禮は貴賤
上下の等をわかつて其身の節につけて衣服道具等
も次第あり朝廷のつきあひにも貴人をうやまふ等
也樂は聖人の道徳をうたひて樂に合せ舞也是も禮
がたゞしければ貴賤上下のあらそひなく上下が和

して樂を用る故禮と樂との二つが世を治むる本となる也

主水司の貢の冰ひむろのもたひ

禁中にて水を支配する役所を主水司といふ六月朔日に主水司より舊冬の氷を奉る是を氷のためしといふ四海ゆたかなれば其氷とけずしておほく有といへり是は山里に氷室とて冬のこほりをたばひ置室をこしらへ六月朔日に其里人が主水司の取次にて天子へ奉る也毎年きはまりて春日野のさと人が献するが佳例なり貢とは下々より君へたてまつるをいふかすが野とは今の奈良なり

深山幽谷

おくふかき山を深山といふ歌には深山とよむ也おくふかき谷を幽谷といふ也

陽氣におそく發するゆへ

草木みな陽氣にて發生する也春は陽氣が發する故梅さくらに花さくが常なれ共深山幽谷は寒氣つきゆへおそく發するなり

鳩は三枝の禮ある鳥

鷗夷全書云鳥有三反哺之孝二鳩有三枝之禮云々鳥

は巢だちして後おや鳥へ哺をふくめ返すもの也是すごもる内におや鳥に哺をふくめられし恩をおくるの心也鳩は木の枝にとまる時おや鳥よりは三枝づゝ下にとまるもの也これ親をうやまふの禮ある心也されば詩經にも諸侯の夫人を鳩の性の專一なるにたとへてほめたる事あり

鷹は鷲鳥

惣じて鷹はやぶさくまたか鵬などの諸鳥を鷲鳥うづとりをすべて鷲鳥といふ同じ鳥類の命をうちとるゆへ惡鳥とする也

仲春の月鷹化して鳩となる事禮記には見へたれ共禮記に月令篇とて十二ヶ月の月々の氣候をえりして其時をえり天下へ令し給ふ事をえりしたりその中にこの語出たり

天地の變怪

天下に惡事おこらんとてはさまざまにあやしき事あるを變怪といふなり

百官百司

禁中の百の官人百の司なり司とは一役をつかさどる役人なり

躑躅と

けだものゝ兩足を折ておどる體を躑躅といふさればつゝじの花を躑躅花といふも此花のつぼみ羊の乳によく似たるゆへ子羊が是を見て母の乳ぞともひて躑躅と足を折ておどる故也とぞ

小牡鹿

ちいさき牡鹿をいふ

秦の趙高

秦の始皇天下を取てのち諸國をめぐりて途中にて崩す李斯といふ者と趙高といふものと兩人共に佞人にて始皇の太子扶蘇といふ人の正しき人がなるを忌恐れ此人を嗣にせずその弟の胡亥といふ人の愚なるをかれらか便として始皇の遺言也と偽りて扶蘇を自害させ胡亥を位につけたり右の趙高はもと宦官とて女中につかはれ奥方へ徘徊し始皇の氣に入て御前近く立身せし者なるが此たび我はからひにて胡亥を位に立たるにはとり朝廷の臣もしおのれを恐れざる者はたちまち罪に落しけるが猶も己れが權威を試んとてある時鹿を奉りて馬也といひければ胡亥あやしみて羣臣に間にみな趙高が

權威におそれいかにも馬也とこたへし也是より人をうつけにしては馬鹿なりといふ詞はじまれり
前表

先だつてあらはるゝをいふなり

九州の探題

探題とはもと大内にて政をゑらべ給ふ役にあたるをいふ但し題を探といふ事にて古文をぎんみしてゑらぶる意也諸國にて一方の惣頭となるをむかしは探題といへり眞鳥は九州の旗がしら故かくいへりされば今の俗に物をぎんみする事をたんだへるといふも此こゝろなるべし

靈佛靈社

靈はあらたなる事をいふ

兩部の社

神道に唯一と兩部との二つあり伊勢加茂などのごとき佛をいむは神道一すじに立るゆへ唯一神道といふ兩部といふは神道に佛法をまじへ神の本地は佛にして神は佛の垂跡也と立る故神佛を合せて兩部といふなり

武士

武士をものゝふといふは日本のむかし物部氏の人
朝廷にてはじめて武官をつかさどりたるゆへ後の
世迄も物部とよぶなり

兵部省

省は禁中の役所なり禁中には八省とて八所あるそ
の中に軍兵をつかさどる役所を兵部省といふなり
つの髪

わらべのひたいの兩旁に髪をつかねて結たるは角
のごとくにみゆるゆへ唐にては童のまへがみを卍
角共又總角共いふ和訓にて角がみ共あげまき共い
ふ也みな前髪の事なり

不肖

我身を卑下する詞也もとは肖にざる事にて賢人には
肖にざるとの意なり

とび梅の筑紫

菅承相つくしへ流され給ひ都の梅を玄たひこちふ
かば匂ひをこせよ梅の花あるじなしとて春なわす
れそと詠じ給へば都にのこし置れし梅たちまちつ
くしへとびさりしとの故事をふまへていへり尤作
者の頓作なり

堂上堂下

公家衆を堂上方といふいづれも官位を経て御殿の
堂上へあかり給ふ家なる故也公家にあらざる官人
を堂下とも地下人共いふ堂上へあがる事を得ず階
下に伺候するゆへなり

軍神の血祭

軍に出る時に軍陣をまもる神を祭るにはけだもの
の生血をそゝぎ其肉をそなへるを血まつりといふ
唐よりして其ためしある事也

馬鹿

上に出たる故事をふまへて馬鹿もなしと書たる作
者のはたらき也

王化

天子の教化といふ事なり化はおしへなり

ふりわけ髪

いとけなき時のまへがみを中より二つにわけたる
をいふ歌にくらべこしふりわけがみも肩すきぬき
みならずしてたれかあぐべき

三種の神器

天子の御位をゆづり給ふに此三つの御寶をゆづら

せ給ひて御ゑるしと之給ふ神璽寶劔内侍所なりこの三つ代々の天子御くらゐをまもらせ給ふ御たから也

瀟湘の夜の雨

からの八景のひとつ也うたひの文句を直に引もちひたり

手向山

たむけは近江の名所なり菅家の御歌に大和なり大和山城の境に此たひはぬさも取あへす手向山もみちのにしき神のまに／＼

かたそぎや

やしろの棟のかつほ木也上代は質朴にして神の御殿も茅ぶきゆへ風をおさへるためにかつほ木をもちゆかつほ木は風おさへ木といふ事也その端をそぐゆへかたそぎといふ是も神代の神は内へそぎ人王以後のかみは外へそぐ也口傳也

額づきて

ぬかはひたひ也ひたひを地につくるをかくいへり柏手

神道にかしはでのほらひとて神をおがむに手を拍

てはらひする事ありこれにいろ／＼の口決ありて神道に傳授とする事也
かへりもふし

賽と書なり神を拜して祈念する事なり

瓢箪酒

うちみの藥なる故なり

瑞籬

神前の垣をいふたまがきといふに同じ瑞はあらたなる意なり

庶流

宗領のすじを嫡流といひ次男すじを庶流といふ也
孿けつ子し

妻かしづばらなどの末の子といふ事なり

いとけなき時より其人の傳もちにつきて諸事をおしゆる役なり

國に杖つく

つえは老て歩行をたすくる也禮記の王制に五十にして家に杖つき六十にして國に杖と云り

金巾子の冠袞龍の御衣

巾^{こじ}子は冠の髪をおほふ所をいふ其うしろに立るものを羅といひ其うしろにたるゝものを纓といふ巾子を金にてしたるを金こじといふ袞龍はのぼり龍くたり龍を袍にゑがく装束をいふ金こじのかんふりにこんりやうのぎよいは天子のよそほひなり

こうがまやり

甲が舍利也甲はよろひと訓じて甲虫といふは龜や螺蛤などのかたくよろひたる惣名也舍利はもと梵語なり翻譯名義集に舍利こゝには骨といふとありかの甲虫のごときかたき物が骨となる共といふ心也

補佐の臣

補佐はたすくるとよみて君のたすけとなる臣をい

ふ

九州二嶋

九州に壹岐對馬をこめていふなり

掖門の扉

正面の門の兩旁に小門あるを掖門といふ人の脇の下のごとくなる故也掖は脇と同じ

大紋

布びたゝれの事なり

なまめく

媚の字也うつくしく艶しきなりふり也

翫^{くき}やらふ

今は旅人のつれづれをなぐさめの伽をやらふといふ事に成たれ共もとは下ざま惣嫁やうのたぐひは土の上野中などの契りなれば唐士の書にも是を土妓野合といふすべて世俗の僻言そのいはれある事おほし但したび人なぐさめの伽にやらふと轉したるも又一興也

おもゝち

面もちといふ事也源氏に見へたり

船玉

ふねをまもる神なり

九百九十九の鼻かけ猿

此こゝろはきこへたるとをり也但し文選六臣注季

善が注にみへたり

景行天皇

人皇十二代の天子なり鹿嶋もふでの事は本朝通記にみへたり具あはせの始り此淨るりの本文のごと

し

兩夫にまみへぬ教訓

通鑑に出たる齊の王蠋が詞也燕の國の大將樂毅といふ者齊の軍をやふりたる時王蠋か賢者なるを去り燕につかえん事をすゝめける時王蠋がいはいく忠臣は二君につかへず烈女は二夫にふれずといひてうけがはさりしと也是より貞女は兩夫にまみへずといふ詞あり

尾に泥をひく龜山

莊子に諸侯より莊子をまねきし時うけかはすして云けるは卜のためにもちひらるゝ龜は人が尊敬をなせ共かへつて其身を殺さる泥中のかめは尾にどろを引て見ぐるしけれ共無事也と云り是を取て龜山に恥をあたふる詞にいゝかけたり

逆鱗

龍の腹にさかさまに生たる鱗あり此うろこにふれたる者はかならず死するゆへ天子のいかりにふれたるものはかならずいのちをとらるゝにたとへて天子のいかり給ふをいふ

綸言ふたゝひ歸らぬと汗をぬくふて立歸る

古語に綸言如汗とあり天子の詞を綸言といふ天子の詞一たび出ては跡へかへらぬ事身の汗のふたゝび歸らぬかことしと也此本文にはりんげんよりあせをぬくふにいひかけたり是作意なり

てんば
顛婆と書也顛婆といふ事なり
いぶせき

詩には無聊といふ源氏帳江入楚に不審と書り
すいめかまたか

これは駕かきの山椒也すいめは百に成てもおどり
わすれぬといふ諺より取て百をすいめといふ股と
は一本との義にて二百をいふ

骨肉同胞

兄弟は同じ骨肉をうけたる故こつにくといひ同じ
胞にむまれしゆへ同胞といふ

みさは

操とも介とも書て共にみさはと訓じて人のまもり
めのかたきをいふ

既に孔子も季孫のうれひ蕭牆のもとにあらんとの給
へり

此事論語に出たり魯の國の季孫氏といふもの君を
ないがしろにして政道を我まゝにさはさしか魯國
の傍なる顓臾といふ國をうたんとする事を孔子聞
給ひて季氏がごとく我まゝにては臣下の内より亂
がおこるべしといふ事を季孫のうれひは顓臾には
あらずして蕭牆のもとよりおこらんととの給へり蕭
牆とは外門と内門との間にある牆也畢竟は季孫が
家内より亂がおこるべしと也俗にいふ足もとから
おこるの意なり

聰明睿智

耳に善惡をきゝたかへぬを聰といひ目によしあし
をあきらかにみるを明といふ睿はふかき心にて智
の千萬人にすぐれたるをそうめいゑいちといふな
り

つたへきく燕丹王

この事史記に出たり秦の始皇は燕丹の敵ゆへ人を
たのみてころす事をもとめ田光先生といふ勇者に
たのまれしに田光がいはい某は年老たればうつ事
かなはずといへ共我友に荊軻といふ者あり是をた
のみて本望をとけ參らせんとてけいかいもとへゆ

く時燕丹王田光を門外迄おくり出この大事かなら
ず人にもらし給ふなと申されしかば心得たりとて
やかて荊軻か方へゆき此事をよくゝたのみて田
光はけいか門前の李の樹にかしらを打わり死し
たり是ひとへに燕丹王がうたかひをはらさんかた
め也今かすへの身のうへに尤よく相應したる故事
にて尤おもえろし

此やい鎌のとがま

中臣祓にやいかまのとがまをもつて切はらひ給へ
はといふ語あるをすぐにもちひたりかねみちか鎌
を持ての所作なれば尤とりあひよき作意也

邯鄲鑊耶

晋の雷煥といふ者天にむらさきの雲氣たなびきし
を見て其下をほりたればつるきの鑊したちとなるべき鑊
丸二つを得てすなはちこれを地がねとし于將ばく
やといへる夫婦のものに劍をうたせて名劍となる
是より名劍をいふにはかならずかんえやうばくや
と稱するなり

孝弟忠信

孝はよく親につかふるをいひ弟はよく兄につかふ

るをいひ忠は君によくつかへ信は人にまことを立
るをいふ此四つのものは人道のおもんずる所なり
三段目
猩々よく言へども獸をはなれず

禮記曲禮篇に鸚鵡よくものいへども飛鳥をはなれ
ず猩々よくものいへ共禽獸をはなれずといふに本
つきたり人として禮義を去らざるはきんちう同然
なりとの意なり猩々は面は人のごとく身は猿のご
としとあれば此語に引つゝきて獼猴をいへるも取
合よろしき引ごとなるべし

獼猴の冠

是は楚の頂羽みづから霸王と稱して我まゝ無禮を
おこなひしを黜徹といへるものは是をそしりていへ
る詞也今の眞鳥が無禮我まゝに引あてたり

麒麟大王

きりんは四靈の一つにて毛蟲三百六十の長なり身
はくじかのごとく尾は牛のごとくひつめは馬のご
とく額に一つの角あれ共つのゝ端を肉がおほひて
物にふれずされば生たるものをくらはす生草をふ
ます至て仁ありけだもの故その徳を聖人になぞら
ふ眞鳥みづからほこりてかゝる徳ある號を稱せし

と也

卿相雲客

卿は天子の朝廷にてまつりごとを相るたうく官ゆへ卿相
といふ天子の殿上を雲のうへになぞらへて殿上人
を雲客といへり

浮へる雲のうへ人

論語に不義にして富貴なるはうかへるくものと
しといふ孔子の語あり此語のこゝろは有もなきか
ことくなるをうかへる雲といふ又あぶなき事を浮
雲共いふこゝの文句右の兩意をかねてまかも雲の
うへ人といひかけたり

まらぬひの筑紫

むかし景行天皇海上より火のみゆるを見給ひて御
船を其火のある所へ着しめ給ふすなはち今のつく
し也是よりしてつくしといはん枕詞にまらぬひと
いふなり古歌におほくよめり

色やむかしの色ならぬ

春やむかしの春ならぬと詠したる古歌のもじりな
り

麻につるゝ蓬

此語の出所つまひらかならず童子教にもこの語あり意はあさの中に生たるよもぎはあさにつれてなをく立のびるとなり

子を妊はんでは寢るに側そばす座するに邊かたよちす立に蹣かたまたちす

是は漢の劉向といふ人の作りたる烈女傳といふ書の語をすぐに引たる也是は胎教とて懷胎の内のおしへ也

姫ごせは三界に家なし

三界の事はこゝに出あふ事はあらね共俗は世界の事をさんかいといふ故俗説にゑたがひていひたる也たとへば子はさんがいのくびかせなんといふも皆せかいといふ心にもちゆ女に家なしの事は女は夫をもつていへとすと禮記にもみへたり又は孔子の語に婦人は三従の道あり家にありては父に従ひ人にゆきては夫にゑたがひおつと死しては子にゑたがふあへてみずから遂る事なしとありみな家なしの義なり

よめいりを歸るといふ

詩經の注に朱子のいはく婦人謂レ嫁爲レ歸といへり是も女は夫をもつて後はおつとの家をわが家とす

るゆへ嫁は我家へ歸るの意也となり猶豫せしに

事を決せずしてためらふをゆうよといふ猶はけだものゝ名也此けだものうたがひ多くして人が來らんかとおそれ樹の枝へかけのぼれ共樹のえだは安からぬ故たちまち地へおつれ共又人をおそれのぼり又くだりてふだん居どころを決せず豫は犬の事也いぬは主人に付ゑたがひて主人の行さきに待ゐるもの也若かへり來る事おそき時はいかいとうたがひて往つもどりつするなりゑかれれば猶も豫もうたかひてさだまらぬこゝろをいへり

形容枯槁

形容のやせかれておとろへたるをいふ屈原が漁父の辭に出たる語なり

つくも髪

藻をみるごとくばら／＼として見苦しき髪なり江澤藻と書なり

夫歸は義合

五倫の内に天合義合の別あり父子兄弟は天然と生れ合たるもの故天合といふ君臣や夫歸や朋友は今

日のうへにて人と人とのやくそくづくにて義理をもつてまじはりをなす故義合といふ也

はらから

兄弟をはらからといふ伊勢ものがたり初段にいとなまめいたるおんなはらからすみけりとあり

恙なければ

いにしへ恙といふ蟲ありて人を害せしゆへ人の無事なるをつゝがなしといふ

いふに岩手の神ならで通せん事もあら氣の雅道

役の行者大みね山上をひらき給ふ時神をつかひて道を作らしめ給ふに目をへて成就せざりし程に行者これをいかり給へは一言主といへる神そのかたちの甚だ醜を恥て夜ならではたらき給はぬ故かく延引するよし岩手の神かうつたへられしかは行者やかて一言ぬしの神を亥はり給ふ事元亨釋書にみたり其故事をふまへて書たる文段にて尤よくかなひたり

琉黄が島

薩摩にある島也輕大臣燈臺鬼となりて此島にて死せられしより鬼男が島共いふよししくはしくは眞鳥

實記といへる軍書に出たり昔より科人をながすところ也

地獄へみちびく五逆罪

往生要集に一百卅六地獄を出せり八大ぢごくにおのゝ十六づゝの小ぢごくありて八大ぢごくを合せて百卅六となる也五逆罪は父母を殺し佛身より血を出し和合僧をやふる等の五つ也

丸がはからひ

此注はあしや道滿の初段にくはしくゑるす

順逆の二門忘縁にあらざらんや

佛語也人の生死老たるか先へ死しわかきがおくるは順也わかきがさきだち老たるがおくるゝは逆なりこの順逆の二門ありといへどもともにりんゑのきづなをきりて縁をわするゝの端にあらずといふ事なしと也

傍若無人

晋の桓温といふ人王猛といへる高官の人の前にて道をかたるに虱をひねりながら物がたりせられし程に其さま傍に人なきがごとく見へたるゆへ是よりして法外なるはたらきを傍若無人といふ也

さすらへ

左遷と書もとは官職を貶らるゝ事なれ共今では流罪の事にももちゆるなり

欣然と席をあらため

きんせんはよろこばしき體也席は座なり

双六かてうばみか

てうばみといふ事源氏にみへたり今いふおりの事也おりはといふもの塞の目の偶にてとる故にいふ偶食てうはくと書なり食とは石を取事也十六むさしに食といへるも是より出たり

皇后も御懷胎

人皇十五代神功皇后なり御くわいたいにて出陣し給ひ新羅高麗百濟をうち御凱陣のみぎり筑紫にて譽田の天皇を産給ふとなり

子をもち月のいわた帶

みちのくのならはしにて我戀にして妻とらんとおもふ女の門ぐちに手拭ふくさやうの物を竹につけて立をく是を縁むすびのゑるしとするなりこれをいわたおびと名づくとなり

口さへいまだ乳くさき大將軍

史記漢書等に大將のわかきをあなどりていふ詞に

口尙乳臭といふ語ありそれを取て國石が至て幼稚にして大將となるをいふ

勢せうそへへの段
五大力

五大力ばさつとて夫婦の縁守りの本尊也津の國にも住吉の神宮寺に有

ゑびにいふてぞ通りける

ゑびは自鬢也自身に髪をいふ事なりこゝは自身にほめる事に取なしてそれより自鬢にもいひかけたりおぐしあげが口上にはよくかなひたり

九牛が一毛

九は老陽の數なれば數の至極として物のかすおほき至極をかならず九をつけてよふ九天天淵九重の類のごとしされば多き牛の中での一毛といふ心にて大海の一滴などいふにおなじ但し佛書におほき語なり

婦人城

是は晋の朱除といふ者の母軍勢を引うけておほくの女を士卒とし籠城せし事あり世に是を婦人城といふくはしくは晋書に見えたり

一聲の玄鶴そらになき巴峽秋ふかし五夜の哀猿

是は圓機活法に出せる詩の語也作者はつまびらかならずあきの比巴峽といふ山道を夜のくらきにとをりたる景象を詠じたり闇の夜の物すごきに竊の一二多物かなしき折しも猿のさけぶこゑいとあはれにきこへて心ぼそくなるとの意也この城外へ玄のびきたるもやうもかくやあらんとなり

秦の儒除が母

是はあやまり也晋の朱除が母也前にいひたる婦人城の故事也歴代に外の例なければ必定あやまりたる也作者いかゞこゝろへられしや

扱は双方手はおはぬなこはいかにともぎ取て火影にすかし能みればきれぬこそ道理なれ是も及引これも及ひき

文句はきこへたるとをり也

評、ある人難じていはくこゝの及引の文句のてには初の是もといふがきこへす是は及ひき是も及引と書べき事也其故はもとてにはは旁及の詞とて一つ主なる事ある上に是もといふ事也是は及引と一方を見て又次に今一つをみれば是も及引也といふ

べきを最初から是も及引といへるは作者のそこつ残念なりいかん、答て云これ文章の法をまらぬ難也漢文にこの格おほき事也和語のもといふてにはは漢字の亦の字のきみなりたとへば翰文に賢者亦有二天者二不肖者亦有二壽者といへるも上の亦是下の亦へかけていひ下の亦是上の亦へかけていひて兩方をもちあはせたるもの也是に同じく上の亦是も及引といへるもは下の亦是も及引といへるもにかけ下のは亦是も及引といへるもは上の亦是ものもにかけいひて兩方をもち合せたるゆへ結句文の法をよく知て奇に書なしたる作者の器量のみゆる所也それをまらずかへつて咲する事文章にうとき故也、難者又いはく文法はさもあるにもせよ人形に合せてみるべしまづ一人の及を見て是は及引とおどろき次に又一つをみて是も及引といふべきをあたまから是も及引といへるは何に對して是もとはいへるぞ心得かたし尤作者は二腰ながら及引とする趣向にて書たるゆへ作者の心には初より兩方及引とまゐりたる故あたまから是もといふ詞出そうなものなれ共虎王が一方をまらぬ口からは是もとはいふま

じ是作者が我心をすぐに書たるはあやまりならずや、答云この時虎王が人形はいかゞつかひたるかもゑらね共もし兩腰を二度に見たるやうにつかひたらば人形遣のあやまり也作者のあやまりにはあらずまづ淨るりの文句を跡先よくみるべし虎王が心に双方共手をおはぬをふゑんし双方一時にもぎ取て火影にすかしてよく見ればされぬこそ道理なれ兩方共に及引也との意也火影にすかしよくみればといふ内に二腰をためつすがめつとくと見たる心こもれりさればこそ兩方共に及引なるを見といひけてされぬこそ道理なれ是も及引是も及引といひたるが何とあやまりといふへきや、難者此一句に閉口しうなづいて退きぬ

十月にたらぬおろし子の諸佛一度に御聲をあげなげかせ給ふ御なみだ
是はくめのもりひさ地獄の名ときといふむかし淨るりの古文句をすくにはめ句にしたるもの也今のわかき衆は多くゑらざる所なり
もろこし衛の國出公轍

まゆつこうてうといへるは衛の靈公の孫にして嗣

蹟の子也くわい／＼罪を得て衛の國を立のきたる跡にて靈公死し給ひしゆへまゆつこうてうを君とすゑかるに嗣蹟このよしをき、國へ歸りて衛の君とならんとすまゆつこうてう是を入まじとして軍おこるこの時子路といへる人まゆつこうてうにつかへゐたる故まゆつこうの父をふせぎ給ふをいさむれ共まゆつこう聞給はぬゆへまゆつこうのゐ給ふ樓を焼んとせしをやがて矛にてつきころされたり此事くはしく史記にみへたり

首陽山の伯夷叔齊

これも史記に出たり伯夷は兄まゆくせいは弟にて孤竹といふ國の君の子也周の武王旗をあげて殷の紂王をほろぼさんと出陣し給ふにこの兄弟武王の馬前にすゝみ臣として君をうつ事あるべからずとて轡を取ていさむ左右の者共是をころさんとせしを太公望見て義者也といひていのちをたすけゝる其後周の天下になりしかば武王の德をけがれたりとして周の粟を食ふ事をはち首陽山といへる山へ引こみ巖を折てくらひ終に飢て死したり

娑婆と冥途

名義集に娑婆こゝには忍土といふしやばは梵語にて唐の詞にすれば堪忍土といふ事にて娑婆世界はもろくの苦を堪忍せねばかなはぬの意なり冥途とは和語のよみちといふ事也

一重つんでは兄のため

是よりさいの河原を移してものもらひする鉢ばうすの口うつしなり此たぐひの事はなには邊の人ならでは遠國へは通じがたし

あはれはかなき我ら迄

是も地藏の和讃に出る口うつしなり

神力勇者に勝事あたはず

佛力ゆうしやにかつ事あたはずといふ語をなをしたるもの也此理は儒佛神道共におなし事也近くは織田信長ひえ法師と爭論の事共あり怒りて山王共へ社をことごとく破却すこの時當分には何のたゝりもなしかゝるたぐひをいへり玄かれ共ついには神罰のがれず明智がために本能寺にをいて自殺せりおそるべし

樗

散木とてやくにたゝぬ木也莊子に出たり

黄泉

人死すれば體魄土に歸すつちの底の泉は濁るゆへにめいどともくはうせんともいふなり

拷器の柱

もと科人を責る時に緊るはしらなり今こゝにてはごくもんの臺をいふ

備桶

いにしへは貴人の死去の時近習の護衛になそらへて藁にて人形をつくり死骸にそへてほうむりしを後になりて眞の人形をつくりて備となつてほうむる事はじまりたる也今の俗それより取て棺をようおけとよびならはせり

月日をつかむ修羅

あゑゆら王が梵天帝釋とたゝかひて日月をつかみし事佛書に見えたり

紅梅のあははませ

馬を急にのりて駆させれば口わきより血まじりのあはを吐をいふなり

威風凜々

其いきほひの物すさまじきをいふ

天下創業の旗あげ

はじめて天下をとるを創業といふされば親のゆづりの天下をうけてまゐるを守成の君といひみづから始て天下を取たるをさうげうの君といふ也

力士ごし

りきじとは本名は那羅延といふ佛塔などのやねの四隅に棟を負て鬼がはらのごときが是也はなはだちからのつよきものなり

韋駄天ごし

是も天部の本尊にて足疾鬼が玉をうばひて送るをかけ給ふもこのいだてんなり

おち坊主の白藏主

つり狐の狂言にあり

道行
かくれがの軒もる

山ざとなどに小家をゑつらひたるをいふはにふの小屋とて軒もまばらなるさまをいふ

月にこがれ出

あはれをもよほす折ふし月のさえたるにさそはれ出るていなり西行の歌になげゝとて月やは物を思はするかこちがほなる我涙かな

露にやしなふ

月に對して露をいふ袖がうろにてまばらく氣をやしなふとなり

すがり

きやらのたきさしか下著に香の残りたる故に香取姫といひかけたなり本は縑とて好絹をいへ共こゝには云かけに用ゆ

契りを

手と手をもちにぎりてちかふ事也もちにぎるを略してちぎりと訓じたるなり

二世

佛説におや子は一世といひ夫婦は二世といひて一蓮鉢生と説給ふかねみちに深きちぎりをかけたるを二世とかねみちといひかけたり

未來のため

佛教に過去現世未來の三世をたつ過去は前の世をいひ現世とはこの世をいひ未來とはのちの世をいふなり

そぎ尼

そぎとは髪を薙事也大内などにては菩提に入ると

き尼になり給ふとは髪をきり給ふ也是をそぐといふ剃髪にはあらず

うつぶし色

黒き色をいふすべてくろき色に染るには五信子につそむる也さて五信子は子の中空なるものゆへ空五信子といふ蟬のぬけがらを空蟬といひ人の氣のぬけたるを空氣といふがごとし

けさよりも

今朝と袈裟とをいひかけたり

づた袋

天竺にては乞食を分衛共頭陀共いふ出家の人修行のために乞食に同じく身をなして食を乞て袋へ入るゝ故に其ふくろを頭陀袋といふなり又ふくろの訓は物をいれてふくれるの義也れと通ずる故にふくろといふ

かたみに持し

筐かたみとはもと竹籠也繼體天皇いまだ位につき給はす男太迹のの皇子の時西國にて女にちぎりくらゐにつき給ひて後つねゝもち給ふ花筐をかの女へつかはし給ふそれより人の別れのなごりにおくるも

のをかたみといふ也形見とも記念とも書なりなぎさの

川などのほとりをいふむかし淀川のほとりに宮をつくりて渚の院といふ今の牧方の傍に禁屋といふ村あり又渚といふ村もある也

身なし貝

貝の名にあらず濱邊の貝の殻を身なしがいといふ也

片しく袖のかた思ひ

君まちがほのうたゝねにひちまくらしたるをいふあはざる戀のことばなり

菩提

天竺の詞なりこゝの詞にては得道といふ佛のみちを得たるのこゝろなり

五戒

一に殺生戒とて物のいのちを取事をいましむ二に偷盜戒とてぬすみをするをいましむ三に邪淫戒とてよこしまなる淫欲をいましむ四に妄語戒とていつはりをいましむ五に飲酒戒とて酒をのむをいましむる也

三界

欲界色界無色界これを三界といふ今このまやばは
欲界なり

家を出たる法のみち

法華經に三界無安有如火宅とて此界を火の宅なり
といふ故に佛道を修行すればさんがいの家をいづ
るの心にて出家といふなり

むすぶすゝきはまねかねど

古歌に花すゝきまねかばこゝにとまりなんいつれ
ののへもついのすみかそ「ふく風のまねくなるべ
し花すゝきわれよふ人の袖とみつれは

あだし野の煙

あたなる野といふ事也名所にはあらず嵯峨の奥愛
宕のふもとに化野といふ墓所ありつれゝ草にあ
だしのゝ露きゆる時なく鳥部山のけふり立さらで
とありこゝには墓所に用ひたり

楊柳觀音

洛東清水のくはんおん也むかし音羽の瀧のみづ五
色にみへしを諸人あやしみたづねのぼりしにみな
かみに金色のひかりさし朽木の柳に花さきたちま

ちやうりうくはんおんとあらはれ給ふと也
はた物

刑罰ものを幟物といふ但し唐にてはその傍に罰に
おこなふ様子を書たる幟をたつる故なりたぐりた
ぐりといひかけて糸くる體より織機にいひかけた
り

千引の石

ものゝ至ておもきをいふ千人もしてひく石となり
みちのくに千引の石ありとぞおほく戀によせて古
歌によめる人のこゝろのひけどもゆるがぬにたと
へたり

戀のぬすみ

貧のぬすみに戀の歌といふ俗言をあはせていふ也
白浪

ぬす人をいふ伊勢ものがたりに風ふかばおきつま
らなみ立田山よはにや君かひとりこゆらん立田山
にぬす人あらんと業平の山をこへてかよひ給ふを
あんじて井筒のよめる歌なり

暗はあやなし

ものゝ文采もみへぬをいふ躬恒の歌に春の夜の

やみはあやなし梅の花色こそみへぬ香やはかくる

かねのみさき

はりまの國の名處なり

諸行無常

涅槃經の四句の文にてもろ／＼の世にあるものは
みな無常にして終には寂滅すると也

ひいきの灘

是もはりまのめいゑよ也

たまの緒

いのちの事なり

あられ釜

いま茶の湯にもちゆるかまの一つ也あしやかまと

いふも有ゆへあしやのうらといひかけたり

いさり火

在所の家内にてたく火もある説に海士の朝にすな
とりするをあさりといふゆうべにするをいさりと
いふと云々いさり火はその時とす火也と鴨の長
明がいへり

評、惣じて此道行首尾全體近年の上作なりとかし

かとり姫がかねみちの首をぬすみとらんとてのび
あがりといかぬ足のうらめしく世のせいすいと
なきえつむといへる詞何ぞや世のせいすいといふ
ては其心をだやかならず今すこしあるべき所なる
に不自由千萬なるくり言かとり姫には残念なる不
相應の詞なりはおしむべし

四段ノ奥

ふとんの内むりやうのえあんどこもりける

ふとんといふより織ものゝ文綾と無量とをいひか
なへたる面白しとかし是より前近松が筆に既にみ
へたり是は口まね也

經陀羅尼

經は唐の詞にて佛説の惣名とれたる事也だらには
梵語にてこゝには惣持といふとなり

魂魄體

魂氣體魄とて神は陽に屬して魄なり人死する時は
天にのぼる體は陰に屬して魄なり人死する時は地
にかへる體はえやれかうべなり

六根五體

眼耳鼻舌身意を六根といふ五體は手と足とを四體
とし首をそへて五體といふなり

四十九の餅

亡者の七々四十九陰に表したるもの也人死してより四十九日の間は中有にまよひていまだ生を受ける所さたまらず七日く生滅していまだ形なく虚空に住して香を食すこの間を中有共中陰共いふと也中陰經にくはしくみへたり

評、ある人難じて云四段目の趣向の内かね道と助八とを見ちがへたるにつきかとり姫がごくもんのくびをかねみちと見ちがへしは死くびなればさもあらん後に助八が家にて眞のかねみちを疑ひし所その意をえずいはんや嫁のお作が近比まで助八と一所にゐてこのたび来るかねみちを助八と取ちがへしはいよく有べき事ならず世間に双生はよく似るものとはいへ共いか程似たり共すこしはちがひのなくてはかなはずさればこそ世間によく似た人多けれ共取ちがへるといふ事は其ためしなき事也然れば同じ玄ゆかうならば實に見物のうけとるやうにしたき事也惣じて嘘もまことのうらにて諸人の尤とうけとるやうに書ではおもしろがらぬ筈也此所いますこし玄ゆかうの未熟なるにあらず

や、答て云兄弟のよく似て夫婦の間にも取ちがへ

たる事唐にもその例あり張伯階といふ人の弟を仲階といひしが其かたち甚よく似て人の取ちがへる事おほしあるとき弟のちうかいが妻うつくしく化粧して立出るに兄の伯階が立てゐたる傍へより我夫のちうかい也と思ひてさいめごとをいひて手を取しゆへ伯階興をさまし我は兄の伯階なりといひければおどろき恥て立去しが又伯階がたゝすみゐたるを見て是こそ夫ぞと思ひはづかしきたは言をいひたるといふ伯階又我は兄なり仲階にてはあらずといひければいと恥かしく思ひて奥へ入て久しく出る事を得ざりしと風俗通にみへたり是はまさしく枕をかはしたるふうふさへかゝるためし有お作が見ちがへしは尤也又かとり姫がうたかひも既に我手にかね道也と思ひ込しくびがあるうへ最前よりかねみちの狐つきの體を見てはそこつに信せられざりしもことはりなるべし難者尤とうなづいてゐりぞく

五段目

亂臣の榮衣は出沒螢のごとく太陽に照されその身を失ふ

是は古語を取あつめ成語のやうに書たるもの也は
たるのひかりはひかるかと思へばそのまゝきへて
ある共なきともさだめられぬをまゆつぼつはたる
のごとしといふ太陽は日の事也らんしんのえいぐ
わをなすはやみの夜のくらき間にはたるかひかる
ごとくなれ共徳ある人に出あひては日にてらされ
て螢のひかりのきゆるごとく終にその身をほろは
すとの意也

民を虐

虐は民をむごくする事也今の俗にいふ人をせめせ
たげるといふが此字なり

課役をかけ

課はおほせるとよみて日に幾月はいくらといふ員
數をきはめて公儀へ役をとる事也

金殿紫閣

こがねの御殿むらさきの閣にて美をつくしたるを
いふ三體詩に金殿當頭紫閣重といふ詩の語を取て
用ひたり

闘鶏

には鳥合せの事也闘鶏とて唐にもあり

闕ノ

御殿々々也禁中には御殿の門に高樓ありて其兩掖
を闕たるごとくに門をあくるゆへ掖門とも門闕と
もいふそれより取て御殿を闕といふなり

大宮人

禁中の人をさしていふ貞任が歌にわかくにのむめ
のはなとは見たれどもおゝみやひとはいいかいふ
らん

東天紅

にはとりの時をつくる聲也文字のごとく東の天く
れなるなりといふ事にて夜あけをつぐる鳥のこゑ
をいふ

てうけける

寵戯と書入をなぶる事也今も北國仙臺あたりの詞
に物をなぶるを寵するといふこの字也

秋津島

和國の異名なり秋津はもと蜻蛉の事なり日本の地
形あきつむしに似たりとてあきつしまといふ也
評、此眞鳥全體上出來おさゝく近松がまゆかうに
おとらぬ所おほし双生のいりくみ始終にわたりお

作かとり姫が二度のびつくり助八が養母のくり言
まとりが猛惡かねみちが勇氣女の勢ぞろへの發明
ひとつとしてぬけめなしそれゆへ見物のよろこび
數月の大入を取り事作者のまんぞく座本の大慶い
はん方なくいかなる家にもねすみの糞と眞鳥の本
のなき所はなかりき

淨瑠璃評注卷之三終

淨瑠璃評注卷之四

外題
○國性爺合戰

此淨るりの一體は大明の末に思宗烈皇帝の御子福王南京にて即位ありし時先帝の時より韃靼王中國へせめ入り北京を居城として又なんきんへせめ入此福王をもほろぼさんとするに先帝につかへし鄭之龍といふ者先帝御存生の折讒言にあひてやうやう命をたすかり日本長崎へわたりそれより肥前の平戸にて妻子をもふけしが大みんの亂いまだまづまらざるを聞て妻子を引ぐしふたゝび大みんへ歸り一子國性爺と共に明朝の味方をなして韃と合戦する事をゑるせり始終こくせいやがはたらきを第一とするゆへ此外題を置也まかし性の字を性の音となへさする事いぶかし是は唐の土地の名や人の名などは唐音となふる例もあるゆへ作者の狡黠にて性の音をはねて國性爺とかなを付たりとみゆ松江の鱸を松江のすいきととなへさせ南京を南京とよぶ例也と思へるなるへし然れ共性は唐音に

ては性なり性にはあらず殊に唐音にてよぶならば國性爺の三字共みな唐音にして國性爺とよぶべき事也さう共人の名に限りて唐音によひて益もなければ國性爺となふるがよしと知るべし是等はもし淨るりをもてあそぶ人々學者などにふまらせらるゝ時の心入レなれば辨じ置也世上のかたりならはしなればかたるは國性爺とかたれ共根はとくとせぬ事也わきまふべし

序
花とび蝶おどろけ共人うれへす水殿雲廊別に春をおき曉日よそほひなす千騎の女

是は鄴宮を詠せし詩の詞にて陸龜蒙が作すなはち三體詩に出たり此意は花がちる故春の盡んとするを見て花にたはむれし蝶はおどろけ共宮中の人はうれひなしその故は帝のおごりにて禁中には水をゑがきたる御殿や雲をゑがきたる廊などが有て其内はいつも春のたのしみ有て世間とはかくべつに春を置たると也さて曉がたには千騎もあつまりし宮女共が靚粧て白櫻桃の下にてむらさきの綸巾をいたゞきてたはふるゝと也此奥にせんだんくはう女の縁さだめに女官の花軍があるゆへ其事に

あてゝ此詩を序文とする也殊に兄みかどは眷つよくして多の宮女に花いくさをさせ給ふ事實録にも有る事なればかれこれよく相應したる序也

紅唇翠黛色をまじへ

宮女共が口臙をよそほひ翠の黛をかざりて色をあ
らそふとなり

三夫人九嬪廿七人の世婦八十一人の女御あり

禮記に天子につかふる宮女の數をゑるしたる通り
也夫人は本妻也嬪より下はみな女官なり嫡妻にあ
らず

をよそ三千の容色

禁中に内家叢として宮女のあつまる後宮ありて其内
に容色ある女くはん三千人ほどあるをいふ也

諸侯

一國を領する君をいふ日本の大名と稱するがごと
し

二月中旬に瓜を献する榮花也

唐の王建が花清宮に題する詩に内園分得溫湯水
二月中旬已進瓜と賦したる語を取ていふ瓜は六
月にならでは熟せぬ物なるをたいりのそのうち

には溫湯の水をわけ取て種をくたし二月中迄ゆん
にはすでに瓜をすゝめまつると也榮耀の體をいふ
なり

越羅蜀錦

越の國の羅蜀の國の錦いづれも名物なり

侍女阿監

侍女はおもとひとゝよみてこしもと也阿監は女中
かしら也

珊瑚のたま

珊瑚樹は海底にある樹なり八月十五夜の満月には
を取て珠にみかく也七寶の一つなれば至て重寶す
るにたとへたり

虎の皮豹の皮

虎は山獸の長にしてかたちは猫のごとく大さ黄牛
のごとく黒き章あり爪は鉤のごとく牙はのこざり
のごとく兩眼はなはだ光あり一目よりはひかりを
はなち一つの目にては物を見るその皮甚だ貴とす
豹はめとらと訓すれ共虎とはかくべつ也毛色は赤
黄にして黒文ありといへり

南海の火浣布東海の馬肝石

火くはんふとは布也但し火中に火を食する鼠あり其ねずみの毛にて織し布也垢づく時は火中にて焼ば白くなるもし水へいるゝ時は損ずる也ばかんせきは馬の肝に似たる石なりと也

米粟

粟はあわとよめ共日本の稷の事にあらず米のいまだすらざるをいふ日本にいふもみごめなり

三皇五帝孔孟のをしへ

三くはうは伏羲神農黃帝也五帝は少昊顓頊帝堯舜なり孔孟は孔子と孟子と也其教は仁義忠信人倫の正道也

五常五倫の道

五じやうは仁義禮智信なり五りんは君臣父子夫婦兄弟朋友なり其まじはりの道は親義別序信也これをも五常といふ

斷惡修善

惡を斷て善をおさむるをいふ
道もなく飽迄くらひ暖に衣て

孟子に飽までくらひあたゝかにきて逸居して教なきは禽獸に近しいといふ語あるに本づきていふ口に

は飽迄物をくひ身にはあたゝかなる程物を着て人の道をまらぬは禽とりけだもの同然なりと也

北狄

中國の四方のはしぐをるびすといふ俗のいふ大いなるなりたつたんは北のはづれ故ほくてきといふ

官仲が九たび諸侯の會もかくやらん

周の世の末に天子の御家おとろへたる故天下の諸侯勅命をもちひざるゆへ齊の官仲といふ人その君桓公をもち立て諸侯の伯とし天下の諸侯を會して國々をよくおさめさせ天子をたつとむやうに下知したる也それゆへ天下のまよう天子の威にはおそれぬ桓公やくはんちうにおそれて我まへをなさすそれゆへ天下が靜謐なりし也

伍子胥が余風

ごしゑまが眼をくりて吳の東門にかけし事前になるせり余風とは其余りのふせいにてなごりのこりたる體也

范蠡がおもむき有

はんれいは越王勾踐の忠臣にて越王をもち立て吳

王を討しめたり吳三桂が君を玄ゆごするにたとへていふ

萬乗の位

天子のくらゐをいふ禮記の王制に天子は萬乗の國諸侯は千乗の國といひて天子の御領地は軍車を萬乗いたす程あるものゆへにいふと也
頭にさせば二月の雪と散もあり

折梅花挿頭二月雪滿衣といふ詩の句のこゝろを取て書り

一家仁あれば一國仁をおこし一人たんれいなれば一國亂をおこす

大學の語をすぐに書り君の家一つか仁愛の風になれは其教が下へおよびて一國中が仁愛のならばしとなり君一人か貪欲無道なれば下もそれを見ならひて國中が亂をおこすとのぎなり

五刑の罪

つみに輕重ある故刑罰の法に五ヶ條あるを五刑といふ五刑は墨劓剕宮大辟なり墨とは科人の額を刺ていれ墨をするをいふ劓は鼻を斷をいふ剕は足を斷をいふ宮は男なれは勢を割女なれば幽を閉るを

いふ大辟は斬ころすをいふ
宗廟の神

先祖の神靈を祭る處を宗廟といふ宗は源にて先祖は子孫のみなもと也との意なり廟は神主を置殿也廟は貌也とて先祖の貌にかたとるとの義なり

大の字の金刀點

筆法に點の名さまざまあり大の字は三點にて大の字の一字を玉案と名つけ左へひく點を犀角と名づけ右へひく點を金刀と名づく其形刀の身に似たるゆへなり

震翰

天子の御筆をいふ

かし水

米をあらふ水也漸と書也もと米をたくを炊といふゆへそれより取てこめを炊んとてあらふみづゆへかしみつと訓するなり

龍顏

天子の御顔をいふ天子の德を龍にたとふるゆへ也刃のさびは刃より出て刃をくさらし檜山の火は檜よりいで、檜をやく

この語は成語にあらず是は作者が意をもつて造語たるもの也藍よりいて、藍より青く朱を研て朱よりもあかしなるといへる語の勢ひを摸てあらたにつゝりたる詞也さびは銹と書る正字なり

印 紵

もろこしには天子より百官迄その位につきたる印ありその印を腰におふる紐を紵といふ是は天子の御位のゑるしのいんじゆ也

たのま緒

いのちの事を大和詞にたまのをといふなり

綿蠻たる黄鳥丘隅にといまる人としてといまる所にといまらずんば鳥にゑかざるべしとかや

是はもと詩經の詩にて大學に出たり鳥のなく聲をめんばんといふ黄鳥はうぐひすと訓して毛の黄なる鳥也丘隅は峯の樹のはへふさかりたる所をいふ此詩の心はめんばんとさへつりとふ黄鳥も人ちかき所には居をやすんせすかならず山おくの樹の生ふさかりて獵師の弓矢なともとゝかぬ所にいたりてといまり居ると也然れば人の住居もとゝまるべきよき所にとゝまらずんば鳥にもおとりたるな

るへしと也

長沙の罪をさけ

漢の賈誼といふ賢臣讒言にあひて朝廷を去りぞけられ長沙王の傳に貶せらるいま鄭之龍もさんげんの罪を避て日本へわたり居と也避るはよけるなり砂頭に印をきざむ鷗

唐詩の語なりかもめが濱邊の砂を足にてかきさかす體を文字を印に彫きさむの體に見立たる也

蛤よく氣を吐て樓臺をなす

蚌蛤蜃みなはまぐりと訓す蚌と蛤とは常のはまぐり也蜃には二種あり一種は大蛤也と注して一名を車螯といふ是は貝の類なれ共樓臺をなすものにあらずよく氣を吐て樓臺をなすといふ蜃ははまぐりと訓じても其かたち蜃に似て龍の類なる物なり本草綱目に其かたち蜃に似て大なり角ありて龍の形のごとし紅の鬚ありよく氣を吐てろうたい城郭の形をなすまさに雨ふらんとしてみゆ是を蜃樓と名つけ又海市共いふと云り又唐詩訓解の注にも蜃は蛟の類にて氣をはき樓臺人物のかたちのことしといへり然るを近松は鵺蚌のはまぐりと思へるは龜

末のいたりにあらずや又謝肇制が五雜俎に登州の海上に蜃の氣あり時々むすんで樓臺のごときかたちをなす是を海市といふ但し是海の氣にして蜃の氣にあらずをよそ海水の精多く結んでは形をなし散ては光をなす海中の物何によらず其氣を得る事久しければみなよく變幻へんげんをなす蜃のみにかきるにあらず共いへり日本にても近年安藝の嚴島に此氣あらはれ所の人みな是を見たり三刻ばかりの間はその邊金色のひかりさし五色の岩くみさなから金樓玉臺のごとなりしと也

あさる羽おと

鳥の餌をもとめんためにさへつるをあさるといふ雪折竹に本來の面目をさとり臂を切て祖師西來意のわをさとりしも

初祖に神光といふ僧來り參するに祖はたゞ端座して教の詞なければかの僧庭に立けるに大雪ふりて竹を折れ共去りぞかす夜あくる迄立居たりしかは初祖あはれみて汝何事を求めんためにか雪中に有やと問給ふにかの僧なみだをながし師たゞねかはくは教給へといふ初祖のいはく諸佛無上の妙道はな

んちがごとき小智小徳の慢心をもつて得べきにあらずとかの僧聞やいなや刀をもつて左のひちをきり師の前に置て云く諸佛の法印聞事を得べしや祖のいはく諸佛の法印は己か心にあり他よりもとむへけんやかの僧のいはく我心いまた安からず師ねかはくは我ために我心をやすんせよ祖の云くなんちか心を我前へもちきたれかの僧心をもとむるにとらへ得べからず祖のいはく今なんちがために心をやすんせりとかの僧ついにさとりをひらけり

まぎ蛤のあらそひ

是はもと韃靼より梅勒王を大將として大明をせめしむる時闔王李自成といふ者其虚にのつて南京へせめ入帝を害し王位を奪ふたる故吳三桂いそぎ韃王の陣へ至り此たひ力をくはへて闔王を討しめ給へと願ふに付だつ王いかんせんと言儀有しにばいろくわうか謀には此度ごさんけいが乞にまかせ加勢をやりて闔王とごさんけいとをたゝかはせ其虚に乗て兩方をたつたんの手に入へしとて此鷸蚌のたとへを引てたつ王をさとしたる故事也今此淨るりには國せんやが事にもちくみたる尤作意也さて

此故事の源は戰國策に出たり
秦の始皇六國を呑んため連衡の謀

この時天下に七ヶ國あり秦燕趙韓魏齊楚なりとか
るに秦の始皇のこり六國を攻ほろぼしてみな秦へ
あはせ天下を一つにして皇帝のくらゐにつき給へ
り連衡とは此時蘇秦といふものと張儀といふもの
と謀をなしてあるひは六國をつらねて秦につかへ
させんとしあるひは秦を討んとし又は六國を討ん
とする等の謀共をなしたるをいふ

楊貴妃

唐の玄宗皇帝のてうあいし給ひし女官なり
なむきやらちよんのうとらや／＼

あみだ如來の根本だらにの詞にのうはあらたんの
うたらや／＼といふ事ありそれを畧してかくいひた
る也是もよき作意なり是より奥の唐人ことは皆や
くたいもなき事なりとゑるべし

くひの八千度

いくたひも／＼くゆるをいふ和歌のこととはなり
本卦師の卦にあつて

師の卦は六十四卦の一つにて八卦の坤を上卦とし

坎を下卦としたる卦體なり卦の義理は専らいくさ
の事を斷たる卦也

天の時は地の利にしかず地の利は人の和にまかす
孟子に出たる語なり軍を出すに天の時をかながへ
歲月の吉凶日取時とりの吉凶又はその日によりて
或は勝利を得あるひは敗北する等の方角もある事
也然れ共要害堅固なる土地の利き城にこもりたる
時は何程よせ手の勝べき時日にせめよせても勝れ
ぬが治定なれば是天の時は地の利にまかざる也又
たとひようがいのよき地に陣を取たり共士卒の心
和合せずして大將をうらむるはいかなる堅固なる
城をも士卒が捨て逃る時は大將一人してまもる事
あたはずついに打負べき時は是地の利は人の和に
およばざるなり

三韓退治

新羅高麗百濟これを三韓といふ神功皇后さんかん
たいちの時ともへにあらみさきの立し事日本紀に
見へたり

もろこしの望夫山

婦人その夫を虎に喰ころされし者この山へのぼり

虎に似たりし石の有しを敵虎と思ひ矢をはなちしかば婦人の念力にて其石に矢か立たり其石を望夫石といひ其山を望夫山といふ

我朝のひれふる山

狭手彦が東夷征伐に發足の時その妻まつらさよ姫其別をかなしみこの山へのぼりて袖をふりてなけきしと也大和詞にひれふると袖ふる事なりといへり

潯陽の江これ猩々のすみ所

しんやうは隠なき大江にてこゝには別してせうせうおほくすむといへり

赤壁とてむかし東坡が配所ぞや

赤壁は三國の軍に魏の曹操が呉の周瑜に舟をやかれて敗北せし所也宋の蘇軾を東坡と號す朝廷よりつみせられて流され此赤壁のもとにあそぶ東坡が赤壁のあそび前後に二度にて前赤壁の賦後赤壁の賦をつくりてそのあそびのたのしみを詠せり

廿四孝の揚香が孝行の徳によつてゑせんとのかれし惡虎の難

此事二十四孝の傳につまびらかにゑるせり

西天の獅子王

しゝ一名を白澤共いふ狻猊といふも是也かたちは虎に似て黄なり銅のごとき頭にて鐵のごとき額あり牙は鋸のごとき目のひかりいなびかりのごとき吼る聲いかづちのごとしよく虎豹を食ふ天竺にあるけだもの也天づくは中國より西にあたるゆへ西天といふ

あまのぶち駒

神代の馬なり

まやぐはん

射官なるべし火砲弓箭を射る役也

ちやぐちう左衛門

是より國所をかしら字にしてよび名とすその國々の文字は東埔塞呂宋東京暹羅白城等也

仁ある君も用なき臣は養ふ事あたはず慈ある父も益なき子は愛する事あたはず

古語のやうなれ共慥なる書には見えすその理もちかく似たれ共正しき聖賢の意には的當せざるがごとし

夜まはりのどらの聲

どらは鉦と多く書共^{ども}刁^{てう}の字よし史記通鑑等に出て陣屋の用心をいましむる夜廻りがうつ鐘也もと刁斗といふを和訓にて刁とよませり此字を刁とよむに付て今の俗子丑寅のとらの字の畧也と思ひて寅の字の代りに用ゆるは笑ふべし是さためてかなの濁を見をとしたる龜相ものゝ取ちがへそめたるなるべし

いしゆみ

弩弓とて此方の人はいふ石はしきの類也

いしびや

佛郎機なり

胡亂

胡國は天竺の際にて中國よりは甚た遠きゑびす故言も中國へ通せぬゆへ不埒なる詞を胡說亂道といふ胡亂は此二字を切て唐音にていひならはしたるもの也

きこらいくびんくはんたさつふおんく

此淨りりの唐音は前もいふ通り譯もなき事也きこらいは歸去來の字を用ひたれ共是も唐音にては歸去來なれば合すひんくはんたさつふをんくも唐

音をもつて文字に合せなば相應なる事も有べけれ共すべて近松が唐音はみな頓作にて其かゝはりなし前の所にはたらにをもちりて唐音にまぎらかしたり又大職冠の唐音は唐菓子や膏藥の名にてまきらかせり又本朝三國志の大王の道行に御いたはしや大わうはちりくちくすい引かへてあほす峠のよるの道と書り京都のさる俳諧師此ちりくちくすいの語をあんじ煩ひて問ければ是は大王夫婦の道行ゆへくちりくちすい引かへてといふかなを上下へ置かへて用ひたりとこたへしとかや又唐船はなし今こくせんやの口に唐の木やり有其文句にらうがときろくほにやふたうにやくこんもつきんといふ事あり是はむかしの東國歌にうらか齋坊にや豆腐こんにやくきんもつたといふをかなを上下へ置かへて用ひたる也此類にて埒もなき事を知るべし近年鼎軍談の唐音はまことのたういんなり足かせ手かせ

足械は足にうつ械也手械は手鎖なり

延平王國性爺鄭成功と號し

本傳を按するに鄭之龍か兒鄭森廿歳の時父と共に

大明の皇帝隆武爺につかふ身のたけ六尺八寸ちからは大象を取りひしき殊に倭國の産なれば日本の兩刀を善つかふをきこしめし忝くも宮中にて元服し成功と字し明の朱姓をたまひ常に左右に侍し奉れは臣民これを貴み國性爺と稱す後又延平王と號せりと云々

章甫の冠花紋の履

玄やうほは般の代のかんふり也花紋ははなの紋を織つけたるくつ也

幘とくのはた幘ばんのはた

幘幘共にはたにて天子諸侯のもたせらるゝ道具なり

會稽山に越王のふたゝび出たるごとくなり

吳國を討んとて越王句踐くはいけいざんより旗をあけ給ふ體也前にいふかことし

父が庭訓

孔子の子伯魚ある時庭を通りたるに孔子立給ひて詩と禮とをまなぶべしと教給しより故事と成て父のおしへを庭訓といふ

玉ある淵は岸やぶれす龍すむ池は水かれず

この語文選にみへたり
むかし唐士の白樂天といひし人日本の智恵をはからんと

此所の文段つぶさに白樂天の謠に有て誰もよくえりたる事ゆへ是を略す

道行
唐子わけには薩摩ぐし嶋田わけには唐ぐしと大和もろこし打ませて

此文句うはべは何事もなけれ共底意にふまへたる故事有て書出したる也莊子に蝸牛の角のうへに國二ヶ國あり左の角のうへなるを蠻の國と名づけ右の角の上なるを蜀の國と名づく此左右の國たがひにあらそふて戰ふといへり蝸牛はかたつむりと訓じて俗にいふでんく虫也莊子は人の耳をおどろかす事を書上手なるゆへ右のとをりにいゝたり此語の心をふまへて中むかしの毎句付の笠にかしらの上に國二ヶ國といふ題ありしを加賀笠の下にさしたるさつま櫛といふ句をつけて勝句となり世上の人の語り草となる此の道行の出の文句又是をやつしたる也唐子わけには和國のさつまぐし和國の嶋田にはもろこしの唐ぐしとやまともろこし打ま

せてといひかけてせんだん女と小むつと打まじり
てのたびだちをことはる也

枕をたゝむ夢たゝむ千里を胸にたゝみこむ

船中などに用ゆる懷中のたゝみまくらより邯鄲の
枕をふまへて夢たゝむといひ飛張房が縮地の杖の
意をふまへて千里をむねにたゝみこむといふ殊に
二人が渡海のはるけさ千里あなたへ着く意を胸に
たゝみたくはふるの情によせていふ

我は古郷を出る旅君は古郷へ歸るたび

此句情のいはずして情その中にこもる尤詩などに
この格多き事也小むつは古郷を出る旅なれば古郷
をはなるゝ物うさいか計りぞやそれにくらべては
せんだん女は古郷へ歸り給ふ旅なれば旅のうさに
も便ありと小むつがせんだんによへ力をつけてい
さむる體也それゆへ此下の文句に小むつがいさめ
ちからにてといへり

ふたはに見せてせんだん女

古郷を出ると歸るとの二端とうけて又せんだんの

二葉といふにいひかけたり

親と妻とを持し身は何かなげきは有明の月さへ同じ

月なれどなふ二人見馴し聞の月

小むつが身の上にて小むつが情をのぶる也月を見
て夫婦ねやにてながめし思ひをのぶる尤さもある
べし

なごり數々大村の

是より

ぬれてかはかぬ旅衣

といふ迄の文句其心はよく聞えて注に及ばずたゞ
文句のすら／＼として何共なふおもしろく筆にう
るほひのある事よく／＼氣をつけてみるべし是ら
が筆さきにうまみの有といふならん

二千里の外故人の心

白樂天が月の詩也三五夜中新月色といふの對句な
り月をなかれて二千里の外に別れある所の故人の
心もさぞや此月を見て我を玄たふらんとなり
うなばら

潜海の二字をあをうなばらとよむ也

鬼界十二の嶋

きかいはさつまのいわうが嶋也それより目通りに
打つゝきて十二の嶋ありとなん云り此所の嶋々み

な今に有^ル嶋共也

あれはいにしへ天照神の住吉の明神に笛ふかせ舞曲を奏し二神のあそび給ひし所とて二神嶋共申す也

そさのおの尊暴惡なりしかば天照神いかり給ひて天盤戸へ引こもり給ひしかば天下常暗となりたるゆへ住吉の明神をはじめ八百萬神かぐらを奏し給ひしかばそれより岩戸をひらき給ふ爰のすみよしのふえふき給ふは此故事也又二神嶋にてふたがみのあそび給ひしは余の事なれ共かくらをいふ故住吉の明神を引て立たる也二神嶋はふたがみままとて今に有となん

敷嶋のはや秋津洲の地をはなれ

敷嶋もあきつすも日本の別名なり

あまの鳥舟岩舟の

たい舟の事をいふ歌ことばなり

まだ秋風に鱸つる松江の湊

古來ずんがうとよみ來れ共唐音は松江^{せんきやん}にてすいき

の名處なり日本にても出雲の松江は鱸の名所にてまだあき風にすいきつる也などいへる古歌あり其

古歌を取てこゝの文句のいゝかけに用ひたり

陶朱公

越の范蠡官を去て後陶朱公と名のり大に富をえた

宮前の楊柳寺前の花

三體詩に出たる詩の句にて其こゝろはきこへたる

ごとし

鸞輿^{らんぎ}屬車

天子の御車をらんよといふ跡につゞくるまを玄

よく玄やといふ也

谷のましら

ましらば猿の事也

かたにかし

肩に駕^{のり}といふ事也

さいくはいの山路に

崔嵬と書也山のけはしき體也詩經に有

手談のわざ

前にみへたり

斧の柄もおのづからとや朽ぬべし

列仙傳に此事あり仙人の碁を打を見る内に年月移

りて手につきゐたるおのゝえくさりたりとなり

とりのそら音ははかる共

孟嘗君といふ人秦に囚られし時ひそかに秦を夜の内にぬけ出たりしが追手のかゝらん事をおそれ道をいそぎしが函谷關といふ關所をひらかさりし所にもう去やうくに去たかひし者に鶏のなくねをよく似する人あり鶏のまねをせしかば其邊の鶏みななきし程に關守やかて夜明たりとて關所をあけて通しけるとの故事なり

驪山のふもと

りさんといふふもとに花清宮といふ御殿あり

楊貴妃の御廟所大眞殿

唐の玄宗皇帝の十八番目の御子に壽王といふあり楊貴妃はもと此壽王の妃なりしが美事すぐれたりしかば壽王へは別に妃をあたへやうきひをば玄宗寵愛し給ふすなはち楊玄琰がむすめにておさな名を大眞といふ貴妃は女官の名也後に安祿山といふもの亂をおこせし故玄宗は貴妃ともろ共に蜀へにげ給ふ其みち馬嵬といふ所にて軍兵が貴妃を殺したる故その後玄宗したひかなしみて臨邛の方士に勅して貴妃の魂のあり所をもとめ給ふに蓬萊山へ

いたりて大眞殿といふ額のかゝりし所へゆきいたり楊貴妃にあひしとぞ

楚人の一炬に焦土となんぬ咸陽宮共いつべし

是は杜牧之が作りたる阿房宮の賦の詞なり秦の始皇がおごりをきはめて花麗に立たる咸陽宮なれ共楚の項羽が一戦にほろぼされ項羽楚人にやかせしかばさしもびゝしき宮殿共も一つの炬にやきつくされて焦土となりたると也

目撃一瞬

目撃はまたゝき也一瞬は一たび目をひらきて閉る間をいふ故にまちかく見るをももくげきすといふ

福壽海無量

法華經普門品の語也福と壽との徳を得る事海の量なきがごとしと也

鵲のわたせる橋

前にみへたり

くめの岩はし

大和の國大峯山をかづらきといふ此所にくめの岩はしといふ名所あり

泰山を挟んで北海をこゆる事はあたはず

是は孟子が梁の恵王へ教給ふ語なり此心は魯國の泰山のやうなる山を脇の下にはさみて北海のごとき大なる海を飛こゆる事は何程したき事とねがひてもかなはぬ事也君の位ある人が民をおさめて王となる事は此類にあらず君の心に爲とさへ願ひ給へはなる事なれ共君の心にその事を爲給はざるゆへなりとなり

御幸

天子の御行を御幸といふ但行給ふ前々にてたまものあるゆへ民みな幸とするのこゝろあるゆへなり

鳩毒

鳩といふ鳥は甚だ毒あり此鳥もし水に影をうつせば其所の鱗ことごとく死すと言ひ是によつて唐にては酒又は食物に此毒を入れて毒餌するの術あり又井の傍に桐を植るも桐は鳳凰のすむ樹にしてほうわうは諸鳥の長なる程にこの樹を見てもし鳳凰や有べきと鳩鳥も恐れてよりつかざる時は水にその影のうつる氣づかひなきがため也とかや

評、右國性爺合點五段の趣向外にいふんなし只一つ老一官が甘輝か城へゆきし時かんきが妻の

金祥女がやぐらのうへにて一官がすがた繪を月かけにうつしてよく見合する所理のくらき書やう也一官は城外にたゝすみきん玄やう女は櫓の上に居その間遠きゆへ鏡にうつして引合すとの心是は晝ならばさも有べし月はもと日の光をうけてひかるものなれば夜にいり大陽地にゑづみては月光が本影也それに復かゝみをうつしたりとて照すべき理なし是はさだめて古人の云る書をよむに雪をあつめ螢をあつめし格と思はるべけれ共それは目の前にて目にさし當てみるなるべしそれさへあるべき事ならずいはんや數十間をへだてゝその影あきらかに鏡にうつるべきや何として直には見られぬぞ此段はなはだいふかし

外題 ○刈萱桑門筑紫轢

此淨るり全體がかるかやの事を取組たる故此外題也かるかやの事はむかしより説經又はぶんやの淨るり其外かぶきにも多く仕來る事にて今さら語にも及ばす次に此げだいのの轢字をいへづと訓ずる事たしかなる出所ありやおぼつかなし惣じて外

題は三字五字七字等の奇の數をもちゆる事俗の胡婆の業より出てかならず字わりを偶にはせぬ事有ふれたる例なる故字數を奇にかなへんための無理訓と聞へたり尤狂言綺語とはいへど近比わがまゝなるよし評する人もすくなからずいかさま文字の形を分てみれば家の土產に榮ものを車につみて歸るの心を會意して此字を製しかくよませたるにや此やうな事が格になりなば金屬に遣といふ字を大臣とよませ紫帽子を冠にして爺といふ字を變童共よませるやうになりゆくべし

序
大道すたれて仁義おこり國家みだれて忠臣をあらはす此語をもつてかんがみれば道にもまた誠の本あり其まことのみなもとを尋れば戀慕愛執にまぐはなしと豊芦原の陰神陽神さぐり給ひし天の逆鋒

この序の詞木に竹をつぐとやら前後の語つゞきはなはだ不都合也まづ大道すたれて仁義あり國家みだれて忠臣をあらはすとは老子經に出て老子が道とする所の虚無自然の眼より聖人の仁義忠孝を打やふりたる詞也この語をうけて道にも又誠のもとあるとは何事ぞやまかも戀慕愛執を道のもとゝい

ふ事いかに狂言なればとて余りにつたなき書やうならずや勿論男女のまじはりより父子兄弟等と人倫のひろまる事は諸書に多き事なればその心をいはんとならば聖書にもあれ神書にもあれ此所へ引べき語幾等もある事なるをかくのごとく妄言を書ならべて一部の發端とする事作者の恥也さて豊芦原は日本の別名にて伊弉諾伊弉冊の二神あまのさかほこをもつてさぐり給ひ此國がはしまりしといふ事は子供もまづたる事なればくはしくあるすにおよばず

世々のひつき

祚の字にて天子の御くらゐをいふ

君子國

日本の別名なり日本は禮義たゞしき國なるゆへ稱美していふとなり三才圖會には日本の外に別に君子國といふ國あれ共日本の事をくんしこくと稱する事昔よりふるき事なればまづは日本の別名とすべし

踏歌の節會

正月十六日に内裏におこなはるゝ節會なり

とのゐもり

だいらへ御番にあがりて守護するをいふ

いなにはあらぬいな船

古今などに最上河によめる歌の評也出羽の國の名所もがみ川は川水ことの外はやくして船を引のぼすにふねのかしらのふる態が人の物を否といひてかぶりをふるに似たる故かくいひかくると也

公卿

内大臣右大臣左大臣を三公といふ又内大臣をのぞきて太政大臣をくはへても三公といふその内にだいいじやうたいじんは常になき官なればまづは内大臣と左右の大臣を三公といふさて三位以上を卿といふ故に三公と三位以上とを公卿といふ也

比翼の友羽がひ

山海經にいはいく常晋山に鳥ありて翼も一つ目も一つゆへ二鳥相ならびて飛その名を轍といふと又示雅にも南方に鳥あり比ざれば飛ずといへり皆ひよくの鳥の事なり

香染の袈裟

絳色に染たるけさをいふ

おどろの髪

荊はいばらの事也いばらのことく亂たるかみといふ心也

ふ心也

叡感

叡の字は深明也と注して智の至てふかき事也書經には叡は聖をなす共いへりされば時の天子をあがめて聖主など申す故天子の事にほめ奉りて叡の字をつくる也

常陸帶

ひたちの國かしま明神の祭の日女に思ひかけたる男のあまたあるを布のおびに其名を書付て神前におけば其多き中にすべき男の名書たるはおのづとひるがへるを禰宜が取てとらすればそれを聞て男かこちて終にゑたしくなるといへりそれゆへいもせの縁むすびの事に引ていふなり

大悲のおちから

大日經に大慈大悲といへり佛菩薩の衆生をあはれむをいふ

念彼の段

觀音經の偈に念彼觀音力といふ事多く有その所を

俗にねびの段といふ

雲雷くせいでん

念彼の段の文也もし雲おこり雷なり電はげしき時彼觀音の力を念せは時に應じて消散する事を得んとのこゝろ也

胎金兩部の峰

眞言家に佛體を陰陽にわかちて陽を金剛界とし陰を胎藏界とし是を兩部といふそれより取て大峰かづらきの山上をたいこんりやうぶのみねといふ也幕下

大將の旗下をばつかといふ大將の陣所に幕を打たる其幕の下といふ事也されば其手下につくをばつかにつくといふなり

大玄谷神の咒

幻術などをつかさどる神にて其本尊の咒なり

雲井のかほり蘭奢の乗もの

こゝのらんじやは蘭奢なるべし匂ふ乗物との心也又蘭奢は南都東大寺にある奇楠の名也むかしより東大寺に傳はる寶物也それにつき世俗のものがたりに寺を東大寺となづくる事此蘭奢待といふ奇楠

ある故也其故は蘭の字の中にて東の字を取り奢の字の上にて大の字を取り待の字の旁にて寺の字を取て東大寺といふと也此説久しく云つたふる事なれ共蘭の字の中は東にはあらず東かくの字なればいぶかしき事也さて此序に伽羅の事をも辨すべし世俗に奇楠と伽羅とよぶ事漢語のやうに覺へたれ共伽羅はもと梵語也漢語になをすれば黒といふ事也佛法に大黒の眞言を摩訶伽羅といふ是すなはち漢にては大黒といふ義也翻譯名義集に摩訶此には大といふ伽羅こゝには黒といふと云り然れば漢にては黒といふべきをそのまゝ梵語をもちひて伽羅といふなるへしさるによつて伽羅といふ字義を穿鑿しては奇楠の名とする事其義知がたし是に付て薰物の方を黒方といふも伽羅の方也との意なるべし是等は世間に多くゑらざる事ゆへ序ながら書付ぬたそかれ

黃昏と書く暮方の事也

男山のむかしを尋るに豊前の國宇佐の郡より勸請

男山とは八幡山の事也元來おせんの國うさのこほりひしかたの山に廣幡八ながれあらはれて八幡大

神宮とあをがれ給ふを其のち神龜四年に今の山城のおとこ山にうつし勸請し奉となり

餓死

餓の字に餓のかなを付て餓死とかたるは何故ぞや大かたうへ死をがつしと覺たるならん鄙々

大行は細謹をかへりみず

戰國策に出たる語也天下なとを取んとのぞむやうなる大事をおこなふものは瑣細なる事には目をかけぬもの也とのこゝろなり

外面似菩薩內心如夜叉

阿含に女人地獄使能斷佛種、外面似菩薩、內心如夜叉、といへるを截ていふ也

まよふが故に三界の火宅

佛法のさとりをのべて迷故三界城悟故十方空本來無東西、何處有南北、といふ偈あり此心をふまへて書たる也三界の事火宅の事は前に注せり

輪廻のきつな

恩愛にほださるゝものは三界をはなるゝ事あたはず車の輪のめぐるごとくに生れかはりゝて三界の間をうらたゆる是をりんるのきづなといふ也

無明のさとり

無明は煩惱の事也無明の暗といふはあれ共無明のさとりとはめづらしき詞也無明を悟で破るのこゝろにて書たるにや

妻子珍寶不隨者

經に妻子珍寶及王位臨命終時、不隨者といへるをきりて用る也

愛別離苦

前に出たり

評、此段の本妻と妾とが基盤の枕のうへ二足の蛇の咬あふ趣向はもと藤澤の一遍上人の俗の時の事也くはしく爰にゑるすべき事なれ共北條九代記にもあり又は近年出たる小栗實記といふ軍書にも遊行の由來を書たる所にくはしくあり作者大かた小栗の中より得られたる思ひつきならん

富で奢らず貧してむさぼらぬは未可なり富貴にして禮をえり貧してたのしめと弟子にゑめせし孔子の詞此語は論語に出て孔子の弟子に子貢といふ人間かけられしを孔子のゑめし給ふ詞也其心は文面にてよく聞えたり

鏑矢

矢まりに煉ものゝ丸きを付たる矢也

一天の主となる某十二人迄女房持てもくるしからず天子の妣は十二人をさだめて一年の十二ヶ月にきたとると白虎通に出たり日本の天子にも女官は典侍四人お下四人内侍四人合せて十二人ありこれを局といふ俗多く取ちがへて十二の後といふ后は天子の妻也一人に限る局は官女にて官なりもろこし臨潼の會に善をもつて寶とすと伍子胥がい

ひし

りんとうは秦の哀公天下の諸侯を會せられし所の名也この會あはれ關寶の會なりしが楚にはいか成寶かあると問し時伍子胥こたへて我國には金銀珠玉の寶をもつては寶とせず惟善人をもつてたからとすと答たり伍子胥この時楚の靈王にゑたがひて臨潼にゆき此會の明輔たり

ついに妹脊の道ゑらす

本朝の神代に鵲鴿ありてその尾をびくめかせるを伊弉諾いざなみの二神見給ひて是にならひて其腰をびくめかし給ふより婚姻の道ひろまり長くいも

せの道をつたふさればせきれいを戀おしへ鳥といふも此故事也とかや

智仁勇

此三つ人道の大徳也智はちえ也仁は天よりうけたる本性の徳なり勇はすゝみていさみある也人に此三つがそなはらねば道徳にいたられぬ也智はたとへば行所の道すじを目をもつて見わくるがごとし仁はたとへば行べき道すじを足にてあゆむがごとし勇はたとへば行べき所へゆき着へしといさみすすむがごとし故に此三つを天下の達徳共いふ也

もろこしには卞和がたま我朝の驪龍のたま

荆の國にべんくわといふ人あり山より璞を掘得て是を荆王に奉る荆王かのあらたまを玉尹きういんといふ目に相せしめ給ふに是石なりといふ荆王へんくわが上をあざむくと怒て左の足を刖せらる其のち荆王死し給ひその子武王くらゐにつき給ひしかばへんくわふたゝび是を献ず玉尹又見て石也といふ故武王もいかりて右の足をきらせらる其後武王死し給ひて共王くらゐにつき給ふ時へんくわは荆山に引こもりかのあらたまをかゝへて哭ゐたるを荆王

めし出し給ひかのあらたまをみがせ給へば至極の名玉にて有しと也さて驪龍のたまといふも唐の事也こゝに我朝といひしは心得ず是も又めつばうに書たるものなるべし

はくぶつしは書物の名にてちやうくわといふ人の
作なるゆへちやうくわがはくぶつしといふ也

劫は數の名也佛書におほくいふ事に一劫といふ
もはなはだ久しき事也四十里四方の岩あるを天人
が三千年に一度づゝあまくだりて羽衣にて一遍づ
つなづるになでつくしたるを一劫といふ共いひ又
四十里四方の藏に粟のみのりたるを三千年に一度
づゝ天人がきたりて一粒づゝ是を取に其取つくし
たる時を一劫といふ共いへり

女之助の趣向尤おもゑろしとはいへ共仕組のすじ
 入くまぬ故か一つ／＼さがみへて氣の毒それゆ
 へ素人目には感ずれ共推すゐはのみこまぬ所多しさて
 守宮いもりの事俗説にいひふらす事なれ共慥なる據を見
 ざりしか先年長崎の人にちなみて熙々きき子しといふ南

京人の傳授の書也といふをみるに藥方も多くのせ
たる中に女のはれる藥とて此事を書りその方守宮
の雌めと雄をとを取り生ながら竹の筒へ入但し竹の筒
に節を一つこめ雌と雄とを節をへだてゝ入おけば
一夜のうちにかのふしを咬やぶりて二疋がつるむ
を直くろやきに霜となし是を煉る汁には○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○として其つけたる人を戀玄たふといへり今按する
に唐人は日本より僞りおほきものにてかゝる得玄
れもなき事をいゝたるならん玄かも○○○○○と
いふごとき取得られぬものを藥味にくはへたるは
噓うそのはげさる前置なるべし

去のぶ草は歌に多くよみて忍ぶ事にいひかくる也
人家の軒につるしのぶといふくさなり
爰はやもめのかたを波

惣じて波にはめなみおなみありて女波は多く打て
その間におなみがうつものなるに紀州和歌の浦は

めなみはうたずして男波のみうつゆへかたをなみ
といふ也山邊の赤人の歌にわかのうらにしほみち
くればかたをなみあしべをさして田竊なきわたる
姪犯の病

犯の字誤り也姪奔と書べし姪亂といふに同じ

ひなの者

鄙はいなかの事也

屠處のあゆみ

譬如屠所羊二歩々近^レ死といふ語ありて羊が屠に
ゆく時は一足づゝに死に近しとなり

陰德あれば陽報あり

陰はかげにて陽はひなたの事也人の目にかゝらぬ
陰にての德を陰德といふ又人の目にみへたる報の
あるを陽報といふ陰にて德をつむ人はかならず目
にみへたる善報を得ると也楚の叔敖といふ人いと
けなき時出てあそび兩頭の蛇を見るたちまち殺し
て是をうづみ歸て泣母そのゆへを問ふに答て云く
我きく兩頭のへびを見るものはかならず死すとさ
きにこれをみるゆへ母をすてゝ死せん事をおそる
といへり母のいはく蛇今いづくにか有いはく他人

の又見ん事をおそれ殺してこれをうづむと母の
いはく我きく陰德ある者は天かならずむくふに福
をもつてすと汝かならず死せじといへり果して無
事に成長し後に相となりしとかや

浮木の龜の對面

佛書に多くある事也盲龜とて目の盲たる龜大海の
底にありて千年に一度海上へうかみ出づゑかるに
此かめ甲はひゆれ共腹はなはだ熱すもし赤旃檀と
いふ木をえて其身に添れば熱をさます藥となるそ
れ故龜の心に赤せんたんの浮木に乗て腹をひやし
甲を日にほしてあたゝめばやと思へ共目はみへず
あまつさへ千年にたい一度うかみ又ゑやくせんた
んが浮てなかるゝに出あふ事まれ成事なればあふ
事の希なるたとへとはするなり

奇恩入無爲

奇の字あやまり也棄恩入無爲とて出家する人は恩
愛を棄て無爲の菩提に入との心也ゑかるを奇の字
にては通せず今の作者の義もゑらす書ちらすめつ
ぼうかいこれらの所にて見るべし

今此三界悉是吾子

法華經の文にて今この三界の衆生はみなこれわ
子也との意也

評、高野山の案内作者はゑられぬにや文句に間違
ありはじめ石動丸が登りし坂は不動坂よりのぼり
たりそれ故刈萱の詞に來た道すじは難所にて草臥
足にはかなふまじこちらへゆけば花坂とて平地も
同然といへりさて次の文句に息をはかりに玉やの
與次みだい所をおい奉り女人堂迄來りしかと有て
又其次の文句に石動丸はかちほだしかくとみるよ
りはしりつきノウ情ない母様といへり是大なる間
ちがい也其故は大師の廟の前より花坂の方へゆけ
ば大門といふ門有て女人堂はなし但し女人は大門
より内へは入事かなはぬ也右の通りゆへ花坂へゆ
けば女人堂へは行あはず花坂と女人堂とは大に方
角たがふ也いかさま近年の作にはふざんみなる事
すくなからずちか比ある人の物がたりに今の淨る
りは東西となくたはいもなき事がちなるを似つこ
らしく語なして見物をまねかるゝはいかさま日本
一人の名太夫なるべしといひしも思ひ合すれば過
論ならずその一理はある事なるべし

淨瑠璃評注卷之四終

淨瑠璃評注卷之五

外題

○蘆屋道滿大内鑑

此じやうるりみな蘆屋のだうまんが事を主意にして書たる故蘆屋道滿の四字を置也あし屋は氏なり道滿は名也大内は内裏の事也鑑とは唐の代の詞に古をもつて鑑とすれば興替を知り人をもつて鑑とすれば得失を知るといふ事貞觀政要といふ書にみへたりそれよりして物をかんがへみるを鑑と名付る事多し是もかんがへみるの心にて大内鑑と外題す此淨るりげだい評判はすぐれざりしが與勘平といふ名趣向よりして淨るりは近年の大あたり世上にかくれなき事也

序

○風にさけぶ青嶂せいしやうの外雨にうそむく古林の中

青嶂は松柏などの生しげりて青々としたる峯也屏風を立たるごときを嶂といふ狐が風にむかひて吼さけぶ體をかくいふ也嘯といふも雨にむかひて打あをのき息をつく體也古林はふるき林の物さびしき所也是みなきつねのあそぶありさま也

尖れる鸞はびこる尾小前大後

これ狐のかたちを詠す小前大後とは狐の形は前の方うしろく後の方大なるもの也といふ事なり
色中和しやうちやうをかね死すれば丘を首とす

是はきつねの徳を詠したり狐の色の黄なるが中和の徳にかたどる中和といふは徳の至極にて天氣にていへば寒からず暑からず春の日ののどかなるがごときを中和といひ人の氣にていへば聖人の氣象の剛からず柔からずほどよきを中和といふされば五色を方角に配當すれば青は東にあたり赤は南にあたり白は西黒は北にあたりて黄なるが中央にあたるゆへ是を中和の色とする也さて狐は死する時丘をまぐらとする事禮記にみへたり狐は丘にて生るゝもの故死する時又丘を首として死するは本をわすれざるの心也これみな狐の徳なり

是の妙獸百歳誰かしらん女と化し苔の褥に草まくら契りを人におなじうす

こゝには狐の妖まじる事をいふ妙はふしぎなるをいふ字彙に狐はよく尾をうつて火を出すと云り佛法には狐のよく妖るを報得の通と名づく事文類聚とい

ふ書の中に百歳を経し狐名ある人の髑髏をかしらにいたゞき北斗を拜するに落ざる時は淫婦とばけて人をまよはすと云りされば狐がばかせば苔をしとねと思ひ草を枕として眞の美女と思ひて人にちざりをおなじうすとなり

日月星度

日や月や星やなどのあゆみの度を度といふ惣じて天には形なき故二十八宿の星を東西南北の四方へまくはりて是を天の體とさだめ月日や星のあゆみをさだむ故に日月星度といふ

比翼連理

比翼鳥として雌雄つばさを比てとふ鳥ゆへいもせの中むつまじきにたとふ連理は前にみへたり唐の玄宗帝楊貴妃を愛しある時ちかひて天に在てはひよくの鳥となり地にありては連理の枝とならんと給ひしとかや

氣候

天地の氣を一歳に廿四氣七十二候にわかす即ち春夏秋冬の氣のめくるをいふ

月かげの白虹日つらぬけば甚だひかりを失へば

むかし荊軻が秦の始皇をうちに行たる時白虹が日をつらぬきし例ありすべて虹が日月をつらぬくは不吉の兆るしなり

日蝕月蝕

蝕はむしばむとよみて日月がひかりを失ふ事也もと日と月とがたがひに光を衝て蝕する也日蝕は君よはきの象月蝕は臣よはきの象也といへり身まかり

罷と書て去りぞく事也死する人はこの世を去りぞくの心ゆへ死するをみまかるといふなり

天文の博士

日の月の星のといふものは天の文ゆへ天文といふ博士は官の名にて其道を博くきはめたる學士といふ事也

薄氷をふむごとく

恐るゝ體をいふ也詩經に戰々兢兢として薄氷をふむがごとしといふ語に本づきて書たるなり

胸はうつせの

おそろればむねがだく／＼とうつやうなる故胸はうつといひかけてすぐに空蟬へ取付て心がうつゝ

ぬけがらのやうになりたるをたとへいふみな御前をおそるゝ體なり

おめす

おめるは臆の字也人に恥る所ありておそるゝきみなり

分野

唐の九州の地を天の廿八宿に割付て何州は何の星のぶんや也とさだむる事也

白虹日をつらぬけば天子のお身のたゝりなれ共月の體をつらぬきしは親王さま

日は君の象月は大臣の象なり又月は日に次ものなれば儲貳の象ありちよじはすなはち親王なり

二十八宿

東方の七宿は角亢氏房心尾箕なり北方の七宿は斗牛女虛危室壁なり西方の七宿は奎婁胃昂畢觜參なり南方の七宿は井鬼柳星張翼轸なりかくのごとく四方におのゝ七宿あるを合せて二十八宿にて是を天の體とする也

しなとの風の天の八重雲を吹はらふやうに
神書にある事也たゞ雲を天の八重雲といふ八は神

道にたつとぶ數ゆへ別して八重といふしなとの風は神風なり

聞でんほう

聞傳法なり耳に聞たるばかりのおしへといふ事なり

易は變易

易は陰陽のうつりかはる妙用をいふ故に易の書に易はへんゑき也時にゑたがつてへんゑきして道に隨ふといへり

大元尊神

大元帥明王とて惣身に蛇のまとひ付たる本尊也いくさをまもり給ふゆへ大元帥といふなり

和歌三神

住吉玉津島人丸をいふ

そこにお暇たまはらばみづからも身をすぐり

そこは足下なり今の俗の貴様といふ程の事を雅語には足下といふなり

丸まるが心にあり

丸といふ事を天子の自稱と心得るはあやまり也是は上を恐れて我身をよぶ詞なれば親王以下臣下の

自稱に用ゆべし其故は元來まるはちいまるといふ略語なり君をおそれて此身がちいまるとなり都て和語にまるといふ詞の付はみな物が一所へあつまりちいまるの義也これ訓の一つの秘事なれ共ここに明すまつまるといふてにはの付語共を案すべしあつまる、ちいまる、わだかまる、こまる、つまる、つまる、せまる等みなちいまるの意ありされば子供の大小便を取る小廁をまるといふも腰がかいまり身がちいまるの意也朝臣にもいにしへは麿と名を付たる人多し後世には麿を轉じて丸の字をもちゆと見えたり

無^{あてきな}狀

無爲共書て埒もなき事をいふ

おぼろけ

小縁と書てすこしのゆかりといふ事なり

久かたの空

ひさかたは空といはんとてのまくら詞なり

うちはへて

打榮と書にぎはふ體也又みごとなるきみ也

簞簋内典

阿部の晴明が作りし曆數をしるしたる書なり
注連繩

神前にはる繩なり惣じて神事の清めにもちゆ紀貫之が土佐日記にはしりくめ繩とあり諸社根元記云いわとのまへに繩をはりて日の神の還り入り給はぬやうにする也是今のしめなわ是也わらを左にない七五三と數をわくるは七五三は合て十五也天道は十五にして成なりひだり繩にするは天道の左旋に取る左は陽也陽には陰が添もの也繩の二筋まとはは是すなはち陰陽也はしをたゝさるは質素の義なりと云々

非相非々相

みな三十三天の中の天の名也

大卜師

占の官をいふ周禮に大卜の官といふは天子のうらかたをつかさどる官也

曆算推歩の術

曆をつくる算をれきざんといふ日月星の歩を推量てつもあり知るを推歩の術といふ也

吒^だ枳^ぎ尼

天部の本尊なり

咒咀の文

まじなひにて人をのらふ文なり

三百六十四爻の占

易の卦は六十四卦にて爻は三百八十四爻あり今こ
こに六十四爻といへるは六十四卦の數を取りがへ
ていひたるもの也作者の文旨なる尾の出る所もつ
ともかやうなる所に於てみつべし

坤の卦乾の卦

坤も乾も共に八卦の中の一つなり

ふかみ草

牡丹の事なり

塵にまじはる宮柱和光の影もあきらけき

神の威光のひかりをやはらげて塵の世にまじはり
給ふといふ事を和光同塵といふ也此語はもと老子
經に出たり

鴻飛で冥々^{さしや}者なんぞしたはんや

感遇の題にて唐の張九齡が作りたる古風の詩也鴻
の大鳥がめい／＼たるおほぞらへ飛あがりとび去
たる時は弋^ぎいるものもしたふ事あたはずとの意な

り
蟻の穴から堤のくづれ

老子經にある事也蟻の穴を老子經にては蟻封とな
づけたり

戀ぞつもりて淵となる

陽成院の御製につくばねのみねよりおつるみな
のがわこひぞつもりてふちとなりぬる

詩經といふ唐のふみに桃の天々たる其葉蓁々この子
こゝにとつぐ

詩經周南にある詩也是は詩人が嫁する女を見て桃
の若木の天々としてその葉の蓁々なるにたとへ美^{ほめ}
ていふたる詞也とつぐは嫁をいふ

優曇花

天竺に有て三千年に一たひ花さくといふ木なり

龜ト

龜の甲を焼て其甲のやけわれたるすじを見て吉凶
をうらなふをいふ

身體髮膚をわけられし父

孝經にしんたいはつふは是を父母にうけたりとい
ふ孔子の語あり

伍子胥はいさめて誅せられ眼軍門にかけられしが吳王の恥辱を見て笑ひしとや

是は吳越の戦ひの節の事也吳王を夫差といひ越王を勾踐といふ兩方相たゝかひて越王勾踐會稽山にて打まけさまぐの艱難に身をこらし今一度旗をあげ吳王をほろぼさん事を心がけたり此時吳王ははなはだ奢をきはめられしかば其臣伍子胥これをいさめ斯ては又越王にほろぼされ給はん事をいふ吳王いかつてごししよに屬縷の鉢をあたへ是にてなんちが首を刎よとわたさる伍子胥も大にいきなり今吳王知なくして我を殺し給ふ此後久しからずして越王のためにほろぼされ給ふべし我いま死したらば首を東門にかけ置べし我吳のほろぶるを見んといひて自殺しぬ其のち果して越にせめられほろび給ふ時ごししよが眼に是を見て笑ひ其まゝしほれけると也

隨求陀羅尼

大すいゝゝぼさつのたらに也都てだらにはみな梵語にてぼんじ也

露ときえゆくたまよばひ

離冤病

いにしへ人の死したる時その死人の衣服を屋根の上へ持のぼりてその名をよびかへり給へゝと三度よぶをたまよばびといふすなはち復たふしほひと書なり

俗にいふかげのやまひにて異病論病名彙解などに
出たり

はづかしやあさましや

此かゝりより奥へむけて葛の葉が子に別れの口上
おほく百合若大臣野守鑑の鷹が子にいふせりふを
はめたるものなりもとよりゆり若のせりふは近松
の筆ゆへ一入しつほりとして人の感情をもよふす
事多し此場みなゝ其移ゆへおもしろき筈なるべ
し

畜生殘害の人間よりは百倍ぞや

ざんがいとは物のいのちをそこなふ事也こゝの文
句殘害といふと百倍といふと文句がつりあはず百
倍といふは畜生は人間より愚痴なるゆへ愛着の念
のふかき事百倍ぞやといふ事也されば佛法に畜生
の子を思ふ事人にまさるを愚痴鄙陋とはの給へり
殘害はこゝへ出あはず

○道 行

注なし

葛の葉の恨

くすの葉といふものは風にふかれては其葉のうら
をかへしてこと／＼くうらを見するもの故歌道に
恨のまくら詞にはくすのはのうらみといふなり

卅一字の歌の詞は八雲たつ

素盞雄尊の御歌に八雲たついつもやえかきつまこ
めにやえがきつくるそのやえかきを是三十一字の
始なりとかや

丹波の父うち栗

此事世上に大に取あやまりて傳ふるはむかし此里
人に不孝のもの有て我父を殺して地にうづみたり
その墓より栗の樹はへて常の栗よりも其子大き也
今の丹波の名物てうちぐり是也と足跡方もなき
説なり此栗はいがの内よりひとり割出で樹よりお
のづと地に落るがこの栗の妙也それゆへ古人出落
栗と名付とかやそれを後世はみきのことく取あや
まるとなん

司天臺

禁中にあり

評、此淨るり始終の趣向文句共おほやう面白くよ
く出來たるものとはいへ共又格別に外の淨るりに
すぐれたり共みへず然るにかくべつの當り有し事
は與勘平のたすけなるべしまづ與勘平といふ名ば
かりでも一當りがものは有べし其上に我がおれか
おれが我がのせりふおかしうて尤で底に意味のふ
かきやうにおもはるゝ事也但し莊子に此趣あり莊
周ある時夢のうちに小蝶と化して翔りまはりてた
のしみしがたちまち夢さめたれば我身をみるに床
に打ふして本の莊周なりさて莊周は世上を虚なる
ものと見捨る見識ゆへ今日のゆめのさめたるも亦
ゆめのごとしと思へりそれゆへ此夢の事を論じて
いはく今ゆめのさめたる我心より思ひやれば今迄
ゆめの内に小蝶となりしは莊周がゆめなるべし然
れ共打返して思ふてみれば今我ゆめさめて莊周と
いふ人に成たるが小蝶が夢にて今我身を莊周也と
おもふは却て小蝶がゆめの内やらしれず夢が現か
うつゝか夢か莊周か小蝶か小てうが莊周か其差別
知れがたしと云り佛法にも此意ありて維摩と文殊

舍利弗なんと心算の入かはる事あり入我我入といふも此きみ也然れば此しゆこうはその心の來る所の根ざしがはなはだ高妙也玄かれど見た所がやつことやつこの所作町中子供のうれしがる所葛の葉がせりふは女中の感心あさからず何やかや都合よく出來立たる故の評判なるべし

外題

○大塔宮曦鎧

此淨るりは後醍醐天王太子さだめの事につき關東ならびに六はらの我まゝをいきどほらせ給ひ大塔宮をもつて將軍とし征罰の企をなし給ふ事大様太平記の意を本にしてつゞりたるもの也中にもおゝとうのみや御鎧をめされたる行粧あさひのかゝやくごときとの文句あるをもつて外題を直にあさひのよろいと名付るなり尤よきげだいとの評判なり舜^序に錐^きを立るの地なけれ共天下をたもち禹に十戸の聚なけれ共諸侯に王たり上三光の明をおほはず百姓の心をやぶらざるは王者の術

この語文選に出たりいにしへ舜といふ聖人はそのはじめは百姓の子にてわづかの土地もたもち給は

ざりしか其後には天下をたもち給ふ錐をたつるの地とは至てわづかなる地をいふ禹といふ聖人もとは堯舜の臣にして其はじめは民のかまと十軒もたもち給はず十戸は家數十軒にていたつて少々也聚^{しよ}は落聚とて民のあつまり住居する村をいふ禹は十軒ほどある村の主にてもあらざりしかども後には天下の諸侯の上に立て天下の王となり給ふされはかく舜や禹のごとくに後にてんかを取給ふ事は其身の徳上日月星の三光のあきらかなる徳をおほはず下は百姓の心をやふり給はざるを心として天下に王たるの術とし給ふ故也となり

參差たる

かたががいとよみて世の濟らずさまゝの出入のあるをいふ

山の座主

山といふものは何のやまにもおのゝ名あり或は愛宕山鳴瀧山など、皆その名をよふ事なるに只打まかせて山と計りよへばひえの山にかぎる也是但し叡山は王城の鬼門をまもり佛法王法を鎮護ある第一の山なるゆへなり

扈從

君の供をするをこせうといふ

赤酸醬

鬼灯の事也日本記に出たり

折伏門

佛法に攝取門折伏門の二つあり衆生をあはれみて
すくひとるをせつしゆもんといひ惡魔外道をおど
してくつ伏さするをまやくぶくもんといふなり
解脫どうさう

罪を解まぬかるゝをげだつといふ衣はつみをげだ
つするゆへげだつとうさうといふ

若宮はおもなげに

おもなげは面目なき體なり

一言事をやぶり一人さだむ國津風

文句はよく聞へたとをり也此語は大學の書に見
えたり

鐘馗の繪

しやうきはもと終南山の人なり唐の太宗の時進士
及第し出世をくちかれいきどをりを發して御殿の
階にて頭を打わり死しけるが其後玄宗皇帝の御宇

楊貴妃わづらひの時みかどの夢に大臣の姿となり
惡鬼を追はらふと御らんあり紙に惡鬼ごうふくの
神として其像を繪にうつさせ鐘馗大臣とあがめさ
せ給ふそれよりして後の世迄大和もろこし相傳て
此像をあがめ惡魔及び疫癘をはらふのまもりとす
る事也

酒は詩をつり歌をつり

唐詩に酒を掃愁帚といひ又は釣詩鈎なりといへ

借ひこころび

禮をのりこゆるをひところぶといふ

釋提桓因

梵天皇の名なり

評、無禮講まんざい等の文句みなあたり有その中
に無禮もぶれいぬれえんさき立はたかりしとの文
句あまりのやうなれ共これ下の句の受がよき故耳
にたゝず立はだかりしはの跡右少辨俊基といふも
のにて格別いやしからず是又氣をつけあちはふべ
き事なるべし

臣として不忠なるは子として不孝なるにおなじと田

氏が母の確言

この語圓機活法忠臣の所にみへたり確言とは名言の事也

北の方より家の挑灯さきばしりのかちの者お歸りとよばる聲に門番とび出貫の木扉ぐはつたりひつしり八もんじにひらく地に鼻手燭かゝげて扈從近習敷臺におりめ高なる玄關前月にきらめく鍵印父齋藤太郎左衛門利行お歸りかいのと乗物に取つければ

文句は注におよばず

評、此所太郎左衛門やしきの表へ早崎がきかゝる所へ齋藤歸り合せ門番が門をひらければこしやう近習出むかへはやさきは齋藤へあいさつをせんとする何やかや一時に取ませたる事の多き場なるを文句を締ひめて小みじかによく書こなしたるもの也貫の木とびらぐはつたりひつしり八もんじにひらく地にはな手しよくさゝげてこしやうきんじゆ敷だにおりめたかなる玄關前の句すいぶんつゝめたる内に其場のもやうをよくかたどりたるもの也まづ爰の語を一つづゝ引はなしてはきこへぬ事多し第一ひらく地に鼻とは何の事ぞやしけれ共あとさき

の書まはしが奇妙なるゆへおのづと其わけよく聞ゆ此本をよむ人これらの所にて作者のはたらきのある所を氣をつけ給ふべし此次に早崎がせりふも小りこうに書たるもの也その故は夫に隠して參りしといはすしてもしも夫よりかす殿はみへまいかといひア、心せかれやといふゆへ聞親はなを心ならず子細はしらねど立ながらのさたではあるまじいざまづ奥へとつれゆくやしかた人形を活してせりふがしづまぬ書方也是より奥に至り早崎が齋藤へものがたりの所齋藤が返答よりかすが立ぎゝみなみな都合よく勝手ばやにいやといはれぬ書こなし尤妙作なるべし

三十年來夢空々しゆみせんくだけで盤石に花ひらく一喝

辭世の偈をつゝりたる也よりかすが年卅歳あまりゆへ一生の間を夢とさとりて卅年來夢空々といふ也空々は本來空の意にて元來我といふ物なしと也しゆみせんはくどくべき物にあらずばんじやくは花さくべき物にあらずれ共眞理をさとり得たる時はしゆみも常あるものにあらず盤石も一佛性なれ

は又さとりの花をひらくべし一喝とは我が一念悟入の眼をひらかんため心をよびおこして喝とさけぶ也禪宗のさとり意也

哀別離苦

人間八苦の一ツ也いとしかはいひ親子ふうふも死わかれてかなしみくるしむをいふ

周の八疋項羽が驍呂布が石兎馬我朝の鬼鹿毛

周の穆王八疋の龍馬にのりて天下をかけめぐり給ふ驍は楚の項羽が名馬せきとめは漢のりよふがめいば也我朝にては小栗判官の名馬をおにかけといふ

辟易

おどろきさはぐをいふ

彌天の暴逆

天にはびこるを彌天といふ

那羅延力

佛書におく出たりならえんは今いふ力士なり都なる女あり車を同じうす顔葬の花のごとしようたふ

是は詩經の鄭風有女同車の篇の語也葬は今いふ槿

の花也其顔のうつくしきもくげのはなのごとしと美女を詠せし詩也三位の局にかけていふ扱今の俗のあさがほといふは牽牛花也なる程草にては牽牛花をあさがほと訓すべし木にては槿をあさがほと訓す詩などにいふはおく槿の事也詩經の注にも葬は槿也といへり

鄭衛の二風道を蕩し國をそこなふの淫聲

詩經國風の内にて鄭の國衛の國の詩は其うたひ聲たはれて淫聲と名付て人の心をとらかす故聖人はをいましめ給ふ

氣焰騰のごとくにあがり

書經に周公の勇氣をほめたる詞なり其ゆうきのいきほひ騰のはげしくあかるがごとしとなり

根笹のあられに水晶の玉をかざり上には鳶が羽をのし鯉をつかむつくり物戀に心はとびたつばかり根ざさにあられさはらば落よの心をさとり

こゝの燈籠のもやうづくしの文句五十年もいせんのはやり歌をすぐに書たるもの也されば時代がうつれば古物があたらしく今のわかき輩にこれをふる言と知る人なし

ひきがゐるに歌よみも有ふ事とぞさゝやきける

此まへの文句を段々よみて此落文句をみるべしこれらが正眞の近松の筆勢なりかはづの歌をふまへて太郎左衛門がふつゝかなるをひきがへるといひたり諸見物のどよみをつくつてよろこぶ所おかしみ又かくべつ也是につき近松かよのつね人に語しはをよそ落文句に笑ひを取事又はかる口なんどを書にはすこしもあんじたるけしきなく其場へふと出たるやうに書がひみつ也しかれ共是が下手のなりにくき事也とかや尤さも有べし近松の筆勢には思ひがけもない所で時々ひよかすかおかしみある故本をよみてもよむ人の氣をつかさす是近代作者の大に及はぬ所なるべし

乾達婆王

法華經にあり夜及などのごとくあらくれたる姿なり

もしほぐさ

何やかや書あつめたるをいふ

らうたげに

此語のとは御所に上臈下らうありて官位をおほ

く經給ふを臈長^{ちうたけ}たりと申すゆへ下々のいふ長^{おとなし}やかのきみあり又爰では宮の御もののおもひにて氣をつかし給ふ體にもかけていふ也

評、三の奥のかゝり八歳のみやの御うたの前後文章うづだかくさながら下におかれぬ手段あり亦近松が筆勢也中々余の作者のおよふ口氣にあらず今の淨るりはかやうの場になりて格ががつたりと落て正眞のよみうりの繪ざうしと肩をならぶ能々氣をつけて何かを見くらべたらんはおのづからあじはひしるべし

充滿其願如清涼池

その願を充滿しめて清淨地のごとくならんとの文言にて奈落の底の罪人も七月十六日にはちごくのはのほをのがれ出すしき池にあそぶ心地とてすなはち孟蘭盆經の説なり

漢の紀信が忠義にこへ

きしんは漢の臣にてかんそのたゝかひに高祖のあやふかりし時きしん身がはりとなりかうそのしやうぞくにて車にのり楚の陣にゆきて焼死したり是によつて高祖はあやふき場をのがれ給へり此事史

記前漢書に出たり

九品蓮臺

極樂に九品あり上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生合せて九品也其うてなをれんたいといふ

評、齋藤が賢介^{けんかい}を立ぬきたる所尤ぬけめなしはじめよりかす切腹の上にて力若を齋藤がもり立んといひし所にすでに此こゝろあれ共もとより見物に思ひがけなし扱この場にいたり齋藤が始終の心をかたるについて最初よりのいきかたをあんすれば齋藤はしう武士道を立ぬきたる所あきらか也我は六はらのひくはんゆへ我身におゐては少しも天王への荷擔なく頼員力若は天王へのたのまれし義を立させ始終てんわうの御ためにいのちを果ししかも力若がさいごによつてよりかすがむた死迄忠死となる是さいとうが一心よりあみ立し武道尤さも有べしをよそ三段め一段丸ぐち外の筆勢ならすみな近松の形見なるべしさればこそ趣向より文句にすこしもぬけめなくおどりの中の愁^{うらな}なんどまは

らぬ筆にはおよびもなき事共なるべし

○道行

注なし

北宮^{四段目}黜が勢ひをひらき孟施舍が義をまもる

ほくきうゆうはいにしへの勇者にてすゝんで敵にむかふ事をこのむもうししやもいにしへのゆうしやにて我身をしりぞかず敵に屈せざる事をこのむみにいにしへの名あるゆうしや共にて此事孟子に出たり

分段同居の塵にまじはり

佛法に四土といふ事有て世界を四つにわかづ其中に貴賤ひとしく居る地をどうごどいふすなはちどうごどは利利もしゆだもわかちなく貴賤貧富のしやべつなし娑婆はぶんだんとして上下きせん**の**ぶんざいがそれゝにへだゝりて貧福のわかちありされば佛ぼさつは同居土より出てしやば分段土のちりにまじはり給ふとなり

佛^{はきはん}伽梵

佛をばきやぼんといふすなはち佛の十號のひとつ也

評、四段目殿のひやうえが潔癖にて狂氣の段よめ
むすめのいきち萬端始終おもしろしゆかう文句

共に大でき尤はんなりとして道具立迄見物の氣を
取よく出来たりとの評判にて有しとぞ

日西天に没する事三百七十余日大凶變じて一元に歸
す

天王寺にて楠が見たる聖德太子のみらいきの語な
り

もろこし管仲が古主をすて桓公をたすけし

齊のくはんちうははじめ齊の公子糾が傳なり齊の
君死し給ひて糾の弟くはん公齊の君とならんとす
この故に兄の公子糾と桓公とたがひに國をあらそ
ひて軍におよび終に公子糾うたれて桓公の世とな
れりはじめこうしきうが戰場にてくはんちうは主
人こうしきうがためにくはんこうを射てころさん
と迄せしか其後にくはんこうの世になりてくはん
ちうがいのちをたすけ齊のまつりごとをさづけ給
ひければくはんちうすなはちくわんこうの宰相と
なり齊の國をよくおさめたり此事春秋左氏傳につ
まびらかなり

午正月本出来

浄瑠璃評注卷五終

題瑠璃天狗首

別古宏宇宙兼愛好風光四時移變幻一日有興亡窮途遊
子恨薄命美人傷誤軀過病患晦跡託徉狂或尋塵外靜却
混世中忙丹心偏報國白首克勤王公孫時隱僕姬子亦爲
倡千金當寶劍一炷駐名香吟行追蜨蝶獨臥戀鴛鴦梅襲
曉夢發柳惹春嬾長日中期約束夜半苦相償豈無解亂手
必有挫奸觴溫袍初立志衣錦竟歸鄉蔑如以雜劇誰道說
荒唐文窺庄子室解上郭生堂見宜偏寧欲嫉惡自懲行誦
絃諸事實下學習篇章獨謠對月枕共樂弄花床伎加泣闕
氏調和偕周郎視收懷孝悌聽取創忠良縱然世俗樂粵兮
亦何妨人間那般事如是大戲場

右

文化丙寅秋日掠贅居士書於浪華客舍爲友人賽笠翁

瑠璃天狗附言

往昔穗積先生のあらはされたる難波土産といふ書に
むかしの淨瑠璃の文句をすこしづゝ注釋し其一齣の
趣向あるひは文句のつゞけがらを評したりといへど
も其注釋のくはしからぬのみにあらず儒者氣でかた
くなゝる論どものまじりたれば見る人あくびかちな
るによりて我賽笠翁先生あらたに此書を著せり今の
よの淨るりを演る人この本を見たまはゞ文句のこゝ
ろ明らかにわかりて心いきよくうつり詞のいきこみ
たしかにしれてめりはりに味はひを生ずべし又淨る
り本をつぶよみにする人この本をみたまはゞ文句に
こもりたる故事のわけ古歌の心など多くの書籍を引
てたしかにしるしたれば和漢の學問にすゝむ階梯と
なる事多かるべし

近來の板本に正本をうつしあやまりたることすくな
からずたとへば川中嶋の配膳の齣に牛の刀といふこ
とを牛の力と書てかなづけまてかへてあるゆゑ歴々
の演者も牛のちからとかたたるゝ事きのどくなるも
の也すべてかやうのたがひを此書にはくはしくあら

ためたゞしたり

此書卷之一金閣寺の齣くりから龍の注を本文に脱せるを今こゝに擧ぐ○俱利伽羅といふは天竺の語也玄應音義には迦羅迦龍とも書て漢土にては黒龍と翻譯す其龍劔を纏ひ繞るこれ不動明王の形なりと有また不動秘密法には壁の上にひとつの劔を畫き古力迦龍王を以てこの劔の上に繞はせ其劔の中に阿字を書き心中にこの劔を觀し又心に不動を念じて六箇月に満るときは古力迦龍王みづから其かたちを現じ人の形となりて常に其人に相したがひ驅使ふところに任すと有此經說によつてつるぎをくりから丸と名づけたる物なりといへりこの一條賽笠翁先生の原本をうつす時書おとせしゆゑ此所にしるし侍り看官その疎漏を嘲りたまふことなくむば幸甚

懸金堂主人謹識

目録

卷之壹

信仰記

金閣寺之段

菅原

道明寺之段奥

同

寺子屋之段

ひらかな

無間鐘之段

卷之貳

うす雪

清水之段

同

腹切之段

同

道行

千本櫻

狐之段

愛護稚

みちゆき

同

山の段

卷之三

妹脊山

三段目切

忠臣藏

山科之段

壽門松

新町之段

卷之四

矢口渡

渡守之段

姫山姥

二段目切

近江源氏

船長之段

卷之五

川中嶋

配膳之段

東帶鑑

うつほ猿之段

目録終

瑠璃天狗卷之一

賽笠翁 著

○祇園祭禮信仰記 金閣寺の段

そも／＼金閣寺と申は鹿苑院の相國義滿公の山亭三重の樓造庭には八つの致景を移し夜泊の石岩下の水瀧の流も春深く柳櫻を植交て今ぞ都の錦なる

金閣寺はむかし西園寺公經公の山莊にてこの邊に西園寺といふ寺を建たまひしを足利三代太政大臣義滿公剃髮して道義と號し此地を請ふて隱居所としたまひ第宅を建て鹿苑院といふ額をかけられ庭に三重の閣を設け給ふこの閣の内外こと／＼金箔を貼せ給ふゆゑ世に金閣寺と稱したり此庭に八景あり法水院、潮音洞、究竟頂、鏡湖池、岩下水、龍門瀑、銀河泉、安民澤是なり又池のほとりに九山八海の石ならびに夜泊石、赤松石ありこの赤松石は赤松家より獻する所也といふ委しくは雍州府志に見えたりこゝに相國といふは太政大臣の唐名なり

柳櫻の歌は古今集に「見わたせはやなきさくらをこきよせて都をはるのにしきなりけりとよめる索性法師の歌也

究竟頂に押こめた慶壽院此天井楠の一枚板

究竟頂とは此上なき頂上といふ事にてこの三重の閣の三階にて則この庭の八景の一つ也雍州府志に三間四面の一枚板をもつて床とすと見えたるを天井の事につくりかへたるなり

狩野助直信が雪姫ならでないといふ

直信は繪師の主馬尚信のこと也自適齋と號して探幽法印の弟也雪姫は雪信と云女繪師のことにて探幽の姪孫也

雪姫も同じ様に何やら斟酌

斟酌は杓をもつて酒をくみうつはものに入てその深さ淺さを量る也と四書通義に注す物を見はからひ酌はかる心をいふなり

慶壽院が警固随分と怠るなど

警固はいましめかたむるとよむ字にてきびしくかこふ事也

彼王陵が母を擒同前

漢の高祖と楚の項羽と争鬪のとき王陵數千の兵を集めて漢祖の方に付ぬ項羽王陵をよばんと思ふ心深かりければはかりて王陵が母を取籠て王陵をよぶに陵が母ひそかに王陵がもとへ使をつかはしわが身とりことなるともいたみ思ふべからず漢王の爲に忠をきはめて二心を見せ奉るなと云ひやりさて我身ながらへてあらば王陵それ故に心よはき事もあらんと思ひてつるぎにふして命をうしなひたること前漢書にみえたり

王昭君が胡地の花色香失ふ風情也

漢の元帝の宮女王嬙字は昭君胡地のえびす國にゆきて都をおもひしたひしありさまをいへり

雪舟様より父將監迄傳はりしが

雪舟名は等楊といひ雪谷軒と號す備中の人にて永祿三年八十七歳にて卒す將監といふは土佐の光高のことにて雪信の父にはあらずかれこれの畫かきをとり合はせて狂言につくれり

岩下の井戸へ釣おろし

岩下水はこの庭の八景のうちなり

古へ齊の晏子といふ者身の長は三尺なれども諸侯の

上に立て國政をとり行ふ

齊の晏嬰身の長わづかに三尺なれどもよく主人の景公を補佐して諸侯の上にたちたる事晏子春秋にみえたり

人には一つの癖有物とは慈鎮が歌

奈良の一乗院の御門主は慈鎮和尚の御舍弟なりしが八月十五夜中門にたゝすみ給ひける折しも御力者あまた御庭を掃除しけるに傍輩どもいかに今宵慈鎮坊の歌よませ給ふらんといひあへるを聞し召て翌日慈鎮和尚の御もとへ狀を進せられし様は一山の貫主三千の棟梁にておはしませば眞言止觀の兩宗をこそ興行もあるべき事に候へ日夜風月のたはふれを翫び給ひ候こと釋門の義にもそむきかへつて凡俗の體に着せられ候事もつたひなく候御室のめしつかい候奴原去ぬる夜の月に御身の上の事を申しさた仕候向後は此道を御さし置候へかしと存候と教訓狀を進せられしかば慈鎮御返事によろこび入候とておくに一首の歌をかき給へり「みな人の一つのくせはあるそとよ我にはゆるせ敷しまの道と遊ばされてまゐらせられしかば門主沙汰の

かぎり也とてまた申させたまふ事もなくやみ給ひ
きた清巖茶話に見えたり

天竺波羅那國の大王まつ此ごとく基に打入あやまつ
て沙門を殺した引事

是は太平記の引事のまゝ也この事は丹桂籍にいは
く梁の樁頭かうとう師といふ僧よく戒律を守られけるゆゑ
武帝これを崇め信ぜられしがある日此僧と武帝と
碁をうたれけるに武帝碁のことばには殺着せよと
のたまひければ近臣遂にこの僧を斬たり後に武帝
これを悔みてかの僧の末期に何をかいひしと思ひ
給へば彼臣下のいはく僧罪なくして殺さるゝ事は
前世にて我沙門たりしが冬の比地をほるとて一つ
の白き蚯蚓を斬たり此みゝ帝の前生の身なりこ
の因縁にて今かくのごとしといひたりと云々
下邳の土橋に石公が杵を捧し張良もかくやと計りい
さましゝ

前漢書に云張良わかきとき下邳といふ所の橋の上
に行てあそびけるにひとりの老翁あり杵をはしの
下におとして張良にとりてはかせよといふを心よ
からぬ事とは思へど老人のいふことなればと杵を

取て跪てはかするに翁立ながらはきて咲ふて去ぬ
しばし有て翁また歸り來り汝に道を教へんと云則
太公が兵法を授たり張良これをよみて後に漢の高
帝の師となれり此老翁は黄石公也

令する詞に

令はものをいひつける事なり

父雪村迄傳はりしが

雪村は雪舟の弟子にて元龜天正のころの繪師也雪
信の父にはあらず

雨をおびたる海棠桃李

白樂天の長恨歌に楊貴妃のすがたをいふとて梨花
一枝春雨を帶と作りまた春風桃李花の開く日とい
ふ句もあるゆゑこれらをとれ合せたる也

屠所の羊のあゆみ兼

屠所は獸を料理する所也そこへ引れてゆく羊のひ
と足ゝ死地に近づくたとへにて摩耶經に出たり
又この心を赤染の衛門の歌に「けふもまた午の貝
こそふきつなれひつじのあゆみちかつきぬらんと
よめり此うたは後拾遺集に出たり

三井寺の頼豪法師一念の鼠となり牙を以て經文を喰

さき恨をはらせし例も有

三井寺實相房の賴豪阿闍梨白河院の御後の腹に皇子誕生のことを祈けるに勸賞望にまかすべきよしなりければ皇子御誕生の後戒壇堂を建んことを乞ふに其事勅許なかりければ賴豪大にいかりかの皇子を祈りかへし奉りその身は持佛堂にて干死^{ひに}しければ彼皇子は四歳にてかくれさせ給ひけり其後叡山の良眞に仰せて祈らせられ皇子御誕生ありければまた賴豪の死靈怨をおこし兎角山門の有ゆる也とて鼠となりて一山の聖教の經どもをくひやぶりし事江州一景錄につまびらか也

繩目の葛草の根を月日の鼠が喰切く

人の命を草の根にたとへ月日を黒白の鼠に譬へたりこの事は賓頭廬爲優陀延王說法經に見えたり又散木集に見えたる俊賴の歌に「わかたのむ草の根をはむ鼠そとおもへば月のうらめしきかな又土御門院の御歌に「霜かれの草葉にさはく日の鼠きのふのけふになるぞほとなき

青陽の東に當つて木曜星壽命家に建す時は忠臣君に代るといふ

青陽は春の異名木曜星は九星の星のうち也^み家に建すとは亥の方にむかふ也忠臣君に代るとは忠義の臣下君にかはつて政をとり行ふなり

木づたふましら

ましらは猿のこと也

かけたる額は潮音洞の椽側へ

潮音洞も此庭の八景の内にて三重の閣の第二なり

釋迦觀勢の三尊佛

雍州府志に云庭に三重の閣を設け第一を法水院と號す本尊釋迦左右に觀音勢至ありと云々

いふに念誦をといめ給ひ

念誦は佛號經文などをとなへる事也

立明しの灯をうつせば威南塘が火龍炮ゑんくともへ上り

立明しは燭臺の火の事なりつれく草に立あかししろくせよといふこと有威南塘は明の代の兵衛者なり火龍炮はのろしの名なり

天地にひゞき動搖せり

動搖はうごきうごくなり

とり付さがるさゝがにの蜘蛛のふるまひいとあやうき

さゝがには小々蟹と書て蜘蛛のことなり蜘蛛の形はちひさき蟹に似たる故さゝがにと云也「わがせこか來べきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしもとよみ給へる衣通姫の御歌の詞をとれり扱くもの糸を最といふ字にかけていとあやうきとつけたり

力士の如く真中にすつくと立たる松永大膳

金剛力士とて唐の則天皇后の左右に給事せし強力の者のこと也事は唐書にいづ

供奉する眞柴は大鵬の萬里に羽うつ朝嵐

大鵬といふ鳥はひとたび羽うてば九萬里をかけるといふ事莊子に出たり夫を久吉の威勢にたとへたる也

瀧は今より龍門の名を萬天に鳴ひいく

龍門瀑といふ瀧も此庭の八景のひとつ也

○菅原傳授手習鑑 道明寺齋

歸洛を松の島臺行末祝ふ熨斗昆布

歸洛はみやこへかへるといふことなり島臺はむかしの洲濱といふものゝかたちをうつしたる也むか

しは貴人へ物をさゝげる時すはまがたを木にて作りそれを臺にして金銀のつくりものをのせあるひは草花などをうゑてさゝげし事古き物がたりに見えたり此臺は海の洲さき濱などのかたちになぞらへてつくる故洲濱といふ也菅家の御うたにも「秋風のふきあけにたてるしらきくは花かあらぬか波のよするかと讀せたまひて吹上の濱の菊をすはまにうゑて君にさゝげたまひし事古今集に見えたりもと此洲濱といふものは蓬萊、方丈、瀛洲といふ仙人のすむ三つの嶋をうつしたるものゝよし中右記に見えたれば後にそれを島臺と名付てめでたき事に用ゆる道具とせし也熨斗のことは秋草に云今の世に三寶に伸蛸をすゑて客人へ出すを臺熨斗といふ也古代客をもてなす初にのしあはびを出す事なし手掛といふ物を出せし也手掛は檜木にて折敷のごとく平く六角にして少しふちをつけたるもの也其臺の上に五色の削ものを高盛にす也其内の黄色がのしあはびなり此のしあはびを熨斗といふ字に書は誤也熨斗の字は衣の皺をのばす火のしのこと也又のしあはびをのしと計り書も誤也

菅丞相

菅原の道真公右大臣なりしゆゑ菅丞相と申奉る丞相は大臣の唐名也

判官代

すべて官人に四分配當といふ事有て長官次官判官主典とわかるゝ也長官はかしら次官はすけ判官は其官の役目をかしらとすけとよりわけてつとむる役なり主典は其官の筆取也後に判官代といふは仙洞の官人の事にて諸大夫是に任するよし職原抄の注にみえたり

路次の用心

路次は道すがらといふこと也

譜代の家來

譜代とは代々の家來といふ事也續日本紀には譜第と書たり又家來といふ事は下學集に家來は家人の義也と有職原抄にも家禮と書り源氏の花鳥餘情に家禮といふは子の父をうやまふ事也他人なれども子になぞらへて禮をいたすをば今の世にも家禮といひ來れりとありしかれば今のよに家來とかくは宛字にて本字は家禮とかくべき也

かりや姫

菅丞相の御女にかやうの御名ある事なしこれは須磨の記といふ僞書有て菅公の御作の文章といひ傳へつくしへさすらへの御時都より津の國の須磨までの道の記にかきなしたる物にて其中にかりや姫といふ名有て菅家の御孫としたりまた白太夫といふものもかの須磨の記の中に見えたり

若黨中間

本朝の俗雜兵をよびて白齒者あきはものと云今いふ若黨これと書言字考に見えたり中間の事は秋草に云むかしは侍中間小者と次第して侍と小者との間なるゆゑ中間といひたる也中間といふもの昔よりあり源平盛衰記十三に黒丸といふ御中間と云こと有是は高倉宮の中間をいふと見えたり

白狀さするそれ引立と

白狀の字は漢書の丙吉が傳にも出たる字にて其ありさまをありやうに云ひあらはす事なり

詞のてんぐ

展轉とかく字也漢書の注に展轉とはその心を移し動すを云と有ていろ／＼に詞のかはる事也

弓手の膳あはら

軍術の書に左の手を弓手とも雄手とも書り弓をもつ手なる故弓手といひ又左は陽の方なるゆゑ男にたとへて雄手といひ右は陰の方なれば女にたとへて雌手とも妻手共書よし書言字考に見えたり

さすがに河内郡領の

むかしは郡々に大領少領の役人有て其一郡の政道をとり行ひたり夫を郡領とも郡司ともいふ今の郡代のごとし

暫時の仰天

仰天は天を仰むくといふ心にてあきればてたるさまを云

輝國が安堵く

安堵の堵の字は垣といふ字と同じ心にて通鑑の注に入の安然として墻堵の遷り動かざるか如しと有それゆゑに心の落つきたる事を安堵といふ也

優美の姿

優美はやさしくうるはしとよむ字也

姫殿

あいやはむこの親としうとの親とをいふ也

棟梁殿

棟は家のむねのこと梁はうつばりの事にてものかしらを棟梁と云也重き臣下を棟梁の臣といひ大工の頭を棟梁といふも同じ心也

有爲轉變の世のならひ

有爲は此世にあるものゝこと轉變はうつりかはる事にて經文にある事也

罪業消滅

つみもごうもきえうせる心也

娘が菩提逆縁ながら弔ふ此尼種々因縁而求佛道

菩提は佛の道の事逆縁は親が子をとむらふはさかさまの因縁といふこと也種々の因縁にて佛道を求むといふも經の文也種々はさまざま也

強欲非道

むりに欲深くして道ならぬことをするをいふなり

管丞相の右手の方

雌手の事上に注す

暫時の睡眠

しばしねむりたる間と云事也

巨勢の金岡が書たる馬は夜なく出て萩の戸の萩を

喰

巨勢の金岡は宇多の帝の時の上手の繪師也この金岡がかいたる馬の繪はよなく出て禁裏の萩の戸といふ御殿の庭の萩をくひたる事古今著聞集に見えたり

唐土にも名畫の譽吳道子が墨繪の雲龍雨をふらせし例も有

是は名畫錄に出たる故事にて唐の玄宗のとき吳道子といふ人有仙術をえて畫の上手なりしが墨繪の龍をかきて雨をふらせし事有

身は荒磯の嶋守と

あら磯は波風のあらき磯ばたといふ事嶋守とは遠國へさすらへる人の我身を嶋守にたとへていふ詞なり家隆卿の歌に「玉嶋やにる嶋守かことし行河瀬ほのめく春の三日月ともよめり

上着の小袖かけたる伏籠もろともに

秋草に云小袖といふはむかしはすべて袖の下を丸く縫たるを云袷にてもわた入にてもひとへ物かたびらにても袖の下丸きは小袖なれども今はわた入のみを小袖といふ事になれり伏籠は順の和名抄に

は火籠と書たりまた漢土にては薰籠とも書て衣裳に香をとめる爲に籠の上より衣類をふせて其中に火を籠る物ゆゑふせごと云也

浪風あらき揖枕

かぢまくらとは船にてねること也歌に多くよめり鳴ばこそわかれをいそげとりの音のきこえぬ里のあかつきもかな

これは決して菅家の御詠にはあらず後のよの人の別戀の歌なるべし

父はもとより籠の鳥雲井のむかし忍ばるゝ

籠鳥の雲をこふといふたとへにて此事は鶺鴒子に籠中の鳥空しく窺へども出ずといふ語より出たる詞也爰にてはとらはれとなり給へる菅丞相をかこの鳥にたとへ禁裏を雲の上といふ故雲のむかし忍ばるゝと書なしたる物なり

涙の玉の木槿樹珠數の数々くりかへし

木槿樹はつぶの木也一名菩提樹ともいふその實を木槿子といひて球數にもちゆる物なり此事崔豹が古今注に出たりこの木槿樹は今も河内の道明寺の境内にあるなり

○同 寺子屋齣

一字千金二千金三千世界の實ぞと

一字千金といふことは史記の呂不韋が傳に出たる語にて呂不韋といふもの呂氏春秋といふ書物を作りて咸陽といふ市町の門に出し其書物の上に千金をかけおきてあまたの學者たちをよせ此書物の内にて一字よきことを増し加へるか一字あしきことをけづりのけてくれる人あらば其禮として此千金をあたふべしといひし故事也今この齣の枕の言葉にこれを出したるは手ならひををしゆるも其様なるものにて無筆の者のためには一字が千金にも二千金にもあたるとのたとへなり千二千三千とつづけて三千世界のたからとかきつらねたる所か作者のはたらき也三千世界といふことは廣き世界といふ心にて佛説より出たる詞也

菅秀才

菅原の道真公の御子はあたまし／＼けれ共太宰府にてかくれさせ給ひし後に御家をつがせられたるは淳茂と申せし御方にて其御事をかやうに取く

みたる狂言也秀才といふは才智の秀てたる人を云ふ

武部源藏

元祿のころ江戸に建部傳内といふ能書ありて今に傳内流といふ名残れりその人の名をかりてとりくみたる也

いたはり傳き

かしづくとはたいせつにそだてる事を云俗に娘をよめ入さする事をかしづけるといふは大なるあやまり也

一日に一字まなべば

毎日一字づゝならひても一年には三百六十字覺ゆるといふ心也

利發らしき

利は俗利とてもものにかしくさとき心發は發明とてものをよくあきらめ見ひらく心なれば此二つの詞をあはせて利發と云也

ほんそ子

ほんそは奔走と書てものを世話やく時ははしりまはる物なれば父母の子を愛して育てる心にいひ傳

へたる俗語なり

御内證様

内政とかくが本字にて人の女房はうちのとりまかなひをし夫は外をおもに勤るがつねなれば内の政とかきたる物也それを誤りて内證と書來れり
まだぐはんせがござりませぬ

ぐはんせは觀世と書字にてよの中の事を觀じしることもなき子供のさまを云也

繁花の地とちがひ

片山家にてことしげく花やかなぬ所をいふ也

公家高家

公家は堂上方高家は武家の歴々をいふ

時平

本院の左大臣時平公と申て右大臣道眞公と共に延喜の帝を輔佐し奉られしに道眞公文學にたけさせ給ひければ帝の御寵愛深かりしを時平つねに妬ましく思はれけるに時平の妹帝の御后なりければ其后より讒言を申上させられしゆゑ帝もいつとなく御後の詞にまよはせ給ひて道眞公をつくしへ流させ給ふやうになりたり其讒言の趣意は道眞公の御

むすの齊世の親王に嫁し給ひける故御むこの親王を天子の御位につけ奉らんとめ當今延喜の帝をなきものにせんとたくませ給ふよしを時平より妹の御后を以て讒言せられし也其事は愚管抄梅城錄などにつまびらか也されども此時平公は美男の色ごのみにて御伯父の大納言經信卿の北の方をうばひ歸りて妻とせられし事も十訓抄に見えておこなひはよろしからぬ人なれど今戯場に扮するやうなるおそろしくにくげにて車をふみくだく様なる人品にては有ざりし

玉簾の内

玉だれはみすのこと也玉はほめこと葉にて玉のやうなるすだれと云心也

屠所のあゆみ

屠はほふるとよみて獸をころして料理する所をいふ屠所の羊のことは信仰記の注に出たり

さうがうのかはる物

相形とかくか本字にて人相かたちといふ心也

死出三途の

閻魔王の國の堺は死天山の南門なりといふ事十王

經に有また三途川といふ事も同じ經に出てみな冥途の有さまをときたり

嫁にも喰さぬ此孫を

これは木みしり茄子にたとへたる續きの詞にて秋なすび嫁にくはすなといふことわざを取合せたる也此たとへの出所は夫木集の「秋なすびわさゝのかすにつけませてよめにはくれじたなにおくとも」といふ詞より出たりこの歌の心は秋茄子を酒のかすにつけませて棚にあけておくとも嫁にはくはすまじきと也是はその嫁をにくみてくはすまじきといふにはあらず秋なすびはたねのなきものなればそれにあやかりて子が出来まいかと案じ過しをするしうとめの深切なる心をいへりわさゝのかすは新酒の粕なり

こいつ有論と引とらへ

有論と書はあて字也本字は胡亂と書てみだりなるこゝろ也胡亂の字を唐音にてはうろんとよむ也

右大臣の若君

菅原道眞公昌泰三年右大臣に拜せられたまふよし公卿補任に見えたり

玄番が權柄

權の字は秤の鍾のこと柄の字は斧の柄の事にて前漢書に大臣權柄を操て國の政を持すと有て物のおさへになることをけんへいといふ也

常張の鏡

これは宛字にて本字は淨頗梨の鏡と書是も炎魔王宮にあるかゝみにて罪人これにむかへば前生に作りし善惡の業直にあらはるゝよし十王經にとけり鐵札か金札か

十王經の注に善を金筒にしるし惡を鐵札にしるすと有て善と惡とのちがひめをいふとなり

一生懸命

懸命はかゝる命とよむ字にて人の一生の命のあやうき時と云こゝろ也

凡人ならぬ我君の御聖德

たい人ならぬ菅丞相の聖人の様な御德といふことなり

梅は飛櫻はかるゝ世の中に何とて松のつれなかるらん

此歌のことは源平盛衰記に云菅原の大臣東風ふか

ばといふ御歌をよみ給ひしかば紅梅つくしへ飛行
ければ同じ御所にならびて有ける櫻の御言の葉に
かゝらざることをうらみて一夜が中にかれにける
を源の順が歌に「梅はとびさくらはかれぬ菅原や
ふかくそたのむ神のちかひを又掲嶋曉筆十九に云
昌泰四年正月廿九日菅丞相を大宰權帥にうつし九
州へ配流せさせ給ひけりかしこにて三とせの春秋
を送らせ給ひしに都にて愛せさせたまふ梅花を思
し召出て「東風ふかは匂ひをこせよ梅花あるしな
しとて春なわすれそと詠じたまひしかばこのうめ
はるかに飛去て配所の庭にぞ生たりけるされば夢
の告有て折人つらしとをしまれし西府の飛梅これ
也心なき草木までも馴し御別れをしみなかしみ
けるにや其後御庭のさくらはかれけるとなん此事
をきこしめし及ばせて「うめはとひ櫻はかるゝ世
中に松はかりこそつれなかりけれさてこそ都の松
は御跡を追て西府には生たりけれ追松と申侍るこ
れ也とみえたりこの二説にては此歌のよみ人かは
りたれど今下の句をばすこしかへて菅家の御歌と
したる也

前後不覺にとり亂す

不覺はおぼえずと書てあとさきをもわきまへぬこ
となり

未練者めと呵付

未練はいまだねれずと云事にて人をさげしむ詞也
異義を正し

異義は宛字にて本字は威義也きつとして行義よき
さまをいふ
いぶかしさよ

不審と書ていぶかしとよむ合點のゆかぬ心也それ
故次のことばに御不審は尤とうけたり

親兄弟共肉縁切

親兄弟は同じからだ同前なれば骨肉の縁と云也
心の著

著はうらなひに用る物也それ故ものゝめあてをめ
どいふなり

迷途の旅

迷の字はあて字なり冥途と書べしくらき道といふ
ことにてあの世へゆく道也

あの子が香奠

奠はそなへるといふ字にて佛前へそなへる香の料に贈る金銀をも香奠といふ也

利口なやつ立派なやつ健氣なやつ

利根と云をあやまりて利口ともいふ也利はさとしと云心根は根性の根の字にてさとき生れつきといふ事也利口とかけば口をきく心にてこゝには叶はず立派ははのたつといふことにて際立こゝろ也けなげの健はすこやかとよむ字ゆる氣性のきつとする事を云

同腹同性

梅王松王櫻丸は同じ腹に生れたる三ツ子ゆゑおなじ性分といふ事にて菅丞相の愛し給ひし飛梅追松と都にてかれたる櫻と三木のことをとりあはせて三ツ子に仕立たる所作者のはたらき也

あじろの乗物

あじろは遷條とかいて竹をあみたる物故竹にて製したる乗物をあじろの乗物といふ

白無垢

無垢はあかなしとかきて白くあかづかぬ衣類をいふなり

六道能化の弟子となり

六道は地獄道畜生道餓鬼道修羅道人間道天上道の六ツの道をいふ其六道にまよふものをよく化度するとてすぐひたすくる佛を地藏菩薩といふこと地藏本願經に出たり爰にては地藏菩薩の弟子となれよと云心也

劔としでのやまけこへ

刀山とて冥途につるぎの山あること諸經に見えたらば今小太郎がつるぎにてころされたる事を此世ながらつるぎの山と死天の山とをこえたる事にとりなしていへり此一場はじめに一字千金二千金と書だして末にいろはにて書とめたる事は又作者の粉骨と云べし

○ひらかな盛衰記 無間鐘の餉

爰も名高き難波津に戀の船着數々の多かる中に取分て酒汲かはす神崎の里の色宿千歳屋は

むかしの遊女は船にのりたるゆへ和歌の題に遊女とあれば船のことを詮によむ也それ故こゝにも戀の船着なと書たり神崎江口はむかしの遊所にて

ありし事朝野群載の遊女の記にくはしく見えたり
古事談に二條の帥長實水干装束を着て神崎の遊女
にいかい見ゆるとひとたまひし事も見えたり
紅も園生にうゑて隠れなき

この詞謠曲の安宅頼政などにも出たれといづれの
註釋もさだかならずこれはたゞ紅色の花は園の中
にうゑてもかくるゝ事なくみゆるよしをいひたる
ものにてさせるより所は有まじき也たとへば虞美
人草の名を満園春といふよし花疏にいだせるがこ
とくたゞ見えたるまゝを云詞成べし

主が答拜

答拜は客が物をいへばそれにこたへてかしらをさ
ぐと云心也

追從輕薄

追從の事は前に註す輕薄の字は杜子美の詩に紛々
たる輕薄何ぞ數ふることを須ひんと作りてかるが
るしく薄き心をも有様をいふ也

本の心で淡路嶋

まことのこゝろにてあはふといふ事を淡路嶋とい
ひかけたる也さて又「あはぢ嶋かよふちどりのな

く聲にいくよねさめぬすまの關守といふ歌をとり
て千鳥も今はこのさとへとつゞけたり
彼ふかまの源太様に

箕山大鏡に眞夫はおもてむきの買手にあらずして
密通する男をいふ眞實におもふ夫といふ事也とい
へりさればふかまといふはふかまぶを略せる詞に
て深き中のまぶと云心成べし

千鳥に逢が嬉しさに足もいそ／＼

磯ちどりとはいふ詞あるゆゑいそ／＼とつゞけたり
足もいそ／＼はいそぎてはやくありく事也

よふまめゐてたもつた

まめはまめやかといふ心にて實の字なり實は虚の
うらにて無事なるこゝろなり

ア、聲が高いかべに耳

詩經に君子易く言に由ことなし耳垣に屬といふ事
あり管子にも墻に耳ありといふ語有てみだりにも
のいふことをいましめたるたとへ也

煙くらべん淺間山

富士と淺間はいづれも常にけふりのたつ所ゆゑ烟
をくらべんと云ひならはしたる也後撰集の歌に

「しなのなるあさまの山も、ゆなれはふしのけふりのかひやなからんとよめり今むめがえがきせるのけふりとおもひのけふりとをくらべんといふ心にかきなしたり

もと某は頼朝卿のゑぼし子

男子の元服のときゑぼうしを着せて給はる人より名乗を申うくるゆゑ是をゑぼし親といひ我身をその人のゑぼし子といふよし秋草に見えたり

生埋木となり

水の中に埋もれてあらはれぬ木をうもれ木といふ也古今集の歌に「名とり川せゝの埋木あらはれはいかにせんとか逢みそめけんとよめり

君傾城に成さがつても

君は江口の君のこと西行の撰集抄に見えたり傾城のことは前に注すいづれも遊女を云也

首尾かぶ首尾か

居家必用に首は始也尾は終なりとありてはじめをはりの都合する事を首尾するといひ不都合なることを不首尾といふ也

奥の吉左右聞迄は

左右はとにもかくにもとよみて善たよりかあしきたよりかを聞事を左右をきくといふ也こゝにてよきたよりを聞といふことを吉左右と云ひたるは左右の字をひとかたにかりていひたる也

しばし待間も千歳やの

しばしの間をも千年もすぐるやうに思ひて待遠くおもふよし也つれづれ草にあかすをしとおもはちとせを過すとも一夜の夢のこゝちこそせめといひしはこのうちのこゝろ也

弓矢神の御加護と

加護の字は法華經に出くはへまゐるとよみて神佛のめぐみをくはへてまゐり給ふをいふ也

其敵のけめう實名

義經記にいかなる人を假名實名尋ねて參れといふことあり秋草に云假名といふを今の世には苗字と云假名と書は非なり家名とかくべしといへりしかればけみやうは何氏と云苗字のこと實名はまことの名也

慥なしやうせきいへ聞ふ

證跡と書て證は證據といふことにてしるしとよむ

字跡はあとゝよむ字にて是もたしか成しるしをいふ也

滋藤の弓たづさへ

滋藤は重藤ともかく也しげく藤にてまきたる弓也面目もなき御對面と

史記項羽本紀に我何の面目あつてかこれにまみえんといふ語有さしむかひてあはす面も目もなしとはち入ていふ詞也源氏物語には面目をめいばくとよませてはまれのある心にもちひたり世の雜談にいひふらせし

雜は萬葉集にてくさくさといふ字也いろくさまさまにとりませてしかとせぬ咄しを雜談といふ也鎧ひたれ小手脚當

冬草に鎧の事を具足といふ具足の二字はよろひたれりとよみて甲も胴も小手脚當もなにもかもとりよろひて事足るをいふ也俗に大將の鎧をよろひといひ平士の鎧をは具足といふまた一説に古制の鎧をばよろひといひ近世の鎧をは具足といふと有これらは取にたらぬ俗説也と云

甲打物夫々に簾かきおひ出立たる

上にいふごとくよろひといふ名には外の武具もこもりたる義なれどかやうにつけていふ時は鎧はよろひ一ツの名にて小手すねあてかぶとなどゝ別別にいひ立ねば聞えぬ也打物は太刀かたなの類にて鍛冶のうちたる物を云簾の事は釋名に矢を盛る器也とあり秋草に逆頰簾葛簾柳簾蜻蛉えびらなど有てさまぐの説をあげたり

簾に生たる紅梅を一枝手折簾にさせば

長門本の平家物語一の谷合戰の段に云源太梅の花のさかりなるを一枝折て簾にさして敵の中へはせ入てたゝかふ時も引ときも梅は風にふかれてさつと散ければ敵もみかたもこれを見て感じける所に城の内より本三位中將殿の御使にて候梅をさへせたまひて候に申せと候「こちなくもみゆるものかなさくら狩と申もはてぬに源太馬よりとびおりてしばし御返事申候はんとて「いけとりとらんためとおもへばと申されけると有按ずるにこの連歌の「こちなくもみゆるものかなといふ句は無骨にも見ゆるものかなといふ心成べし骨なくと書た無骨とよむ故也

今度の軍に花も源太も我先かけん／＼とかつ色見せて

梅を花魁とよびて花のさきがけといふことは詩學大成に唐詩を引て且百花頭上の魁となすといふ詩を出せりそれゆゑ梅をはなのこのかみとも云しかつ色みせてはかつはすこしといふ心にてすこし色をみする事を云也それを敵にかつことにとりなしたるものなり

鶴翼飛行の秘術をつくし

魚鱗鶴翼とつゝきて陳法にいふことば也魚鱗はうをのうろこのごとくならぶこと鶴翼はつるのつはさのごとくかさなることなり

勇みいさんでたつか弓

たつか弓は手束弓と書て手ににぎる弓といふ事也それをこゝにてはいさみてたち行ことにいひかけたる也

瑠璃天狗卷之一終

瑠璃天狗卷之二

○新うすゆき物語 清水餉

地主の花見の花衣花をかざりて花麗に

地主權現の社は清水寺の中にあり地主とは鎮守と云ことにて大己貴の命をいはひこむるよし雍州府志にみえたり花衣は端手なる衣裳をいふ玉葉集に「花ころもかさゝき山に色かへてもみちの洞の月をなかめよといふ歌粉川の観音の素意法師に告給ひたるうたとて入たり

轆酌までが男ぶり

轆の字宛字にて本字は漉酌なり漉は酒をしぼる事酌は杓にて汲ことにてこれはもと酒家の奴隸のことなるよし書言字考に見えたり今のりものをかくものをろくしやくといふは六尺の字の音に轉じて長のたかきものを云

糸より細き柳腰柳さくらをこきませて都ぞ春の錦なる

女の腰のほそやかなるを柳腰といふ事は杜子美の

柳の詩に恰十五女兒の腰に似たりとつくり家隆卿の柳の歌に「たをやめの春のすかたやこれならんなつかしくもある玉柳かなともよめり柳さくらの歌は古今集に素性法師「見わたせはやなき櫻をこきませてみやこそ春のにしきなりけると讀り

木の下影をやどゝして

影の字はものうつるかげにてこゝにはかならず下陰とかくべし此詞は「行かれてこのした陰をやととせは花やこよひのあるしならましとよめる忠度の百首の歌をとりもちひたるなり

大内人も見たまはん

大内は内裏といふと同じこゝろにて禁中の御かたかたといふこゝろ也

春ごとに見る花なれどことしより咲はじめたるこゝちこそすれ

これは詞花集に出たる道命法師のうた也それを薄雪姫の歌としたるもの也

今の世の小町さませう／＼の殿御お氣に入ぬはお道理と

少々の男といふことを小町少將とつけたる文句

也小町と少將との事は通小町のうたひにはじめて作り初たることにてあと方もなきこと也これは大和物語に小野小町と僧正遍昭と贈答の歌あるよりおもひ付たる物なるべし僧正遍昭俗のときは良峰の宗貞といひて色ごのみの事ども、有しが其時は宗貞を良少將といひたるよしかのものがたりに見えたり

濃紅の短冊

短冊の紙の見事に赤きをいふ紅梅の短冊といふも同じたぐひ也

筆すさみ給ふを見て

なぐさみに物をかくことを筆すさびと云手なぐさみを手すさひといひなぐさみに歌よむをくちすさひと云類也

天晴御歌なら御器量なら

あつはれは嗚呼といふ心にて感心する體をいふてつとり早ふ

手にとる事の早うといふ詞也

水引通し振よき枝に

たんざくに水引を通す事は短冊のかしらより四分

目に空をあけ水引二すちを二ツに折りあかき方の前になる様に通すが故實也

よい殿御をで有機海深き願ひの數々を

ありそうみは海の惣名也普門品に弘誓深如海といふ文あり是は觀音の誓ひの御心は深うして海のごとしといふ心ゆるかやうにつけたり又普門品に若女人有て男を求めんと欲せば則福德智恵の男を生しめんとあるは男の子を求めんとする女の事なるをこゝにはよき夫を求むるむすめの心にかへて用ひたり

遠山の腰白々と帶したやうに見ゆるは何

白雲帶に似て山の腰をめぐるといふ詩の句を白樂天としたるは謠の作者のつくりこと也これは具平親王の詩にて江談にみえたり

はげたつふりは元として阿房らしい鼻の下

古文眞寶阿房宮の賦に蜀山元として阿房出とつくれり元とははげ山の目にたちたるを云貝原好古の諺草に云秦の始皇阿房宮の大殿を作りて民をなやまし終には天下をもうしなふ是至愚のわざなれば日本にて人のおろかなるをあほうといふはこゝに

起れりと云さもあらんかしといへり

譏る下からくつまめく

陰言いはれてはなひるといふ諺によれりはなひるとはくさめすること也此ことわざの出所は詩經の終風の篇に寤言寐られず願てこゝにすなはち噓と有て注に今俗人噓ときは人我をいふといへり此古の遺語也と云

つれをまいたは風吹に誹諧の宗匠顔

これも風吹に灰をまくといふたとへによれりたとへの出所は延命地藏經の風に向ふて灰を投ずればかへつて其身を汚すがごとしといふ文によれり

みづくしたる男の鬢付

古事記に美都々々斯久米の子等と有てわかくうるはしきかたちをいへり

粟田口の住人來國行

城州西の岡に住す其子國俊といふ雍州府志に云山城の國いにしへより巧手あり粟田口の冶工當麻の丞等がうつところを上作とす

花曇

三月比空のくもりてすこし雨のふるを云もろこし

にては養花の天といふよし月令廣義に見えたり長嘯の擧白集に「此ころの世は春雨そふるさとのよしの山より花くもりしてと讀り

大慈大悲の花なれば一枝折て家づとに

慈悲のふかき事觀音經に出たり清水寺の花なるゆゑ大慈大悲の花と云り家づとゝはみやげの事なり主は誰共しらね共結びとめたる枝ながら

此詞は清輔の袋草紙の人魂の歌の「玉はみつぬしはたれともしらねともむすひそとむるしたかへのつまといふ歌によれり

折てお歸り遊ばすは落花狼藉

和漢朗詠集の落花狼藉暮春風といふ詩によりてかけり狼藉の字は通鑑演義に狼草を籍て臥し去るときは雜はりみだすこの故に物のたつよこにやぶれみだるゝ事をらうせきといふと有ておほかみの物をふみちらしたるやうにすることを云也

下もへ計り下紐のまだとけ初ぬ薄雪姫

下もえとは春の若草の土の下にきざしてまだ葉をあらはさぬをいふ續拾遺集の歌に「今よりは春にたりぬとかけろふの下もえいそく野へのわかくさ

ともよめり下紐は帶の事なれば下もえばかり下ひ
ものまだとけそめぬとつゝけてとけぬといふ詞の
縁をうすゆきとつゝけたるもの

御照覽

神佛もあきらかに御覽あるべしといふ誓ひのこと
業也

驪山の契やこもるらん

玄宗揚貴妃と釐に相のりて毎年十月驪山の温泉に
みゆきし明年の春にいたりて歸給ひし事明皇雜錄
にみゆ

あふむがへし

同じ歌に一字をかへて返歌する事をいふ

龜菜の非時も進上

出家の食は正午の時を正食とす少しにても晝過れ
は非時といふと釋氏要覽に見えたり龜菜は粗末な
る野菜と云こと也

あふせは石より忝い

石よりかたき契約といふ事をふくめてかきたり

先非をくひてせんかたも千手の誓影たのむ

先非を悔るとは先達ての不調法を後悔すること千

手の誓ひとはこの清水の千手觀音の御ちかひにも
し喰り悲る事多く共常にあがめうやまふ思ひをな
さばすなはちいかりを離れしめんと說せ給ふ事普
門品に有ゆゑ其御かげをたのむといふこと也此影
の字はあて字にて陰の字をかくがよし

念彼觀音の御名をとなへ

普門品の偈に或因禁枷鎖手足被杻械念彼觀音力釋
然得解脫と見えたり是はもしとらはれとなりて手
がせ足がせをいれられても彼觀音の力を念せば直
にかのとははれをゆるされんといふ心也さるによ
りて國俊も觀音の佛力によつて父のゆるしをうけ
たく思ふより御名を稱へて瀧にうたるゝなるべし
七度結びて親と成

阿難問經に識母の胎に託して凡三十八箇の七日ご
とに一つの風吹てかたちを變せしめ三十八箇度の
七日にして生るゝといふ事有それをかやうにつゝ
けたる物なるべし

巢父といふ唐人の惡事を聞てけがらはしと耳を洗ひ
し潁川の瀧の流をだにけがれしと見し許由が例をま
のあたり

蒙求に云許由は潁川の人なり世をうき物に思ひ取て箕山に籠居して年を送りしに堯帝許由が賢なるを知て世をゆづらんと給ふに許由うき事を聞たりといひて左の耳を潁川の流に洗ひけり時に巢父牛を引て潁川の流れを渡て水飼んとするに許由が耳をあらふをみて此水けがれたりと云て牛を引て歸りたりといふ故事也

陽を欠て左をさげ陰に旺じて右を上金尅木に命を斷火冠金に世を亂す

左を陽とし右を陰とす陽をあげ陰をさぐるが順なるにそれを逆にすりたるをいふ旺の字はさかんなりと云字尅の字はそこなふとよむ字にて金は木をそこなふもの火は金をとらかすものと云事にて是を五行の相尅といふなり

思ふまゝに調伏し

調伏とは惡靈などを祈りふせる事なるを俗には咒咀ことにあやまれり

後覺の爲ちと拜見と存て

後覺は宛字也後學と書へし後々の心得の爲に見ておきたしといふことなり

聊爾なされな

聊爾の字は山谷の詩に且然聊爾耳とあり詩箋には聊は且畧之辭ともありてはやまりて輕々敷する事を云

息災に罷在

息災はわざはひをやむると云心にて佛書に出たる字なるを息災延命といふ事よりあやまりて人の無事堅固なる事をいふ詞に遣ひ來れり

先お歸りと挨拶すれば

挨拶は推也と注のある字挨拶は逼る也と注したる字にておしつけせまる心なるを人をあしらふこととはに用ひ來りたるはあやまり也

六波羅での意趣などゝ

意趣の字は小學に出たる字にて注に趣は指趣也と有て意のめあてをいふ也それを今は意趣遺恨とつづけてかねて心に思ふうらみの事にのみ思ふは誤也

五輪の五つ輪五體の桶がは

佛書に五輪は地水火風空あつまりて人の體となることをいひ五體は筋と肉と骨と皮と毛とをいふそ

れゆる五輪五體とつゞけてもいへりそれを今桶の輪と桶の皮とにたとへて云也

大地は忽泥の海ふかくをとらじと

泥のうみといふより海の縁語にて深くといふこと葉を不覺にかよはせたり

こゝに死骸の有ぞとはいかでしるべきとよみたりし歌の中山こゝろざし

清閑寺縁起に云むかし清閑寺の眞慈僧都といふ人すみけりある夕ぐれ門口にたゞすみて行かふ人を見わたる折ふし髪かたちめでたき女のたいひとりゆくを見て忽愛心おこりければ物いひかくべきたよりなくて清水への道はいづれそと問ければ女「見るにたにまよふ心のはかなくてまことの道をいかでしるべきといひ捨てやがて姿を見失ひけり女は化人にて侍るにや其歌よみし所を歌の中山といふとありこゝの詞は此歌によりてつゞけたる也

○同 切腹の段

見る石のおもてに物もかゝざりし竹のやうじもつかはざりしにとむしつをかこつ菅家の御詠歌

これは菅家の御詠にはあらず夫木集仲正の歌に「僞の名をのみたてゝあひみぬはすゝりの上のちりやふきけんといふをあやまり傳へし也今もすゝりの座をふかぬものといひ傳へたる事ふるき事なるべしすゝりを見る石とよみたる歌は逍遙院殿の雪玉集硯の歌に「すみ筆をさそあた物とみるいしのおのれしつかに世を過しつゝとありむしつをかこつとは無實とかきてまことにはなき事をとがに落されたるをうらむ事なり

園邊兵衛の簾中お梅の方の物思ひ

秋草に云貴人の妻を御簾中といふ事みすの中におはしましてかろくしく人に見え給はぬこゝろにていふなるべしされども古書にはこの稱見えずとあり

花むすびでもついまつでも

花むすびとは打ひもをいろ／＼の花のかたちにもすぶこと也是は袋などの口をむすぶに一通りにむすびおけば誰ぞ外の人がほどきて見ても又もとのごとく結びおけばそれとしれぬ故わが心えたるむすびかたにてさま／＼の花などにむすびおく時は

外の人のみだりに明ることのならぬ爲にこしらへたる結びかた也この結び方は雅游漫録にあらゝしるせりついまづは歌がるたの事にて伊勢物語のいせの齋宮の「から人のわたれとぬれぬえにしあれはといふ上の句をさかづきのさらに書て出し給ひたる業平」「またあふさかのせきはこえなんといふ下の句をたいまつすみにてかゝれしよりかく名づけたる也ついまつとたいまつとはつとたと五音通じて同じ事也

金輪ならくの底までも

佛經に大地の厚さ一百六十萬由旬ありてその底を金輪際といふととけりまた捺落は地獄のことなれば金輪ならくといふけたり

旅の調度を取したゝめ
調度は道具の事也源氏物語などに多く出たり
殿を下主人はしれた事

下主人は宛字也東鑑には下手人とかけり然れども
本字は解死人と書

心ぼそさはよる糸のわかれゝて

古今集貫之の歌に「糸によるものならなくにわか

れちの心ほそくもなりまさる哉とよみたる歌をよくとりなしたり

裁斷の氣づかひなし

裁はものをきりわけさばく事斷はことわりとよむ字にて理をたゝす事也

にうがにうに方便をめぐらし

入我々入と書て入まじりてわからぬことなり是も經文に出たること也

定まる過去の因果じやなと

佛經にあまた見えたる事にて前生にてなしたる罪の因ところをこの世にて果すといふ心也

ひきやうな詞必々おいやるな

卑怯とかく也卑はいやしく怯はおそるゝとよむ字にて心いやしく臆病なること也

不祥ゝにうなづくばかり

不祥は老子經に出たる字にてよからぬ事也また古事記には不祥をふさはすとよませて是も心よからぬこと也又日本紀には不祥をさがなしとよませてさいはひなき心也

娑婆に名残がおしいか

娑婆とはもろ／＼の衆生の三毒諸煩惱をこらへう
くるといふ事にて世界の惣名なるよし名義集にみ
えたり

親にも永離三惡道

永く三つの惡道をはなると云經の文也

いな事を時宜する人

物を辭退する事あるひは人に禮をするを時宜とい
ふは禮記に禮は宜しきにしたがふと云ひまた禮は
時を大なりとすといふ語によりたるものなるべし

六道の門出

六道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天生をいふよ
し大藏法數に見えたり

虎溪の三笑と名に高き唐土の大わらひ

晋の惠遠法師廬山の東林寺に住せられけるに陶淵
明と陸子靜とゆきて是を訪ふかの二人かへる時遠
公つねには此山門を出ざるに彼二人をおくりて虎
溪といふ谷を思はず打過て三人ともに大に笑ひし
故事也晋書にいづ

○同道行

旅立に日のよしあしをゑらばぬは落人の身の常なれ
や

この枕の文句作者竹田小出雲深く案じてつくり出
せしが其とき父千前軒奚疑江戸に有けるにわざわ
ざ飛脚を以てこの道行の文の添削を江戸まで乞に
やりし也奚疑これを見て此まぐらの文句のかたは
らによろしくといふ褒美の詞を書きてかへしけ
る故其まゝ芝居え出せしとぞむかしの作者はかや
うの枕の文句などにもことの外骨を折し事感すべ
しこれにつけて思ひ出るにちかき世には近松半二
忠臣講釋のおりへと傾城うきはしとの出端の詞に
加茂川と井地の小川を月やとる流れは同じ二人づ
れといふ文句を九段が間案じてつゝりたるよし也
誠に傾城と立君と二人連の出端をよく書とりたり
といふべしこれらの事を思へば今の作者は文句な
どの事は意外のことにおもふなるへし

はんちや合羽も

秋草に云合羽といふものは古代なき物なりむかし
はみのを着たる也今世簑籠とて行列にもたするも
簑を著たるゆゑかの籠をみの籠といひならはした

る也慶長のころ阿蘭陀國の人商賣のために日本へ
わたり來るに彼おらんだ人の上にくきたる衣服に袖
もなくすそ廣きものあり其をか國の人の詞にカ
ツバといふ也此方にて其カツバを似せて紙にて作
り油を引てカツバと名付たると也今の坊主合羽と
いふもの也阿蘭陀に用ゆる文字は此方の字とは違
たりさればカツバと云字しれず合羽の二字はこの
方にてあて字につけたる也と有按するにはんちや
合羽は半合羽のこと成べしものゝ半なることを半
チャと俗に云ならはせりこれはなから半着といふ
俗語の轉じたるにやされば半着の字なるべし

かつら男の

かつら男とは月の中にある桂の木をきる男といふ
事にてその名を吳剛といふよし酉陽雜俎にみえた
り

思ふ思ひはますらをがやたけ心も

思ひは増といひかけたりますらををば壯夫と日本紀
に書てこゝろたけき男のこと也これ故やたけ心と
つゝけたり

○義經千本櫻 狐之齣

鶯の聲なかりせば雪きへぬ山里いかで春をしらまし
拾遺集に出たる中納言朝忠の歌也

ことぢにたつる雁がねも春を見すてぬ心ざし
空をゆく雁のつらを琴柱に見たてゝ雁は都の春を
みすてゝこしぢにかへる物なるに川つら法眼が義
經公を見拾ぬ心さしをほめたることば也
疎略なき心底

疎略の字は漢書の司馬遷が傳に出て疎はうとく疎
遠なること略はものをざつとする事也こゝにては
法眼が深切なる心をいふ
いぶかしげにうけ給はり

韓詩外傳に不審と書ていぶかしと讀せたり不審に
思ふ心也

破傷風のやまひとなり

金瘡の疵口より風を引て筋なと引つりなやむを破
傷風といふ事外科正宗に見えたり

我きせながを汝にあたへ

着春長とかいて大將の着し給ふ甲冑の通稱と書言

字考にみゆ

ひやうはくしてもうつけぬ義經

瓢泊と書て船のたいよひながらかゝりある體をいふ

引くゝつてめんはくさせよ

面縛とかいて左傳に出たる字也註に兩手を後に縛てたい其面をみる也と有

がうもんしていはせふか

拷問とかく也字彙に拷は打也と有てうちたゝきてせめとふ事也

忠信殿御出也と奏者が聲に

宗五記に云公にては申次と云私にては奏者と申也とぞ是室町家の時の事也海人藻芥に云近日頭人等内々の取頭を奏者と稱するは傍若無人のこと也奏の字天子に限りて云事也然は則關白以下諸家に物申者申次と稱すべしと云々

何にもせよ子細ぞあらん

子細はこまかなる事也北史の源思禮が傳に政をするには大綱を擧べしなんぞ必はなはだ子細ならんと有こゝにてはこまかに入組たるわけ有べしとい

ふ心なり

へんしも早く

片時もはやく也

もくして様子をうかがへば

默してはものをもいはずといふこと也

りんゑぎたなきふるまひならねば

輪廻は佛教に出たる字にてつきまとひてはなれぬ事也ふるまひは舉動と書て人のたちふるまひの事也

也

げんくはん長屋所々方々

玄關の事秋草にいはく古代武家に玄關なし佛寺には玄關ありし也三光院内府記に云壁輿は諸山門前において棄去なり但し東堂は玄關に於てこれに乗る也と云々諸山といふは諸寺のこと也諸寺に玄關あることをしるべし武家には玄關是なしといへり今按ずるに玄關の字は傳燈錄に出て惠海和尚の詞に玄關を啓くと有て佛道の深き心を説ひらくを云也

忠信のかいほうだけ

介抱はたすけいだくと書てかゝへたすくる事をい

ふ也

しんきしんくをなひませのしらべむすんでどうかけて

辛氣辛苦とはしづかゝ心遣ひすることはいふそれを眞紅の糸にてよりたるつゞみのしらべにいひかけたる也

手じなもゆらに打ならす

神代紀に手玉も玲瓏に織紐少女はこれ誰むすめぞやとありまた萬葉集に「あしたまも手たまもゆらにおるはたをきみかみけしにぬひあるんか」といふ歌も有て手だまはすなはち手じなにて女の手じなのやさしきかたちをいふ也

こゑせい／＼とすみわたる

つゞみの聲の清々ときよくすみわたる也

しんにをすますめう音は

李太白詩集に南窓蕭瑟松風起憑誰一聽清心耳と作れりこゝにてはつゞみをきくに心も耳もすすほどの妙音ありといふこゝろ也

かのらくやうに聞へたる會稽城門の越のつゞみ

此書は白孔六帖に云會稽の雷門に鼓あり白き鶴飛

てこの鼓の中に入たり洛陽の人そのこゑを聞て是をとらんとするに鶴たちまちとび去たりとあり

聞入聞あるよねんのてい

つゞみに聞入て餘念なき體なりよねんのていにてはこと葉たらず

油斷を見すまし

油斷といふ事は涅槃經に出たるたとへにて國王一人の臣下に勅してひとつの油の鉢をもたせて道を行しめすこしもかの油の鉢をかたふくることをゆるさずもし一しづくにても其油をこぼさば汝が命を斷べしとてまた一人をつかはして刀を抜しめ油をもちたる臣下のうしろよりはを怖さしめばかの人心をつくしてかの油鉢をもちかためんといふ事にて油によつて命をたつと云事を油斷と云ならはしたる也

たゞひれふしてゐたりしがやう／＼にかしらをもた

ひれとは領のこと也かしらをさぐれば領もうつむけにふすゆゑひれふすとはいふなり

からすは親のやしなひをはごくみかへすも皆孝行

からずを慈鳥と云また孝鳥といふ反哺とてからすが成長すれば鮮しき食物を得ては口に入れて腹にいれずはきかへして其親鳥にくはしむること禽經に見えたり

ぐちむちの畜生も

愚癡はおろかなる事無智はちゑのなき事也

千年こうふるいとくには

却を歷るといふことにて佛書に一世を却とすとあればよをふると云心なり

八百萬神とのゐの御ばん

やをよろづの神といふ事にて古事記に出たり日本紀には八十萬神とかいてやそよろづの神とよませたり八百といふも八十といふも數多きことをいふ詞にて天照大神の外の神々のあまたまします事をいふ也とのゐの御ばんとは其數々の神たちが禁裡を守護したまふ心なり

いんぐはの經文うらめしく

因果經にある文言といふこと也

五臟をしぼる

心の臓肝の臓腎の臓肺の臓脾の臓これをしぼる

ふなり

頼もつなも切はてしは

是は頼みのつなも切はてしといふべき詞也頼みもつなもといへばたのみとつなとが二ツに成てこのつなは何の綱ともしれぬものになる也頼みのつなといへば頼みにする心を綱にたとへたる心なり此ことばこゝに限らす所々に出る詞なれどもいづれも頼みもつなもとありててにはを誤まれり

かほどごういんふかき身も

業は前世の惡業因は前世の因縁也

りんゑのきづなあいじやくのくさり

輪廻の繼はたえずつきめぐる執心をつなにとへ愛着のくさは恩愛に執着を鑠にたとへたる佛語也

そもいつの世のしゆくじうにて

宿習と書て前世よりなれ來りたる業因いとふ佛經の語なり

我てんべんのつうりきにて

轉變はうつりかはる心也狐の通力にてさま／＼にばける事を云

けいしやうひじゆつはゑたりや得たり

輕捷はかろくはやき心也はやわざの秘術はきつねの得ものといふこゝろ也

くはいりよくらんしんをかたらずといへども

論語に怪力亂神をかたらずといふ事有あやしきことなどは聖人のたまはぬことなれ共といふ心也あたかもふせつを合すがごとし

符節を合すがことしといふ事孟子に出たり符節とは竹のわりふの事にてすこしもちがはずあふことのたとへ也

よきけいりやくござんなれ

よきはかりことこそあるなれと云詞也その二字をつめていふ時はさの字と成ゆゑこそあんなれといふことをござんなれとつめて云也

じんとくあつき御詞に

仁徳と書て義經の人をめぐみ給ふ徳の厚きことをいふなり

御はかせをたびてける

御はかせは君のはかせ給ふ御太刀といふこと也日本紀にみかどの御手にとらせ給ふ弓を御執といふ

におなじ心也

ゆかもひゃけとづでんどう

頭轉倒と書かしらのひつくりかへる事也

命おしさに骨折はくらう九郎と

苦勞九郎と詞をかさねたるなり

らうたげなる御すがた

らうたげはけたかくおとなしやかなるかたち也源氏物語にあまた有詞也

玉體のまします事

天子の御身を玉體と申なり

にぎりつめたるたなうらに

たなうらは手の内也足のうらをあなうらといふ

龍顔にあはせ奉るは

天子の御顔を龍顔といふ事史記に見えたりすべて

天子の御事を龍にたとへていふ故御怒を逆鱗と云

也逆鱗は龍のうろこをさかだてる事也

のり經が隠れがへせんかうあれ

天子の御座をうつさるゝ事を遷幸といふなり

うき世をうしの車ともしろしめされとそうしつゝ

うしの車はうき事を牛といふ字にかけて車に轅と

云もの有ゆるこの長柄の長刀を牛に引する車とお
ぼし召れよと云こゝろ也

供奉のけがれ思はずば

みかどの御供申す事也

上にはのり經ゐた天立見くだす眼かど立て

韋駄天は諸天傳に韋天將軍とも有其傳に云天神姓
は韋諱は現南方天王八將の一臣也と有讀の詞の中
に熏修の所威權を現す共頭頂の金兜寶杵をよこた
ふとも有

ぎやうがうの道をさへへ

當今のみゆきを行幸と申仙洞のみゆきを御幸と申
也

しゆらのもうしう散する道理

修羅道に墮たる繼信が妄念執心を散する道理とい
ふことなり

庄園を申くだして得さすべし

愚明抄に庄園は田島也と有榮花物語に御堂關白道
長公病中に法成寺へ庄園おほく寄附せられたる事
見えたり

すはやと見ゆるふくしんにわけ入なだむる源九郎

狐

腹心のうちへわけ入るは狐の性にえたるものなる
べし

君々たれど臣々たらず

君々たり以て臣たらずんはあるべからずと云論語
の詞をとれり

けいひつの聲高々と

警蹕とかく也さきをおふともみさをはらふとも
文選によませたり前漢書には王者出るときは警し
入るときは蹕す人を止め道を清ふ所以也と有

川つら法眼せんくの役

前駟とかいてさきばらひのこと也

銀魚帶

金魚帶銀魚帶とて貴人のおびものにて魚符とも云
二ツにわかつてわりふともする物也唐書に出たり

○愛護稚名歌勝閑 道行

あふことは猶かたいとのよるとなく

片糸はよりをかけぬ糸也それ故古歌にもかたいと
のよるとつゝけて糸をよることを晝夜のよるにい

ひかけたるが多きなり新千載集の戀のうたにも
「夢路にもあふとし見えはかたいとのよるたにや
すくねなましものを」とよめりこゝの文句は愛護
若にあふことはなりがたきといふ心をかたゝに
よりあはさぬかたいといひかけて其糸のよると
もひるともわかぬ間の内とつゝけたり

床の海

これも戀の歌になみだの事を袖のうみとも床の海
ともよみたればこゝも閨のうちに泣あかす涙に
床も海のやうになるといふ心也

うきねの鳥か鴉てる姫

うきねとは水鳥は水に浮て寐る物なれば床のうみ
にうきて寐る鳥とつゝけて其鳥の中に鴉鳥といふ
物があるゆゑそのやうなるにはてる姫の有さまぞ
と云心也

過し競馬の折からに

五月五日賀茂のやしろにてあること也此日は多く
見物の人々立ちこむよし長明の四季ものがたりに見
えたり

帥の阿闍梨

帥とは出家の官名にてあじやりは天竺の詞に出家
にてよく弟子の身持をたゞす人をいふよし釋氏要
覽に見えたり

いとゞ思ひのまさり草

まさり草は菊の異名にて寛平菊合に「すへらきの
萬代までにまさりくさたまひしたねをうゑしきく
なりといふ歌見えたれどこゝにてはたゞ思ひのま
さるといふ事にきかせたり

なれしふすまの曉に

此ふすまは衾の字にて夜着ふとんの類をいふなり
母のいさめや世の人のそしりも何のわきまへも

いさめは諫の字にて折檻異見などするを云こゝの
文句につれく草の萬にいみじくとも色このまざ
らん男はいとさうくしく玉のさかづきのそこな
きこゝちぞすすべき露霜にしはたれて所さだめすま
どひありき親のいさめ世のそしりをつゝむに心の
いとまなくと書たる文によりて戀路の切なるさま
をうつしてなんのわきまへもまだ知らぬといふこ
とを白川の橋にいひかけたり橋柱ははし杭のこと
也

波のあわたつ山つゝき

是は栗田山のことをいふ古今集にあはたといふ事を隠し題にしてよみたるあやもちの歌に「うきめをはよそめとのみを見つゝ行雲のあはたつ山のふもとにといふ歌ありそれを今こゝにはしら川よりつゝけて波のあはたつ山と取かへてつゝりたるなり

我たつ柚の山おろし都の富士とながめやる

わかたつ柚とは叡山の事也むかし傳教大師えい山中堂建立のとき柚木をきらせ給ふとて「あのくたら三藐三はたいの佛たちわかたつ柚に冥加あらせたまへ」とよみ給ひしより此山をわがたつ柚といふよし無名抄に出たり又都のふじといふ事は伊勢物語にするがのふじの山のかたちをいふとてこゝにたとへばひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどしてとかきたるにつけて叡山をみやこの富士とは云ひならはせりそれゆゑ後撰集の歌にも「我戀のあらはにみゆるものならは都のふじといはれなましをともしめり

麓は鴉の朝霧や袋を出る琵琶の海

叡山のふもとは近江の湖水なればつぎ／＼そのけしきをいへり此みづうみを鴉のうみとも鴉てる海ともいふ琵琶の海といふことは此湖のかたちびはに似たれば名づけたる也こゝに袋をいづると書たらは朝霧のひまより湖の見えたる所が袋の口をときて琵琶をとり出したるやうにみゆると云こゝろ也それ故たが糸かけて引あみ共續けたり

千舟百舟帆をあげて

近江八景のうたに「雲はらふあらしにつれて百船もちふねも波のあはつにそよると讀たるによれりさつささゝ波しがの浦むかしながらの花園の

千載集よみ人しらす「さゝ波やし賀のみやこはあれにしをむかしなからの山さくらかな

加茂の葵の二葉山

加茂の葵祭の日のことをいふとて葵の二葉山とつづけたらふふひはふた葉なるものゆゑ加茂やまをふたば山ともいへり

狩装束の花やかさ袴は精好水干は此秋の野の草づくし

狩装束は鷹狩の装束也此袴は奴袴とてくゝりを高

くあげらるゝ様に仕立る也それ故やつこと云字を添へて奴はかまと云と秋草にいへり精好はよきうす絹也水干はひたゝれの様成物にて紗にても平絹にても拵るよし装束拾葉抄にみゆわれもかうは漢名を地榆と云薄の様にて紫色の花咲草也

鳴てさわたるあの鴈がねも

さわたるは早くわたると云事にて秋のはつ鴈をいふ也早の字をさよむ事は早苗早蕨などにて知べし

あふはわかれの始ときけど

會者離之始といふこと白氏文集に見えたり

ちにまじはる神心

これはもと老子經に其光を和らげその塵を同じうすといふ事有之我智恵をかくして人に見せぬを和光といひ世にしたがひて塵の中にまじはりて時をしるを同塵といふ心なるゆゑ神の御心の其やうなる物にて世の人を守らせ給ふに光を隠して塵に交はらせ給ふ御めぐみを云也

○同

山之段

かくとはいさや神ならで

いさとは不知と書て神ならねばかくともしらすといふこと也

佛につかふ閼伽の水手に携へて唄づたひ心細道たどらるゝ

天竺にては水をあかといふこゝにあかの水と書たるは重言也携へるとは手にさげること也唄は山のがけのやうなる細道なりたどらるゝとはしらぬところを行はくらがりをありくとして手にてさぐりさぐりありくやうなるものなれば物の覺束なき事をたどると云也たは手の字にて手取と書也

今のわが身の境界と

境の字も界の字もさかひとよむ字にて身分と云と同じ心也

早中堂に勤行のはじまるしらせ

中堂は傳教大師の建はじめられし堂なり勤行はつとめおこなひと云こと也

戀しき人を慕ひては劔の山にものぼるといふ

地獄に刀山劔樹有てかの山の上にわが愛する所の婦女あるゆゑに男子これをみてかの山にのぼるに

樹木の葉刀のごとくにてことく其身體をやぶれども其をもいとはず山の上に登りて見ればかの女はまた地にありていふ何とて早く來りて我を抱きたまはぬといふ故かの男又刀山を下れば劔樹の葉又下にむかひて彼男の五體をきるといふ事瑜伽論に出て邪淫の罪をあらはせり

震動雷電はたゝがみ

震動はふるひうごくときよみ雷電はかみなりいなばかりとよみてかみなりのおびたしく鳴ひく事もはたゝがみは霹靂とかきてかみなりの鳴はためく事も

ふたゝびのぼるつゝらおり

つゝらをりは九折とも羊腸坂とも書てはげしくまがりくたる坂道のこと也

空には磐石

そらよりいしの降ことく大風がいはをもとばすなり

魔障の業

魔は惡魔障は障礙の事にてあしきものがさゝはりをなして山へのぼらせぬこゝろなり

氷の雨は大ぐれん天狗つぶての等活地獄骨もくだかれあなうらを

八大地獄の中にて大紅蓮とて寒氣の身を責る所と云よし翻譯名義集に見えたり等活地獄は罪人たがひに害心をいだきたまゝ相あふ時はたがひに鐵の爪を以てかきやぶり血肉すでにつきて骨ばかり残るとき獄卒鐵杖鐵棒をもつて打くたき身體ことく粉のごとくなる時すゝしき風ふき來ればもとのごとく人の形の活かへり又たがひにかきつかみてくるしみをうくる是を等活ちごくといふよし往生要集に見えたりあなうらは足のうらと云事も也

瑠璃天狗卷之貳終

瑠璃天狗卷之三

○妹背山婦女庭訓 山之齣

古への神代の昔山跡の國は都の始にて

いにしへは往し方と書て過行しかたをいふ也神代のむかしとは神代紀に陰陽始てみとのまぐばひして夫婦となりこむ時先淡路洲を以て胞とすなはち大日本豊秋津洲をうむと有をいふ下學集に云山迹はすなはち大和なり日本の惣名也日本紀に天地開けはじまりし時人みな山に往む其地いまだ堅からずして人のあと見ゆ是をもつて山迹と云と有また日本六十餘州最初に大和州出生す故に日本の惣名を大和といふともあり又大和をみやこの初といふ事は神武天皇東征したまひ六年の後攸をやまとの國畝傍山の東南橿原の地に相てはじめて帝宅を經始たまふ都を建ることこのときに始るといふこと舊事紀に見えたり

妹背のはじめ山々の中を流るゝ吉野川

拾遺集の神樂歌に人丸のよめる「おほなむちすくなみ神のつくれりしいもせの山を見るそうれしきと云歌と古今集よみ人しらすの「なかれてはいもせの山の中におつるよしのゝ川のよしやよの中といふ歌とによれるなるべし

實世に遊ぶ歌人の言の葉ぐさのすて所

ことのはぐさとは和歌をいふ也新續古今源範政歌に「よしあしを君しわかすはかきたむることの葉くさのかひやなからんとよめり

太宰の小貳

官名なりむかし筑前の國に太宰府といふ役所を置て外國の要害としたまへり宰はつかさどるとよむ字にて後の世の管領職とおなじ事也其太宰府のおも役を太宰の帥といふ其下役を大貳小貳と云なり太宰の小貳は五位の諸大夫にあたるよし職原抄の註に見えたり

大判事

大判事は武官の名にて罪科の輕きと重きとをわけしるしてさまぐの争ひごと訟へ事を判斷してさばく役なるよし令義解に見えたり位は正五位下に

あたりて此下役に中判事少判事といふも有也この事は職原抄に見えたり

爰に勘氣の山住居

貝原好古の諺草に云俗に君父の怒に逢て閉居するを勘當にあふたるといふ是は其罪の科を勘へて輕き重きの律に當ることなるべし唐書に勘當に暇あらすとありと云々按するに勘當のことを清少納言の枕草紙には勘事と書てかうじと讀せたり今勘氣と書は父の勘當の氣色をはかりて山住居するといふ心なるへし

經讀鳥の音もすみて

鶯が法華經とさへづるといひならはせし故にうぐひすを經よむ鳥と書なしたる成べし

氣を慰めの雛祭

ひいなあそびの事は源氏物語もみちの賀乙女野分などの卷々に見えたれど今のやうに三月三日九月九日にばかりまつる事にはあらずちひさき人形をこしらへ小さき家などをつくりて常にもてあそぶをひいなあそびと云也野分の卷に雛の御殿をひいな屋とも書たり按するに此雛といふ字はもと鳥

の子のことなるゆゑすべて小さき物をひなといふなりすべてのものゝかたちを十分一にちひさくこしらゆるをひながたといふもこの義也漢土にて小僧を雛僧といひ小妓を雛妓と云も同じ心也

桃の節句の備へもの

日本にて三月三日曲水の宴をはじめて行はれし事は顯宗天皇の元年なるよし日本紀に見えたり漢土にては韓詩外傳の註に三月桃花の水盛にながるゝ時にあたつてもろゝの士あまたの女と蘭を執て邪氣を祓ふ鄧の國の俗として三月上巳の日はをおこなふよし見えたりよつてこの日を桃の節句と云ひならはしたる成べし

柳の楊枝はしちかく

楊はやなぎといふ字にてもと楊枝といふものは皆楊の枝にてこしらへたる物也釋氏要覽に楊枝を嚼に五ツの利あり一には口苦からず二には口臭からず三には風を除き四には熱をのぞき五には痰癢を除くと有今こゝに柳の楊枝といひたるは重言の様なれど杉やうじ竹のやうじなど云事あれば苦しからず

御中ふ和の關となり

ふ破の關は美濃の名所にて千載集大中臣親守の歌にも「あられもる不破の關屋にたひねして夢をもえたそとはさやりけれとよめり此關の名を不和の字に通はして書り

よもやいなとは岩はしの

葛城の一言主の神久米の岩はしをかけおほせずしてやみ給ひしゆゑわたる事こそならずともと云ひかけたり千載集師頼の歌に「かつらきやわたしもはてぬものゆゑにくめのいははしこけむしにけりとよめる心也こゝに大和の名所を取出したるは作者の働也

念悲觀音の經机

念彼觀音と書て彼觀音を念せば釋然として解説をえんといふ觀音經の偈によれり念悲と書はあやまり也

からりと川に落瀧津

おち瀧つは山川の流れ落てたぎる心也古今集忠岑の歌に「落たきつ瀧の水上年つもり老にけらしなくろきすちなしとよめり

返事を松浦佐用姫の

これは萬葉集の「遠つ人まつらさよひめつまこひにひれふりしよりおへる山の名といふ歌によれりひれは領のことにて夫のゆきかたを見んと領をおりてながめやりたるまゝにて石になりたる故事也こゝにひれふす山とつゞけたるは誤り也ひれふすはうつふけに伏ふこと也

善か悪かを三柏水に沈めば願ひ叶はず

柏の葉を水にうけて物をうらなふにしづめば願ひ叶はずうけば願ひかなふといふこと有續古今戀の部小侍從の歌に「おもひあまりみつのかしはにとふことのしづむにうくは涙なりけりとよめり

吉野を假の御祓川

御祓川はみなづきはらひをする川をいふ此吉野川をかりに御祓川としてこゝより大神宮を拜せんといふ也柏にみきをのせて大神宮にさゝぐることは夫木集仲房の歌に「むかし誰みつのかしはの盃を天照神に手向をめけんとよめり朝拜といふは清涼殿の前にて臣下の天子を拜する事をいふよし花鳥餘情に見えたりこゝは遙拜といひてよき所也朝拜

と書るは誤也

いふに嬉しさ雛鳥の飛立計り振袖も

この詞よくつゞきたり萬葉集に「よの中をうしとやさしと思へとも思ひたちかねつとりにしあらねはともよみうちはふき今も鳴なんといふ歌を萬葉には打羽振と書たり鳥が飛んとする時はふたつの羽ねをふるゆゑ也こゝに飛立ばかりふり袖と書たるよく叶ひたり

吉野の川に鵲の橋はないかと

銀河に鵲の橋をかけて一年に一度織女をわたすといふこと淮南子にあるゆゑ此吉野川に橋はなきかとうらむ心也

籠鳥の雲井をしたふ

此故事菅原にしるす

空にしられぬ花ぐもり

花ぐもりははなの比空の曇りてすこしふる雨也この心新古今戀の部に「なに故になかむる月のくもるらん空にしられぬ袖のしくれをといふ歌にかなへり

心の嶮岨刀して削るが如き物思ひ

嶮岨は山のけはしきかたちにて刀をもつて削り立たるやうにするときを云今大判事がわがこゝろの苦しさが刀にて削らるゝやうなりとたとへたり此詞は朗詠に山復山何れの工みか青巖の形を削りなすとも見え又遊仙窟の高き嶺天に横たはつて崗巒の勢ひを刀して削れりとあるにもよれるなるべし
清澄も一楫し

楫の字は漢土にては人にむかひて禮をするとき手をわが胸にあてゐることをいふ也日本にては手をさげて挨拶する事に用ゆ

けふの役目の落去次第

落去は落着といふに同じ去の字は宛字にて本字は落居とかく事下學集に見えたり和文にも氣のおちつくことを心のたちゐると書は此落居の字なり

母に勸て入内させ

入内とは公卿の御むすめのみかどへ御よめいりなさるゝを云大内に入といふ心にて入内とかく也遺恨に遺恨を重ねるか

遺恨の字は杜子美が詩に出たりのこるうらみをいふ心也

覺束なくも呼子鳥

「をちこちのたつきもしらぬ山中におはつかなくもよふこ鳥かなといふ古今の歌にてかきたり

胸は眞紅のふさがる箱

眞紅はくれなるの色也ひもの流蘇^{ふさ}を塞るむねにいひかけたり

叡聞に達し

天子の御耳に入るを叡聞といひ御意を叡慮といふ也

一天の君

天下に一人の御あるじ故天子を一天の君といふ也

此花は八重一重

八重櫻と一重ざくらと二ツの花をいふ也むかしはさまぐのさくらはなくして一重のやま櫻ばかりなりしかば奈良の都にある八重ざくらといふ千重の櫻が甚だめづらしかりしゆゑ禁裡へさへげられし時「いにしへのならの都の八重ざくらけふ九重に匂ひぬるかなと伊勢大輔もよまれたり今の世に楊貴妃鹽釜車がへしなどさまぐ名の多くなりたるはみな人作にてかのやへざくらをさまぐに變

するやうに手入して咲かせたるなり契沖の漫睡集

に今のよのさくらをといふ詞書有て「八重ざくらならのみやこの一本より枝にさえたに花ぞわかるるとよめるも後世花のかずおほく成たるをいふなり

九重の内に侍^{かしづ}かるゝ

こゝのへは禁中をいふ傳かるゝは大切にせらるゝことをいふなり

義理の柵せき留ても

しがらみは塘を水にてくづさせぬやうに河ばたに木や柴やをからみつけておくを云なり

馴ぬ雲井の宮づかへ

雲井とも雲の上ともいふ皆禁中の事也

けふより内裏上臈の

上臈とは女御などの御事をいふ下臈とはまた其下の更衣などの御方をいふ也

別れの櫛のはかなさも

くしの齒といふことをはかなさもとつゝけたり別の櫛のことは源氏ものがたり櫛の卷に六條の御息所の御娘伊勢の齋宮に立給ふ時御こゝろうごきて

別れのおほんくしたてまつり給ふいとあはれにて
しはたれさせ給ひぬと有これは齋宮とていせの大
神宮へ宮づかへにまゐり給ふかの御むすめのひた
ひにつげの御くしをみかどの手づからさゝせ給ひ
てふたゝび京の方へかへらせ給ふなど仰ごとある
が例なれば別のくしといふなり

何樂しみの女御后

天子の御妻を后と申それに次たる女官を女御とい
ふよし花鳥餘情に見えたり周禮に女御は御妻也と
あれば漢土にても重き稱號也

十二一重

これは五ッ衣と同じ事にて古代十二一重といふこ
となし源平盛衰記の女院の海に入せ給ふ所に彌生
の末なれば藤重ね十二單の御衣を召しといふこと
はじめて見えたるよし年山打聞にみえたり

一ッに落る三ッ瀬川

十王經に亡人の葬頭川をわたるに三ッの瀬有て一
に山水瀬二に江深淵三に有橋渡といふとあり是に
よりて歌にも三ッ瀬川ともわたり川ともよむよし
古今集の古抄にみえたり按ずるにこの十王經は偽

經なれどもふるくこの經によりて歌にもよみ來れ
る事おほし

子よりも親の四苦八苦

四苦とは生苦老苦病苦死苦をいふ八苦とはこの四
苦の上に愛別離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦を合
せていふと大藏法數にみえたりこゝにては只種々
の苦しみをいへり

西方淨土

極樂のことなり

殘らず川へ流れ灌頂

眞言宗の法事に灌頂といふ事あり延暦二十四年高
雄の道場において行はるゝよし日本後紀に見えた
り流れくわんでうは經木を川へながす事にて職人
歌合に「いかにせん五條の橋の下むせひはてはな
みたのなかれかんしやうといふうたあり

水に成たる水葬禮

天竺の葬法四ッ有一には水葬とて屍を江河に投て
魚鼈に飼しむ二に火葬三に土葬四に林葬とてはや
しの中に棄置て鳥獸に飼しむといふこと釋氏要覽
にあり

筐も仇の爪琴に

「かたみこそ今はあたなれこれなくはわするゝときもあらましものをといふ古今集の歌にてかきたり爪にてひく物ゆゑ爪琴といふなり

弘誓の船あなたの岸より彼岸に

弘誓はひろきちかひとよみて佛の衆生をすくはんととのたまふちかひをいふ也またほとけを船師大船師とも云て苦海を船にてわたし給ふ船頭にもたとへたる事法華經にも見えたり彼岸は心經に到彼岸といふ事あり佛道をうる事を彼岸に到ると説り

玉の緒

命といふ物は魂をわが體につなぎておく緒のやうなるものゆゑ命を玉の緒といふ也
親か赦して塵未來

塵の字あて字也盡未來と書べし地藏本願經盡未來際とかけり未來永々までと云心也

焰魔の廳を名乗て通れ

廳は役所の事にてゑんま王宮の前に役所有て簿を以て亡者の罪を正すこと十王經に見えたり
なむ成佛得脱と

佛になりて此世にくるしみを脱るゝ事を得べしと云こと也

早日もくれて人顔も見へず庵の霧隠れ

この霧隠れといふ文句春のけしきに不相應なりとて難ずる人有ど其はかへつてあたらぬ論也三體詩劉禹錫の詩に日出三竿春霧消ともつくりて霞がくれといふも同じ心也

○假名手本忠臣藏 山科駒

風雅でもなくしやれでなく

風雅はものずきといふ様なる心しやれは洒落とかきて性理大全に周茂叔は人品はなほだ高くして胸中の洒落なること光風霽月のごとしといへるやうにうき世をはなれて氣性の高き心を云也
牽頭仲居に送られて

箕山が色道大鑑卷の一に云太鼓持といふは傾城買の家に付したがふものをいふ此名目のおこりは紀州の雜賀跳にはじまる鐘をもちたるものは首にかけてをどる其中に鐘をもたぬものに太鼓をもたするなり是によつて此名目とすといへり又同書に太

鼓持の異名をむかしは行證人、あかば、おひやなど云又跡付、杵持、惟光、ぶんせき、末社などいひひたるよししるせり惟光は光源氏の君の心しりのものにて源氏の君のしのびありきのともをして常につきしたがひ奉りし事源氏ものかたりに見えたり其心にて名付たる物成べしされど昔も太鼓持を惟光といふことは筑紫がたにいひ馴て上方すぢにはこれを用ひざりしといへりぶんせきは慶安のころ大坂邊にていひならはせし名目にて本客とは席をわかつといふころにて分席といふよしかの書にみえたりこの色道大鑑は甚珍書にて寫本十八卷あり此作者は顯傳明名錄をあらはしたる吞舟軒箕山と云人なりまた太鼓持のことを漢土にては牽頭幫間六頭子など共いへり

雪こかし雪はこけいで雪こかされ

雪こかしは雪圖と書て源氏物語槿の卷にわらはべおろして雪まらばしせさせ給ふちひさきはわらはげてよろこびはしるにあふぎなどもおとしてうちとけがほおかしげなりと有わらはげはをさなきさまを云也

旦那申旦那

本字は檀那なり今下人より主人をさして檀那といへどももとは佛語にて僧より在家をさして云こと葉也それゆゑ俗にわが頼み寺をもだんな寺といふ也くはしき事は法界次第に出て内に信心あり外に福田あり財物有三事合して心に捨法を生じよく慳貪を破る是を檀那とすと云り

朝夕に見ればこそあれ住吉の岸のむかひの淡路嶋山此歌は津守國冬の歌にて新後拾遺集の雜の上にでて下句うらよりをちの淡路嶋山と有これは拾遺集に出たる人丸の「すみよしの岸にむかへる淡路嶋あはれと君をいはぬ目をなきといふ歌の詞をひとつにおぼえあやまりてきしのむかひのあはち嶋山といひ傳へたる也さて此歌のころは朝夕にみてゐればこそめづらしうも覺えね此すみよしの浦よりはるかに見わたすあはじしまのけしきは何ともかともいはれたるけしきにてはなき物をと淡路嶋のけしきはいつみても見あかぬといふ心なれば今由良の助の引ていふ歌にては心うらおもてにてあたらず是は作者のあやまり也

詞もしどろ足取もしどろに見ゆる

東坡集に取次と書てしどろにと點せり下學集にも取次筋斗と書てしどろもどろとよませたり取次はものゝ次第なく入ませりたる事筋斗は俗にいふとんぼうかへりの事也源氏物語むめかえの卷に筆にまかせてみだれ書たまへるさま見どころ限りなししどろもどろにあいきやうつきまほしければと有て河海抄には此處の註に「よしとてもよきなはたゝすかるかやのいさみたれなんしとろもどろにと云うたを引たり降たる雪かな

この所の二くさり三くさりの文句は鉢木の謠をわざといひかへて雪は鵝毛に似て飛て散亂し人は鵝毳を被て立て徘徊すといふ詩をかやうにとりなしたるもの也此詩は白氏文集に出て鵝毛とは鵝といふ白き鳥の毛のこと散亂はちりみだれたる事也鵝毳は鵝の毛にて織たる毛おりの衣の事徘徊は立もとをるとよみて立どまること也

伊勢海老と盃穴の稻荷の玉垣は

赤き物をいひならべたる也玉垣は朱の玉垣と歌に

もよみて神社のめぐりのあかくぬりたる垣也玉は垣をはめたる詞なり

嶺の雪吹に岩をも碎く大石同前

ふいきはつもりたる雪の風にくだけおつるをいふ也後京極攝政の月清集に「旅人のみのしろ衣うちはらひふいきをわたる雲のかけはしともよめり

螢を集め雪を積も學者の心長き例

螢をあつめし故事は晋書に車胤といふ人博く書物を覽て退窟することなかりしかど家貧しうしてつねに油を得ざりければ夏のころはきぬの袋にあまたのほたるを入れて書物をてらし夜を日につぎて是をよみたるよし見えたり又雪をつむ故事は孫子世錄に孫康といふ人貧にして油なかりければ冬は雪に映て書をよみたるよし見えたり

刀脇指さすがげに

秋草に云近世刀といふて脇差と一具にさし添るものをいにしへは打刀鐔刀とも云し也古き武家の禮書に刀をたまはりたらば指て禮すべしといひたるは腰刀のこと也打刀を座敷人前にてさすは無禮也といふまた云脇指の事本名は脇差の刀といふもの

也此ものむかしより有しものなれども今の世のご
とくなる物にはあらずいにしへは脇差は六七寸計
りにして柄もまかず鍔もなく鞘尻を圓くして短き
下緒を付さげをの先を結玉にしかうがいをして
懷中にて脇の方へよせてさす故わきざしといふ懷
中にさすに衣服にかゝりさはらぬ爲鞘尻をまろく
するなりふところより外へすべり出ぬために下緒
のむすび玉を帶の通りにおしはさむなりと有

梅見付たるは、笑顔まぶかに着たる

は、えむとはすこし笑ふを云は、は頬の字にてむ
かしのかなづかひにては、と書也まぶかは目深と
書て目の字をまよむもむかしの詞也帽子をめの
あたりより下へふかく着たるを云

小浪御寮

人のむすめを御寮とも御料人ともいふ事にしへ
はなき事にて太平記に北條高時の男を萬壽御寮と
書たれば其ころは男子をも御料といひしなるべし
今按するに寮の字は文選の註に小窓也と有はまど
の内にそだてられたるむすめを御寮といふなるべ
し長恨歌に楊貴妃の事を養はれて深窓に在て人い

まだ識ずとも作り源氏ものがたりの品定の所にも
親のかしづくむすめの事をいふとておひさきこも
れるまどのうちなるほどはと書るにても知べし
只今は浪人

浪の字はみだりとも讀てよるかたなくなることを
流浪ともいへば浪人は仕官をやめてうきたるから
だといふ事也文苑彙雋に踪迹定り止る所なき人を
浪人といふよし見えたり

追従武士の祿を取

追従はおひしたがふとよむ字にて人の氣にすこし
もたがはぬやうにつきしたかふ事にて下學集に媚
諂之義なりと注せり源氏物語うつせみの卷にはと
のゐ人などものにみいれつゝいそうせずと書り

二君に仕へぬ由良、助が

史記に齊の王蠋が詞に忠臣二君に仕へず貞女二夫
を更すと云て燕の國に仕へずして死したる故事あり

心へだての唐紙を

今世間に用ゆる襖はむかしは襖障子といひたる物
にてそれをから紙にてはりたるゆゑかのふすませ

うじの事をからかみと云也職人歌合から紙のうたに「空いろのうす雲ひけとからかみのしたきらゝなる月のかけ哉とよめり平家物語長門本にからかみの障子をたてたりと有よし秋草にいへり貞女雨夫にまみへす

上の王蠟の詞をうけて書たる所おもしろし

涙一途に突詰し

一途はひとみちといふこゝろ也

勿體ない事

諺草に俗語の勿體はすなはち物體也人物のすべきを物體のあるといふ君父を蔑にし神明を侮るなどは人物の正體にあらざる故にこれを物體なしといふなりとあり

薦僧の尺八

薦の字は誤にて本字は虛無僧也又普化僧ともかけりもろこし盤山寶積の弟子普化禪師といふ人尺八をふき鈴をふりて明頭來晴頭打四方八面來などいふ事を唱へありかれし事有其流れを汲て文明年中朗庵といふ僧みづから普化道者と稱して宇治の吸江庵京都の妙安寺に住して尺八を好みしゆゑ此寺

終にこも僧の本寺となれるよし雍州府志に見えたり薦僧をむかしは暮露とも暮露／＼ともいひたる事は明恵上人の空華論兼好のつれ／＼草等にみえたりまたむまひじりと云し事は職人歌合にみえたり

とたんの拍子

塗炭と書也書經に民塗炭に墜といふ事あり註に夏の桀王闇く亂れて下民を恤まず民の危ふき事泥に陥り火に墜てこれを救ふことなきが如きをいふと有文選の註には塗は泥也炭は火也と有されば俗にあぶなきかげんと云心をとたんの拍子とは云也修行者

すべて佛のみちを修行するものをいふ

白木の小四方

三寶の類にて俗に足打といふもの也

引出物の御所望ならん

聲引出とて嫁入のときむこより舅へおくる物をいふこの字は江家次第にも見えたり

刀は正宗指添は浪の平行安

正宗のこと薄雪清水齋に註す浪平行安は一條院の

時の刀鍛冶也

あんかんと

安閑とかいてやすらかにしづかなりといふ心なり

放埒なる身持

諺草に人の法度にしたかはざる事馬などの埒を放れいづるにたとへて放埒とはいふなるべしと有埒とは競馬の時馬を外へ出さぬやうに兩方にゆひたる埒をいふ也按するに定家卿の拾遺員外集に「埒のうちにくらぶる駒のかちまけものれるをのこの鞭のうちからといふ歌有されば俗に埒もないと云詞もとりしまりのなき事埒のあくといふは埒をあけて馬を自由にかけさすことよりいふなり

大だはけ

諺草には淫氣と書て恥をもしらすおろかにあさましきを云よしに云り

馬鹿つくすなど

秦の趙高亂をおこさんと欲して群臣のしたかはざらん事を思ひ鹿を二世皇帝に獻じて馬也と申せしかば二世皇帝左右の臣下にこれは何そといふ時趙高にへつらへるものはわざと馬也といひへつらは

ぬものは鹿也といふを聞てひそかに鹿といひし者を殺しておのれがいきほひを見せたる事史記にいでたり是より人をたぶらかす事を馬鹿にするといひ傳へたり

鹽梅見せう

書經に若和羹を作らば爾これ鹽梅ならんといふ事有てむかしは鹽と梅とを以て食物の加減をせしゆゑ天下の政をほどよくとり行なふ臣を鹽梅の臣といふこと山谷詩集に見えたりそれ故に物のほどらひをもあんばいと云

不祥ながら

不祥の字は日本紀にてはさがなしと讀てよからぬ心也

長押にかけたる鍵追取

鴨居の上に打付たる横木をなげしといふ事誰もしりたること也敷居の外にうち付たる横木をもなげしと云こと今はしらぬ人あり源平盛衰記に長押に尻かけ大床に足投出しといふこと有義經記に辨慶長押の上につい居て腰のほら貝とりいだしと云事有つれ／＼草になみ／＼にはあらずと見ゆる男女

となげしにしりかけて物語するありさまといふ事
あり是等は大きな家造りは椽より敷居までの中高
くてしきゐの外の方になげしを打し也釘かくしも
有これをなげしとしらぬ人有と秋草にいへり今爰
にいふは鴨居の上のなげしの事也

諸足のはん

もろあしは兩足也諸ともとは人と我と二ツ也もろ
袖はふたつの袖をいふ皆同じ詞なり
鬱憤をはらさんと

うつとしく思ふいきどほりをはらすといふことな
り

造營の砌

造營はつくりいとなむといふこゝろ也砌といふ字
はもと前栽などの事なれど其折からといふ心に用
ひ來れり

若氣の短慮

短慮はみじかきおもんはかりとよむ字にて氣のみ
じかきこと也

未來永劫

未來はいまだきたらずといふ心にて先のよの事永

劫の劫の字は世の字の心にて永き末の世までとい
ふこゝろ也皆佛書に出たる字也
露しらす

露といふものは草などにおくかと思へば直に消る
はかなきもの故それをたとへにしてすこしのあひ
だの事を露の間ともいひすこしばかりの事を露ば
かりともいふ也こゝにつゆしらすと云はすこしも
しらぬといふ心也新古今能宣の歌に「秋霧のたつ
たひ衣をきてみよつゆはかりなるかたみなりと
もとよめり

冥加の程が恐ろしい

冥加の字は佛書にては梵網經に出て目にみえぬ所
より佛の恵みのあることを云又神書にては神代口
訣に出て天照大神の託宣に冥を加るにまざるすな
ほなるを以て本とすといへり然れば目に見えぬ所
より加護し給ふ神佛のおぼし召も懼しきと云心成
べし

君子は其罪を惡んで其人を惡ます

此語はこれより先に御所櫻の院本にも出て伯夷叔
齊は其罪をにくみて其人をにくますと書りこれは

論語に伯夷叔齊は舊惡を思はずとのたまひし孔子の意を取て其語をつくりかへたる物のよし穂積以貫もかけり四書蒙引に司馬溫公は姦邪の小人の己を害するものをにくむといへどもまた其賢きを咨嗟すといへる心なるべし

未前を察して

いまだ其所へいたらぬ所をおもひはかるを云

石塔の五輪の形

石塔をたつる事は釋氏要覽に磚石を疊んでこれをつくる形小塔のごとしと有五輪は大藏法數に五體といふも同じ心にて人間の體の頭とふたつの肘とふたつの膝とを地水火風空にかたどりて五輪といふとありそれを石塔のかたちになつたるを五輪ともいふ成べし

玉椿の八千代迄ともいはれず

新千載集賀茂經久の歌に「神山のみねにおふてふ玉つばきやちよは君の爲といのらん」とよめり

吳王を諫めて誅せられ辱しめを笑ひし吳子胥が忠義吳子胥と書は誤にて伍子胥と書べし楚國の人にて身の長一丈眉間一尺有しといふ吳王を諫めて誅せ

られし事史記にみえたり
唐土の豫讓

晋の豫讓智伯に事へたりしに趙襄子といふ人智伯を亡したる故趙襄子をころして其仇を報せんとしけれども其志を遂ざりしかば襄子が衣を撃てみづから劔に伏して死したる事也是も史記に出

孫吳が秘書我爲の六韜三略

吳の孫武子があらはす兵書を孫子といひ魏の吳起がつくれる兵書を吳子と云六韜三略司馬法尉繚子太宗問對を合せて武經七書といふ也六韜と書もあやまりにて本字は六韜三略なりこの二つの書は太公望の作なり

舅が情のれんぼ流し

尺八の譜に云虛無僧の手二ツ臨門流虛鈴とありしかれば此れんも流しといふ尺八の手の名を戀慕ながしといひかよはしたるもの也戀慕はこひしたふといふころ也

よべとこたへぬだんまつま

俱舍論に曰命終に臨む時を名つけて斷末摩とす苦受に逼られて物を別つこと有事なきを末摩と云と

有

これや尺八ぼんのうの

尺八は壹尺八寸に竹を伐たるものにてむかしは樂器にも用ひたるよし河海抄にみえたり源氏物語末摘花の卷にさくはちの笛とあり釋氏要覽に煩惱に百八の數あるゆゑそれを除かんために珠數の玉をも百八のかすにつらねて佛號を唱ふるよし見えたり爰には尺八を百八と通はして作れり

閨の契りは一夜ぎり

一節截といふ笛を尺八の事とすれども是は洞簫といふ笛の類にて尺八とは別なりといへりこゝも一夜を竹の一節にかよはしたり

○壽門松

新町齣

筑波根のみねよりおつる瀧のしら玉ひいふうみいよ「つくはねの峰よりおつるみなは川戀そつもりて淵となりけるといふ後撰集にいでたる陽成院の御製と「龜の尾の山の岩ねをとめて落る瀧のしら玉千代の數かもとよめる古今集の紀のこれをかの歌とをとり合せて枕にかけり本歌の筑波根はつ

くば山のみねのことなるを女兒のたはふれにはごいたにてつくはねのことにとりあはせたり此はねといふものは胡鬼の子とも羽子ともいふものにてそれをつき上る板をはごいたとも胡鬼板ともいふ也

ひよくの羽子板むくろじも

比翼の鳥の羽とうけたりむくろじは本字は木鸞子と書俗につぶと云もの也鸞質ともいふよし本草綱目にみゆ

戀の二葉の禿松枝と枝とをやり羽子も

禿といふ字は韻會に髮纖く長からずして禾稼の如しとあれば俗にいふしよぼく髮のこと也それゆゑ太夫につきしたがふ少女をかぶろと云ひならはしたる物なり蛻巖文集には雛妓といふ字をかぶろのことに用ひたりやり羽子の事は箕山大鑑にいはくはねつき正月の手すさび也是天職ともにくるしからずはつ春の夕つかた小づまかいどりてはね胡鬼板右の手のみにてさばきたるいとやさしげありたちむかひてはねをやりあひたるより外なしそも又程の久しきもさのみ見よからずやがてさしおく

べき也數をかぞへてひとりのみつくことゆのく
有べからずといへり是は寛文より延寶のころ迄の
曲中のさまを書たる所にいへり

千代も根引はたへすまじ

正月の初めの子の日に松を引てうゑかゆるを子日
すると歌にもよめり玉葉集小辨の歌にも「數しら
ず引る子日の小松かな」とたにも千代はこもる
をとよめり新町の太夫を松にたとへたれば身うけ
する事を根引にするといひならはしたり
かすみの袂虹の帶雲のうはぎをゆりかけて

これは太夫のよそほひをいふ也霞のたもとは續後
撰集通方の歌「さは姫の花色衣はるをへてかすみ
の袖に匂ふやまかせと讀たり虹の帶は詩學大成の
虹の詩に一條の綉帶天腰を束ぬと作れり又雲のう
はぎは人丸の集に「あまの川霧たちわたるたなは
たの雲のころものかへる袖かもとよめり

新艘つき出し出立はへ

むかしの遊女はおほく船にのりて客をむかへたる
物ゆゑつぎだしの遊女をあたらしき船にたとへて
新艘と書たるなるべしされど新造はよめのことを

もいへばそれより遊女の稱にうつりたるにても有
べし秋草に云人の妻を御新造といふ事むかしより
ありし事也嵯川殿中日記にて見えたりよき人は妻
をむかへるにはかならず妻の住居すべき家をあら
たに造作するゆゑ御新造ともいふ也ある説に船を
あらたに作りたるを新艘といふて祝ふこれになぞ
らふるといふは非なりといへり出立ばへは衣裳を
着かざりて外へ出たるがはへありて一きはうるは
しく見ゆるといふ事也源氏物語にはいではへとか
けり

うさをも芥子のべに鹿子ごくざいしきの越後町

冬としのうさをも消すといふ事を芥子にいひかけ
たり芥子は至つてちひさきもの故佛書にも須彌を
芥子に納るといふたとへありてこまかなる鹿子を
けしかのこともいふ也かのこの事はいせものがた
りに「時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこま
たらに雪のふるらんとといふ歌有て鹿の子まだらと
は鹿の子の背にむらく白き毛のあるに富士の雪
の斑なるをたとへていふよし古意に見えたりそれ
よりくゝ染にする事をゆひ鹿子とはいふ也極彩

色の繪といふことを越後町に云ひかけたり

三筋にみつの春立ば

くるわの三筋町にみつの春の立といひて三の字をかさねたるなり正月を三の春といふは年の始時のはしめ日の始なりと玉燭寶典に云へり

やりが前だれあかねさす天も酔たり人も酔ふ

箕山大鑑に云香車はひとすぢにむかふへゆくゆゑに異名を鍵といへりこれになぞらへてやり手を香車といひ來れりされども此名目ことふりたれば今は遣女と云べしあかねさすは赤き光りのさすといふ事也新古今集管家の御歌に「あまの原あかねさし出る光にはいつれの沼かさえのこるへきとよませ給へり天も酔たりとは和漢朗詠集の文に春の暮月々の三朝天花に酔りと作れり是は桃の花をいふなり

春しりそめて七つ屋の藏の戸出る鶯茶の

玉葉集定頼の歌に「としふれとかはらぬものはうくひすの春知りそむる聲にそありけるといふ歌と谷の戸出る鶯とよみたる歌とをとりあはせて世話事におとしたる所例の平安子が妙作也

おろせの風とも見へぬ

箕山大鑑器財門におろせはもと駕籠のりものゝ事もまた乗物をかく疋夫をさしておろせともいふとかけり

五器さげるすいさうと

下學集には御器と書てもとは貴人の供御の飯器のことなるを下さまの飯椀の事にいひならはしたり古き名物の茶碗に尼御器といふも有書言字考には御器又定器椀それをさげありくは乞食のさまを云瑞相はもとめでたきありさまをいへど俗語にてはかやうの所にも云ならはしたり

てゝござまはかくれもないいしんじよ也

いしんじよは石丈とかいて石のごとくかたき人といふこと也丈は丈夫といふ事にて男の通稱也

うば玉のくろはぶたへ

うば玉はくろきといふまくら詞也

千兩にするは三つ羽の征矢

みつばの征矢とは金まうけることが矢のごとくはやきといふことなり

かづくふとんのどんすよりむりやうの事ぞ思はるゝ

緞子どんりゅう五絲ごしみな唐織の名也爰は五絲を無量といひかけたるなり

金つかふて髪きらせた

箕山大鑑に云傾城の髪きること心中の其ひとつにして近代はなはだもつて盛なり其はじまる所播州室の遊女宮木といひし女より起れり醍醐の中納言顯基卿これを愛し給ひて都に侍りけるがいかなる事か侍りけんすさめられ奉りてむろに歸りぬある時中納言の家人西國より京へのぼるをうかいひ見て髪をおしきりてみちのくに紙にひきつゝみその紙に歌を書たり「つきもせすうきを見るめのかなしさにあまとなりても袖そかわかぬ」と書て船になけ入たるよし撰集抄にもせたりこれ遊女の髪切たる濫觴也是は顯基卿の心のうつろひたりしをうらみ奉りて切たる髪也と云々又云傾城の髪切る事此ごろの事と計り思ふべからず二條あたりの人の所持したる屏風に傾城遊翫の圖を書たり是狩野法印永徳が筆也此繪に傾國あまたあつまり酒宴する内にみじかく切たる髪を押しだしたる傾城尺八ふく所をかけり振袖ならば禿にも見まがふべけれ

どしかもふり袖に非ず禿はかぶろにてかたへにあり是永祿天正のころにもかきたるにや繪本をもつてこれをかゝば猶以て久しかるべしかゝる舊例あれば髪をきる其こゝろはかはるといふとも古風をまなぶを豈風流なしといはんや

瑠璃天狗卷之三終

瑠璃天狗卷之四

○神靈矢口渡 渡守嗣

可愛らしいといはふか

可愛の字は日本紀神代卷一書に伊弉諾伊弉冊の二神^みみとのま^なくばひしたまふとき^な妍^な哉可愛少男^{をとこ}をとのたまひしよりはじまりたる詞にて男女のあふこ^をとを字の聲にて可愛といふ也

思ひ亂るゝいとすゝき穗に顯はれて

糸のやうなるすゝきが穗に出れば花すゝきとも尾花ともいふ也いと薄の歌は夫木集長方「すかるふすくるすのをゝいとすゝきますほの色や露や染らんとありまたすゝきの穗に出ることをよみたるは古今集仲平「花すゝき我こそ下に思ひしか穗に出て人にむすばれにけり

保養がてら

保養はたもちやしなふとよむ字にて温公通鑑にも疾いまだ全く平かならざれば保養をもつはらにせ

んと欲すとあり

琥珀の塵や磁石の針粹もぶ粹も

琥珀といふ石は松脂土中に入て千年にして此石となるよく芥を拾ふと本草綱目にするせり磁石は字彙に石にして鍼を引べしと有和名はりすひいしと云此二ツの石はちりをもはりをすひつける物ゆゑお舟が義岑公をつけまはす姿にたとへて吸と云字を粹と云字の音にいひかけたる也

ふ肖と思ふて下さんせ

不肖は文選の註に不才を謂也と有て知恵のなき事成を俗語にてはめいわくながらといふやうの詞につかひ來れり是は風俗通に子を生て父母に似ざるを不肖といふとかきたる義にて似あはしからぬ事なれど、云心に用ひたる成べし

日影の木々も花さけば岩のはざまの溜り水

影の字はあやまり也陰の字を書べし岩のはざまは岩のあひだなり

さはらで落る玉ざゝのあられもないが戀路也

源氏ものかたり品定の所に女のさまをいふとて折らば落ぬべき萩の露ひろはゝ消なんとみゆる玉ざ

さのうへのあられなどのえんにあへかなるすき
すきしさのみこそおかしくおぼさるらめと書たる
詞をよくとりなしたり

義岑公も稍舟の否にもあらず

古今集大歌所の歌「もかみ川のぼれはくたるいな
舟のいなにもあらず此月はかりとよめるをとりた
り否にもあらずはいやにてもなしと云心也

じつとしめたる手の内は

神代卷一書に陰神すなはち陽神の手を握りてみと
のまくばひすといふこと有佛書にては俱舍論に夜
摩天は纔に抱て嬌をなし都史多天は但手を執によ
ると有

戀の錠前情の要

情の要は扇のかなめにたとへたる也桃華蕊葉扇の
所になめは蝶鳥をかねにてうちて是を用ゆと有
互にいだき月草のうつろひやすき色糸の

月草は露草のこと也むかしは白き衣に露草の花を
すりつけてもやうとしたるに藍色なる故色がうつ
りやすき也古今集よみ人しらすの歌に「月草に衣
はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬともと讀

りまた同し集に「よの中の人このろは花染のう
つろひやすき色にこそ有けるとも有この文句は
此二首の歌にて作れる也

ぬれの糸口綻び口吸付引付

はころぶは俗にふくろびると云詞也遊仙窟に腰支
一たび遇て勤ぬれば心の内百の處傷む但苦口子こ
とを得ばあまたの事は承り望ますといふ詩あり貫
之の土佐日記にもたゞおしあゆのくちをのみぞす
ふこのすふ人々の口をおしあゆもし思ふやうあら
んやとたはふれてかけり

普請の結構

普請はあまねくこふといふ字にてもと出家よりい
ひ出したる詞也百丈清規普請の法に力を均しくす
る也と有てあまねく人の多力をこひえて堂寺など
を建ること也今俗家に家を造作する事を普請と
いふはあたらぬ事にてかの出家の建立のことより
とりちがへたること葉也結構は文選靈光殿の賦に
其結構をみるに規矩天に應ずと有て李善の註に結
は交る也構は架する也と有さまの材木をとり
ませてくみ上ることをいふ俗に花美なることを結

構といふは少しあたらぬこと葉なり

跡にしよんぼりほいなげに

しよんぼりはそぼりといふことにてこまかなる雨をそぼふる雨といふに同じ伊勢物語に雨そぼふりと有雨にぬることをもそぼつといへばしよんぼりは身すばらしきすがたをいふ也

手著もしらぬ海中に

たつきもしらぬとは俗にとりつきどころのなきといふ心なり海中はうみの中をいふ也海をわだづみともわだともいふ心は海は舟にて渡るものゆゑわたるといふ字の心にていへりこゝは古今集よみ人しらすの歌に「をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶこ鳥かなとよめるをとりかへて用ひたる也

楫なきお舟が物思ひ

新古今好忠の歌に「ゆらの戸をわたる船人かちをたえゆくへもしらぬ戀の道かなとよめる歌の心をとしたり

相圖の狼烟を上ふか

のろしを狼烟とかく事は酌會に烽火に狼の糞を用

ゆれば烟たゝちに上りてあつまりてちらず風ふきても横になびく事なしといへり

惡寒發熱

惡寒はぞつとする事發熱は上氣することに譬へていふこの語はもと風邪にてさむけたち熱の出ることにて傷寒論にあまたいでたり

いふて水棹や詞の楫

水棹は舟のさほ也お舟といふ名によりていふてみるといふ事を水棹といひかけ詞にてあしらふことを詞の楫とつゝけて舟の縁語をよく續けたり

渡に舟と六藏は

法華經本事品に其願ひを充滿せしむること渡りに船を得たるがごとく病に醫をえたるがごとしとあり

かくて時刻もひさ象の

時刻の久しくなるといふことを久かたといひかけたり久方といふことは空といふ字の枕詞にて天はいつまでもかはらぬものゆゑ久しき方といふ心なるよし燭明抄にしるせり今こゝにひさ象とかきたるは續日本後紀に匏象ひさがたの天といふ事有によれり天

のかたちのまろきをひさごに見たてたるなれば匏象といふ心也と冠辭考に書たりこゝは此説によりて書たるなるべし

廿日ゐなかの月出て

廿日の月は亥の刻に出るなり

燈火消て眞の間

眞の字はあやまり也深の字をかくべし明惠上人傳記に深の間にて有にとかけり

びつしやり碎る芬盤

こゝにたばこ盆を芬盤と書たるは清客寄語に芬盤を唐音にて打馬高望と譯し芬吹を起紗里と譯せしによりりたばこは慶長の比阿蘭陀船にもち來りしより日本に弘まれり其はじめは阿蘭陀の崑崙兒が紙をひねりて筆のごとくにしたばこの葉をもみてかの紙のはしにつゝみてのみ居たるを見てこの國の貴賤となくこれをもみ覚えしよりやがて眞鍮銅などを以てきせるといふ物を製してあまねくのむ事になるよし羅山文集に見えたりまた元和元年六月烟草を吸ことを禁じ給ひしよし和事始にみえたり按するにこのたばこといふものは本草綱目に

は是をのせず漢土にてもあたらしき物にて芝峰類説には倭國より出るとしるし又一説に南蠻國に女人あり其女の名を淡婆姑といひしがこの女痰の疾を患ふること數年なりしにこの草を服して其疾の痰たるよりやがて此草を淡婆姑と名づけしとかけりこれによればたばこといふ名は和訓にてもなく蠻語にてもなくもとは女の名也しとしらるゝなり上にはわつと玉ぎる聲

玉きるは玉きはるの略語にて魂きはまる聲といふこと也死ぬる期のころをいふなるべし萬葉集に「我せこかその名いはしと玉きはる命はすてつわすれたまふなといふ歌も有て後々には玉きはるといふことを命といふ字の枕ことばとせり萬葉には魂極と書て玉きはると讀せたり

佛とも法共辨へず

報恩經に佛と法とのわかちを説て云佛は法を以て師とし佛は法に従つて生ず法はこれ佛の母佛は法に依て住すとけり

悶絶せしも

悶はもだゆると云字絶はたゆるといふ字にてもだ

えくるしみて息のたゆることも

大膽千萬な

大膽はきものふときといふ事にて千金方に遜思逸が心は小ならん事を欲し膽は大ならんことを欲すといひしよりいひ傳へたる俗語也

打擲

うちなげうつとよむ字にて物をうちつける事也

常々不埒な

埒の字は馬をはなさぬ爲に垣をゆはすと云こゝろにて我儘に成ことを云也

異見いふても歎いても

異見の字は續日本紀には意見と書りもろこしにも意見といふ書の名有て意はこゝろばせといふ字見は見識の見の字にてわが心におもふ存じよりをいふて人をいさめる義なり

一念發起もしたまひて

一念はふと心におもふこと發起はおこりおこるとよむ字にてふと佛法に歸依するの心おこる事をいふ發起の字は俱舍論にもみえたり

覺悟極めて

覺悟はおぼえさるとよむ字にて物を合點すること也

血汐に争ふ血の涙

血汐は血が汐のやうにわき出るをいふ血の涙は韓非子に卞和といふ人璞を楚山の中に得て厲王に獻せしかば玉人に見せたまふに石也といひしゆゑ卞和か足を刖せたまへりそれより後武王文王と三代の間其まことの玉なる事をしるものもなかりし故卞和かの珠をいだいて楚山のふもとに泣ゐたるが三日三夜にして涙盡てこれにつぐに血を以てすとなりこれはあまりになければ後には涙も盡て血の涙を流すといふこと也古今集哀傷の部素性法師の歌にも「ちのなみだ落てそたきつしら川は君か代まての名にこそ有けれと讀めり

ふ便といふも愚なり

不便の字は荒政要覽に老弱道路に堪がたき一つの不便也と有源氏ものがたりにもふびんなるわざ哉と有てたよりなくふかつてなることをいふ也それがかやうにかなしみあはれむ心に轉じたる也

釋迦如來が元服して

釋迦といふは天竺の五姓の一つにして氏也と釋氏要覽に有牟尼といふは名也智度論に釋迦牟尼といふ事を秦の世には能仁寂嘿といふと有て註に姓名兼稱する也といへり如來と云ことは成實論に如實の道に乘じ來て正覺を成也と有てまことの道によつて正しきさとりをなす人を如來といふ也元服のことは岷江入楚に禮記を引て天子の子は十二にて冠すと有てはじめて童形をあらためて冠下にかみをゆひ冠をきすることをいふ也元ははじめといふ義服は冠をきること也地下の俗にさかやきをはじめてゐることを元服といふは字義にあはざれども今の世には一統にいひならはしたることば也人を集る法螺吹立

螺は口にてふく貝のこと也佛家に用ゆる故法の字をつけてほら貝といふ也

村々の園をとくと

園むとは軍兵を以て其所をとりまくこと也左傳公羊傳などにも宋を圍む鄭を圍むなどいふ事あまた有かこみをとくとはとりまきたる軍勢を引とることなり

漸抱を振上て

たいこのぶちを抱といひ琵琶のばちを撥といふ也ぶちと云はばちといふ聲のはひふへほにてかよふ也領巾磨山の悲しみも

松浦さよ姬が夫をしたひし故事也比禮振山は肥前の名所なり萬葉集の歌に「遠つ人まつらさよ姬つまこひにひれふりしよりおへる山の名とよめり匹夫め待と呼かけられ

論語に匹夫も志を奪ふべからずと有て集解に匹夫微也といへども其志を奪ふべからずといへりこゝにて匹夫めといふはいやしめていふ詞なり

飛で火に入夏の虫

符子に其味きを安んぜずして其明かなるを樂しむはこれ猶文蛾の暗きを去て燈に赴て死するがごとしといふ故事によつていひ傳へなるたとへにて火とりむしがおのれと火に入て死するにたとへたる也

力一ぱい牛頭馬頭が

十王經に路を引牛頭は肩に棒を挟み行を催す馬頭は腰に叉を擎ぐと有て牛の頭馬の頭の獄卒が亡者

をさいなむさまなり

觀念と

觀はとくしんする事念は口へ出して物をいはずし
て心にこたへてゐる事也

お怪我はなかつたか

恠瑕と書が本字也諺草に云俗におもひよらずして
疵を被る事を恠瑕といふとあり恠はあやしむとよ
み瑕はきずとよむ字なり

水破兵破の二つの御矢

盛衰記に水破兵破のこと有て賴政の水破といふ矢
は黑鷲の羽にてはぎたる矢也といへり

魂魄はれいゝと

魂といふたましひは死すれば空にあがり魄といふ
たましひはめいどにゆく也三體詩に魂は冥漠に歸
し魄は泉に歸すと作れり冥漠はそらの事泉は黄泉
とて地の下のことなり

官軍をかり集め朝敵を亡して

官軍は天子の御軍勢をいふ朝敵は天子へ敵たふも
のをいふ也

松明挑灯きらめきて

松明は和名抄に續松とかけり勢語古意に云松の秀
を物にてまとひつぎてたくゆゑにつぎ松といふを
音便にてついまつと唱ふるなりたいまつとはたき
まつといふ訓にて火をたく松といふこと也伊勢物
語についまつの墨して歌の下句をかきたるとはた
いまつのもえさしにて書たる也扱挑灯の事は秋草
に云ちやうちんといふこと古代にはなきもの也い
にしへは夜行に松明を用ひし也またあんどを用
る事も有し也夜行に持せし物なるゆえ行燈とは書
なり鎌倉年中行事に松明行燈の事有其ころまでは
てうちんはなかりし也蜷川記に挑灯は籠灯か本也
と云こと有これは永祿天正の比なるべし其比はす
でに今の世のてうちんも有しとみゆ籠灯といふも
のは行燈のさやのごとく丸きかごをさやにして上
に横木を取て提るやうにしたる物なり今も奥州出
羽などの民家には用ゆる也是を本にしてたゝみて
うちんを仕出したる也と有

待ども／＼沙汰せぬは

杜詩全集に江河の濁れるを沙汰すといふ詩有註に
沙汰は篩に沙を貯へ其細かなるを去て其大なるを

存するを沙汰といふと有是をみればいさごをゆり
わけることにたとへたる字也俗に案内するやうの
事をさたするといひうちすておく事を沙汰なしな
どいふはこれより轉じ來りたる詞にてものをしか
とこととはる事を沙汰するといふ成べし

空に雷電霹靂

雷はかみなり電はいなびかり也はたゝがみは鳴は
ためく雷と云事也

水主棹取

水主はかこ也棹取はかちとり也

比興なり者ども

比興の字は詩の六義の内にて比はものをたとへる
こと興はものを見たてることにて二字ともにもの
をよそへる心ゆゑしかとせぬ事を比興といふ成べ
し

虚空をにらんで

虚も空もむなしといふ字にてあてどのなきこと也

廣言吐し

廣はひろしといふ字にておほきなることをいひ出
す也

膽礬色

膽礬といふ石は色の青き石なる故顔色のまつさを
になることをたんば色と云也

猶も吹來る暴風

はやてともいふにはかにふきくる大風也

底の藻屑と

藻の波にくだけてちりぐに成たるを云

中にも強氣の

強はつよしと云字にて氣のつよきこと也

甲冑を帶したる

周禮の註に甲は今の鎧なりと有韻會に冑は兜鍪也
とあり俗に冑をよろひとし甲をかぶとゝするはあ
やまり也又秋草に云古代は鐵砲なくしてたゞ矢軍
のみなりし故甲冑の製も矢ばかりをふせぐやうに
こしらへ煉草をもつて割小札につくりし也たまた
ま薄金にて製したること珍らしさに源氏重代の鎧
を薄金と名付て稱美したる也天文十二年に鐵砲わ
たりし後は鐵砲の勢矢よりは烈しきによつて甲冑
の制かはりて札を鐵にて作りあるひは胴を鐵のべ
にして鐵砲を防ぐ事をおもとしたりと有甲冑を帶

したるとはよろひかぶとを著たるを云也

○嫗山姥 第二齣

松浦がたひれふる山の石よりも

まつらさよひめの望夫石となりたることまへに註

す

女護の島にことならず

女護島のこと書言字考に古老傳へて日本東海の中に在といひまた羅刹國といふ所を女護島といひ傳えたるよししるせれどいづれもより所なき説也按するに後漢書の東夷傳に海中に女國ありて男なしその國に神井ありこれを闔きて子を生むといへりまた金樓子には女國に池ありこの水を浴ればはらむとあり又文献通考に女國は扶桑の東子里にありて鹹草を食ふ葉邪蒿に似てにはひ香はしく味はひ鹹しと有この鹹草といふものは八丈草ともあしたぐさともいひて八丈の島に生ずる物なりそれゆゑ今の八丈の島をむかしの女護の島也といふ説も有不求人全編には女人國とかきたり

いさめられてもいさめぬ顔

上のいさめられてもは諫むるといふ字にて異見すること也下のいさめぬといふ詞はしめりかへりて勇みすゝまぬこゝろ也

袖は涙のかはごりを

涙の川といふことを皮骨柳といひかけたる也これは皮籠と骨柳とがひとつになりたる名也皮籠は皮にてはりたる竹の籠のことこりは柳の枝をくみあはせてこしらへたる物ゆゑ骨柳とかくなり

三味線もとのへ置

三味線とかくはあやまり也三線とか三絃とか書べし此もの漢土にては楊外庵集に出て今の三絃は元の時にはじまるといへり春臺獨語には玩咸のかたちの變じたる也といへり玩といふものは拾芥抄にもいでゝいにしへ日本にも有たる物と見えたり三才圖會に晋の玩咸が彈せし琴の類なるものにて琵琶に似て圓なるものなりといへり近代の三絃の事は箕山大鑑第一翫器の部に云三絃のおこりは永祿年中に琉球國よりこれをわたす其ときは蛇皮にてはりて三絃なる物也泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲人に人のとらせたりけるをこの盲人よろ

こびてしらべこゝろみけれどひき様をきかざれば
音律かなはすこれをこゝろくおもひて長谷の觀
音へまうで一七日參籠して彈やうの事をいのりし
にあらたなる靈夢ありて階を下るときに大中小の
糸三すぢ盲人が足にかゝるこれを取り三筋の糸を
かけてひくに無盡の色音いでたりそれより三すぢ
のいとにきはむる故に三味線となづけたり其みぎ
りはむさとひきてなぐさみとせしにしばらくして
虎澤と云し盲人これを彈かためて後世につたへし
也と云り

こきう

書言字考に胡弓と書たり箕山大鏡にむかしの小弓
は弓の紐をいたくはりてひきもちひたり八橋檢校
みづから考がへて手づから弓をなめらかに長く削
りてこしらへたりつるを引はらずゆたくとゆる
やかにのべて無名指にてひくやうにかけたり其色
音昔にかはりて各別也きと有

あはれむかしはせんせいの松の位も冬がれし

新古今菅家の御歌「道のへの朽木のやなき春くれ
はあはれむかしとしのはれそするといふをとれり

せんせいはまつたくさかり也と云こゝろなり唐詩
選に言を寄す全盛の紅顔子憐べむし半死の白頭翁
とつくれり松の位のことは秦の始皇松を大夫に封
じたる故事あまねく人のしりたる事なれば註せず
しかるに今の入松の位といへば大夫職のことゝの
みおもふがおかしければちなみに書つく藻鹽草に
松の位は三位也と有また重家の集に刑部卿三位し
たりしにいひかはしといふ事書有て「ちとせま
てさかへ行へき君なれば松も位をゆつる也けりと
いふ歌あり

ついちのかげにやすらへば

伊勢もの語についちのくづれといふこと有今のへ
いの事也築地と書はあやまりにて築土と書が本字
也土をひちと調するゆゑつきひちといふ事にて土
をきづきて堀としたるを云也

車よせより立聞ば

大内の御車をよせらるゝ所にて門内の玄關といふ
やうなる所也と書言字考にいへり

あの小歌は吾身くるわにありし時

箕山大鏡に小歌といふはむかしの白拍子のうたひ

し今やうといふものを縮めたる物なり中ごろ泉州
堺の住人高三氏隆達といひしもの三十一字の和歌
にみづからふしをつけてうたひたるこれいよゝ
小歌といふ名目になへりすなはち隆達ふしとて
今も世に残れりと有くるわは廓の字にて城のそと
くるわのこと也難波の新町京の島原などを廓とい
ふは市中の外に一かまへ有所ゆゑくるわと云也漢
土にてくるわを曲中と云よし虞初新志にみゆ
作り出せしかへせうが

替唱歌と書て今いふかへうた也

出ほうだいに聲はり上

出傍題とかくべし傍題とは歌をわがまゝによみて
題にはづるゝこと也八雲御抄にくはし理にあたら
ぬことを口より出るまゝに云事を譬へたる詞也
男ちく生人でなしあか耻かゝせて

人をいやしめて畜生といふことは涅槃經に身丈夫
也といへ共おこなひ畜生に同じと有また隋書に煬
帝の淫佚なることを父の文帝の詞に畜生也とせめ
られたること有人でなしは人外非人など云におな
じあか耻とは用捨なく耻をかゝすを云也

そなたの物ごしつまはづれ

物ごしといふ詞は源氏ものがたりに所々ありてみ
すなどをへだてゝ聲ばかりきくことを云て物へだ
てごしのこゑといふ事也それをあやまりて俗に人
のもののいひを物ごしと云也つまはづれは手足の爪
のさきまでいやしからぬといふこと也

一河のながれも他生の縁

ひとつながれの河の水をくみあふ事も此世ならぬ
前世の縁なりといふこゝろ也この詞は平家物語に
も見えたり篠崎維章の和學辨には此語を聖德太子
の明眼論にて見出せしよしかけり

うき河竹の傾城

むかしの遊女は江口神崎などにて川船に乗たるも
の故かはたけ或はながれの身などいひならはした
り

よなゝかはる大臣の

遊女の客を大臣といふ事は古事談に云小野の宮の
大臣香爐といふ遊女を愛し給ひけるが其時また大
二條の大臣も此香爐を愛したまへりあるとき小野
の宮の大臣香爐に問てのたまはくわれと髻とはい

づれを愛するやなんちすでに大臣二人を通はせり
とのたまへり二條の大臣御髯の長かりし故髯との
たまへりし也と云これをみれば後世に遊女の客を
大臣といふことより所ありと云へし

とうり天の中二かい

初利天は欲界の六天の中にして須彌山のいたゞき
にありといふこと諸天傳に出たり

木やりでもかんどでも

大木をもちほこぶとき歌をうたひて力をつくるを
木やりといふ淮南子に大木を擧るものは邪許とよ
ぶ重きをあぐるに力をすゝむる歌也と有も木やり
のこと也

そりやこそけんくわがはじまつた

文選蜀都賦に誼譁鼎の沸かごとしといへりこれは
やかましくにもかへることをいふ也日本にて人と
あらそひのゝしることをのみけんくわとあやまれ
り

神子山伏にうらやさん

神子はめかななぎとて神につかへいのりなどをす
るものを云梓みこのことにはあらず山伏はもとは

行脚する出家を稱することば也野にふし山にふす
といふ心にて山伏とよみたるうた有夫木集に「山
ふしのすかたけとをきかは衣心こほくも身にそは
ぬかなとよめり職人歌合には今の修驗者のさまに
よみたり其歌は「せんたちのさんきさんけは我や
せんいたの目につくむしのした哉うらやさんは陰
陽師の算をかきてものをうらなふを云書言字考に
占算とかきてうらやさんと讀ませたり

せつたかたしにげたかたしわらんづがけてくるも有
雪踏とかきてせつたとよむが本音也書言字考に天
正年中千の利休はじめてこれをつくり雪の中に路
地をふむにたよりすといふ説をいだせり三齋筆記
には三齋公のはゝ君雪の茶の湯にはじめて思ひよ
りて製せさせたまへりしといふ事見えたりげたは
あしだの事にて足踏とかいてあしたとよみたるを
後に下踏とかきかへたる也かたしは片足の略語な
りわらんづは藁履といふことをのべていふなり
だい所からざしきまで

禁裡の御膳をとゝのへる所を臺盤所といふより轉
じて下々の食物をとゝのへる所をも臺所といひ來

りし也源氏物語末摘花のまきに御だいとあるは膳のことなり

水たごたらひにこけかゝり

擔桶の字をたごとよませたれど是は宛字也もと田へ水をくみ入れるうつはものにて田子がになひてゆくものゆゑ其まゝに此ものをたごと名付たる也たらひは本字は鹽の字にて文選の註に水を貯はふるうつはものにして手を淨め洗ふもの也と有たらひはてあらひの略語なり

神武以來のりんきいさかひ

神武天皇は人皇のはじめにて鸕鷀草葺不合尊の第四子にて御母は玉依姫也以來はこのかたとよむ字なり格氣の格の字はしわきこと也わが夫を人のけさうするをしはくねたむこと也いさかひは息逆ひの略語にて人と息せはしくさからふ心也

跡かたもないあかうそ

跡はあしといまるといふ詞の略語にてしかと目にかゝる程しるしの有ことを云かたは形の略語なればこゝはあともかたちもなきといふ事也赤うその赤の字はもと心の臓は色あかきもの故まことの心

を赤心と云丹誠をぬきんづるといふも丹の字はあかしとよむゆゑこれも誠の心をいだしてと云こと也されば衣裳のつくろひなき事をあかはだかといふがことぐうそに相違なきといふことを赤うそといふなり

我身に秋風立ぬれば

秋といふ字をものを飽ことにいひかけたる也續千載集良信の歌に「人とはで年ふる軒のわすれ草身を秋風に露そこほるゝとよみたるもわが身を飽たる事にいひかけたる也

男のざんげ

慚愧と書て二字ながらはちといふ字也阿含經に慚と愧とを二つの法とたてこのふたつの法なければ父母妻子尊長をもわかつた人間ながら畜類とひとしときたり

定か誠か

定はものゝさだまること成故しかとしたることを定といひしかとせぬことを不定といふなり

弓矢神

八幡宮を申也謠曲に弓八幡といふも弓と矢と幡と

三つの軍器をならべ八幡宮の御神徳をのべたるころにて此謠をゆみやはたとなづけたるよし惠南が謠曲拾葉抄にもしるせり

頼光様をざんそうし勅勘の身と成給ふ

讒言をかまへて奏聞せし故勅諛にて勘當の身となりたまふといふこと也讒言をさかしらごとゝよむなり奏聞とは天子へ申あぐることも勅諛は天子のおほせつけらるゝ御こと葉なり

エ、おとましい

あいうゑをと五音通するゆゑうとましいといふことををたましい共いふ也

名字のはぢをすゝがんと

秋草に云假名といふを今の世に苗氏といふ假名と書はあやまり也家名と書べし今昔物語第八に上總守平惟時朝臣といふは貞盛か孫にてかくれなき兵なり其郎等に家名はしらす字は大記といふもの有といふ事有天下の武士源氏も平氏もいくらも有たゞ源の某平の某とのみ名のりてはまぎらはしくて家筋わかれざるゆゑおのゝ其出る所の地の名あるひは領所の地の名を氏の上にそへてなのりて

その家すぢをわくる也されば是を家名とはいふ也先祖は其家の苗なる故に苗氏ともいふと有さればこゝも名氏と書は誤にて苗氏と書べき所也

うんでいばんりと耻しむる

雲泥萬里眼今窮といふ橘正通が詩あり雲は天にあるもの泥は地にあるもの故に上下のちがひを雲泥萬里といふ也白樂天の詩にも會面雲泥をへだつとつくれり

一騎當千の兵

涅槃經に人王大力士あり其ちから千にあたる故にこの人を一人當千と稱すとありこれより出たる詞也騎は馬にのりたる武者を云なり

鎧通しおつ取

よろひのうへにさす小刀をいふ也武備志に解手刀と書てよろひどほしと譯せり

伍子胥が吳王を諫めたる

伍子胥の事まへに註す

項羽記信が勇氣にも

楚の項羽漢の紀信のこと史記漢書等にいでゝみな人のしりたる事なれば註せず

神變きたい勇力の

神變は諺草に云佛書にもとづきていへる詞也内に天心ありて外に變動の相あるを神變といふと有あんずるに涅槃經には一念の中種々の神通變化をなすとあり仁王經には神變神通自成をなすと説りきたいは希代と書てよにまれ成勇力と云心也今一度人がいに生れ出

人界と書て此人間世界といふころ也

飛行通力有べきぞ

飛行は空中をとびありくこと通力は神通力といひてわが身の自由自在になる事也

無二無三にむらがつて

二も三もなきといふ心也法華經に無二亦無三と有新後拾遺集尊圓親王の御歌に「春はたゝ花とそおもふふたつなくみつなきものは心なりけり共よませ給へり

人畜類の右大將

人間ながら畜生同前のものといふことば也

正盛が家の子大田の太郎

花鳥餘情に家禮とは子の父をうやまふこと也他人

なれども子に准じて禮をいたすをば今の世にも家禮といひ來れりとしるされたりされば家禮を家の子と云も此心なるべし

おもふ敵をうつせみのからだは

空蟬とは蟬のこと也せみは時有てもぬけとなるものにてかたちはありながら内のむなしき物ゆゑうつほなるせみといふ心にてうつせみといふ也其ぬけがらをうつせみのからといふ故それを又からだといひかけたるもの也古今集のうたに「うつせみのからは木ことにとゝむれと魂のゆくへを見ぬそかなしきともよめり

たちまちやしやの鬼がはら

夜叉とも藥叉ともかく也義楚六帖に藥叉は天竺の語にてもろこしの詞には暴惡とも勇健ともいふ心也神鬼の類なれども福德殊勝にして諸天を衛り護るもの也といへり

○近江源氏先陣館 船長駒

比良の暮雲と賞せしも

近江八景の内の一つにて比良山の暮方の雪のけし

きを賞美したる詩歌あまた有
世をこぎ渡る船長の

渡世することを船をこぎ渡ることにいひかけたり
船長は船頭也

双紙に六道の切書て

草紙とかくが本字也草は草稿としてしたがきをいふ
也

入相の鐘にちりしく花ならで

「山寺の春の夕くれをきてみれば入相のかねに花
そ散けると云能因法師の歌をとりなしたり此歌は
新古今に入たり

くつまめ又人を譏らんすかいのと

かげごといはれてはなひるといふたとへ有はなひ
るはくさめする事也野客叢書に今の人噴嚏てやま
ざるものはかならず祝して人ありてわれを説とい
ふと有しかれば漢土にも云ならはしたることわざ
成べし

兵法の御鍛練が

鍛は鐵匠の刀をきたひてうつこと練はものをねり
にねりて念を入るゝ事也後漢書の註に鍛練は成熟

なりとありてものゝとくととのひたることをい
ふ

御手練の程を

これもよくねりとゝのひたる手ぎはといふことな
り

竹刀しなへの用意もなし

竹刀は竹を刀のなりにこしらへたるもの也しなへ
は鞘の字を書てしなひかはしなひたり鞘草しなひかはしなひたり鞘竹などゝもいふ竹をひしぎ
て草の袋に入れ刀のかはりにして劔術のけいこに
用ゆうちあふときしはるやうに製したるものゆゑ
名をしなひといふなりそれをあやまりてまたしな
へと唱へならはしたり

納戸へ入や

をさむる戸と書て雜物を入おく一間を云禁中に納
殿とて諸國より貢するものを入おかせ給ふ殿あり
それにかたどりて名付たる物なるべし

亂杭にくゝり付

川ばたのみづよけにうちたる杭をいふ長短をそろ
へすみだりにうちたるゆゑらんくゝといふ也
としやおそしと

としは疾といふ字にてはやくこと也はやくゆかん
おそくはなきかといそぐことをいふなり

風がないだら石山へ

風の和らぐ事をなぐといふ也歌に朝なぎ夕なぎな
どよむみな和の字也すべてやはらか成ことを和
やかといふも同じこゝろ也

佐々木が謀の醜しやと舌を卷て物語

漢書の楊雄が傳に禮官博士其舌をまいて談らずと
いふ事ありおそれてものをいひ果さぬことを舌を
まくといふ也

薄の穂にもおちるとやら

諺草にはく落武者になりては臆病ごゝろまして
草木までも人と見なして恐るゝといふこと也晋の
謝玄といふ人軍立して賊の大勢をうちやぶりてこ
れを追ふ賊の兵のがれさり程へだゝりて後八公山
の草木のうごくを見て謝玄が軍兵おひきたるとお
それしことありまた日本にても平家の軍勢ども水
鳥の羽音におどろきて敗北せしなどみな諺のこゝ
ろのごとし

跡に女房がくしゝと

屈の字を源氏物語にくんじてとよませて心の屈す
ることに書り俗語のくしゝも思ひ屈する心なる
べし

一七日の追夜

釋氏要覽に人亡して七日に至るごとにかならず齋
をいとなみて追薦す是を累七日といふと有中陰經
に中有は壽を七日に極むと有て七日ゝに中有の
身がいろゝにうつりかはりて七七日にしてそれ
そのの生をうくるゆゑことに大切にして弔ふべき
よりいへり追夜は書言字考に宿忌ともいふと有て
七日にあたる宵より追薦をいとなむことをいふ也
御あかしの火は有ながら

古今著聞集に仁王經をおこなひけるが御あかしの
火障子にもえつきて其夜やけにけりといふこと出
たりしかれば昔より佛前のもし火を御あかしと
いふと見えたり

佛果の爲と手をあはせ

果は因果の果の字にて餓鬼の果畜生の果などはあ
しき因果なれば佛の果を得るやうの爲にとむらふ
ことをいふ

涙は琵琶の湖にさゝ波よすることく也

近江のみづうみのかたち琵琶に似たるゆゑびは
のうみといふ也實業卿のうたに「よる波のひゞき
もたえぬよつの緒のすかたにはの海邊氷りてと
よませ給へり琵琶は絃を四すぢにかくるもの故よ
つのをといへばびはのことになるなりさゝ波は小
々波とかきてちひさき波のこと也

ひそく聲

密といふ字をかさねてひそくと云也

さん候

されば候といふことばをつめていふ也

粟津の汀に屯をかまへ

汀は水ぎは也屯は一かたまりかたまる事にて軍勢
をあつめて陣取するをいふ也

大將時政采配ふり立

また采幣ともかいて四手のやう成ものをふりて軍
勢をまくばること也采はとるといふ字配はくばる
とよむ字也漢土にては史記周の本紀に武王右に白
旄を乗て麾くとあり白旄は牛の尾にてこしらへた
るものにて和名をざいといふ故俗に物をさしづす

る事をざいをふると云も此心也

稻麻竹葦と取巻しが

稻はいね麻はあさ竹はたけ葦はあしのことにてい
づれもはへしける物なればすきまなくとりかこむ
事にたとへたるなり稻麻竹葦のごとしといふ事法
華經にいでたり

汝が五音は

宮、商、角、徵、羽の五つを五音のてうしといふ也

六穴よりほとばしる

眼と耳と鼻と口と前陰と後陰とを六つの穴といふ
也

七顛八倒

顛はくつがへるといふ字倒是さかしまといふ字に
て七の字八の字はつけ字にてこゝろなし

暴惡ぶ道の大江の入道

暴はあらしとよむ字也不道は道にそむけたること
をいふ也

阿修羅王の荒たる如く

法華經の普門品に阿修羅迦樓羅といふ語あり科註
に阿修羅は千の頭二千の手ありあるひは一萬のか

しら二萬の手あるも有あるひは三つの頭六つの手なるも有と見えたり是は佛入滅のとき佛の齒をうちかきて逃れたるものにて其時韋駄天に片時のあひだに追かけられてかの佛牙をとりかへされしものなり

おまへは天魔が見入たれ

天魔は第六天の魔王のことにて人のさはりをなすものをいふ

適我夫奇代の計略

奇代は宛字也稀代とかくべし代にまれなるといふ心なり

いふ間に取出す種が島

南浦文集に云天文十二年八月廿五日大隅國の内種が島の西村の小浦に異國の大船一艘漂よひ着船客百餘人あれとも其ことば通せずして何國の人といふことをしらす其中に明の儒生五峰といふものありこのとき西村の司に織部丞といふもの有てよほど文字を識たりければかの五峰と筆談してこの船は南蠻國の商ひ船なることをしれりそれより嶋のつかさ種ヶ島時堯と云人その船中を吟味し禪僧忠

主座といふ人を以て筆談せしむ彼船の頭分のもの二人あり一人を牟良叔舎といひ一人を喜利志多孟太といふ手に二三尺なるものをもてり是すなはち今の鐵炮也時堯値ひを限らずしてかのふたつの鐵炮をかひと其術を蠻人にならひ得たりまた玉藥の製法の事をば小臣の篠川何某といふものにならはしむこの時に當つて根來寺の僧杉の坊といふものはるゝ來りて鐵砲を求めしかば時堯其懇望ふかきに感じ津田監物と云者をして鐵砲一挺を杉の坊に贈り其上妙藥の法と火を放つ道とをしらしむまた時堯鐵匠數人をめして其器のかたちをみせ日夜鍛練して新たに是を製せんとするにその形はよほどこれに似たりといへども其底をふさぐ故をしらず然るに其翌年また蠻國の商人たねがしまの内熊野浦に來りけるに其中にさいはひに一人の鐵匠ありければ時堯天のあたふる所也とよろこひすなはち金兵衛清定といふものをしてその底をふさぐ法をならはしむこゝにおいてあらたに數挺の鐵砲を製せりその後泉州堺の商人橋屋何某種が嶋に一年滯留して鐵砲をたねんするの術をまなびえて

歸りしより畿内近國に弘まりけるとぞ此南浦文集
の説によれば鐵砲のことを種が嶋と云ひならはし
たるも其比よりのことなるべし

瑠璃天狗卷之四終

瑠璃天狗卷之五

○信州川中島合戦 配膳齣

葉公龍を好んで晝き刻め其眞の天龍を見て魂を失ふ
是龍を好むにあらず龍に似て龍にあらざる物を好
いはん

この故事は劉向新序に出たりむかし子張と云人魯
の哀公に目見えをしけるに哀公無禮也ければ子張
哀公の僕にいひ置て魯の國を去たり其詞にいはい
今君よき士を好み給ふと聞て來りたるに無禮のあ
しらひを仕給ふは葉公といふ人の龍をこのみたる
に似たりかの葉公日ころ龍のかたちを好みてある
ひは晝きあるひは木に刻み彩色などして龍に似た
りとしてよろこびしかば天龍これを聞て葉公か家に
下り頭を以て牖をうかいひ尾を以て堂に拖ければ
葉公これを見て大におどろきうちすてゝにげ去し
とかや日比このみし龍のかたちは其さまは似たり
といへとも龍の魂なしいま天龍を見てにげさりた

るは葉公まことの龍をこのむにあらず龍に似て龍
にあらざる物を好むなり今君よきさむらひをこの
み給ふといへどもかくのごとき無禮をしたまふは
是もさむらひに似てさむらひに非ざるものをこの
みたまふなれば此國を立さる也といひしとぞ

將の賢士を好む賢に似て賢にあらず少哉才賢の臣
今戰國のときに大將たるものゝよきさむらひをこ
のむものかの魯の哀公のごとくにして賢人にあらざ
るものをこのむとおなじ事也さればまことの才智
ある賢きさむらひはすくなきこと哉といふこゝ
ろなり

無念の敗北骨髓に徹す

軍にまける事を敗北といふは敗はやぶるゝとよむ
字北はつねには方角の北といふ字なれどもこゝに
てはやぶるゝといふ心になる也其わけは通鑑集覽
に服虔が云人陽を好んで陰を惡む北方は幽陰の地
也かるがゆゑに軍のやぶるゝをも北といふ也と有
骨髓は骨はほね也髓は其ほねの中のおぶらと云字
也徹はしみとをる心にて俗にほね身にこたゆると
いふ心なり

切所の細道より

切の字はあやまり也本字は太平記には殺所と書下
學集には節所と書て難所なりと註す

武略の鋭き

略ははかりことゝよむ字にて武略はいくさのはか
りこと也

かゝる奇計をなしけるぞ

軍法に奇計正計あり武備志に奇正虚實は兵家の樞
要也と有て正計はありふれたるはかりこと奇計は
思ひもよらぬ計を云也

間者を入て

間はすきまとよむ字にてすきまよりやうすをうか
がふものを間者といふ也

士卒のかけ引

士はさむらひ卒はひきゆるとよむ字にて足輕の類
をいふなり

秋の田面の月に嘯き薪を荷ふて山路の花を友とし
月に嘯とは田をかりに行ても月をおもしろく思ひ
て歌などをうたふこと薪を荷ふてとは山に柴など
をかりに往ても花をめてゝわか友だちのやうに思

ふといふこと也古今集の序にたきゝをおへる山人
の花のかげにやすめるが如しと書たる心をとれり
勘助が賤しきわざをしても世にへつらはす月花を
たのしむおもむきを云也

天命をたのしみ

いやしきわざをするも天道のはからひ也とおもひ
てそれをたのしみとして不義なることをせぬよし
也

攀贈張良でも

前漢書に攀贈高祖に従つて天下をさだめ功を以て
舞陽侯に封せられしこと見えたりまた張良も同書
に下邳の圯橋にて太公望が兵法を黄石公にさづか
り後に高祖の師と成て留侯に封せられしよししる
せり

弓矢八幡

八幡大菩薩は源家の氏神にして弓矢の守護神なれ
ば弓矢八幡も照覧あれ今いふ詞に違はじと云誓ひ
の詞也

廿四孝

孝子廿四人をあげて廿四孝といふこと日記故事に

見えたり

だいの間に

湯などを汲ために臺子を置たる次の間也庭訓往來には圍爐裏の間とあり

頭は雪

白髪になりたるを云也古今集康秀の歌に「春の日の光りにあたる我なれとかしらの雪と成ぞわびしきとよめり

祐筆衆にもすくない程の

祐の字はあやまり也右筆と書べし東かゝみ治承四年の所に大和の判官代邦道右筆す御書御判を加へらると云事あり又同六年の所に伏見の冠者藤原廣綱始て武衛に參る是右筆なりと有また木曾義仲が右筆大夫坊覺明と有をみれば頼朝卿の時代より武家の書役を右筆といひしことしるべし

おりしも床の倭琴

源氏河海抄に和琴は伊弉諾伊弉冊の尊の御時作り出さしめたまふよつてもろくの樂器の最上にこれを置く也あづまごとゝも云也鴨の長明の無名抄に和琴はもとは弓六張を引ならべて用ひけるを後

に琴に作りたる也と有今こゝにやまことゝいふものは今の十三絃の琴なり此十三絃のことを箏のことゝいふ也これはむかし命婦石川の色子といひし人筑紫の彦山にて唐人にあひてつたへはじめ宇多の天皇にさづけたてまつるが始也といへり此河海抄の説によりて是をつくし琴とは云也今の箏の手は寛文のころ筑後國の僧法水といふ人善導寺に住してつくしごとを學びしが後江戸にゆき還俗して八橋檢校に傳えしかば八橋檢校これをならひえて其節奏をあらためて三絃の曲を合せしよし和事始に見えたり八橋檢校は貞享二年に七十餘歳にて卒す墓は黒谷に在と云

おめす場うてぬ白書院

近世武家にて客に對面する所を書院といふはいにしへは大家にては主殿といひまた客殿といひ小家にては出居といふ是對面所也書院とは佛寺にて佛書を講ずる所也俗家にはなき事也しかるに太平記卷三十七に佐々木佐渡入道道譽が宿所のことをいふに書院には義之が草書の詩韓愈が文集とかけり思ふに鎌倉の時代北條一家はなほだ禪法を崇敬足

利尊氏もまた禪法に歸依して夢窓國師を師とせられければ上の好む所はかならず下これにならふ事にて禪法を學ばざるものなし故に其家居の内に書院を立佛書をよみ座禪する所とせしより後には書院と稱したがへし成べしといふこと秋草に見えたり

あからむ顔の櫨もみぢ

櫨は木の名にて秋はもみぢするもの也こゝは耻といふ字にかけてはづかしがるこゝろにもちひたり櫨紅葉のうたは夫木集に爲家卿「山さとの賤か垣ねの村竹にもりて色つくはしもみち哉とよめり

世尊寺やうのはしり書

世尊寺家の先祖權大納言行成卿能書のきこえ有て本朝三跡の一人なりしゆゑ子孫能書家と稱す數代の後行能卿、經朝卿、經尹卿、行尹卿、行俊卿などみな能書の聞えあり系圖は諸家傳につまひらかなり走り書とは俗に達者にかくといふこと也つれづれぐさに手などつたなからずはしりがきとあり狂文の綾の吳服

庭訓往來に狂文の唐衣といふこと有て註に狂文は

いろ／＼のうけもんあるを云といへり吳服はむかし吳の國よりくればとりあやはとりと云二人の織女來りてきぬをおりはじめしゆゑ吳服といふ也吳の字をくれとよみ服の字をはとりとよむなり

式臺ふかく

式臺は宛字也色代と書べし書言字考に色は顔色のこと代はかゆるといふ義にて顔色を常とかへてうやまひつゝしむ心也とあり

遠路の御光駕

駕はのりものといふ字光は人をほむる心也よつて人のわが方へ來るを光駕といふなり

御逗留

逗も留もとまるといふ字なり

隨て此小袖は

隨がつては書狀にもかく詞にてまづ何々といふ事をかいてそれに從ひてと云事にて俗に夫につきてと云心に遣ふことば也裝束拾葉抄に大袖はうは着也袖口大也小袖はした着也そで口大袖よりちひさしかるがゆゑに小袖といふとありこの上着下着といふは今下々にていふうはぎしたぎの事に非ずこ

の下着といふが下々の上着也其譯は上つかたにては又此上にうへのきぬとて禮服をめさるゝ故につねの上着を下着といふ也また秋草に小袖といふはすべてそでの下を丸くぬひたるを云袷にても綿入にてもひとへものかたびらにても袖の下圓きは小袖なれども今はわた入のみ小そでと云事に成たりと有

二つ引龍の

紋といふは衣服に五所に付るばかりをいふにあらず公家にてはすべて物のもやうを紋といふ也また武家の紋は旗幕などの目じるし也是保元平治の戦のころより始りし事也後世にいたり旗幕ならで衣服にも紋付ることに成しなり東山義政公の時代に白き綾またはつむぎなどを地をいろ／＼に染て御紋を紫などにて付たる事宗五記に見えたりされど御紋定まらずといふをみれば其ころは衣服は家のもんにかぎらずなにの紋にても付し也後世にいたりては家のもんの外はつけぬ事に成たりと秋草にしるせりふたつひき龍の龍の字は兩の字のあやまり也引兩ともいふこれは足利家庶流の衣紋にて今

いふ二つ引の事也
御主人の本丸か

城を築く法に長く方なるを利あらずとし小さく圓きを以て要害とするゆゑ本丸二の丸三の丸などいふよし書言字考に見えたり

御時分がよし料理／＼

貝原好古の諺草に云料理といふ字は晋書に出てはかりをさむるといふ義也今俗に食物を割烹ことを料理と云は居家必用に菟蓐を製することを料理すると有てもろこしにもこの詞あるにやとかけり按ずるにこの好古の説は非也こんにやくを製するものはかりをさむるといふ心也もろこしに食物を調味することを料理といふこと決してなし是は日本にていひつたへたる俗語なり

本膳の懸盤

本膳は二の膳三の膳とだん／＼すゆる故はじめに持いづるを本膳といふ也かけ盤はふちの高きあしつきの膳なり折敷のごとく平かにしてふちあるを手がけといふ類なり盤の字はすなはち今いふ膳の事也三光院内府記にも膳のことを盤とししたま

へり

珍物のやさい美味をとゝのへ

野菜は青ものを云美味はうまきあぢはひ也

配膳の侍

はいせんは膳をくはるといふことにて禮義をたゞして品々の物をまくばりすゆる心也

ひたゝれつくろひ

西三條装束抄に布直垂は諸大夫着すこれを俗に大紋といふとあり秋草にひたゝれは官服にあらず無位無官のものゝ服なるゆゑいにしへは官位なき武士も式正のときは素襖をぬぎてひたゝれを着せしとあり

ゑぼし八分にさし上

目八分といふよりすこし高くさゝげる事を烏帽子八分といふ也

官領ふうのすり足にて

官の字はあやまり也管領と書へし室町家にて天下の政をとりおこなふ人を執事とも管領ともいひたることは足利高經の時よりはじまるよし書言字考に見えたりもろこしにて詩に管領の字を用ひたる

に聯珠詩格の註に管は主當也領は統領也とあればものをつかさどりととりしめる心也

邊國の義

邊土とも邊鄙ともいふ心にてかたるなかといふ卑

下の詞也

老母ゑしやくし

會釋と書てこゝろにがてんしてあしらふこと也

隔心がましい饗應

隔心はこゝろにへだてのあること饗應はもてなし

とよむ字なり

殊に仰山な

ことわざ草に物の廣大なるは況山といふ山にたとふとよめり韻會に況は譬擬なりとしるしたり按ずるにこの諺草の説むつかしくてあしゝやはり仰山とかきて高き山をさしあふむきてみるやうなる事をぎやうさんといひならはしたる物也仰山といふ熟字は漢土には仰山禪師といふ僧有て仰山禪師語録といふ書もある也

近習衆か外ざま衆か

近習は禮記の註に天子の親しく幸する臣を近習と

いふと有日本紀にては近習の字をちかくつかふまつるとよませたり外さまは外様といふことにて君の手まはりのことにはあらずして外むきの事をつとむる役を云

女子共に給仕さする此母

給仕はそなへつかふとよむ字にてそれ／＼の事にめしつかはるゝ心也されど本字は給事とかいてもろこしの官名也事物紀原に給事といふ官名有て殿中に事あるを以て給事中と云と記せり

慇懃な給仕ではきうくつでたべにくい

いんぎんといふ詞はもとは物のねんごろにしんせつなる心也酌會に慇懃は委曲の貌とあり諺草に今俗に隔心なる事をいへるはあやまり也とかゝれたれど是もあたらぬ註なりものをねんごろにくはしくする氣味の字なれば丁寧すぎることをいんぎんと云也

辭宜は却てめいわく

辭宜は宛字にて時宜と書べし時のよろしきにしたがふといふ事にて無禮のなきやうにさしひかへる事也漢書に時宜に達せずといふ詞あり迷惑はまよ

ひまどふといふ心にて俗にこまり入といふ心也韓文に迷惑の胸を開くと云語有
楠正成が再來とも

再來はふたゝびきたるとよみて生れかはりといふこと也

玉を泥になげうち

寶となる玉を泥の中へなげすて世にめづらしき麒麟といふけたものをつなぎおきて犬のかはりにかふやうなるもの也といふたとへ也麒麟は獸の中の聖なりといふこと王充論衡にみえたり

かゝる英雄の御老母

劉郡人物志に草の精しく秀でたるを英といひ獸の上にたつものを雄といふそれゆゑ人の文武をかねそなへたるものをこれにたとへ才智かしこく人にひいでたるを英といひ勇氣の人にまさりたるを雄といふされば張良は英也韓信は雄也といへり今山本勘助は張良韓信をひとつにしたるさむらひ也といふ心也

ふ思議の御出

ふ思議は思ひはからずと書て佛經に出たる字也俗

におもひよらずと云心也

優曇花の咲たる悦び

法華經に其人甚希有なる事優曇華に過たりと云語あり疏には三千年にひとたびこの花現すれば金輪王出るとあり又楞伽經の疏にうどんげは世間の中において人曾てみるものなしといへりよつてあひがたくめづらしきことのたとへとす源氏物語若紫卷に源氏の君のたま／＼北山の僧都のもとへまゐり給ひたるとき僧都のよろこびてよまれたる歌に「うとんけの花まちえたるこゝちして深やまさくらに目こそうつらねまた按ずるに日本にては芭蕉のはなをうどんげといふこと東かゝみに見えたれどこれはもちひ難き説なりしるしのさかづき頂戴の望み

頂はかうべ戴はいたゞくといふ字也法苑珠林に佛經のことをいふとて肩のうへに荷ひあるひは頂戴すとかけるも經文をかしらにいたゞくこと也

長尾彈正の少弼輝虎

彈正はたいすつかさともむ字にて風俗をよろしくし内外のひがことをたいす官なるよし職員に見え

たり其したやくを少弼とて一人有やまとよみにす
ないすけとよむ也

天より受たる明命をかへりみ

大學に太甲にいはくこの天の明命をかへりみるといふ語を用ひたり天よりうけたる明かなるおほせつけをよく守るといふ事也かへりみるとはかの天命をまもることをとりうしなはぬやうにわが身に
かへりみるといふ心成よし四書蒙引にとけり

天の時地の利に叶ひ諸卒これに和し

孟子天の時は地の理にしかず地の理は人の和にしかずと云語に寄り軍をいだすに天にとりてはほどよき時節をはづさず地によりてはほどよきみちに出るを大將の心がけといふ也其天の時地の理を得たりといふとも多くの士卒のこゝろが打やはらがねば軍には勝たれぬと云なり

こしもと女のわらは

女童とかきてめのわらはとよむ也俗に小女郎といふほどの事なり

鶏をさくになんぞ牛の力を用ひんとは聖人のいましめ

五行の本に牛のちからと書たるは大なるあやまり也牛のかたと書へしこれは論語に出たる孔子の詞にて鶏はちひさき鳥なればそのにはとりを料理するに牛をれうりする庖丁はもちゆまじきとのたまへる也集解の孔安國の註に小さきことを治むるになんぞ大きな道をもちひんといふ心也とあり今この勘助の母に輝虎の給事せらるゝが其やうなる物なりとあざける詞なり

偽り表裏

口と心とうらおもての有こと也

けふのふるまひにあらはれ

このふるまひは舉動と書てたちふるまひのことなり

おじやらしませぬ

御座りませぬといふにおなじおば御と同しくじやとざと聲かよひらとりと五音かよふ也ゐなか人の詞におんじやり申といふもござりますと云事也

膝に味噌汁淵をなし魚よりおどろく嫁娘

淵をなすとは汁のひぎにたまること也これは詩經の鳶飛で天に戻り魚淵に躍るといふ句によりてか

やうにつゞけたるもの也この齣に大學論語孟子などの語をおほく引て用ひたればかやうの所にまで經書の語をもちひたること作者の力あらはれておもしろきこと也

狂人同然と

きちがひと同じことといふこゝろ也

重代のあづき長光

秘談抄備前長船物の系圖に長光初代と二代と二人有初代の長光は法名を順慶と號し左衛門の尉と稱す建治弘安正應のころの刀鍛冶也二代の長光は左近將監と稱し正應永仁正安乾元嘉元徳治のころの人也と有初代長光のうちたる刀にてあづきのきれしといふことさまぐにいひ傳へたる俗説ある故後にあつき長光と稱する也

ことを律にしらべかへ

琴の調子に呂と律とあり源氏ものかたりはきゝゝの卷にりちのしらべは女のものやはらかにききなとしてと有細流抄に律は秋を司とてうし也又律は陰なれば女のかた也ともいへりむなしくかれしはきゝゝを

帚木とは美濃信濃兩國の其原ふせやといふ所にあら木也遠くてみれば帚をたてたるやうにて近くて見ればそれに似たる木もなしと源氏ものかたり宗祇抄にしるせり帚木をはゝの事にたとへたる證歌は續拾遺集平の正家の歌に「しなのなるそのはゝにこそやとらねとわかはゝきゝと今はたのまん」とよめり

○松風村雨束帶鑑 うつば猿

八まん大名

神社考に縁起を引て筑前宮崎に八幡宮有むかし白幡四つ赤幡四つ天よりこゝにくたる故に八幡となづくといへり大名の字いにしへの書には見えず白川顯廣王紀に安元三年四月諸國の大名國役に應ぜずといふこと見えたり安元は高倉の院の年號にて平の重盛の育王山に金をおくられし時也さればそのころより大名といふ稱號はあることしるべし庭訓往來には關東下向の大名高家の人々とありこの往來の出來しは南朝のとき也今八まん大めうといふことは八幡は源家の氏神にて弓矢の守護神なれ

ば源氏の大名といふ事を八まん大めうといふなるべし

劔は箱に納め弓は袋に治るといふ

詩經の周頌に明に昭なる有周式て位にあることを序つすなはち干戈を戢めすなはち弓矢を櫜にすといふ詩ありこれは周公の亂を治めたまひて天下太平になりたるゆゑ干戈を箱にをさめ弓矢をふくろにをさめ給ふことを賛て作りたる詩なり

突もうら／＼とのどやかにござれは

うら／＼ははるの日のながくのどかなるを云菅家文草の詩の二月三日遅々といふ句を聖一國師の點にきさらきやよひ日うら／＼と附られたりまた西行の山家集に「ことゝへはもてはなれたるけしき哉うら／＼かれなや人のこゝろのといふ歌有これ

はこゝろのやすらかなるをいへり

太郎冠者

書言字考に往古いまだ官に任せざるものはたゞ太郎次郎と稱すとありて上にたつものを太郎といひ其次を次郎といひたる也さて冠者といふことは元服して間のなき若者をおほく冠者といへり木曾の

冠者義仲蒲の冠者範頼などもわかき人の稱なりく
わじやと云はくわんじやの字をつめていふなり
のさもの有かやい

書言字考の俗語に野風俗といふ字を出せり是はの
ふずといふことば也すべていやしき事に野の字を
つくるは漢土にも野鄙とかきてはいやしきことゝ
し野人と書いていやしき人とする事論語にもいで
たりこの方の俗語にもらといふは放蕩なる若も
のをいへりまた家に畜はぬ猫をのらねこといふは
仲正の歌に「眞葛原下はひありくのらねこのなつ
けかたきは妹かこゝろかとよみ給へりこれは野猫
といふことにてらの字は付字也古今集のうたに庭
もまかきも秋の野らなるとよみたる同じこと葉也
されば此のさものといふは俗にいやしきものゝ無
禮なる事をするをのさばるといふに同じくいやし
め云詞なるべし

野遊山などは何とあろふ

野遊山とは野に出てあそぶことをいふ俗語なり諺
草に云晋の郭文弱きより山水を愛し名山にあそび
老に至て終に廬を山中にむすびて住りこれを蒙求

に郭文遊山としるせり今ぞくに遊樂することを遊
山といふ郭文が遊山とは興味はなはだ異也といへ
りあんずるに遊山は山にあそぶとかく字なれば野
にあそぶことを遊山とはいふまじき詞なれどこれ
はたゞ外へあそびに出ることをいひならはしたる
詞なればしひてとがむべからざる物也其子細は三
才圖會に遊山船といふものありて湖などに遊ぶ用
としておほく酒を載る故遊山をもつて名とすとい
へりまた堯山堂外記にも遊山船を雇ふて石湖とい
ふみづうみにゆきたる事もあれば野にあそぶこと
を遊山といふもあなかりにあやまりとは定めがた
し

此あたりの猿引でござる

續撰吟抄さる引の歌に「畜生もつかひいるれば中
中にわれにはましの能のおほさよとよめりこの歌
は文明のころの職人歌合にも入たりこの判者は逍
遙院實隆公也漢土には猿引を狙公といふこと列子
にみえたりまた唐音統籤には弄猴人と有て弄して
君王を一笑せしむとあれはまつたく日本のさるつ
かひと同じこと也

たのふだ人の靱が

わが主人と頼みたる人といふ事を頼ふだ人と云なり靱の事は冬草に云矢を入れるうつぼといふものは上古の書に見えず中興にできしものなるべし義家奥州後三年の合戦のとき舍弟義光奥州へ下らんとしけるとき相摸の國あしがら山にてうつぼのうちより笙の譜をとりいたし豊原の時秋にさづけられしこと古今著聞集にみえたり東鑑には羽壺とかきたり空穂と名付しことはその中空にして外に毛皮をかけたる舂粟の穂に似たれば空穂といふなるべし又靱の字をうつほの字とするはあやまりなり本字は靱かくのごとく書て是はゆきといふ字なり靱は形異なるもの也春草に云むかしはうつといふもの有て腰につけたりしを後に穂を作りそへたるとて其うつといふものゝ繪圖を武用辨略に載たり用ゆることなかれうつといふもの古書に嘗て見えず其繪圖も出所をいはず妄作なりと云々今あんするにうつぼものかたり俊蔭の巻にとしかげの娘北山の奥なる熊のうつほ木の中にて子うみたる事をかけり熊のうつほは精華錄には熊館とかきて古木の

朽てうつろになりたる所を熊が臥所にすることをいふ也さればすべて中のうつろなる物をうつほといふゆゑこのうつほも其こゝろにて名づけたるものなるべし

しさりおろ

すされといふに同じ俗に下りおろふといふこと葉也

いかい大名じやといふて

いかいは大きなるといふこと葉也

此大鴈股を以て

春草にいはく鴈股となづくる事は鴈のあしのゆびの股に水かきあるに似たればかりまたと名付しといふ説あり用ゆべからず鴈にかぎらず惣じての水鳥みな水かき有また俟とあればとてゆびのまたとするもいかい也ある人のいふは鴈俟といふはかへるまたなり蛙のまたのごとくなる故かへるまたといふこと葉を略してかるまたと云又轉じてかりまたとよびたる也其詞に付て鴈俟の字を宛用ひたるといへるは發明の説也用ゆべし

きうしよがござります程に

院本に急所と書はあやまりにて本字は灸所なり灸をすゆる穴所のことにて其穴所を撲ば死するをいふ也

ヤイよしよ

猿をましともましらともいふなり翻譯名義集にざるを天竺にては摩斯吒といふとありしかればましらは和訓にはあらずして梵語なるをそれを略してましともいふなるべしましと讀たる歌は夫木集猿の題にて「おもふこと大江の山に世中をいかにせましと三ころなく也といふ兼昌の歌出たりましらとよみたる歌は古今集躬恒のうたに「わひしらにましらな鳴そあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

ならぬと申せば殿様の

秋草にいはく殿と稱すること禁中にて殿と稱するは攝政關白より外にいはず其外の人を表向にて殿といふ事も内々のうやまひ也いにしへよりありしこと也殿は宮殿の殿にて宮殿をかまへ居住したまふゆゑ殿といふ也されば攝政殿關白殿といひまた殿とばかりもいふ也神のことを太神宮八幡宮とい

ふ宮とおなし意なりされば殿といふはいたつてもき稱也つねの人の名に殿と付てよぶは分にすぐる事なりされども内々のわたくしのうやまひに殿とよぶ也とあり様といふことはまへに註す

船こぐ眞似をしますかいの

まねはまねぶといふことを略したる語にて學の字なり源氏ものがたり品定の所にさてありぬべきかたをばつくりひてまねび出すにそれしかあらじとそらにいかゞはおしはかりおもひくたさんといふこのまねび出すといふ詞もまねをして聞すといふこと也俗に眞似と書は後の世におしあてたる字なり

畜生さへ物を知てなげくに

畜の字はかひやしなふといふころ也毘婆娑論に横生は生を稟ること愚癡にしてみづから立こと能はず他のために畜養せらるゝゆゑにちくしやうとなつくといへり

物の哀をしらぬといふは

俊成卿の長秋詠藻に「戀せすは人はこゝろもなからまし物の哀れもこれよりそしる

鬼畜木石にもおとつた

鬼や畜生や木や石やと物のあはれをしらぬ心のなきものを四つかぞへ立たる也俗にいは木にあらざればといふは人といふものはよく哀れをしるといふこゝろなり文選の鮑昭か詩に心木石にあらざれば豈感なからんやと作り白氏文集にも人木石にあらずみな情ありともつくれり伊勢ものかたりいは木にしあらねばこゝろくるしとやおもひけんとありげんじ物語にもいはきならねばおもほししるともかけり歌によみたる例は順徳院御集に「人ならぬ石木もさらになしきはみつの小島の秋のゆふくれとよませたまへり

息災延命富貴萬福の御祈禱

息災は大目經に此は是息災の法也といふこと有てわざはひをやめるといふ事也萬福はもと詩經にいでたる字にて尺牘にめでたくといふかはりに萬福とかくこと翰墨全書に出たり祈禱は神にいのることなり

猿がまいりてのふ仕る

藝能をするといふこと也前に註せしさる引の歌に

もわれにはましの能のおほさよとよめるは猿のげいのう數々あるをいふなり

御知行まさるめでたき

いせ物語にかすがの里にしろよしゝてある註に知行の事也と有眞名伊勢ものがたりには知由と書て其人の領知するところよりをさむる米穀を知行米といふ也

人命草木増長すれば

人の命ものひ草木もますゝおひのびるといふことなり、

綾が千反錦が千反

續日本紀に元明天皇の和銅五年に伊勢尾張以下二十一ヶ國にはじめてあやにしきを織しむる事見えたり

なばか佐古志か室がとまりか

那波佐古志室みな播磨の地名也

ふねのなかには

ふねの中には何とおよるぞとまをしきねにかちをまくらにひんだのをどりをひとをどりといふ文句

三絃本手の飛驒組末章なり

何とおよるぞ

寐ることをおよるといふは古き詞なり増かゝみに
帝といづくにおよるぞと問ふよるのおとゝにとい
らふればと有物に倚かゝりてねる事也
楫をまくらに

夫木集公朝の歌に「わするなよ同じみなとのかち
まくらおもひ／＼にこきわかるともと讀り

一のへいたて二のへいたて

幣をたてゝ祈禱するこゝろなり

三に黒駒信濃を通れ

八月十五日しなのより黒駒を引てみやこにのぼる
を駒牽といふことは公事根源にみゆ

船頭とのこそゆうけんなれ

勇健とかきていさましくすこやかなりとよむ
はくさいこくより

百濟國は新羅百濟高麗とてむかしは三つの國なり
しが今はあはせて朝鮮國と成たるよし明史にみえ
たり

普賢文珠のめされたる

文珠の獅子にのり給へるかたちは佛像圖彙にみえ

たり翻譯名義集に普賢と文珠と二つにして二つに
あらずこの菩薩つねに一對とすといへり
千秋や萬歳の

秋といふ字はこゝにては春秋の秋に非ず説文に秋
は禾穀熟する也とありてものゝ成就する時を秋と
いふ也麥が熟するゆゑ四月をも麥秋といふ類なり
ゆゑに千秋も千年といふにおなじ韓非子に君をし
て千秋萬歳の聲を聒^{きか}しめんといふこと有王維の詩
にも萬歲千秋聖君に奉ずとつくりてめでたき事に
用ることば也

瑠璃天狗卷之五終

今昔操年代記上之卷

目録

一昔の播磨風

淨瑠璃の名取川
流の末は清水の瀧
落て別るゝ水引の草

一中頃の嘉太夫風

笹の丸の高矢倉
打たり鼓太鼓の程拍子
能かゝりの音曲に寄鹿

一今の世の筑後風

一向一心の稱名聲
あまねく響きわたる
和讃の節付形見
となる稽古本

一當世の上野風

翁渡しの面箱
もつてひらいた梅櫻
出かたりを松
見物の鈴生すずなま

近來操年代記序

つれ／＼なる儘友かたらひ、生玉天王寺安居清水の邊にあゆみ知る人あるに假の足やすめさつと仕た料理膳とつて薄茶、枕引寄四方山のはなし襖一重あなたに、わかい衆五七人集り、芝居の噂とり／＼の評判、ひとりとは竹本流と見へ、筑後芝居の最負口今一人は豊竹門弟と打見へ、上野のかたをもつて、出るまゝの討つこたへつ今日の慰是ならんと耳の垢取てきくを知らぬが佛様、竹本方の云、今世にもてはやす淨瑠璃皆筑後風也、さのたまふ豊竹は文彌風かせつきやうか風義かはりたる音曲ならは息筋はつて申さるることはり、筑後風を學るゝ上は竹本芝居の善惡かたく御無用と座を打てのゝしる豊竹つゝと出、一通り尤也、まつたく竹氏を譏るにあらす義太夫とて生立からの名人にてもあるまじ行年つもり／＼て今名將の名をあぐる、是一藝の修行積りしゆへ也、其年數をくらべては豊竹上手也といふがあやまりか竹本仕出しの音曲といふにてもあらす古播摩のながれを汲で其流義をかたらるゝからは豊竹もおなじ事也、殊に

近來の淨留り、第一趣興文句のはだへむつかしければ、あたるはまれにしてあたらずねなり、何程名人の太夫にても淨瑠璃不作にては評判あし、今筑後最來あつてもむかし、播摩太夫かたられし四天王事の上りあてがはゞ見物おもしろしとはいふまじ、しかるに播摩は、何ほどあらし淨るりにても諸人好る様にかたらるゝは名人といふにあらすや、竹本方云、それは時々を知らぬといふ物、今の淨るりを播摩どのにかたらさばどのやうにふしを付てかたり給はん、頃日の淨るり五段昔の三十段よりながし、其とき其心に應じて、見る者聞者なれば一圖に播摩太夫を、名人とかたよらるゝはくだから天を覗くにひとし出なをされよと云ふ、豊竹方さの給ふかた／＼こそかたいちといふ物、既に今淨留理をかたるひとなくかたらぬ者もなき時節、たへず筑後のふし事を第一に稽古仕る人、大かた播摩の景事おのゝさきにかたらるゝ宮嶋八景長生殿の四季屏風八景、此類數百段奥の卷に記すゆへ爰に略す、惣して播摩風の音は何れかまねる人なし、此太夫を譏るかた／＼めい／＼宗旨の祖師笑ふに同じ、あなもつたいなやおそるべし

恐るべし 竹氏方がふりを振^{ふり}此方の師釋^しの道喜は淨る
り音曲の精といふ者昔く祖父とば、のほりまは
そんせぬ當流稱美する所の竹本氏ならて此道の司^{つかさ}は
ごわるまいと兩方腕まくりひたいに血筋をはつて既
にけんくはになるべき所に七十あまりの老人二重の
腰にじゆすをつまぐりよろくよはく立出是わか
い衆れうじめさるな此口論せつしやもらひました双
方互に一利屈有ておもしろき評定筑後上野身に取て
の満足此上何かあらんさいせんは東西の評論□△か
はりを聞むとおもひの外播摩太夫にころび仕廻付す
今舍利く佛淨るり太夫に出現せられても此源の元
祖たる播摩太夫に善惡いふ人覺す殊におのくとし
わかにして物のしやべつもわきまへず、當前の事ば
かり利屈はつて其根を知らず出儘^{でま}の我儘、我等當年
七十五歳若かりし時より此筋の音曲に身をよせ、播
摩風より段々筑後豐竹の淨るり、替る度毎見物せぬ
といふ事なし、とりわけ播摩になづみ深く、此流義を
もつはら稽古いたしぬ齒は一枚なけれど、富士の牧
狩の道行、今語るを聞てはもどかし、とかく同席につ
らなる事ふしぎの縁、此流義の發旦より是迄の因縁

を咄、それくの門にゆうあんいたさん、羽ぬけ鳥に
て舌のまやらぬおちた所は御免く

淨瑠璃來曆

淨瑠璃諸人もてはやし口ずさむ事昔井上市郎兵衛といふ人音聲たくましくふしはかせかいぐ等に心を付けおのれと此一流をかり出し終に操芝居を取立程なく受領して井上大和掾藤原の要榮と名乗り其後大和を改め井上播摩掾と云しより今に播摩風といへり、播摩太夫生年の頃より音曲を好みフシ、ヲクリ、三重ヲン、フシヲクリ、ハル、ギン、此類に心をくばり、なかんづくうれい、修羅を第一にかたられしかば、見物なづきをさげ、めい／＼口まねせんとすれ共、其頃は床本かたく閉て、弟子たらんにもむさとゆるさず、勿論稽古本といふ事なく、漸聞書にして、一行二行つゝおぼへ、夜あるきの友となしぬ、いまた大阪に淨るり本屋なく、つてをもつて替り淨るり出れば、前の淨るりをこんもうして、京にて是を板行するといへども、しらみ本といふに五段を書、その間／＼に、一段／＼の繪をさし込、童子のもてあそびとしてひろむる、まつたく稽古人の助とならず、やうやく播摩太夫手筋より、心齋橋筋三津寺邊に、書本を商賣仕る井上彌兵

衛といふ人、太夫のゆるしを請、語り本の内、道行四季、神落などを乞請、是を書本にして稽古人の助としぬ、其外段物望む衆中、傳をもつて弟子と成、ふし口傳稽古するといへども、むさとおしへずむさと弟子をとらず

▲序に播摩太夫名人といふはいはく、今おの／＼もつはら稽古なさるゝふし事、何ぞといへば市郎丸ひとら、安藝の國いつく島に着しかば、わに口ならしぬさをとり、神慮をすゝしめ奉ると、宮島八景のけい事、是にかぎらずあまたある、中にもおもしろきは

一 掛物ぞろへと云は

頼義北國落の内也

一 歌仙之段と云は

菅原親王の内也

一 宮島八景と云は

源氏筑紫合戦之内也

一 しほがまの段と云は

頼光跡目論之内也

一 馬の段と云は

同 斷

一 屏風八景と云は

金剛山合戦之内也

一 清明神おろしと云は

花山院之内也

一 七夕祭と云は

道寸軍法競の内也

一 五天竺と云は

日本王代記

一 長生殿四季と云は

源氏熱田合戦の内也

これらのたぐひかぞふるにいと、なし、尤文ユウブンから古風にしていやし九、地よみおもしろからず、たとへば松のかれ木にひとしく、すんとしてとりじめなく、道行など名所方角前後し、文にくり事有て亂れたる糸のごとし、然るに井上、音曲をなわりたる妙には其亂れをほどき、其かれ木のふし／＼の中より、いろいろの音聲を出し、様々のふしを編、末の今まで竹本氏豊竹氏、是をもちゆる勿論其流をくむ輩、此太夫の景事語らぬといふ人なし、しかれば此播摩太夫淨るりの祖師といふに誰か一點をくはるん○播摩太夫一生のふし事數百段あり、是をあつめ、全部三冊にして西澤所持の板行ありといへども、辰のとし焼失して其外題のみ残りぬ

○有頃京四條の芝居より勸進元下り、播摩太夫一座を買請京都へ参りたまふ、井上初ての京入、吉日良辰をあらため、始まる初日頼光跡目論を出されしに、人形あやつり道具、役者に至るまで美を盡し、見物のお氣にまいるやうに、座中氣をはりゆみ、思ふつほにあたりめ厳しく、京中評判、よしやよし野の花見より此芝居と、日々に見物入まし、はりま殿の外間目出申納

ぬ、木戸役者より御目出たの酒肴、せいろう山をなし、大阪よりは門弟知べのもの、聞およびの生鯛生貝、鱧はも太刀魚のひかり芝居をてらし、毎日の酒盛、千秋樂萬歲樂と祝ひの中、太夫本心地あしきと、假初の風重／＼しく、京中にてあらゆる天醫入かはり、療治のヒをつくすといへども、かぎりの命にてや有なん、次第／＼にげんきおとろいぬ、目すいしやうの都人にまで名人とよばれ、ほまれを夢の内にたのしみ、終にむじやうの風にさそはれ、五十四歳を此世の見おさめ王城の土となりぬ、皆々あん夜にともしびをうしなひ、せんかたなきからを長明寺におくり、昨日にかはる石塔戒名ばかり残しぬ、おもへばおしき命、京大阪の男女おしなめ袖をしぼり南無妙法蓮華經をと、なへ、忌日名日とふらひぬ

▲播摩死後井上市郎太夫、石屋三衛門尾崎權左衛門此兩人芝居を勤め、勸進元約束の日限、つゝがなく仕舞難波にくだりぬ、其間の淨るり、業平一代記、大職冠知略の玉取、跡目論以上三番にて止ぬ、是より市郎太夫、段々立身して一分のやぐらをあげ、新淨るり源氏十五段、五大力ぼさつなどめされしかど、はか／＼し

からず終に立ぎへにして其おわる所を知らず

○播磨弟子の内清水理兵衛といふは、此安居天神の南に住所をかまへ浪花の腹ふくれ衆をあつめ、碁將碁茶の湯、連俳の座敷なれ共あるじ、はりま風をかたり出せしより、皆音曲けいこ場となれり、もとより理兵衛井上流をたんれんし、かたをならぶものなし、聞人我もくんと尊敬うやまひもてなしぬ、元來料理屋を商賣し安樂のくらし、寐ても覺ても、立にも居るにも、ヤア天めい知らずの頼近めや、子として親を調伏仕る事其聲天に響き今播摩といへり、遊人連一ばいきげんのあまり理兵衛を招き、あつたら淨るり此儘拾んものこりおほし、芝居興行し幕あけさせんと、なんなくていしゆをそゝりあけ、おもひくこゝろこころに、銀をもちよりまんまと一座を組立、櫓まくはなやかに、新作にて上東門院と云ふ淨るりをかたり、町中めづらしく山をなしけり、然れ共、なじみある播磨の花香うせず、見物なじみなきと、珍らしき淨るりなきとに行當り、中ば芝居も止め、此時天王寺の五郎兵衛と云ふ人竹本筑後理兵衛ワキをつとめ、初て床になをつてかたる、此五郎兵衛竹馬うけより播磨風に心魂

をとられ、節季しらぬ農業の業をすて、あけくれ淨るりに氣をうつし、太夫號をよび、京四條川原の芝居におゐて、清水理太夫とあらため、日本王代記、松浦五郎など云ふ淨るりをかたるといへども、はかしくしからず、出たり引込だり、半年つゝかぬ芝居、見るに氣のどくの天窓をかきぬ

○宇治嘉太夫といふは、紀州和歌山宇治といふ所の人、幼少より音曲に妙そなはり、第一謠をよくたんれんし、なり物とをりうとからず、ふしはかせかなかいぐまでにこゝろを付、一藝何よらず人より上にたゝん事をねがひ、ふと播磨風におもひ付、朝暮是に枕をわり、ついに京にのぼり竹屋庄兵衛に密談し、あやつり芝居を興行し、伊勢島宮内が名代をもつて、淨るり宇治嘉太夫と大看板にしるし、新作にて虎遁世記といふをかたり出しぬ、播磨風をおもてとし、ふしくばりこまかに、よはくたよく、うつくしくかたり出せば、京の見物あたまからお氣に入て、思ひの外ひやうばんよく、段々新作の淨るりを出し、人形いしやうまできれいにこしらへ、二年もあまり首尾よく勤る三年めの正月より天王寺五郎兵衛をワキにかゝ

へ、西行物語といふ淨るりの二段目、藤澤入道夜盜の修羅を、五郎兵衛かたられしが、元來大音にて甲乙ともにそろひ、まないたに釘かすがいを打たる如く、何程の大入にてもといかぬといふ事なし、字どめ字頭の文字きへず、文のあやうく聞へければ、見物よろこぶ事かぎりなし、嘉太夫も五郎兵衛淨るりには心おき、後に我ほこさきの甲斐になるべきは此男と、云れしはさすかの嘉太夫ぞと後にぞおもひ知られぬ、さればこそ筑後風とて、國々浦々まで口すさむ、くれないはそのほにうへてもなり

○嘉太夫水魚のごとくむつまじき庄兵衛と藝の筋より互のゐちを云つのも、終に中あしく、たちわかつて竹庄方には一座を取組、五郎兵衛を太夫にして、まづ京地をはなれ、西國にくだりぬ、然れ共嘉太夫ひるまづ、日々にはんじやうし程なく受領し、加賀掾宇治好澄とあらためしより、町中いよく此流をかたり出し、あまつさへけいこ本八行を、四條小橋つばやといへるに板行させ、淨るり本に謠のごとくフシ章をさしはじめしは此太夫ぞかし、名人は播磨、上手は嘉太夫也、取分世繼曾我より諸人もてはやしけり

○竹庄五郎兵衛を同道し、宮島の市を仕舞、大阪に参り、今の竹田外記芝居をかり、天王寺五郎兵衛といふ名をかへ、竹本義太夫と改め、やぐら幕、まりばさみの内に笹の丸のもん所、今につたへ此まゝ也、其頃は貞享三年、丑の年にてぞありけり、淨るりは嘉太夫致されし世繼そが、是義太夫出世のはじまり、町中の見物此ふし事になづみぬ

げにうけがたき人のたいを受ながらと○二段目待つ夜の恨

さりとは戀はくせ物皆人のと○三段目道行立子這子、此二所のふし事口まねせぬ者なし、次のかはりあいそめ川梅の名よせ、道行のすみとすりの濃中をはやらし、續いて三のかはりいろはものがたりの獅子の亂曲、道行のなつの、しかのまき筆にて手習させ、其暮は堺にまかりいよく評判よく、義太夫ふしは、播磨此かたの淨るりと見物におもひつかし、其年のくれ心よき越年、是義太夫大音にて萬そろひたるうへに、理兵衛嘉太夫を吞込、おもしろきふしを付てかたたるゝは、鬼にかなさいぼうなんでも三味をべづしては出世の門はひらきがたし

○其明寅^{あけとら}の年、京宇治加賀掾難波にくだり、今の京四郎芝居にて、西鶴作の淨るり、曆といふをかたらければ、義太夫方には賢女の手習並新曆として兩家はりあい、ついに義太夫淨るりよく、嘉太夫がた止ぬ、其次のかはりかいちん八嶋、是も西鶴作にて、評判よき最中出火して、加賀掾は是限にして京へのぼられ、又々なじみ道都におゐて、操をはじめ、だん／＼珍しき淨るりをかへ、音曲修行、三十餘り、花落におゐて、たのしみ、寶永年中卯の初春廿一日に往生し、自語院本淨道融居士となれり、世は夢現ぞかし、其年は七十七歳にてぞ有けり、義太夫寅の年二の替りは、近松に縁をもとめ、出世景清といへるをこしらへ、是にて月を重ね、其後のかはり源氏移徒祝^{げんたみしよろこび}、但し賴朝七騎落也、是も評判よく町中口まねする所に、佐々木大鑑並に藤戸の先陣、松よひしぐれ相の山の道行、思ひ川はさぬ袂のかたり出し珍敷趣興^{めづらしき}と、はした／＼角々^{すみ}、此道行けいこせぬといふものなく、是より義太夫ぶしともてはやしぬ、そのうへに近松門左衛門、ついで新作をこしらへ追ておもしろき趣興に、かはり文句はたらし、義太夫のかたり盛り、日々夜々音聲^{おんせう}に實のり

ふし詞に花を咲せば、聞人見る人此太夫ならではともてはやしぬ、なれ共其頃は、かぶき芝居あたりおほく、殊に出羽にはさま／＼のからくりなどし、見物諸方にわかれば、さのみ大入、大あたりと云ふ事なく、しぶらこぶらの見物、なれ共こたへもこたへたり、剩へ筑後掾藤原博教^{ひろのり}と、受領迄申請、西國おもて、山路ふみわけ木こる杣人、海邊に迷ふ海士の子も、御いたはしやせみ丸といへば、又とこ間の雲はれて日月ひかりかゝやけりと、よし野忠信のさいもん、何所^{どこ}からどこまでいかぬものなく筑後掾のいせい、夜まし日増の繁榮、藝者のはまれ四方にかゝやくといへども、ほつこりとした藏入なく、三八の十八にてあはぬそろばん、胸算用あふてあはぬは世間なみ、次のかはりの談合、一ツ盃^{はし}庄兵のばゝさまさしあひ、さしみは鯉にこせう、あたり淨るり何をかするめといふ所へ、やれ曾根崎の天神で、見事な心中、有馬藥師、藥がまはつた、是を一段淨るりにあしらへ、そねさき心中と外題を出しければ、町中よろこび、入ほどにけるほどに、木戸も芝居もゑいとう／＼こしらへに物は入らず、世話事のはしめといひ、淨るりはおもしろし、少しの

間に餘程のかねを儲け、諸方のといけも笑ひ顔見てすましぬ、此上に望もなしと後生心に成、きめうむりやうじゆ如來に身をまかせ、芝居も是切に安樂國土きはめんと、明暮御堂に參り、あさじ日中お八つをかゝさず、一心ふらんにしやうしんげ、御和讃のふし猶殊勝にきこゑぬ、折ふし竹田氏參會し未だ老木といふにもあらず、今町中しやうびする所に、おもひよらぬ引込じあん、二三年勤て給らば、拙者座本仕、萬事の世話を引請、貴殿内證入用銀御用次第つゝけ不自由させまじと、同行衆を以て頼みしかば、下地は好なり御意はおもし、いか様ともの詞をきわめ、盃すんで其暮、かほみせ淨るりといふをはじめ、用明天主職人鑑作者近松門左衛門をかゝへ、太夫竹本筑後掾、座本竹田出雲と看板並べ、三段目かね入の出がたり、泪川戀のこほりにとぢられて、身を切くだくおもひより、うき川竹のながれの身、辰松八郎兵衛出づかひ身振よく、見物の氣をとつてのかね入藏入、目出たくかはりくの首尾よくかはよ歌かるたといふ淨るり迄語りそれよりふと病付たまひぬ、日本一の太夫今一度とゝめ度いろくと療治の手をつくし、人參の山

を積でといめんとすれども、かぎりの命はといめがたくもはや末期の水も通さず、おしや六十四才を一期とし、正徳四年九月十日を此世の見おさめめいどかうせんの旅しはるにおもむき給ふ、門弟數十人、白無垢の數をそろへ、なくく野邊におくりむじやうの煙となしぬ、竹本氏門流あまた有中に、豊竹上野は其流義まねると云ふ心さしより、天王寺念佛堂のむかひに石塔きざみ、釋道喜、施主豊竹上野としるしぬ、心あらん人々名日には參詣あるべし

○豊竹若太夫事若輩の頃より竹本流義を學び、家業はよその事にして、毎日芝居に入込、けいこおこたる事なし、其頃は竹本采女といへり、年十八さいの頃、筑後諸芝居におゐて、傾城懷子といふ淨るりをかたられしかど、しかくの事なく其年もくれ、あけのとし東立慶^{ひがしろうけい}しばゐにて、道具屋吉左衛門永島重太夫、其外門弟あまた寄合、素淨るりの出かたり、是もはかばかりからず半にて止ぬ、それより修行の爲爰かしこにくだり、其もとり堺南の端にて芝居とりくみ給ふ、折ふしいとやの娘、手代の久兵衛と密通あらはれ娘をつれ萬代^{もづ}とやらんへかけ落、はたけの井戸に身を投

兩人共に死^したり、是幸の心中と俄に一段淨るりに作り、さつとした道具拵云づきにして、心中泪の玉の井と云ふ外題を出しければ、所の事といひおもひの外あたり、究^{きゆう}の日限仕舞大阪に飯り、長門九郎兵衛とかたらひ、相座本にて舞のしばるにやぐら幕、豊竹若太夫とあらため、はなやかなる看板、さかいみやげ心中泪の玉の井と出しける、春頃筑後がたにはそね崎心中、兩家同じやうな仕組、玉の井の奥、久兵衛おち道行の内に、さのみじみ／＼なけかずとあゆましやれ、さきには鬼はないものと、初冠^{うしかむり}より町中に口眞似させ、次のかはり金五郎うき名の額、是も一段淨るりにて茶屋名よせの道行に、まことに小さんと我中はあのほり詰の二つ井戸、どちらを見ても深ければと、浪花のわかい衆によるこばせ、そね崎道行同前に、此稽古本京大坂の淨るり本や、門をならべ板行してひろむ、あたまから見物にのみこませしは、太夫になるべき五音の調子聞人かんじけるなり、その明東岸居士をかたり、それより備中にくたぐれし内泉州築能^{つくの}といふ人舞のしばるをもとめやぐらは濱の竹田にゆつり、芝居をつふしかし家となしぬ其折ふし出雲より、

此太夫を助分に頼たきのよしたび／＼云來りぬ、太夫留守なれ共親の子を思ふしあんこをあらめ、心よくすまし究^{きゆう}の盃すんで、太夫登^{のぼ}られ、右の品かたられしかば心よく請合、出雲芝居へ出られ、用明天王二段目の役見物筑後の聞まがへるほとにそありける、二年務め其暮、河内屋加兵衛といふ此道の粹方、操芝居におもひ付、是非くはだてんと、豊竹辰松相座本とし、篠の丸のやぐら幕、淨るりの作者紀海音、新作追追出しければ町中余程御最負の見物おほく、御取立によつて上野少掾藤原重勝と口宣^{くげん}を請つぎ、其明鎌倉三代記といへる淨るり、是迄の大あたり、大黒舞のふしと我も／＼とけいこするもの多く夫よりのかはりさのみあたりしといふ事なし、なれとも根つよく一座をもちかため、折にふれ時によつては、和歌山奈良さかいへも罷り、さま／＼の評判よく、卯のとし村上嘉介作にて、建仁寺供養といふ淨るりを出し、明辰の二月より頼政追善芝居、大出來大あたりにて、町中他國の見物此しばるにかたより、三月廿一日本戸口はりさく大入、近年の不仕合取かへさんと、はづみきつたる所に、其日中より出火夥しく、手と身となるは

世間なみ、され共操道具を助、漸々さかいに立のき、様子を見合せ、ふつがうなる道具をこゝにこしらへ、初の四月廿三日を初日と定、建仁寺くやうを出し、閏四月十五日より頼政、此二家にて六月中旬まで勤、ついで六月廿三日よりそねさきにて頼政をはじめ、初日より八月三日まで入つめ、藏入の宜敷事、豊竹氏御最負つよきゆへぞかし、そのみならずあらし芝居賣やしきのよし、太夫本年來の望、折あしけれどもとめたきねがひ、尤の相談に究まり、傳をもつて地主方へいひ入、まんまと首尾して豊竹芝居と成りぬ、むかしより今にいたり、淨るり太夫芝居ぬしと成は、宇治嘉太夫豊竹なり、まつたく自力にあらず、他力によつて是程の大望成就せしは、諸天三寶諸見物のおかげ、いよく佛神信厚あるべし、かねて太夫本、伊勢よりうすやくそく、ゆかねばならぬ首尾、せひなく一座其用意、跡の普請は一家衆大工の頭梁受取、人數をもつて按立ければ、作者方には顔見世淨るりのこしらへ、太夫元は伊勢より下向の荷物、三方一度にもみ合せり合、なんなくかは見せの日限定、辻札橋札、はなやかなる舞臺棧じき、さあ上野がかほ見せ

しばる結構なり、女せみ丸と云ふ外題、さこそおもしろからんと、おもひの外の大入見物も初日を見てせいきをつかし、ひやうしのない出がたり出づかい、作者のおもひちがひ、巳のとしもついでに不作、兎角此作者と、太夫本の相性あしきかと、ふしんにおもふ折ふし、作者の方より隙を乞、淨るり不作ゆへ斯成なとげて身退くは天の道と心得、三十石に夢むすび都の方へ登られしと也、凡上野是迄の淨瑠璃數百番有○人一心に誠あれば、天道の恵招かずして來福仕といへり、豊竹氏ふけいきなる芝居、何とぞ珍しき物と、作者も相應にかきあつめたるかなそうし、北條時頼記といへるよりおもひ付、二三人よつて此外題を趣興に淨るり五段にくみ立ん、いづれも知恵を出されとぞいふりまはせば、並木宗助安田蛙文、美若なれ共、淨るり一段も書かねぬ器量に西澤の下知に任せ、どをやらかをやら五段をつくり、切に最明寺雪の段、太夫本の出かたり厳しく當り、卯月八日を初日とし、今月今日まで入詰年越の淨るりとなれり、是太夫本邪なく、眞直成る豊竹、一藝をくふうし、此上にも語様のこんな有べき物と、寐る間忘れぬ心がけ、殊

に身を高ぶらず、我とわが藝みじゆく成とおもはるるは、藝の上手心の名人といふ物也、尤筑後名人なれ共、修行の行年を算へては、豊竹はやき立身何れも左にあらずや 竹本方聞て、段々の長物語、老人のくり事尤なる咄しなれ共、筑後時代には、町中今程淨るりもてはやさず、しかるに筑後といふ名人、かたりこなしかみこなして、今若人わかての太夫に吞こますの道理、此返答あるまひへいかうく老人尤の返答おもしろし、今世上に竹本豊竹の門弟みちくたりといへども、みじゆくの淨るり誰かもてはやさん、名人といはるゝ太夫なれはこそ、東の西のともてはやすにあらずや、たとへていはは名くの家職におなじ、我賣物我細工をあしきといふ者なし、先播磨せより此流始まり、理兵衛、嘉太夫、筑後、豊竹と、流義少つゝちかひめありといへども、つまる所は播磨よりわかれ播磨風を語れば、いふ程かたるほど費つひそかし、各好おける太夫のふしを稽古し、名人といはれ給ふがかんようく

今昔操年代記上之卷終

今昔操年代記下之卷

目 録

一 近松の揮筆

手習ひに趣興の立ち消え
尋ねて見ても
あはぬ昔の筆の跡

一 作者智恵の海

布かひ物心の走り書き
いひかけと枕言葉と
頓智才かく

一 太夫衆の節車

生ひ立ちから太夫くさい風車
廻はりのよい淨るり語り
今に盡きぬは義太夫節

一 操歌舞妓寶引

白いと黒いと取り合せたる
花薄^{すき}亂れごゝろ
競べてぞ見る

今昔操年代記下之卷

井上播磨少掾藤原要榮 死す

京都加賀掾宇治好澄 死す

竹本筑後掾藤原博教 死す

豊竹上野少掾藤原重勝 存命

右四座の太夫本を淨瑠璃四天王と號す

○筑後芝居相續如何と町中門弟おもひの外、竹田出雲頓智發明より、國姓爺合戦といふ淨るりのおもひ付、門左衛門老功の一作、力瘤を出し、文句のはだへかるはしく書きまはしたる筆勢、おもしろく、淨るりは竹本政太夫、竹本頼母、豊竹萬太夫右三人にてあしかけ三年持ちこたへ、見物から子齣の道行口眞似せぬ人なし、筑後掾存命の頃あやつり淨るりしかゝなかりしが、諸人歌舞伎芝居よりおもしろきとてはやし、次第くにはんじやうする事、第一作者の趣興、人形衣装、道具まで花やかにこしらへ、手をつくし美をつくせば、歌舞伎は外に成りて、淨るりの評判はしくつちく耳かしましくおもひ存候

○近松門左衛門は作者の氏神なり、年來作り出だせる淨るり百余番、其内あたりあたらぬありといへども、素讀するに何れかあしきはなし、今作者と云はるる人々、みな近松のいきかたを手本とし書きつゝる物也、此道を學ぶ輩、近松の像を繪書き、晝夜これを拜すべし、又あるまじき達人うやまひおそるべし、時に享保九辰年十一月廿二日、七十余才にして此世の見おさめ今はの時殘し給ふ辭世

近松門左衛門性は杉森、字名は信盛、平安堂菓林子、代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへて咫尺擧げて寸ノ爵なく市井に漂ひて商賣知らず、隱に似て隱にあらず、賢にして賢ならず、物知りに似て何も知らず、世のまがひもの唐のやまとのおしえ有る道農妓能難蔭滑藝の類迄知らぬ事なげに口にまかせ、筆にはしらせ、一生をさへづりちらし、今はの際にいふべきおもふべき、まことの一大事は一字半言もなき倒惑、心に心の耻をおもふて七十余りの光陰、おもへば無覺束我世經畢ぬ

若し辭世はと問ふ人あらば

夫れ辭世去る程に扱も其後に

殘る櫻か花しにほは、

入寂名阿禪院穆矣日一具足居士

不_レ俟_ニ終焉期_一自記

殘れとはおもふもおろか埋火の

けぬまあたなる朽木かきして

平安堂のながれをくんで一作なさるゝ人々近年出來

一紀 海音一兩年休足

二竹田出雲手芝居自作

三松田和吉一兩年是も休足

四並木宗助當年より作也

五安田蛙文

西澤一風今は老年にて心計

あらまし此通り淨るりの作者すくなきもの、當り淨るりは稀にしてあたらぬは道なり

竹本政太夫 筑後芝居の立者

○政太夫は中もみや長四郎とて、いまだ角前髪の時より音曲を好み、あけくれ筑後風に心をよせ、まゝまゝと淨るりに成し頃、豊竹京にて芝居興行の節、西澤この仁を招き、京都に同道仕若太夫方にて勤める、京を仕舞一座のこらず大阪にくだり、新地曾根崎の芝居にて、若竹政太夫と名をあらため兩年勤め、三年め出

雲方へ住まれ、段々淨るり實のり功者と成り、今西の芝居にて筑後替りとならるゝは、日頃音曲に心かけふかき故、諸人稱美する事お手柄、此人の藝をたとへていは、萩野八重桐におなじ、なせといへば小兵なれども取まはりりぐしく、修羅つめなどかゆい所へ手の行くがごとし、別して段切を大事に、かけらるゝは上手藝のなき所、去るによつておざのどのとならべておせの兵、音聲の非力はせひなし身の持ちちやう銀持かたぎ、心すなをにして豊竹どのにおなじければ誰も知る人なし、あやかり者、

竹本大和太夫 竹本芝居立者

此人生國は和州田原本の人なり、農業をすて此道が好き、若かりしより竹本を學び、ついに床になをつて和州をめぐり、程なく出雲芝居に住み、舞臺に出てかたられしは、天神記の天拜山のふし事也、先づ聲よくよりまはりおもしろければ、突出しより評判よし、今の淨るりを聞くに、おとし一流かはり、おもひ入にあてん事を第一となさるゝ故、見物のうけよし、たとへていは嵐三右衛門仕だしにおなじ、何處やらびらついて又しやんとした處もあり、地事ふしを

藝に應じ、うれい事あはれに又おかしき筋あり、是その身其音曲の癖あるものなり、就中世話事よし、今にては政太夫と肩を並べ四分六歩六歩四分なり、折々ときよなる聲出るはいかに、よい方へは釣るまじ、しかし聲大きににして、かたり出しはでなりと、聞く人おしなめ田舎に京とは此太夫と、町中の見物とつて譽めてとをしぬ

竹本文太夫

此太夫内名はふしみや五郎兵衛といふ商賣屋生^{おひ}立よりそろばんを枕とし、見一無頭歸一倍市より割出し、此一曲をまねびいつの頃より筑後芝居に出で、あるとしは豊竹をつとめ又西に有つき、今日まで音曲やめず、兩役にてかねを儲ける方便、いやといはれぬしかけ、先づ淨るりおとなしく、ふしをこまかに、詰修羅萬事巧者分也、たとへていはい、杉山勘左衛門同前の藝者にて、淨るりの一體を崩さず、本間にかたたる、故あたりめすくなし、當世ははすはなるをよしと仕、なれども本間の通りかたたる、は師のおしへをそむかず仕込みの藝なれば、伊達なるよりかうたうなるがよし、此うへに三重のたぐひ、おもふ様にあがらば

誰にかおとらん、残りおほいは一聲二こゑにてはんべるであんす

竹本式太夫

此人陸奥茂太夫門弟にて、余程巧者の太夫なれども心の如く音曲叮嚀なる仕出し故あたりめなし、聲よく淨るりのわけさつぱりと聞え、難するをたとへがたし、市のや重郎兵衛仕出しにて上下いため行義くづさぬいきかたつかうせり、心がけよくば次第く上洛あるべし、末頼母敷^{しき}藝振^うり、今氣を付け給はねば立身いつをかごせん、唯つめ段切に心をくばりたまへと御見物申されしは金言哉

竹本喜太夫

生立^{おひ}ちは本津難波牛頭天王氏神、守りめあつてはやばやと筑後芝居にあり付き給ふ、尤も頃目の淨るりなれば、つめく、五段目の役付けなれども、上洛次第に役きまりよきものなり、淨るり語り皆よき場を第一に稽古仕、あしき所を捨て給ふは非が事なり、人けいこせぬ所を、よくかたりまはさねば上手の果に至りがたし、惣じて初心の間は、詰まはりを何んのかのとおもへど、既に釋迦如來もあら、仙人を師と頼み、

難行苦行こけのぎやう、つもり／＼て佛と成り、衆生たつとむにあらずや、爰を得心あつて精出したまへ、追付け上上吉に成り給はすに

竹本喜世太夫 豊竹上野座

此太夫以前はりま屋四郎兵衛といひし頃より、筑後風をもつはらかたり、其頃は肩を並ぶる人なし、第一聲よく、修羅つめのたぐひ厳しく段切よし、聲に應じてはふしをはんなりとよし、此人道頓堀にて櫓をあげ、新地にていろ／＼の淨るり出されしに、はか／＼しからず中ば仕舞ひ、其後曾根崎にて座元を仕、文流作にて淨るりを出しけれ共、しか／＼の事なく、陸奥茂太夫、竹本源太夫一つになりてかたられしを、是も立消して止みぬ、それより豊竹芝居にとしを重ね、午のとし休み、その暮よりつとめ給ふ、惜きは此音聲、せつしやあの聲あらば誰にかおとらん、是心がけうすき故と存る、近年の淨るり、前々のかたりやうとは違ひ、頭字おさへ字わかりぬ故、文句消ゆる様子おもはるゝは玉に疵なり、心を付けてみがきたまはば、光の出まいものにあらず、よく／＼工夫あるべし何と左にあらずや、たとはい、音羽次郎三郎諸藝の如

し、のこりおほいはせりふつぽへゆかぬにおなじ、なれ共大鳥なれば下に置かれず、よく／＼たんれんし名人の名を取りたまへとこん／＼

豊竹和泉太夫

此人紙屋理右衛門といひし頃より此流をかたりそめ、西の芝居につとめ、夫より東に有り付き、豊竹澤太夫と云ひ、今は和泉太夫と呼ふ鳥の子、淨るりの器用はだは美濃紙なれど、めりはりのないが半切紙にひとし、郎事は芳野、杉原音曲のきれい成るは奉書におなじ、つめ段切修羅のたぐひ、男の延紙違ふが如くぬるし、景事道行のふしも相應に付けかねぬをとこ、音聲高からずひくからず、藝の一體花妻どのに同じく、きれいなると調子のいきかた同前、何とぞ此人のごとく萬事に心をつけ立身あるべし、今にては竹本頼母と、になはず枋中やたへなんにて候かしく

豊竹品太夫

此客人生ひ立ちから上野弟子にて外を見ぬ太夫、去年迄他國をかせぎ、享保十年六月頃、身替弓張月を少しの間助られ、其くれ十月晦日より上野芝居にあり付き給ふ、久々にて音曲うけたまはりしに、思ひの外

の上落[△]、聲よくはなやかに、乙大きにして聞きよし、淨るりの一體中々巧者にて、間ひやうし操りに應じよくうつる故、いよく出來ばへ見物の受けよし、さるに依て近年のあたり役者澤村音右衛門と釣り合せて何とかあらんかぶき方音右衛門との出合おもしろし、實惡武道事、せりふつめ合のたてり、いづれかつり合申ぞ、品方あふともく實惡實のせりふ、三浦彈正、二階堂城之助のたぐひにて知るべし、音右かたに節ごとうれいなるかくかぶき方ふしをは淨るりかたらねば存せず、しうたん事は其役なればおろかはなし、品方然らば此太夫も人形役者にあらねばたてりの事はぞんせぬ、巧者と間拍子はいかに、かぶき方かぶき役者の拍子といふは、舞ひ所作事也、こうしやはおとらじ、拍子も舞も所作ばかりにあらず、相手を取てつめひらき、間のぬけぬを以て、拍子利^きと申、然らばおせおせ又五歩くにて申分なし、兎角音曲のたんれん工夫あるべし

豊竹伊織太夫

此人よしのや喜右衛門とて、道頓堀に料理屋を商賣として居られしが、出火の後、豊竹座に住まれ、今豊

竹伊織太夫と云ふ、聲よく、ふし事、道行のつれよし、つめ修羅のたぐひ、次第く^くに上落し、いつまでも上野どのに付きて廻り、淨るり修行あらば追付け上手に成り給はん末頼母敷身のうへ、是によつて山本京四郎とつき合はして如何んといへば、かぶき方それはどうしたおもはくと云ふ、されば京四郎どのいまだ美若にして、ぬつと出られし舞臺つきどうも云はれず、され共行年なき故しかくの評判なし、追付け立身ある藝者、それによつて此人ならぶ事非[△]がことならず、とかく藝者は善惡いはるゝ間がはなかのゐるお茶、うまひあぢなひいかれぬは、めいゝの損と知るべし、あなかしこく

豊竹新太夫

此客も去年よりつとめ給ふ、元來商人にてありしが好ける道とて終に淨るり語りとなれり、時頼記のつまつま語られしに、見物評にかけぬは先づあしきにあらず、床馴れたまはいいやみはのくものなり、先づかつかうより太物^{ぶつ}やにて、なんでもかでも御座れく、間にあはさんと晝夜の本ぐり尤なる心がけ也、藝者にかぎらずかせぐにおひつかぬといふ事なし、いま

だ初心の内なればよしあしいふ事なし、跡替りの役を見て評を申さん、今にては此人の音曲どくにも藥にもならぬ藝者、兎角精の一字を忘れず、口のあかるゝ程あいて、音曲大きにかたり給へわすれたまふな

竹本國太夫 江戸出羽芝居

此國太夫、大阪天神橋筋農人橋邊にて、昆布屋彌兵衛といひし商人、仕似せの見世を振捨て筑後になづみ、雨の夜も風の夜もかよひ小町、なんなく淨るりの間にあふむ小町と成り、片時もはや筑後芝居へ出んと、あけくれ心關寺小町、ついに床に直つて語らるゝ、尤も淨るり小兵なれども、氣をつけらるゝ徳には、ふしを地事よし、修羅つめのたぐひちと甲斐なき音聲、近年江戸にくだり一座の立者と成り、今國太夫と賞美せらるゝは仕合、此太夫と市川團十郎の藝とくらべて、いづれか甲乙あるべし、お見立の程承らんと申ける、仰におよばずくらべんも、役者はあいみたがい事、仕方と身振り、音曲は雪と墨とのちがひあり、なれども此人おなじみの團十どのに相同じ、あたり役者の市川にあやかるとの競べもの、出世の程はか

ぎりなし隨分氣をつけ名人の名を取り給へと夕告げの鳥が鳴く鐘がなる、聲にひかるゝ淨るりとみなみなあしをはやめける

豊竹島太夫

東西くちくとんばいほめまらしよ、此人堺をびす島より出現の男、御らうじ付けらるゝ通り、めんていにかみはしり、笑顔のよい公平作り、ちよつと見た所に相撲一ばんもひねりかねぬ風俗、なれ共人はかたちによらず、心はほんじやうほやりと憎からぬかたぎじやわい、ナア、此太夫生立より豊竹にかしづき、外を知らぬ淨るり太夫、然るに江戸座より達て頼まるゝ、元より修行の爲と巳の年のくれ江戸にくだり、國太夫と一所につとめ評判つゝいてよく、午ひつじの年もとめられせひなく勤め給ふ、是藝の上洛ゆへなり、第一音聲にはひありて遠音をさし、修羅詰のたぐひきびしく、文句のあやぎれよく聞ゆる、是第一也、尤丹前歌事の類少し申分あれ共、だんく上手に成給ふうへは重ねて申さん、今此位の淨るりをかぶき役者にたとへていはい、松本幸四郎なりとはいかに、はて松本のあら事、嶋太夫のはしかい音曲、松本

の丹前と嶋太のふしと、松本の實事と嶋太のうれいと、松本のきりやうと島太の器量とは、歌舞伎とあやつりのちがひ、島太に眞鳥かつら大口ひたゝれを着せ、しやく持ちて拍子をとらし、大友の眞鳥の三段目より承りたい、神八しんぱちまんどもうもたまるものではハツアあるまいと敬て申す

豊竹三和太夫

此人内匠理太夫の忘れかたみ、稚名は勝次郎といへり、十五歳の時、辰松八郎兵衛同道にて、和歌山へくだり出かたり生玉八景を語られし事あり、夫より淨るり修行の爲め諸國にくだり、卯の十一月朔日よりはじめて豊竹座に付き、三和太夫といへり、第一器用者にて手跡よく、三味線ひく、ふしのうけ取本ぐりはやし、行年つもらねど見物難をいはず、三年上野の膝元さらず、大鳥にもまれし故音曲に實のること其身の仕合、第一地事景事道行のたぐひよし、つめ詞少しつゝ申分もあれど、美若に應じては上手ぶんなり、音曲一通りなんでもやらるゝ、是三弦弾かるゝ徳にて、間拍子よし、此人と嵐三五郎とは當初下り初顔見世先立てあらしの評判あたりのよし、此人におなじ

く萬事器用なる藝者、あたらいてはと、おもふほしをくらはせし金具あの揚弓、三和どのも是にあやかり是に對して御評判、お江戸の若い衆、すみから角までつらりと頼み上まする

豊竹染太夫

是も豊竹門弟にて、いまだ未成熟し頃より豊竹流をかたり、餘程音曲み實のる時分江戸に下り、辰松八郎兵衛座を勤め、夫より下總の長子ちやうにくたり、芝居を始め、御最負の若衆、其外あまたの御見物を引き請け、あたり厳しく又江戸に飯り、出羽芝居を勤め給ふ、行年積りし故淨るりのいやみぬけ今は聞きよし、前方より詰語り、修羅のたぐひよし、ふしをも相應にかたはるゝ、なれども本地のそばをとをざかり給へば、つまる所音曲我儘なるべし、坂田半五郎どのにあやかつてほと拍子こんたんあるべし、諸藝仕上げ追付け故郷へは錦の土産、今一度難波の一曲一かなで所望仕り承りたい事でござります

竹本森太夫

此仁も大阪より下りし太夫、此芝居に足を止、今森太夫と御見物の口にかゝり給ふも淨るりのゐとく、當

代此流義口眞似すれば、野の末山の奥迄も下に置かず人々もてなす事、竹本の影おろかに思ふべからず、同藝者にててもかぶき役者獨旅して諸人もてなすことなし、爰へもかしこへもと呼まはるは義太夫ぶしきかん爲也、その上相應のこれしき取て能い事だらけ、かうじく聲を失ふもの也、此人の音曲未だ實のらねど、行年にしたかひ段々上洛致すべし、とかく本ぐりを大事にかけ、朝夕稽古本をはなさす近學あるべし

豊竹倉太夫

辰松八郎兵衛座

浪花堀江に住宅し、豊竹上野の門弟と成り、をりふしは床にあがつて稽古し、餘程語らるゝ内江戸辰松参り合せ、淨るりの音聲を聞き、給銀ののり究め、武州に同道し、初日より評判よく倉とのゝ仕合せなれ共、折々とんきよなる聲出るが氣の毒、是を大阪にて聞きしより耳にかゝらぬ由、珍重く、兎角修行がかんじんかなめ、今少し心を付けて語り給はゞ、段々立身あるべし、世話事丹前事の類かいなし、詰しゆら事よし市川團藏と組合して、あらうこと武道の詰合立りおなじ、市川は手取りの役者、此人はみじゆく

の藝、しかし辰松座の立者なれば、ちよつと團藏どのをかりまして傍らに置くばかり、せつしや不調法は御免く

竹本勘太夫

此人道頓堀嶋の内にて疊屋町の何某、仕似せの商人成しが、好める道とてせひなく淨るりにおもひそめ、終に竹本勘太夫と宿札打ち弟子も少し、ある時はかぶき芝居に出で、淨るり狂言のあひくを語り、それより江戸に下り、辰松座にて勤め此芝居の立者、見物のあたりも大てい、尤巧者といふにもあらず世間並の淨るり、若鳥なれど大阪から江戸へ飛で飛び損なはず、今日迄羽をのして乙にはあらず、かん太夫ともてはやさるゝは小鳥なれ共、囀よき故也、修羅詰節事世話事大てい難することなしたとへば市村竹之丞にあやかり、出世するやうのこんなあるべし、市村どのも年若此人も美若、若い互、竹之丞どのゝ如く御最負を受け随分修行の功を重ね上手の果に至り給へといふ

竹本佐内

此人ちくごの甥のとの也、竹本存命の貌見ぬ人、此佐

内どのを能見給へ、其儘の御影割次に のたとへ、お
良の似ぬは苦しからず淨るりがあやからしたい、な
れ共、音聲の筋どこやら伯父くさい、あの聲を以て筋
事何か心かけあらば、筑後二代の太夫ともてなさん
に残念、定めし御如在もあるまじけれど、心より發ら
ぬ道心末とけかたし、惜む事と此人の噂ばかり申出
しぬ、一とせ豊竹座に住み、節こと一つ宛毎日がへに
語られし時は、筑後の最來かと思ひ出しらくるい仕
りぬ、是も伯父御の影おろかにおもひ給ふな、いつし
か江戸座に有り付き、今日迄首尾よく勤め給ふ事お
手柄く、此上にも精を出し稽古をはげみ、追付上手
と成たまへ、たとへていは、此人の音曲、勝山又五郎
と並べおせくか、いひや何も角も勝山どの

竹本今太夫

近年筑後風はやり出し、江戸表の淨るり太夫あるい
は土佐節、半太夫節、永閑さつま、此類の淨るり消え
消えと成ぬ、今若衆専ら稽古なさるゝは、竹本豊竹
風、此太夫もと江戸の住人成がこつずいより此流れ
すき人となり、辰松座に出で大阪下の太夫同前に語
らるゝは、奇特とやいはん末頼母敷、淨るり今善惡の

筋のべがたし、素人細工には御器用、とくと上方の太
夫のかたりやうを聞き節配り、詰の差引き覺へぬい
て、追付け上手に成り給へ、大阪から抱に參る氣ざ
し、急使ゆへさつと一筆爰にてとめ畢ぬ
△右の外淨瑠璃太夫、江戸京大坂に満ちくたりと
いへども大阪江戸の芝居へ出給ふ計りをのせ其外は
略す

享保十二のとし

ひつじの孟春吉辰

攝州大阪南木挽町

正 本 屋

作 者 九左衛門

開板人 同 前

今昔操年代記下之卷終

竹豐故事序

時津風浪靜成難波の濱昔しの京と名に高き高津の宮の高臺に登りて見れば煙立茶屋はいろはの四十八櫓は八ッの定芝居爰繁榮の大湊深き惠や道廣き道頓堀の片邊に住居する老人有年壯き砌りより竹本豐竹の淨瑠璃を好て語る事は不得手なれど聞事は好者也幾年か東西の淨るり操の替りを見放したる事もなし住家より程近ければ芝居の木戸口へ成共毎日通ひ外題看板にても見て歸らねは氣分勝れず餘り此道を好る故知れる友連異名して筑後越前の頭字を取筑越翁と稱しける獨り住身の氣散しと欠天目に德利引寄せ一杯の酒に酔を催す酒呑童子の道行月に分れて月に行實哉盧生が見し夢の榮花の程は五十年假の浮身の樂しみと雪の段を副臥とし一睡せるを豐かなれ時まだ東雲の頃成に若き者共數十人入來り先生は御内に在ますかと案内す主じはむぐと起きて戸を開き是は是は未だ夜も明さるに各々打連立ての御越は芝居行と推したり初まる迄は余程間も有ぬらん先つ烟草にても參り緩々と御出あれして各々方は筑後へか越前

へかと尋ぬれば大勢の中より親父分進み出否此人數の中にも豐竹へ參る者も有又竹本を見に參る人も候か斯同道して宿元は出ましたれど西最負の東連中のと二組に別れて動もすれば喧嘩を仕出し姦しい事てこさります先生には此道の御粹方故芝居の譯を能御存の義なれば若い者共か片意地成最負論を致さす納得仕る御示しを頼みます然れば先今日は芝居行を追ての事に致し幸ひ能次でなれば淨瑠璃操の由來物語か聞まし度存ます若い衆何れも何とく尋ぬれば皆々聞て是は一段と能思ひ付御苦勞ながら御咄を頼み上ます筑越翁聞て同氣相求むる御所望幸某も徒然の慰み然らば物語致すへしと大字七行の稽古本二三札と巻物一軸とを手持て座上に居り此來歷の義は余程年經りし事と云又物覺薄きは老人の習ひ傳へ聞しに違し品も忘れたる事も繁からん併し所班らに咄し申さん聞給へと破れ扇子を又に搦へて聲繕ひし東西く東々西々

寶曆第六丙子の年

浪速散人一樂

引用書目

諸社神詫記	古今集
和歌雜題	和名集
增補鐵槌	下學集
羅山文集	南嶺子
指南	枯机集
孟子	史記正義
同殷本紀	顏氏家訓
周易畧註	爾雅
老子經	周禮註
毛詩註	文選註
事類全書	風俗通
書言故事	紀原
小補韻會	調音秘決
名談集	首楞嚴經
法界次第	圓機活法
白氏文集	世事談

竹豐故事目錄

卷之上

- 南都薪能事
 - 芝居濫觴之事
 - 淨瑠璃來由之事
 - 太夫受領之事
 - 三个津淨瑠璃流布之事
 - 古流之太夫盛衰之事
 - 井上播磨掾之事
 - 清水理兵衛之事
 - 竹本筑後掾來歷之事
 - 同播磨掾之事
- 卷之中
- 豐竹越前掾來歷之事
 - 同江戶肥前掾之事
 - 竹本豐竹東西之流義芝居繁昌之事
 - 故人之太夫達評之事
 - 名人上手下手三品之事
 - 名人之太夫達教訓之事

卷之下

- 五段續語り場役柄之事
 - 音曲狂言綺語之事
 - 呂律五音十二調子之事
- 卷之下
- 淨瑠璃作者之事
 - 近松氏之事
 - 三味線來由同寸法故實之事
 - 同藝者苗字に澤之字を付る事
 - 操人形之故事
 - 同古今達人之事
 - 淨瑠璃古今之序
 - 同當時太夫名人之評
 - 兩座中見立之事
 - 兩座繁榮並てうきげ逃助之字義事

竹豊故事卷之上

芝居濫觴並薪之能付櫓木戸等之事

○抑芝居と云名目の起りは人皇五十一代平城天皇大同三年戊子の二月南都猿澤の池の邊り成地面に大き成土穴出來て其うちより黒煙夥敷立登り隣國に覆ふ其毒氣に觸たる老若男女悉く疫癘に侵されける依之時の博士を禁庭に召さる占者考へ奏しけるは此穴より出る所の煙は地中の陰火也陰火亢ふり逆上する則は萬民惱むの理に候へは陽火を以て是を制し除かせ給ふへき由を奏聞しける故即ち彼穴の上に薪を積て燒立ける此術に因て煙も立止諸人の病惱も平癒せしとかや猶又興福寺南大門の前なる芝の上にて翁三番叟を舞はせ其邪氣を抜ひ退け給ひけり今の代に至りても其故實に任せ薪の能と號し芝の上に居て執行せり其遺風を以て其後は猿樂田樂能相撲舞歌舞妓上るり操を勤る場所を何れも芝居と號するは此所縁也御免を蒙りて興行するには櫓を揚る櫓も棧敷もなきは場多芝居と云也城戸と云は城廓に順して大切成名目

也後世城の字を恐れ木戸と稱す見物人の木札を改め取一人宛へ入る體鼠の小さ穴を潜るに似たる故俗に鼠木戸と云習はせり櫓の上に梵天帝釋を勸請し障礙災難を拂ふ祈りとす鑓を並ふるは非常を禁しむる道具也慶長の末に歌舞妓芝居始り寛永十二年に嶋田萬吉と云名代にて京都の北野祇園四條五條に於て淨瑠璃又歌舞妓をも興行し廿日卅日程宛勤ける由山城名跡志に見へたり其後承應三年甲午の年よりも京江戸大坂三个の津其に定芝居を御免有し也

淨瑠璃操之來由並太夫受領之事

○扱淨瑠璃の濫觴は永錄年中の頃織田信長公の侍女に小野の小通と云し秀才の艷女有古への小野小町をも欺く計の美女成しとかや信長公御生害の後は大閤秀吉公の御簾中に召出され近仕し侍りぬ昔紫式部源氏物語を作り給へる例に習ひて草紙を作り出せり其趣向は往昔左馬頭義朝の末子牛若丸幼年の間は鞍馬山に在ませしが御父君の仇敵平家を討亡はさんと密に彼山を忍び出金商人橘次信高と云し者を語らひ奥州伊達の秀衡を頼み彼方に向し給ふ折節三河の國矢矧の長者か亭に宿り給ふ彼館の娘淨瑠璃御前と忍

ひて契り給ひし舊事を彼小野の小通草紙物語に作り畢ぬ此矢矧の長者に子の無ことを歎き同國碧海郡峯の藥師如來に立願して儲けたる娘成故淨瑠璃御前と名付藥師瑠璃光如來十二神將の縁を質り十二段の草紙を作り淨瑠璃物語と號せし也後鳥羽院の御宇に信濃前司行長入道と云し人平家物語を作り生佛と云盲眼法師に此物語りを教へ節を付琵琶に合せて語らせけり彼生佛が生れ質の聲の風を今の琵琶法師は學ひたる由徒然草に見へたり是に例して岩船檢校と云し琵琶法師音曲に達せし名人なるが此十二段に節を付たり又瀧野檢校角澤檢校の兩法師三味線に合せて曲節を語り引ける天正年中の末薩摩治郎右衛門と云し者角澤檢校より節を習ひ傳へて攝州西の宮の傀儡師を語らひ木偶に仕形をさせ十二段を語り始めける永祿年中に六字南無右衛門と云し女太夫京四條川原に於て淨瑠璃操芝居を興行せり夫より次第に弘まり珍敷慰成とて大名高家の奥方所々へ召出され後には大閤秀吉公の御上覽にも入剩さへ慶長年中には禁廷へ召出され寂覽に及ひしより淨瑠璃太夫に受領を勅免成し也

三ヶ津淨瑠璃流布並古流盛衰之事

○慶長年中の末より江戸に淨瑠璃繁昌して油屋茂兵衛鳥屋治郎吉四郎與吉等の太夫有別して泉州堺の住薩摩治郎右衛門江戸に立越大に名譽を顯はし繁榮し後に法體して淨雲と云り是淨瑠璃太夫の根元也此淨雲の子も又薩摩治郎右衛門と號し相續きて名人也淨雲弟子丹後太夫丹波太夫源太夫長門太夫右の四人何れも虎屋と號せり正保慶安の頃四天王と稱美せし名人也次に近江太夫法體して語齋と號す江戸肥前同外記同土佐虎屋永閑江戸半太夫剃髮して坂本梁雲と號す此人大薩摩以來江戸近世の名人にして其名高し河東流と云も此末也

○京都に昔は淨瑠璃葉流はやす説經與八郎歌念佛日暮林清同弟子林故林達等を翫べり寛文年中に江戸虎屋源太夫上京有てより淨瑠璃繁昌し常芝居も出來たり源太夫弟子同喜太夫同相摸太夫越後太夫續て勤らる源太夫弟子山本角太夫延寶天和の頃一流を語り出し大に繁昌し山本土佐豫藤原房正と受領せり角太夫弟子山本長太夫治太夫八太夫等名高かりし中にも治太夫一流を工夫し芝居を興行し松本治太夫と一派立られ

たり是貞享元祿の始め頃の事也

○虎屋源太夫門弟伊勢嶋宮内一流を語り出し其弟子佐太夫相續し北野に於て常芝居を興行し後に剃髪して節齋と號す

○伊勢嶋宮内の弟子に嘉太夫と云人は紀州和歌山の生れ也元來謠に達したる上に伊勢嶋の風義を學ひ一流を建られたり天和貞享の頃より芝居を興行し次第に繁昌し宇治加賀豫藤原の好澄と受領せられ益々宇治の一流を葉流し新作の淨瑠璃を作らせ稽古本大字八行の正本を始めて板行させ謠本のことく節章をさし初しは此加賀豫根元なり此人謠の音節を和らけ語られし故呂律甲乙連續して今の世迄も其遺風残れり中頃は太坂へも下られ始終卅年余京にて宇治の一流を葉流せ寶永八年卯の正月廿一日に死去せられぬ法名は自證院本淨道融居士と稱し行年七十七歳也子息宮内相續て芝居を勤られぬ門人數多の中野田若狹富松薩摩立花河内宇治相摸等何れも譽れ有し也別して富松氏師匠の跡を相續在て芝居繁昌せり是寶永正徳享保の始め頃の事也併し當時は此流を語る人もなく絶果たる同前殘念の至り也

○都太夫一中と云し人は元來本願寺派京都或道場の住職成し由若年の頃より淨瑠璃を好み山本土佐豫松本治太夫等の流義を和らけ一流を語り出し終に相傳の寺を退き淨瑠璃太夫と成寶永正徳の比一中節とて他國迄も賞翫せしなり亂髪にて紋紗の十徳を着し白練の長袴少刀を指て出語りを勤められし也子息も都和泉豫一中と號したり

○都古路國太夫は一中の弟子成故始の名半中と云たり後に國太夫又豊後と號せり是一中節を又々取直し一流を語り出し三ヶの津は勿論諸國の隅々迄流布したり併し他の流と違ひ新作の五段物時代事杯は語られす世話事を専はら語られし也門弟數多在し内可内辨中等何れも名を顯はされし

○太坂表には前々虎屋源太夫表具又四郎道具屋吉左衛門等の太夫達語られしか共指て繁昌と云程の事もなかりしに元祿年中 of 比京都山本土佐豫の門人岡本文彌伊藤出羽豫芝居にて一流を語り弘められ太坂中文彌節とて持流しぬ殊更山本飛騨豫手妻人形の所作事操作取難へ見せられし故其時代の見物衆大に悦び繁昌し太坂中は云に及はす遠國迄も名譽を顯はされ

たり其門弟岡本阿波太夫も相續て世に鳴られし也此人聲柄と云甲乙共に揃ひ上手成しか其時移り年變りて一向當時は用ひず惜き藝を埋もれ仕廻に終られたり此外江戸京の古流皆々絶果當時は兩竹氏の流義諸國に弘まり繁昌す尤江戸の半太夫京都の國太夫等の流義計り残るとは云共是等は座鋪の一興又は歌舞妓の所作事或は舞子の地道行等の會譯に而已語りて段物操芝居等には曾て用ひす

井上播磨掾並清水理兵衛之事

○寛文年中大坂に井上市郎兵衛と云人有生得音聲強敷古流の節譜に心を付淨瑠璃の道に工夫を凝し風と江戸萬歳の音に意を付て體となし自然と珍敷流を語り出し終に芝居を興行し程無受領して井上播磨掾藤原の要榮と號し名譽を顯はし世に播磨流と稱美せり此人色々に音聲を遣ひ分品々の節を編出されし遣風今の代に傳り竹本豊竹共に此流を用ひられし上其流を汲太夫達井上氏の節事を稽古せずと云事なし其景事數多有中に掛物揃歌仙の段宮嶋八景鹽釜の段晴明神風跡目論の馬の段屏風八景七夕祭五天竺長生殿四季の段是等の類ひ員ふるに暇なし此芝居の繁昌を

浦山敷思ひ京都の銀主井上氏の一座を買切四條の芝居を勤め居られし内風與病氣付五十四歳にて死去し都の土と成られぬ貞享二年丑の五月十九日法名は夏月丁音日弘とかや傳へ聞し

○播磨掾門人多き中別して井上市郎太夫清水の理兵衛等は芝居をも興行し名高き太夫也就中理兵衛と云し人は安居天神の邊に住居せる料理茶屋成しか此道に執心深く聲柄能然も功者に能語られ井上氏の奥義を能吞込れし故播磨掾死後に花香失す諸人今播磨とぞ持流しける後に剃髮して伴西と號せり

竹本筑後掾並同播磨掾之事

○攝州東成の郡天王寺村に五郎兵衛といへる農夫有生得淨瑠璃を好み然も聲柄大音にして清潔かに甲乙地合自然と兼備せし大丈夫の生質也井上氏存命の間の淨るりを能學ひ次に清水の理兵衛に彼流の奥義を習ひ傳へ且亦其比京都に名譽を顯はされし達人宇治加賀掾に立入て音節の秘術を受て執行し古風を仰て心の師範となし肺肝を碎き鍛鍊を盡し終に一流を語り出し名を改めて竹本義太夫と號し貞享二年乙丑の年道頓堀に芝居を興行し鞠摔の内に篠の丸を付たる

櫓幕の紋所是竹本氏出世の始なり其上近松門左衛門新作を編出し追々面白き趣向と云義太夫の語り盛見聞人此太夫ならてはと持葉流しぬ殊更竹本筑後藤原の博教と受領を申請繁榮の譽れ四方に輝けり元祿年中^の末竹田出雲掾竹本氏の座本となられ人形操道具建に至る迄美を盡さるゝにより益々繁榮して流義弘まりぬ併し定命限り有て正徳四年午九月十日行年六十四歳を一期とし終に死去せられぬ法名は釋の道喜とぞ稱しける一生涯の中其名高く死後に至つて名譽を四方に顯はし世舉つて義太夫節と稱美し諸國一圓に此流を學ひ繁茂せり

○竹本政太夫と云人は大坂の出産中紅屋長四郎とて未前髪立の比より淨るりを好み竹本豐竹の流義に執心厚く満間と藝に仕負せ若竹政太夫と號し始めて豐竹座を二年勤めらるゝ内節謠に心を付て工夫せられ段々と淨瑠璃に實のり三年目に竹本座へ住て立物と成筑後掾の跡替りを勤らるゝは兼て心懸の深き故と衆人の稱美淺からず夫より次第に立身在て竹本義太夫と變名し相續て播磨掾藤原の喜教と受領せられしが不幸にして延享二年乙丑の七月廿五日に行年五十

四歳にて死去せられ不聞院乾外孤雲居士と稱し冥途の太夫となられしは扱々殘念く又大和太夫と云し大音の名人有若年の砌より竹本座を勤め故政太夫と肩を並べられし大立物成しが惜哉藝盛りに此世を去られて是非もなし此外陸奥茂太夫多川源太夫竹本頼母幾世太夫内匠理太夫和泉太夫河内太夫其余上手分の語り手^に在しか共何れも故人となられ無念殘念

竹豐故事卷之上終

竹豊故事卷之中

豊竹越前掾來歷並江戸同肥前掾之事

○豊竹氏は大坂南船場の出産若年の時より井上竹本の流義を學び家業を打捨淨瑠璃に心を籠めて工夫を凝し終に達人の名を世上に顯はされぬ世に冠たる器量の驗しにや音聲天然と格別に生れ質れし上衆人に秀でたる器量備はり十八歳の比より竹本采女と號して芝居を勤められ程なく豊竹若太夫と變名し暫時は竹本氏と一所に務められしか其壯若の時より別に芝居を興行して段々と立身有豊竹上野掾より再轉して越前少掾藤原の重泰と受領し益々名譽を世上に輝し晩年に至り功成名遂て隱居せられし後も芝居の繁榮町中の最負彌増れり年齢八十歳に近けれど長壽の上堅固也斯入納の連續したる果報人は當道に於て古今例なし

○江戸の豊竹肥前掾は元來大坂の出生也若年の比より此道に立入晝夜の修行怠たらず越前掾に隨從し新太夫と號して勤め居られしか享保年中お江戸に立越

程無芝居を興行有て繁昌し次第／＼に町中の最負強く豊竹肥前掾と受領し剩さへ芝居迄求められし由大きく成御立身猶又定芝居の淨瑠璃薩摩座辰松座は休の時も有ぬれど豊竹座計りは絶せぬ繁昌にて相續せらるるは徳の顯はれし所也三个津に古來より名人の太夫衆數多在しなれと芝居主と座本と太夫との三つを兼備せられしは京都に宇治加賀掾大坂に豊竹越前掾江戸には豊竹肥前掾との三人計りとの噂先以目出度そんしまゐらせ候

竹豊東西之流芝居繁昌之事

○竹本豊竹の流義は時に合ひし淨るりと云つへし其證據は古代に流布せし江戸の薩摩、土佐、外記、半太夫等の流京都の山本、宇治、都一中杯の節大坂には伊藤出羽掾座の文彌節は諸國の浦々隅々迄も葉流遠國邊土の西國順禮の衆中京都にては御内裏様大坂へ來ては出羽様の芝居を見て歸らねば西國したる甲斐もなく死ては焔魔大王の前にて云譯の無様に有難かつて持賞しけるに今にては其名代さへ無成ぬ勿論冷泉網戸平家説經歌念佛歌祭文杯云物は聞知りたる人も稀稀にて只兩竹氏の流義而已諸國一圓に流布せるは當

流の大き成矩摸と謂つへし猶又古來の淨瑠璃は文句短く只有邊懸り成事にて左而已切替つたる趣向もなし操道具も龜末成仕方にて大方は黒幕と山簾とにて仕舞ぬ人形の衣裳は^{輪泥}の摺込模様女人形は紅の表に淺黄裏^杯にて事足りぬ元來足付人形杯は曾てなかりし事也其後次第に操芝居繁昌せるに付道具建衣裳等漸々に向上に成別して竹本豊竹兩座と成てより東は西に負まじ西は東に勝らんと互ひに勵み出來益々芝居繁榮し淨瑠璃の作者は種々様々の趣向を工み出し道具建にも金銀を惜ます金襴にて舞臺を障かし或は數寄屋懸りの粹成思ひ付に智惠袋の底を振ひ人形の衣裳には縮緬緞子縹子金襴等にて美麗を盡し詰人形の外は皆々足付と成出遣ひの外は介錯足遣ひ立懸り歌舞妓役者の所作より増りて天晴見物事也併し西か東か一座計りにては斯繁昌もせまじ當時は町中の若い衆豊竹講の竹本講のと號し毎月掛錢を集め置替り淨るりの節進物の入用に仕給ふとかや扱々奇特千萬成御心中益々信仰なさるべし

名人上手下手三品評判之事

○猶又次でなから故人達の名言共を思ひ出る儘に咄

し申さん故陸奥茂太夫多川源太夫豊竹幾世太夫竹本播磨掾同頼母大和太夫和泉太夫河内太夫以下其時代に名人と呼ばれし太夫衆も筑後掾越前掾の兩元祖に及ぶ音聲は壹人も有へしとは思はれず兩祖師は天性自然の達人成故に御句甲乙偏頗の輩の師範には成難かるへきか其故如何となれば斯る衆中の師傳を受得ても音聲不都合の輩は其流を直寫しに語る人は稀成へし喩へは龜相成木地の道具を上手成塗師か塗上たると又鳥桐さつま杉杯の木工目本地道具との違ひ有かことく成へし兩元祖は本地道具のことし其外の上手分と呼はるゝ衆は皆下手を塗上げて能仕立たる上手成へし夫故に今の世に譽れ有衆中は皆下手を塗直して能藝にする筋を懇鍛しての上素人の弟子中に教へらるゝ故に此理を以て考ればケ様の太夫衆を師匠と頼み稽古せられは利方能からんと存せらる故竹本播磨掾當時の豊竹筑前掾豊竹駒太夫、竹本錦太夫等は音聲兼備の達人と云には非され共切瑳琢磨の功を積て名人と譽れを取られしと存る兎角上手分と呼るゝ太夫衆は何分にも生質の器量薄くては名は揚られまし又都べての藝者に名人と上手と下手の三品有先つ

名人と云は其一道に生れ付ねは達人名人抔といふ場には行届き難かるへし下手にても骨髓に徹して其藝に執心深く修行の功積りなば上手と云迄には成へき也名人に成へき淨るもは未だ功も無内より程拍子の間合能開語譯能聞へ清潔なる音聲なる上序破急の氣轉取り廻し能語らる人は名人になるへき器量兼て見へ透物也然れ共其名人と成へき仕出しの淨瑠璃なれ共稽古修行に精の入ざるは惡備に成上手分と云場迄も行届かず終る太夫衆も有し也又硬付て當りを取らんとのみ思ひ語衆中は大方下手分の爲業也顏氏家訓に曰上智は教へずして成下愚は教ふと云共益なし中庸の人は教へされは知らずと有此語實に宜成かな所詮名人と云は藝の道堪能にして其爲す業自然と至極の場に至り感應見物の心魂に的するを云成へし故竹本筑後掾同播磨掾隱居豊竹越前掾三味線故鶴澤友次郎人形當時の吉田文三郎等の類は神化不測の名達人と稱して誰か非言有らん哉次に上手と云は夫々の業を能なすを言也併し上手なれとも名譽の少き人も前に在し故陸奥茂太夫竹本頼母和泉太夫等也又上手の至る所にて名譽在しは故河内太夫當時の竹本大和

掾同政太夫等成へし又上手分の中にて大丈夫成聲柄は見物の讀る掛聲も多く是等の衆は時に合たる名物と云べし故竹本大和太夫當時の豊竹若太夫等を云べきか何分上手と呼るゝ太夫衆は數無こそ

名人之太夫達弟子中へ教訓之事

○井上播磨掾清水の理兵衛に示されて曰淨るりの一體秋は随分聲花に語るへし是人の陰氣を引立んか爲也春は引締て和らかに語るへし人の氣浮立時なれば引締ざれば人の情寄らす時の氣に乗して和らかならされは人の情に應へ難しと教訓せられし由是に依て思ふに増補鐵槌に北村季吟の曰呂は凡て和か成音也律は立て硬き音也唐土の音聲は和らか過て聞分かつし日本の言語は清濁分明鮮然にして剛く聞ゆる唐土は呂の國也日本は律の國也是和漢呂律の不同呂は陰律は陽也和朝には呂は春に用ひ律は秋に用ゆ唐土は是に反すと云云依之見る則は井上氏も此理に達せられし名人と覺ゆ

○宇治加賀掾門弟に教訓せられて曰淨瑠璃を稽古するに面白氣なく高き聲有美敷けれ共生得低き聲有大音にて下手なるは執行すれば上手に成へし一體小音

にて紋切あきれのせぬ音聲は何程心懸ても其甲斐なかるべし又如何様成上手成共我藝に自慢の心か有て語られは淨うきるり疎縮うすくちて聲花ならぬ者也と示されし

○竹本筑後掾へ陸奥茂太夫初心の砌問て曰女の詞は如何心得て語り可申や筑後掾答て曰第一に傾城の詞を能合點あてして語らるへし漂々はんにやうと語れは懦弱に聞へて下品也只挨止あてとどなく蓬然はんにやうと柔從成言葉を能々考へらるへし是さへ語り厭いと妊こなるれば外々の事共は皆語り口かるへし其故如何となれば語る處の者元來男成故估かとしたる事は生質に持て居る故也次に心得へきは高位成御方の詞をば能勘辨かんべんせらるへし貴き御方の詞成とて位を取過て語れは至才らしく成て聞くるし此段稽古に工夫せらるへしと教訓有しとかや

○豐竹越前掾門弟和泉太夫河内太夫等に示されて曰藝に精を入ると云は我役割の場を能工夫して稽古に飽迄精を出し扱床へ上りては心を安らかに思ひて語るへし稽古に精を入れてさへ置ぬれば易らかに語りても少も間拔はせぬ者也兼ての工夫に心を盡さす床にて計り精を入れるれば力身立行詰りたる様に聞へて賤し其上操への移り人形の働き迄が不都合に成と教へ

られし由傳へ聞たり

○加賀掾門人宇治甚太夫伊太夫寄合談せしは師匠の語らるゝ節所は見物衆極て讀さると云事なし我々は随分精を入大事に語りても見物衆の懸聲なきは合點行すと咄し合けるを加賀掾聞て曰皆の衆は語り出すと否や讀られんと而已思ひ始終面白様に語らる故要の場に至つて聲疼み聞ゆる故讀度ても聲の懸られぬ様に成也某しは唯何となく安らかに語り節所要の場處に至りて精を入語る也始終共見物衆の掛聲を取らんと而已心得は肝心の場當るへからすと云云斯る示しを傳へ聞れしにや又自分の發明成や故竹本播磨當時の豐竹筑前掾等は此教訓の理に合ひし語り方の様に聞ゆるなり

○岡本文彌の曰荒事を語る時は上りりの文句相應に強みを引張て語るへし上邊計りを語り并へても人形の働きと相應せず心と形と二つに成故當り目なしと云れし由尤成理也併し事は一圖に計り了解すへからず或太夫酒の酔の場を受取て語られしに床へ上る時に臨んで茶碗酒を二三盃吞て語られしに一段と見物の請能出來晴せしとかやケ様の人に若し手負の場杯

を語らさば床へ上る時毎日肩先にても二三寸計り切られて後に語らるや一笑／＼何様の場成共只一心の工夫に有へき也

淨瑠璃語り萬心得之事

○芝居を勤め給ふ太夫衆は文句の清濁り節付等にも心を付給ひて庵相の無様に心得給へかし物置納屋の連子は破れても人目に立ず座鋪の障子紙は少の破れにても見苦し、元祿年中に岡本文彌の語られし上るりに老女の戀慕せる段の文句にしらかみすじに油付と云所を岡本氏は白髪三筋に油付との閑語に語られし也虎屋源太夫此所を難じて曰此文句作者の心には白髪筋に油付にて有へし如何なれば三筋や五筋の髪の毛には油を付る事は成まし勿論三筋計りの白髪は目にも見へす手にも懸るまし併し文彌は天性の妙音にて何事も聲にて押せば是非に及はす一聲二節と云なれば文盲にても時の譽れを取し人也と云云故實を知り顔に自慢せられても聲柄の甲斐なき人を喩へて云は智恵有人の貧乏成に同じ不都合にても聲の能語り手は有徳成人の阿房に同じ賢くて金持たらんは猶以て好ましかるへし然れば聲の能を頼みにして執行

の薄き太夫衆は名人と云には成難かるべし
○藝者の身の上計りにも限さる事なれど運の能と惡敷と有先運惡敷人は至極の上手なれ共時に合すして用ひられぬ身の上も有或は自分の器量を顧みず古實を守るが能と計り心得筑後越前兩元祖の語られし通を直寫しにせんと而已思ひ語らるは了解違ひと云成へし斯る人を喩へて云は學問に能達したる僧の談儀の下手成と同意也佛の本意計り説て方便説を雜へざれば聽衆眠氣出次第に參詣も薄らく者也而れは何を以て衆生に濟度利益を施さん哉機に因て法を説と云なれば此段淨瑠璃に引當工夫有べし併し芝居を見淨るりを聞は鬱氣を晴さんが爲の慰み事なれば兎角して成共見物衆を悦はさんと名譽有し太夫達の眞似をし又は歌舞妓役者の詞色ことばいろを似せ或ひは放廣おどろにて當りを取らるゝは本道の當りとは云難し道外がましき語り方は場の見物衆への當りは有へけれど棧敷に居るゝ衆の耳には悦はれまし何とやら此近年に及ひては兩元祖の語り弘められし遺風は薄らきし様に聞ゆる也

五段續語り場役柄之事

○連中間て曰淨るり五段續拾壹貳幕の内何れの場合
大切に候哉、筑越翁答て曰是を五段に綴るは能の番
組に同じ初段は脇能貳は修羅三は葛事四は脇所作第
五は祝言也大體是に表せる物也其内第一太夫の重ん
ずる所の役と謂は太序と三段目の切第二は四段目の
切と道行第三は二段目の切と三段目の口也第四は初
段の切と四段目の口也又出語りは三段目の詰と同敷
大切成役也其外作趣向に依て景事杯に限らず此余の
所にも要とする能場所有べし古來より兩元祖大概此
意を以て勤め役制をもせられたり右に談するごとく
太序は一座の立物太夫の勤めらるへき第一の大役也
先づは其日の祝義と云次には見物衆への一禮の爲也
尤一部の始成は末々の輕き衆には語らせ間敷場也爾
雅の釋詰に曰序は叙也緒也と然る則は其綱要を擧る
事璽の絲を抽つるか如しと云云序と云字を糸口と訓
也其糸の口亂れなば始終の亂と成なん物を而るに此
近年良共すれば輕き太夫衆の大序を語らるは歎かは
敷事に非すや併し今時の太夫達は兩元祖程に大丈夫
に有ざる故三段め四段めの本役を大事と思はるゝか
ら未だ見物も入揃はさる間の役故此大役を未熟成衆

中に勤めさゝると推量せり故筑後掾存命の節は今時
程淨るりも永からず越前掾時代に至りては五段續も
次第に永く成しか共大序三段四段めの切は勿論五段
目に景事の有しか共要の場は越前掾壹人して勤めら
れし也老子經に曰天下の難事は必ず易きより作る天
下の大事は必ず細か成より作ると云云然れば太序は
勿論其外の役義を緩かせにし給ふへからず又末々の
太夫衆初段の中五段目落合等の輕き場を受取給ふ共
其役義を大切に存られ工夫を付て勤め給はゝ次第に
立身し給ふへし指せる場にあらずとて捨鞭を打給ふ
ことなかれ

音曲狂言綺語並呂律五音十二調子之事

○惣じての音曲を名談集には郢曲共俳優共戲遊共云
なり何れも狂言綺語の戯れ事也と云云狂言とは物狂
は敷詞也法界次第に曰綺は側ら也語は辭ば也と云心
は道理に卒を綺語と名づくと云云周禮の註に曰發端
を言と云答へ述るを語と云と云云毛詩の註に曰直に
吉を言と云論難するを語と云と云云然れば狂言綺語
と云は堅き事を和らげ或は方便の爲に戯れ言をなし
て愚か成人を善道に導引謀計の誠しめ也白樂天の洛

中集の記に曰願くは今生世俗文字の業狂言綺語の誤りを以て翻かへして當來世々讚佛乘の因轉法輪の縁となし給へと云云此文に依て見る則是諸法實相の理顯然たり峯の嵐谷の響き鶉鳴鵲噪皆佛法と觀ず況哉此淨瑠璃の文句趣向表には世間の戯相を顯はすといへ共勸善懲惡の深理を含み詞には當世の人氣を察して作文をなせり神祇釋教幽玄戀慕哀傷兵戈君臣父子夫婦兄弟朋友等の五倫の道を正し世の爲人の爲專一賞翫すへき道也信すべし見物すべし聞へし心を止て語るべし

○夫若以謠淨瑠璃等の郢曲の譜は狂言綺語の嬉遊言成とはいへ共其態堪能に達する則是音義正しく大鐘、大族、姑洗、蕤賓、夷則、無射等の六律に通し大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘等の六呂にも達す史記の正義に曰律は氣を統て物を類す呂は陽を統て氣を宣ふと云云呂律調和すれば化來宮商角徵羽の五音に達せる故衆人の六根に徹して心身を清させ六塵六情の偏欲を厭離なさしめ神魂を清淨になさしむる也調音秘決に曰○甲は聲の始め也其音上つて天の五蕚と成寒暑燥濕風なり呼吸則はち天也陽也一調子高きを甲の

音とす○乙は聲の終り也其音下つて地の五位と成金水木火土なり呼吸則はち地也三調子下るを乙の音とす○呂は悅ひの音也陽也双調黃鐘一越調等は呂の音也是天を司とる天上には樂しみ多き故に此調子を悅の音と云也○律は悲しみの音也平調盤涉は律の音なり陰也是地を司とる下界には苦しみ多き故に歎き憂ふるの音とす○角の調子は肝の臟より出る和調にして直をなり是双調なり○徵の調子は心の臟より出る和調にして長し是黃鐘調也○宮の調子は脾の臟より出る大きに充て和らかに緩しは一越調也○商の調子は肺の臟より出る軽く少けれども勁し是平調也○羽の調子は腎の臟より出る沈て深し是盤涉調なり○壹越、斷金、平調、勝絶、下無、双調、鳧鐘、黃鐘、鸞鐘、盤涉、神仙、上無是を十二調子共十二律共云也

○熟思ふに筑後越前は天性の達人にて音聲の開語自然と五調子十二律に合ひし淨瑠璃一道の聖也孟子に曰大に而之を化するを聖と云と云云生得にして事に理に達するを聖と云也と註す而れは兩元祖の當道に達せられし所を以て見る則是聖といふに何ぞ憚る處のあらん哉周易の略註に曰聖人の道は天地の萬物を

育つかことしと註せられしは尤宜なるかな竹本豊竹
の兩氏當道を世に弘められし徳に依て今當流の淨瑠
璃世上尊はらに流布し是を産業として世を渡る人諸
國の中に幾千萬人といふ數をしるべからず是天地の
萬物を育くみ養ひ給ふ理に違ふへからず其功大ひな
らすや

竹豊故事卷之中終

竹豊故事卷之下

淨瑠璃作者並近松氏之事

○淨瑠璃の作者と極まりたる人昔古^{いにしへ}はなし誹諧師或ひは遊人杯の慰みに作れり中昔曆と云淨るりは西鶴翁の作也とかや是を産業となせる人は近松門左衛門に始る此人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察して世間の世話を能吞込て百余番の淨るりを作られり其文句言妙不思議を綴る元來は京都の産にて去る堂上の御家に仕へ本姓は杉森氏にして由緒正敷人成しか故有て浪人と成元祿年中の始め歌舞妓芝居都萬太夫座の狂言作者と成又宇治加賀掾の淨瑠璃をも作られたり此人世上作者の元祖也其後大坂に立越竹本筑後掾の作者とならる享保九年辰十一月廿二日七十余歳にて死去せられぬ平安堂巢林子と號す法名は阿禪院程矣日一具足居士と稱せり近松氏過行れしか共猶餘光失す相續き數多の作者出來りて趣向作文をなすといへ共元來近松程の器量無き故か古語の取誤り古實の相違有職の違ひ等間々有て見聞苦敷品も多け

れば畢竟は狂言綺語成と丁簡せねばならず併し機轉發明の作意劣らぬ所も有又は稀有の趣向等も出さるる故大當りを取らるゝ段是又何れも達人と云はんに強て難有べからず其外作者と名を揚られし人々には錦文流、村上嘉助、紀の海音、西澤一風、筑後の座本竹田故出雲、松田和吉、長谷川千四、並木宗輔、同丈輔、安田蛙文、爲永太郎兵衛江戸にては北條宮内、塚原市左衛門、岡清兵衛等此外にも有しかど換骨の餘情薄く名高き衆ならねは略し畢ぬ併し是等は何れも故人と成られしも多し當時東西の座共に名譽を顯はされし作者達は人々の知れる事なれば談するに及す

三味線來由並寸法三筋糸付澤之字苗字に付る事

○連中問て曰三味線の緣起をも御物語下されは忝じけなからんと望みける筑越翁聞て御所望に任せ咄して聞せ申さん抑々三味線の來由と謂は元來琉球國の弄そび物成故琉球絃と號す琴瑟琵琶和琴等の音を摹したる物也日本に是を傳來せし始めは人皇百七代の帝正親町の院の御宇永祿五年壬戌の春琉球より泉州

堺の津に渡り來る其比の武將織田信長公下知有て是を朝廷に献し奏覽に入奉らる時に帝久我右大將通興卿を以て其比音曲に名譽を顯はせし琵琶法師瀧野檢校を内裏に召出され是を彈せて叙聞在ませしに其郢曲甚はた妙音成しを叙感ましましぬ其砌京都に名を得し琴琵琶の細工人龜屋市郎左衛門石村と云し者此三絃を摸し作り出せり琉球には三絃の胴を蛇の皮を以て張ると云共我朝に斯る大き成蛇皮なし依て猫の皮に替て是を張たり此三絃の形ち大體琵琶に同じ惣尺三尺は天地人の三極を表し棹長貳尺余は陰陽の二氣海老尾の五寸は天の五星胴幅六寸は地の六合同長さ六寸余は地の六種震動厚さ三寸は高下平の三形を象れり轉手絃手又天柱共書也是天の象ちを表し反首に半月の形ち有海老尾の糸卷に三台の星を象とる一の糸は虛精と云二の糸は陸淳と云三の糸を曲順と號す十二調子の内壹越斷金平調勝絶の四つを一の糸の中に兼備ふ下無双調覺鐘黃鐘の四つを二の糸に兼備へ覺鐘盤涉神仙上無等の四調子を三の糸に兼備ふ首楞嚴經に曰譬へは琴瑟琵琶の妙音有といへ共若妙手無んは終に發する事能はすとの佛説のことく堪

能の達人此三絃ひくとを鼓則は衆人の神魂に徹して邪念を退ひくとそく而れば自然と六根を清淨ならしめ神明佛陀の加護に預るへし亦懦弱好色の意を欲して彈則は聞人慾惑亂の念を發す尤欽つしまざるべけん哉然るを傾城遊女藝子野郎等の業に翫物となせるは歎かは敷事ならずや當世の三絃は其形少し異にして惣長三尺一寸五分海老尾五寸二分棹長さ二尺五分胴幅六寸同長さ六寸六分天手三寸五分也○世事談に曰三絃は永祿年中琉球より渡る或人泉州堺の津の盲人中小路と云法師に取らせたり其後虎澤と云盲人本手端手の術を引始む慶長の比角澤と云法師琵琶の名人成しか三絃を手鍊して小歌に乗る其比又淨瑠璃節出來たり此淨るりに乗せ彈は角澤か始め也其後大坂に城秀と加賀市との兩法師此術を得たり後に江戸に立越加賀市は柳川檢校と成城秀は八橋檢校と成り當時八橋流柳川流と稱するは此兩人か術也是を三絃と號せるは三つの糸筋有故也然れば淨瑠璃三味線は角澤檢校を元祖とす角澤の澤の字の縁を取て後世淨るり三絃を産業とする衆中竹澤野澤鶴澤富澤等と云成へし大坂に中古達人と呼ばれし人々は竹澤權右衛門同彌七野澤喜八

郎富澤歌仙竹澤善四郎鶴澤友次郎同三二此衆中は故人と成られり野澤後の喜八は此近年休息是も殘念

操人形之故事並名人之遣手付古今達人之事

○連中問て曰操人形の始りを承り度候筑越翁答て曰
勻會に曰機關木偶は人に象とる肢と體と聚め集まる
謂也云云活法傀儡の詩に曰絲を穿ち木を刻みて巧み
神のことく限り無し機關此身に在と云云文撰の註に
曰手の伎を技と云體の才を藝と謂と云云事類全書
に曰木偶は人形也本來は喪家の樂なり漢に至て始め
て喜會に用ゆと云云傀儡子又は郭禿共書也委は風俗
通紀原書言故事顏氏家訓等の書に出たれは唐土にも
古來より翫そび來る哉順の和名集に傀儡子でくつか
ひでくいつ共訓を付られたり指南に曰木偶を弄そふ
者を屈偏子と云へり本朝攝州西の宮より出る俚俗是
を名つけて宮出狂坊と云と云云史記般の本記の正義
に曰土木を以て人形を對象すと云云此説を以て人形
と號する者成べし南領子に曰傀儡は木偶の戯むれ也
と註に曰今云人形舞し也と云云然るに和歌雜題には
傀儡と云てくぐつと訓て遊女の事とす傀儡何ぞ遊女
に限らんや惣て人形舞しの事成へきを遊女の事に限

る様に成しそと思ふに攝州西の宮より人形舞し世間
を廻りて始て遊女の人形を第一番に立て遣ふこれよ
り轉し來れりと見へたり下學集に曰日本の俗遊女を
呼て傀儡と謂と云云是等の本文に依るときはおやま
人形遣ひを立物札に書來れり枯机集に曰傀儡師とは
出狂坊舞しの事也是を詩の註には滑稽優人といへり
滑稽とは嬉游言を云て人を笑はする也優人とは猿樂
の事にて狂言をする者成は皆傀儡子の類ひ也と云云
諸社神託の紀に曰西の宮惠美須太神御託宣に年の始
に諸々の民爾笑於催左世勇勢而富貴於護牟と云云此
神託に依て往古より此所の民春の初めに女人形に吳
服の所作事を舞す也是を紗の／＼衣と號せり其外異
相成人形を舞し京都を始め國々を廻り獸の皮を終に
出して惡ひ事した者は山猫にかまそふと威す是上代
の勸善懲惡の誠め質素正直の神教への遺風出狂坊を
舞して笑ひを進む此故に此傀儡子を神道秘要には惠
美須賀質と號する也

○寛文の比江戸に小平太と云人形遣ひの名人有羅山
文集に曰鼓吹蠻琴有て木偶の動くに應し曲節有且是
を操り是を引板を踏んで呼者と木偶の相得たる事殆

と生るが如し今日の爲所の者江都第一の假師小平太と號す近世傀儡の巧手たりと云云此小平太おやま男人形共に能遣ひし名人のよし傳へ聞たり相續ておやま次郎三郎此道の達人也近世には辰松八郎兵衛名譽を顯はされたり京都には貞享元祿の比おやま五郎兵衛同五郎右衛門大藏善右衛門正徳享保の比三升平四郎宇治久五郎三十郎與八郎等何れも名を得し上手の遣ひ手也大坂には辰松氏藤井小三郎桐竹三右衛門等のおやまの名人有し也當時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人也相次て若竹東工郎譽れ高しおやまは今藤井氏男人形には桐竹吉田豊松、若竹氏の中に上手分多し

○手妻人形は山本彌三五郎飛驒掾に始まる南京系操は寛文延寶の比より遣ひ始めし由京都山本角太夫芝居に専はら遣ひし也又其比に江戸和泉太夫座に野呂松勘兵衛と云し人形遣ひ有頭平めにして青黒き顔色の賤氣成人形を遣ひて是をのろま人形と云のろまは野呂松の略語也又鎌齋佐兵衛と云は賢き質の人形を遣ひ相共に賢きと愚成との體を狂言に仕始めし也其比の人愚かに鈍き者を賤しめのろまと云異名を付痴

漢に比したり此野呂松氏を祖とし京大坂の芝居に野呂間龜呂間龜呂七麥間等と名を付道外たる詞色をなし淨るり段物の間の狂言をなしたり近來はケ様成事は捨り知れる人も稀に成し也出遣ひは辰松八郎兵衛に始る此人古今の達人にて手摺を放れ無量の手段を遣ふに全身少しも亂るゝ事なし京大坂にて譽れを取後に江都に來つて益々其名高く成刺さへ御免操の櫓幕を上芝居を興行せり是を辰松座と號せし也

○筑越翁の曰扱々何れも打揃ひ此道に執心の厚き段愚老も大悦是に過す次手ながら各々へ御目に懸る物有と巻物一軸取出し忝も此書の義は去年節分の夜不思議なる靈夢を蒙むれり先年死去有し近松門左衛門の靈魂來られ夢中に某かしに與へられし處の一巻也是にて讀上申さん間各々謹んで拜聽有へしと三度推戴きて紐を解高らかにこそ讀上げる

淨瑠璃古今之序述當時之太夫名人之評

○夫淨瑠璃は人の心を種として萬づの趣向とはなれりける世の中に在人事業繁き物なれば心に思ふ事を見る物聞物に付て作り出せる也色に愛る世話事義理に清る時代事を見れば幾年生る者何れか此道を好ま

ざりける力をも入ずして人の情を感せしめ嫁を惡む姑にも哀と思はせ男女の中をも和らけ恪き親父の意をも慰むるは此道也過し時世の竹本筑後掾なん淨瑠璃の聖也又豐竹越前掾といへる人在けり淨瑠璃に奇敷妙也けり賴光山入の道行は竹本氏の一節に綾錦のごとく語り雪の段の出語りは豐竹氏の音聲に雲井迄も響きなんと思はる越前は筑後の上に立む事難く又豐竹は竹本の下に立む事難くなん在ける此人々を置て吳竹の世々に蔓茂り多き門弟達の中に竹本播磨掾なん世に知られし名人なりしかど惜哉不幸にして短命也爰に往古の事をも此道の意を得たる人當時は僅に五六人なりき而はあれ共彼是得たる所得ぬ所なん有れり

一豐竹若太夫は歌仙第一僧正遍照の歌の意に同じ淨瑠璃の様は得たれ共其言葉花にして實少し譬へば圖に畫る女を見て徒に情を動かすがごとし

一豐竹筑前掾は歌仙第二在原業平の歌の意に同じ其情余りて調子下し譬へば盛り過たる花の色は少しといへども而も薰香有がごとし

一竹本政太夫は歌仙第三文屋康秀の歌の意に同じ淨

瑠璃は巧者にして其體俗に近し譬へば商人の能衣着たるがごとし

一豐竹駒太夫は歌仙第四喜撰法師の歌の意に同じ詞幽か成様なれど始め終り正しく喩へば雲隠れせし秋の月の曉の風に晴るがごとし

一竹本大和掾は歌仙第五小野小町の歌の意に同じ古への竹本賴母の風也音聲艶敷して氣力なし喩へて謂はゞ能女の惱める所有に似たり

一竹本錦太夫は歌仙第六大伴黑主の歌の心に同じ頗逸興有然共少し野鄙也譬ば薪を負る人の花の蔭に休めるがごとし

此外の太夫達其名聞ゆる野邊に生る葛の榮曠はへつろこり林に繁き木の葉のごとくに多かれと未だ淨瑠璃の奥義には至らざるべし竹本の流絶せず豐竹の節細やかにして正木の藤永く傳はり鳥の跡久敷止まらば程拍子をも知り事の意を得たらん語り人達は大空の月を見るが如くに上代を仰て今を希望さらめとそ

○名代 竹本筑後掾座本 竹田出雲掾座當時出勤之衆

○太夫至功美麗音節無双

竹本大和掾藤原宗貴

成功甚深琰磨無類

竹本政太夫

風雅名譽獨步無格

恬然優美

竹本春太夫

聲花秀術

竹本錦太夫

至要表珍

豐竹鐘太夫

功勞天晴

豐竹新太夫

功術珍重

同友太夫

同土佐太夫

同長門太夫

功術

豐竹時太夫

丈夫

同十七太夫

寬潤

同桐太夫

同染太夫

同組太夫

若術

同緒太夫

丁寧

同式太夫

對揚 同澤太夫 折太夫

家太夫 森太夫

仲太夫

○三味線 妙術 明廉

大西藤藏

○三味線妙手

野澤文五郎

淳朴

鶴澤重次郎

晏如

竹澤甚三郎

鶴澤文藏

竹澤宗七

功若

富澤正五郎

同伊八郎

鶴澤龜次郎

○人形立

役眞至極拔群操宗匠

吉田文三郎

新參

竹澤幸助

野澤文藏

鶴澤喜太郎

おやま風流美躰

田中小八

最媚

小松文十郎

○人形おやま

嬋娟當中美艷無上

綏飾芬芳美壯

藤井小八郎

立役起居壯健

桐竹門三郎

立役人形

莫大舉動發明無類

若竹東工郎

同箕裘業

吉田文伍

粉骨時明

若竹伊三郎

度量的中

豐松彌三郎

舉動尋常

吉田彥三郎

術巧

竹川七郎次

考積功

中村勘四郎

若發

豐松祐二郎

若術

吉田藤五郎

同貫藏

淺田太四郎

同門三郎

若竹清五郎

若竹友五郎

豐松元五郎

土佐幸助

同三津八

松嶋又三郎

吉田嶋八

同彦七郎

豐松藤四郎

同勘三郎

同源三郎

同源八

笠井茂十郎

桐竹定七

吉田平治

福嶋市之丞

柏井傳三郎

若竹三十郎

同清次郎

太田源五郎

田中平次郎

京都出勤之衆中は除之

桐竹助三郎

淺井德二郎

笠井乙五郎

藤井八十八

同新十郎

卷軸功老鍊磨

○名代座本 豐竹越前少掾座當時出勤之衆

人形卷軸

積術模範逞賑

豐松藤五郎

優艶妙絕音聲無類

豐竹若太夫

○此一軸の意は紀の貫之の撰み給ひし古今集の序に

幽玄至妙潤色無比

豐竹駒太夫

例らへ當時に名譽を顯はせられし太夫衆の藝の品を

察し六歌仙の列に准して位次に構はらず近松先生未來記に認め置れし書なり初心の衆中たり共淨るり修
行の旁々は此意を熟得有て稽古したまひて然るべし

兩座繁榮並逃助之字義事

○花奢優艶は京都繁榮の勇ま敷は江都北濱の景氣と
淨るり芝居の繁昌は大坂に並ぶ所は有まじ上に伸ふ
る所の先代の役者衆に名人達多かりしといへども古
代と當時と競べなば當代の衆は皆々術を盡したる名
人衆數多有べし就中京都には加賀掾の門弟中の以後
定芝居の操はなし近來竹本氏の太夫衆折々上京在て
語らるれば大躰程も知れたり然れば操淨瑠璃の芝居
は大坂を第一とし諸國の水上と存せらるべき也各や
我等斯る土地に生れ住居して大切成芝居を心安く見
物致すは大きな成果報と悦び給ふべし然るにてう助や
ら云人は札錢場錢も拂はずして見物致さるゝよし近
比卒忽千萬成仕方と存る逃助のてうの字はのかるゝ
と訓助の字はたすかと讀と承はれば札場錢共に逃
れ助からるゝと云義理にて逃助と呼來りしと傳へ聞
ました猶又最負の二字は力を副ると云字心なれば自
然作趣向の惡敷時成共惡き所は能取なし能場は益々

評判能なさるゝが肝要と存る惣じて最負といふ物は
己が心の依所酒吞有は餅食有砂糖好みと唐辛子好は
大きな成違ひなれど夫々の口中に味はひて心の欲し樂
むに二つはなし鶴の鶯が永いとて切ても捨られず鴨
の足が短ひ連繼足もしられず柳は縁に景氣を顯はし
花は紅ひに咲て人の目を悦ばしむ我等は年來竹本豊
竹の兩芝居共に最負に存し見物致すれば最負といふ
名も有てなし唯好者と申す成べし各々方にも其意に
て見物し給ふべし猶又此席へ出座なき若い衆中へは
各御宿處へ御歸りの節宜敷評判頼みますぞ評判く

竹豐故事卷之下大尾

歌系圖

本邦慶元建藝巨來、長歌短歌雅歌稗歌託三絃誦三者非古也多是民間之諷謠也、以故識作者音者之姓名者亦鮮矣、然究其所興、大平餘風鼓腹而不知困勞者所爲也、所謂安以樂也、偶有怨者哀者限其人矣、惜哉具諸八音列諸舞人則爲樂者每有之乎、不徒悅兒童婦女之聽而已、流石庵羽積恐其久而湮滅、治問博求得四百餘篇之姓名、各附之其傍、題曰歌系圖、其功亦勤矣、巧序予不諳其事、然徵古而言、今如斯、若夫傳之千歲之後、羽積之功豈空乎、

浪華 梅花老人序

鳥丸光廣卿も常になげぶしの御口僻そあなるよし尋ね申せし人のあれば御作のよしして御自筆にをなし空なる影かとおもて見ればあやしや月さへさまとともにみぬめてかはるけな

投節とたにいへは其節の極まれるものぞと思はれぬるもまことに百とせあまり過にしさま也とそ八繼の手馴棹もたちまち胴の中へ曇みこむさかしさ來へき宵なるさゝかにのいとものつれば早おとゝひの唱歌となりきりくすの舌鼓もちよいとあさつてはのべかたきのうたひらきは君か代のおたやかなる中のせわしさ實や諷の世に生れ合されし羽積の主むさしあふみの御心をおもひやりつゝこのめる事とてまめやかにいかいつけまはれるも世の人心をそ推量の推こそ今の粹にあたると去學者の粹のいへるに愛をやもたさんと猶此書に好士の書をとりくにとりあつめ調子の榮となせるも眼の呼子鳥やこゝろの時鳥やうくひすの子も啼初る比とて朝霜に筆を慢すもつゝ端書とはなりて斯は

そらあきらけきはしめなる冬の日 おろし藻

歌系圖附言

一 琴三絃の唱歌を、あながちに淫風とおししりぞくるはいかにぞや

我御國の道たる歌も、其はじめはおもふ事をうたひて心をやるよりの名にして、たゞかりそめにうたへるまゝなるが、後には詞花言葉の巧を競ふて、其法おごそかになれるになん、されば其うたへるいにしへをおもふに、ちはやふる神代の事はしばらく置、人の代となりても、萬葉集を見るに、大友家持卿の比も、猶歌はうたひしにや、宴會の席などにも、自作の新歌を誦すると、古歌をうたふものありて、其誦するをききて書とむるものゝ、新歌とも古歌ともしれざるには、新古未詳とするせりうたふ事なくば、酒宴の席にて古歌を誦する事はあるべからず、又それより後の世にも、清少納言の枕草紙に、うたは杉たてゐる門、神樂歌もをかしと見えたり、杉たてゐる門とは古今集雜歌に出たる、我宿はみわの山本戀しくば、とむらひきませ杉たてゐる門、といへるなり、又源氏物語に、月にかはり行とも久にふる、みむろの山のとつみや

どころといふ萬葉集の歌をうたへる事見えたり、もろこしにも、堯の代には擊壤の歌とて、つちくれをたたきて聖代をうたひ、又書經の益稷にある、帝舜皐陶の歌はうたひ給ひし事、其辭にても明なれば、治れる御代に、歌をつくりてうたふはめでたきためしにしてそのかみをしのぶ心すさびなれば、是を淫風とのみいはんこと、不風流の人といふべし

一 むかしは歌をめさるゝ官ありて、雅樂の字をうたとよまれしも、うたひものを掌る官なればなり、江次第に大歌小歌の目見えたり、是はいかなるものや今考がたし、又狂言舞などに、小歌といへるは、今のはやり歌の類なるべし、太神宮式にも歌長二人と出たるは、雅樂をめさるゝ時、唱歌をつかうまつるものをいへるならん、又さいばり今様朗詠などみなむかしのうたひものなれど、今のうたふ歌とは、其しらべ異にして、こゝにあづからざる事なれば詳にこれをしるさず、但うたといふ言葉はうたより出たれば、幸に古風の今に遺れる事、此歌のふしあるをや、誰か古を尙はざらん

一 今の世にうたふ長歌等、松の葉に出たるは、此曲

の古調にして、いはば古今後撰拾遺の歌の體ともいふべし、あからさまにをさなきやうなれど、巧ならざるにあらず、華實相半して、えもいはれざるあちはひありて、後世調をもとむる本歌とする所なり、又次橋檢校がしらべをあやどりしより、鶴山吉村の比までは、詞花集より新古今にえらはれし歌の體ともいふべし、巧にして卑陋からず、しつとりとして實にみやびやかにして、花尤も艶^{には}へり一應^{およそ}此歌のしらべは、しめやかにわびしからんよりは、みやびてはなやかならんとむねとして、作りもし、手をもつくれば、此時代の風調を賞翫すべきなり、かの歌木の御坊のさかに唱起してより、風調一變して、實やら花やら品さだめがたく、かくれんぼといへば六段れんぼを合の手にかすり、はくさいしには、上るりめかせし一くせをほのめかすなど、禪家に所謂一足飛の悟りにして、正法眼にあらずといへども、遊藝は活機を尙びて、時におこなはるゝをいさぎよしとすれば、是又難ずべきにあらず、されば新曲の時めくも、しはがれたるがしらぶればものかなしく、古調のわびたるも、はなやぎにははすればうかれ出るさまにされば、かしこの

色事、このくせち、あるはやさしうあはれなる、あるはをかしうざればみたる、きくまゝにこれ歌につくり、糸にもして、えんなるあたりにうたひしらべせんこそ、になきたのしみなりけらし、しかはあれど、かくたのしきも春秋の富るほどの事にして、老ては思ともかひなし、年々歳々人同じからざれば、わかきうちに歌を作りて、世にうたひひろめんには、老て後に、そのかみをしのぶなさけともなりなん、心すさびともなしてん

一 此篇をえらべるきはめて問はかるといへども、猶差謬多かるべし、已に清平調のごとき、もはら柳里恭の作のよいいへど、是は柳君長相思の作ありしほど、朱陸^{のまや}_{嘉兵衛}といふ人、同じく樂府題を采て作れる也、しかれども柳君の作とおもへるにも、いさゝかより所あり、余これを芦屋主人に聞り、芦屋主人童齡のころ、しばし柳大夫の第に過れるに、或時大夫のたまふに、此頃清平調といふ新曲をきゝしが、いかにもおもしろき調など、恨くは其詞うまく李青蓮か詩意を得ざる事を、よて我其調にしたがひて詞を換たりとて、扇に書給りし、其扇は其頃三津崎檢校に

おくりしが、わづかに其はし／＼をおぼえしとある
をきくに。

雲とのみ、みよし野とほき、雪の袖、花のすがたを
思ひねの夢、妻戸の柳春風ふけば、よれつもつれつ
かた糸の云々

此下わすれたり、此詞も猶たがひたるやしらずとな
ん、おもふに此類猶多かるべし、四方好事の諸君子か
かる事あらんには、ねもころに正し示し給はん事を、
庶幾にこそ

・ 流石菴羽積述

酒劫花魔埋沒人無數還堪悟回首未暮正在邯鄲路

雪蓬書跋

歌系圖

浪華 流石菴羽積選

三下りの部

さをの露

吉村檢校調
柳里恭作

かたしがひ

繼橋檢校調
千苗作

さくら川

(前)藤永檢校調
駿十作

かよふかみ

歌木檢校調
馬宥作

袖もみぢ

小野村檢校調
羽積作

四ツの草

菊永檢校調
象牙屋次郎右衛門作

塵むしろ

政島檢校調
川崎屋三右衛門作

三ツの星

繼橋檢校調
鴻池宗羽作

糸のしぐれ

鶴山勾當調
胡雁作

村すゝき

小野村檢校調
雅物作

おもひ寐

(前)藤谷勾當調
升三作

たが身

村住勾當詞
羽積添削井二作

あいせん

歌木檢校調
巾花出
雨鳳作

龍田川邊

吉村檢校調
山田屋平介作

よし野川

吉村檢校調
河合立牧作

末はとふかもヨリ

柳里恭添削
藥大黒ノ後家作

あだまくら

歌木檢校調

うたひ出し身にかへて云々

名取川

吉村檢校調
今宮屋新五郎作

秋のうらみ

歌木檢校調

作未詳世ニ柳里恭ト云ハ非也

深山草

(前)藤永檢校調

京小袖

歌木檢校調
川崎屋源兵衛作

くれの松

繼橋檢校調
鴻池宗羽作

なたねざと

同調
加賀屋宗因作

嵐小六か事を作ると

里の風

鶴山勾當調
健屋左介作

わらひ月

八重崎檢校調
自作

雲の端

廣橋勾當調
茅柴兩作

羽積兩作

うらゝか

てり葉

をしの名残

笹の風

春の鳥

四の袖

里の都

のべ鏡

捨小舟

ほのく

南妓明石の事

むさしめ

ひる寐

京人形

あづさ弓

福壽草

鶴のはし

まごと

同 郎調

龜男 兩作

三津崎檢校調

富岡檢校調

ト柳作

吉村檢校調

繼橋檢校調

鴻池宗羽作

鶴山勾當調

ソウライ作(河内屋勘兵衛事)

歌木檢校調

堂島平小作

鶴山勾當調

青瓦作

繼橋檢校調

鴻池宗羽作

村住勾當調

羽積作

小野村檢校調

池思作

歌木檢校調

青瓦作

繼橋檢校調

(京)富永やゆき作

歌木檢校調

繼橋檢校調

秋の七草

はくさいし

末のよるべ

みをつくし

あだくらべ

はでゆかた

葛紅葉

うらおもて

さんきく

たぬき

八聲の鳥

ぬりまくら

萩の風

捨あふぎ

八重崎檢校調にも此名あり

みなれぎを

なれぎぬ

吉村檢校調

今宮や新五郎作

歌木檢校調

ヤブダツ作

(前)藤永檢校調

大和屋彦二郎作

吉崎勾當調

キカク作(丹州笹山家中也)

春木勾當調

流石菴作

歌木檢校調

離佛作(又麒麟トモ)

笛吹の甚十郎長田や百松の事

小野村檢校調

羽積作

歌木檢校調

田中氏某作

豐賀檢校調

稻葉春食出

麥鱸作

鶴山勾當調

堺や方舟作

繼橋檢校調

住吉(東大寺僧作ト云)

小野村檢校調

吉村檢校調

扇屋つぐ作

佐々木勾當調

サカヒ(松作作)

深艸檢校調

同 調

里にしき

小野川檢校調
ト龍作

袖の香

藤村檢校調

秋の色

倉橋檢校調

橋の雨

藤永檢校調（一説に長屋檢校とも）
繼橋檢校調（一説に玉山勾當とも）

置ごたつ

吉村檢校調

後のあさ

山田や平助作

山もみぢ

菊村勾當調

かづま

關川檢校調

たき川

保井算知作

ふところ

神坂勾當調

おぼこ菊

石出常軒作

其扇

歌木檢校作

藤衣

巴洞作

東げしき

八重崎弟子

わやく

留都調

あしま舟

青瓦作

前市川吉太郎追善

八重崎檢校調

浅村勾當調

羽積雨作

浅村勾當調

李十雨作

むしのね

尾州
藤尾勾當調

口きり

玉岡
豐賀檢校雨調

辰巳屋平兵衛追善

二斗菴作

花鳥

廣橋勾當調

ついのきせる

菱正作

八嶋

小野村檢校調

筆の跡

青瓦作

秋の時雨

尾州
藤尾勾當調

沓の音

（前）藤谷勾當調

四季の宴

吉村檢校調

難波がた

扇屋つぐ作

笛の縁

八重崎檢校調

塵づか

ふうし作

すがた身

繼橋檢校調

伊勢物語

（京）河野州作

よそめ

八重崎檢校調

廣橋勾當調

近藤忠藏雨作

りさん作

流石菴雨作

廣橋勾當調

五百羽

雁羽雨作

廣橋勾當調

りさん作

むつのでふ

(今)藤永勾當調
塚本や八左衛門作

此いと

戸川勾當調

見ぬもみち

菊島勾當調
加州はやう作

染越後

戸川勾當調

端手てかた

星連作
廣橋勾當調
さかく出(但此さかくはみをつくしの作
者とは別也)

かたてぎを

一神舍作
戸川勾當調

扶永追善

泉明作

いもと草

玉岡檢校調
二斗菴作

ひなの袖

藤尾勾當調

筆しぐれ

城氏兩調 (作はづみ)

かよひち

杉本爲三調井作

うとふ

同調

裏もやう

羽積調
小野村檢校添削
高田大市作

ふたへ月

小川や猶出
近江屋彌兵衛調

春の雨

雨曉作
紙屋永三調

そへぐし

神原賴母作
升屋三郎兵衛調
山田屋平介作

八重垣

流石菴調
君竹作

かなのとめ

稻葉春禽調
戸川勾當添削

ひとり寐

竹作出
二斗菴作
網代屋長左衛門調井作

初ざくら

以下芝居歌
山本喜一兩調

里の松

若村藤四郎兩調

繪すがた

(前)加茂川野鹽
高島尾上兩調
山下才三郎作

戀ばなし

調作未詳
京都二ノ替り
中ニ石突ガント有

ありまふし

杵屋長五郎調

春の雪

杵屋長五郎兩調
青木半兵衛調
助高屋高助作

八郎兵衛

(前)廣橋勾當改調
(初代)嵐三右衛門作ト云

道成寺

岸野次郎三調

石橋

芳澤金七
若村藤四郎兩調
瀬川路考歌

まんぎく

永島庄左衛門調

ふじ

佐野川萬菊作
神山小四郎調
戸間瀬檢校改調
紀海音作

こんくわい

岸野次郎三調
多門庄左衛門作

あを葉

杵屋長右衛門
葛山四郎兵衛兩調
芳澤春水作

きいす

(初代)
若村藤四郎兩調
加茂川野鹽作

金五部

増井勾當改調
竹島幸左衛門作

前廣橋勾當の妙音によつてきいす金五郎三かつ等世に行ル

雪見酒

山本喜市兩調
若村藤四郎兩調
坂田藤十郎作

三ッ人形

芳澤春水調
中村慶子所作事ノ歌

十三がね

潮山金四郎調
山本喜市改調
近松門左衛門作

猩々

岸野二郎三調
竹島幸左衛門作

きぬく

柴野勘六調
杉山勘左作

沖の石

永島庄左衛門調
尾形檢校改調

高瀬ふね

辻甚左衛門調
城澤改調

つくば山

柴崎勘六調
多門庄左衛門作

松かぜ

岸野次郎三調
佐渡島傳八作

山姥

澤野九郎兵衛調
紀海音作

西照庵

鶴澤名八調
熊貫作

二上り之部

花もみち

小林檢校調
御堂上方作

てうさうし

吉村檢校調
柳里恭作

せいへいてう

鶴山勾當調
政島檢校補
朱六作

沖のふね

久米崎勾當調
田中泰翁作

夏のかま

松谷勾當調
城ノ大炊作

此歌莊子のご故事を用ル故誤テ半時菴ノ作といへり
いさゝめ
今川勾當調

雪の音

吉村檢校調
山田や平介作

けしぐゝり

鶴山勾當調
長生作

長生は播州明石の人也、木端弟子にて、狂歌をよめり、木端遊所にて藝子の三絃をきいて長生が此作ありし事も思ひ出して口ずさみに

袖口のあかしの人の作りたる

けしぐゝりをはひてたもとよ
とあるにて其作者をしるべし

花のきみ

久米崎勾當調

たそかれ

元崎勾當調

うづみ火

戸川勾當調
官家某作
蘇善出

其はづみ

廣橋勾當調
山本やまだき出
扇やさよ作

木の葉づみ

流石菴作

右のかへ歌又落葉ともいふ也

しづの床

鶴山勾當調
くづしま作

はらげ髪

玉岡檢校調
みそち作

春のかな

吉村檢校調
自作

八重咲

玉岡檢校調
山本吉門作

八重崎檢校追善

閨八景

佐々木勾當調

うはき

歌木檢校調
風志作

五大力

白川檢校調
李文作

此李文といふ人は、さいかや七兵衛とて風流人なり、此人の作の歌猶多きよしなれど、今知れがたし、白川は作物の上手にて、其作今に残れり、悉く後篇に出すべし

羽衣

春木勾當調
笹屋五兵衛作

夏の空

梅園勾當調

みづかき

八重崎檢校調
青雅作

戀のくせ

吉村檢校調
一本亭作

袖の色

戸間瀬檢校調

鳴立澤

繼橋檢校調

あけのかね

同調
うたひ出し
たまそとおもふて

花のなごり

歌木檢校調
馬宥作

巾華追善

伊達もやう

吉村檢校調
山田や平介作

ならのひろば

深草檢校調
御堂上方作

雪けしき

深川檢校調

なでしこ

戸川勾當調
巴遊調
泉明作

小野村弟子元都追善

よそのてには

富岡檢校調
知永出
東騷作

袖しぐれ

今川勾當調
自作

袖のうら

菊島勾當調
梅都兩調
雪助作

なの葉

歌木檢校調

詞じち

同調
一物けいかう作

山びこ

上杉檢校作
千草屋彌左衛門
たつみや平兵衛作

里の名殘

鶴山勾當調

丹頂の鶴

深神檢校調
今西一音作と

みすの追風

同調
其破作

うき世ほうさい

佐山檢校調

ゑそらごと

むかし

みだれかみ

深草檢校調
一説に深山檢校とも

まさづき

鶴山勾當調

うら紅葉

富岡檢校調

中直り

小野村檢校調

雲の駒

青玉作
八重崎檢校調

當世調

流石菴作
せいへいてうのかへうた也

袖まくら

菊村勾當調

一夜舟

大西勾當調と

冬ごもり

山田檢校調
小刀屋八兵衛作と

玉がしは

吉村檢校調

むかしの夜

山田や平介作
同調
今宮や新五郎作

洞の梅

津山檢校調

又神樂ともいふ

古
きさくらぎ

繼橋檢校調

中

きさくらぎ

(前)藏永檢校調

新きさくら木調子の部に出

さくら戸

吉村檢校調
釘や久兵衛作

とまり舟

政島檢校調

朝寐髪

歌木檢校調

二王門

馬宿作
同調

うき雲

同調
苧屋何某作

月の枕

同調
柳里恭作

正慶尼云吉村調と

ひとりこと

同調并作

里の霜

同調
流石菴
必々菴雨作

くゝり猿

同調
しざん作

秋の旅

繼橋檢校調

ひとつよぎ

同調
千苗作

今木勾當の作といへとさだかならず又繼橋自作ともいへり柳吉兵衛といふものゝ歌也

ふたつもん

同調
すいかう作

秋のふじ

同調
鴻池宗羽作

浪がへし

鶴山勾當調
近藤忠藏作

閨の露

同調
そきう作

七ぐさ

津山檢校調
河野對州作

さゝやき竹

政島檢校調
一本亭作

ちとせ草

大橋勾當調
一見作

かけしや

廣橋勾當調
一見作

後月坊の歌也

小川ぶね

同調
羽積作

吉太郎追善

にはたづみ

同調
芦亭作

手まねき

戸川勾當調
ひさを出
慶子發句前書

丑の冬京登り暇乞の歌

むらさめ

倉橋檢校調
自作

まんざい

城志賀調

廓まんざい

右かへ文句
羽積作

又しやなまんざいといふ

夢のうら

替女須磨調
同作

三つのわらひ

替女小卷調
近藤氏作并ニ調補
流石庵作

かづき面

城志賀調

うつば猿

城志賀調

秋の野

左樂調并作

くきら

茨木屋四郎三調并作

たのしみ

羽積調
戸川勾當添削
山下里虹作

又虹のうしとも云

松のふた葉

升屋三郎兵衛調
山田屋平介作

野分

流石菴調
月集作

すはま濱

砥平調
泉明作

さそふ水

羽積調
廣橋勾當添削
菊島勾當

夜明がらす

平野やいに出
袖崎歌流調
澤村長十郎作

以下しはゐうた

因幡の松

藤村半太夫調
坂田長十郎調
瀧川六三郎作

長生でん

中村慶子作
調未詳

あしたの原

(初)瀨川菊之丞調

ねざめ鳥

(二代)瀨川路考

佛の原

二の替りの歌
上村吉彌調
岩井左源太調

孫嫡子

大和山甚左衛門調
松本重登作

おそめ

仲や長五郎調
岡崎檢校改調
紀海音作

いもせ川

山本喜市調
水木辰之介作

右桂川檢校改調又歌木檢校の改調を新しいもせ川といふ今兩流有

歌うら

嶺山小四郎調

同せめ

同人
岸野次郎三 兩調

出口柳

岸屋長五郎調
宇治加賀操作

相の山

山本喜市調
文耕堂作ト云

三つの車

岸屋長右衛門兩調
大和屋甚兵衛
淺尾重二郎作

花の香

坂田兵四郎調

長崎鳥

御堂上の作又瑞龍の僧或は淀屋古庵作ともいふ
芳澤春水調

又かり枕ともいふ

名ごやおび

山本喜市調
二代目
尾形檢校改調
嵐三右衛門作

鳥部山

潮出金四郎調
岡崎檢校改調
近松門左衛門作

新道成寺

二代目
岸屋長五郎兩調
よし澤金七郎改調
六次郎改調

はん女

水木辰之介調
中村七三郎作

しらいと

山本喜市
若村藤四郎兩調
英木や幸齋作

新草づくし

島野勘七
若村藤四郎兩調
高島尾上作

放下僧

岸野二郎三調

井筒

坂田兵四郎兩調
山本喜市
芳澤あやめ
大和屋甚兵衛兩作

蚊帳道成寺

中村少長兩調
山本歌門兩調
井二兩作

あさよ

中村七三郎
岩井左源太兩調

かうきでん

虎屋榮閑調井作

淀川

(前)山下鶴之丞
澤村長十郎調井作
岩井左源太

本調子之部

八千代獅子

(前)藤永檢校調
園原勾當作

元米尺八の曲なるを政島檢校胡弓にうつし藤永檢校三弦にうつせるより世にひろまりぬ

同替手

ゆふぐれ

舞あふぎ

秋空

つるべ

袖あふぎ

新子のび

菊流し

袖づきん

登りふね

夏ころも

五つがしは

ゆかりの月

作者之事絃歌故實に出ず

しをり

いとしとはた

聞の文

國山勾當作と云

深川檢校調
御堂上方作

野川檢校調
家都作

歌木檢校調
秋葉作

同調

廣橋勾當調
羽積作

深草檢校調

八重崎檢校調
石上甘吉作

同調

佐々木勾當調
井二作

富岡檢校調
加賀や又吉出

柳川荒木氏作
上杉檢校調

堂島海彦作
鶴山勾當調

投文にて作者不知

吉村檢校調
今宮や新五郎作

八重崎檢校調
青五作

同調
大槌作

ことぶき

あやづる

友ちどり

さんかつ

前の廣橋勾當妙音によつて上品になり彈はやり世に廣橋のさ
んかつと賞讃せり

かへあふぎ

みさは草

羽織妻

ひなのみち

いもせの秋草

葉ざくら

其からす

菊の露

よるべ

丸はだか

しぐれの松

政永島檢校兩調
鐵重作

歌木檢校調
田中氏某作

佳川檢校調

房崎勾當調
住吉屋某作

廣橋勾當調
鯉文兩作

廣橋檢校調

菊島勾當調

羽積兩作
龜男兩作

藤永檢校調
知永作

鶴山勾當調并作

連川檢校調
歌木檢校調はやらす

佐々木勾當調

廣橋勾當調
助松や虎太郎出

ふくしん作
戸川勾當調

ひさを作
金英作

(前)春木勾當調
鶴山勾當調
さんし作

ゑくぼ

廣橋勾當調
鶴男作

露のてふ

平のや藤出
歌木檢校調

舌つゝみ

東都ろてふ作
同調

しぐれ月

尼崎や園瓜作
同調

京上り暖乞

中村經長作

ゆふすゝみ

同調

かげろふ

同調
筑州荒木氏作

うひかうふり

同調
長濱某出

うらにしき

同調

みまゝがみ

同調

かつらめ

同調
如瓶又秋葉作ともいふ

はだしらす

同調
巾華出

つとの雪

同調
雨風作

しのぶ

同調
しんさい作

松賣

同調
巾花作

かくし題

同調
秀饒作

かつら男

吉村檢校調

ぬれあふぎ

鶴山勾當調
海老や藤兵衛出

あさと出

今宮等狐作
玉岡檢校調

新町高嶋屋でん追善

村住勾當調
泉明作

あさがほ

菊島勾當調
ぶんかう作

空いびき

政島檢校調
龜島檢校調

北しぐれ

二斗庵作
豊賀檢校調

閨のひま

海部屋傳右衛門作
同調

松風呂りう追善

魚売出
二斗庵作

玉づさ

小野川檢校調

けしのふた葉

知恩院中みんぶ調井作

山路の菊

田中檢校調

後の月

同調

八重崎檢校調にも此名あり

夏のしのゝめ

藤村檢校調

花むすび

同調

たゝみざん

同調

奥ざしき

小野川檢校調
泰阿彌作

うつぼ舟

同調

ねなし艸

繼橋檢校調と云

難波ぶり

國山勾當調
穂積賴母作

飛鳥川

佐山檢校調
藤田友閑作

たにし

調作未詳
但白川檢校歟

夜半樂

戸川勾當調
泉明作

やまと文

津山檢校調

あふ夜の月

富岡檢校調

誠くらべ

(京) 小野村檢校調
毘沙門堂僧作

きせん

廣橋勾當調
龜男作

近藤忠藏追善

すり衣

八重崎檢校調

袖のしづ

龜崎勾當調

糸すゝき

歌木檢校調并作

よぶこ鳥

小野村檢校調

若葉

品都雨調
元都兩調

廓の嵯峨

五屋彌右衛門作
羽積調并作
貴得齋出

ねぐら

同調
吉田一保作

みなめざめ

同調并作

よこ雲

同調

天の川

同調并作
白杵左一出

雲井の空

稻葉春禽調
石上甘吉作

みやこ鳥

辰巳屋平兵衛調作

中村慶子の歌

しのぶ土

八百六伊八調
扶永作

ひなぶり

同調
茨木や要助作

海士

さらさや新兵衛調作
南妓明石調

新きさらぎ

玄暉出
二斗庵作

月のしづく

砥平調
艸秀作

京あふぎ

紙屋永三調
羽積兩作

あさもよひ

はづみ調
ひさな作

里げしき

岸野二郎三調
大石うき作

在郷げしき

右かへ歌也
御堂上方作

きつね火

岸野次郎三調
或は澤村長十郎
萩野八重桐三人調とも云

同まへ歌

同調
大石うき
村松たんすい
小野寺はんたん
作と云

二段獅子

同調
又嶺山小四郎と兩調とも云

關寺小町

同調

橋づくし

富岡檢校改調

近松門左衛門作の通り也

釣あんど

(前)一中調
鶴山勾當改調

前中村十藏の事と云々きさんは若き時の誹名なりしと

梅のよし兵衛

(前)春木勾當改調
江戸
三原十大夫作

花いかだ

葉山岡右衛門
葛山四郎兵衛
津打次兵衛作
兩調

身がはりおんど

歌木檢校改調

大塔宮上るりの通り也

すみだ川

古今新左衛門調

廓たゝき

調並作者未詳
或曰山本喜市調と

前廣橋勾當彈はやらす彈出し島おひ

新廓たゝき

春木勾當調
馬宥作

唱歌色かへぬ名の九軒町云々

わんくわつ一休

さつま外記調
杉三安作

中比江崎茂左衛門これを弾く事妙々なるを以て大に賞翫せり

いけん曾我

調作とも未詳
政島檢校より専ら行る

以下半太夫

せいし曾我

江戸蘭洲調
傾城高尾作

八丈曾我

小野川檢校調
堂上方御作

月見曾我

(江戸)河東調
蘭洲作

風呂入曾我

(大阪)玉川半太夫調
かなや金五郎作といふ

五人曾我

(江戸)坂本梁雲調

此外灸する曾我、たばこそが、願ひ曾我、元服曾我の類あれども江戸坂本半太夫自作の書鴉鳥に見えず但髪すき曾我帶引曾我あれども今しれる人まれなり灸する元服の類は河東蘭洲の後調ならん

長歌之部

八重霞

繼橋檢校調

雲井らうさい

佐川檢校調并作

更衣

市川檢校調
御堂上方作

六段すがゝき

深草檢校調
尾形檢校作

同 かへ手

國山勾當調

三下り

冬の夜

深草檢校調

春のさち

小林檢校調
今木勾當作

あけのかね

深草檢校調
唱出しおき出る

古さらし

北澤勾當調并作

新さらし

深草檢校調

難波獅子

繼橋檢校調
作者之事後編に出す

都獅子

津山檢校調
河野對州作

しのぶ山

深艸檢校調

秋の夜

同 調

浅茅生

同 調
耕雲子作

いづみ川

同 調
烏丸家女房作

村しぐれ

同 調
高田家賢作のよし

あけつげ

同 調
鸞水作

春の夜

同 調

松の雪

同 調
尼崎や無元作

冬景色

深草檢校調
桃井氏作妻

夏げしき

同 調
二口意伯作

池づくし

同 調

たが袖

同 調
自作のよし

ちとせの秋

同 調
永井の尼作

かたいと

同 調
扇屋卜曉作

大和琴

同 調
御堂上力作

夏の夜

同 調
自作のよし

東 窓

同 調

長歌づくし

同 調
嶋原長歌太夫作と云

常盤木

連川檢校調
永井走帆作

櫻づくし

佐山檢校調

冬 草

同 調
嵯峨隱士作

もしほ草

同 調并作

きやり

佐山檢校調
作者未詳

近年豐賀檢校彈はやらず

若みどり

同 調
同作と云々

三谷をどり

同 調

不二まうで

同調

まさみち

同調

小夜衣

同調
御堂上方作

源五衆

同調
自作のよし

戀衣

同調
元隣作

うき寐

同調
朝妻檢校調
御堂上方作

小むらさき

同調
江戸前の湖十作

香づくし

同調
自作のよし

花の宴

同調
御堂上方作

引くるま

同調
團水作

戀づくし

同調
元隣作

川竹

同調
朝妻檢校調
言水作

七夕

同調
自作のよし

鎌倉八景

同調
とらや榮閑作

かさでら

同調
錦花翁作

東山八景

同調
自作のよし

浪まくら

同調
自作のよし

いく春

同調
自作のよし

夏草

同調
秀松軒作

山づくし

同調

八重梅

市川檢校調
自作のよし

春日野

同調
西鶴作

若草

同調

手まくら

同調
嵯峨隱士作

春風

同調

春こま

市川檢校調
自作のよし

らつび

同調
後松軒作

朝がへり

同調

岩根の松

同調

夏のさち

小林檢校調
今木勾當作

冬のさち

同調

秋のさち

同調

あさぢ

連川檢校調
澤口宗隱作

秋草

松岡檢校調
藤島勾當兩調
御堂上方作

加茂川

上杉檢校調

おもひ葉

玉井檢校調
廣庭中務作

玉くしげ

小野川檢校調
伏見知扇作ト云

しくれ

同調
今宮翁作

あだまくら

同調

色香

小野川檢校調
西鶴作

月見

同調
秀松軒作

菊永豐賀の兩檢校彈はやらせり

花見

同調
同作

關つくし

藤林勾當調

川霞

大澤檢校調
田原や後室作

戀ぐさ

松岡檢校調

若松

御堂上方作

かぞへ歌

野川檢校調
自作のよし

古子のび

同調

紅葉づくし

津山檢校調
自作のよし

ひなづる

藤林檢校調
御堂上女房作

きぶね

同調
小谷立靜作

しのゝめ

花部十三歳にて調すと
晉其角作のよし

小笹

生田檢校調
自作のよし

梅づくし

爲澤檢校調
佐山檢校作

夕ざれ

朝妻檢校調

嵯峨八景

繼橋檢校調
一時軒作

すみゑの月

房崎勾當調

玉川

國山勾當調

松づくし

榊積頼母作

瀧づくし

(前)藤永檢校調
右かへ唱歌
羽積作

我身

政島檢校調
いづ新作

白菊

歌木檢校調

きれづくし

同調
かゝや七郎兵衛作

住の江

村住勾當調

こしかた

羽積作

春艸

小野村檢校調

四季の文

流石庵作

三つのいと

野川檢校調
小堀遠州作と

衣づくし

津山檢校調
湖春作

山家の秋

津山檢校調
御堂上方作と云

清水まうで

或は長歌にあらずといふ
繼橋檢校調

三段獅子

佐山檢校調

まへ歌はうかれめといふ古曲を後人の添たる也
あづまじゝ
調者未詳

此曲難波獅子と其合手の同調猶きさらぎと八重霞と合がごとし

六段れんほ

岸野二郎三調

大石氏作といふは非也

手事唱歌なき部

きぬた

佐山檢校調

八段すがゝき

津山檢校調

十二段すかゝき

生田檢校調と云

すごもり

品川勾當調

りんせつ

深草檢校調

又みだれともいふ

本手組之事

琉球組

鳥組

腰組

不祥組

飛驒組

忍組

浮世組

右表七組

石村檢校
虎澤檢校 兩調

端手目録

待にござれ

長崎

比良や小松

京鹿子

下總

くれなゐ

片ばち

右七曲

柳川檢校調

裏組

倭文^{しづ}

錦木

青柳

右三組

柳川檢校調

中許

早舟

八幡

亂後夜

翠簾

搖上

なよし

らうさい 二上リ

右七曲

柳川檢校調

大許

第一
七ツ子

二
淺黄

三
茶碗

四
松蟲

右

柳川檢校調

五
晴嵐

右

淺利檢校調

六
塙

七
中嶋

附ほそり 三下リ

柳川檢校調

右

右は野川流本手組の次第也早崎流組の次第は松の葉に出たるがごとし

附録

子のび

久かた

三千年

あふひ

くゐな

御稔

初秋

名月

重陽

しぐれ

神樂

御幸

右十二月新組

千代の恵

已上

深草檢校調

右の新組早崎流にありて野川の流義にこれなしといへども爰に出せり

右輯録する所、もとより同好に索問といへども、必ず遺脱差謬あるべし、采覧の君子萬望補正し給はん事を、偕又此編の出る、實に無益の至り、梨棗を擧する事、多罪々々、しかはあれど、年々に梓行する所、盡く教戒有益の書ならんには、篤實家のみにて、世ははなやかなるべからず、嗚呼、是此等の書ある、載大平の逸樂にして、おのおの幸に拜見せらるゝこそ、かたじけなくも、聖代に生れ逢ぬる餘澤と、よろこび給へと、このむ

所に、阿るなん、われにはゆるせ我にはゆるせ

辛丑仲冬

流石庵主人書

歌系圖畢

友に一冊子を選して跋を徹るあり、余が文事に疎かるをいかにと見れば、歌系圖と外題して、古來詞曲者流の曲を裁調を起せしあたりを、ねもころにかうがへしるせるなりけり、これやおのがこのめる技のめいぼくにして、賢を絃とする君子の賜なる哉、先開卷に龍蛇走れるぞ、漢隸に名たゝる大人の筆次に金玉ひいきなすは、鉅儒鴻粹の序、さて附言の考索すべき、篇中の集につどへる間々を、時に秀たる工の繪さへ繡せるぞ、いはんかたなく見ごろありや、おほよそ世に梓行する書等、已に充棟汗牛とかきけど、かゝるたぐひはいまだあるべうもなし、後の裁曲創詞先生、此系圖の系の緒のたえざる圖につらなりば、よしや其曲調すたれゆくとも、かの裁創せし當時の風流は不朽に傳ふといはざるべけんや、されば今よりすりものはなやかに、歌びらき時めかさば、もとめずしておのづから歌系圖に増補せん事、選者の仙たる所に於て、余が跋して二三子をそゝのかす所になん

香宮枝去來

湯河亭主人書

流石庵羽積、素性好生將ニ作レ歌歌曰調曲調調ニ新之謂方言閩屋賞結兒絃曰爭ウリヒロメル好了、自家把ニ其名聲一發ニ賣了
及提琴方コトサミセン言駁萬臺鑿設模
四下里、在下就把ニ一號贈ニ與他、喚ニ做絃歌堂、這是
甚麼緣絲、如今本府有ニ箇海內有名的博物兼葭堂、絃歌兼葭
國音這個羽積也那所レ好、和レ他一般博物、便ニ看ニ見
了此冊子、方可ニ知道丁、雖然作レ歌調、絃將ニ華麗也
浮浪的、怎生其曲兒遺レ在ニ千載、那箇姓大石的爲ニ復
讐之詩文書畫之傍邊鋪面、有ニ丁長相思名曲的作、嗚呼絃
歌主人之好尙、已似ニ膏官的官字一入ニ着官一哩官賢者唱
曲鼓絃者方言雜咄鳥又福腐失卻不ニ恁地、那裏有ニ此冊子麼、
辛丑仲冬、香障外史、書ニ于浪速安曇寺街僑居、

新群書類從第六終

黑川眞道
米光關月
校

明治四十年八月二十日印刷
明治四十年八月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯
發行
者兼

東京市本所區番場町四番地

印刷者
本間季男

東京市本所區番場町四番地

印刷所

内外印刷株式會社

大
善
代
號
樓

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5103